

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第199集

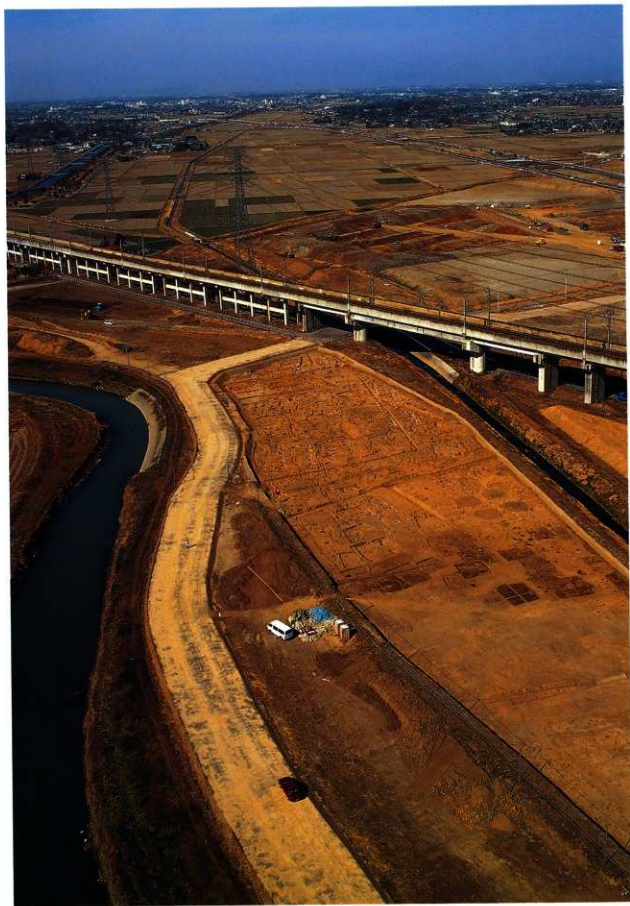
行田市

築道下遺跡Ⅱ

行田南部工業団地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ
〈第1分冊〉

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



築道下遺跡全景



茶道下遺跡C区全景



第9号性格不明遺構出土土器



中世墓跡全景



中世墓跡出土藏骨器

序

埼玉県では、豊かな自然を生かしながら、自然環境と調和のとれた産業の振興を図っております。

テクノグリーン構想も、この一環として自然環境を十分に生かしながら調和のとれた産業の振興をめざして、都心から50km以遠の埼玉県北部地域を対象とし、先端技術の導入を核とした創造的で活力にあふれた地域社会の振興を目的としたものであります。

行田市の南部地域に計画された行田南部工業団地は、このテクノグリーン構想のもとで、地域の産業振興と雇用機会の著しい拡大を目指している事業であります。

事業の進められている行田地域は、自然環境に恵まれた豊かな田園都市であると共に、国宝金錯鉾鉄剣の出土で有名な埼玉古墳群などがあり、歴史と伝統に培われた町であります。

工業団地造成事業地内には、築道下遺跡、八ツ島遺跡の所在が確認されておりました。この埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることになりました。発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が埼玉県企業局の委託を受けて実施いたしました。

今回報告いたします築道下遺跡は、古墳時代から中

世に至るまでの多くの遺構・遺物が発見されております。三年間にわたって行われた調査の結果、元荒川に沿った自然堤防上に連続と営まれた集落が、数百軒の規模で明らかになりました。それらの中で、本年度報告する中世墳墓や、米年度報告予定の上師質土器焼成遺構などは、県内でも極めて少なく貴重な発見であります。

本年度は、昨年度に引き続き、築道下遺跡に関する第二冊目の報告書を刊行することとなりました。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発及び教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力をいただきました埼玉県企業局、行田市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成10年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

- 1 本書は下記の遺跡の発掘調査報告書である。
遺跡名：築道下遺跡（注記略号68-144）
所在地：埼玉県行田市大字野言葉道下186
教育長通知
平成7年4月28日付け 教文第2の23号
平成8年4月15日付け 教文第2の12号
遺跡コード番号：68-144
- 2 発掘調査は行田南部工業団地造成事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県企業局の委託により、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 3 発掘調査は当事業団の今井宏、鯉持和夫、赤熊浩一、岩瀬謙、山本靖、大屋道則、栗岡潤、松澤浩一が担当して、平成7年4月1日から平成10年3月31日まで実施した。整理報告書作成作業は大屋道則、栗岡潤が担当し、平成7年4月1日から平成8年3月31日まで行った。ただし、本年度整理作業に関わるものは、SD-56以南、SD-105以北の範囲である。
- 4 遺跡の基準点測量と航空写真は株式会社アイシーに、木製品・炭化種子・人骨の分析はパリオサーヴェイ株式会社それぞれ委託した。
- 5 写真は発掘調査時の撮影を各発掘担当者が行い、遺物の撮影は巻頭カラー図版を栗岡が、他を大屋、栗岡が行った。
- 6 出土遺物の実測は、栗岡、大屋、桜井元子が行い、埴輪を大谷徹が、金銅器の一部を瀧瀬芳之が、中世遺物を鯉持和夫が行った。
- 7 本書の執筆は、I-1を埼玉県生涯学習部文化財保護課が、縄文時代の土器を新屋雅明が、埴輪を大谷徹が、住居跡を大屋が、中世の墓域を鯉持が、他の全てを栗岡が行った。
- 7 本書の編集は、資料部資料整理第2課の栗岡、大屋が行った。
- 8 本書にかかる資料は平成9年度以降県立埋蔵文化財センターが保管する。
- 9 本書の作成にあたり下記の方々から御教示、御協力を賜った（敬称略）。
堀口萬吉、栗原文蔵、斎藤国夫、塚田良道、中島洋一、門脇伸一、山中敏史、行田市教育委員会（敬称略 五十音順）

凡例

1 X・Y座標による表示は、国家標準直角座標第Ⅱ系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。

2 縮尺は原則として以下のとおりである。

全測図	1:500
住居跡	1:60
掘立柱建物跡	1:60、1:100
土 墳	1:60
井戸跡	1:60
性格不明遺構	1:60
ピット	1:60
溝 跡	1:100
周溝状遺構	1:60
中世墓跡	1:40、1:200
縄文土器拓影図	1:3
その他の遺物実測図	1:2、1:4、1:8
製鉄関連遺物実測図	1:2、1:3

3 全測図等に示す遺構の略号は以下のとおりである。

住居跡	SJ
掘立柱建物跡	SB
土 墳	SK

井戸跡 SE

性格不明遺構 SX

ピット P

溝 跡 SD

周溝状遺構 SZ

4 遺構図中の遺物に付した番号は、遺物の出土位置および接合関係を示し、遺物実測図のそれと一致させた。

5. 土師器実測図の網かけは、赤彩土器・黒色土器の範囲を示した。

6. 遺物観察表の凡例は、以下の通りである。

計測値が()で囲まれたものは、推定値を示す。

胎土は、土器に含まれる含有鉱物を以下の記号で示した。

A:石英、B:白色粒子、C:長石、D:角閃石、
E:赤色粒子、F:黒色粒子、G:雲母、H:片岩、
I:白色針状物質、J:砂粒、K:チャート、
L:小礫。

焼成を、風化具合から次のように判断した。

1:硬質・堅致、2:良好、3:普通、
4:劣・不良、5:軟質・脆弱。

目次

<第1分冊>

口絵

序

例言

凡例

目次

挿図目次

I. 調査の概要	1
1. 発掘調査に至るまでの経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・整理・報告書作成の組織	3
II. 遺跡の立地と環境	4
III. 遺跡の概要	7
IV. B・C区の調査	11
1. 遺跡の概観	11
2. 遺構と遺物	13
(1) 住居跡	13
(2) 掘立柱建物跡	310
(3) 土壌	373

<第2分冊>

目次

表目次

挿図目次

図版目次

(4) 井戸跡	427
(5) 不明遺構	461
(6) ビット	476
(7) 溝	499
(8) 周溝状遺構	536
(9) 中世墓	539
(10) その他の遺物	581
a 縄文土器	581
b 埴輪	582
c 白玉	583
d 玉類・石製模造品	586
e 土瓦	589
f 土鎌	591
g 紡錘車	592
h 砥石	594
i 金属製品	597
j 木製品	600
k 製鉄関連遺物	601
l 小彩土製品	602
m グリッド取り上げ遺物	603
V. 結語	605
付編	648

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第6図 調査区全体図	12
第2図 周辺遺跡の分布図	6	第7図 第66号住居跡出土遺物	13
第3図 遺跡周辺の地形図	8	第8図 第66・67号住居跡	14
第4図 調査区全測図(1)	9	第9図 第71号住居跡	15
第5図 調査区全測図(2)	10	第10図 第71号住居跡カマド	16

第 11 図	第71号住居跡出土遺物	17	第 48 図	第112号住居跡出土遺物	41
第 12 図	第72号住居跡	18	第 49 図	第112号住居跡	42
第 13 図	第72号住居跡カマド	19	第 50 図	第118号住居跡出土遺物	43
第 14 図	第72号住居跡出土遺物(1)	19	第 51 図	第118号住居跡	43
第 15 図	第72号住居跡出土遺物(2)	20	第 52 図	第119号住居跡出土遺物	44
第 16 図	第74号住居跡出土遺物	20	第 53 図	第119号住居跡	44
第 17 図	第74号住居跡	21	第 54 図	第120号住居跡	45
第 18 図	第78号住居跡	22	第 55 図	第120号住居跡出土遺物	46
第 19 図	第78号住居跡出土遺物	22	第 56 図	第121号住居跡出土遺物	46
第 20 図	第85号住居跡	23	第 57 図	第121号住居跡	47
第 21 図	第90号住居跡出土遺物(1)	23	第 58 図	第122号住居跡	48
第 22 図	第90号住居跡	24	第 59 図	第122号住居跡出土遺物	49
第 23 図	第90号住居跡出土遺物(2)	25	第 60 図	第123号住居跡	50
第 24 図	第91号住居跡	25	第 61 図	第123号住居跡出土遺物	51
第 25 図	第91号住居跡出土遺物	26	第 62 図	第124号住居跡出土遺物	51
第 26 図	第100号住居跡	27	第 63 図	第124号住居跡	52
第 27 図	第101号住居跡	28	第 64 図	第124号住居跡カマド	53
第 28 図	第100・101号住居跡出土遺物	29	第 65 図	第125号住居跡	54
第 29 図	第102号住居跡	29	第 66 図	第125号住居跡カマド	55
第 30 図	第102号住居跡出土遺物	30	第 67 図	第125号住居跡出土遺物	55
第 31 図	第103号住居跡出土遺物	31	第 68 図	第126号住居跡出土遺物(1)	56
第 32 図	第103号住居跡	31	第 69 図	第126号住居跡出土遺物(2)	57
第 33 図	第104号住居跡出土遺物	32	第 70 図	第126号住居跡	57
第 34 図	第104号住居跡	32	第 71 図	第126号住居跡カマド	58
第 35 図	第105号住居跡	33	第 72 図	第127号住居跡	59
第 36 図	第106号住居跡	34	第 73 図	第127号住居跡出土遺物	60
第 37 図	第106号住居跡出土遺物	35	第 74 図	第128号住居跡	61
第 38 図	第107号住居跡出土遺物	35	第 75 図	第129号住居跡出土遺物	61
第 39 図	第107号住居跡	36	第 76 図	第129号住居跡	62
第 40 図	第108号住居跡	37	第 77 図	第130号住居跡出土遺物	63
第 41 図	第108号住居跡出土遺物	37	第 78 図	第130号住居跡	63
第 42 図	第109号住居跡	38	第 79 図	第131~133号住居跡	64
第 43 図	第109号住居跡出土遺物	39	第 80 図	第131号住居跡出土遺物	65
第 44 図	第110号住居跡	39	第 81 図	第132号住居跡出土遺物	65
第 45 図	第110号住居跡出土遺物	40	第 82 図	第133号住居跡出土遺物	66
第 46 図	第111号住居跡	40	第 83 図	第134号住居跡	67
第 47 図	第111号住居跡出土遺物	41	第 84 図	第134号住居跡出土遺物(1)	67

第 85 図	第134号住居跡出土遺物(2) ……………	68	第122図	第152号住居跡出土遺物 ……………	95
第 86 図	第135号住居跡出土遺物 ……………	69	第123図	第153号住居跡 ……………	96
第 87 図	第135号住居跡 ……………	70	第124図	第153号住居跡出土遺物 ……………	97
第 88 図	第135号住居跡カマド ……………	70	第125図	第154号住居跡出土遺物 ……………	98
第 89 図	第136号住居跡出土遺物 ……………	71	第126図	第154号住居跡カマド ……………	98
第 90 図	第136号住居跡 ……………	72	第127図	第154号住居跡 ……………	99
第 91 図	第137号住居跡 ……………	73	第128図	第155号住居跡 ……………	100
第 92 図	第137号住居跡カマド ……………	74	第129図	第155号住居跡出土遺物 ……………	101
第 93 図	第137号住居跡出土遺物 ……………	74	第130図	第156号住居跡 ……………	102
第 94 図	第138号住居跡 ……………	75	第131図	第156号住居跡出土遺物 ……………	103
第 95 図	第139号住居跡 ……………	75	第132図	第157号住居跡 ……………	104
第 96 図	第139号住居跡出土遺物 ……………	75	第133図	第157号住居跡出土遺物 ……………	105
第 97 図	第140号住居跡出土遺物 ……………	76	第134図	第159号住居跡 ……………	106
第 98 図	第140号住居跡 ……………	77	第135図	第159号住居跡貯藏穴 ……………	107
第 99 図	第141号住居跡 ……………	78	第136図	第159号住居跡出土遺物 ……………	107
第100図	第141号住居跡出土遺物 ……………	79	第137図	第158号住居跡 ……………	108
第101図	第142号住居跡 ……………	80	第138図	第160・161号住居跡 ……………	109
第102図	第142号住居跡出土遺物 ……………	80	第139図	第161号住居跡出土遺物 ……………	110
第103図	第143号住居跡 ……………	81	第140図	第162・163号住居跡 ……………	111
第104図	第143号住居跡出土遺物(1) ……………	82	第141図	第164号住居跡 ……………	112
第105図	第143号住居跡出土遺物(2) ……………	83	第142図	第164号住居跡出土遺物 ……………	112
第106図	第143号住居跡カマド ……………	83	第143図	第165号住居跡 ……………	112
第107図	第144号住居跡 ……………	84	第144図	第165号住居跡出土遺物 ……………	112
第108図	第145号住居跡 ……………	85	第145図	第166号住居跡 ……………	113
第109図	第145号住居跡出土遺物 ……………	85	第146図	第167号住居跡出土遺物 ……………	113
第110図	第146号住居跡 ……………	86	第147図	第167号住居跡 ……………	114
第111図	第146号住居跡出土遺物 ……………	86	第148図	第168号住居跡 ……………	115
第112図	第147号住居跡 ……………	87	第149図	第169号住居跡 ……………	116
第113図	第147号住居跡出土遺物 ……………	88	第150図	第170号住居跡出土遺物 ……………	117
第114図	第148号住居跡 ……………	89	第151図	第170号住居跡 ……………	117
第115図	第148・149号住居跡出土遺物 ……………	89	第152図	第171号住居跡 ……………	118
第116図	第149号住居跡 ……………	90	第153図	第171号住居跡出土遺物 ……………	119
第117図	第150号住居跡 ……………	91	第154図	第174号住居跡 ……………	119
第118図	第150号住居跡貯藏穴 ……………	92	第155図	第174号住居跡出土遺物 ……………	120
第119図	第150号住居跡出土遺物 ……………	93	第156図	第175号住居跡出土遺物 ……………	120
第120図	第151号住居跡 ……………	94	第157図	第175号住居跡 ……………	121
第121図	第152号住居跡 ……………	95	第158図	第176号住居跡 ……………	122

第159図	第176号住居跡出土遺物	123	第196図	第197号住居跡	145
第160図	第177号住居跡	123	第197図	第197号住居跡カマド	146
第161図	第178号住居跡	124	第198図	第197号住居跡出土遺物	147
第162図	第179号住居跡	125	第199図	第198号住居跡出土遺物	148
第163図	第180号住居跡出土遺物	126	第200図	第198号住居跡	148
第164図	第180号住居跡	126	第201図	第199・200号住居跡	149
第165図	第181号住居跡出土遺物	127	第202図	第199号住居跡出土遺物	150
第166図	第181・182号住居跡	127	第203図	第200号住居跡出土遺物	150
第167図	第182号住居跡出土遺物	128	第204図	第201号住居跡出土遺物	151
第168図	第183号住居跡	129	第205図	第201・202号住居跡	152
第169図	第183号住居跡出土遺物	130	第206図	第201号住居跡カマド	153
第170図	第184号住居跡出土遺物	130	第207図	第203号住居跡出土遺物	153
第171図	第184号住居跡	131	第208図	第203号住居跡	154
第172図	第184号住居跡カマド	131	第209図	第204号住居跡	155
第173図	第185号住居跡出土遺物	132	第210図	第205号住居跡	156
第174図	第185号住居跡	132	第211図	第205号住居跡カマド	157
第175図	第186号住居跡	133	第212図	第205号住居跡出土遺物	157
第176図	第186号住居跡出土遺物	134	第213図	第206号住居跡	157
第177図	第187号住居跡	134	第214図	第207号住居跡	158
第178図	第188号住居跡出土遺物	135	第215図	第207号住居跡出土遺物	159
第179図	第188号住居跡	135	第216図	第208号住居跡	159
第180図	第189号住居跡	136	第217図	第210号住居跡出土遺物	159
第181図	第189号住居跡出土遺物	136	第218図	第209・210号住居跡	160
第182図	第190号住居跡	137	第219図	第211号住居跡	161
第183図	第191号住居跡	138	第220図	第212・213号住居跡	162
第184図	第191号住居跡出土遺物	138	第221図	第211号住居跡出土遺物	163
第185図	第192号住居跡出土遺物	138	第222図	第212号住居跡出土遺物	163
第186図	第192号住居跡	139	第223図	第213号住居跡出土遺物	164
第187図	第193号住居跡出土遺物	139	第224図	第214号住居跡出土遺物	164
第188図	第193号住居跡	140	第225図	第214号住居跡	165
第189図	第193号住居跡カマド	140	第226図	第215号住居跡	166
第190図	第194号住居跡	141	第227図	第216・217号住居跡	167
第191図	第194号住居跡出土遺物	141	第228図	第216号住居跡カマド	168
第192図	第195号住居跡出土遺物	141	第229図	第216号住居跡出土遺物	168
第193図	第195号住居跡	142	第230図	第218号住居跡	169
第194図	第196号住居跡	143	第231図	第219号住居跡	170
第195図	第196号住居跡出土遺物	144	第232図	第220号住居跡出土遺物	171

第233区	第220・221号住居跡	172	第270区	第249号住居跡出土遺物	203
第234区	第220号住居跡カマド	173	第271区	第249・250号住居跡	204
第235区	第222号住居跡	174	第272区	第251号住居跡出土遺物	206
第236区	第223号住居跡出土遺物	174	第273区	第251号住居跡	206
第237区	第226号住居跡出土遺物	175	第274区	第255号住居跡出土遺物	207
第238区	第223～225号住居跡	176	第275区	第252・255号住居跡	208
第239区	第227号住居跡出土遺物	177	第276区	第255号住居跡カマド	208
第240区	第226・227号住居跡	178	第277区	第256・257号住居跡	209
第241区	第228号住居跡	180	第278区	第256号住居跡出土遺物	210
第242区	第229号住居跡	181	第279区	第257号住居跡出土遺物	210
第243区	第229号住居跡カマド	181	第280区	第258号住居跡出土遺物	210
第244区	第229号住居跡出土遺物	182	第281区	第258号住居跡	211
第245区	第230号住居跡出土遺物	182	第282区	第259号住居跡	212
第246区	第233号住居跡出土遺物	183	第283区	第259号住居跡カマド	213
第247区	第234号住居跡出土遺物	183	第284区	第260号住居跡カマド	213
第248区	第230・233・234号住居跡	184	第285区	第259号住居跡出土遺物	213
第249区	第233号住居跡カマド	185	第286区	第260号住居跡出土遺物	214
第250区	第231・232号住居跡	186	第287区	第260号住居跡	215
第251区	第231号住居跡カマド	186	第288区	第261号住居跡出土遺物	216
第252区	第235号住居跡出土遺物	187	第289区	第262号住居跡出土遺物	216
第253区	第235・236号住居跡	188	第290区	第261号住居跡	217
第254区	第236号住居跡出土遺物	189	第291区	第262号住居跡	218
第255区	第237号住居跡出土遺物	189	第292区	第263号住居跡	219
第256区	第237・245号住居跡	190	第293区	第263号住居跡カマド	220
第257区	第245号住居跡出土遺物	192	第294区	第263号住居跡出土遺物	220
第258区	第238号住居跡	193	第295区	第264号住居跡出土遺物	221
第259区	第239号住居跡出土遺物	194	第296区	第264・265・268号住居跡	222
第260区	第239・243号住居跡	194	第297区	第264号住居跡カマド	223
第261区	第240号住居跡出土遺物	195	第298区	第265号住居跡出土遺物	223
第262区	第240・253・254号住居跡	196	第299区	第268号住居跡出土遺物	223
第263区	第241・242号住居跡	197	第300区	第266・267号住居跡	224
第264区	第241号住居跡出土遺物	198	第301区	第269号住居跡	225
第265区	第242号住居跡出土遺物	198	第302区	第270・321号住居跡	226
第266区	第246・271号住居跡	199	第303区	第272号住居跡出土遺物	227
第267区	第271号住居跡出土遺物	200	第304区	第272・273号住居跡	228
第268区	第248号住居跡出土遺物	201	第305区	第272号住居跡カマド	230
第269区	第248号住居跡	202	第306区	第273号住居跡出土遺物	230

第307回	第274号住居跡出土遺物	231
第308回	第274・277号住居跡	232
第309回	第274・277号住居跡カマド	233
第310回	第275号住居跡出土遺物	234
第311回	第275号住居跡	234
第312回	第276号住居跡	235
第313回	第277号住居跡出土遺物	235
第314回	第278号住居跡	236
第315回	第278号住居跡出土遺物	237
第316回	第279号住居跡出土遺物	237
第317回	第279・285号住居跡	238
第318回	第281号住居跡出土遺物	239
第319回	第281・294号住居跡	240
第320回	第282号住居跡出土遺物	241
第321回	第297号住居跡出土遺物	241
第322回	第282・297号住居跡	242
第323回	第283号住居跡出土遺物	243
第324回	第295号住居跡出土遺物	243
第325回	第283・295・296号住居跡	244
第326回	第296号住居跡出土遺物	246
第327回	第286号住居跡	247
第328回	第286号住居跡出土遺物	247
第329回	第287・288号住居跡	248
第330回	第287号住居跡カマド	250
第331回	第287号住居跡出土遺物	251
第332回	第289・290号住居跡	253
第333回	第290号住居跡貯蔵穴	254
第334回	第289号住居跡出土遺物	255
第335回	第290号住居跡出土遺物	255
第336回	第291号住居跡出土遺物	256
第337回	第291号住居跡	256
第338回	第292号住居跡	257
第339回	第293号住居跡出土遺物	258
第340回	第292号住居跡出土遺物	259
第341回	第293号住居跡	260
第342回	第298・422号住居跡	261
第343回	第299・300号住居跡	262

第344回	第298号住居跡出土遺物	263
第345回	第299号住居跡出土遺物	263
第346回	第300号住居跡出土遺物	264
第347回	第301号住居跡出土遺物	264
第348回	第301・302号住居跡	265
第349回	第302号住居跡出土遺物	266
第350回	第303・304・320号住居跡	267
第351回	第305号住居跡	268
第352回	第305号住居跡出土遺物	269
第353回	第306号住居跡	269
第354回	第306号住居跡出土遺物	270
第355回	第307号住居跡	270
第356回	第308・423号住居跡	271
第357回	第308号住居跡出土遺物	272
第358回	第309号住居跡出土遺物	273
第359回	第309～311号住居跡	274
第360回	第310号住居跡出土遺物	276
第361回	第311号住居跡出土遺物	277
第362回	第312号住居跡	278
第363回	第312号住居跡出土遺物	279
第364回	第314号住居跡出土遺物	279
第365回	第313～315・330号住居跡	280
第366回	第330号住居跡出土遺物	282
第367回	第315号住居跡出土遺物	282
第368回	第316号住居跡出土遺物	283
第369回	第317号住居跡出土遺物	283
第370回	第316・317・337号住居跡	284
第371回	第318・319号住居跡	286
第372回	第318号住居跡カマド	287
第373回	第318号住居跡出土遺物	288
第374回	第322号住居跡出土遺物	288
第375回	第322・323号住居跡	289
第376回	第323号住居跡出土遺物	290
第377回	第324・334・335・424号住居跡	291
第378回	第334号住居跡出土遺物	292
第379回	第335号住居跡出土遺物	292
第380回	第325・326号住居跡	293

第381图	第326号住居跡出土遺物	294	第418图	第54号掘立柱建物跡出土遺物	327
第382图	第328号住居跡	295	第419图	第54号掘立柱建物跡	328
第383图	第327号住居跡	296	第420图	第55号掘立柱建物跡	329
第384图	第327号住居跡出土遺物	298	第421图	第56号掘立柱建物跡	330
第385图	第329号住居跡出土遺物	298	第422图	第57号掘立柱建物跡	331
第386图	第329号住居跡	299	第423图	第58号掘立柱建物跡	332
第387图	第331号住居跡出土遺物	299	第424图	第59号掘立柱建物跡	333
第388图	第331·332号住居跡	300	第425图	第60号掘立柱建物跡	334
第389图	第333·336号住居跡	301	第426图	第61号掘立柱建物跡	335
第390图	第338号住居跡出土遺物	302	第427图	第60·61号掘立柱建物跡出土遺物	336
第391图	第344号住居跡出土遺物	303	第428图	第63号掘立柱建物跡	337
第392图	第338·344号住居跡	304	第429图	第64号掘立柱建物跡	338
第393图	第339号住居跡	306	第430图	第65号掘立柱建物跡	339
第394图	第339号住居跡出土遺物	307	第431图	第66号掘立柱建物跡	340
第395图	第340号住居跡	307	第432图	第67号掘立柱建物跡出土遺物	341
第396图	第341号住居跡出土遺物	308	第433图	第67号掘立柱建物跡	341
第397图	第343号住居跡出土遺物	308	第434图	第68号掘立柱建物跡	342
第398图	第341~343号住居跡	309	第435图	第69号掘立柱建物跡	343
第399图	掘立柱建物跡全体图	310	第436图	第70号掘立柱建物跡	344
第400图	第30号掘立柱建物跡出土遺物	311	第437图	第71号掘立柱建物跡	345
第401图	第30号掘立柱建物跡	312	第438图	第72号掘立柱建物跡	346
第402图	第31号掘立柱建物跡	313	第439图	第73号掘立柱建物跡	347
第403图	第32号掘立柱建物跡出土遺物	314	第440图	第74号掘立柱建物跡	348
第404图	第32号掘立柱建物跡	315	第441图	第75号掘立柱建物跡	349
第405图	第33号掘立柱建物跡	316	第442图	第76号掘立柱建物跡	350
第406图	第34号掘立柱建物跡	317	第443图	第77号掘立柱建物跡	351
第407图	第37号掘立柱建物跡	318	第444图	第78号掘立柱建物跡	352
第408图	第38号掘立柱建物跡	319	第445图	第62·79号掘立柱建物跡	353
第409图	第38号掘立柱建物跡出土遺物	319	第446图	第80号掘立柱建物跡	354
第410图	第39号掘立柱建物跡	320	第447图	第81号掘立柱建物跡	355
第411图	第40号掘立柱建物跡	321	第448图	第82号掘立柱建物跡	356
第412图	第41号掘立柱建物跡	322	第449图	第83号掘立柱建物跡	357
第413图	第42号掘立柱建物跡	323	第450图	第84号掘立柱建物跡出土遺物	358
第414图	第43号掘立柱建物跡	324	第451图	第84·88号掘立柱建物跡	359
第415图	第49·50号掘立柱建物跡	325	第452图	第85号掘立柱建物跡	360
第416图	第51·52号掘立柱建物跡	326	第453图	第86号掘立柱建物跡	361
第417图	第53号掘立柱建物跡	327	第454图	第87号掘立柱建物跡	362

第455图	第89号掘立柱建物跡	363	第476图	土壙出土遺物(5)	391
第456图	第90号掘立柱建物跡	364	第477图	土壙出土遺物(6)	392
第457图	第91号掘立柱建物跡	365	第478图	土壙(6)	394
第458图	第92号掘立柱建物跡	366	第479图	土壙出土遺物(7)	395
第459图	第93号掘立柱建物跡	367	第480图	土壙(7)	397
第460图	第94号掘立柱建物跡	368	第481图	土壙(8)	399
第461图	第95号掘立柱建物跡	369	第482图	土壙(9)	401
第462图	第96号掘立柱建物跡	370	第483图	土壙出土遺物(8)	402
第463图	第97号掘立柱建物跡	371	第484图	土壙(10)	403
第464图	第98号掘立柱建物跡	372	第485图	土壙(11)	405
第465图	第203·204号土壙	374	第486图	土壙出土遺物(9)	406
第466图	第203·204号土壙出土遺物	375	第487图	土壙(12)	407
第467图	土壙(1)	377	第488图	土壙(13)	409
第468图	土壙(2)	379	第489图	土壙(14)	411
第469图	土壙(3)	381	第490图	土壙出土遺物(10)	412
第470图	土壙出土遺物(1)	382	第491图	土壙(15)	414
第471图	土壙出土遺物(2)	383	第492图	土壙出土遺物(11)	415
第472图	土壙(4)	385	第493图	土壙(16)	417
第473图	土壙出土遺物(3)	386	第494图	土壙(17)	419
第474图	土壙出土遺物(4)	387	第495图	土壙(18)	421
第475图	土壙(5)	390	第496图	土壙出土遺物(12)	422

I. 調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では自然環境の保全、生活環境の整備に配慮しつつ、県上の調和と均衡のある発展を目指して基盤整備を進めるため、各種の施策を実施している。その一環として県企業局では、工場誘致と適切な工場配置を行うために、行田市大字野地内に行田工業団地の造成を計画した。県教育局文化財保護課では、このような開発事業に対応するため、開発関係部局と事前協議を行い、文化財の保護について遺漏のないように調整を進めてきた。

行田工業団地の造成計画にあたり、平成6年2月1日付けの企局十二第280号で、県企業局土地造成課長から教育局文化財保護課長あて、行田工業団地造成予定地内における「埋蔵文化財の有無及び取扱いについて」の照会があった。

工業団地予定地内には、既に周知の埋蔵文化財包蔵地として、古墳～平安時代にわたる集落跡である築道下遺跡及び八ツ島遺跡の二遺跡が登録されていたが、それぞれの遺跡範囲については不明であった。遺跡の範囲を明らかとすることは、開発事業との円滑な調整を図る意味でも重要なことでもあるため、照会を受けた県文化財保護課では平成7年3月6日～9日、4日間にわたって工業団地造成予定地内の遺跡範囲確認調査を実施した。

範囲確認調査の結果、築道下遺跡の立地する元荒川の左岸の自然堤防上には、ほぼ例外なく古墳時代から

平安時代にわたる住居跡が存在することが判明し、周知の包蔵地の範囲が西及び南東側に大きく広がることが明らかとなった。

この結果を踏まえて平成7年3月15日付け教文第125-1号をもって、文化財保護課長から埼玉県企業局土地開発第二課長あて、次のように通知した。

1 埋蔵文化財の所在

工業地内には、築道下遺跡（68-144）、八ツ島遺跡（68-146）が存在する。

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上、やむを得ず現状を変更する地区については、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。

なお、発掘調査の実施については当課と協議すること。

その後、発掘調査の実施について協議した結果、緑地や公園として現状保存の図られる場所を除き、記録保存のための発掘調査もやむを得ないとの結論に至り、平成7年4月1日より(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査が行われることとなった。発掘調査に係わる通知が平成7年4月28日付け教文第2-23号をもってなされている。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

築道下遺跡の調査は、平成8年4月1日から平成9年3月31日にわたって実施した。調査対象に関わる面積は、2800㎡であった。発掘調査は、平成9年度も継続している。

4月上旬、前年度からの継続作業で、B・C区の調査を開始した。

重機による表土の掘削は、前年度剥ぎ残したC区の南東側で開始した。

表土の除去と平行して遺構の確認作業と、消石灰による練引きを行った。

現場での発掘調査と平行して、現場事務所内で図面の整合作業を行い、調査の迅速化につとめた。

6月、やや出水があり、重機により調査区外周の排水溝の保全を行った。上旬に遺跡見学会を開催した。

7月、SD-77以北の調査が終わり、航空写真撮影を行った。

8月、SD-77以南の調査を開始した。

2月、SD-85以北の調査が終わり、航空写真撮影を行った。

3月、SD-85以北の図面作成及び、写真撮影を完了して、発掘作業を終了した。下旬には、プレハブを残し、機材を撤収して平成8年度の調査を終了した。

整理作業

平成9年4月1日から平成10年3月31日にわたって実施した。

4月当初から図面整理・遺物接合・復元を行い、順次遺物実測を行った。

8月に図面整理

9月より遺構・遺物のトレースに付た。

11月より版組・割り付けを行い、遺物写真撮影及び、原稿の執筆を開始した。

12月より編集作業を開始した。

1月末に入札を行い、2月の校正作業を経て、平成10年3月31日に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書作成の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(2) 発掘調査（平成8年度）

理 事 長	荒 井 柱
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 理 事	吉 川 國 男
常務理事兼管理部長	稲 葉 文 夫
理 事 兼 調 査 部 長	小 川 良 祐
管 理 部	
庶 務 課 長	依 田 透
主 査	西 沢 信 幸
主 任	長 滝 美 智 子
主 事	菊 池 久
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二
調 査 部	
調 査 部 副 部 長	高 橋 一 夫
調 査 第 四 課 長	酒 井 清 治
主 査	今 井 宏
主 任 調 査 員	鯉 持 和 夫
主 任 調 査 員	赤 熊 浩 一
主 任 調 査 員	岩 瀬 讓
主 任 調 査 員	山 本 靖
主 任 調 査 員	大 屋 道 則
調 査 員	栗 岡 潤

(3) 整理事業（平成9年度）

理 事 長	荒 井 柱
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 理 事	吉 川 國 男
常務理事兼管理部長	稲 葉 文 夫
理 事 兼 調 査 部 長	梅 沢 太 久 夫
管 理 部	
庶 務 課 長	依 田 透
主 査	西 沢 信 行
主 任	長 滝 美 智 子
主 任	腰 塚 雄 二
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 任	福 田 昭 美
主 任	菊 池 久
資 料 部	
資 料 部 長	谷 井 彪
専門調査員兼資料部副部長	小 久 保 徹
資料整理第二課長	村 田 健 二
主 任 調 査 員	大 屋 道 則
主 任 調 査 員	栗 岡 潤

II 遺跡の立地と環境

築道下遺跡は、埼玉県行田市大字野字築道下に所在し、JR 高崎線北鴻巣駅の北東約1.2kmに位置し、国道17号熊谷バイパスに接している。

遺跡付近は、現在の行政区域では、行田市の南端にあり、北西は北足立郡吹上町に、南西は元荒川を境に鴻巣市に接している。

遺跡は、元荒川左岸の自然堤防上に位置し、元荒川と、行田市街地方面から南流する忍川の合流点付近に立地する。本遺跡が立地する自然堤防は、忍川に沿って形成された自然堤防へ続き、埼玉古墳群が所在する低台地へと続いている。

遺跡付近の標高は15m前後で、水田部との比高差は、約1mであった。

元荒川は、現在の区分は中川水系となっているが、寛永6年(1629)年の瀬替え以前は、荒川の主流であったと考えられ、現在の景観と、江戸時代以前の景観とは、大きく異なっていたと考えられる。

埼玉県行田市周辺は、県の北東部にあり、利根川、荒川の大河川に挟まれ、分流の中小の河川を含めて激しく乱流した地域である。さらに、加須低地の形成の要因にもなった、関東造盆地運動という地盤の沈降現

象によって、大宮台地北部が徐々に沈降している。このため、付近の地形は、大宮台地から連なる埋没したローム台地と、複数の河川によって形成された低地と自然堤防が、複雑に入り組んだ地形となっている。

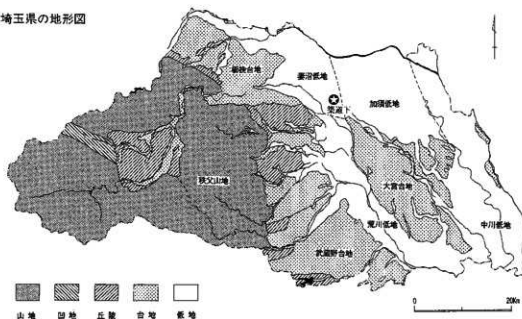
第2図は、現在の地形図、明治時代の迅速測図、周辺の遺跡の発掘調査報告書等をもとに、自然堤防、埋没台地と遺跡の分布を表現したものである。この図を見ると、遺跡周辺の遺跡の分布は、埋没台地と、河川の形成した自然堤防上に立地していることがわかる。

しかし、この付近の遺跡は、前述の関東造盆地運動と河川の氾濫による土砂の流入という相乗効果によって、遺跡が埋没し、現地表面から数m下で発見され、工事の際等に偶然確認された遺跡が多い。このため、現在は、水田として利用されている低地にも、自然堤防や、台地が埋没し、未確認の遺跡が包蔵されている可能性は十分にある。

また、この地域は、近世以降の人工的な河川の瀬替えや、用水路の開削等によって、近世以前の旧地形の復原は、困難なものになっている。

本遺跡を含む行田市周辺は、金館銘の鉄剣を出土した稲荷山古墳を含む埼玉古墳群を始めとして、多くの

第1図 埼玉県の地形図



古墳が築造された地域で、武藏国造の本拠地であったと考えられる地域である。

埼玉古墳群は、5世紀後半とされる稲荷山古墳を最初に、6世紀末と考えられる將軍山古墳まで、約100年余りの間に築造されたと考えられている。

埼玉古墳群の周囲には、西に佐間古墳群、東に若王子古墳群が隣接している。若王子古墳群は、現在は殆ど消滅してしまっただが、6世紀末～7世紀初頭とされる全長95mの若王子古墳を始め、愛宕通遺跡で3基の円墳が調査されている。

埼玉古墳群の北方の台地には、八幡山、地蔵塚古墳に代表される若小玉古墳群と、銅鏡が出土した小見真観寺古墳を含む小見古墳群がある。八幡山古墳は、関東の石舞台ともよばれ、全長16.7mの開張り複室構造の石室から、漆塗りの木棺片・銅鏡が出土した。築造時期は、7世紀中葉とされる。石室や出土遺物の特殊性から、同時期に活躍した、武藏国造物部直見麻呂の墓であった可能性が指摘されている。

地蔵塚古墳は、開張り切石積の横六式石室を有し、壁面に、人物、馬、家、水鳥、船の線刻画が描かれている。築造時期は、7世紀後半とされている。

また、築道下遺跡と同じ元荒川・忍川沿いには、石田堤遺跡、鴻巣市安養寺古墳群、川里村舟塚古墳、新屋敷遺跡、生出家遺跡、吹上町愛宕神社古墳、宝養寺古墳などがある。

一方、古墳時代後期の集落遺跡は、築道下遺跡を含め、行田市小針遺跡、渡柳陣場遺跡、高畑遺跡、吹上町袋・台遺跡が調査されている。

古墳時代の終末から奈良・平安時代にかけては、本遺跡の所在する行田市は、埼玉郡(群)に属していたと考えられる。

『和名抄』によれば、埼玉郡には、太田・笠原・草原・埼玉・余戸の5郷があったとされる。当時の郡域は不明であるが、本遺跡付近は、埼玉郡埼玉郷に属していたと考えられる。元荒川対岸の鴻巣市は、足立郡であったと考えられることから、本遺跡は、郡境に立地していた可能性がある。

古代の遺跡は、熊谷市池上遺跡、行田市小敷田遺跡、小針遺跡、原遺跡、愛宕通遺跡、下埼玉通遺跡、馬場裏遺跡、白鳥田遺跡、野合遺跡、内郷遺跡、八ツ島遺跡、旧盛徳寺跡などがある。

遺跡の時期は、概ね8世紀以降で、特に9・10世紀が中心となる。

このうち、7世紀末から8世紀初頭の遺構・遺物を検出した遺跡は、本遺跡を含め小敷田遺跡・小針遺跡など、数遺跡に限られている。しかし、小敷田遺跡からは、当時期の遺物と共に、木簡が出土しており、この地域には、既に郡(群)衙が整備されていたと考えられ、同時期の遺跡は、今後の調査等によって増加するものと考えられる。

この他、寺院跡として旧盛徳寺跡がある。大同年間(806～809年)の創建とされ、8世紀代の瓦も出土している。境内には、円形の柱造り出しを有する礎石が現存している。

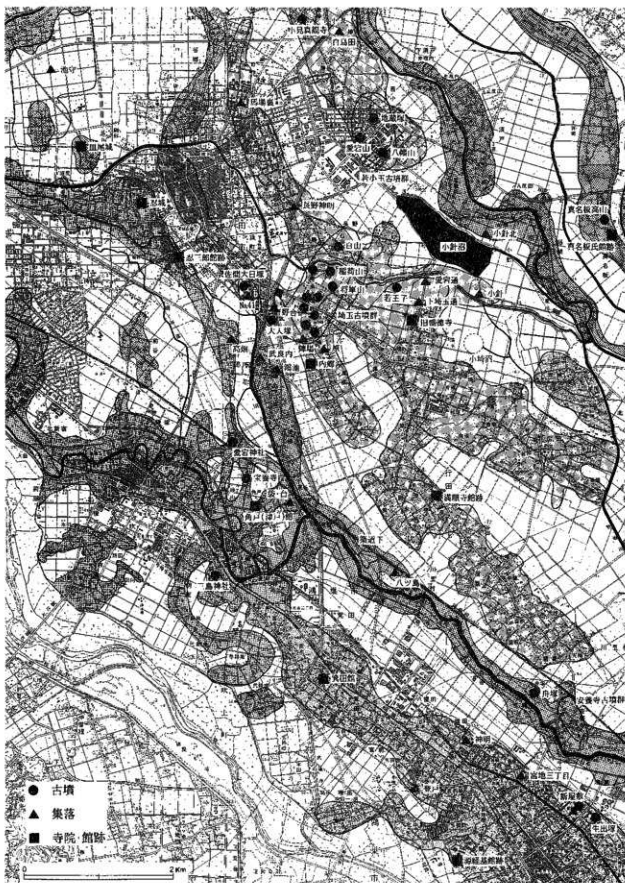
旧盛徳寺跡の北方では、大和古印が出土しており、行田市埼玉地区は、古代の埼玉郡衙の推定地として注目されている。

また、万葉集にも詠まれた小崎沼は、旧盛徳寺跡の東方の低地にあり、小針遺跡北側には、かつては小針沼(埼玉沼)があった。江戸時代の『新編武蔵国風土記稿』では、この地に古代の埼玉津があったとしているが、埼玉郡衙・埼玉津の所在地については、諸説有り、明らかにはなっていない。

中世は、本遺跡からは、13世紀～14世紀代の墓跡・建物跡等を検出した。本遺跡周辺では、中世の遺跡の調査例は少ないが、内郷遺跡、池上遺跡等で、中世の遺構・遺物を検出している。

中世には、行田付近を本拠に、忍氏、渡柳氏、行田氏、麻績(小見)氏、鎌田氏、角戸(津戸)氏などの武士が活躍したとされ、現在でも、その本拠地と考えられる地名が残っているところがあり、館跡と推定される遺跡もある。しかし、発掘調査によって明らかになった遺跡は少なく、内郷遺跡で館跡に伴うと考えられる溝跡を検出している。

第2図 周辺遺跡の分布図



III 遺跡の概要

築道下遺跡は、埼玉県行田市大字野字築道下に所在する。遺跡は、現在の行政区域では、行田市の南端にあり、遺跡の北西端は、北足立郡吹上町に、南側は元荒川を挟んで鴻巣市に接している。

遺跡の中央付近は、JR上越新幹線および千間堰悪水路によって分断されていた。

遺跡は、元荒川左岸の、北東から南東方向に広がる細長い自然堤防上に位置する。遺跡の約300m北西には、行田市街地方面から南下する忍川と、元荒川の合流点がある。

遺跡の立地する自然堤防は、遺跡の北西方向は、二つの河川の合流点から忍川沿いに北へ延び、堤根・樋上の集落へと続き、行田市街地へと展開する。遺跡の南東方向では、現在国道17号バイパス付近で窪地となっており、自然堤防は、窪地の北側に沿うものと、元荒川に沿うものとの二つに分れている。このうち、窪地の北側に沿う自然堤防は、隣の八ツ島遺跡へと続いている。窪地との比高差は、約2mであった。

遺跡の範囲は、長さ約800m、幅は広いところで約250m、最も狭いところでは約80m前後であり、細長い遺跡の範囲となっている。これは、元荒川の氾濫によって形成された自然堤防が、川に沿って細長く延びているため、遺跡の広がり、この自然堤防に制約されている。

遺跡の現地表面での標高は、16m～17mで、遺跡の中央付近を境に、北西と南東へ徐々に低くなっていた。遺跡の北側には、野の集落との間に水田が広がっているが、水田との比高差は、約1mであった。

発掘調査は、平成7年度～平成9年度の3ヶ年に及び、調査の便宜上、A～Hの8区に区分して調査を実施した。(第3図)

このうち、A区、B区の北側部分とD区については、

平成7年度に発掘調査が実施され、平成8年度に「築道下遺跡Ⅰ」として、既に発掘調査報告書が刊行されている。

A区・B区北側・D区の調査では、古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡93軒、同期に属すると考えられる掘立柱建物跡45棟、古墳時代後期～中世の土壌225基、井戸跡61基、溝跡85条、標列11列、堀跡1条、中世火葬(茶毘)跡2基、時期不明のビット多数を検出した。

今回報告する範囲は、前述の「築道下Ⅰ」で報告したB区の南側に連続する部分と、C区の北側部分である。発掘調査は、平成8年度に実施した。

また、C区南側部分と、E区～H区については、平成8～9年度に発掘調査が実施され、平成11年度に「築道下遺跡Ⅲ」として調査報告書が刊行される予定である。

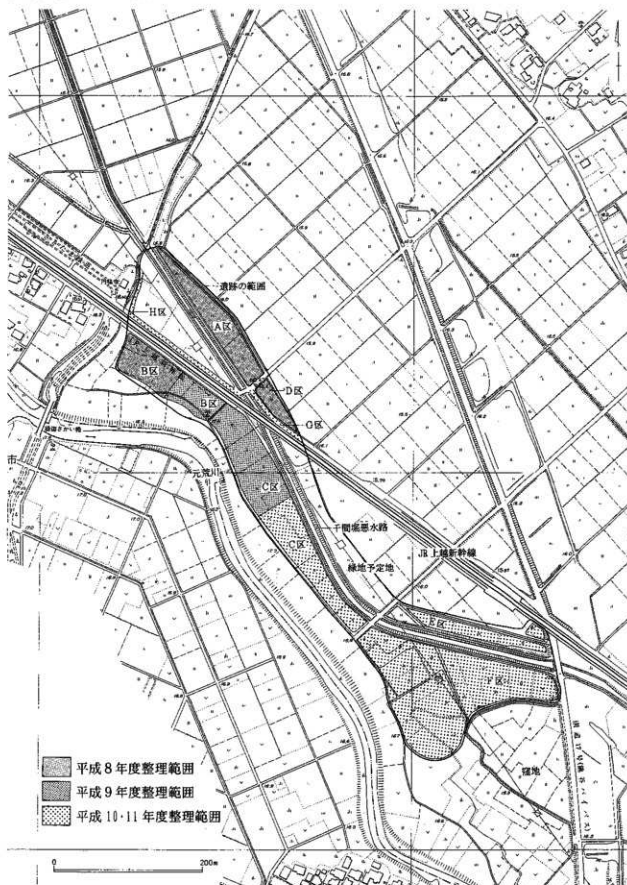
なお、C区北壁、上越新幹線、千間堰悪水路が交差する三角形の区画があるが、この部分については、平成9年度に調査が実施された。調査上の区分はC区として調査を実施したが、調査期間の都合で、今回報告することができなかった。この区画については、「築道下遺跡Ⅲ」で報告する。

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居跡246軒、古墳時代後期～中世の掘立柱建物跡62棟、同時期と考えられる土壌189基、井戸跡122基、奈良時代～中世の溝跡56条、古墳時代末～奈良時代の性格不明遺構6基、古墳時代後期～中世のビット186基、中世墓群跡・茶毘跡である。

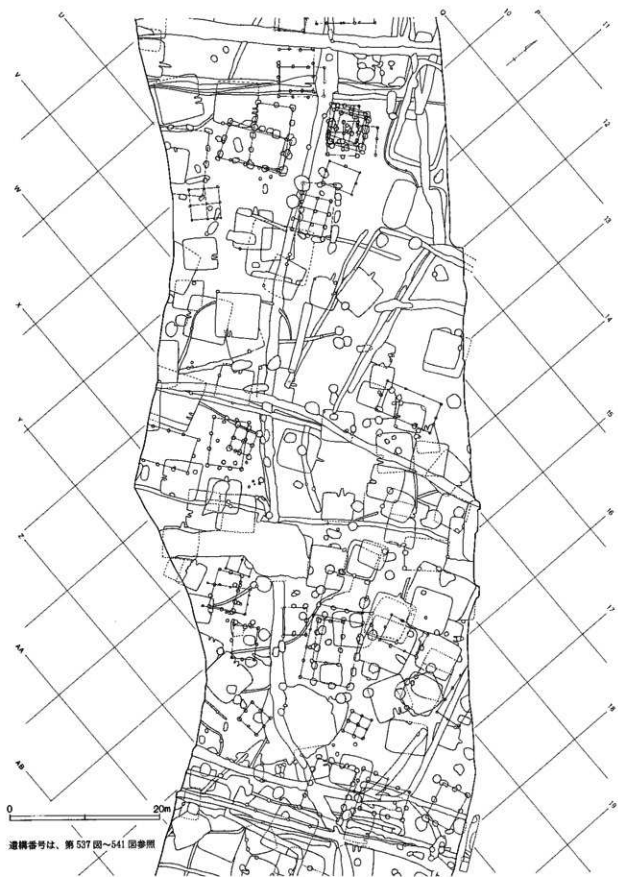
また今回の調査では、中世に属すると考えられる、土師質土器焼成遺構1基検出したが、保存処理作業の関係で、「築道下遺跡Ⅲ」で報告する。

なお、遺構の概要については、第IV章1節「遺跡の概観」で後述する。

第3図 遺跡周辺の地形図



第4図 調査区全測図(1)



第5図 調査区全測図(2)



Ⅳ B・C区の調査

1 遺跡の概観

今回報告範囲のB・C区は、平成8年度刊行の「築道遺跡I」で報告した、B区第56号溝跡を境に、元荒川に沿って南米へ連続する地点である。

調査区は、細長く延びていたため、今回の報告範囲は第101・105号溝跡までとした。

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡246軒、掘立柱建物跡62棟、土壇189基、井戸跡122基、溝跡56条、性格不明遺構6基、周溝状遺構4基、ピット186基、中世墓跡群、茶毘跡4基であった。

竪穴住居跡は、古墳時代後期から奈良時代に属すると考えられる。遺構の大半は、古墳時代後期鬼高式期に属するものである。

遺構の分布は、B区北側から連続して検出した。遺構は、途切れることなく密集して検出した。重複も著しく、十数軒が重複している例もあった。また、床面を数枚検出した竪穴住居跡や、同一場所で同心円状に重複する竪穴住居跡も多く検出し、数回の建替えあるいは拡張が想定される竪穴住居跡もあった。

掘立柱建物跡は、古代から中世に属すると考えられる。B区北側部分から連続して検出したが、遺構の分布は、大きく4箇所集中する傾向にあり、それぞれ重複、建替えが確認でき、数時期にわたって営まれていたと考えられる。

古代の建物跡は、57棟検出した。桁行が2間～3間の間柱・総柱の建物跡が34棟と約半数を占めるが、桁行が5間を超える、規模の大きい建物跡を7棟検出した。特に第63号建物跡は、桁行が10間以上という長大な建物跡で、官衙の施設を連想させる建物である。他に6間以上の建物跡を2棟検出しており、一般の集落遺跡では見られないものとして注目される。

中世の掘立柱建物跡は、5棟検出した。遺構の明確な時期の特定はできなかったが、周辺の井戸跡・溝跡の出土遺物から、概ね13～14世紀代と考えられる。また、中世墓跡と同時期と考えられる。茶毘跡に壊され

た建物跡もあることから、建物跡は、中世墓跡群に先行していた可能性もある。

土壇は、189基検出した。時期は、出土遺物から、古墳時代後期から中世に属すると考えられる。

井戸跡は、古墳時代から中世に属すると考えられる。円形を中心とし、すべて素掘りであった。

性格不明遺構は、6基検出したが、遺構の形状は土壇状であった。覆土中に焼土、炭化物を多量に含み、また上器片を多量に出土した遺構もあった。

ピットは、186基検出した。ピットの多くは、竪穴住居跡または掘立柱建物跡等の柱穴の一部と考えられ、柱痕跡が確認できたものも多かった。

溝跡は、56条検出した。古代から中世に属すると考えられるが、時期の特定できた溝跡は少なかった。

古代の溝跡は、掘立柱建物跡と主軸方向が揃うものもあったが、建物群を区画していたとは考えにくい。

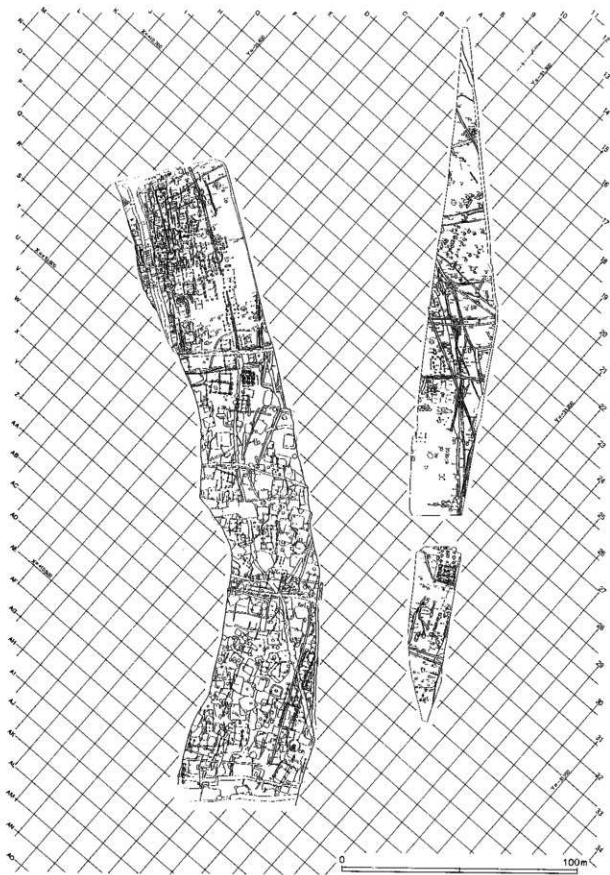
また、第38号溝跡からは、9世紀代の上師器・須恵器が多量に出土した。

中世の溝跡は、方形・L字形またはコの字形など規格性を有し、その内側には掘立柱建物跡・井戸跡・墓跡などが配され、区画溝あるいは堀として機能していた可能性がある。このうち、85号溝跡からは、土橋状に掘り残された部分を検出した。しかし、門跡等の付属施設は検出できなかった。

周溝状遺構は、4基検出した。遺構の形状は、溝が円形または方形に巡るものである。床面の欠かれた竪穴住居跡の可能性もあるが、柱穴・貯蔵穴等の付属施設は検出できなかった。近年、こうした遺構が、円形または方形周溝状遺構として報告されていることから、周溝状遺構として一括して報告することとした。

中世墓跡は、区画溝を有し、その内側から埋葬施設群3区、茶毘跡4基を検出した。埋葬施設群からは、板石塔婆22基、蔵骨器6個、埋納焼骨23基等を検出した。年代は、板石塔婆の紀年銘および蔵骨器の年代から、13～14世紀代に属していたと考えられる。

第 6 图 調査区全体図



2 遺構と遺物

(1) 住居跡

第66号住居跡 (第7・8図)

第66号住居跡は、T-7・8、U-8グリッドから検出した。

住居跡の西壁は、SD-59・61による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-27-Eであった。規模は主軸長5.7m、副軸長5.7m、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚が検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は南東、南西のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

検出した柱穴は、全体にやや東側に偏っていた。柱穴の中で、P2・P4はやや浅かったが、P2からは柱痕が検出できた。

住居跡は、SJ-67、SD-57・58・59・61と重複していた。重複関係は、SD-57・59・61に切れられ、SJ-67を切り、SD-58とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、高環、須恵器環、土玉、石製模造品、鉄鏝などを検出した。この中で第7図3・5は床面直上で、他は覆土で取り上げた。4の甕には胴上部に円形の穿孔が認められた。

第67号住居跡 (第8図)

第67号住居跡は、T-7・8グリッドから検出した。

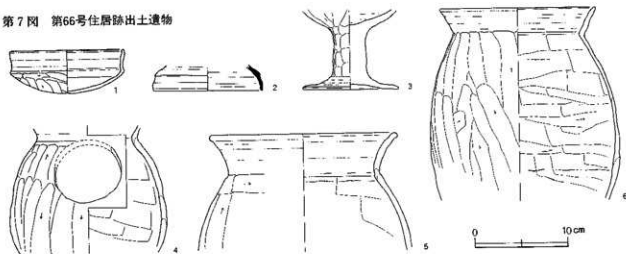
住居跡の南側の大半は川河道のため、北側はSJ-66による攪乱のために検出できなかった。床面上から、柱穴と考えられるビットが1本検出でき、SJ-66の床面の範囲からは、SJ-67に帰属すると考えられる柱穴が検出できなかったことから、住居跡は南側にのびていたと考えられた。形態は方形と想定でき、主軸方位はN-26-Eと考えられた。規模は主軸長不明、副軸長4.9m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は住居跡の検出範囲で確認できた。柱穴は1本のみ検出できた。

住居跡は、SJ-66と重複していた。重複関係は、SJ-66に切れられていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

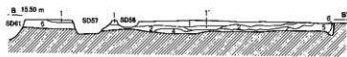
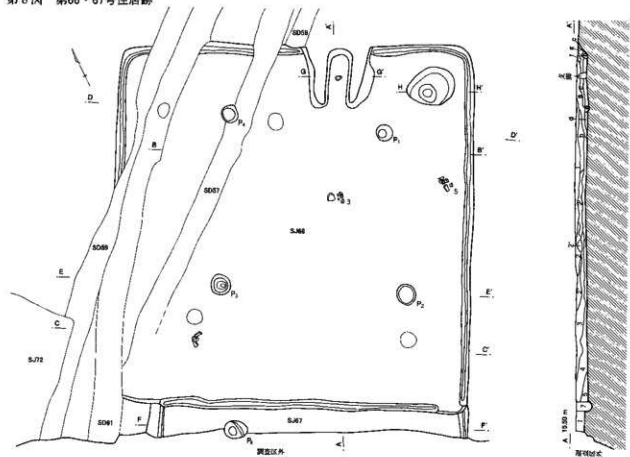
第7図 第66号住居跡出土遺物



第66号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.0)	4.6		CDE	3	橙褐色	40	
2	須恵器環	(11.6)			CF	1	青灰白色	10	
3	高環			10.2	ACDE	3	橙褐色	40	
4	甕				ACDEK	3	暗赤褐色	80	胴部穿孔
5	甕	(20.0)			ACEK	3	淡橙褐色	10	
6	甕	16.7			ACDEHK	3	暗赤褐色	90	

第8図 第66・67号住居跡



第66号住居跡層土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) R 散片
- 2 暗褐色 (10YR3/3) R 散片 B 含
- 3 暗褐色 (10YR3/0) B 不片
- 4 褐色 (10YR4/6) R 散片 R 含
- 5 褐色 (10YR4/4) B 多含
- 6 褐色 (10YR5/6) D 主体
- 7 暗褐色 (10YR3/3) RC 散片

第67号住居跡カマド層土

- a 暗赤褐色 (5YR3/2) R 多含 B 少含
- b 赤褐色 (10YR3/2) RC 少含
- c 暗赤褐色 (2.5YR3/6) R 散片 天井痕跡層
- d 黒色 (7.5YR2/1) CM 多含 かし出し層
- e 黒褐色 (7.5YR2/2) R 多含 煙道逆流入上
- f 明黄褐色 (10YR5/6) B 主体 R 多含
- g 赤褐色 (5YR4/8) R 少含 B 多含
- h 黄褐色 (10YR5/8) B 主体 RC 少含

第67号住居跡柱穴層土

- 1 暗褐色 (2.5Y3/3) B 散片 柱痕
- 2 褐色 (2.5Y4/6) 暗褐色 土少含 柱痕
- 3 黄褐色 (2.5Y5/6) B 主体 暗褐色 土多含 埋め土

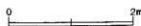
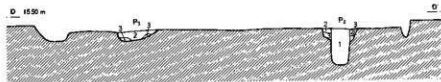
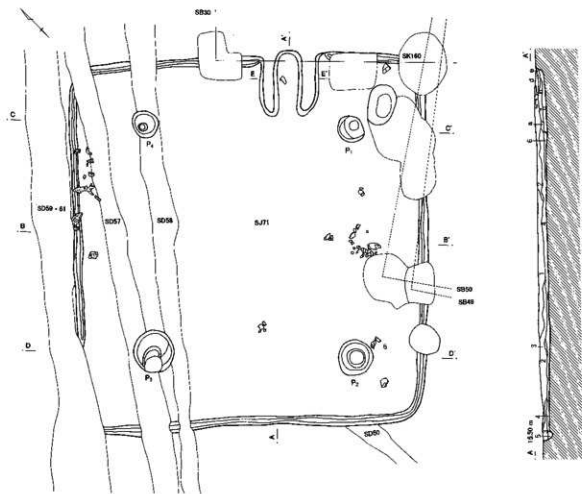
第66号住居跡カマド層土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) B 多含 C 少含
- 2 黄褐色 (10YR5/6) B 多含
- 3 黄褐色 (2.5YR5/6) B 主体

第66号住居跡柱穴層土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) B 少含
- 2 黒褐色 (10YR2/2) B 多含 RC 散片 柱痕
- 3 黄褐色 (10YR5/6) B 多含
- 4 褐色 (2.5YR4/2) D 暗褐色 土多含 R 少含

第9图 第71号住居跡



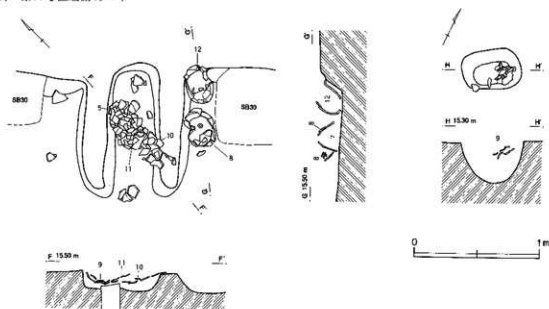
第71号住居跡層土

- | | |
|-----------------|---------|
| 1 黒褐色 (2.5Y2/1) | 柱大和多数 |
| 2 暗褐色 (2.5Y2/3) | C多含 B少含 |
| 3 中褐色 (2.5YR/7) | R小粒多含 |
| 4 黄褐色 (2.5Y6/6) | C小含 D多含 |
| 5 暗褐色 (10YR3/4) | R主体 |
| 6 明褐色 (2.5Y4/0) | C赤褐色混 |
| | C多含 |
| | B多含 |
| | C少含 |
| | B多含 |
| | R少含 |

第71号住居跡カド層上

- | | |
|------------------|-------|
| a 黄色 (2.5Y6/4) | 流出土層 |
| b 赤褐色 (2.5YR4/8) | 穴并層土層 |
| c 灰色 (2.5Y2/1) | M |
| d 褐色 (2.5Y4/3) | R少含 |
| e 暗褐色 (2.5Y3/3) | R少含 |

第10図 第71号住居跡カマド



第71号住居跡 (第9～11図)

第71号住居跡はS-8・9、T-8・9グリッドから検出した。

住居跡の北側のコーナー部は、SD-57による攪乱のために、西側のコーナー部は、SD-59・61による攪乱のために、東側のコーナー部は、SB-49・50、SK-160による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-45°-Eであった。規模は主軸長5.9m、副軸長5.6m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚や甕が検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出し、覆土内から甕の破片が検出できたが、大部分は重複した掘立柱建物跡によって攪乱されていた。床面は明瞭で、壁溝は全周していたと考えら

れた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

検出した柱穴の中で、P3は他の柱穴と比べると浅く、形態もやや大きかったが、配置から考えて、柱穴と判断した。

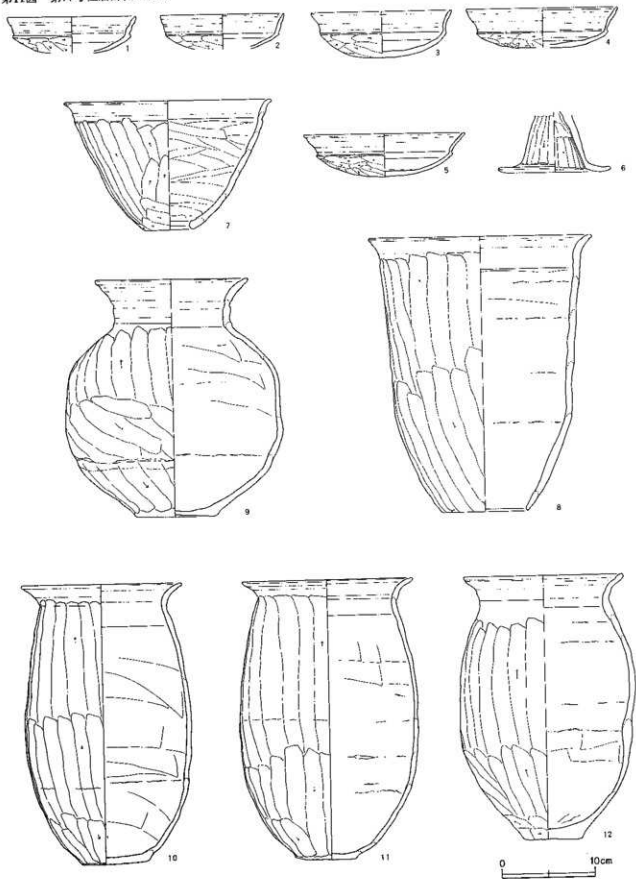
住居跡は、SB-30・49・50、SD-50・57・58・59・61と重複していた。重複関係は、SB-30・49・50、SD-50・57・58・59・61に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甔、高環、手捏ね土器、紡錘車、石製模造品などを検出した。この中で、第11図6の高環は床面から、5の環、10・11の甕はカマド内から、9の甕はカマド内と貯蔵穴から、7・8の甔、12の甕はカマド右袖の右側から、他は覆土から検出した。

第71号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.7)			ACE	3	淡橙褐色	20	
2	環	(13.1)			E	3	橙褐色	20	
3	環	(15.0)	4.9		ACE	3	淡橙褐色	40	
4	環	(16.2)			ACE	3	明赤褐色	40	
5	環	(17.1)	4.5		ACDE	3	淡橙褐色	60	
6	高環			(12.0)	ACE	3	明赤褐色	20	
7	甔	22.2	13.7	4.8	ACEK	2	赤褐色	100	
8	甔	(23.8)	29.2	(9.0)	ACE	3	暗赤褐色	60	
9	甕	(16.3)	25.1	(8.6)	ACEK	3	赤褐色	60	
10	甕	17.0	29.7	7.3	ACEK	3	淡橙褐色	70	
11	甕	17.9	29.7	6.5	ACEK	3	暗赤褐色	90	
12	甕	17.0	28.0	6.2	ACEHK	3	暗赤褐色	80	

第11圖 第71号住居跡出土遺物



第72号住居跡 (第12~15図)

第72号住居跡は、T-7グリッドから検出した。

住居跡の南側は旧河道による擾乱のために、東側の一部は、SD-59による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-0°-Eであった。規模は主軸長4.9m、副軸長不明、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出できた。床面も明瞭で、壁溝は全周していたと考えられた。柱穴も2本が明瞭

に検出できた。

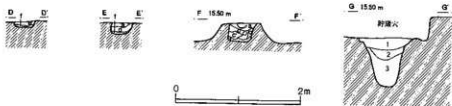
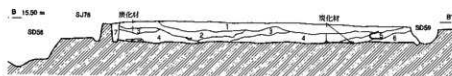
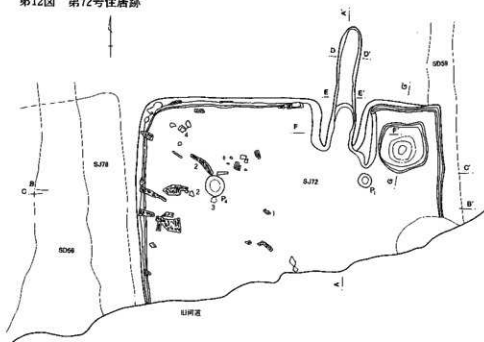
床面には炭化材が散乱しており、いわゆる火災住居と考えられた。

住居跡は、SJ-78、SD-59と重複していた。重複関係は、SD-59に切られ、SJ-78を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、瓶、高環などを検出した。

この中で、第14・15図に示した遺物は、全て床面から検出した。

第12図 第72号住居跡



第72号住居跡壁土

- 1 黒褐色 (10182/2) B多含 R微含
- 2 緑褐色 (10183/4) B少含 C多含
- 3 暗褐色 (10184/6) B多含 R微含
- 4 褐色 (10184/4) B多含 R微含
- 5 暗褐色 (10183/4) R多含 B微含
- 6 褐色 (7.3181/4) R多含 C多含
- 7 黒褐色 (10182/3) B多含 C微含

第72号住居跡貯蔵穴壁土

- 1 褐色 (10184/4) 柱底 B多含
- 2 明黄褐色 (10186/8) B主体
- 3 黄褐色 (10184/6) B少含
- 4 黄褐色 (10185/8) B少含

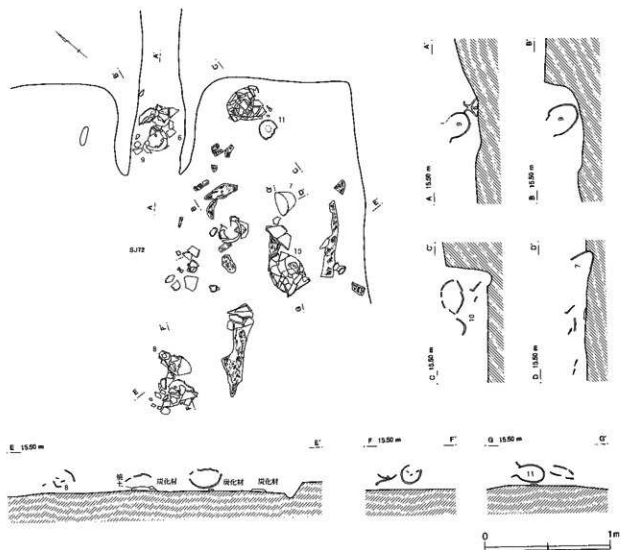
第72号住居跡貯蔵穴床土

- 1 褐色 (10184/6) B粘層 R微含
- 2 暗褐色 (10183/3) B多含 炭化材
- 3 褐色 (2.5184/4) B多含 緑り面

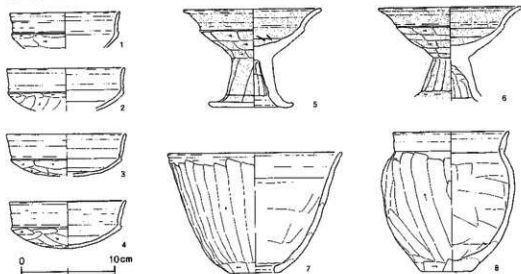
第72号住居跡カマド壁土

- a 褐色 (10184/6) B多含 C R少含
- b 暗褐色 (2.513/3) R B多含 C微含
- c 黄色 (517/5) B主体 B微含
- d 暗褐色 (2.513/3) R多含 B多含
天井破断部
- e 暗褐色 (514/4) B多含 R少含
- f 褐色 (513/2) B R少含 R微含
- u 黄色 (517/5) B多含 B少含
- v 黄色 (517/6) B主体

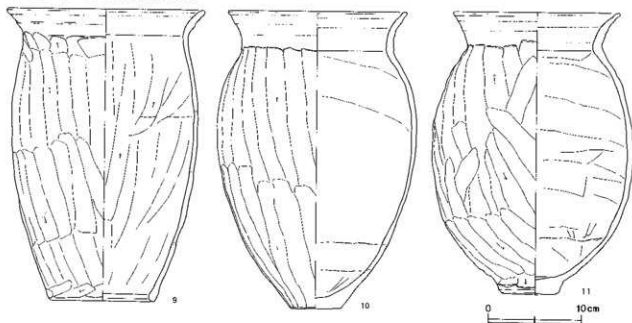
第13図 第72号住居跡カマド



第14図 第72号住居跡出土遺物(1)



第15図 第72号住居跡出土遺物(2)



第72号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.7)			ACE	3	橙褐色	20	
2	環	(12.5)			ACDE	3	淡褐色	40	
3	環	(12.6)			ACDE	3	淡橙褐色	40	
4	環	12.4	5.0		ACE	2	明赤褐色	60	
5	高環	14.7	10.4	9.1	ACDEK	3	赤褐色	100	赤彩
6	高環	15.4			ACDEK	3	赤褐色	80	赤彩
7	甕	18.5	12.7	5.4	ACDEK	3	暗赤褐色	90	
8	甕	12.3	14.8	5.4	ACDEK	4	淡橙褐色	100	
9	甕	(21.0)	31.0	(11.0)	ACDE	3	淡灰褐色	20	
10	甕	18.8	31.5	5.5	ACDEK	3	橙褐色	70	
11	甕	17.6	30.0	5.5	ACDEK	3	淡橙褐色	100	布圧痕

第74号住居跡 (第16・17図)

第74号住居跡は、T-8、U-8・9グリッドから検出した。

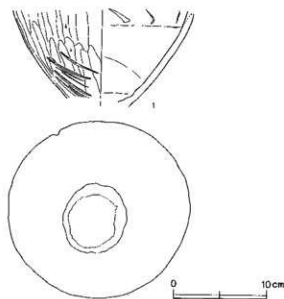
住居跡の南側は調査区外のため、検出できなかった。

住居跡は、確認面では壁溝の底跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-40°-Wであった。規模は主軸長4.8m、副軸長不明であった。

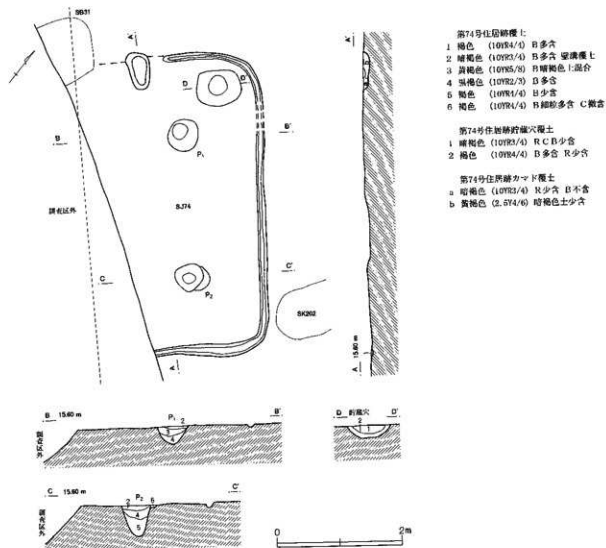
壁は不明瞭であり、北側からカマドの痕跡が検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も不明瞭で、壁溝は全周していたと考えられた。柱穴は2本が明瞭に検出できた。住居跡は、SB-31と重複していた。重複関係は、SB-31に切られていた。

実測可能な遺物として、第16図1の上師器甕を検出した。この甕は、甕の底部を打ち欠いて穿孔し、転用した物であるとと考えられた。

第16図 第74号住居跡出土遺物



第17図 第74号住居跡



第74号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕				ACDEHK	3	淡橙褐色	30	転用甕?

第78号住居跡 (第18・19図)

第78号住居跡は、T-7グリッドから検出した。

住居跡の南側は調査区外のため、東側はSJ-72による攪乱のため、西側はSJ-62による攪乱のために検出できなかった。したがって覆土の大半は、重複した住居の攪乱によって失われており、わずかにSJ-62とSJ-72の間の部分だけが、50cm程度残存していた。形態は方形と想定でき、主軸方位はS-50°-Eと考えられた。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ50cm程度であった。

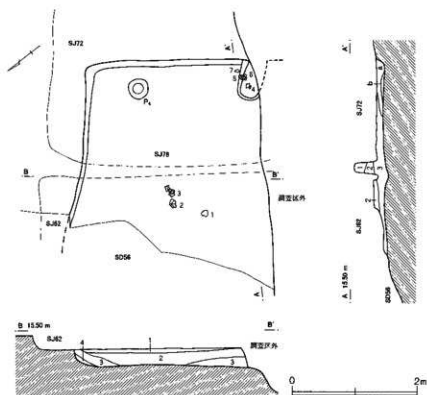
壁は明瞭であり、南側からカマドの痕跡が検出でき

た。カマド内からは、甕の破片が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴は1本のみが検出できた。

P1・P2は調査区外のために検出できなかった。P3は、SD-56、SJ-62による攪乱のために検出できなかった。唯一検出できたP4についても、位置が南東側の壁に寄りすぎており、当該遺構の柱穴であるか明瞭にはできなかった。

住居跡は、SJ-62・72、SD-56と重複していた。重複関係は、SJ-62・72、SD-56に切られていた。

第18図 第78号住居跡



- 第78号住居跡土
- 1 黄褐色 (10TR6/4) R 含
 - 2 黄褐色 (10TR4/3) R 含 シルト粒多含
 - 3 黒褐色 (10TR3/2) R 含 シルト粒含
 - 4 黄褐色 (10TR5/6) R 少含 ややシルト質
- 第78号住居跡カド層土
- a 明赤褐色 (2.5YR5/8) R 含 M 少含
 - b 灰色 (5Y4/1) R 少含 M 多含

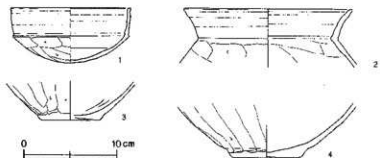
遺構の確認段階で、SJ-78はSJ-62・72との重複が認められ、かつ、これより古いことが明瞭であったの

で、SJ-62・72を先行して調査し、完掘した後に当該住居跡の調査を行った。

このような経緯から調査時にSJ-78出土として取り上げ、岡阪に掲載した遺物の中にも、SJ-62・72に帰属するものが混入している可能性が高いと考えられた。

実測可能な遺物として、土師器環

第19図 第78号住居跡出土遺物



第78号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	12.7	5.8		ACDE	3	橙褐色	50	
2	甕	17.9			ACDEHK	3	暗赤褐色	10	
3	甕			(6.2)	ACDEK	4	黒褐色	10	
4	甕			7.4	ACDEHK	4	暗赤褐色	10	

第85号住居跡 (第20図)

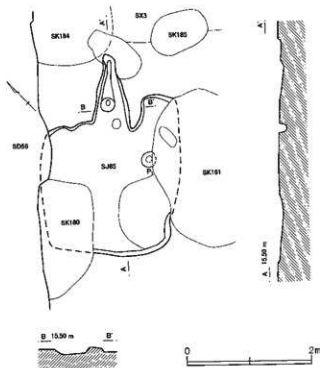
第85号住居跡は、R-9グリッドから検出した。

住居跡の東側はSK-181による擾乱のために、西側はSD-56による擾乱のために、南側の一部はSK-180

による擾乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では痕跡程度しか残存していなかった。

形態は方形と想定でき、主軸方位はN-44°-Eと考えられた。規模は主軸長2.0m、副軸長2.2m、深さ10cm

第20図 第85号住居跡



程度であった。

壁はやや不明瞭であったが、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面はやや不明瞭で、壁溝は検出できなかった。柱穴は1本のみ検出

できた。ただし、当該遺構のような小形の住居跡では、一般的に柱穴が検出できないことが多いので、P1としたものは柱穴ではなく、重複していたピットの可能性も考えられた。P2・P3は攪乱のために検出できなかった可能性も考えられるが、床面の精査にも関わらず、P4が検出できなかったことから、柱穴が存在しないか、あるいは、遺存しない形態も想定できた。

当該遺構は、他の住居跡に比べて非常に小形であるが、カマドが明瞭に検出できたことから、住居跡と判断した。

住居跡は、SD-56、SK-180・181と重複していた。重複関係は、SD-56、SK-180・181に切られていた。実測可能な遺物は、検出できなかった。

第90号住居跡 (第21~23図)

第90号住居跡は、U-9・10、V-9グリッドから検出した。形態は方形で主軸方位はN-37°-Eであった。規模は主軸長4.5m、副軸長4.3m、深さ20cm程度であった。

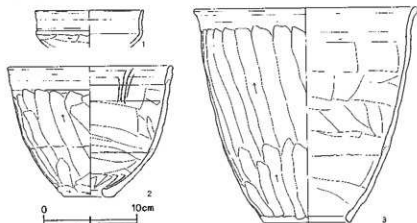
壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは甕が検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は全周していた。柱穴は3本が明瞭に検出できた。住居跡は、SJ-91と重複していた。重複関係は、SJ-91

を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、瓶、砥石、紡錘車などを検出した。

この中で、第21・23図1の環、5の甕はカマド内から、2・3の瓶、4の甕はカマド右側から、6の甕はカマド左側の床面から、それぞれ検出した。

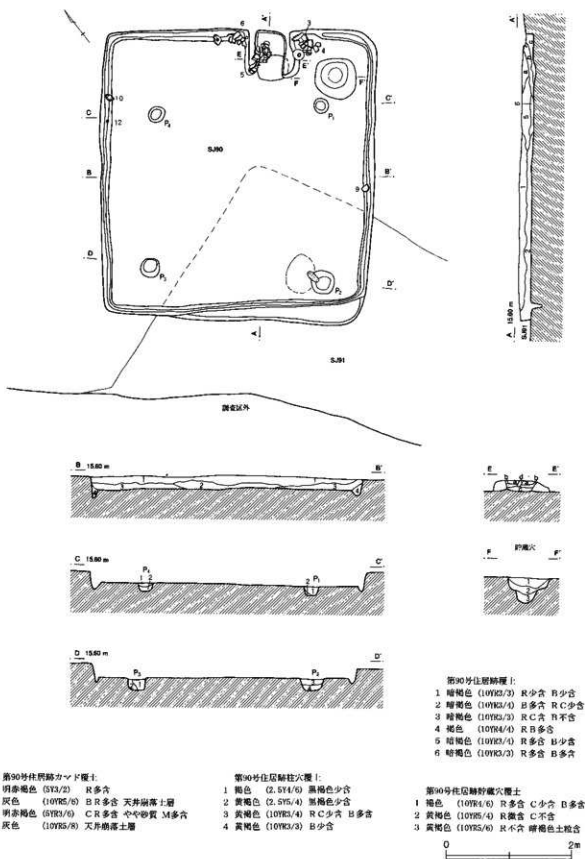
第21図 第90号住居跡出土遺物(1)



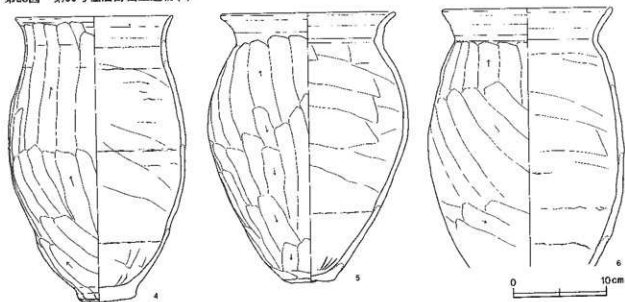
第90号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.5)			ACEF	3	淡橙褐色	20	
2	瓶	17.4	13.8	5.4	ACDEHK	2	淡灰褐色	100	
3	瓶	(23.7)	22.7	(9.2)	ACDEHK	3	淡灰褐色	50	
4	甕	16.7	30.2	6.0	ACDEK	3	赤褐色	90	
5	甕	18.5	28.5	4.5	ACDEHK	3	暗赤褐色	90	
6	甕	18.0			ACDEFK	3	暗赤褐色	50	

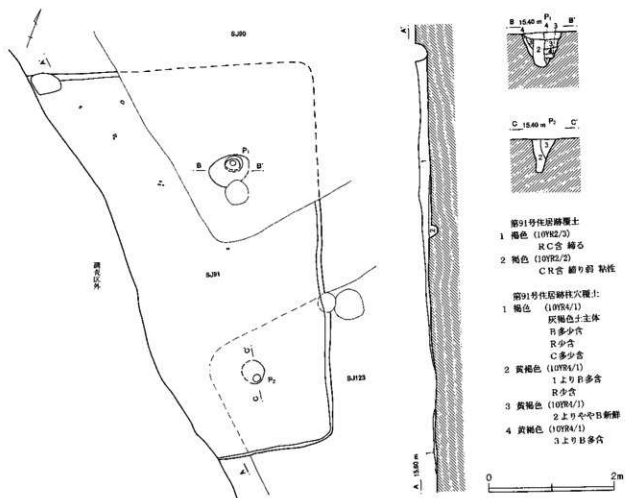
第22图 第90号住居跡



第23図 第90号住居跡出土遺物(2)



第24図 第91号住居跡



第91号住居跡 (第24・25図)

第91号住居跡は、U-9・10、V-9・10グリッドから検出した。

住居跡の西側の壁は調査区外のため、北側のコーナーはSJ-90による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-18°-Wであった。

規模は主軸長6.2m、副軸長不明、深さ20cm程度と考えられた。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴は2本が明瞭に検出できた。P3・P4は、調査区外のために確認できなかった。

第91号住居跡出土遺物観察表

№	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	11.6	4.3		ACDEK	2	黒褐色	80	赤彩
2	甕			(6.9)	ACDEHK	3	赤褐色	10	
3	甕	(18.0)			ACDEHK	2	黒褐色	10	

第100号住居跡 (第26・28図)

第100号住居跡は、S-12・13、T-12・13グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-34°-Wであった。規模は、主軸長4.7m、副軸長4.5m、深さ10cm程度であった。

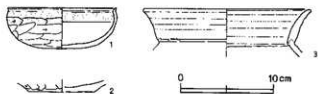
壁はやや不明瞭であり、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面はやや明瞭で、壁溝は北側と西側で不明瞭なもの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴は4本が明瞭に検出できた。

P1-P4は他の住居跡の柱穴と比べると、いずれも浅かった。

住居跡は、SJ-101と入れ子状に重複していた。重複関係は、SJ-101に切られていた。

出土遺物は、土師器環、甕、須恵器環などを検出したが、SJ-101と明瞭な分離ができなかったため、第28図にSJ-100・101出土遺物として掲載した。ただし、その出土位置から考えて、SJ-100に帰属する可能性が高いと考えられた。これら以外にも、砥石と白玉を覆土から取り上げたが、SJ-100に帰属する可能性が高いと考えられた。

第25図 第91号住居跡出土遺物



住居跡は、SJ-90-123と重複していた。重複関係は、SJ-90に切られ、SJ-123を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、鉄製の棒状不明品、土錘などを検出した。

この中で、第25図に掲載した遺物は、全て覆土で取り上げた。

第101号住居跡 (第27・28図)

第101号住居跡は、S-12・13、T-12・13グリッドから検出した。

住居跡の北側のコーナー部分は、調査区外のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-35°-Wであった。規模は主軸長5.6m、副軸長5.5m、深さ20cm程度であった。

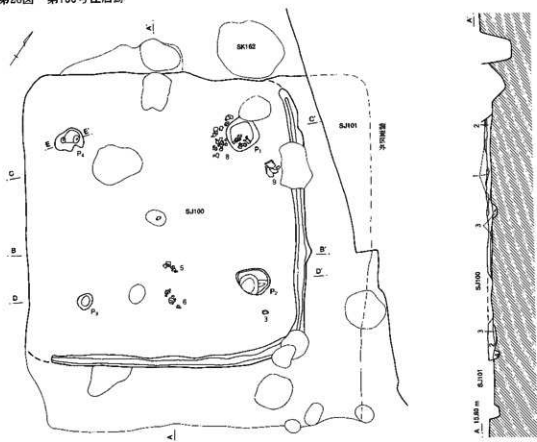
壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は全周していた。柱穴は3本検出できた。

P3については周辺の床面を精査したが、検出することができなかった。掘り方からも、柱穴の底跡は検出できなかった。

住居跡は、SJ-100と入れ子状に重複していた。重複関係は、SJ-101を切っていた。

出土遺物は、SJ-100と明瞭な分離ができなかったため、第28図にSJ-100・101出土遺物として掲載した。ただし、その出土位置から考えて、SJ-100に帰属する可能性が高いと考えられた。これら以外にも、砥石と白玉を覆土から取り上げたが、SJ-100に帰属する可能性が高いと考えられた。

第26図 第100号住居跡



- 第100号住居跡層上
- 1 褐色 (10YR6/8) Bブロック 締り強 粘土
 - 2 褐色 (10YR3/2) 粘質腐植土・B主体 埋め戻し土
 - 3 褐色 (10YR1.7/1) M/C主体 床面中央部降 自然増積
 - 4 褐色 (10YR4/3) SJ-101:4層に同

第100号住居跡柱穴層土

- 1 褐色 (10YR3/2) B/C少含
- 2 褐色 (10YR3/2) 締る B多含 C少含
- 3 褐色 (10YR3/2) 締る B/R少含 C多含
- 4 褐色 (10YR3/3) 締る B/C少含
- 5 褐色 (10YR4/3) 締る B多含 Fe少含
- 6 褐色 (10YR2/3) 締る B/R C微含
- 7 褐色 (10YR3/2) 締る B主体 C微含
- 8 褐色 (10YR4/4) 締る B主体 R C微含
- 9 褐色 (10YR3/3) 締る B主体 微含

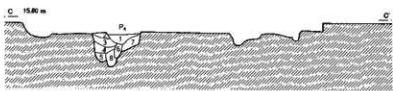
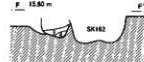
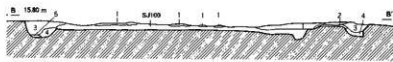
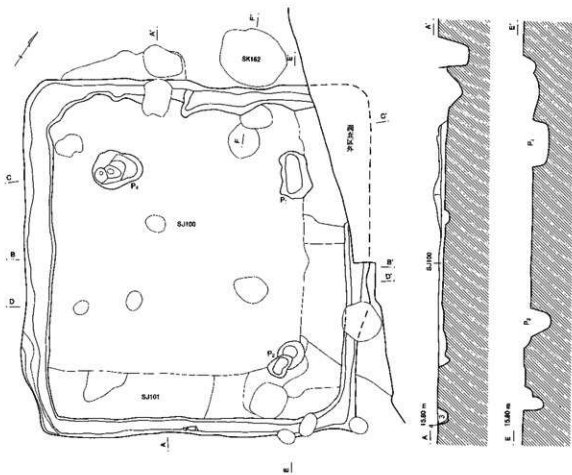
第102号住居跡 (第29・30図)

第102号住居跡は、T-12グリッドから検出した。住居跡の西側の壁はSD-139、SK-209のため、東側のコーナーはSJ-103による攪乱のために、北側の床面は、北東から南西方向にのびる溝状の攪乱によって

検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-62°-Eであった。規模は主軸長3.1m、副軸長3.1m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁

第27図 第101号住居跡



第101号住居跡柱穴層土

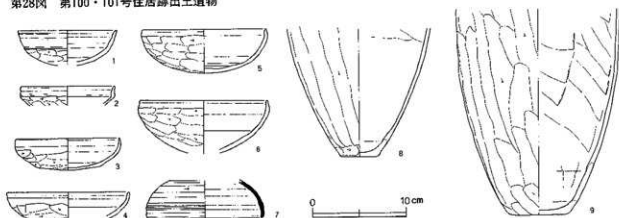
- 1 褐色 (10YR4/3) B少量 R少含 C少含
- 2 褐色 (10YR4/2) 月面状多含 RC微含
- 3 褐色 (10YR3/2) B多含 FeC微含
- 4 褐色 (10YR3/2) B少量 Fe微含

- 5 褐色 (10YR3/1) B少含 Fe微含
- 6 褐色 (10YR2/3) B少量 RC微含
- 7 褐色 (10YR4/4) B多含 RC微含
- 8 褐色 (10YR4/3) B少量 Fe多含

第101号住居跡層土

- 1 褐色 (10YR3/4) B多含
粘性強
RC少含
自然堆積
- 2 褐色 (10YR3/2) 1に同
RC不含有
B多含
自然堆積
- 3 褐色 (10YR3/2) 1に同
RC多含有
自然堆積
- 4 褐色 (10YR3/4) 2に同
凝析膜ブロック多含
自然堆積
- 5 褐色 (10YR7/8) B上体
硬崩落1層

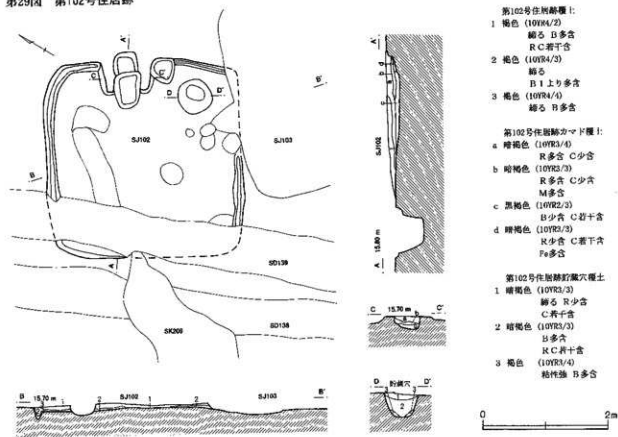
第28図 第100・101号住居跡出土遺物



第100・101号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(10.5)			ACDE	3	灰褐色	30	
2	坏	(10.1)			ACD	3	橙褐色	10	
3	坏	(11.0)	3.3		ACD	3	赤褐色	20	
4	坏	(13.0)			ACDE	3	淡灰褐色	10	
5	坏	(13.2)	4.6		ACK	4	淡橙褐色	50	
6	坏	(13.6)			ACD	4	明赤褐色	40	
7	須恵器 坏	(12.0)			ACK	1	黒色	20	
8	甕			4.0	ACDK	4	橙褐色	20	
9	甕			6.4	ACDEK	3	暗赤褐色	50	

第29図 第102号住居跡



溝は西のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。

柱穴は、床面を精査したが検出できなかった。柱穴に該当する位置からビットが検出できたが、覆土の状況から、柱穴ではないと判断した。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

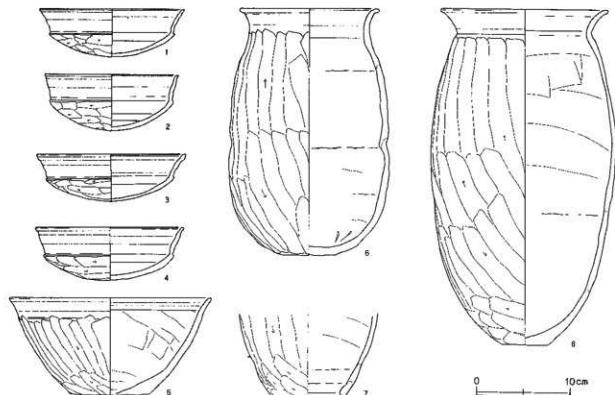
住居跡は、SJ-103、SD-139、SK-209と重複していた。

重複関係は、SJ-103、SD-139、SK-209に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器杯、甕、甗、石製模造品などを検出した。この中で、第30図5・8は貯蔵穴から、4はカマドから、他は覆土中から検出した。

当該遺構は、本遺跡から検出した他の住居跡と比べると、規模が比較的小さく、柱穴も検出できなかったが、カマド、貯蔵穴が明確に検出でき、更に壁溝も全周していたので住居跡と判断した。

第30図 第102号住居跡出土遺物



第102号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	杯	15.4	5.0		ACDEF	3	明赤褐色	90	
2	杯	14.2	5.9		ACE	2	淡褐色	50	
3	杯	15.9	5.0		ACDEF	3	明赤褐色	80	
4	杯	15.8	5.6		ACE	3	橙褐色	80	
5	鉢	(21.5)	10.3	(8.6)	DEF	2	淡褐色	50	
6	甕	(14.8)	26.1	(5.6)	ACDEHK	3	暗赤褐色	50	
7	甗			(7.8)	ACDEFK	2	暗赤褐色	20	
8	甕	(17.7)	35.5	5.0	ACDEFK	3	黒褐色	70	

第103号住居跡 (第31・32図)

第103号住居跡は、T・U-12グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-47°-Wであった。規模は主軸長3.1m、副軸長3.1m、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマドの袖は、両側とも検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は全周しており、東コーナーで一部螺旋状に重複していた。この東側

コーナー部分での壁溝の螺旋状の重複については、壁溝の機能から考えて、螺旋状に重複した構造であるとは考えがたいので、発掘時に掘り方を壁溝と誤認した可能性も考えられた。

床面を精査したが、柱穴を検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-102・104、SB-54と重複していた。

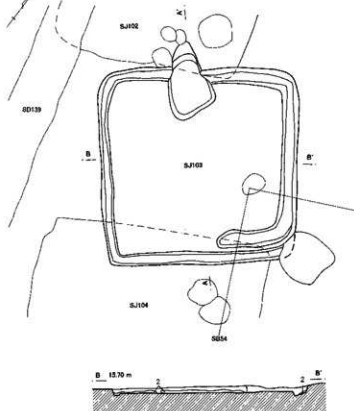
重複関係は、SJ-102・104を切っていた。

実測可能な遺物として土師器環、甕などを検出した。

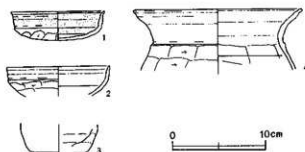
この中で、第31図に示した遺物は、全て覆土から検出した。

本住居跡も、前述の SJ-102同様に、他の住居跡と比

第32図 第103号住居跡



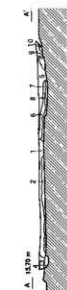
第31図 第103号住居跡出土遺物



べると比較的小規模で、柱穴が検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかったが、SJ-102同様にカマドや壁溝の存在から住居跡であると判断した。ただし、上屋構造その他の点で、他の一般的な住居跡とは異なった構造を持つと考えられた。

第103号住居跡覆土

- 1 褐色 (10YR2/3) 締る B 多少含 R 若干含
- 2 褐色 (10YR3/2) 締る B 多含
- 3 褐色 (10YR3/3) 締る B 多含 R C 含
- 4 褐色 (10YR2/4) 締る B 多含 R 多含
- 5 褐色 (10YR3/3) 締る R 含 B C 多含
- 6 褐色 (10YR4/2) 締る B C 多含 M 多含
- 7 褐色 (10YR5/4) 締る B 多含 R 若干含
- 8 褐色 (10YR4/4) 締る B 多含 R C 多含
- 9 褐色 (10YR4/4) 締る R 多含
- 10 褐色 (10YR4/3) 締る R 含 CM 若干含



第103号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.0)	3.1		ACDEF	2	赤褐色	20	赤彩
2	環	(10.9)			ACEF	4	橙褐色	10	
3	甕			(6.1)	ACDEK	2	淡橙褐色	10	
4	甕	(17.9)			ACD	3	暗赤褐色	10	

第104号住居跡 (第33・34図)

第104号住居跡は、T-12、U-12・13グリッドから検出した。

住居跡の北側は、SJ-103による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-32°-Wであった。規模は主軸長3.2m、副軸長3.7m、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。ともに、SJ-103の擾乱によって検出できなかったと考えられた。床面は明瞭で、壁溝は北側のコーナー付近から東側の壁にかけてと、南

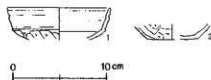
側のコーナー付近から東西の壁にかけて検出できた。

柱穴は、床面を精査したが、検出できなかった。

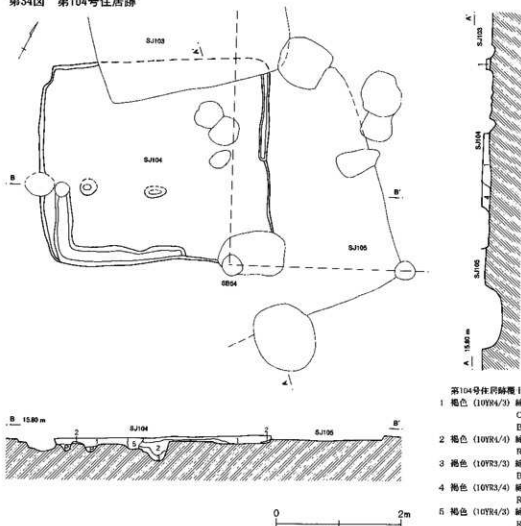
住居跡は、SJ-103・105、SB-54と重複していた。重複関係は、SJ-103、SB-54に切れ、SJ-105を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、石製模造品などを覆土中から検出した。

第33図 第104号住居跡出土遺物



第34図 第104号住居跡



第104号住居跡層上

- 1 褐色 (10YR4/3) 締り肌 R含
C若干含
B若干含
- 2 褐色 (10YR4/4) 締り肌 日多少含
R若干含
- 3 褐色 (10YR3/3) 締る 粘性
B多少 R若干含
- 4 褐色 (10YR3/4) 締る B多含
RC多含
- 5 褐色 (10YR4/3) 締る B多少含
RC多含

第104号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.9)			ACD	2	黒褐色	20	
2	甕			(5.4)	ACDF	3	黒褐色	10	

第105号住居跡 (第35図)

第105号住居跡は、T-12・13、U-12・13グリッドから検出した。

住居跡の西側はSJ-103・104による攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で主軸方位はN-40°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ5

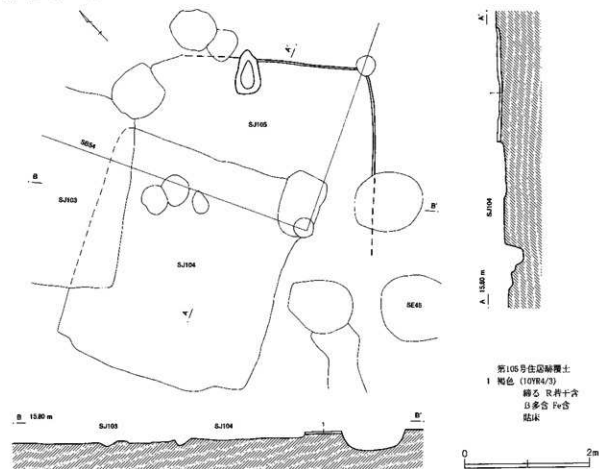
cm程度であった。

壁はやや明瞭であり、北側からカマドの痕跡が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面はやや不明瞭で、壁溝や柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-103・104、SB-54と重複していた。重複関係はSJ-104、SB-54に切られ、SJ-103を切っていた。

実測可能な遺物は検出できなかった。

第35図 第105号住居跡



第106号住居跡 (第36・37図)

第106号住居跡は、T-11グリッドから検出した。

住居跡の南西側のコーナーはSJ-107、SD-67、中世墓塚の内堀による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-6°-Wであった。規模は主軸長5.1m、副軸長5.2m、深さ15cm程度であった。

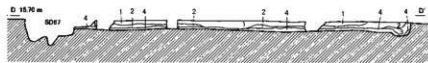
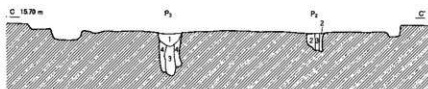
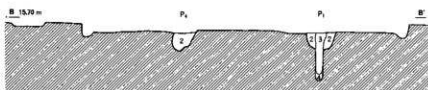
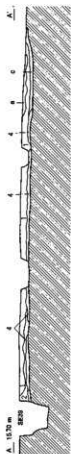
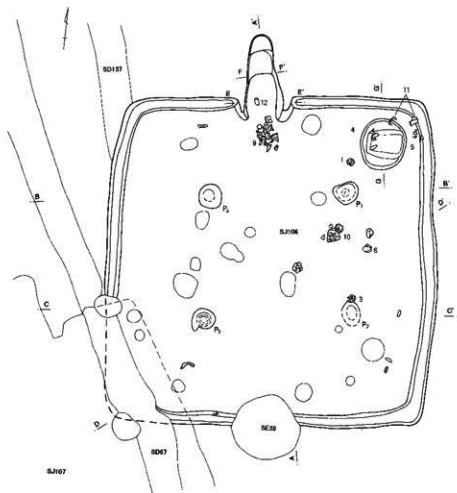
壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚が検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出し、覆土内から壁の破片が検出できた。床

面も明瞭で、壁溝は全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-107、SD-67、SE-39、中世墓塚の内堀と重複していた。重複関係はSD-67、中世墓塚の内堀に切られ、SJ-107を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甑、支脚などを検出した。この中で、第37図9の甕と12の支脚はカマド周辺から、1・4・5の環と11の甕は貯蔵穴周辺から、3の環と8の甕は床面から検出した。

第36図 第106号住居跡



第106号住居跡層土

- 1 褐色 (10YR3/4) 締り 多穴 R少含
- 2 褐色 (10YR4/3) 締り 多穴 R少含
C若干含
- 3 褐色 (10YR3/2) 締り 多穴 R少含
RC若干含
- 4 褐色 (10YR4/4) 締り 多穴 R若干含

第106号住居跡カマド層土

- a 褐色 (10YR3/2) 締り 多穴
RC若干含む
- b 褐色 (10YR3/2) 締り弱 R多含
壺天井崩落土
- c 褐色 (10YR4/2) 締り弱 R少含 M多含
C少含
- d 褐色 (10YR2/2) 締り 多穴 C若干含

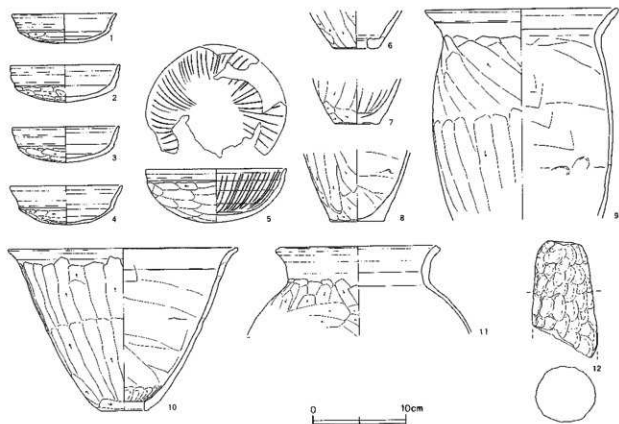
第106号住居跡貯蔵穴層土

- 1 褐色 (10YR3/4) 締り 多穴 R少含
- 2 褐色 (10YR3/2) 締り 多穴
RC若干含
- 3 褐色 (10YR3/4) 締り C若干含
- 4 褐色 (10YR3/3) 締り弱 多穴
RC若干含

第106号住居跡柱穴層土

- 1 褐色 (10YR3/4) 締り弱 R多含
- 2 褐色 (10YR2/3) 腐植土 多穴 R融含
充填土
- 3 褐色 (10YR3/3) 締り無 柱頭
- 4 褐色 (10YR5/3) 締り 灰色粘土質
板固め

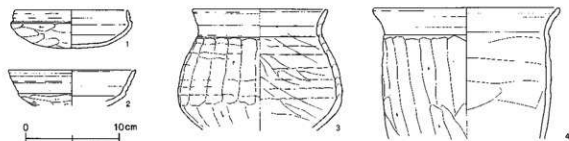
第37图 第106号住居跡出土遺物



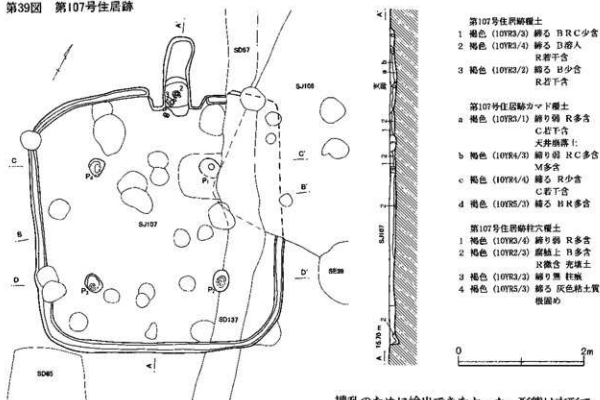
第106号住居跡出土遺物觀察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	烧成	色调	残存率/%	備考
1	环	11.1	3.1		ACDFK	3	黑褐色	90	
2	环	11.6	4.0		ACDF	2	暗赤褐色	90	
3	环	11.4	3.8		ACDF	2	赤褐色	50	
4	环	12.0	4.1		ACDEF	3	淡灰褐色	60	
5	环	15.0	5.6		ACDEF	3	赤褐色	50	暗文
6	甌			5.0	ACDEF	2	黑褐色	10	
7	甌			4.8	ACDE	2	黑褐色	10	
8	甌			5.9	ACDE	3	黑褐色	20	
9	甌	20.6			ACDEK	3	赤褐色	80	
10	甌	(24.4)	17.2	5.1	ACDEFK	3	赤褐色	50	
11	甌	17.6			ACEK	3	淡灰褐色	20	
12	支脚				ACDE	4	淡灰褐色		

第38图 第107号住居跡出土遺物



第39図 第107号住居跡



擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位は、N-28°-Wであった。規模は主軸長4.2m、副軸長3.9m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは甕の破片が検出できた。貯藏穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。P4は他の柱穴に比べてやや浅かったが、柱痕が明瞭に検出できたので柱穴と判断した。

住居跡は、SJ-106、SD-67・137と重複していた。重複関係は、SJ-106、SD-67に切られていた。

実測可能な遺物として土師器環、甕などを検出した。この中で、第38図2の環と3の甕はカマド内から、1の環と、4の甕は覆土から検出した。

出土遺物の中で3の甕は、形態が下膨れで外面に積み上げ痕を顕著に残す特徴的な個体であった。

第107号住居跡 (第38・39図)

第107号住居跡は、T・U-11グリッドから検出した。住居跡の北側のコーナーはSJ-106、SD-67による

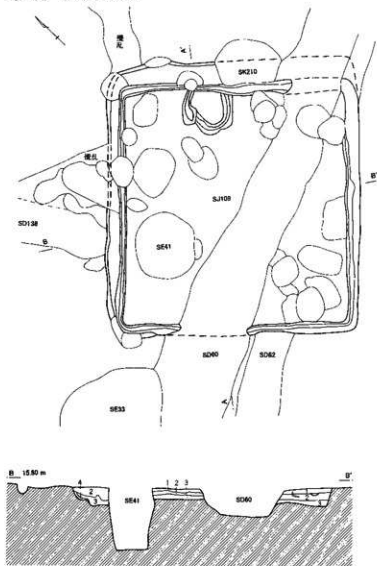
第107号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.0)	4.0		ACDF	3	赤褐色	30	
2	環	(13.5)			ACDF	3	黒褐色	50	
3	甕	(14.3)			ACDEFHK	3	暗赤褐色	40	
4	甕	(19.8)			ACDEFK	3	暗赤褐色	30	

蔵穴も検出できなかった。床面はやや不明瞭で、壁溝は西側以外で検出できた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。検出した柱穴の中で、P1・P4は、他の柱穴に比べてやや浅かったが、柱痕が認められた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を

第42図 第109号住居跡



第109号住居跡 (第42・43図)

第109号住居跡は、U-12・13、V-12・13グリッドから検出した。

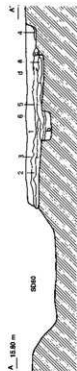
住居跡の西側の壁の一部と、東側のコーナーはSD-60・62による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-47°-Eであった。規模は主軸長4.3m、副軸長4.0m、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯

示していた。

住居跡は、SJ-110、SB-54と重複していた。重複関係は、不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甌などを検出した。図示した遺物は、全て覆土から検出した。



第109号住居跡層上:

- 1 褐色 (109R2/3) 締る 粘性有 頁石多含
- 2 褐色 (109R2/3) 1に同 R含 B多含
- 3 褐色 (109R3/4) B多含 K平含
- 4 褐色 (109R4/6) B主体 壁・底の溜化層
- 5 褐色 (109R3/3) 2・3の中間的層 B R多含
- 6 褐色 (109R4/6) B主体 締る 忌床

第109号住居跡カマド層上:

- a 褐色 (109R2/3) 締る B多含 カマド構縁土崩感弱
- b 褐色 (109R3/2) R M含 カマド灰かさ出し層
- c 褐色 (109R3/4) 1に同じ 締る カマド軸
- d 褐色 (109R4/1) カマド灰層 R少含

0 2m

蔵穴は検出できなかった。床面も明瞭で、壁溝は全周していた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SD-60・62・138、SK-210、SE-41と重複していた。重複関係は、SD-60・62に切られていた。

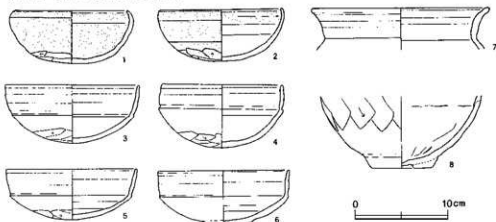
実測可能な遺物として、土師器環、甕、甌、磁石などを検出した。

出土遺物を瞥見すると、甕の資料には恵まれなかつ

たもの、環類は模倣
 環出現期の良好
 な資料で、いずれも
 完形品であり、おお
 よそ三つの類型か
 ら成り立っていた。

この中で、第43図
 に示した遺物は、全
 て床面直上から検
 出した。

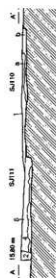
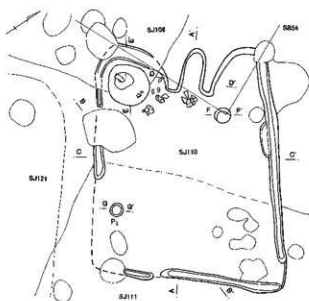
第43図 第109号住居跡出土遺物



第109号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	12.2	5.6		ACDEF	2	赤褐色	60	赤彩
2	環	(13.0)	5.5		ACDEFHK	2	赤褐色	80	赤彩
3	環	14.2	6.2		ACDEF	3	明赤褐色	90	
4	環	12.8	6.7		ACDEF	2	橙褐色	70	
5	環	13.9	5.4		ACDEF	3	淡褐色	100	
6	環	13.9	5.6		ACDEF	3	赤褐色	80	
7	壺	(18.9)			ACDEFHK	2	淡灰褐色	10	
8	壺			6.4	ACDEFK	3	黒褐色	20	

第44図 第110号住居跡



第110号住居跡層上:

- 1 褐色 (10YR3/3) R C 微含 粘性强 4層境界Aa-B含
- 2 褐色 (10YR2/2) B 主体 R 微含
- 3 褐色 (10YR4/6) B 主体 軟化層
- 4 褐色 (10YR2/2) B 多含 締り強 R 微含
- 5 褐色 (10YR3/4) 4に同 B 多含
- 6 褐色 (10YR1/6) B 主体

第110号住居跡カマド層上:

- a 褐色 (10YR2/3) B 少含 M 多含
- b 赤褐色 (2.5YR5/6) R 主体 カマド 壁天井層上
- c 褐色 (10YR2/3) 1に同 R 少含 粘性强

第110号住居跡燻灰層土:

- 1 褐色 (10YR3/3) S/110-1に同
- 2 褐色 (10YR2/3) B 多含 R C 微含
- 3 褐色 (10YR2/2) B 多含 R 少含 C 微含
- 4 褐色 (10YR2/3) 3に同 R C 遺物不含
- 5 褐色 (10YR3/3) B 主体 締り強 粘性强



第110号住居跡 (第44・45図)

第110号住居跡は、T-13・14、U-13グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-57°-Wであった。規模は主軸長3.8m、副軸長2.9m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出し、覆土内から甕の破片が検出できた。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は1本検出できた。P1はSB-54のP3と重複していたと考えられた。

住居跡は、SJ-108・111、SB-54と重複していた。重複

関係は、SJ-111を切り、SJ-108とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器甕の口縁部と底部を検出した。この中で、第45図1は貯蔵穴から、2は覆土からそれぞれ検出した。

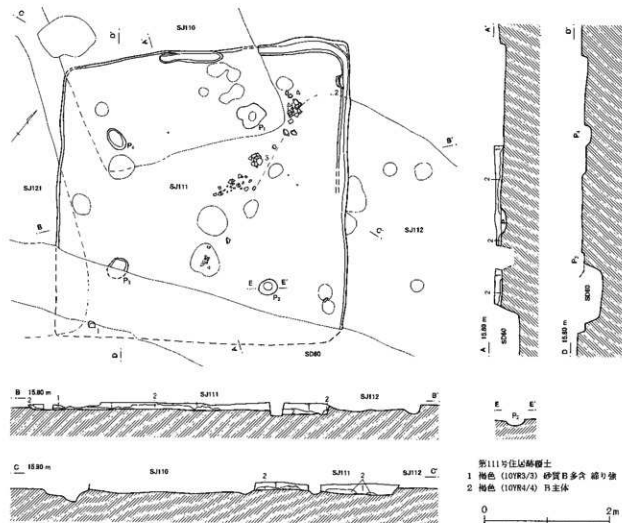
第45図 第110号住居跡出土遺物



第110号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕	(20.5)			ACDEFK	2	黒褐色	30	
2	甕			7.7	ACDEFHK	2	黒褐色	10	

第46図 第111号住居跡



第111号住居跡層土
1 褐色 (10YR5/3) 砂質白多穴 盛り強
2 褐色 (10YR4/4) 片主体

第111号住居跡 (第46・47図)

第111号住居跡は、T-13-14、U-13-14グリッドから検出した。

住居跡の南側の壁は、SD-60のために検出できなかった。形態は方形で主軸方位はN-49°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長4.6m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北コーナーで検出できた。柱穴も4本検出できたが、検出した柱穴はいずれも浅く、配置も台形状の配列となっており、柱穴ではなく、住居と重複関係にあるピットの可能性も考えられた。

住居跡は、SJ-110・112・121、SD-60と重複していた。重複関係は、SJ-112・121を切り、SJ-110とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甌、砥石などを検出した。

第111号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	11.9	5.0		ACDEF	3	橙褐色	90	
2	甕	(24.6)			ACDEFK	2	淡橙褐色	20	
3	甌			8.4	ACDEFHK	3	黒褐色	30	

第112号住居跡 (第48・49図)

第112号住居跡は、T・U-14グリッドから検出した。

住居跡の西側は、SJ-111、SD-60による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で主軸方位はN-87°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長4.9m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出し、覆土内から甕の破片が検出できた。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。

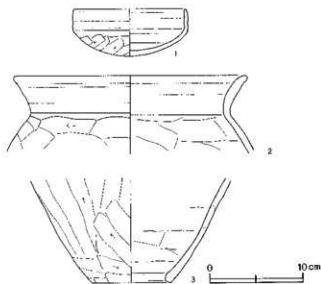
住居跡は、SJ-111・131、SD-60・142と重複していた。重複関係は、SJ-111、SD-60・142に切られ、SJ-131とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器甕を検出した。

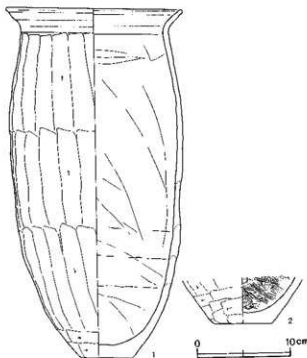
この中で、第48図1の甕は貯蔵穴の周辺から、2の甕は貯穴内から検出した。

この中で、第47図1の環は南側コーナーから、2の甕は北側コーナーから、3の甌は中央やや北よりの床面直上から、それぞれ検出した。遺物は、床面上で南北方向に並んだように出土していた。

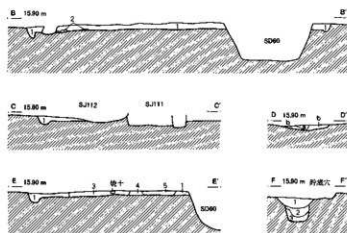
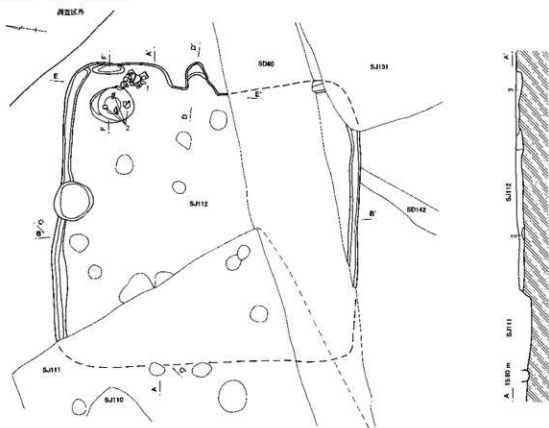
第47図 第111号住居跡出土遺物



第48図 第112号住居跡出土遺物



第49図 第112号住居跡



第112号住居跡層土

- 1 褐色 (10YR5/3) R多含 灰少含
粘性强 カマド跡
- 2 褐色 (10YR4/6) R主体 灰溶軟化層
- 3 褐色 (10YR4/3) R主体 灰凝 灰多含
- 4 褐色 (10YR3/3) 3間 R附混多含
色調明 R減
- 5 褐色 (10YR4/3) 344
カマド天井崩落土多含

第111号住居跡カマド層土

- a 褐色 (10YR4/3) D主体 附混
R多含
- b 褐色 (10YR4/3) 3間
カマド天井崩落土多含



第112号住居跡出土遺物観察表

Na	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕	(18.6)	36.9	(5.3)	ACDEFK	3	暗赤褐色	70	
2	甕			6.2	ACDEFK	2	暗赤褐色	10	

第118号住居跡 (第50・51図)

第118号住居跡は、T・U-10グリッドから検出した。形態は方形で、主軸方位はN-48°-Wであった。規模は主軸長4.4m、副軸長4.5m、深さ10cm程度であった。壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。

貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は東壁以外で検出できた。

柱穴は床面を精査したが、検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を

示していた。

住居跡は、SJ-119・120・128、SD-38・66、SB-43と重複していた。重複関係は、SJ-119、SD-38・66に切られていた。

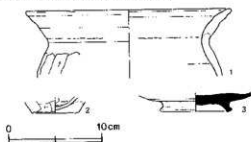
実測可能な遺物として、土師器甕、須恵器坏、砥石などを検出した。住居跡中央と、南側コーナー付近からまもって甕の破片を検出したが、実測可能な程度には復元できなかった。

この中で、第50図1の甕は北東側の壁際から、2の甕は覆土中から、3の須恵器高台付坏は南側の床面からそれぞれ検出した。

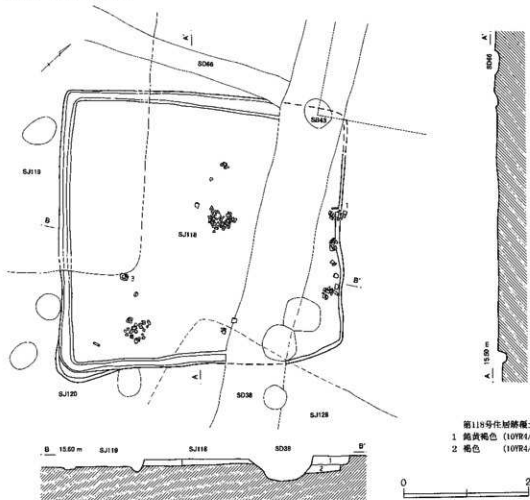
住居跡の北東側の壁は壁溝の痕跡が弱く、更に甕などの遺物破片が多く検出できたことなどから、この部分にカマドが存在した可能性が考えられた。

なお、覆土第2層は掘り方充塞土層と考えられた。

第50図 第118号住居跡出土遺物



第51図 第118号住居跡



第118号住居跡覆土
1 黄褐色 (10PR4/2) R倉 B倉
2 褐色 (10PR4/0) B上床

第118号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕	(21.9)			ACDEFHK	3	淡灰褐色	10	
2	甕			(5.0)	ACDF	3	淡灰褐色	10	
3	須恵器高台			7.3	ACDIK	1	青白色	20	

第119号住居跡 (第52・53図)

第119号住居跡は、T・9・10、U・9・10グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-45°-Wであった。規模は主軸長5.3m、副軸長5.3m、深さ10cm程度であった。

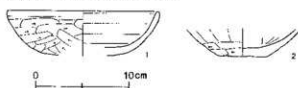
壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は全周していた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-118・120、SD-66、SK-247・250と

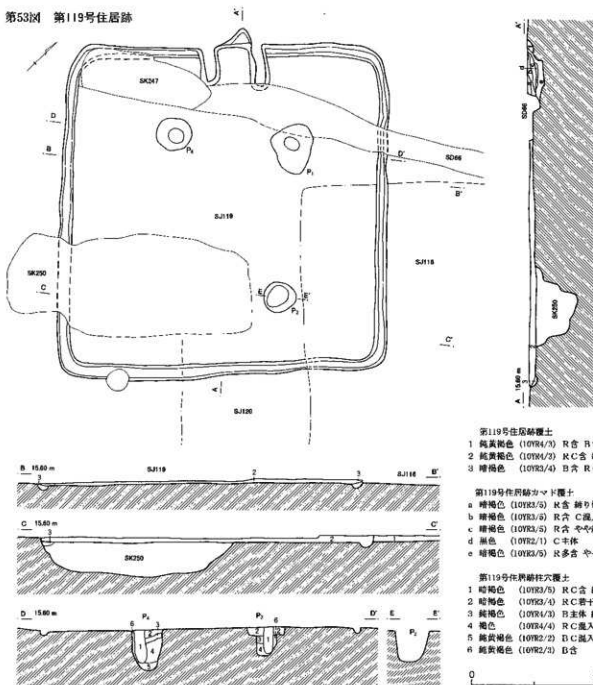
重複していた。重複関係は、SD-66に切られ、SJ-118・120、SK-250を切り、SK-247とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器杯、甕を覆土から検出した。

第52図 第119号住居跡出土遺物



第53図 第119号住居跡



第119号住居跡覆土

- 1 純黄土色 (10YR4/7) R含 片含
- 2 純黄土色 (10YR4/7) R.C含 餅り餅
- 3 暗褐色 (10YR3/4) B含 R.C含

第119号住居跡カマド覆土

- a 暗褐色 (10YR3/5) R.C含 餅り餅
- b 暗褐色 (10YR3/4) R.C含 人
- c 暗褐色 (10YR3/5) R.C含 やや餅る
- d 黒色 (10YR2/1) C中体
- e 暗褐色 (10YR3/5) R.C多含 やや餅る

第119号住居跡柱穴覆土

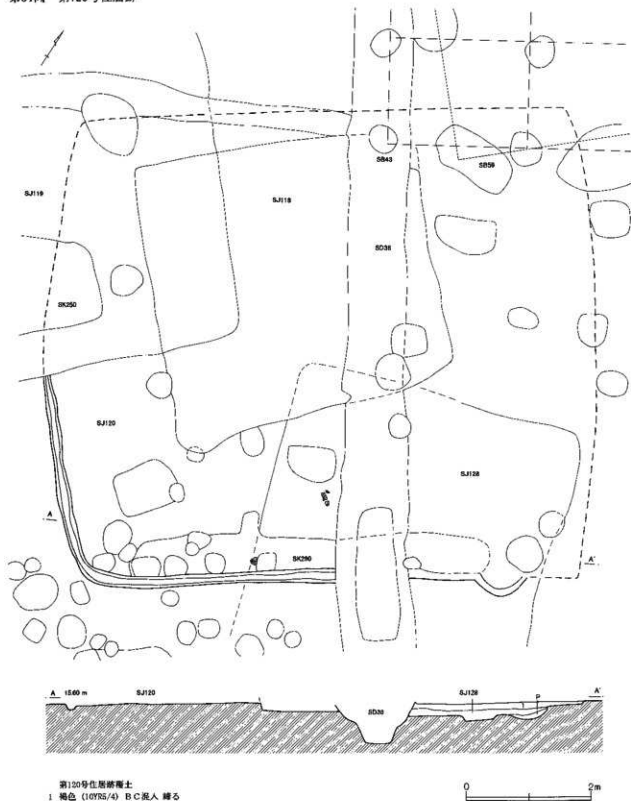
- 1 暗褐色 (10YR3/5) R.C含 餅る
- 2 暗褐色 (10YR3/4) R.C含 餅る
- 3 暗褐色 (10YR3/4) B主体 餅る
- 4 褐色 (10YR4/4) R.C混入 B含
- 5 暗黄褐色 (10YR2/2) D.C混入 餅る
- 6 暗黄褐色 (10YR2/3) B含



第119号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	环	(16.0)			ACDF	2	暗赤褐色	20	
2	甕			5.4	ACDEFHK	3	黒褐色	10	

第54図 第120号住居跡



第120号住居跡 (第54・55図)

第120号住居跡は、T-10・11、U-10・11グリッドから検出した。

住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形と想定でき、主軸方位はN-42°-Wと考えられた。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ5cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭であったが壁溝は全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。

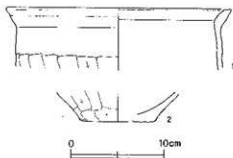
住居跡は、SJ-118・119・128、SD-38、SB-43・59と重複していた。重複関係はSJ-128を切り、SJ-118・119、SD-38、SB-43・59とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器甕、支脚などを検出

した。この中で、第55図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

本住居跡は痕跡程度しか残存していなかったが、規模は非常に大きいと考えられた。ただし擾乱が多かったことから、柱穴や貯蔵穴の痕跡さえも検出できなかった。

第55図 第120号住居跡出土遺物



第120号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕	(23.8)			ACDEFHK	3	淡灰褐色	10	
2	甕			(8.0)	ACDEFHK	3	暗赤褐色	10	

第121号住居跡 (第56・57図)

第121号住居跡は、U-13グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-122による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はS-40°-Eであった。規模は主軸長5.0m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

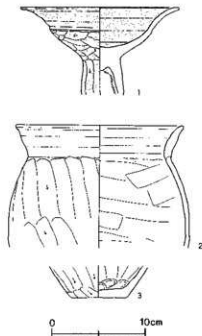
壁は明瞭であり、南側からカマドが検出できた。カマド内からは高環転用支脚が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は2本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-111・122、SD-60と重複していた。重複関係は、SJ-111・122、SD-60に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器甕、高環を検出した。

この中で、第56図1の高環は転用支脚としてカマド内から、他は覆土から検出した。

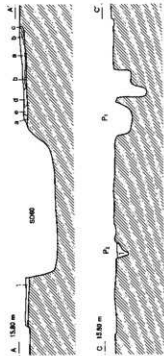
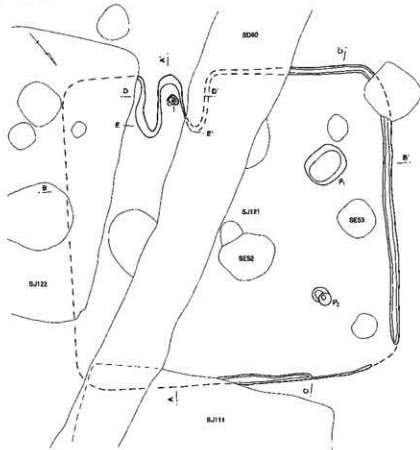
第56図 第121号住居跡出土遺物



第121号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	高環	16.9			ACDEFHK	2	赤褐色	50	赤彩
2	甕	(17.8)			ACDEFK	3	淡灰褐色	10	
3	甕			(5.8)	ACEFK	3	暗赤褐色	10	

第57図 第121号住居跡



第121号住居跡壁土

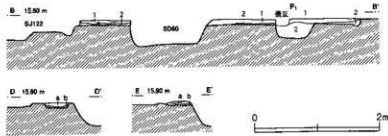
- 1 褐色 (2.5YR5/6) R主体
埋入并崩落土?
- 2 褐色 (10YR3/3) B M主体
M土

第121号住居跡柱穴覆土

- 1 褐色 (10YR4/2) 締り無 MIC土

第121号住居跡カマド覆土

- a 褐色 (10YR2/2) 締り無 貝多含
天井崩落土
- b 褐色 (10YR1/1) 締り無 M土
R土下含
- c 褐色 (10YR4/2) 締り無 貝多含
- d 褐色 (10YR2/2) 締り無 R D若干含
- e 褐色 (10YR2/2) 締り無 貝少含



第122号住居跡 (第58・59図)

第122号住居跡は、U-13・14、V-13グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はS-52°-Eであった。規模は主軸長4.6m、副軸長4.5m、深さ20cm程度であった。

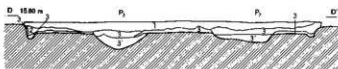
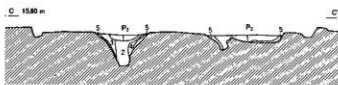
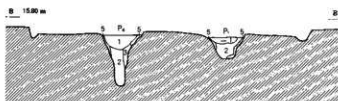
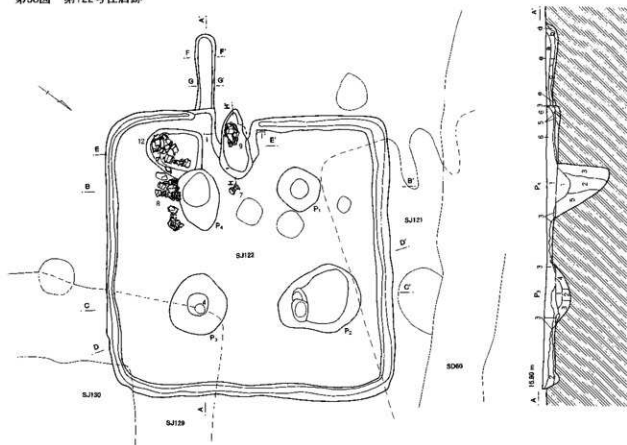
壁は明瞭であり、西側からカマドが二カ所検出できた。向かって右側が本住居跡の居住最終時点でのカマドであり、左側が前者のカマドを構築する以前に使われていた旧カマドであった。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は全周していた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。検出した柱穴の中で、

P1・P2は浅く、特にP2は痕跡程度であったが、配置と覆土の状況から、各々を柱穴と判断した。

住居跡は、SJ-121・129・130・146と重複していた。重複関係は、SJ-121・129・130を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甕、須恵器高環、管玉、石製模造品などを検出した。

この中で、第59図9のハケ目のある甕は、カマドの中から、8の甕は貯蔵穴の手前から、12の甕は貯蔵穴の中から、7の高環はカマドの手前から、10の小形甕は柱穴のP3から、その他の遺物は覆土中からそれぞれ検出した。



第122号住居跡層土

- 1 褐色 (10YR5/3) R少含 C B含
- 2 褐色 (10YR2/3) 大粒B多含 粘性強 R微含
- 3 褐色 (10YR4/6) B上体 床層軟化層
- 4 褐色 (10YR3/4) R多含 新カマド覆上の影響
- 5 褐色 (10YR3/4) 4層に準 R小含
- 6 褐色 (10YR2/2) M含 新カマドより露出 R多含

第122号住居跡柱穴層土

- 1 褐色 (10YR2/3) 大粒B多含 粘性強 R微含
- 2 褐色 (10YR3/3) 1層に同じ B多含 粘性強
- 3 褐色 (10YR2/3) 1層に同じ R少含 粘性強
- 4 褐色 (10YR3/3) 1層に同じ B多含 粘性無
- 5 褐色 (10YR4/6) B上体 床層軟化層

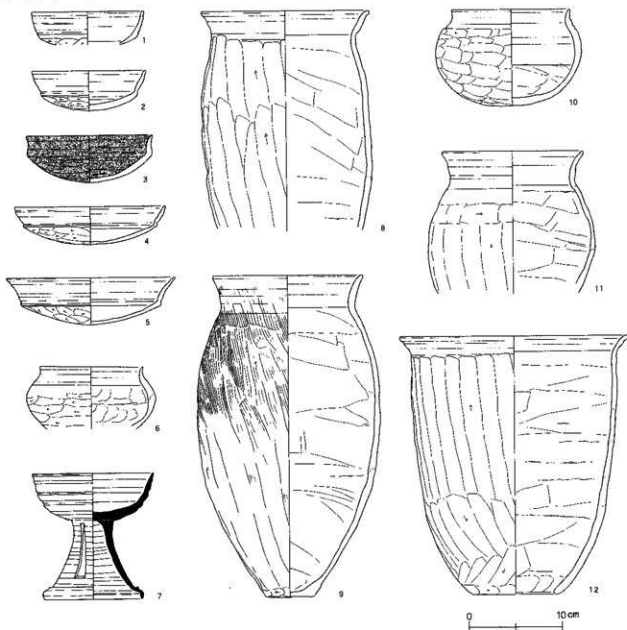
第122号住居跡カマド層土

- a 褐色 (10YR3/3) R B多含
- b 褐色 (10YR3/3) a層に同じ R多含
- c 褐色 (5YR3/6) R上体 天井崩落土
- d 褐色 (5YR4/6) R上体 壁崩落土
- e 褐色 (5YR2/2) M含 R多含

第122号住居跡新カマド層土

- a 褐色 (10YR3/4) R B多含
- b 褐色 (10YR2/2) M含 R C多含
- c 褐色 (10YR3/3) 粘質土 粉状に裂口下に透る突塊
- d 褐色 (10YR4/3) B上体 溶融軟化層
- e 褐色 (10YR4/3) B含 締る

第59圖 第122号住居跡出土遺物



第122号住居跡出土遺物觀察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色调	残存率/%	備考
1	坏	(11.9)			ACDEF	2	赤褐色	20	
2	坏	(12.2)	4.3		ACDF	3	淡灰褐色	40	
3	坏	(13.5)	5.0		ACDEF	3	黑褐色	40	出色处理
4	坏	(16.1)	4.0		ACDEF	3	赤褐色	40	
5	坏	(18.0)	5.0		ACDEF	3	淡褐色	50	
6	碗	(11.0)			ACDEF	2	橙褐色	40	
7	须惠器高环	13.0	13.3	10.4	ACFK	1	青灰色	90	
8	甕	18.0			ACDEFK	3	暗赤褐色	70	
9	甕	(16.0)	34.1	5.0	ACDEFHK	3	黑褐色	60	
10	壺	12.6	10.3		ACDEF	2	橙褐色	100	
11	甕	14.9			ACDEFHK	3	暗赤褐色	70	
12	甕	(24.4)	27.3	9.0	ACDEFHK	3	淡灰褐色	80	

第123号住居跡 (第60・61図)

第123号住居跡は、U-10、V-9・10グリッドから検出した。

住居跡の東側のコーナーはSJ-125による攪乱のために、西側のコーナーはSJ-91のために、カマドはSE-70のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位は、N-44°-Wであった。規模は主軸長4.1m、副軸長4.0m、深さ35cm程度であった。

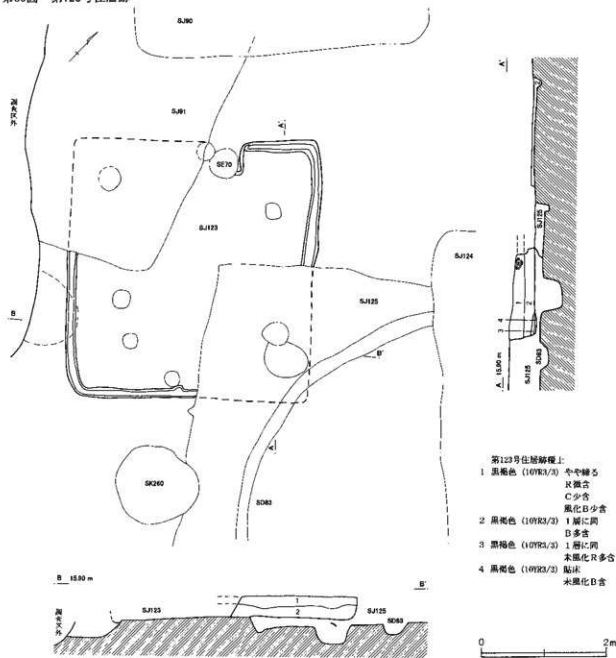
壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯

蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は全周していたと考えられた。柱穴は床面を精査したが、検出できなかった。P 3に相当する位置のピットは、覆土の状況から柱穴ではないと判断した。

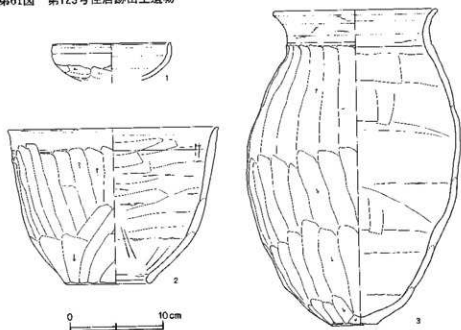
住居跡は、SJ-91・125、SD-83、SE-70と重複していた。重複関係は、SJ-91に切られ、SJ-125を切り、SD-83とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器杯、甕、甌などを壁土中から検出した。

第60図 第123号住居跡



第61図 第123号住居跡出土遺物



第123号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.5)			ACDEF	2	黒褐色	30	
2	甌	22.4	16.5	(8.8)	ACDEFHK	3	暗赤褐色	90	
3	甕	17.3	33.4	4.9	ACDEFK	3	黒褐色	80	

第124号住居跡

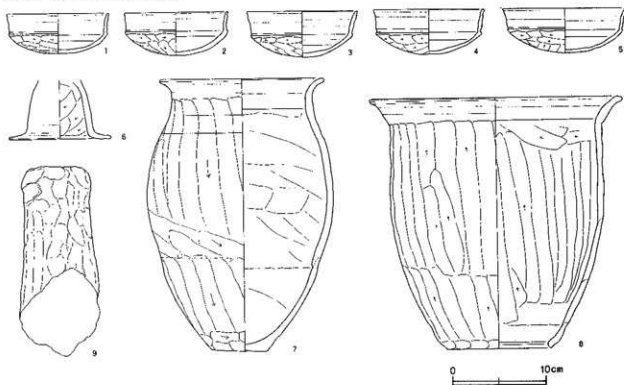
(第62~64図)

第124号住居跡は、U-10-11、V-10-11グリッドから検出した。

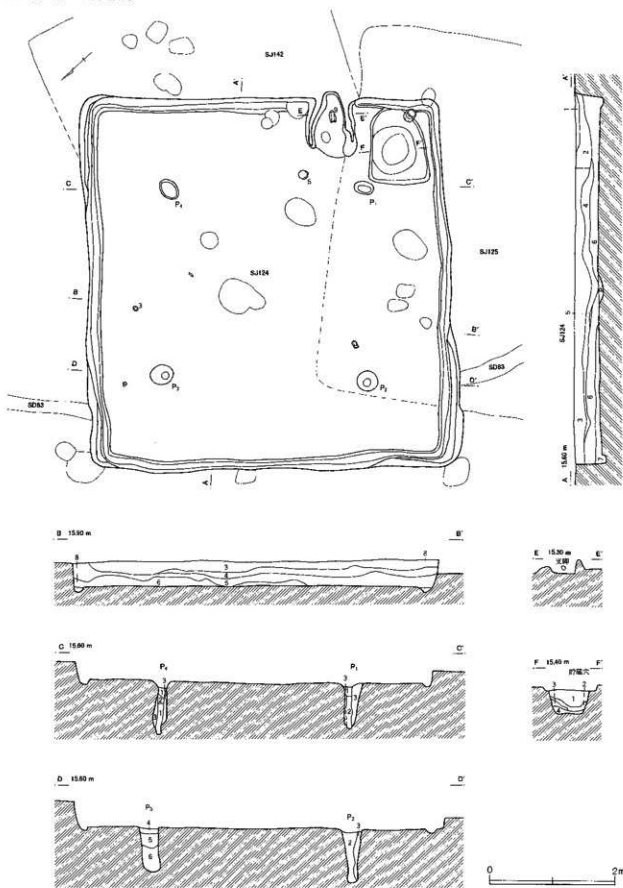
形態は方形で、主軸方位はN-45°-Wであった。規模は主軸長5.9m、副軸長5.8m、深さ40cm程度であった。

壁は明瞭であり、南側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は全周して

第62図 第124号住居跡出土遺物



第63图 第124号住居跡



いた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

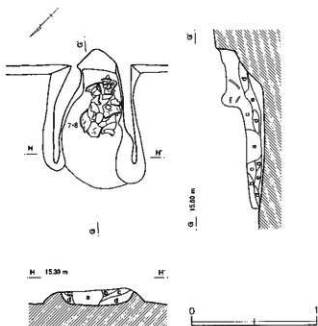
覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-125-142、SD-83と重複していた。重複関係は、SD-83に切られ、SJ-125-142を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甑、高環、支脚、管玉、石製模造品などを検出した。

この中で、第62図3の環は北側床面から、5の環はカマド手前から、7の甕と8の甑はカマド内から、他は覆土からそれぞれ検出した。

第64図 第124号住居跡カマド



第124号住居跡礎上:

- 1 黒褐色 (10793/3) やや粘性有 B多少含 C R不含有
- 2 黒褐色 (10793/3) やや粘性有 1層に同 B粒大漸微
- 3 黒褐色 (10793/3) やや粘性有 R少含 C少含 炭化B粒微含
- 4 黒褐色 (10793/3) やや粘性有 R C微含 炭化B粒多含
- 5 黒褐色 (10793/3) やや粘性有 3層に同 炭化B粒少含
- 6 黄褐色 (10794/6) やや粘性有 4層に同 B少含
- 7 黄褐色 (10794/6) やや粘性有 4層に同 B炭化弱小粒

第124号住居跡貯蔵穴礎上:

- 1 灰褐色 (10791/1) B上層 灰褐色粘土 粘土充填土 部分的整理
- 2 灰褐色粘土 (10792/1) 灰褐色粘土:本体 木質部直積土:葉面なし
- 3 黄褐色 (10795/4) 1層に同 B多含 粘土塊土
- 4 灰褐色 (10795/1) 1層に同 B少含 葉面なし
- 5 灰褐色 (10795/4) 4層に同 B多含
- 6 灰褐色 (10795/6) 4層に同 B多含

第124号住居跡貯蔵穴覆土:

- 1 黄褐色 (10794/4) R C微含 C木炭化微含 B炭化多少含
- 2 黄褐色 (10794/4) R炭化少含 C木炭化微含 B炭化多少含
- 3 黄褐色 (10794/4) R木炭化多少含 C炭化少含 Bやや炭化多少含
- 4 黄褐色 (10795/6) R木炭化微含 C炭化微含 B木炭化多含

第124号住居跡カマド覆土:

- a 灰黄色 (2, 5794/3) 粘質 R木炭化多少含 C木炭化微含
- b 灰黄色 (10795/6) R炭化多含 C不含有
- c 赤色 (2, 5795/9) R炭化多含 C不含有 Bやや炭化多少含
- d 灰黄色 (7, 5794/1) R炭化多少含 C炭化多含 B木炭化多含 M含
- e 灰黄色 (10795/6) R炭化少含 C木炭化少含

第124号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.0)	4.2		ACEF	2	橙褐色	40	
2	環	11.1	4.5		ACDEF	3	淡橙褐色	100	
3	環	11.8	4.8		ACDEFK	3	橙褐色	100	
4	環	(11.8)	4.7		ACDEF	3	橙褐色	50	
5	環	13.2	4.7		ACDF	2	明赤褐色	100	
6	高環			(11.0)	ACDEF	2	明赤褐色	20	
7	甕	(17.5)	28.8	6.0	ACDEFK	3	橙褐色	80	
8	甑	(27.0)	26.7	(11.0)	ACDEFK	3	橙褐色	50	
9	支脚				ACE	4	橙褐色		

第125号住居跡 (第65~67F)

第125号住居跡は、U-10、V-10・11グリッドから検出した。

住居跡の北側のコーナーはSJ-124による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はS-53°-Eであった。規模は主軸長5.8m、副軸長5.9m、深さ50cm程度であった。

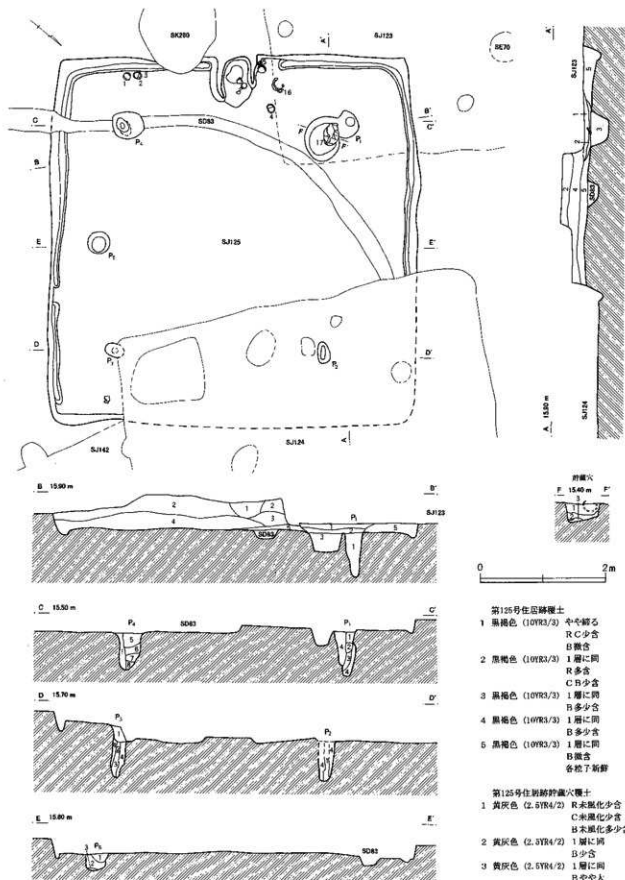
壁は明瞭であり、西側からカマドが検出できた。カマド内からは甕の破片が検出できた。貯蔵穴はカマド

の右側から検出し、覆土内から甕が検出できた。床面も明瞭で壁溝は東コーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本検出できた。

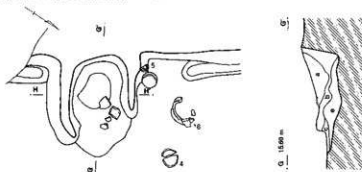
住居跡は、SJ-123・124・142、SD-83、SK-260と重複していた。重複関係は、SJ-123・124、SD-83に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、石製模造品を検出した。この中で、第67図1~3の環はカマド左側から、4・5の環と16の甕はカマド右側から、17の甕は貯蔵穴内から、他は覆土からそれぞれ検出した。

第65図 第125号住居跡



第66図 第125号住居跡カマド



第125号住居跡柱穴概し:

- 1 灰褐色 (10YR4/1) 灰色粘土上体 B未風化多少含 R C未風化少含
- 2 黄褐色 (10YR4/2) 1層に同 1層よりB多含
- 3 黄褐色 (10YR4/3) 黄褐色土上体 粘土粒未風化多含
- 4 灰褐色 (10YR4/1) 灰色粘土半体 D風化多含 R C未風化少含 柱埋設時埋上
- 5 黄褐色 (10YR4/6) B主体 灰色粘土風化多少含 R未風化少含
- 6 黄褐色 (10YR4/6) 5層に同 D多含
- 7 黄褐色 (10YR4/3) 5層に同 更にB多含
- 8 黄褐色 (10YR4/6) 5層に同 最もB多含

H 15.00 m H'

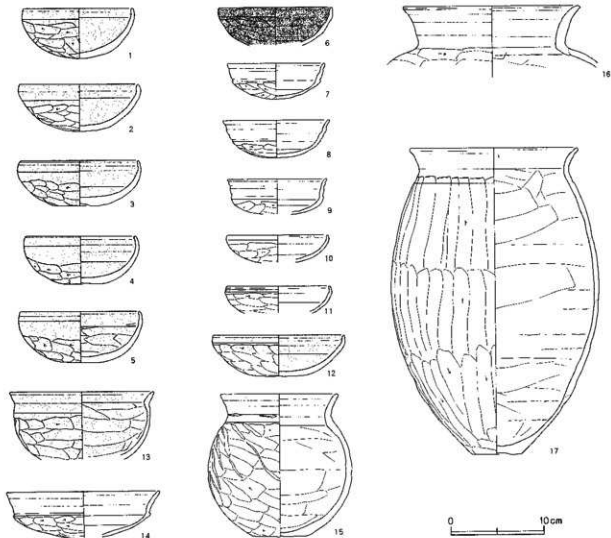


第125号住居跡カマド概し:

- a 黄茶色 (2.5Y3/4) R未風化多少含 C未風化少含 B風化多少含
- b 黒色 (5YR3/4) R未風化多含 C未風化多少含 B小含
- c 灰褐色 (10YR2/1) R未風化多少含 C風化
- d 黄茶色 (2.5Y3/3) 3層に同 R未風化多少
- e 黄茶色 (2.5Y4/3) 3層に同 R少含



第67図 第125号住居跡出土遺物



第125号住居跡出土遺物観察表

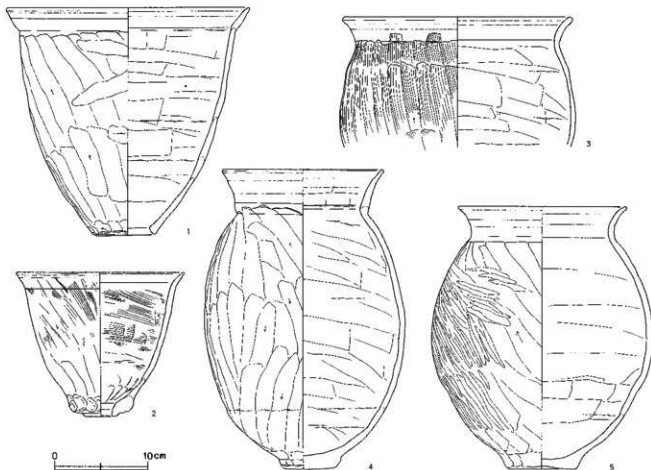
No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	11.6	5.3		ACDEFHK	3	橙褐色	100	赤彩
2	坏	12.6	5.0		ACDEFHK	2	淡灰褐色	100	赤彩
3	坏	12.6	4.8		ACDF	2	赤褐色	100	赤彩
4	坏	11.6	5.1		ACDEFHK	2	赤褐色	90	赤彩
5	坏	12.7	5.4		ACDFK	2	赤褐色	100	赤彩
6	坏	(12.0)			ACDF	2	淡灰褐色	40	黒色処理
7	坏	(10.3)	3.8		ACDF	3	淡褐色	50	
8	坏	(11.4)	4.0		ACDF	3	淡灰褐色	40	
9	坏	(10.5)			ACDF	3	暗赤褐色	40	
10	坏	(10.8)			ACDF	3	橙褐色	50	
11	坏	(11.1)			ACDF	3	淡橙褐色	20	
12	坏	(14.0)	4.4		ACDEFHK	2	淡灰褐色	40	
13	板	(15.3)			ACDK	2	暗赤褐色	40	赤彩
14	坏	(16.2)			ACDK	2	暗赤褐色	80	
15	壺	(12.5)	15.2	5.8	ACDEFK	3	淡灰褐色	70	
16	甕	(18.9)			ACDEFHK	3	淡橙褐色	30	
17	甕	(18.0)	32.5	5.2	ACDEFHK	3	黒褐色	70	

第126号住居跡 (第68~71区)

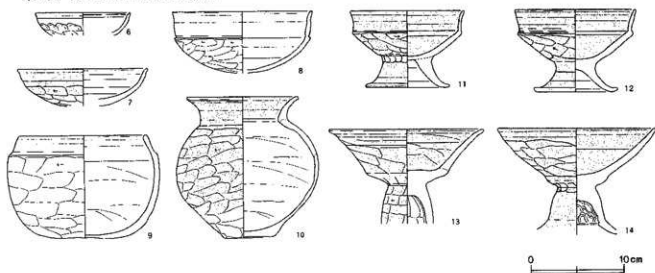
形態は方形で主軸方位はS-51°-Eであった。規模は主軸長5.3m、副軸長5.0m、深さ40cm程度であった。壁は明瞭であり、西側からカマドが検出できた。カ

第126号住居跡は、W-11・12、X-11・12グリッドから検出した。

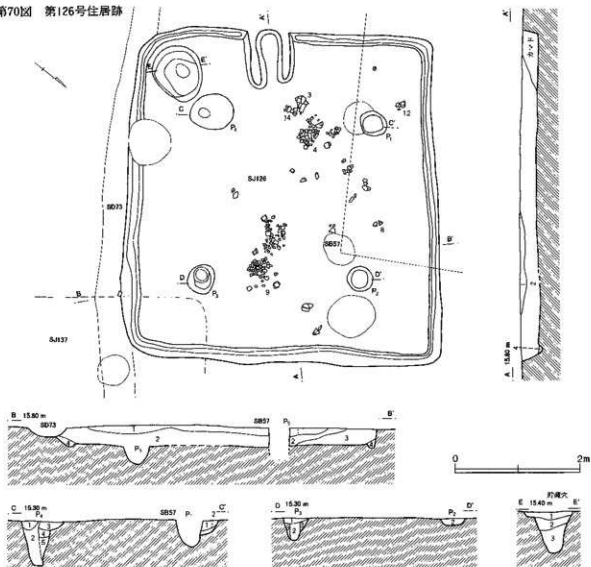
第68図 第126号住居跡出土遺物(1)



第69図 第126号住居跡出土遺物(2)



第70図 第126号住居跡



マド内からは高環用支脚や、甕の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。床面も明瞭で、炊溝は全周していた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

検出した柱穴のなかで、P1・P2は他の柱穴と比べて浅かったが、配置と覆土の状況から柱穴と判断した。

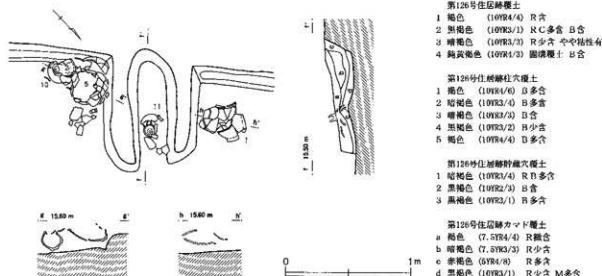
住居跡はSJ-137、SD-73、SB-57と重複していた。重複関係はSD-73、SB-57に切れ、SJ-137とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甌、高環、紡錘車などを検出した。

この中で、第68・69図11の高環はカマド内から転用支脚として、2の甌、5の甕、10の壺はカマド左側から、1の甌はカマド右側から、3・4の甕、14の高環はカマド手前から、12の高環は住居跡の西側コーナーから、8の環は住居跡西側床面から、9の鉢は北東側の床面から、他は覆土からそれぞれ検出した。

住居跡内からは多量の遺物が検出されたが、これらはカマド周辺では遺存状態が良く、他の部分ではかなり細かい破片であった。

第71図 第126号住居跡カマド



第126号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甌	26.0	24.1	6.8	ACDEFHK	2	淡褐色	100	
2	甌	(18.0)	15.3	(3.6)	ACDEFK	3	淡灰褐色	20	
3	甕	(24.3)			ACDEFHK	3	赤褐色	70	
4	甕	(17.0)	31.9	5.5	ACDEFHK	2	暗赤褐色	90	
5	甕	(17.9)	27.8	7.4	ACDEFHK	3	暗赤褐色	80	
6	環	(10.1)			ACDFK	2	暗赤褐色	10	
7	環	(14.0)			ACDEFK	3	淡橙褐色	30	赤彩
8	環	(15.0)			ACDEF	2	赤褐色	50	
9	鉢	(13.6)	10.8		ACDEFK	3	黒褐色	50	
10	壺	(11.9)	14.9	4.9	ACDF	2	赤褐色	100	赤彩
11	高環	(12.1)	8.1	(9.0)	ACDEFK	2	赤褐色	50	赤彩
12	高環	(12.8)	8.7	(9.0)	ACDEFHK	2	赤褐色	60	赤彩
13	高環	(16.5)			ACDF	3	赤褐色	50	赤彩
14	高環	(16.9)			ACDEFHK	3	赤褐色	50	赤彩

第127号住居跡 (第72・73図)

第127号住居跡は、U-11・12、V-11・12グリッドから検出した。

住居跡の東側は、SD-60による擾乱のために、西側

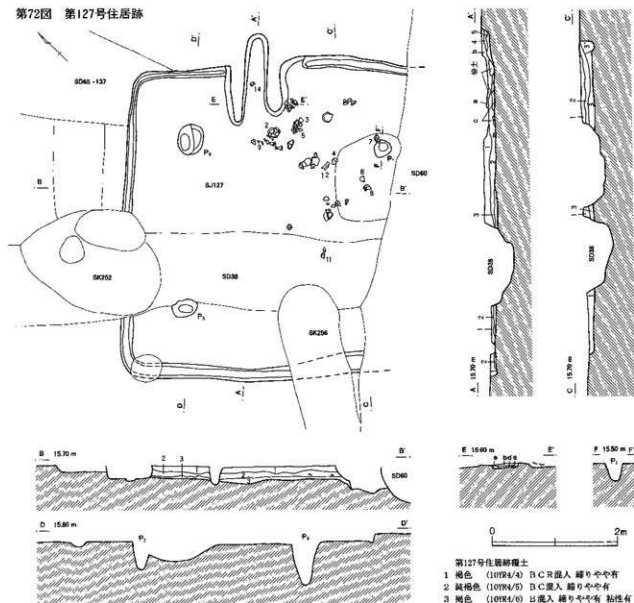
はSK-252による擾乱のために、南側はSK-256による擾乱のために、中央はSD-38による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-47°-Eであった。規模は主軸長5.0m、副軸長不明、深さ20cm

程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。SD-60によって擾乱されたと考えられた。床面は明瞭で、壁溝は住居跡の検出範囲では確認できた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。P2は、SD-60によって検出できなかった。

住居跡は、SD-38・60・65・137、SK-252・256と重複していた。重複関係はSD-38・60・65・137に切られ、SK-252・256とは不明であった。

第72図 第127号住居跡



第127号住居跡カマド層土

a 黄灰黒色 (5Y2/3) 灰黒色土主体 Rやや風化少含 C不含有 風化多含
 b 黄灰黒色 (10YR2/1) カマド内遺灰土 粘性有 黄茶色主体 R未風化多含
 C不含有 やや風化多含

c 灰茶色 (2.5Y3/2) 使用面からM層 2層に同じM層
 d 赤茶色 (7.5YR3/2) 使用面R混入 カマド内面焼化面流入
 やや粘性有 C D不含有
 e 黄褐色 (10YR4/3) B流土 2層に同じ Rやや小R含

第127号住居跡層土

- 1 褐色 (10YR4/4) B C R混入 粘りやや有
- 2 黄褐色 (10YR4/5) B C混入 粘りやや有
- 3 褐色 (10YR4/6) B混入 粘りやや有 粘性有

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甌、支脚、コップ形の須恵器などを検出した。

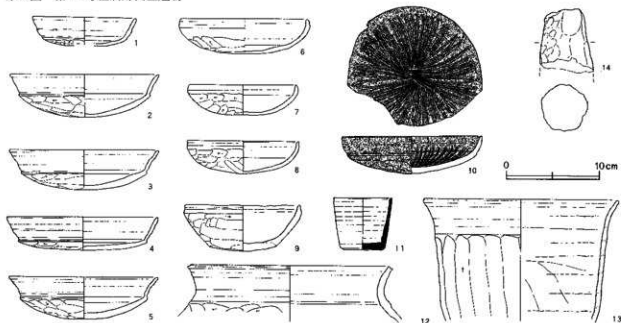
遺物は住居跡東側の床面上で、破片の形で散乱するように検出できた。

この中で、第73図2・3・5・9の環はカマドの手前から、4の環、12の甕は住居跡の東側の床面から、6～8の環は住居跡と重複した遺構から、他は覆土からそれぞれ検出した。したがって、当該住居跡に明瞭に帰属する遺物は2～5の環類であって、6・7はよ

り新しい土壌に帰属し、8の環は周辺のより古い遺構に帰属し、11のコップ形の須臾器は、より新しいSD-38から混入したものであると考えられた。

また、10の土師器環に施された暗文は、後出の放射状のものではなく、連続して施される形態のものであった。

第73図 第127号住居跡出土遺物



第127号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.0)			ACDF	3	明赤褐色	30	
2	環	16.0	4.5		ACDF	2	明赤褐色	100	
3	環	(16.0)	4.2		ACDEF	2	暗赤褐色	50	
4	環	(16.1)	3.5		ACDF	3	橙褐色	30	
5	環	(16.0)	4.4		ACDEF	2	淡褐色	70	
6	環	(13.5)	3.7		ACDF	3	淡橙褐色	50	
7	環	(11.5)	3.2		ACDF	3	橙褐色	50	
8	環	(12.0)	3.5		DEF	2	橙褐色	60	
9	環	(12.3)	4.8		DE	2	黒褐色	90	
10	環	(14.9)	3.9		ACD	2	黒褐色	80	暗文・黒色処理
11	須臾器コップ形	(6.3)	5.5	4.0	ACFIK	1	青白色	40	
12	甕	(21.2)			ACDEFK	3	橙褐色	10	
13	甕	(20.8)			ACDEFHK	3	淡褐色	10	
14	支脚				B	3	淡灰褐色		

第128号住居跡 (第74図)

第128号住居跡は、T・U-10・11グリッドから検出された。

住居跡の西コーナーはSJ-118による擾乱のために、南コーナーはSJ-120による擾乱のために、中央部分の床面はSD-38、SK-290による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-23°Wであった。規模は主軸長5.1m、副軸長4.7m、深さ10cm程度で

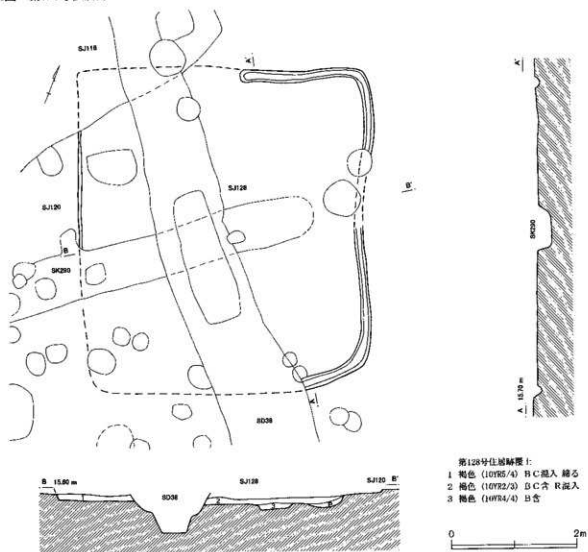
あった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、竈跡は東壁、北、東コーナーで検出できた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-118・120、SD-38、SK-290と重複していた。重複関係はSD-38に切られ、SJ-118・120、SK-290とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第74図 第128号住居跡



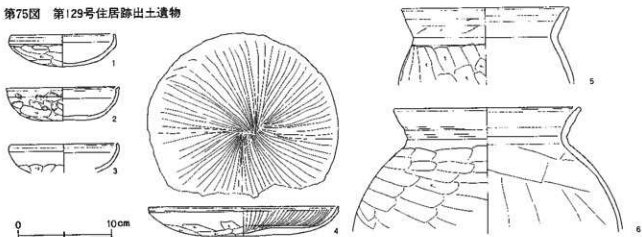
第129号住居跡 (第75・76図)

第129号住居跡は、U-13・14、V-14グリッドから検

出した。

住居跡の西側のコーナーは、SJ-122による擾乱のた

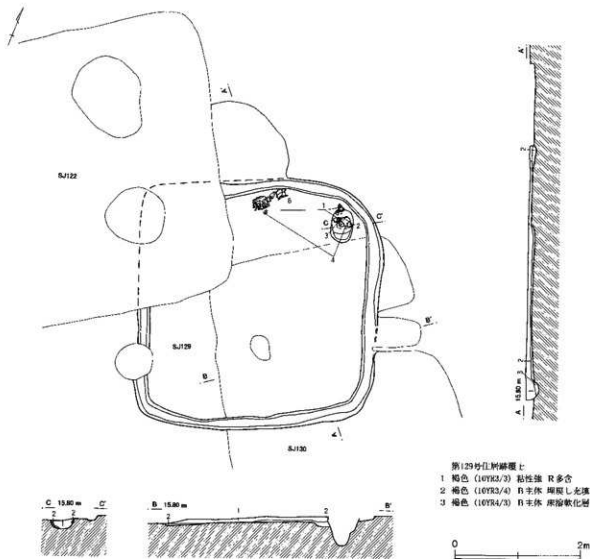
第75図 第129号住居跡出土遺物



めに検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-25°Wであった。規模は主軸長4.0m、副軸長3.9m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。SJ-122によって擾乱されたと考えられた。貯蔵穴は北コーナーから検出した。床面は明瞭で、壁溝は全周していたと考えられた。柱穴は、他の重複する住居跡の

第76図 第129号住居跡



第129号住居跡横切

- 1 褐色 (10YR3/3) 粘性強 R多含
2 褐色 (10YR3/4) 粘土体 塊状し充満し
3 褐色 (10YR4/3) 粘土体 摩砕軟化層

第129号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	11.1	3.4		ACDF	3	橙褐色	100	
2	環	(12.0)	3.5		ACDF	2	暗赤褐色	80	
3	環	(11.4)			ACDKF	3	橙褐色	20	
4	環	20.3	3.1		ACDF	2	淡灰褐色	80	暗文
5	甕	(17.8)			ACDF	3	淡橙褐色	10	
6	甕	(19.9)			ACDF	3	暗赤褐色	10	

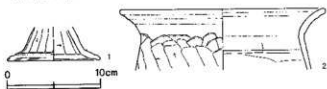
第130号住居跡 (第77・78図)

第130号住居跡は、U・V-14グリッドから検出した。

住居跡の北壁の一部はSJ-129による擾乱のために、西側のコーナーはSJ-122による擾乱のために、カマドの袖の一部はSJ-129による擾乱のために、カマドの中央はビットによる擾乱のために、住居跡の中央部分の床面は、SD-73による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-49°-Eであった。規模は主軸長3.5m、副軸長5.7m、深さ5cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。SJ-129によって擾乱されたと考えられた。床面は明瞭で、壁溝は南壁と西側コーナー付近でやや途切れるもの、ほぼ全周していたと

第77図 第130号住居跡出土遺物

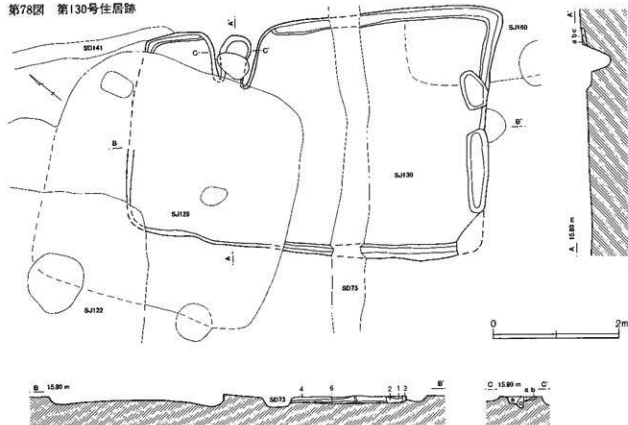


考えられた。柱穴は床面を精査したが検出することができなかった。

住居跡は、SJ-122・129・160、SD-73・141と重複していた。重複関係はSJ-129、SD-73に切られ、SJ-122・160、SD-141とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器鉢、高環などを検出した。この中で、第77図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第78図 第130号住居跡



第130号住居跡壁土

- 1 灰褐色 (10YR3/3) 粘性强 やや締る CR不含有 B少含
2 灰褐色 (10YR3/3) 粘性强 やや締る CR少含 B多含
3 灰褐色 (10YR2/2) やや粘性 やや締る CR不含有 B少含

- 4 灰褐色 (10YR6/2) 粘性强 やや締る C少含 R多含
5 灰褐色 (10YR4/2) 粘性强 やや締る 4層よりR少含
6 灰褐色 (10YR4/2) 粘性强 やや締る 4層よりR大含

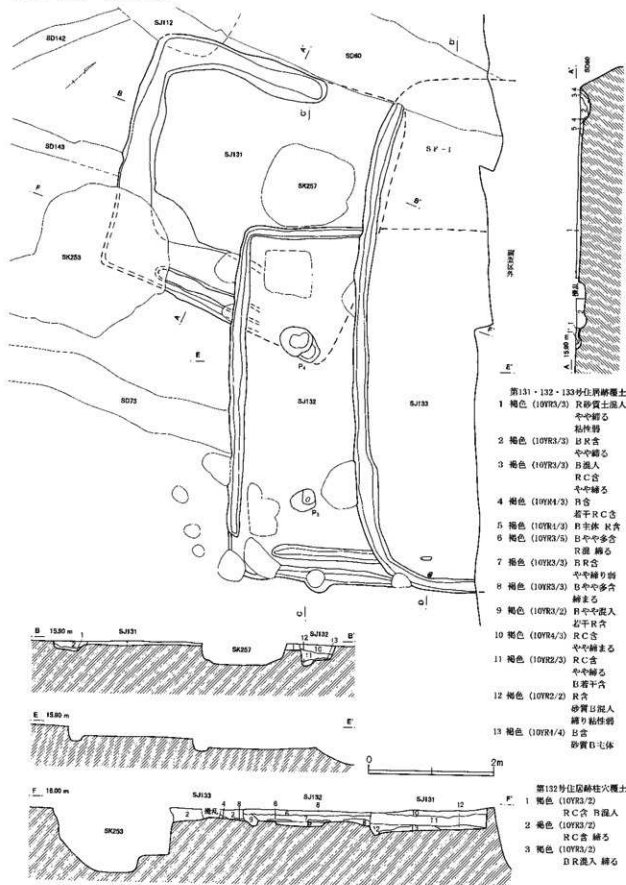
第130号住居跡カマド層土

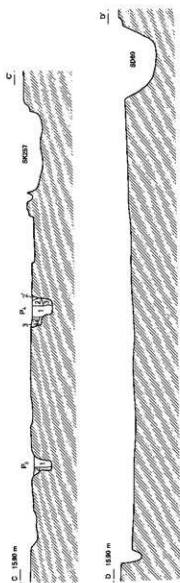
- a 褐色 (10YR3/4) B多含 CR少含
b 褐色 (10YR2/2) M含
c 褐色 (10YR3/4) B主体 火床面

第130号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	高環			(10.0)	ACDE	2	暗赤褐色	10	
2	鉢	(21.8)			ACDEFK	3	赤褐色	10	

第79图 第131~133号住居跡





第131号住居跡 (第79・80図)

第131号住居跡は、U-14グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-132・133による攪乱のために、南側のコーナーはSK-253による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-28°-Wであった。規模は主軸長4.2m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

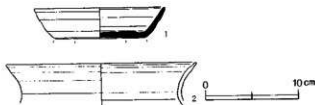
壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は周辺を精査したが、検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-112・132・133、SD-60・142・143、SK-253・257と重複していた。重複関係はSJ-132・133、SD-60・142・143、SK-253・257に切れ、SJ-112とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器鉢、須恵器環、鉄滓などを検出した。この中で、第80図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第80図 第131号住居跡出土遺物



第132号住居跡 (第79・81図)

第132号住居跡は、U-14・15グリッドから検出した。住居跡の東側の壁はSJ-133と攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-46°-Wであった。規模は主軸長5.6m、副軸長不明、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は南のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も2本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-131・133、SD-73と重複していた。重複関係は、SJ-133、SD-73に切れ、SJ-131を切っていた。

実測可能な遺物として、須恵器環、石製模造品などを検出した。

この中で、第81図に示した遺物は、覆土中から検出した。

なお、図示した遺物がこの住居跡に帰属するならば、検出した白土は、流入した物と考えられる。

第81図 第132号住居跡出土遺物



第133号住居跡 (第79・82図)

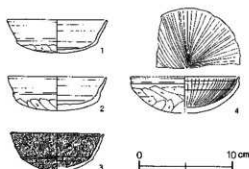
第133号住居跡は、T-14、U-14・15グリッドから検出した。

住居跡の東側の壁は調査区外のために、北側はSD-60による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-45°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ35cm程度であった。当該住居跡は、コーナー部分がやや丸く、壁もやや丸みを帯びており、平面形態が他の住居跡とは若干異なっていた。

壁は明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も検出できなかった。

住居跡は、SJ-131・132、SD-60、土師質土器焼成

第82図 第133号住居跡出土遺物



窯跡と重複していた。重複関係は、SD-60、土師質土器焼成窯跡に切られ、SJ-131・132を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。

この中で、第82図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第131号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器環	(14.0)	3.2	9.4	ACDFIK	1	青灰白色	60	
2	須恵器環	(20.3)			ACDF	3	赤褐色	10	

第132号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器環	(14.0)			ACDFK	1	灰白色	20	
2	須恵器環	(20.3)			ACDF	3	灰白色	30	

第133号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	10.6	3.5		ACDF	3	橙褐色	70	
2	環	(10.5)	3.6		ACDF	3	淡褐色	60	
3	環	(10.0)			ACD	2	淡茶褐色	20	黒色処理
4	環	(11.6)			ACDF	3	赤褐色	40	暗文

第134号住居跡 (第83~85図)

第134号住居跡は、V-10、W-10・11グリッドから検出した。

住居跡の西側の壁は調査区外のために、南側はSD-60・62による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-49°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ60cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は全周していたと考えられた。柱穴も2本が明瞭に検出できた。

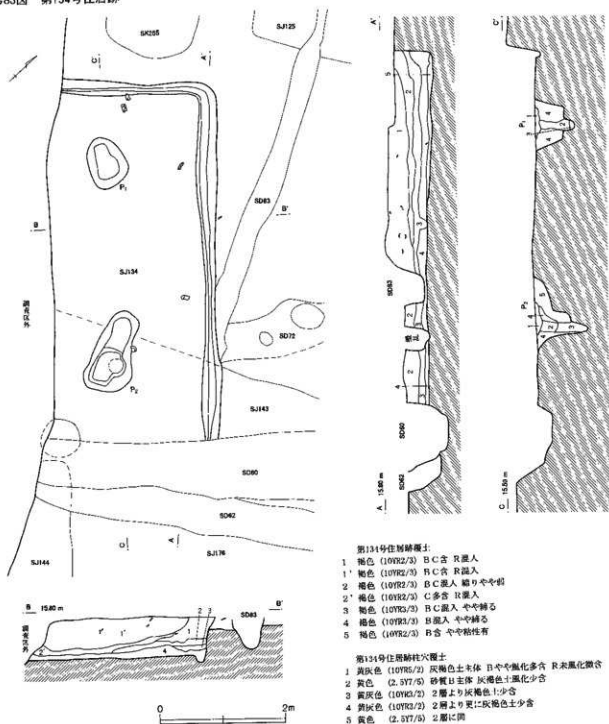
住居跡は、SJ-143・144・176、SD-60・62・72・83

と重複していた。重複関係は、SD-60・62・72・83に切られ、SJ-143・144とは不明であった。

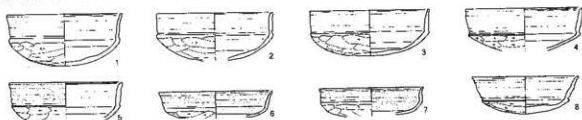
実測可能な遺物として、土師器環、砥石、鉄鎌などを検出した。この中で第84・85図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

出土した遺物は二時期に分離できるが、調査時の所見では、覆土の上層から北武蔵型の環を含む一群が、覆土の下層から口辺部の立ち上がりか頸部な模倣環が検出できた。住居跡に帰属する遺物は後者であると考えられ、これとは別に、確認できなかった重複する真間期の遺構の存在が想定され、前者の上器はそれに帰属すると考えられた。

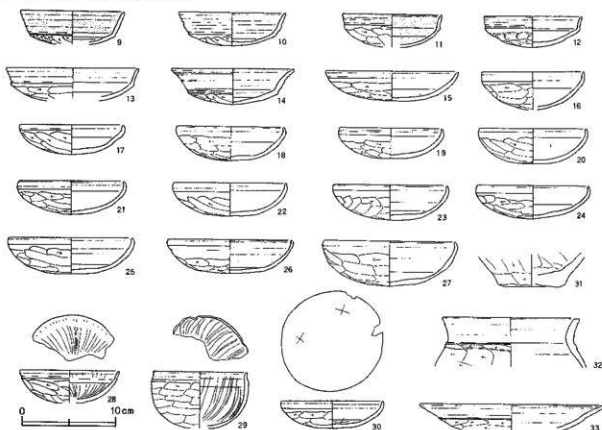
第83图 第134号住居跡



第84图 第134号住居跡出土遺物(I)



第85图 第134号住居跡出土遺物(2)



第134号住居跡出土遺物観察表(1/2)

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	12.3	5.5		ACDEF	3	橙褐色	80	
2	坏	(12.4)			ACDEF	2	明赤褐色	30	
3	坏	(12.7)	4.8		ACF	2	橙褐色	70	
4	坏	(12.4)			ACEF	2	淡橙褐色	30	
5	坏	(12.0)			ACDF	2	淡橙褐色	20	赤彩
6	坏	(12.0)			ACF	2	赤褐色	20	赤彩
7	坏	(11.0)			ACF	2	赤褐色	10	赤彩
8	坏	11.3	3.9		ACD	2	淡茶褐色	60	
9	坏	(11.1)			ACDF	3	淡灰褐色	20	赤彩
10	坏	11.4	3.5		ACDF	2	淡茶褐色	90	
11	坏	(10.6)			ACF	3	明赤褐色	20	赤彩
12	坏	10.3	3.3		ACDF	2	淡橙褐色	100	
13	坏	(14.0)			ACD	2	淡茶褐色	20	
14	坏	(13.1)	3.7		ACDEF	2	明赤褐色	40	
15	坏	14.1	3.2		ACDF	2	橙褐色	40	
16	坏	(10.8)			ACDEF	2	淡橙褐色	50	
17	坏	11.0	3.1		ACDF	2	淡茶褐色	80	
18	坏	11.4	3.6		ACDF	2	橙褐色	80	
19	坏	11.0	3.2		ACDF	2	橙褐色	60	
20	坏	11.4	3.7		ACDF	2	淡茶褐色	70	
21	坏	11.2	3.5		ACDFH	2	橙褐色	90	
22	坏	12.0	3.5		ACDF	3	橙褐色	50	
23	坏	12.2	3.7		ACDF	3	淡橙褐色	90	

第134号住居跡出土遺物観察表(2/2)

24	環	11.9	3.5		ACDF	2	橙褐色	80	
25	環	(13.2)	3.8		ACDF	2	橙褐色	50	
26	環	13.2	3.5		ACDFK	3	明赤褐色	80	
27	環	14.0	4.7		ACDFH	3	明赤褐色	90	
28	環	(10.5)			ACDF	3	橙褐色	30	暗文
29	鉢	(10.0)			ACDF	2	赤褐色	20	暗文
30	環	10.8	2.9		ACDFH	3	橙褐色	100	
31	甕			(7.1)	ACDEFHK	3	淡灰褐色	10	
32	甕	(14.6)			ACDEFHK	3	橙褐色	10	
33	環	(19.6)			ACDEF	3	淡橙褐色	20	

第135号住居跡 (第86~88図)

第135号住居跡は、W-12グリッドから検出した。

住居跡の中央から南側のコーナーにかけては、攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位は、N-43°-Wであった。規模は主軸長4.5m、副軸長4.6m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、北面からカマドが検出できた。カマド内からは甕の破片が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。攪乱によるためと考えられた。床面は明瞭で、壁溝は、住居跡の検出範囲では全周していた。

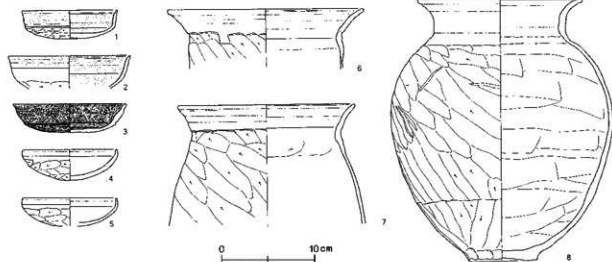
柱穴も2本が明瞭に検出できた。P3・P4は貯蔵穴同様に、住居跡の西側半分を占める攪乱のために、検出できなかった。

住居跡は、SJ-136・137、SD-73と重複していた。重複関係は、SD-73に切られ、SJ-136・137を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、土玉などを検出した。

この中で、第86図1・4の環は西側のコーナー付近から、5の環と8の甕はカマド内から、6の甕はSK-1から、他は覆土上からそれぞれ検出した。

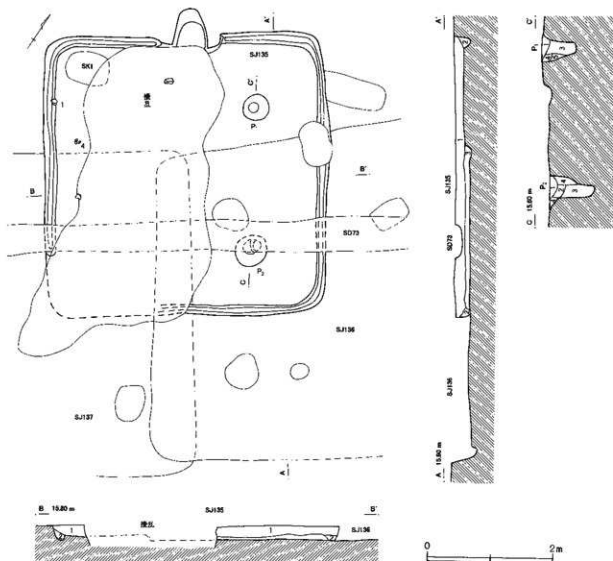
第86図 第135号住居跡出土遺物



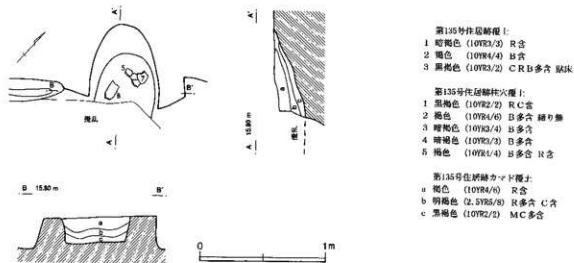
第135号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.0)	3.0		ACEFK	2	赤褐色	60	赤彩
2	環	(13.1)			ACDF	2	赤褐色	20	赤彩
3	環	(12.0)	3.0		ACD	2	淡茶褐色	60	黒色処理
4	環	(10.0)	3.2		ACDF	3	橙褐色	30	
5	環	(10.0)			ACDFK	3	淡橙褐色	20	
6	甕	(20.8)			ACDFK	3	暗赤褐色	20	
7	甕	(18.9)			ACDEFK	3	橙褐色	20	
8	甕	17.5	27.7	7.3	ACDEFHK	2	暗赤褐色	100	

第87図 第135号住居跡



第88図 第135号住居跡カマド



第135号住居跡層上:

- 1 町褐色 (10782/3) R含
- 2 褐色 (10784/4) B含
- 3 黒褐色 (10783/2) CR B多含 灰床

第135号住居跡柱穴層上:

- 1 黒褐色 (10782/2) RC含
- 2 褐色 (10784/6) B多含 緑り無
- 3 暗褐色 (10783/4) B多含
- 4 暗褐色 (10783/3) B多含
- 5 褐色 (10784/4) B多含 RC含

第135号住居跡カマド層上:

- a 褐色 (10784/6) RC含
- b 明褐色 (2, 5785/8) R多含 C含
- c 黒褐色 (10782/2) MC多含

第136号住居跡 (第89・90図)

第136号住居跡は、W-12-13 グリッドから検出した。住居跡の西側のコーナーは、SJ-135による擾乱のために、中央はSD-73による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-43°-Wであった。規模は主軸長5.3m、副軸長5.2m、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚や甕の破片が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。検出した柱穴のなかで、P1・P3は他と比べてやや浅かったが、全ての柱穴から明瞭に柱痕が確認できた。カマドの袖は遺存状態が非常に悪く、ほとんど残され

ていなかった。

住居跡は、SJ-135・137、SD-73と重複していた。重複関係は、SJ-135、SD-73に切られ、SJ-137を切っていた。

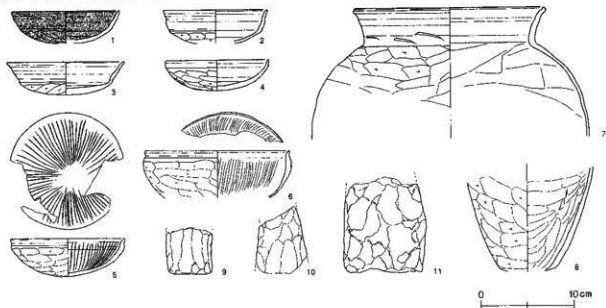
実測可能な遺物として、土師器環、甕、支脚などを検出した。

この中で、第89図1・3・4・6の環は住居跡の南東側の床面から、5の環は北西側の壁溝から、7・8の甕はカマドの中から、他は覆土からそれぞれ検出した。

出土遺物の中で、1・2の環は有段口辺の環であり、5・6は在地の暗文の環であった。

有段口辺の環は、口径が小さく、内面では底部と口辺部の境界がヨコナデにより不鮮明であり、外面でも同様に底部と口辺部の境界が明瞭な稜線で向さしておらず、新しい様相を呈していた。

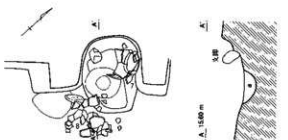
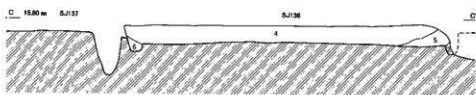
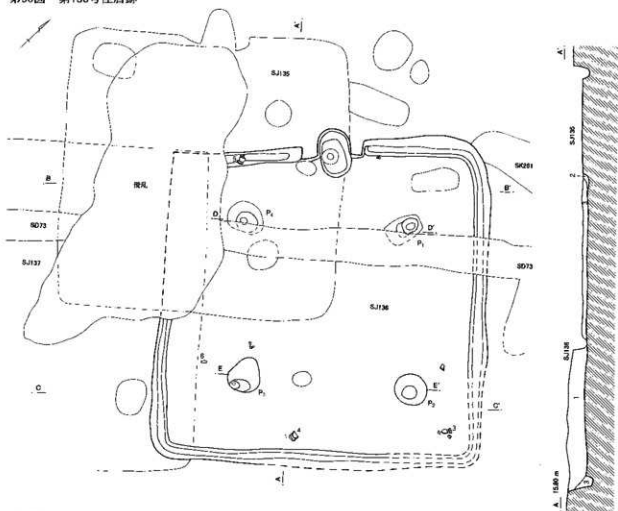
第89図 第136号住居跡出土遺物



第136号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.4)			ACD	3	淡茶褐色	30	黒色処理
2	環	(11.1)			ACDE	3	淡茶褐色	20	
3	環	(12.6)			ACDF	3	淡灰褐色	50	
4	環	(11.0)	3.2		ACFK	3	淡橙褐色	80	
5	環	(12.0)	4.0		ACDF	3	明赤褐色	80	
6	環	(15.5)			ACDF	2	橙褐色	20	
7	甕	20.3			ACDEF	3	暗赤褐色	20	
8	甕			(5.9)	ACDEFHK	3	暗赤褐色	30	
9	支脚				AC	2	淡褐色		
10	支脚				AC	2	淡灰褐色		
11	支脚				AC	3	淡褐色		

第90図 第136号住居跡



第136号住居跡層土

- 1 暗褐色 (10YR2/4) B 多含
- 2 黒褐色 (10YR2/3) B C 含
- 3 灰褐色 (10YR1/3) B 多含

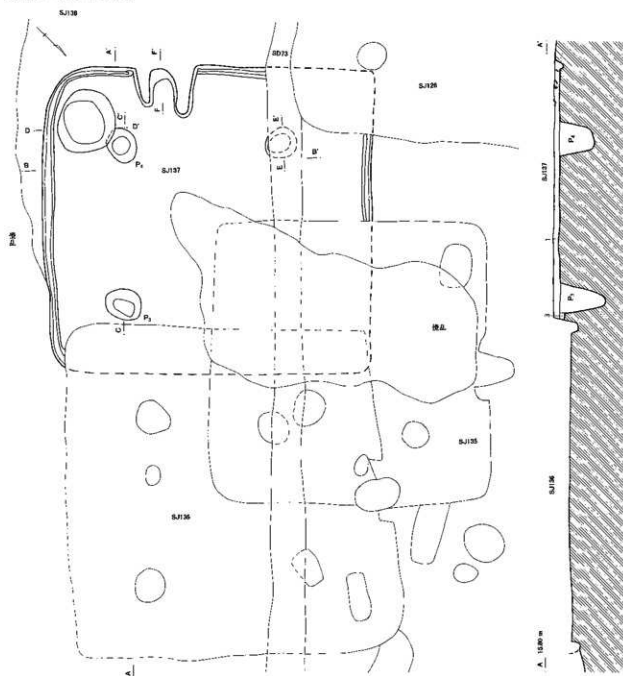
第136号住居跡柱穴層土

- 1 黒褐色 (10YR2/2) B C 含
- 2 暗褐色 (10YR2/3) B 含
- 3 暗褐色 (10YR2/3) B 多含
- 4 棕色 (10YR1/6) B 多含
- 5 暗褐色 (10YR2/3) B 含

第136号住居跡カマド層土

- 1 灰褐色 (10YR2/2) R C 含

第91图 第137号住居跡



第137号住居跡礎土

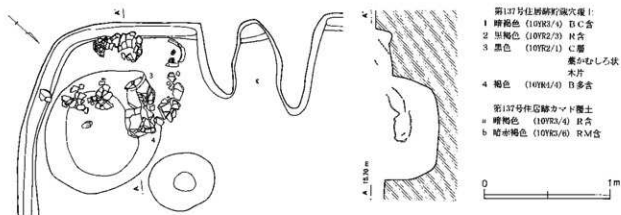
- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) B R 含
- 2 褐色 (10YR4/6) B 多含
- 3 黑褐色 (10YR2/2) 住居廻り方?

第137号住居跡柱穴礎土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) B C 含
- 2 兰褐色 (10YR2/3) B C 含
- 3 鈍黄褐色 (10YR4/3) B 多含
- 4 褐色 (10YR4/4) B 多含
- 5 黑褐色 (10YR2/2) B 多含 C 含



第92図 第137号住居跡カマド



第137号住居跡 (第91~93図)

第137号住居跡は、W・X-12グリッドから検出した。住居跡の東側の壁はSJ-136による擾乱のために、北側のコーナーはSJ-135による擾乱のために、中央やや北側はSD-73による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はS-47°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長5.3m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、西側からカマドが検出できた。カマド内からは勾玉が検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出し、覆土内から甕が検出できた。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。

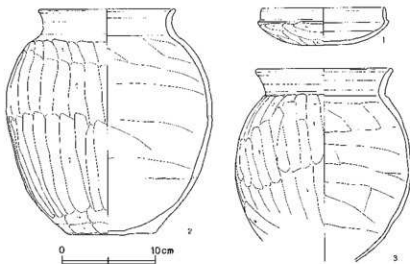
P2は、SD-73や近世の擾乱などによって壊されていたために、検出することができなかったと考えられた。

住居跡は、SJ-126・135・136、SD-73と重複していた。重複関係は、SJ-136、SD-73に切られ、SJ-126・135とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、勾玉などを検出した。

この中で、第93図2・3は貯蔵穴内から、他は覆土から検出した。

第93図 第137号住居跡出土遺物



第137号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.0)	3.9		ACDEF	3	明赤褐色	50	
2	甕	14.5	24.0	9.6	ACDEFHK	3	暗赤褐色	90	木葉痕
3	甕	14.4			ACDEFHK	3	暗赤褐色	70	

第138号住居跡 (第94図)

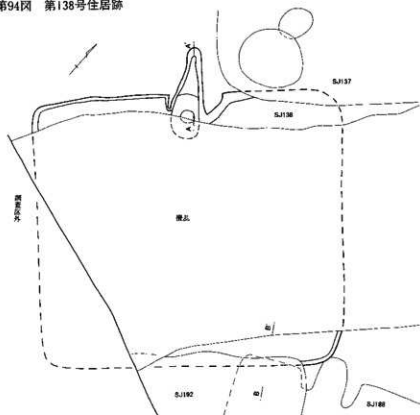
第138号住居跡は、X-12グリッドから検出した。住居跡の西側の壁は調査区外のために、南側の壁は

SJ-188・192による擾乱のために、北側のコーナーはSJ-137による擾乱のために、中央大部分も擾乱のために検出できなかった。形態は方形で主軸方位はN-45°

-Wであった。規模は主軸長4.3m、副軸長4.9m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は、残存範囲からは検出することができなかった。

第94図 第138号住居跡



第138号住居跡覆土

1 暗褐色 (10YR3/4) R 含

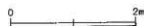
第138号住居跡カマド覆土

a 暗褐色 (10YR3/4) B 含

b 黄赤褐色 (10YR4/3) R 含

c 暗赤褐色 (10YR3/3) R 多含

d 暗赤褐色 (10YR3/4) RM 含

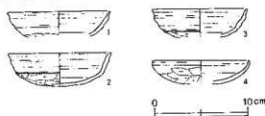


第139号住居跡 (第95・96図)

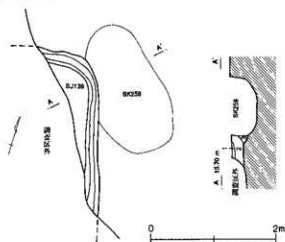
第139号住居跡は、X-11グリッドから検出した。住居跡の大半は調査区外のために検出できなかった。形態は方形と想定でき、規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は検出範囲で確認できた。柱穴は検出できなかった。

第96図 第139号住居跡出土遺物



第95図 第139号住居跡

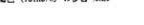


第139号住居跡覆土:

1 褐色 (10YR1/4) R 多含

2 赤褐色 (10YR3/2) RC 多含

3 暗赤褐色 (10YR3/3) B 多含 壁溝



住居跡は、SK-258と重複していた。重複関係はSK-258に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環を検出した。第96図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第139号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.9)			ACDFK	3	暗赤褐色	20	
2	環	(11.0)	3.5		ACDEF	3	淡茶褐色	40	
3	環	(10.0)			ACDEF	3	淡茶褐色	20	
4	環	(10.2)			ACD	3	橙褐色	20	

第140号住居跡 (第97・98図)

第140号住居跡は、V-12・13グリッドから検出した。

住居跡の中央はSE-56による攪乱のために、東側のコーナーと西壁の一部はSD-71による攪乱のために、覆上の大半は入れ子状に重複していたSJ-151のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-56°-Eであった。規模は主軸長4.6m、副軸長4.6m、深さ5cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は南

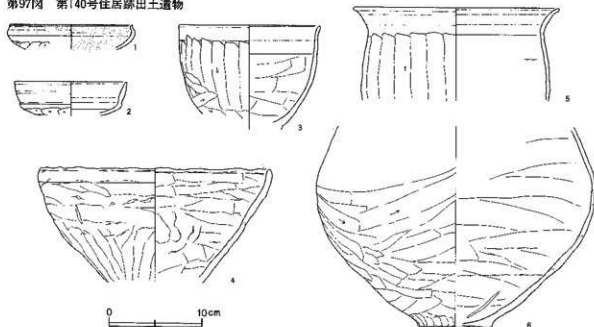
北のコーナーで検出できた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。立て替えの痕跡が確認できた。

住居跡は、SJ-151と入れ子状に、SD-71、SE-56・57と重複していた。重複関係は、SJ-151、SD-71、SE-56・57に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甗、紡錘車、鉄製の棒状不明品、白玉などを検出した。

この中で、第97図4の鉢は貯蔵穴の中から、3の鉢と6の甕は住居跡北側の床面から、他は覆土中から検出した。

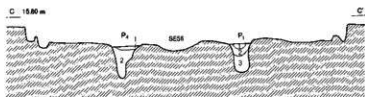
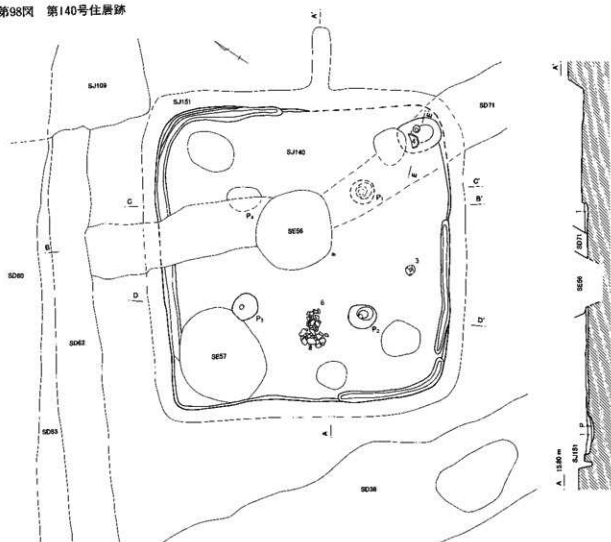
第97図 第140号住居跡出土遺物



第140号住居跡出土遺物観察表

no	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.1)			ACDF	2	赤褐色	10	赤彩
2	環	(11.9)			ACDE	3	赤褐色	10	
3	鉢	15.0			ACDEFHK	3	橙褐色	90	
4	鉢	(24.7)			ACDEFHK	2	暗赤褐色	70	
5	甕	(21.9)			ACDEFHK	3	淡橙褐色	10	
6	甕			7.8	ACDEFHK	3	橙褐色	40	

第98图 第140号住居跡



- 第140号住居跡層上
- 1 灰褐色 (10YR1/2) 床面直上土層 C風化少含
- 第140号住居跡柱穴層上
- 1 灰黑色 (10YR2/1) R風化少含 C不含 B風化少含
 - 2 灰褐色 (10YR4/4) Bに灰黑色粘土混 R風化多少含 C風化少含 灰黑色粘土風化多含
 - 3 黄褐色 (2.5YR5/6) B埋戻し土
- 第140号住居跡貯藏穴層上
- 1 灰褐色 (10YR1/2) 灰褐色土主体 R未風化少含 B未風化少含 C未風化少含
 - 2 灰褐色 (10YR3/2) 1層よりR.B多含
 - 3 灰褐色 (10YR2/3) 1層よりR.B少含
 - 4 黄褐色 (10YR5/3) Bと灰褐色土混合層



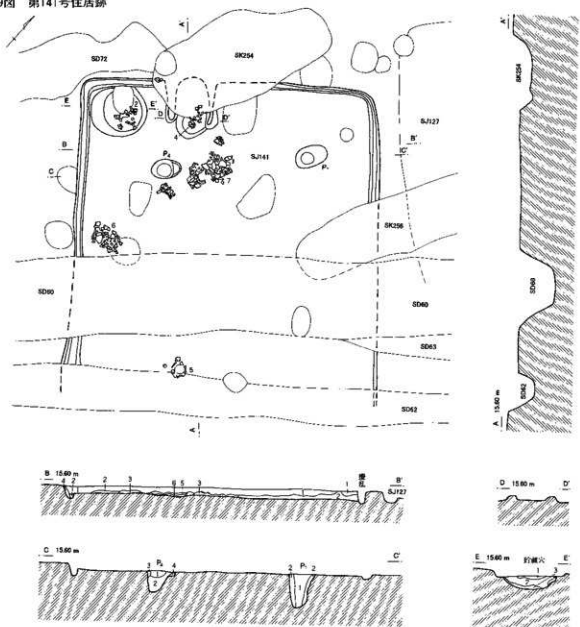
第141号住居跡 (第99・100頁)

第141号住居跡は、V-11グリッドから検出した。

住居跡の南側はSD-60・62・63による攪乱のために、カマド周辺はSK-254による攪乱のために、東壁の一部はSK-256による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-37°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長4.8m、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは甕の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出し、覆土内から甕が検出できた。床面も明瞭で、壁溝は東側の一部で検出できなかったものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も2本が明瞭に検出できた。P 2・P 3はSD-60の攪乱によって確認することができなかった。P 4はやや浅く、カマ

第99図 第141号住居跡



第141号住居跡壁土

- 1 褐色 (10YR4/3) B多含 R C混入 やや締る
- 2 褐色 (10YR4/4) B多含 R C混入 やや締る
- 3 褐色 (10YR4/4) B含 締り 粘性有 粘り込み
- 4 褐色 (10YR4/4) R混入 締りやや物
- 5 淡黄色 (10YR6/4) 粘土質 粘性有 粘り込み
- 6 黒色 (10YR2/1) C主体

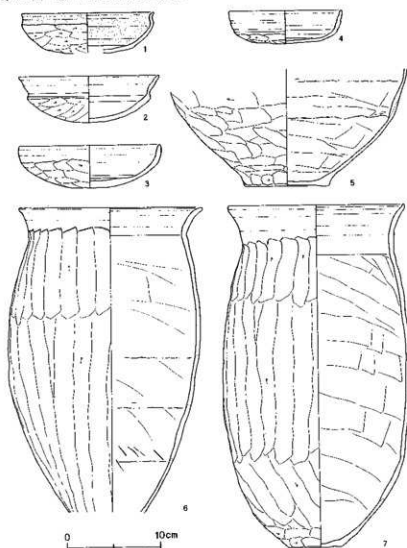
第141号住居跡貯蔵穴層土

- 1 褐色 (10YR4/3) C R含 締り弱 粘性弱
- 2 褐色 (10YR4/4) C R混入 B含 やや締る
- 3 褐色 (10YR3/4) B多含
- 4 褐色 (10YR2/4) B含 粘性強 C混入 カマド前壁部C層

第141号住居跡貯蔵穴層土

- 1 褐色 (10YR1/2) C R含 締りやや物
- 2 褐色 (10YR1/4) C K混入 締る
- 3 褐色 (10YR2/4) B上体 締り粘性有

第100図 第141号住居跡出土遺物



第141号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.1)			ACFK	2	赤褐色	20	赤彩
2	環	(14.9)	4.9		ACDEF	3	淡橙褐色	40	
3	環	(15.0)	4.5		ACDF	3	淡橙褐色	50	
4	環	(11.9)	3.5		ACDFH	3	橙褐色	40	
5	甕			8.9	ACDEFHK	3	暗赤褐色	40	
6	甕	19.6			ACEFHK	3	淡橙褐色	60	
7	甕	18.7	36.2	5.4	ACDFHK	3	暗赤褐色	80	

第142号住居跡 (第101・102区)

第142号住居跡は、U-10・11、V-10・11グリッドから検出した。

住居跡の西側はSJ-124による攪乱のために検出できなかった。住居跡は確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で主軸方位はS-23°-Eであった。規模は主軸長4.8m、副軸長不明であった。

下の正面やや左寄りから検出したので、柱穴ではなく、重複するピットである可能性も考えられた。

住居跡は、SD-60・62・63、SK-254・256と重複していた。重複関係は、SD-60・62・63、SK-254に切れ、SK-256とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、鉄製の棒状不明品、石製模造品などを検出した。

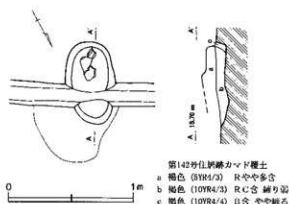
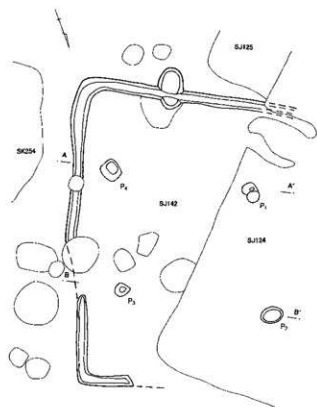
この中で、第100図2の環は貯蔵穴の中から、4の環はカマドの中から、5の甕は住居跡北東側の床面上から、6の甕は北西側の床面上から、7の甕はカマド前から、他は覆土からそれぞれ検出した。

出土遺物の中で、甕については、6のように最大径が胴部の上方に移行しつつある形態のものと、7のような、やや中央から下方にあるものの両者が検出できた。

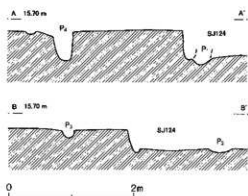
壁はやや不明瞭であり、両側からカマドが検出できた。カマド内からは甕の破片が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は不明瞭であったが、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は4本が明瞭に検出できた。

ただし、明瞭に検出できた柱穴の中で、P3に相当させたものは他の柱穴に比べて浅かったので、柱穴で

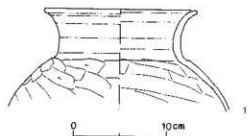
第101図 第142号住居跡



第142号住居跡カマド覆土
a 褐色 (SYR4/3) Rやや多含
b 褐色 (10YR4/3) Rに含 細り泥
c 褐色 (10YR4/4) B含 やや細り



第102図 第142号住居跡出土遺物



はない可能性も考えられた。また、柱穴と判断したピット4本の配置は不整形であった。

住居跡は、SJ-124・125と重複していた。重複関係は、SJ-124・125ともに不明であった。

実測可能な遺物として、土師器製の口縁部から肩部の破片をカマド中から検出した。妻の破片は、二次焼成を受けていなかった。

第142号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	妻	(16.2)			ACDEFK	3	暗赤褐色	30	

第143号住居跡 (第103～106図)

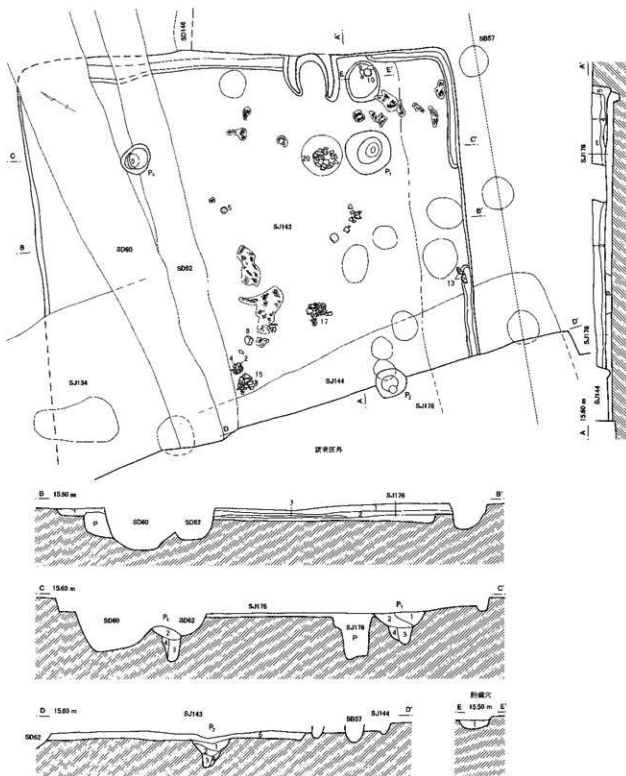
第143号住居跡は、V-10・11、W-10・11グリッドから検出した。

住居跡の南西側の壁は調査区外のために、西側のコーナーはSJ-134による擾乱のために、中央部分の床面はSD-60・62による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-57°-Eであった。規模は主軸長6.9m、副軸長不明、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。カマド内からは妻の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は北壁で一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴は3本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-134・144・176、SD-60・62・72・146と重複していた。重複関係は、SJ-144、SD-60・62・146に切られ、SJ-176を切り、SJ-134、SD-72とは不明であった。

第103図 第143号住居跡



第143号住居跡層上

- 1 黒褐色 (10YR2/3) R多
- 2 暗褐色 (10YR4/3) C多
- 3 暗褐色 (10YR4/3) D多
- 4 暗赤褐色 (10YR2/2) R多 含 カマドではない
- 5 暗赤褐色 (10YR4/2) R多 含
- 6 暗褐色 (10YR3/1) B多 含 陶片土

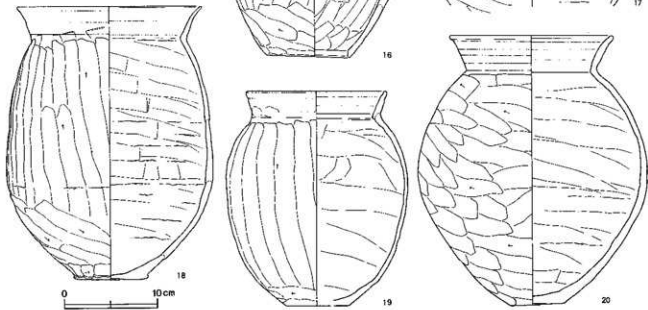
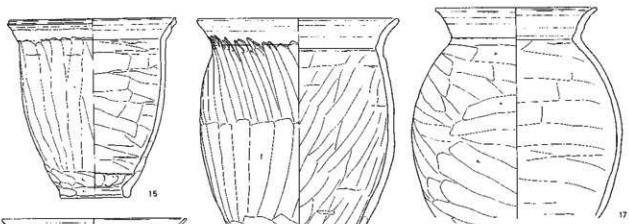
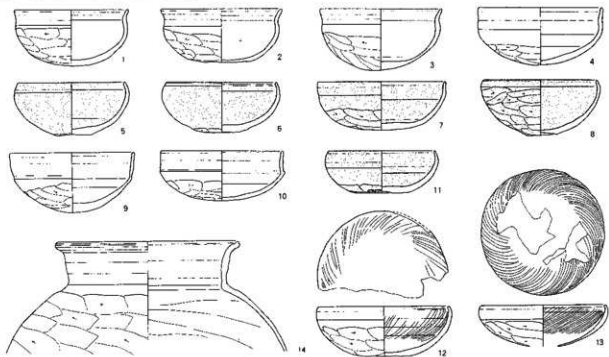
第143号住居跡柱穴層上

- 1 黒褐色 (10YR2/3) R少 含
- 2 黒褐色 (10YR2/3) C多 含
- 3 暗褐色 (10YR3/4) R多 含 柱灰
- 4 暗褐色 (10YR3/3) B多 含

第143号住居跡柱穴層下

- 1 暗赤褐色 (2.5YR3/3) 赤褐色 R多 含 C多 含

第104图 第143号住居跡出土遺物(1)

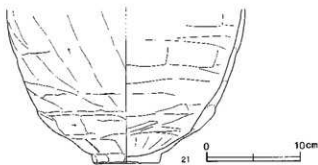


住居跡の床面からは大量の炭化材が検出できたので、いわゆる消失家屋と考えられた。

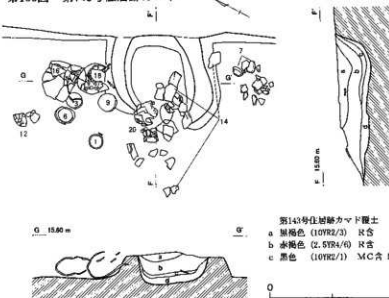
実測可能な遺物として、土師器環、甕、甌、土錘などを検出した。この中で第104・105図1・3・6・7・9・12の環、14・18・21の甕、16の甌はカマド周辺から、10の環は貯蔵穴内から、20の甕はカマド前のビット内から、5の環は住居跡の中央床面から、2・4・8の環、17の甕、15の甌は北西床面から、13の環は南側床面から、他は覆土からそれぞれ検出した。本住居跡から出土した環類は古い様相を呈していた。

これらの中には、1～3のように口辺部が受け口状を呈する一群、5・6・8・11のように口辺部が不明瞭で内湾状の形態の一群、4・7のように口辺部と体部との境界が明瞭でない一群、更には9・10のように口辺部が底部と明瞭に分化しており、かつ、口縁部に明瞭な面を持たない一群、12・13のように口辺部が内湾し、やや浅めで放射状の暗文を外縁部外に持つ一群などの共伴が認められた。

第105図 第143号住居跡出土遺物(2)



第106図 第143号住居跡カマド



第143号住居跡カマド覆土
a 黒褐色 (10YR2/3) R含
b 赤褐色 (2.5YR4/6) R含
c 黒色 (10YR2/1) MC含 M層

第143号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	12.1	5.9		ACDEF	2	淡橙褐色	100	
2	環	(12.9)	5.6		ACDEF	2	赤褐色	80	
3	環	13.0	6.4		ACDEF	2	赤褐色	100	
4	環	13.1	6.1		ACDEF	2	赤褐色	80	
5	環	11.4	5.5	3.5	ACD	2	黒褐色	100	赤彩
6	環	11.6	5.3	2.5	ACD	2	暗赤褐色	100	赤彩
7	環	13.5	5.1		ACDEF	2	暗赤褐色	80	赤彩
8	環	12.1	5.8	3.0	ACDEFK	2	赤褐色	100	赤彩
9	環	13.1	6.3		ACDE	3	淡橙褐色	100	
10	環	13.0	5.3		ACDEF	2	赤褐色	100	
11	環	11.3	4.4		ACDF	2	赤褐色	100	赤彩・黒色処理
12	環	14.0	5.3		ACDEF	3	橙褐色	50	
13	環	13.2			ACDEF	3	橙褐色	90	
14	甕	(19.3)			ACDEFHK	3	淡橙褐色	30	
15	甌	17.8	18.9	7.2	ACDF	2	赤褐色	70	
16	甌	21.2	26.5	8.9	ACDEFK	3	淡褐色	70	
17	甕	(17.1)			ACEFHK	3	暗赤褐色	90	
18	甕	(19.7)	28.9	8.0	ACDEFHK	3	淡褐色	40	
19	甕	(14.8)	22.7	(6.6)	ACDK	3	黒褐色	50	
20	甕	17.2	28.5	5.8	ACDEFHK	3	暗赤褐色	100	
21	甕			7.0	ACDEFHK	3	淡橙褐色	30	

第144号住居跡 (第107図)

第144号住居跡は、W-10・11グリッドから検出した。住居跡の東側の壁以外は、調査区外のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-37°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。

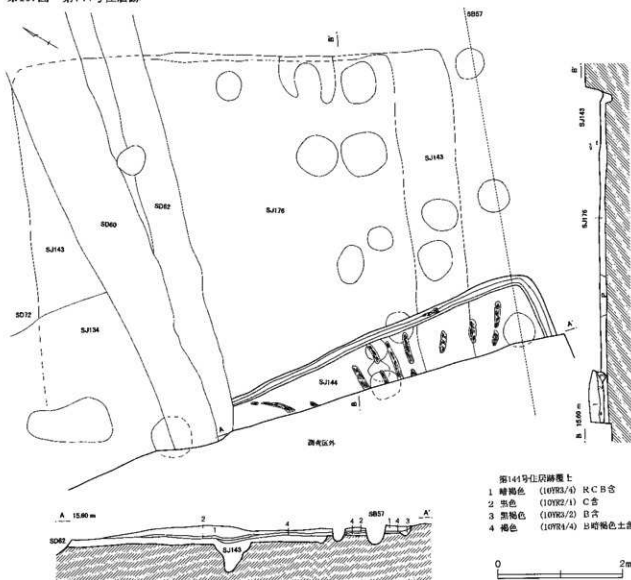
た。床面上のピットは、覆土の状況から考えて当該住居跡に帰属しないと考えられた。床面には炭化材が散乱しており、いわゆる火災住居と考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然地積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-134・143・176、SD-60・62と重複していた。重複関係は、SD-60・62に切られ、SJ-143・176を切り、SJ-134とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

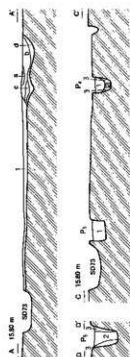
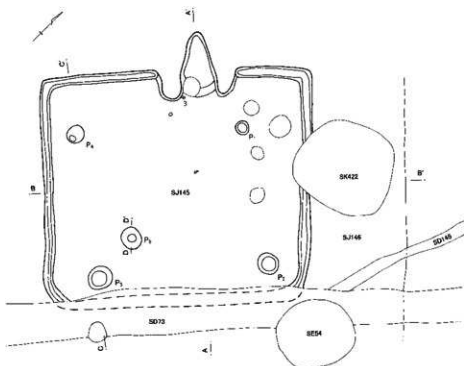
第107図 第144号住居跡



第145号住居跡 (第108・109図)

第145号住居跡は、V-13グリッドから検出した。住居跡の東側の壁は、SD-73による擾乱のために検

出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-47°-Wであった。規模は主軸長3.7m、副軸長4.3m、深さ5cm程度であった。



第145号住居跡礎土

- 1 黒褐色 (10TR2/3) RC穴
- 2 暗褐色 (10TR3/4) B倉

第145号住居跡カマド覆土

- a 暗赤褐色 (2.5YR3/3) 沢多倉
- b 黒色 (10YR2/1) CM多倉
- c 暗褐色 (10YR3/4) B倉
- d 暗褐色 (10YR3/4) カマド覆り方

第145号住居跡柱穴覆土

- 1 褐色 (10YR2/3) RC芥子倉
- 2 褐色 (10YR3/4) RC倉 餅りやや餅
- 3 褐色 (10YR3/2) RC芥子倉 B多倉



壁はやや不明瞭であったが、西側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。P3の北側からもう一つピットが検出でき、覆土の状況がP1～P4と同様であったので、P5として記載した。

覆土には埋め灰しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-146、SD-73、SK-422と重複していた。重複関係は、SK-422に切られ、SJ-146を切り、

SD-73とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、鉄製品の破片などを検出した。

この中で、第109図1・3はカマド内から、他は覆土から検出した。

第109図 第145号住居跡出土遺物



第145号住居跡出土遺物観察表

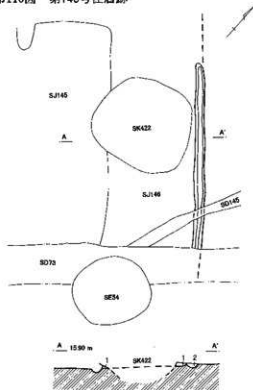
No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.0)			ACDF	3	淡橙褐色	20	
2	環	(13.0)			ACDF	3	淡橙褐色	20	
3	環	(13.0)			ACDF	2	橙褐色	30	

第146号住居跡 (第110・111図)

第146号住居跡は、V-13・14グリッドから検出した。住居跡は、確認面では壁溝の底跡程度しか残存していなかった。

壁は不明瞭で、カマドも検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝は一部の

第110図 第146号住居跡



第146号住居跡断面

- 1 黒褐色 (10YR2/3) B多含
2 暗褐色 (10YR3/3) B含



第146号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.0)			ACF	2	暗赤褐色	10	赤彩
2	環	(12.1)			ACDEF	2	明赤褐色	20	
3	環	(12.4)			ACEF	3	淡橙褐色	20	
4	甕	(18.8)			ACDEFHK	3	橙褐色	10	
5	甕			6.9	ACDEFHK	3	赤褐色	10	
6	甕			6.8	ACDEFHK	3	黒褐色	10	

第147号住居跡 (第112・113図)

第147号住居跡は、V-14グリッドから検出した。

住居跡の北側と西側の壁の一部は、攪乱によって検出できなかった。

形態は方形で、主軸方位はN-29°Wであった。規模は主軸長3.1m、副軸長3.7m、深さ20cm程度であった。

痕跡が検出できた。柱穴も検出できなかった。

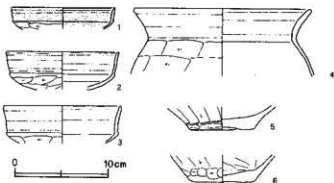
住居跡は、SJ-145・146、SD-145、SK-422と重複していた。重複関係は、SJ-145、SK-422に切れ、SD-145とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕の口縁部と底部などを検出した。

この中で、第111図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。ただし、痕跡程度しか残存していない住居跡なので覆土も僅少で、掘り方に混入したものが含まれている可能性があり、本住居跡への帰属関係は明瞭にはできなかった。

周辺の地山を精査したが、柱穴に該当するような覆土を持ったピットを確認することができなかったのので、わずかに検出した壁溝から、床面がどちらの方向に広がるのか、住居跡の範囲を明らかにすることができなかった。

第111図 第146号住居跡出土遺物



壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。

貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面は明瞭で、壁溝は北壁で検出できた。柱穴も2本が明瞭に検出できた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-148・149と重複していた。重複関係は、SJ-148・149を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、須恵器環などを検出した。

この中で、第113図3・5・7・8の環、12の須恵器環、14・15の甕は、住居跡北側の壁の近くで比較的まとまって、他は覆土からそれぞれ検出した。

本住居跡から出土した環類には様々な類型が含まれていた。

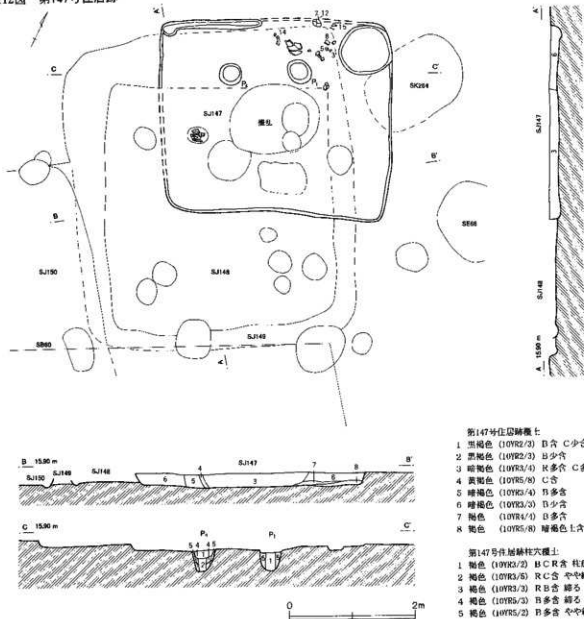
1は口辺部が不明瞭になった模倣環であり、2は小型化し、退変化した有段口辺の環であると考えられた。

3・4は口辺部が外傾し、口辺部と底部の境界がやや不明瞭な特有の形態の環であった。9・10も該期に特徴的な皿状の環であった。

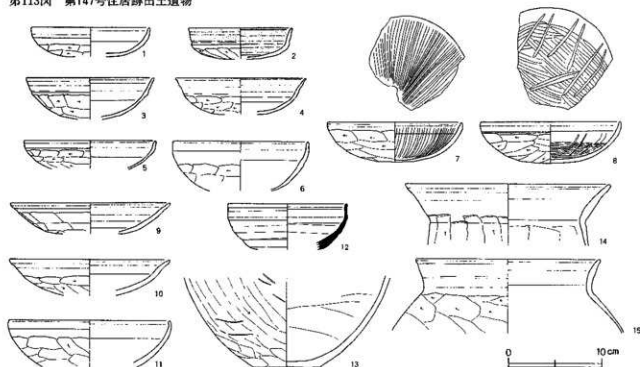
11は口径の大きいいわゆる北武蔵型の環であった。7は在地の暗文の環であり、内面に放射状の暗文が施されていた。また、8は内面に磨きが施されその後に線な暗文が施される、在地のものではない暗文の環であった。

12の須恵器環は、共伴した他の土師器環類との関係から、環身であると想定して実測した。

第112図 第147号住居跡



第113図 第147号住居跡出土土物



第147号住居跡出土土物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(12.7)			ACDF	3	淡灰褐色	30	
2	坏	(11.1)			ACDF	2	橙褐色	30	赤彩
3	坏	(13.7)			ACDEFK	3	赤褐色	40	
4	坏	(14.0)			ACDF	3	淡灰褐色	40	
5	坏	(14.0)			ACDEF	3	淡橙褐色	20	
6	坏	(14.4)			ACF	3	淡橙褐色	20	
7	坏	(14.3)	4.2		ACDF	3	橙褐色	40	暗文
8	坏	(14.9)	4.4		ACDEFK	2	淡褐色	40	ミガキ
9	坏	(17.0)			ACDF	3	淡橙褐色	30	
10	坏	(17.1)			ACDF	3	淡橙褐色	30	
11	坏	(17.1)			ACDFK	3	淡橙褐色	30	
12	須恵器 坏	(12.8)			ACF	1	灰白色	40	
13	甕			7.0	ACDEFHK	3	橙褐色	30	
14	甕	(21.8)			ACDF	2	橙褐色	10	
15	甕	(19.7)			ACDF	3	淡灰褐色	10	

第148号住居跡 (第114・115図)

第148号住居跡は、V-14グリッドから検出した。

住居跡の北側のコーナーは、SJ-147による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-29°-Wであった。規模は主軸長3.7m、副軸長3.9m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は4本が明瞭に検

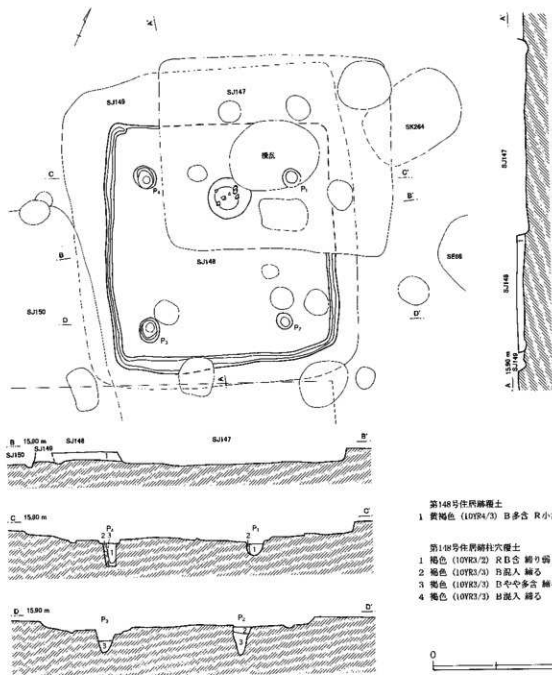
出できた。

住居跡は、SJ-147・149と重複していた。重複関係は、SJ-147に切られ、SJ-149を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、紡錘車などを検出した。この中で、第115図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

出土遺物については、重複関係にあるSJ-148・149のものを、明瞭に分離することができなかったため、一括して報告した。

第114図 第148号住居跡



第148号住居跡燵土

- 1 黄褐色 (10YR4/3) B多含 R小含

第148号住居跡柱穴燵土

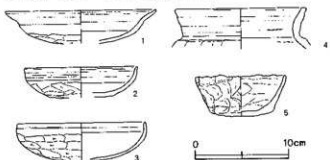
- 1 褐色 (10YR3/2) R B含 網り柄 柱痕
- 2 褐色 (10YR3/3) R B混 網り
- 3 褐色 (10YR3/3) D多や多含 網り
- 4 褐色 (10YR3/3) R混入 網り

第149号住居跡 (第115・116図)

第149号住居跡は、V-14グリッドから検出した。住居跡の北側のコーナーはSJ-147による攪乱のために、南側のコーナーはSJ-150による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-33°-Wであった。規模は主軸長5.0m、副軸長4.4m、深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴

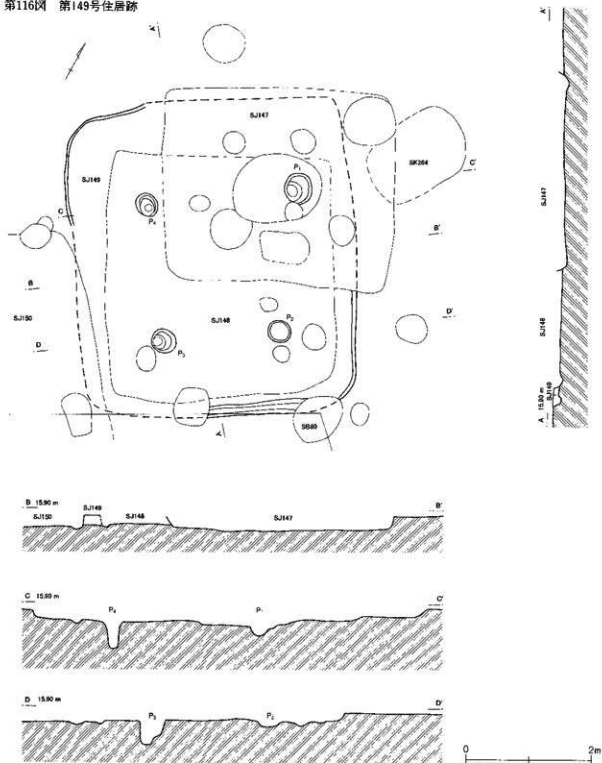
第115図 第148・149号住居跡出土遺物



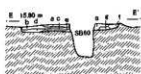
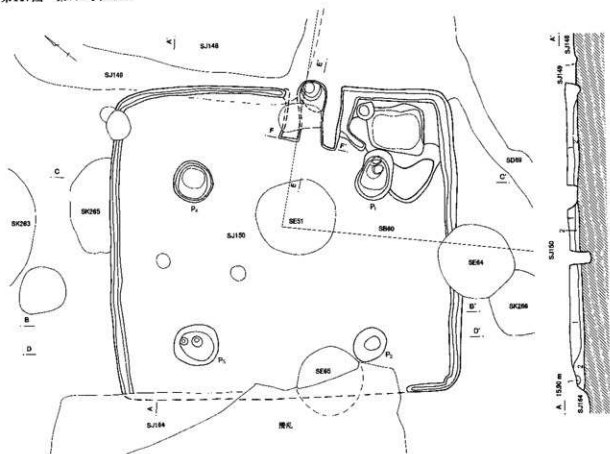
第148・149号住居跡出土物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	环	(16.1)			ACDFH	2	暗赤褐色	30	
2	环	(12.0)			ACEFK	2	橙褐色	40	
3	环	(13.5)			ACDFH	3	赤褐色	40	
4	埴	(13.9)			ACDEF	2	暗赤褐色	10	
5	环	(9.6)	4.2	(6.4)	ACDEFK	2	淡灰褐色	40	

第116図 第149号住居跡

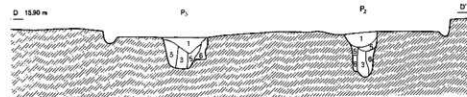
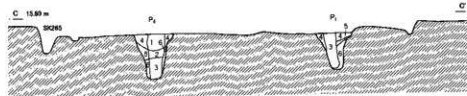


第117図 第150号住居跡



第150号住居跡掘土

- 1 黒褐色 (10YR2/3) B含 C少含
- 2 暗褐色 (10YR3/3) R濃含 B多含
- 3 黒褐色 (10YR2/3) B少含



第150号住居跡カマド掘土

- a 褐色 (10YR4/3) R上体
- b 褐色 (10YR4/3) R上体
天井部厚層
- c 褐色 (10YR4/3) R上体
M泥在
網り網り
- d 褐色 (10YR3/2) C含 網る
- e 褐色 (10YR4/3) R C含
網る
- f 褐色 (10YR3/2) 目黒人多
R片十含
- g 褐色 (10YR4/3) R含
やや網る
- h 褐色 (10YR5/6) B主体

第150号住居跡柱穴掘土

- 1 褐色 (10YR3/2) B C R含
柱版
- 2 褐色 (10YR2/2) B C含
Bブロック
器干器入
- 3 褐色 (10YR3/5) R C含
やや網る
- 4 褐色 (10YR3/3) R B含
網る
- 5 褐色 (10YR5/3) B多含
網る
- 6 褐色 (10YR5/2) B多含
やや網る



も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は東のコーナーで検出できた。柱穴は4本が明瞭に検出できたが、P1・P2は他の柱穴に比べてやや浅かった。

住居跡は、SJ-147・148・150、SB-60と重複していた。重複関係は、SJ-147・148・150に切られていた。

前述の通り、出土遺物については、重複関係にあるSJ-148・149のものを、発掘時に明瞭に分離することができなかったの、先一括して、SJ-148・149出土遺物として報告した。

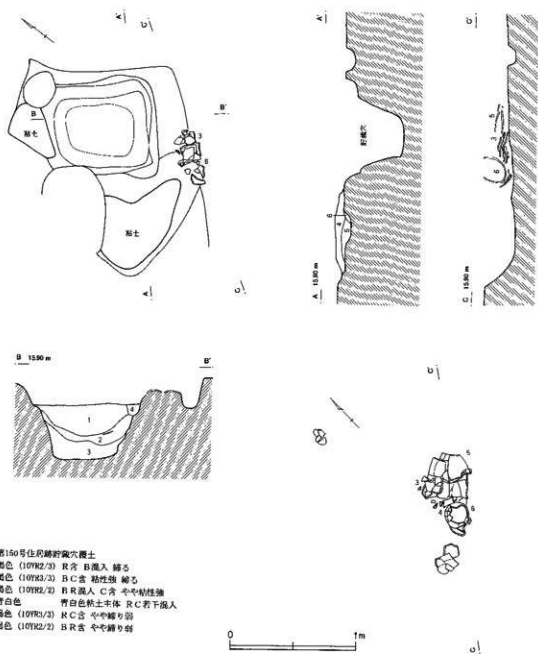
第150号住居跡 (第117~119頁)

第150号住居跡は、V-13・14、W-13・14グリッドから検出した。

住居跡の西側は、擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-50°-Eであった。規模は主軸長5.0m、副軸長5.5m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明

第118図 第150号住居跡貯蔵穴



隙に検出できた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

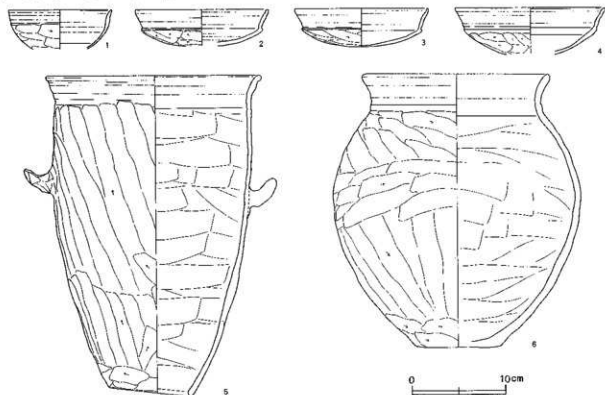
住居跡は、SJ-149・164、SB-60、SE-51・64・65、SK-265、SD-89と重複していた。重複関係は、SJ-164に切られ、

SJ-149を切り、SB-60、SE-51・64・65とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甔、土錘、鉄製鉄などを検出した。

この中で、第119図2～4の環、5の甔、6の甕は貯穴周辺から、1の環は覆土からそれぞれ検出した。

第119図 第150号住居跡出土遺物



第150号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.0)			ACF	3	淡橙褐色	20	
2	環	(14.2)			ACDF	2	橙褐色	30	
3	環	(14.2)	4.0		ACF	3	橙褐色	80	
4	環	(16.0)			ACDF	3	淡茶褐色	40	
5	甔	22.8	34.0	8.6	ACDEFK	2	明赤褐色	90	把手付
6	甕	(19.6)	29.1	(9.0)	ACEFK	3	橙褐色	80	

第151号住居跡 (第120図)

第151号住居跡は、V-12・13グリッドから検出した。住居跡の東側のコーナーは、SD-71による攪乱のために、中央はSE-56による攪乱のために、西側コーナー付近はSE-57による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-55°-Eであった。規模は主軸長5.2m、副軸長5.1m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出された。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は東・

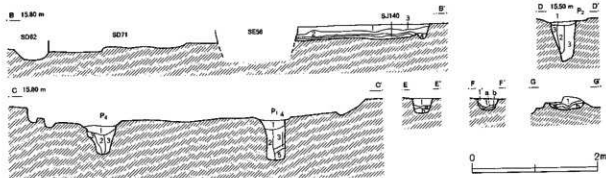
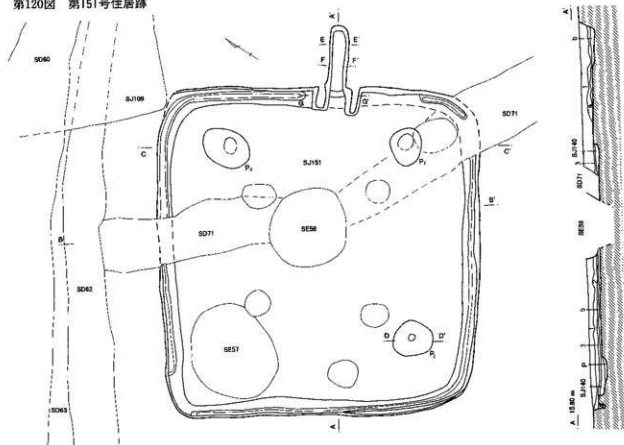
西のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出された。P3はSE-57によって検出できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-140、SD-71、SE-56・57と重複していた。重複関係は、SD-71、SE-56・57に切られ、SJ-140を切っていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第120図 第151号住居跡



第151号住居跡礎土

- 1 灰褐色 (10YR3/2) 粘性強 R風化多少含 C不含 B風化多含
- 2 灰褐色 (10YR3/2) 1層に同 R不含
- 3 灰褐色 (10YR5/6) 新住居礎床 B毛体 灰褐色粘質土層下含
- 4 灰褐色 (10YR3/2) 粘性強 R C不含 B未風化多少含
- 5 灰褐色 (10YR3/2) 床面直上1層 1層に同 C風化少含

第151号住居跡柱穴礎土

- 1 灰褐色 (10YR2/1) 灰褐色粘土毛体 B風化多少含 R未風化多少含

- 2 灰褐色 (10YR3/1) 1層に同 RやB多含 R少含
- 3 灰褐色 (10YR3/1) 1層に同 B粒大含
- 4 灰褐色 (10YR2/1) 1層に同 B不含
- 5 黄色 (2.5Y5/6) Bの埋戻

第151号住居跡カマド礎土

- a 赤色 (2.5YR4/6) 灰色粘土主体 赤色R未風化多含
- b 灰色 (5B3/1) 灰色砂質CM土体

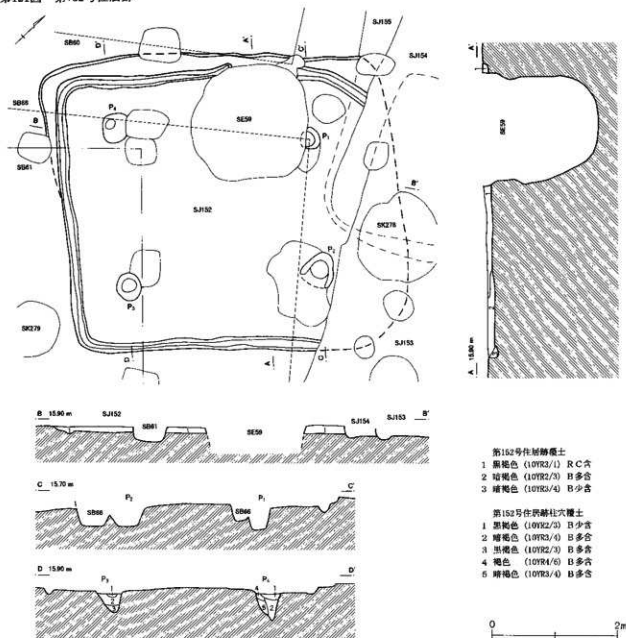
第152号住居跡 (第121・122図)

第152号住居跡は、W-14・15グリッドから検出した。住居跡の北側の壁は、SJ-153～155による擾乱のために、北側コーナー付近の床面はSE-59による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位は

N-49°-Wであった。規模は主軸長4.4m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検

第121図 第152号住居跡



出できた。

検出した柱穴の中で、P1・P4はSB-66のP1・P2とそれぞれ重複していた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

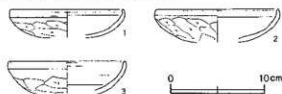
住居跡は、SJ-153・154・155、SB-60・61・66、SE-59、SK-278と重複していた。重複関係は、SJ-154、SB-61、SE-59に切られ、SJ-153を切り、SJ-155、SB-60・66、SK-278とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。

この中で、第122図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

図示可能な環類は、いずれもいわゆる北武蔵型の環で、共存する他の系統の環類や、甕の破片などの組成を明らかにすることができなかった。

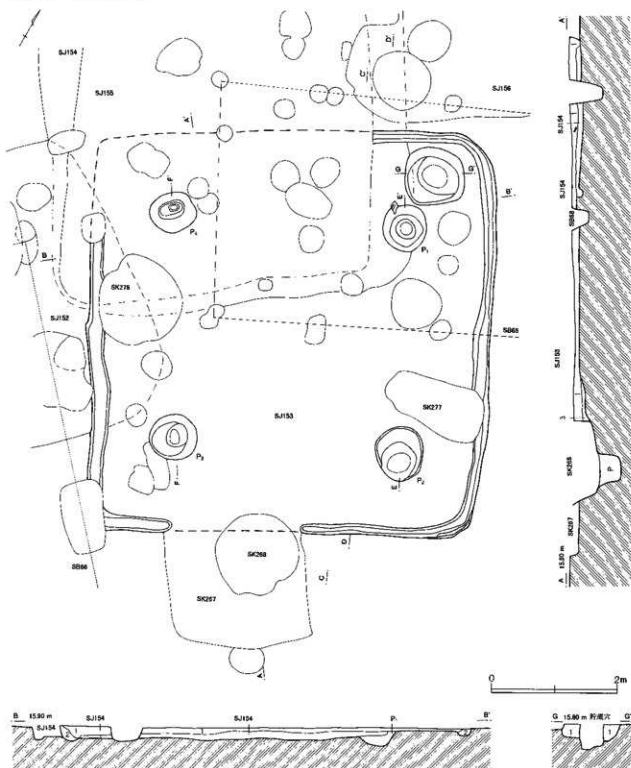
第122図 第152号住居跡出土遺物



第152号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(12.0)			ACDF	3	淡橙褐色	30	
2	坏	(13.0)			ACF	3	明赤褐色	30	
3	坏	(12.4)			ACDEF	2	淡褐色	40	

第123図 第153号住居跡



第153号住居跡出土土物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.4)			ACF	2	赤褐色	30	赤彩
2	環	(12.9)			ACDF	3	明赤褐色	20	
3	鉢	(10.8)			ACDF	3	黒褐色	20	
4	須恵器蓋	(16.0)			ACFI	1	青灰白色	30	

第153号住居跡 (第123・124図)

第153号住居跡は、V・W-15グリッドから検出した。

住居跡の南側の壁の一部は、SK-267・268による攪乱のために、東壁の一部はSK-277による攪乱のために、南側のコーナーは、SB-66による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-29°-Wであった。規模は主軸長6.4m、副軸長6.4m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は北側のコーナー付近から検出した。床面は明瞭で、壁溝は南壁で一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-152・154・155・156、SB-68、SK-267・268・277・278と重複していた。重複関係は、SK-268に切れ、SJ-154・155を切り、SJ-152・156、SB-68、SK-267・277・278とは不明であった。

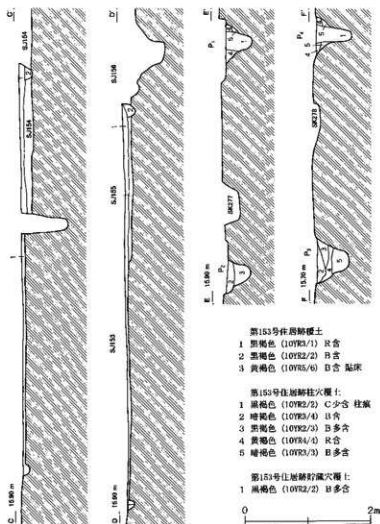
実測可能な遺物として、土師器環、

須恵器環蓋、鉄釘、手捏ね土器などを検出した。

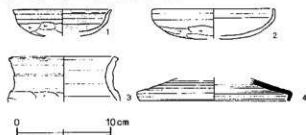
この中で、第124図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

なお、SJ-153・154・155は、その大部分が重複しており、3軒の住居跡から出土した遺物を、調査時に明瞭に分離することができなかった。

したがって、住居跡の重複関係や、遺物出土地点などを勘案して恣意的に遺物を3軒に分離した。



第124図 第153号住居跡出土遺物



第154号住居跡 (第125~127図)

第154号住居跡は、V-14・15、W-14・15グリッドから検出した。

住居跡の北側のコーナーはSJ-156による擾乱のために、南側のコーナーはSJ-152・153、SK-278による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-30°-Wであった。規模は、主軸長6.0m、副軸長5.8m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴は4本検出できた。やや西側に偏っていたが、覆土の状況から柱穴であると判断した。

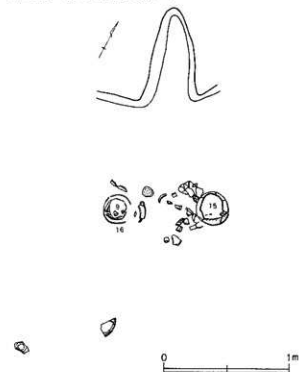
覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-152・153・155・156、SB-66・68、SK-278と重複していた。重複関係は、SJ-153・155に切れ、SJ-152・156、SB-66・68、SK-278とは不明であった。

第154号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(13.6)			ACEFK	2	淡橙褐色	40	暗文

第126図 第154号住居跡カマド



実測可能な遺物として、土師器碗などを検出した。

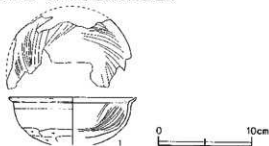
この中で、第125図に示した遺物は、覆土中から検出した。

なお、前述したように、SJ-153・154・155は、その大部分が重複しており、3軒の住居跡から出土した遺物を、調査時に明瞭に分離することができなかった。

したがって、住居跡の重複関係や、遺物出土地点などを勘案して恣意的に遺物を3軒に分離した。

第126図に掲げたカマドの微細図で、カマドの手前から出土している土器は、SJ-154に伴うものではなく、後述のSJ-155に帰属するものであると考えられた。

第125図 第154号住居跡出土遺物



第154号住居跡覆土

- 1 褐色 (10YR4/6) B含 黒褐色土含 粘味
- 2 黒褐色 (10YR2/2) R C含
- 3 暗褐色 (10YR2/3) R B含
- 4 褐色 (10YR4/6) B主体粘味
- 5 黒褐色 (10YR2/2) R多含
- 6 暗褐色 (10YR2/3) R多含
- 7 褐色 (10YR4/6) B含 暗褐色土多含

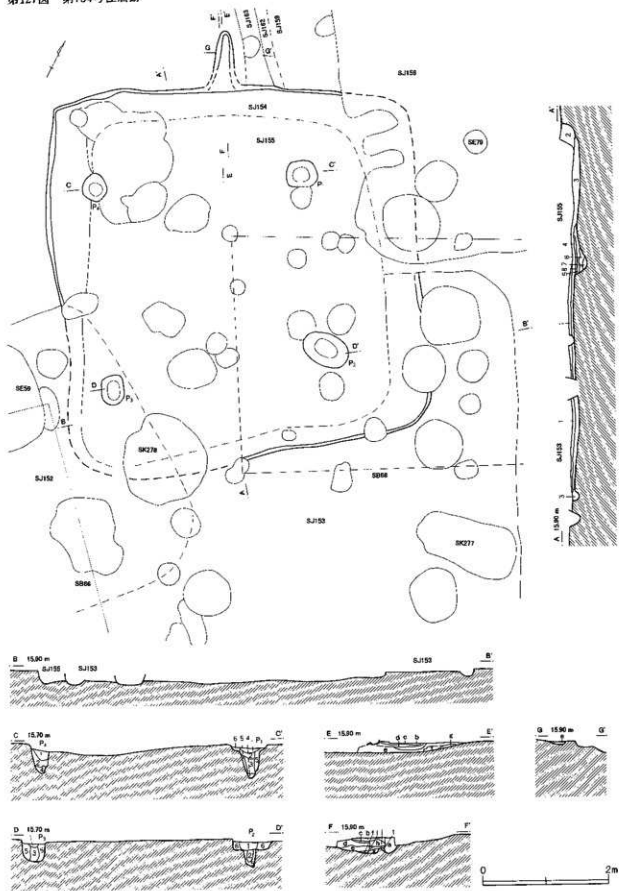
第154号住居跡柱穴覆土

- 1 黄灰色 (2.5Y5/1) 黄灰色土主体 B風化少含 Rや中風化多含 C風化少含
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 1層に同 B多含 R少含
- 3 黄灰色 (2.5Y5/1) 1層に同 B少含 R更に少含
- 4 黄灰色 (2.5Y5/1) 1層に同 B少含 R多含
- 5 黄褐色 (10YR5/6) B主体 灰褐色土風化多含
- 6 黄褐色 (10YR5/6) 5層に同 ややR含

第154号住居跡カマド覆土

- a 灰褐色 (10YR2/3) SJ-166壁土: B
- b 灰褐色 (10YR2/3) Rや中風化多含 C不 含 B風化微含 天井崩壊土?
- c 灰褐色 (10YR2/3) R風化多含 C風化多少含 B風化多少含
- d 灰褐色 (10YR2/3) 2層に同 ややR少含 B多含
- e 灰褐色 (10YR2/3) 2層に同 R更にR少含 B多含
- f 灰褐色 (10YR2/3) 2層に同 R更にR少含 B多含
- g 灰褐色 (10YR2/3) 2層に同 R更にR少含 B多含
- h 灰褐色 (10YR2/3) R未風化多含 C風化少含 B未風化少含
- i 灰褐色 (10YR2/3) 7層に同 Rや中 少含
- j 灰褐色 (10YR2/3) 7層に同 Rや中 少含
- k 灰褐色 (10YR2/3) 7層に同 R多含
- l 灰褐色 (10YR2/3) 7層に同 R多含

第127图 第154号住居跡



第155号住居跡 (第128・129図)

第155号住居跡は、V・W-15グリッドから検出した。

住居跡の北側コーナーはSJ-156による擾乱のために、南側コーナーはSJ-152による擾乱のために、東側のコーナーはSJ-153による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-24°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長4.8m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴はSJ-154のものと同別できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

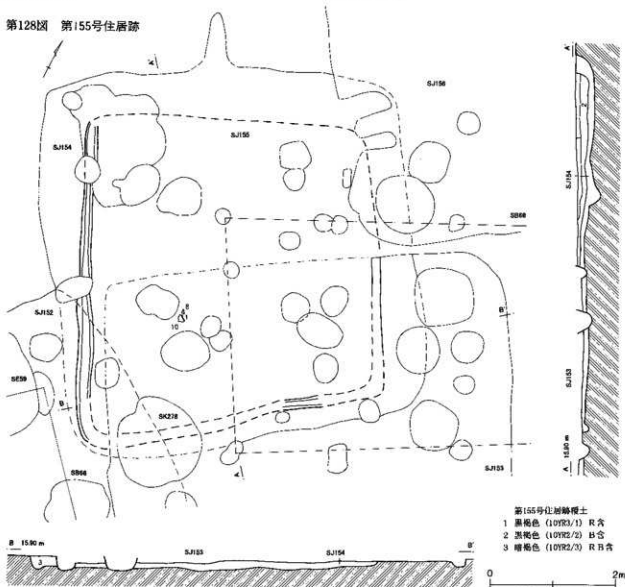
住居跡は、SJ-152・153・154・156、SB-66・68、SK-278と重複していた。重複関係はSJ-153に切れ、SJ-154を切り、SJ-152・156、SK-278とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甌などを検出した。

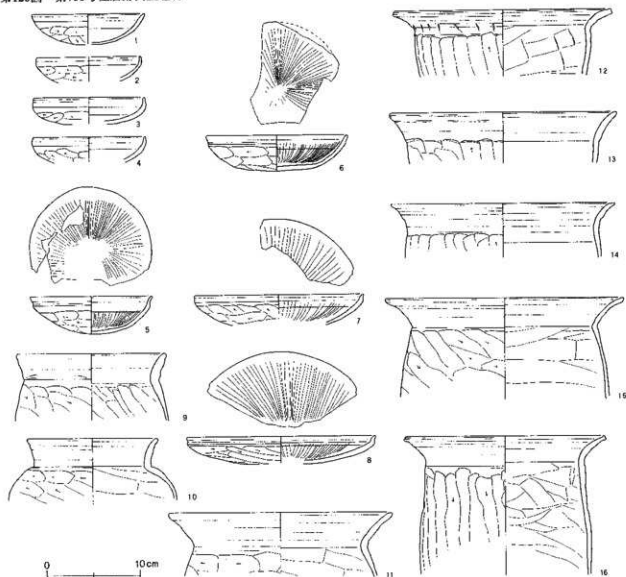
この中で、第129図3の環、9・15・16の甕は住居跡の北側から、8の環、10の甕は中央から、他は覆土からそれぞれ検出した。

なお、前述したように、SJ-153・154・155は重複しており、調査時に遺物を分離することができなかったため、報告時に恣意的に分離、掲載した。第126図に掲げたカマド詳細図中の土器は、本住居跡に帰属すると考えられた。

第128図 第155号住居跡



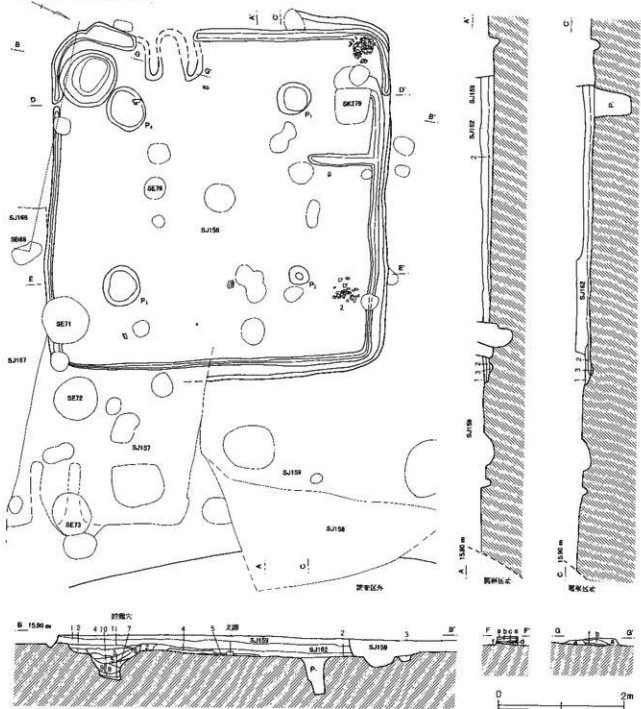
第129图 第155号住居跡出土遺物



第155号住居跡出土遺物觀察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(12.0)			ACDF	3	明赤褐色	30	
2	坏	(11.0)			ACDF	3	明赤褐色	30	
3	坏	(11.8)			ACDFK	3	淡灰褐色	30	
4	坏	(12.0)			ACDF	3	橙褐色	30	
5	坏	(13.0)	4.0		ACDF	3	橙褐色	60	暗文
6	坏	(15.0)	3.8		ACDF	3	明赤褐色	40	暗文
7	坏	(18.0)			ACDF	2	淡灰褐色	20	暗文
8	坏	(20.0)			ACDEF	2	淡褐色	30	暗文
9	甕	(15.9)			ACDEFK	2	暗赤褐色	20	
10	甕	(14.0)			ACDF	2	黑褐色	10	
11	甕	(23.8)			ACDF	2	淡橙褐色	20	
12	甕	(23.2)			ACDEFHK	2	暗赤褐色	10	
13	甕	(24.1)			ACDF	3	淡灰褐色	10	
14	甕	(24.0)			ACDF	3	橙褐色	10	
15	甕	25.4			ACDEFK	3	淡橙褐色	40	
16	甕	21.1			ACDEFK	2	赤褐色	50	

第130図 第156号住居跡



第156号住居跡層土

- 1 黒褐色 (10YR2/1) R本風化割合 C不含有 本風化多少含
- 2 黒褐色 (10YR3/2) R不含有 C未風化割合 B風化多含
- 3 紫褐色 (10YR2/2) R不含有 C不含有 B風化多含
- 4 黄褐色 (10YR2/2) R風化多少含 C未風化割合 B風化多含

第156号住居跡カマコ層土

- a 灰褐色 (10YR4/1) Rやや風化多少含 C風化多少含 B風化多少含
構造外層からの混入土層
- b 黄褐色 (10YR4/3) R風化多少含 C風化少含 B風化多含 穴井崩落層
- c 黄褐色 (10YR4/3) R風化少含 C風化少含 B風化多少含
- d 灰褐色 (10YR4/1) R風化多含 C風化少含 B風化多少含
- e 黄褐色 (10YR4/3) R風化少含 C風化少含 B多含
- f 灰褐色 (10YR2/1) R風化多少含 C風化多少含

第156号住居跡貯蔵穴層土

- 1 灰褐色 (10YR2/3) R風化多少 C風化少含 B風化少含
- 2 灰褐色 (10YR3/4) R風化多含 C風化少含 B風化多含
- 3 灰褐色 (10YR2/3) R C不含有 B風化多含
- 4 黄褐色 (10YR3/4) 20層に同じ ややR含
- 5 黄褐色 (10YR2/3) 20層に同じ
- 6 灰褐色 (10YR2/3) 20層に同じ ややB少含
- 7 黄褐色 (10YR2/3) 20層に同じ ややB多含
- 8 灰褐色 (10YR2/1) 20層に同じ R不含有 粘性強
- 9 黄褐色 (10YR3/1) 20層に同じ 粘性強
- 10 黄褐色 (10YR2/2) 20層に同じ R C不含有 粘性強
- 11 黄褐色 (10YR2/2) 20層に同じ R C不含有 37層よりややB少含

第156号住居跡 (第130・131図)

第156号住居跡は、V-15グリッドから検出した。

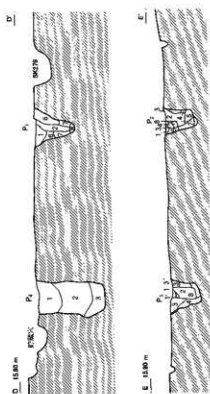
住居跡のカマド周辺は、SJ-154・155による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はS-67°-Eであった。規模は主軸長5.3m、副軸長5.4m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、西側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。床面は明瞭で、壁溝は全周していた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-154・155・157・158・159・162・163・167・168、SB-68、SE-71と重複していた。重複関係は、SJ-159・162・163に切られ、SJ-154・155・157・158・167・168、SB-68、SE-71とは不明であった。

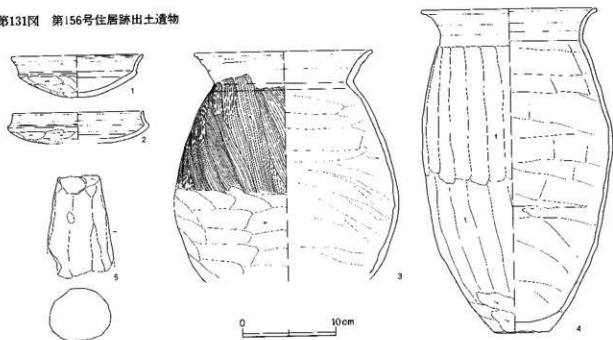
実測可能な遺物として、土脚器環、甕、磁石、支脚、紡錘車、土製品などを検出した。

この中で、第131図4の甕は住居跡北側のコーナー付近から、支脚はカマド周辺から、紡錘車は北東側から、他は覆土からそれぞれ検出した。



- 第156号住居跡
柱穴覆土
- 1 灰褐色 (10YR3/1)
灰褐色土主体
R風化多含
C風化多含
B風化多含
 - 2 灰褐色 (10YR2/1)
灰褐色土主体
R風化微含
B風化少含
 - 3 灰褐色 (10YR2/1)
2層に同
2層よりB多含
 - 4 灰褐色 (10YR2/1)
2層に同
灰褐色土多含
B少含
 - 5 灰褐色 (10YR2/1)
2層に同
多量B多含
 - 6 灰褐色 (10YR2/1)
2層に同
わずかにB少含
 - 7 灰褐色 (10YR2/1)
2層に同
わずかにB多含
 - 8 灰色 (10YR4/1)
灰色粘土層

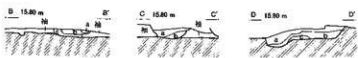
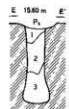
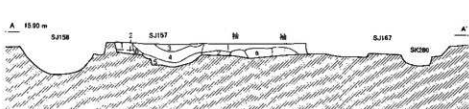
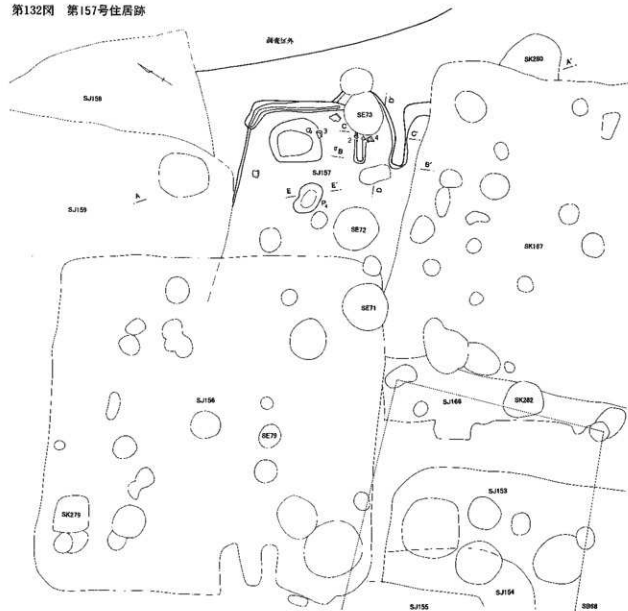
第131図 第156号住居跡出土遺物



第156号住居跡出土遺物観察表

Na	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.1)	4.4		ACDEF	3	淡橙褐色	40	
2	環	(14.0)			ACDEF	2	暗赤褐色	30	
3	甕	(18.9)			ACFK	2	淡褐色	30	
4	甕	(18.6)	34.2	5.8	ACFHK	3	淡橙褐色	60	
5	支脚				AC	2	淡褐色		

第132岡 第157号住居跡



第157号住居跡柱穴掘土
 1 灰青色 (10YR3/1) 灰青色土主体 B層化多少含 R層化少含
 2 灰青色 (10YR3/1) 1層よりややB多含
 3 灰青色 (10YR3/1) 1層よりやや砂質

第157号住居跡壁1

- 1 黄褐色 (10YR3/4) R層化多少含 C層化少含 B層化多少含 a 黄褐色 (10YR3/4) 尺月瀬高層 B半体 硬質
- 2 黄褐色 (10YR3/4) 1層に同じ ややB小さい R層化多少含 C不含
- 3 黄褐色 (10YR4/3) Rや中層化多少含 C層化多少含
- 4 灰褐色 (10YR4/3) R未層化少含 C層化少含 B層化多少含
- 5 灰褐色 (10YR2/2) R層化多少含 C層化少含 B層化多少含
- 6 灰褐色 (10YR2/2) 5層に同じ ややB新鮮

第157号住居跡壁2掘土

- 1 灰色 (10BG4/1) 灰色灰層 砂質灰主体 Rや中層化多少含 C層化多少含
- 2 灰色 (10BG3/1) 灰層上の灰層 粘より強灰主体 Rや中層化多少含 C層化多少含



第157号住居跡 (第132・133図)

第157号住居跡は、V-15・16グリッドから検出した。住居跡の西側はSJ-156による擾乱のために、カマドはSE-73による擾乱のために、南側はSJ-167による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-57°-Eであった。規模は深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。カマド内からは甕の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。床面は不明瞭で、壁溝はカマド左側のみ検出できた。柱穴は1本検出できた。

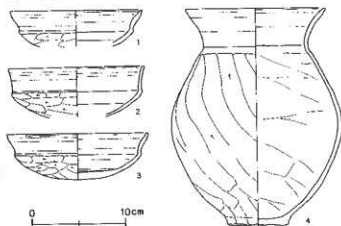
床面上から検出した他のピットは、覆土の状況等から考えて、当該住居跡の柱穴ではないと判断した。

住居跡は、SJ-156・158・159・167・168、SB-68、SE-71・72・73と重複していた。重複関係は、SJ-167に切れ、SJ-156・158・159・168、SB-68、SD-71・72・73とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、手捏ね上器などを検出した。

この中で、第133図2の環はカマド周辺から、4の甕はカマド内から、3の環は貯蔵穴から、他は覆土から検出した。

第133図 第157号住居跡出土遺物



第157号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕	(14.0)			ACEF	3	橙褐色	10	
2	環	(14.4)			ACDEF	3	明赤褐色	20	
3	環	(15.0)	4.8		ACEF	3	橙褐色	40	
4	甕	(14.9)	23.0	6.6	ACEFHK	3	淡褐色	40	

第158号住居跡 (第137図)

第158号住居跡は、U・V-15グリッドから検出した。住居跡の西側は、SJ-159による擾乱のために検出できなかった。主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドも検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝は東側のコーナーで検出できた。検出した壁溝はやや幅広く、掘り方である可能性も考えられた。柱穴は周辺を精査したが、検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-156・157・159と重複していた。重複関係は、SJ-156・159を切り、SJ-157とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第159号住居跡 (第134～136図)

第159号住居跡は、U-15、U・V-14・15グリッドから検出した。

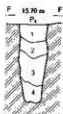
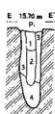
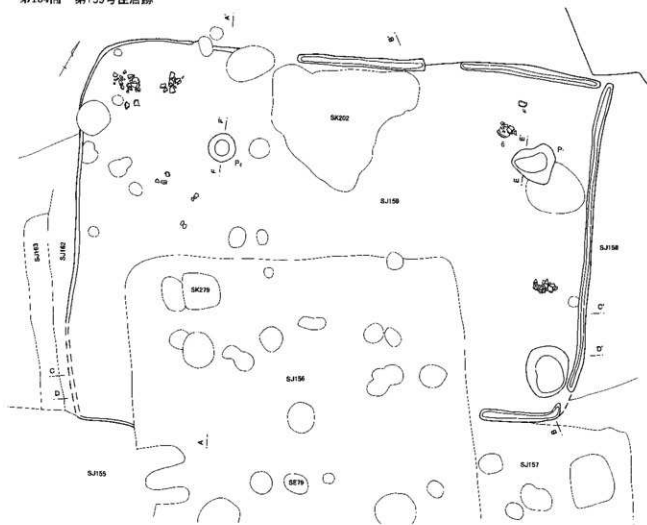
住居跡の南側は、SJ-156による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-27°-Wであった。規模は主軸長8.2m、副軸長5.7m、深さ20cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は東側コーナーから検出し、覆土内から高環が検出できた。床面は明瞭で、壁溝は北側と東側で検出できた。柱穴も2本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-154～158・160～163と重複していた。重複関係は、SJ-156・158に切れ、SJ-154・155・157・160～163とは不明であった。

実測可能な遺物として土師器環、甕、高環、鉄製の

第134图 第159号住居跡

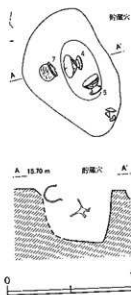
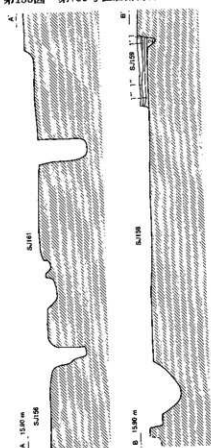


第159号住居跡概況:

- 1 灰褐色 (10YR5/1) RC不含有 B層化 多含 中硬い
- 2 灰褐色 (10YR5/2) RC不含有 B未層化多含 中粘伴有



第135図 第159号住居跡貯蔵穴



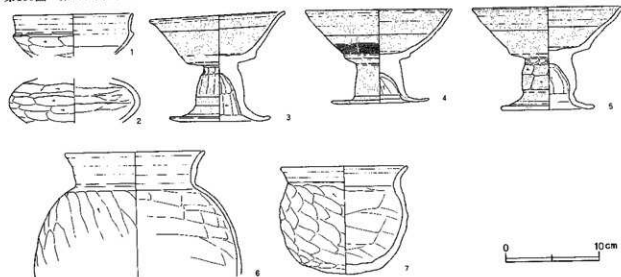
第159号住居跡貯蔵穴横土

- 1 灰褐色 (10YR3/1) やや粘性のある灰黒色土主体 R多少含 C少量含
- 2 灰褐色 (10YR3/1) 1層に同じ Rやや大きく多い
- 3 灰褐色 (10YR3/1) 1層に同じ Rやや少なく大きい 目小含
- 4 灰褐色 (10YR3/1) 1層に同じ Rやや少ない

第159号住居跡貯蔵穴横土

- 1 灰褐色 (10YR3/3) R多少含 C小含 目多少含
- 2 灰褐色 (10YR3/2) 1層に同じ Rやや多い

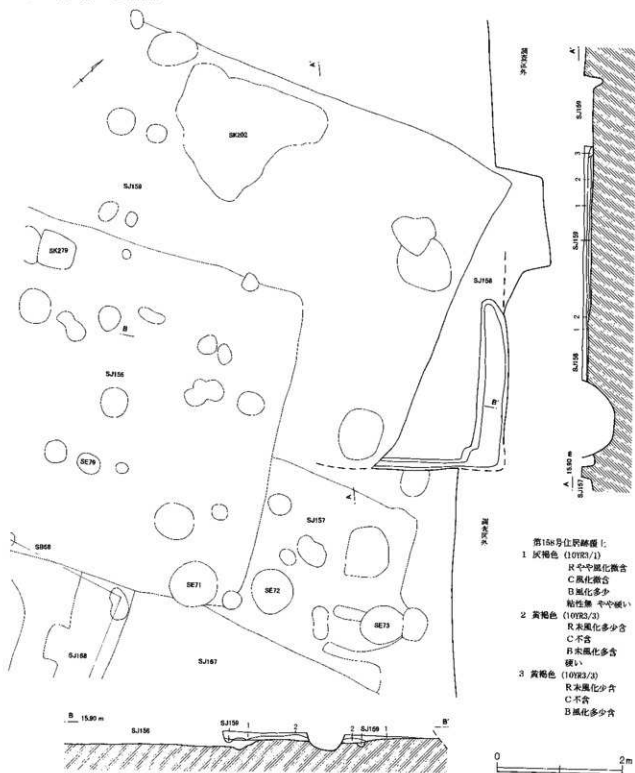
第136図 第159号住居跡出土遺物



鏡、白玉などを検出した。この中で、第136図4・5の高坏、7の壺は貯蔵穴の中から、6の壺は北側のコーナー付近から、他は覆土からそれぞれ検出した。

本住居跡は重複が著しく、遺存状態も悪かったが、貯蔵穴中から良好な一括と見なせる資料が出土した。また、住居跡の壁際から、いくらかの遺物が出土した

第137図 第158号住居跡



が、貯蔵穴以外の場所から出土した遺物に関しては、本住居跡への帰属関係は明らかにできなかった。

本住居跡出土遺物の中で、高環に注目して貯蔵穴内から出土した4・5と、覆土中から出土した3を比べ

てみると、貯蔵穴内から出土した4・5は形態的にもまとまりがよく、単脚で脚部が太く作られており、一方、覆土中から出土した3の高環は、脚部がやや長く脚部下半の横位の押さえか明確であった。

第159号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.7)			ACF	3	淡灰褐色	20	
2	塔				ACDF	3	黒褐色	50	
3	高環	14.5	11.2	10.8	ACFK	2	赤褐色	70	赤彩
4	高環	15.6	9.8	10.4	ACF	2	赤褐色	80	赤彩
5	高環	16.1	10.9	10.0	ACDFK	2	赤褐色	100	赤彩
6	甗	15.0			ACDEFK	3	淡褐色	30	
7	壺	13.5	11.4		ACEFK	3	淡灰褐色	100	

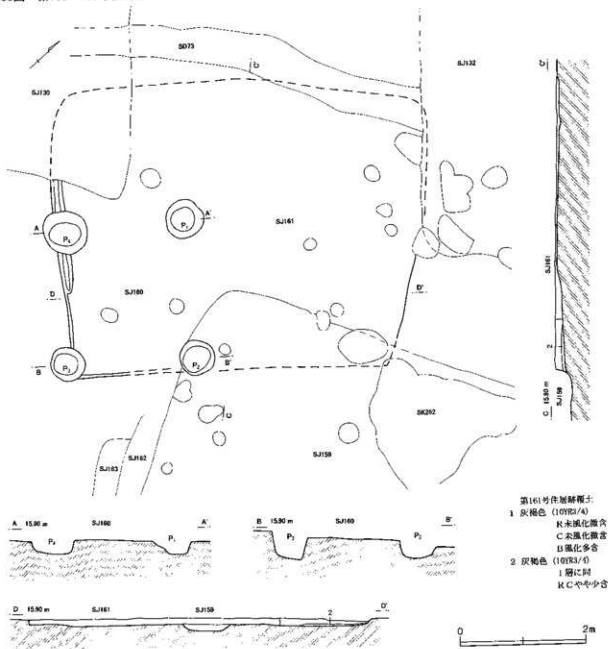
第160号住居跡 (第138図)

ら検出した。

第160号住居跡は、U-14・15、V-14・15グリッドか

住居跡は、確認面では柱穴の痕跡程度しか残存して

第138図 第160・161号住居跡



いなかった。

壁は不明瞭で、カマドも検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。周辺の地山を精査したが、床面も不明瞭で壁溝も検出できなかった。柱穴は4本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-130・132・159・161・162・163、SD-73と重複していた。

重複関係は、全て不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

本遺構は、ピットが4本配列したものであったが、ピットの形態と規模、覆土と配置、および周辺の遺構の状況から、掘立柱建物跡ではなく、住居跡の痕跡であると判断した。

第139図 第161号住居跡出土遺物



第161号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.0)			ACDF	2	赤褐色	10	胎文

第162号住居跡 (第140図)

第162号住居跡は、V-15グリッドから検出した。

住居跡の大半は、SJ-154・155・156・159・163による捜査のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。

壁は不明瞭で、カマドも検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝は西側のみ検出できた。柱穴も検出できなかった。

住居跡は、SJ-154・155・156・159・163、SK-279と重複していた。重複関係は、全て不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

本住居跡として検出した遺構は、3 m足らずの壁溝状の溝のみであり、この溝についても重複する他の住居跡の壁溝である可能性や、間仕切り溝である可能性も考えられた。更に、カマドや貯蔵穴、あるいは柱穴も全く検出できなかったが、住居跡と判断した。

第161号住居跡 (第138・139図)

第161号住居跡は、U-14・15、V-14・15グリッドから検出した。

住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存しておらず、両側コーナー以外は検出できなかった。深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドも検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面はやや不明瞭で、壁溝は南壁の一部で検出できた。床面を精査したが、柱穴は検出できなかった。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-130・132・159・160・162・163、SD-73と重複していた。重複関係は、SJ-159を切り、他とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環を覆土中から検出した。ただし、検出した遺物が本住居跡に帰属する積極的な根拠に乏しく、他の重複する遺構に帰属する可能性も考えられた。

第163号住居跡 (第140図)

第163号住居跡は、V-15グリッドから検出した。

住居跡の大半は、SJ-154・155・156・159による捜査のために検出できなかった。住居跡は、確認面では痕跡程度しか残存していなかった。

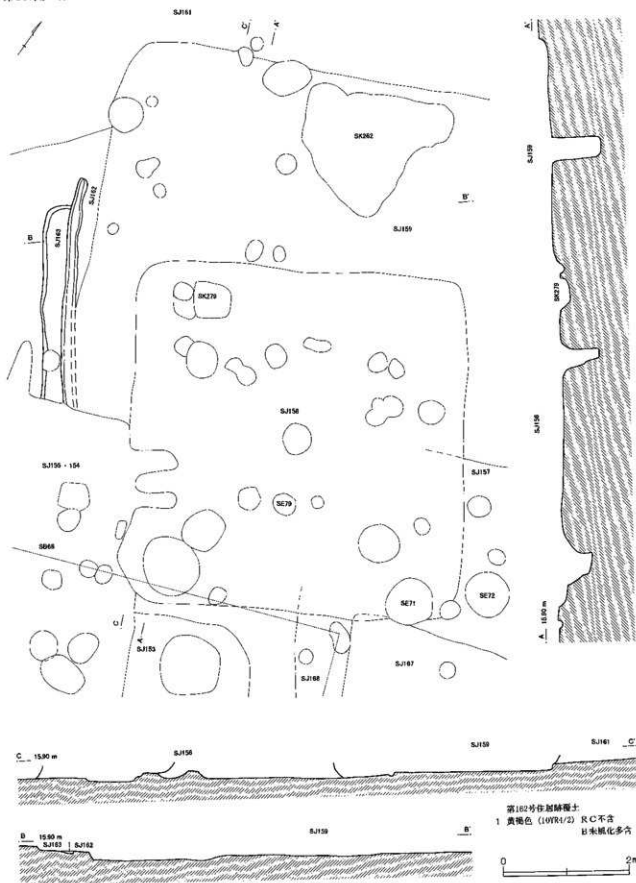
壁は不明瞭で、カマドも検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝も検出できなかった。柱穴も周辺を精査したが検出することができなかった。

住居跡は、SJ-154・155・156・159・162、SK-279と重複していた。重複関係は、全て不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

当該遺構は、3 m足らずの壁溝状の溝のみであり、ここでも前述したSJ-162同様に、壁溝ではない可能性があり、カマドその他の痕跡も検出できなかったが、住居跡と判断した。

第140图 第162·163号住居跡



第164号住居跡 (第141・142図)

第164号住居跡は、W-13グリッドから検出した。

住居跡の大半は検出できなかった。住居跡は、確認面では痕跡程度しか残存していなかった。

第141図 第164号住居跡



- 第164号住居跡層上
- 1 鈍灰褐色 (10YR4/3) R 多 C 少
緑色
 - 2 暗褐色 (10YR3/2) R 多 C 少
 - 3 黒色 (10YR2/1) C 多

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝も検出できなかった。柱穴も検出できなかった。床面には炭化材が散乱しており、いわゆる火災住居と考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-150と重複していた。重複関係は、不明であった。

実測可能な遺物として、土師器を床面から検出した。

第142図 第164号住居跡出土遺物



第164号住居跡出土遺物観察表

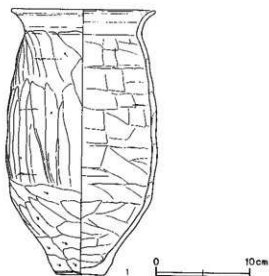
No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕			7.4	ACDEFHK	2	淡灰褐色	20	

第165号住居跡 (第143・144図)

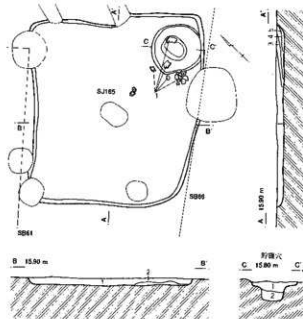
第165号住居跡は、W・X-15グリッドから検出した。

住居跡の北側コーナーはSB-61による攪乱のために、西側コーナーはビットによる攪乱のために、南側の壁の一部はSB-66による攪乱のために検出できなかった。

第144図 第165号住居跡出土遺物



第143図 第165号住居跡



- 第165号住居跡層上:
- 1 黒褐色 (10YR2/3) R C 多
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) R 多
 - 3 褐色 (10YR4/4) R 多
 - 4 黒褐色 (10YR2/1) R C M 多
 - 5 暗褐色 (10YR3/3) C 多

- 第165号住居跡貯蔵穴覆土:
- 1 黒褐色 (10YR2/1) R 微量 B 少 C 多
粘性やや有
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) B 多 C 多 粘性有

形態は方形で、主軸方位はN-44°-Eで、規模は主軸長2.9m、副軸長2.6m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は東コーナーから検出し、覆土内から甕が検出できた。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴も床面を精査したが検出できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SB-61・66と重複していた。重複関係は、SB-61・66に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器甕を貯蔵穴から検出した。

第165号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕	(15.3)	28.0	5.0	ACDEFK	3	暗赤褐色	60	

第166号住居跡 (第145図)

第166号住居跡は、W-16・17グリッドから検出した。

住居跡の西側は、SD-74による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-60°-Eであった。規模は、主軸長3.0m、副軸長3.5m、深さ5cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は南側と西側の壁で検出できた。柱穴は1本検出できた。

住居跡は、SD-74、SB-65と重複していた。重複関係は、SD-74に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第167号住居跡 (第146・147図)

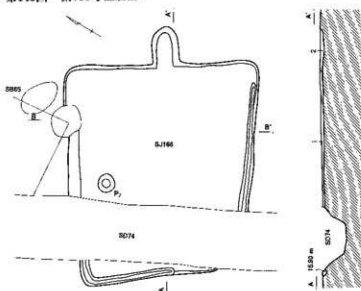
第167号住居跡は、V・W-15・16グリッドから検出した。

住居跡の西側のコーナーは、SJ-156、SE-71による攪乱のために検出できなかった。

形態は方形で、主軸方位はN-21°-Wであった。規模は主軸長5.1m、副軸長5.1m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。

第145図 第166号住居跡

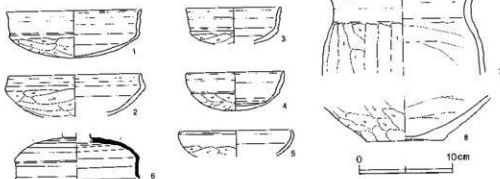


第166号住居跡遺物

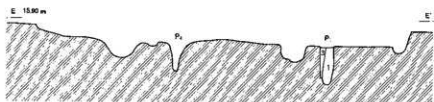
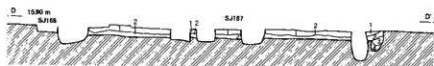
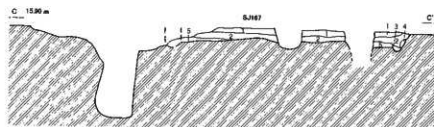
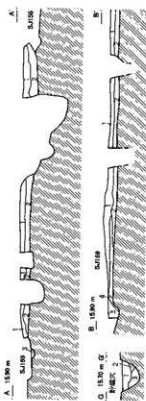
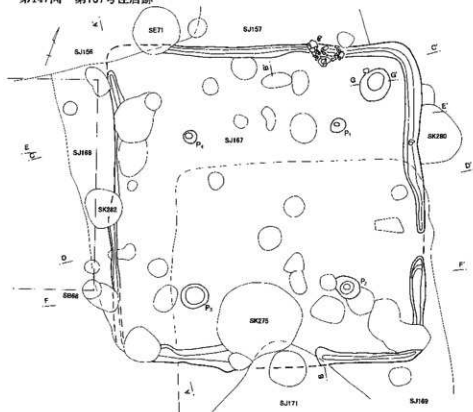
- 1 褐色 (10TR/4) RC混入 網りやや否
- 2 藍色 (10TR/4) RC混 網りやや否



第146図 第167号住居跡出土遺物



第147网 第167号住居跡



第167号住居跡層土

- 1 暗褐色 (10YR2/4) B多含
RC散含
- 2 暗褐色 (10YR2/4) I層上体
B多含
- 3 暗褐色 (10YR2/3) B多含
綿り弱
- 4 褐色 (10YR4/6) B含
- 5 黒褐色 (10YR2/3) 底床
綿り強

第167号住居跡柱穴層土

- 1 暗褐色 (10YR2/4) RC含
綿りや平弱
- 2 暗褐色 (10YR2/4) BC含
やや綿まる
- 3 暗褐色 (10YR2/3) B混入
綿る

第167号住居跡貯蔵穴層土

- 1 暗褐色 (10YR2/4) BC含
R混入
- 2 暗褐色 (10YR2/4) B多含
綿る
- 3 暗褐色 (10YR2/3) RC混入
綿る



貯蔵穴は北側コーナー付近から検出した。床面は明瞭で、嵌溝は西のコーナーと南壁で一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-156・157・168・169・171、SK-275・280と重複していた。重複関係は、SJ-156・157・171を切

り、SJ-168・169、SK-275・280とは不明であった。

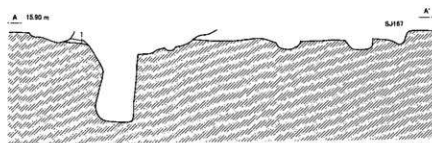
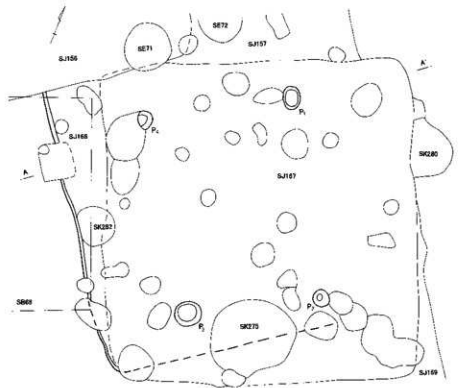
実測可能な遺物として、土師器環、甕、須恵器環蓋などを検出した。

この中で、第146図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。出土遺物には、大別して二時期のものが混在していた。

第167号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.3)	5.0		ACDEF	3	淡橙褐色	50	
2	環	(14.0)			ACDEF	3	赤褐色	20	
3	環	(10.0)			ACDEF	2	橙褐色	20	
4	環	(10.4)	4.1		ACDF	3	淡褐色	50	
5	環	(11.9)			ACDF	3	淡橙褐色	20	
6	須恵器環蓋	13.2			ACD	1	青灰色	20	
7	甕	(16.0)			ACDEFHK	3	橙褐色	20	
8	甕			8.2	ACDEFHK	2	橙褐色	10	

第148図 第168号住居跡



第168号住居跡層 I:
 1 赤褐色 (10YR2/3)
 大型砂質土多含
 粘まり強



第168号住居跡 (第148図)

第168号住居跡は、V・W-15・16グリッドから検出した。住居跡の大半は、SJ-156・157・167による攪乱のため検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-35°-Wであった。規模は不明であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴は4本検出できたが、やや浅かった。

住居跡は、SJ-156・157・167・169、SK-275・282
第149図 第169号住居跡

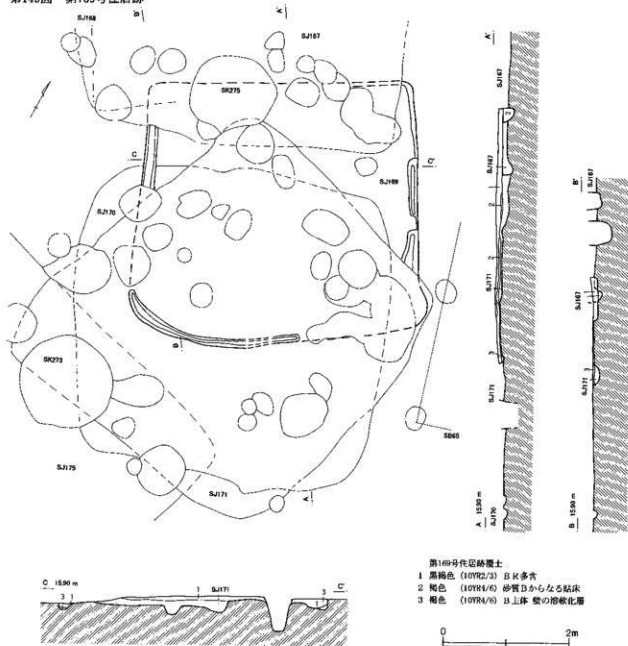
と重複していた。重複関係は不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第169号住居跡 (第149図)

第169号住居跡は、V・W-16グリッドから検出した。住居跡の北側の壁は、SJ-167、SK-275による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-28°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長4.4m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北



第169号住居跡遺土

- 1 黒褐色 (10YR2/3) B R 多穴
- 2 褐色 (10YR4/6) 砂質Bからなる結床
- 3 褐色 (10YR4/6) B 上層 壁の溶融化層

0 2m

側のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-167・168・170・171、SK-273と重複していた。重複関係はSJ-167・170・171を切り、SJ-168、SK-273とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第170号住居跡出土遺物観察表

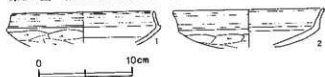
No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(15.0)			ACDF	2	暗赤褐色	20	
2	環	(16.1)			ACDF	2	橙褐色	30	

第170号住居跡 (第150・151区)

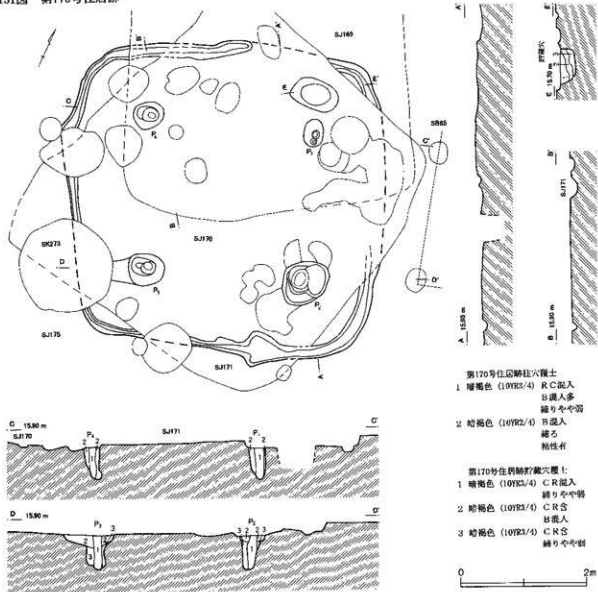
第170号住居跡は、V・W-16グリッドから検出した。

住居跡の東側の壁は、SJ-169・171による擾乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕

第150図 第170号住居跡出土遺物



第151図 第170号住居跡



跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-26°-Wであった。規模は主軸長5.0m、副軸長5.0m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は北側のコーナー付近から検出した。床面はやや不明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

わずかに残された覆土には埋め戻しの痕跡はなく、

自然堆積の状況を示していた。

住居跡はSJ-169・171, SK-273と重複していた。重複関係は, SK-273を切り, SJ-167・171とは不明であった。

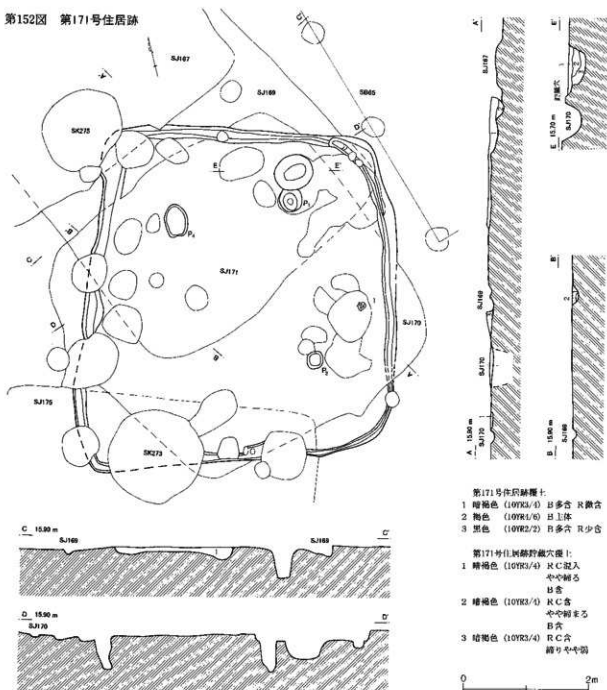
実測可能な遺物として、土師器環を検出した。

この中で、第150図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第171号住居跡 (第152・153図)

第171号住居跡は、V・W-16グリッドから検出した。

第152図 第171号住居跡



形態は方形で、主軸方位はN-14°-Eであった。規模は主軸長5.2m、副軸長5.0m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は東側コーナー付近から検出した。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-167・169・170、SK-273・275と重複していた。重複関係は、SJ-169に切られ、SJ-167を切り、SJ-170、SK-273・275とは不明であった。

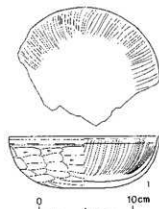
第171号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(16.0)	5.4		ACDEF	2	暗赤褐色	60	暗文

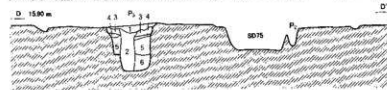
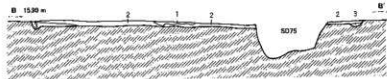
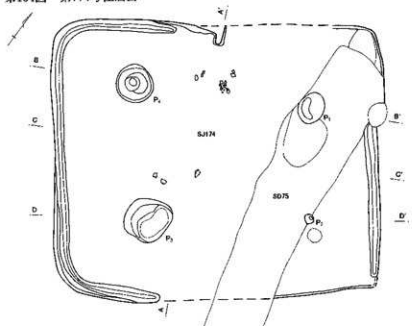
実測可能な遺物として、暗文の施された土師器環を検出した。

第153図1は住居跡東側の床面から検出した。

第153図 第171号住居跡出土遺物



第154図 第174号住居跡



第174号住居跡壁上

- 1 黒褐色 (10YR5/2) RC混入 縞り有
- 2 黒褐色 (10YR3/2) RC混入 縞り有
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘土体 RC混入 縞り有
- 4 黒褐色 (10YR2/3) RC多量

第174号住居跡柱穴覆土

- 1 褐色 (10YR3/2) RC混入 縞り弱
- 2 褐色 (10YR3/3) 粘土体 RC混入 縞り弱
- 3 褐色 (10YR4/4) 粘土体 縞り弱
- 4 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘土体 縞り強
- 5 暗褐色 (10YR3/4) 粘土体 縞り有
- 6 暗褐色 (10YR3/3) 粘土体 縞り有



第174号住居跡 (第154・155図)

第174号住居跡は、W・X-16グリッドから検出した。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。特に北側の壁際での削平が著しく、カマドは痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-44°Wであった。規模は主軸長5.2m、副軸長4.3m、深さ5cm程度であった。

壁はやや不明瞭であり、北側からカマドの痕跡と考えられる遺構が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝は北側のコーナー部分と南東側の壁、及び、カマド左側で一部切れていた。柱穴は4本が明瞭に検出できた。

P1の位置は検出位置がやや東側に偏っていた。またP2は妥当な位置から検出できたが、口径が著しく小さく、深さも他の柱穴に比べて浅かった。P3は柱の掘り方が、掘立柱建物跡の柱掘り方のように大きく、

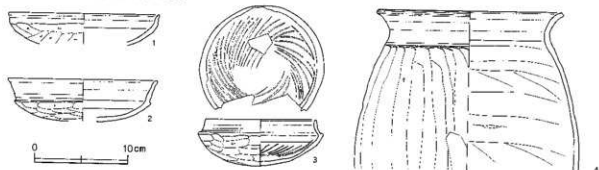
第174号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.7)			ACDEFK	3	黒褐色	10	

第175号住居跡 (第156・157図)

第175号住居跡は、W-15・16グリッドから検出した。住居跡の東側のコーナーから、北側の壁にかけてはSJ-170-171、SK-273による擾乱のために、西側のコーナー付近はSK-269による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-110°Eであった。規模は主軸長5.2m、副軸長5.0m、深さ20cm程度であった。壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚が検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出し、覆土内から甕の破片が検出できた。床

第156図 第175号住居跡出土遺物



他の柱穴とは様相を異にしていた。

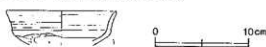
覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SD-75と重複していた。重複関係は、SD-75に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、磁石などを検出した。この中で、第155図に示した遺物は、覆土中から検出した。

住居跡の遺存状態は極めて悪く、検出した遺物も小破片であることから、図示した環と当該住居との帰属関係はやや不明瞭であった。他にも、床面上から土器片が検出できたが、いずれも図示できるほどの大きさに接合することができなかった。

第155図 第174号住居跡出土遺物



面も明瞭で、壁溝は北側の壁の一部で途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。検出した4本の柱穴の中で、P4はやや浅かった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-170・171、SK-269・273、SD-72と重複していた。重複関係は、SK-273に切れ、SJ-170・171、SK-269とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、手捏ね土器、

十玉、白玉などを検出した。

3の土師器環は、底部内面に四単位の放射状暗文が施されていた。

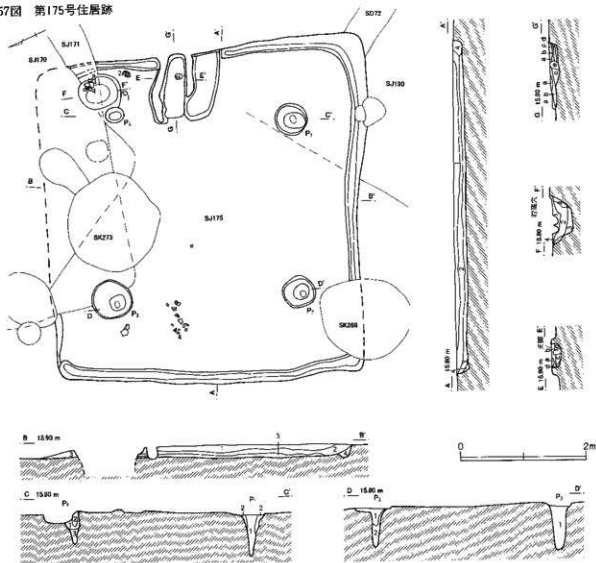
この中で、第156図1・2の環は貯蔵穴とカマドの間から、4の甕は、貯蔵穴内から、他は覆土からそれぞれ検出した。

ただし出土遺物については、1の環はやや小破片で

あり、4の甕は、貯蔵穴内でも比較的覆土の上層から検出され、更に、検出地点の平面的な位置が、SJ-171の重複部分に重なっているため、層位関係は明確にすることができなかった。

図示した以外にも、西側の床面上からも土器破片が検出できたが、いずれも、図示できるほどの大きさに接合することができなかった。

第157図 第175号住居跡



第175号住居跡環土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) RC含 B多含
- 2 暗褐色 (10YR2/3) DC含 Bやや多含
粘性やや有
- 3 黄褐色 (10YR1/3) RC混入 粘りやや有
- 4 黄褐色 (10YR4/3) BC含 粘り有 粘性有

第175号住居跡柱穴覆土

- 1 暗褐色 (2.5YR3/2) 粘土質土層 粘り弱
粘質強
- 2 褐色 (10YR3/1) R混含 BC含
- 3 褐色 (10YR2/4) 砂質B 粘り弱

第175号住居跡貯蔵穴覆土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) B混入 粘り有
- 2 暗褐色 (10YR2/3) B混含 粘性有
- 3 暗褐色 (10YR2/2) B土体 粘性強
- 4 暗褐色 (10YR2/1) D多含 粘り 粘性有

第175住居跡カマド覆土

- a 黄褐色 (10YR2/3) 砂質粘土含 RC含
- b オリーブ色 (5Y5/4) R土体 天井層土
- c 褐色 (7.5YR2/1) M混 R混入
- d 暗褐色 (10YR2/3) B含 粘り
- e 黄褐色 (2.5YR5/4) 砂質粘土 先埋戻土化 支脚

第175号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	模成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(16.0)			ACDF	2	淡橙褐色	20	
2	坏	(16.0)			ACF	2	淡橙褐色	40	
3	坏	11.7	4.9		ACDF	2	暗赤褐色	80	暗文
4	甕	(19.7)			ACDEFHK	3	淡灰褐色	30	

第176号住居跡 (第158・159図)

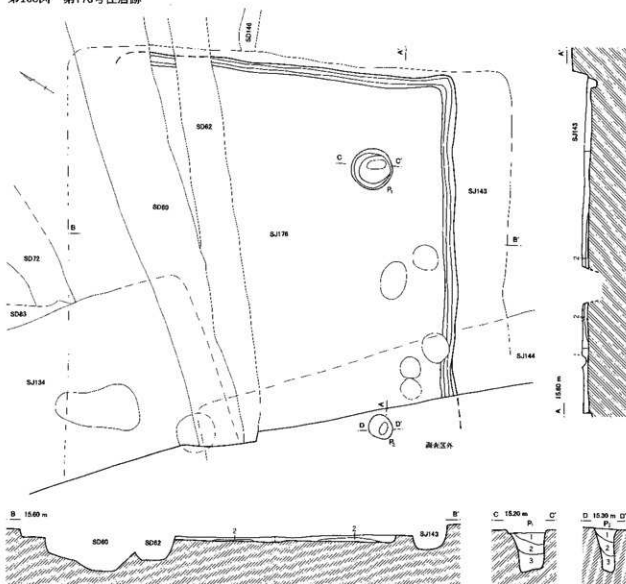
第176号住居跡は、V-10・11、W-10・11グリッドから検出した。

住居跡の西側の壁は調査区外のために、北側はSJ-134・143による擾乱のために、中央部分の床は、SD

-60・62による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-59°-Eであった。規模は不明であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はは

第158図 第176号住居跡



第176号住居跡覆土

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 粘質 砂多穴
- 2 褐色 (10YR4/3) 粘土 粘床

第176号住居跡柱穴覆土

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 粘質 砂多穴
- 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質 砂多穴
- 3 暗褐色 (10YR3/4) やや砂質

0 2m

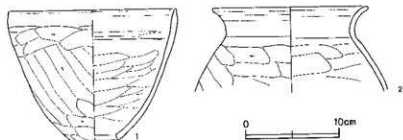
は全周していたと考えられた。柱穴は2本が明確に、1本がやや不明瞭に検出できた。P4はSD-60・62の擾乱によって検出できなかった。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-134・143・144、SD-60・62・72・83と重複していた。重複関係はSJ-143・144、SD-60・62に切られ、SJ-134、SD-72・83とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器壺、瓶、鉄製不明品等を検出した。

この中で、第159図に示した遺物は全て覆土中から検出した。

第159図 第176号住居跡出土遺物



第176号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	瓶	(17.8)	13.8	(5.0)	ACDEF	3	橙褐色	70	
2	壺	(16.6)			ACDEFK	3	橙褐色	20	

第177号住居跡 (第160図)

第177号住居跡は、X-17グリッドから検出した。

住居跡の南側のコーナーは、SB-63による擾乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位

はN-31°Eであった。規模は主軸長2.9m、副軸長3.8m、深さ5cm程度であった。

壁はやや不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面もやや不明瞭で、壁溝は検出できなかった。柱穴も検出できなかった。わずかに残された覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

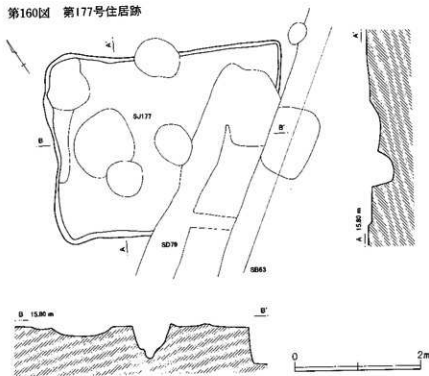
住居跡は、SB-63と重複していた。重複関係は、SB-63に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

調査時には土層観察の所見から、SJ-143よりSJ-176を古いと判断していたが、SJ-143に帰属すると考えられる出土遺物が、模倣不出現期の所産であることから、本住居跡の出土遺物と比較すると、重複関係の認定が誤っていた可能性が考えられた。

規模が小さく、カマド、貯蔵穴、壁溝、柱穴も検出できず、更に実測可能な遺物も検出できなかったことから、住居跡と考えるには若干の問題もあったが、調査時の覆土観察の所見から、当該遺構を住居跡であると判断した。

第160図 第177号住居跡

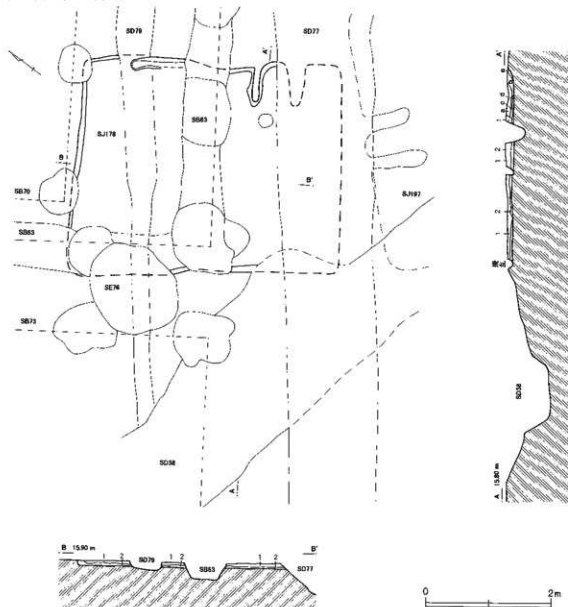


第178号住居跡 (第161図)

第178号住居跡は、X-16・17、Y-16・17グリッドから検出した。

住居跡の南東側の壁はSD-77による攪乱のために、南西側の壁はSD-38、SE-76による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-36°-Eであった。規模は主軸長3.5m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

第161図 第178号住居跡



- 第178号住居跡層上:
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 粘質R少含
 - 2 暗褐色 (10YR3/3) 1層に準ずる R多含 粘性强

- 第178号住居跡カマド覆土:
- 暗褐色 (10YR3/4) 暗褐色粘質土粒・R多含

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は東壁の一部で検出できた。柱穴は検出できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SB-63・70、SD-38・77・79と重複していた。重複関係は、SB-63・70、SD-38・77に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

- 天井・壁の崩落土
- b 暗褐色 (10YR3/4) ●層に準ずる R多含 R少含
 - c 黒色 (10YR2/1) R多含 M層
 - d 灰黄褐色 (10YR4/2) 火灰 あまり検出していないやかなりすきか
 - e 褐色 (10YR4/6) は混 凝の溶化層 R混含

第179号住居跡 (第162図)

第179号住居跡は、X-15・16グリッドから検出した。住居跡の西側と南側はSX-8による攪乱のために、北側はSE-75・78による攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形と想定でき、主軸方位は不明であった。規模も不明であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドの痕跡が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面はやや不明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は1本検出できた。

わずかに残された覆土には埋め戻しの痕跡はなく、

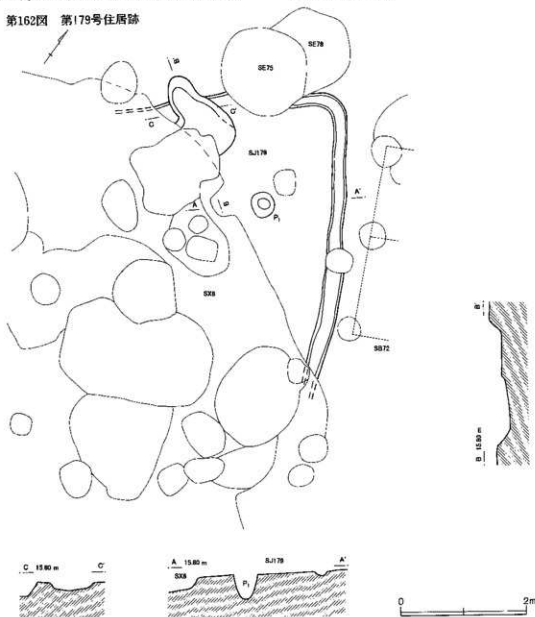
自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SE-75・78、SX-8と重複していた。重複関係は、SE-75・78、SX-8に切られていた。また、SB-72も隣接して検出されており、同時期の存在は不可能なので、論理的に重複していると考えられた。他の住居跡と掘立柱建物跡との重複関係同様に、住居跡より掘立柱建物跡の方が新しいと考えられた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

なお、SX-8は、本住居跡の南側の大半を壊して作られているので、本住居跡に帰属する遺物の多くのが、SX-8に流入し、これの覆土の上層に混入していると考えられた。

第162図 第179号住居跡



第180号住居跡 (第163・164図)

第180号住居跡は、X-15・16、Y-15・16グリッドから検出した。

住居跡の西側は、SX-8による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-30°-Eであった。規模は主軸長4.6m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は4本が明瞭に検出できた。

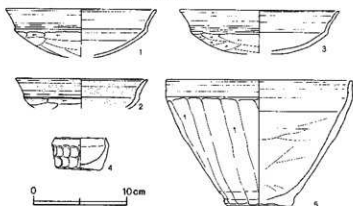
覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡はSJ-181、SD-38・74、SB-73、SX-8と重複していた。重複関係は、SD-38・74、

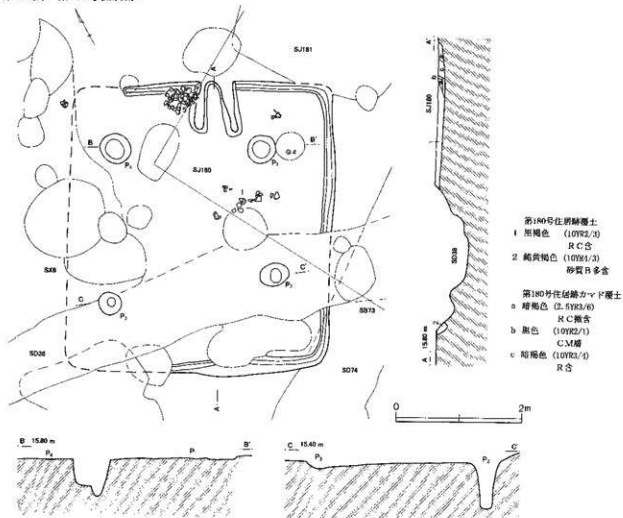
SB-73に切られ、SJ-181とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、他、手摺ね、石製模造品などを検出した。第163図5の鉢はカマドの左側から、1の環は住居跡の中央付近から、4はP1横のピットから、他は覆土からそれぞれ検出した。

第163図 第180号住居跡出土遺物



第164図 第180号住居跡



第180号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(16.0)			ACDF	3	淡橙褐色	40	
2	環	(14.0)			ACFK	2	赤褐色	10	赤彩
3	環	(17.0)			ACDF	2	淡灰褐色	40	
4	手捏ね土器	5.4	3.4	4.5	ACDEFK	3	淡橙褐色	100	
5	鉢	(19.7)	13.3	(6.8)	ACDEFK	3	赤褐色	40	

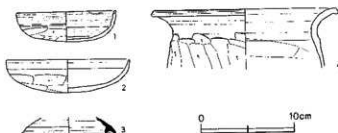
第181号住居跡 (第165・166図)

第181号住居跡は、X-16グリッドから検出した。

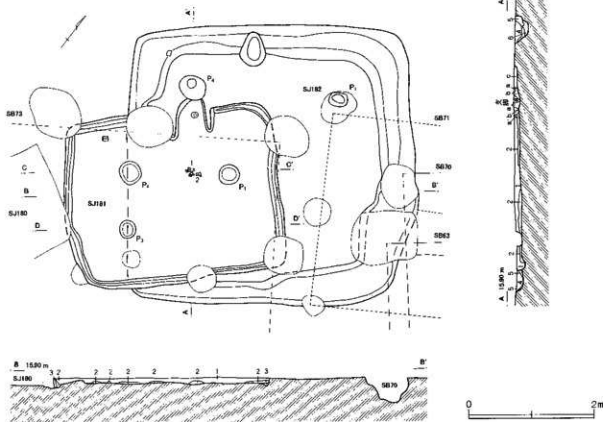
形態は方形で、主軸方位はN-41°-Wであった。規模は主軸長2.7m、副軸長3.4m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出で

第165図 第181号住居跡出土遺物



第166図 第181・182号住居跡



第181・182号住居跡産土

- 1 緑褐色 (10YR2/4) B R C 含 練り粉
- 2 褐色 (10YR4/6) B 多含 磁珠
- 3 褐色 (10YR4/6) B 多含 練り粉
- 4 暗褐色 (10YR3/1) R 混入 練り粉
- 5 暗褐色 (10YR3/1) R やや混入 多 練り粉
- 6 褐色 (10YR4/4) B 混入

第181号住居跡カマド産土

- a 暗褐色 (10YR3/4) B 少含 R やや多含
- b 黒褐色 (10YR2/3) B R 含 やや多含
- c 暗褐色 (10YR3/3) R C 均一多含 練り粉

きた。カマド内からは支脚が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は全周していた。柱穴は、3本検出できた。

住居跡は、SJ-180・182、SB-73と重複していた。重複関係は、SB-73に切られ、SJ-180・182を切っていた。

第181号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	10.5	3.1		ACEFK	3	赤褐色	80	赤彩
2	環	13.1	3.5		ACDF	3	淡橙褐色	60	
3	須恵器環蓋	(10.0)			AC	1	青灰色	10	
4	甕	(20.0)			ACDFK	3	黒褐色	10	

第182号住居跡 (第166・167図)

第182号住居跡は、X-16グリッドから検出した。

住居跡の南側は、SJ-181による擾乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-35°-Wであった。規模は主軸長4.4m、副軸長4.5m程度であった。

壁はやや不明瞭であり、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面はやや明瞭で、壁溝は、太くはほぼ全周していたと考えられた。ただし、ここで壁溝としたものは、掘り方の一部を含んでいると考えられた。

第182号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器長頸瓶			(8.4)	AC	1	灰白色	10	

第183号住居跡 (第168・169図)

第183号住居跡は、X・Y-14グリッドから検出した。

住居跡の南西側のコーナーは調査区外のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-1°-Wであった。規模は主軸長5.4m、副軸長5.6m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚が検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。ただし、貯蔵穴の上にSB-77のP5が重複していた。床面も明瞭で、壁溝はカマド周辺と、東側壁中央から南側壁中央以外で検出できた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、須恵器環蓋などを検出した。この中で、第165図1・2の環はカマド手前の床面から、他は覆土から検出した。上製支脚は地山を削り出したような作りであり、脆弱で取り上げることができなかった。

柱穴は2本が検出できた。この中で、P1はSB-71のP7と重複していた。また、P4はごく浅く痕跡程度であった。P3は重複するSJ-181の貼り床によって不明瞭であるとしても、P2も検出されていないことから、P1、P4については、本住居跡に帰属する柱穴ではない可能性も考えられた。

住居跡は、SJ-181、SB-63・70・71・73と重複していた。重複関係は、SJ-181、SB-63・70・71・73に切られていた。実測可能な遺物として、須恵器長頸瓶を検出した。

第167図 第182号住居跡出土遺物

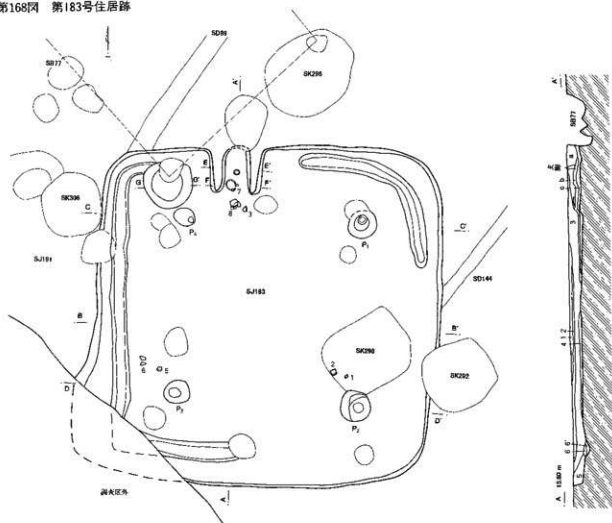


住居跡は、SB-77、SD-89・144、SK-292・298と重複していた。重複関係は、SB-77、SD-89・144、SK-298に切られ、SK-292とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、土釘、土玉などを検出した。

この中で、第169図7の壺はカマド内から、3の環、8の甕はカマドの手前から、5の環、6の鉢は西側から、1・2の環は東側から、他は覆土からそれぞれ検出した。

なお、環1・2の検出地点にはSK-298が重複していたので、当該遺物については、SK-298に帰属する可能性も考えられた。



- 第183号住居跡の横穴覆土
- 1 灰褐色 (10YR3/1) 灰褐色土上層 B層化多含 R未風化多少含 C未風化小含
 - 2 灰褐色 (10YR3/1) 灰褐色土中層 粘質化小含 R未風化小含 全体に風化 中々粘質
 - 3 灰褐色 (10YR3/1) 2層に同じ 粘多含
 - 4 灰褐色 (10YR3/1) 2層に同じ 構造粒 / 少粘性質

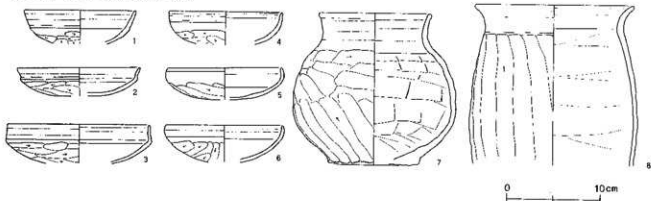
- 第183号住居跡層土
- 1 黒褐色 (10YR3/2) R層混入
 - 2 暗褐色 (10YR3/3) RC多含 1層よりR大
 - 3 黒褐色 (10YR2/2) B層化多含
 - 4 黒褐色 (10YR2/2) C層入少
 - 5 灰黄褐色 (10YR4/2) B未風化混入多
 - 6 暗褐色 (10YR3/2) 黒色土とB層降り状に混入

- 第183号住居跡柱穴覆土
- 1 灰褐色 (10YR3/4) B層化多含
 - 2 灰褐色 (10YR3/1) B層化少含 R層化多含
 - 3 灰褐色 (2.5YR3/1) B層化多含
 - 4 灰褐色 (10YR3/2) B層化多少含
 - 5 灰褐色 (10YR3/4) 1層よりR大
 - 6 灰褐色 (10YR3/4) 1層よりB小

- 第183号住居跡方V下覆土
- a 黒褐色 (10YR2/2) B層化多含
 - b 暗褐色 (10YR3/2) C少層混入
 - c 暗褐色 (10YR3/2) 黒色土とB層降り状同量混入



第169図 第183号住居跡出土遺物



第183号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.8)			ACDF	2	暗赤褐色	20	
2	環	(13.0)			ACDF	3	淡橙褐色	30	
3	環	(15.0)			ACDF	2	黒褐色	30	
4	環	(12.0)			ACEF	2	暗赤褐色	10	
5	環	(12.0)			ACDF	3	淡橙褐色	40	
6	環	(12.4)			ACDF	2	淡褐色	30	
7	壺	(11.9)	16.0	(9.8)	ACDEFK	3	暗赤褐色	60	
8	甕	(16.8)			ACDEFK	3	淡灰褐色	30	

第184号住居跡 (第170~172図)

第184号住居跡は、Y・Z-15・16グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-186による擾乱のために、南側はSD-77・90による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-9°-Wであった。規模は主軸長5.3m、副軸長6.0m、深さ15cm程度であった。

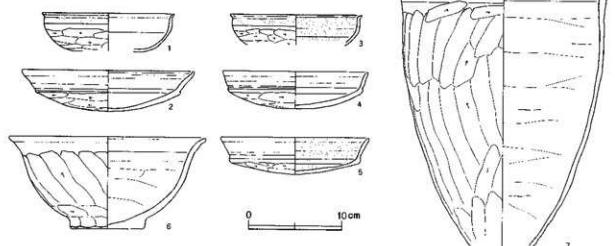
壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は北側と西側の壁で検出できた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

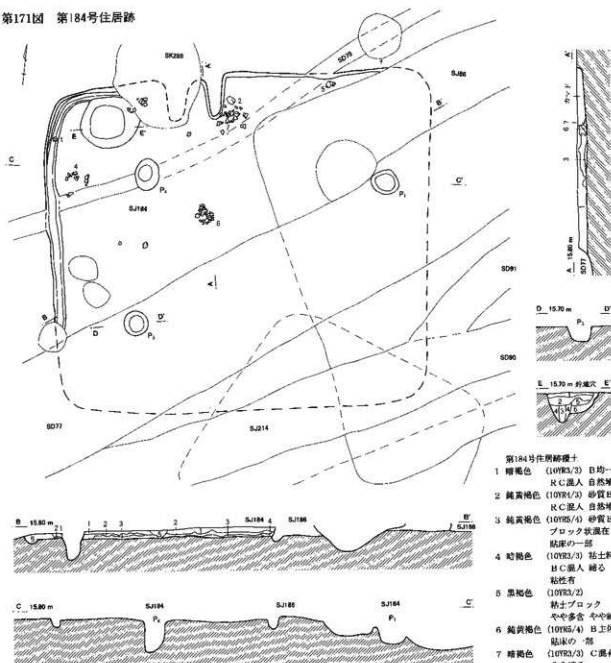
住居跡は、SJ-186・214、SD-77・79・90、SK-288と重複していた。重複関係は、SJ-186、SD-77・79・90、SK-288に切られ、SJ-214とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、鉢、甕などを検出した。この中で、第170図2の環、7の甕はカマド右側から、1・4の環は西側コーナー付近から、5の環は北側の壁際から、6の鉢は住居跡の中央付近から、他は覆土からそれぞれ検出した。

第170図 第184号住居跡出土遺物



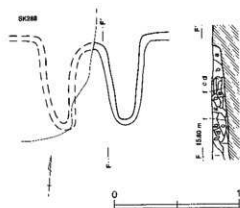
第171図 第184号住居跡



第184号住居跡概土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) 白均一含 R C混入 自然埴輪
- 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 砂質白含 R C混入 自然埴輪
- 3 鈍黄褐色 (10YR5/4) 砂質土ブロック状混在 粘床の一部
- 4 暗褐色 (10YR2/3) 粘土粒子 中 C混入 粘る 粘性有
- 5 黒褐色 (10YR3/2) 粘土ブロック やや多含 やや粘り弱
- 6 鈍黄褐色 (10YR5/4) B上体 粘床の一部
- 7 暗褐色 (10YR2/3) C混入 やや粘る

第172図 第184号住居跡カマド



第184号住居跡カマド概土

- a 褐色 (10YR4/3) 粘性有 粘りやや弱 R混在
- b 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘りやや弱 R含 d層の粘土ブロック混在
- c 明赤褐色 (5YR5/6) 粘土塊主体
- d 暗褐色 (2.5YR5/3) 白とは異なる 粘性 粘り有 粘土ブロック
- e 鈍赤褐色 (5YR4/4) R C混入 粘り粘性やや弱
- f 鈍赤褐色 (5YR5/4) C多含 M層
- g 黒褐色 (7.5YR2/2) R C均一含 粘りやや弱
- h 黒褐色 (10YR2/3) d層の粘土 粘土ブロック含 R C混在
- i 灰黄褐色 (10YR4/2) R C含 カマド崩壊後埴輪層
- j 黒褐色 (10YR2/3) R C混在 f層を覆うカマド壁上

第184号住居跡穴礎土

- 1 褐色 (10YR4/4) B多含 R C若干混入 粘床や
- 2 暗褐色 (10YR2/3) B混在 粘土ブロック若干含 やや粘り弱
- 3 鈍黄褐色 (10YR4/3) B少含 粘性強 やや粘る
- 4 鈍黄褐色 (10YR4/3) Bやや多含 粘り強 粘性有
- 5 黄褐色 (10YR5/6) B主体 褐色土混在 粘る 粘性有
- 6 暗褐色 (10YR2/4) R C若干含 やや粘る

第184号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.0)			ACEFK	3	赤褐色	30	赤彩
2	環	(18.3)	4.3		ACDEF	3	淡褐色	50	
3	環	(14.0)			ACFK	2	赤褐色	10	赤彩
4	環	(15.4)	3.9		ACF	3	淡橙褐色	50	
5	環	(15.8)	3.9		ACDEFK	3	淡橙褐色	40	赤彩
6	鉢	(21.0)	9.7	(7.7)	ACDEFHK	3	暗赤褐色	50	
7	甌	(24.0)			ACDEFHK	3	黒褐色	40	

第185号住居跡 (第173・174図)

第185号住居跡は、Z-15グリッドから検出した。

住居跡の南側のコーナーは、SJ-187による擾乱のため検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-38°Wであった。規模は主軸長2.9m、副軸長3.6m、深さ5cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝は北側のコーナーから東側の壁まで検出できた。柱穴は床面を精査したが検出できなかった。

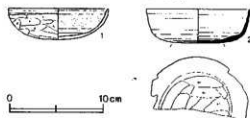
住居跡は、SJ-187、SD-78-79、SK-289と重複していた。重複関係は、SD-78-79、SK-289に切られ、SJ-187を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、須恵器環、鉄製の棒状不明品などを検出した。第173図に示した土器は、全て覆土中から検出した。

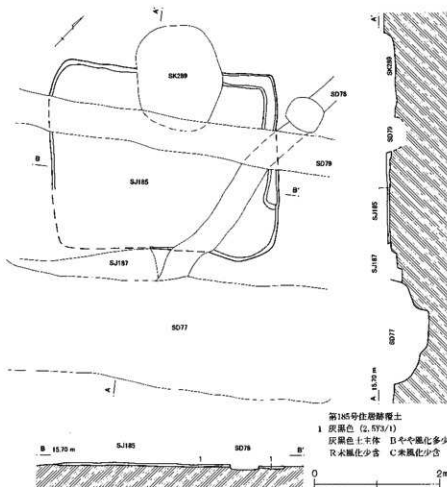
第185号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.6)	3.3		ACDEF	2	橙褐色	60	赤彩
2	須恵器環	(11.0)	3.6		ACFK	1	青白色	50	

第173図 第185号住居跡出土遺物



第174図 第185号住居跡



第185号住居跡覆土

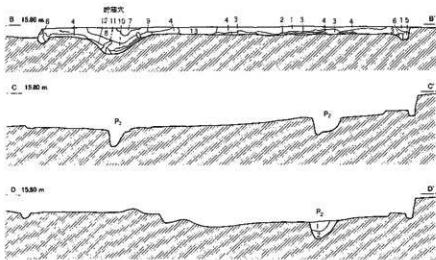
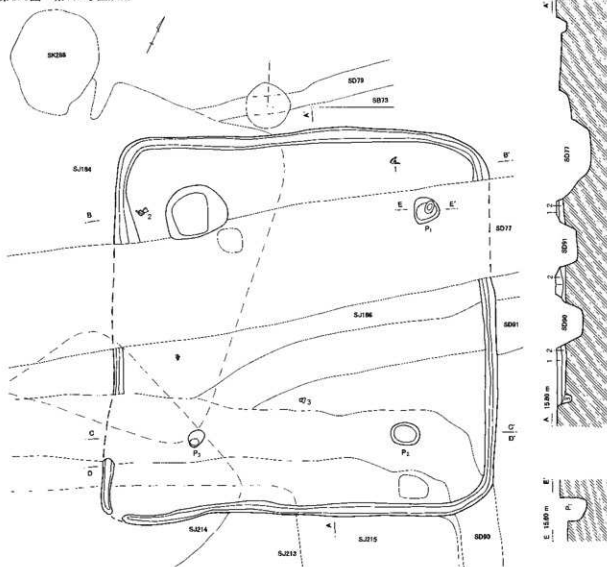
1 灰黒色 (2.873/1)

B 若干酸化多少

R 未風化少苔

C 未風化少苔

第175図 第186号住居跡



- 第186号住居跡層土
- 1 黒褐色 (10YR3/2) R/C混入
粘土ブロック多量
 - 2 黒色 (10YR2/2) C主体
 - 3 黒褐色 (10YR3/2) 1層に比べ
灰色粘土ブロック多量
 - 4 鈍黄褐色 (10YR5/4) B主体
肥床の一部
 - 5 暗褐色 (10YR3/3) C混入
やや粘る
 - 6 鈍黄褐色 (10YR5/4) B主体
人為処理の土
 - 7 茶色 (10YR2/2) B混入
粘り弱
 - 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 7層に比べ
多量
 - 9 暗褐色 (10YR3/3) B粘土ブロック
混入 R/C混入
 - 10 暗褐色 (10YR3/3) C層
 - 11 鈍黄褐色 (10YR5/4) 砂質は主体
粘る 粘性有
 - 12 暗褐色 (10YR3/3) 9層に近似
少量
 - 13 暗褐色 (10YR3/3) 粘土ブロック
B混入 粘る やや粘性有

第186号住居跡層土

- 1 茶褐色 (10YR3/2) 茶褐色土主体 B風化多量 やや粘性有
- 2 灰褐色 (10YR2/2) 1層より ややB多量



第186号住居跡 (第175・176図)

第186号住居跡は、Y-16・17、Z-16グリッドから検出した。

住居跡は、東西方向ではSD-77・90・91による擾乱のために、床面の一部が検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-27°-Wであった。規模は主軸長6.0m、副軸長6.2m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

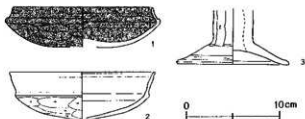
第186号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.8)			ACDF	2	暗赤褐色	50	黒色処理
2	環	(15.5)			ACDEF	3	淡橙褐色	50	
3	高環			(12.0)	ACDEFK	3	赤褐色	20	

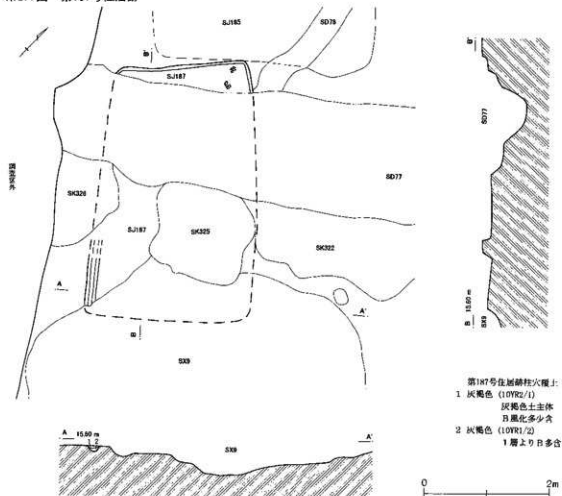
住居跡は、SJ-184・213・214・215、SD-77・79・90・91と重複していた。重複関係は、SD-77・79・90・91に切れ、SJ-184を切り、SJ-213・214・215とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、高環、鉄滓などを検出した。この中で、第176図に示した遺物は、全て床面から検出した。

第176図 第186号住居跡出土遺物



第177図 第187号住居跡



第187号住居跡 (第177図)

第187号住居跡は、Z-15グリッドから検出した。

住居跡の大部分は、SD-77、SX-9、SK-325・326による攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形と想定でき、主軸方位はN-45°-Wと考えられた。規模は主軸長4.0m、副軸長2.7m、深さは、痕跡程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝は南のコーナーで検出できた。柱穴も検出できなかった。

住居跡はSD-77、SK-325・326、SX-9と重複していた。重複関係は、SD-77、SK-325・326、SX-9に切られていた。実測可能な遺物は、検出できなかった。

第188号住居跡 (第178・179図)

第188号住居跡は、X-12・13グリッドから検出した。

住居跡の両側のコーナーは調査区外のために、西側はSJ-192による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-29°-Wであった。規模は主軸長3.5m、副軸長不明、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-138・192と重複していた。重複関係は、SJ-192に切れ、SJ-138とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、石製模造品などを床面から検出した。

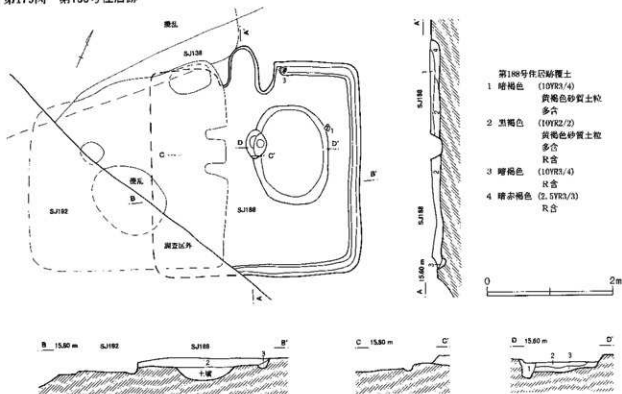
第178図 第188号住居跡出土遺物



第188号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.4)			AC F	3	淡橙褐色	30	
2	環	(12.0)			AC F	2	赤褐色	20	赤彩
3	環	(14.7)			ACDF	3	淡橙褐色	30	

第179図 第188号住居跡



第189号住居跡 (第180・181図)

第189号住居跡は、X-13グリッドから検出した。

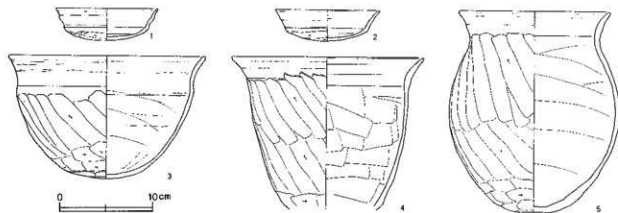
住居跡の西側の壁は、調査区外のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-51°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長3.5m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。貯蔵穴と、SB-74との重複も考えられた。床面は明瞭で、壁溝はカマド右側を除いて、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴は床面を精査したが、検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡はSB-74・75、SD-84と重複していた。重複関係は、SD-84に切られ、SB-74・75とは不明であった。

第181図 第189号住居跡出土遺物

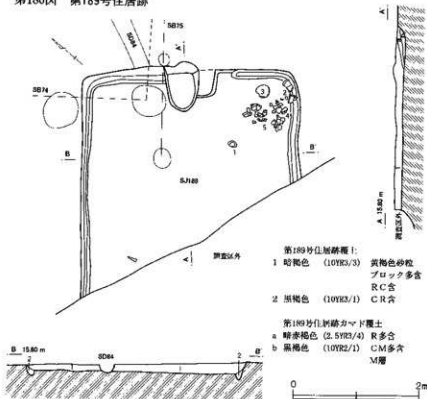


第189号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	10.8	3.4		ACDF	3	淡灰褐色	100	
2	環	11.2	3.3		ACDF	3	淡灰褐色	100	
3	鉢	21.0	13.0		ACEFK	3	黒褐色	80	
4	甕	20.5			ACDEF	3	淡灰褐色	90	
5	甕	(16.0)	21.2		ACDFK	3	黒褐色	50	

実測可能な遺物として、土師器環、甕、鉢、鉢製の鎌などを検出した。この中で、第181図2の環、3の鉢、4の甕、5の甕は東側のコーナー付近から、1の環は中央やや東側から、それぞれ検出した。遺物の出土範囲は東側コーナー部分に集中していた。

第180図 第189号住居跡



- 第189号住居跡層1:
 1 暗褐色 (10YR5/3) 黄褐色砂粒
 ブロック多量
 RC含
 CR含
 2 黒褐色 (10YR2/1)
 CR含
- 第189号住居跡カマド覆土:
 a 暗褐色 (2.5YR2/4) R多量
 b 黒褐色 (10YR2/1) CM多量
 M層

第190号住居跡 (第182図)

第190号住居跡は、W-15・16、X-15・16グリッドから検出した。

住居跡の南側は削平され、北側のコーナー付近はSJ-175による攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-38°-Wであった。規模は主軸長4.5m、副軸長不明、深さ痕跡程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は西側のコーナーから検出した。床面も不明瞭であつ

たが、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は4本が検出できた。

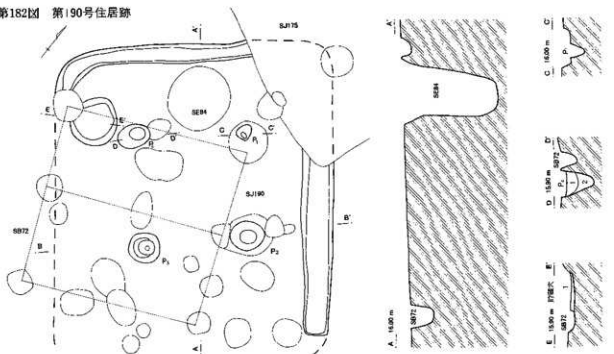
検出した柱穴の中で、P1・P3はやや浅く、P2はかなり深かった。

わずかに残された覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-175、SB-72、SE-84と重複していた。重複関係は、SB-72、SE-84に切られ、SJ-175とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第182図 第190号住居跡



第190号住居跡柱穴覆土

- 1 褐色 (10YR4/4) 少量のやや粘性的
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色砂質土含

第190号住居跡貯蔵穴覆土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) 少量のやや粘性的

第181号住居跡 (第183・184図)

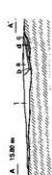
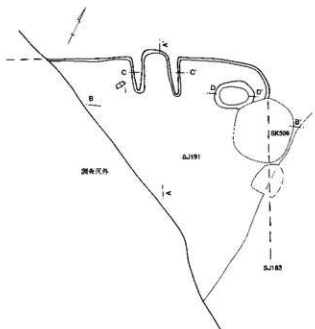
第191号住居跡はX-13・14、Y-13・14グリッドから検出した。

住居跡の南側の壁は調査区外のために、東側はSJ-183、SK-306による攪乱のために検出できなかった。

形態は方形と想定でき、主軸方位はN-27°-Wと考えられた。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭であつ

第183図 第191号住居跡



第191号住居跡層上:
1 黄褐色 (10YR3/2) 黄褐色土主体 R風化少々
C風化少々 B風化多含

第191号住居跡カマド覆土
a 黄褐色 (10YR3/2) 黄褐色土主体 R風化多含
B風化多含
カマド天井部腐落土

b 茶褐色 (10YR3/2) 茶褐色土主体 R風化多少含
B風化少々
カマド煙道或土

c 茶褐色 (10YR3/2) 茶褐色土主体
3層よりR風化少々
B多含 C風化多含

d 茶褐色 (10YR3/2) 茶褐色土主体
3層よりR少々
Bやや多含
カマド内流入土

第191号住居跡貯藏穴覆土

1 茶褐色 (10YR3/1) 茶褐色土主体 R風化少々
Bやや風化少々
住居跡上に近

2 黄褐色 (10YR3/6) 黄褐色土主体
B風化流入土層



たが壁溝は検出できなかった。柱穴も検出できなかった。柱穴のP1・P2は、床面を精査したか壁溝同様に検出することができなかった。P3・P4は調査区外にあると考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-183、SK-306と重複していた。重複関係は、SK-306に切れ、SJ-183とは不明であった。

第191号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(16.0)			ACDF	3	淡灰褐色	20	

第192号住居跡 (第185・186図)

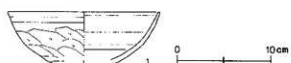
第192号住居跡は、X-12-13グリッドから検出した。住居跡の西側の壁は、調査区外のために検出できなかった。形態は方形と想定でき、主軸方位はN-59°-Eと考えられた。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ不明

第192号住居跡出土遺物観察表

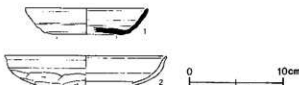
No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器 環	(13.0)	2.8	(8.0)	ACF	1	灰白色	20	
2	環	(17.2)			ACF	3	暗赤褐色	20	

実測可能な遺物として、土師器環を検出した。第183図1の環はカマド左側から検出した。微細な破片であったので、当該住居との帰属関係は明瞭ではなかった。

第184図 第191号住居跡出土遺物



第185図 第192号住居跡出土遺物



20cm程度であった。

住居の平面形態は北西側の壁溝が内側に回り込んでいた。壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマド周辺を精査したが検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北側のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。柱穴については、P1とP4は、床面を精査したが検出できなかった。P2は、調査区外であり、P3に相当する場所にはピットが存在していた。

住居跡は、SJ-138・188と重複していた。重複関係は、SJ-138・188を切っていた。

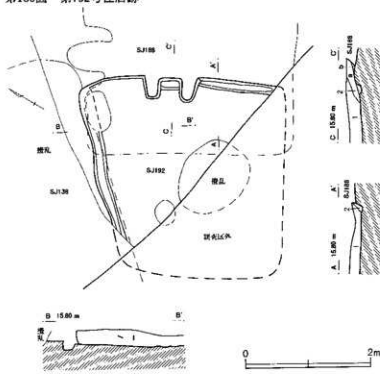
実測可能な遺物として、土師器環などを覆土から検出した。

第193号住居跡 (第187～189図)

第193号住居跡は、X-18グリッドから検出した。

住居跡の北側の大半は調査区外のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形と想定でき、主軸方位はS-42°Wと考えられた。規模は主軸長不明、副軸長

第186図 第192号住居跡



第192号住居跡覆土

- 1 黒褐色 (10YR3/2) R・黄褐色砂質土粒多
2 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐色土砂質土粒多

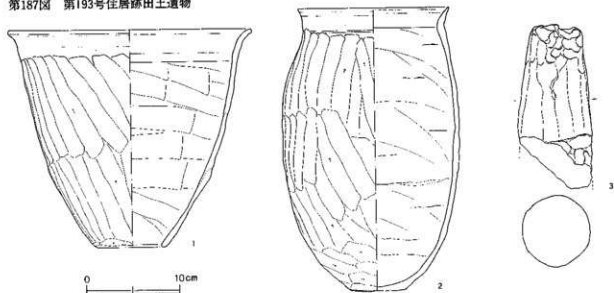
第192号住居跡カマド覆土

- a 暗褐色 (2.5YR3/3) R 倉 カマド
b 黒色 (10YR2/1) MC 倉 M 壁

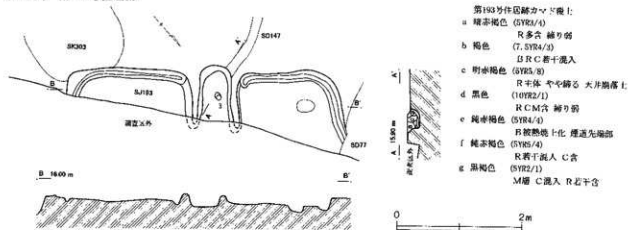
不明、深さは痕跡程度であった。

壁は明瞭であり、南西側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚や壁の破片が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は住居跡の確認範囲からは検出できたので、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴は四本とも調査区外のために検出で

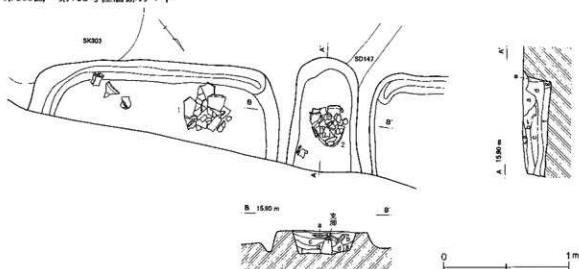
第187図 第193号住居跡出土遺物



第188図 第193号住居跡



第189図 第193号住居跡カマド



きなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SD-77・147、SK-303と重複していた。重複関係は、SD-77・147、SK-303に切られていた。

第193号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甌	25.9	23.0	7.2	ACDEFHK	3	淡橙褐色	90	
2	甕	16.0	30.0	5.9	ACDEFHK	3	暗赤褐色	80	
3	支脚				AC	3	淡灰褐色		

尖頭可能な遺物として、土師器甕、甌、支脚などを検出した。

この中で、第187図1の甌はカマド左側から、2の甕はカマド内から、3の支脚はカマド内に設置された状態でそれぞれ検出した。

第184号住居跡 (第190・191図)

第194号住居跡は、X-18グリッドから検出した。

住居跡の東・北側の一部は、SD-85による掘削のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-69°-Eであった。規模は主軸長3.2m、副軸長2.4m、

深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。カマドの軸は遺存状態が悪く、痕跡程度しか残存していなかった。カマド内からは支脚が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は

検出できなかった。柱穴も床面を調査したが、検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

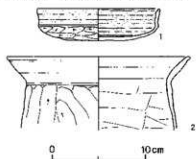
住居跡は、SJ-195、SD-85・147と重複していた。重複関係はSD-85・147に切れ、SJ-195を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕などを検出した。

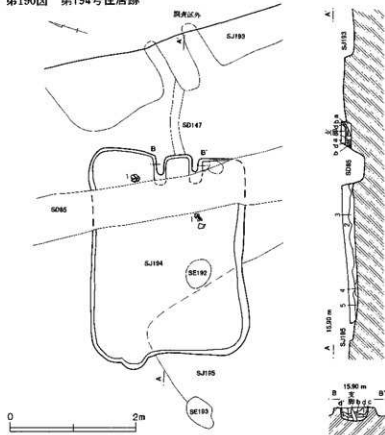
第191図1の環、2の甕は、住居跡東側の床面上から検出した。

カマド内から検出した支脚は、地山を削りだして製作したような、非常に脆弱なもので、取り上げることができなかった。

第191図 第194号住居跡出土遺物



第190図 第194号住居跡



第194号住居跡礎土

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 微小R含 締る
- 2 黒褐色 (10YR3/2) RC含 やや締る
- 3 暗褐色 (10YR3/3) RCB混入 やや締る
- 4 純黄褐色 (10YR5/3) B主体
- 5 褐色 (10YR4/1) RC多含 やや締る

第194号住居跡カマド礎土

- a 明赤褐色 (5YR5/6) R多含 やや締り弱
- b 純赤褐色 (10YR4/3) CM混入 締る
- c 黒褐色 (10YR1/3) RC混入 やや締り弱
- d 黒褐色 (10YR3/2) RC混入 M層
- d' 黒褐色 (10YR3/2) R主体

第194号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.0)	3.4		ACEFK	2	赤褐色	50	赤彩
2	甕	(19.6)			ACDFK	3	淡灰褐色	20	

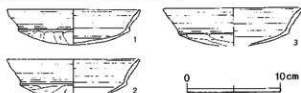
第195号住居跡 (第192・193図)

第195号住居跡は、X-18、Y-17-18グリッドから検出した。

住居跡の北側のコーナーはSJ-194による擾乱のために、東側のコーナーはSD-85による擾乱のために、カマドの煙道部分は、SE-82による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-57°-Wであった。規模は主軸長5.6m、副軸長5.4m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、西側からカマドが検出できた。貯藏穴はカマドの左側から検出した。床面も明瞭で、壁

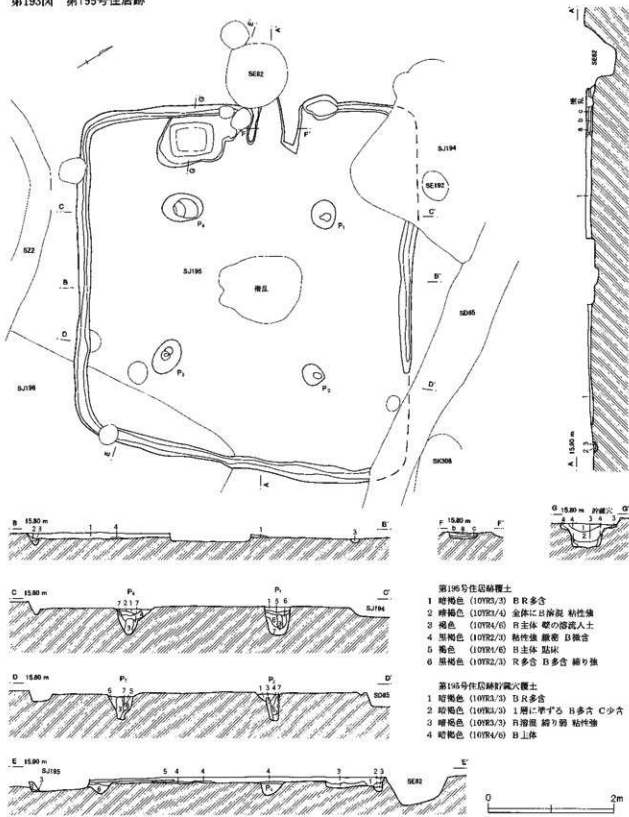
第192図 第195号住居跡出土遺物



溝はほとんど全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。覆土には埋め戻しの底跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-194・196、SD-85、SE-82と重複していた。重複関係は、SD-85、SE-82に切れ、SJ-196を切り、SJ-194とは不明であった。

第193図 第195号住居跡



- 第195号住居跡竪断面
- 1 暗褐色 (10YR5/3) B R 多含
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 全体に日南泥 粘性強
 - 3 褐色 (10YR4/6) B 主体 硬の溶流土
 - 4 黒褐色 (10YR2/3) 粘性強 緻密 B 包含
 - 5 褐色 (10YR4/6) B 主体 粘床
 - 6 黒褐色 (10YR2/3) R 多含 B 多含 粘り強

- 第195号住居跡野築穴竪断面
- 1 暗褐色 (10YR3/3) B R 多含
 - 2 暗褐色 (10YR3/3) 1層に準ずる B 多含 C 少含
 - 3 暗褐色 (10YR3/3) B 溶流 粘り弱 粘性強
 - 4 暗褐色 (10YR4/6) B 上体

- 第195号住居跡柱穴竪断面
- 1 黒色 (10YR2/2) 1層と同じ
 - 2 褐色 (10YR4/6) B 主体 やや砂質 粘る
 - 3 黒色 (10YR2/2) B 少含 粘り強 粘床

- 4 褐色 (10YR4/4) B 主体 粘性強
- 5 黒褐色 (10YR2/3) B 多含 R 微含 粘り強 粘性強
- 6 黒褐色 (10YR2/3) B 多含 粘り強
- 7 褐色 (10YR4/4) B 主体 壁面軟化層

- 第195号住居跡カマド竪断面
- a 暗褐色 (10YR3/3) R 多含
 - b 純黄褐色 (10YR4/3) R B (微加熱)
 - c 黒色 (10YR2/2) 厚純M層 C 微含

第195号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(14.2)	3.7		ACDEF	3	明赤褐色	20	
2	坏	(14.2)			ACDF	2	橙褐色	20	
3	坏	(15.0)			ACDF	2	淡橙褐色	40	

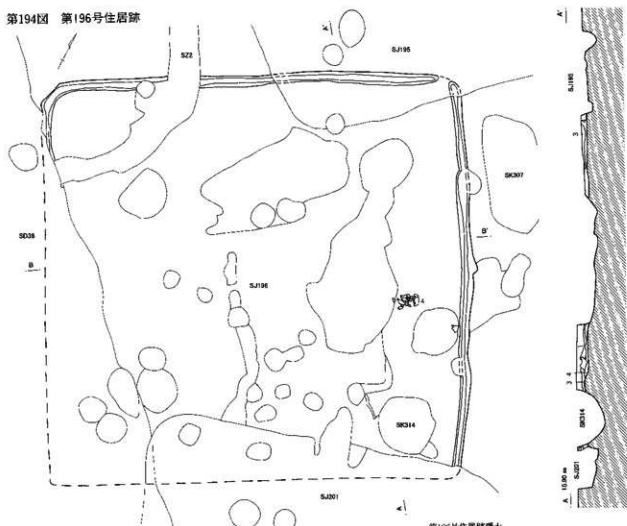
実測可能な遺物として、土師器坏、勾玉などを検出した。

この中で、第192図2・3の坏はカマド周辺から、他は覆土からそれぞれ検出した。

第196号住居跡 (第194・195図)

第196号住居跡は、Y・Z-18グリッドから検出した。住居跡の南東側はSJ-201による攪乱のために、南側はSD-38による攪乱のために検出できなかった。形

第194図 第196号住居跡



第196号住居跡埋土

- 1 黒褐色 (10YR2/3) B少量 R微含 網り有
- 1' 黒褐色 (10YR2/3) B主体 粘床状
- 2 褐色 (10YR4/4) B層に厚 SD-38の影響軟分多含
- 3 暗褐色 (10YR3/4) B含 粘性強
- 4 黒褐色 (10YR2/3) B多含 暗灰色粘土ブロック含
- 5 褐色 (10YR4/4) B主体 灰の溶軟化層

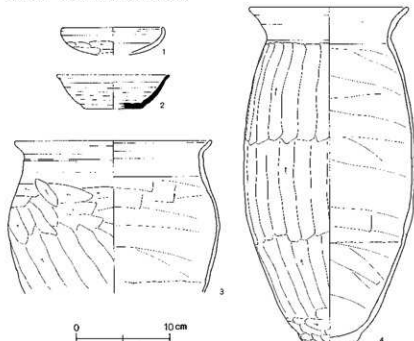
態は方形と想定でき、主軸方位はN-31°-Wと考えられた。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北側のコーナー部分でわずかに途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も検出できなかった。住居跡の床面は著しい擾乱を受けており、柱穴を検出することが困難であった。

覆土は擾乱を受けていたが、埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-195-201-202, SD-38, SZ-2, SK-314と重複していた。重複関係は、SJ-195, SD-38, SZ-2, SK-314に切れ、SJ-201を切り、SJ-202とは不明であった。

第195図 第196号住居跡出土遺物



実測可能な遺物として、土師器環、甕、須恵器環などを検出した。

この中で、第195図4の甕は、住居跡の東側の床面直上から、他は覆土上からそれぞれ検出した。

第196号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口徑/cm	器高/cm	底徑/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.8)			ACDF	3	淡灰褐色	50	
2	須恵器環	(12.0)	3.6	(6.2)	ACDFI	1	青灰色	50	
3	甕	(21.0)			ACDEF	3	赤褐色	30	
4	甕	(17.0)	35.6	(5.6)	ACDEFHK	3	暗赤褐色	50	

第197号住居跡 (第196~198図)

第197号住居跡は、Y-17グリッドから検出した。

住居跡の北西側のコーナーは、SD-77による擾乱のために、西側コーナーから南東側の壁際にかけてはSD-38による擾乱のために、中央付近はSE-96による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-46°-Wであった。規模は主軸長5.5m、副軸長5.5m、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、北西側からカマドが検出できた。カマドの煙道部は、SD-77の擾乱によって検出できなかった。カマド内からは支脚が設置された状態で検出できた。支脚の上からは甕底部の破片が逆位で検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明

瞭で、壁溝は東側と南側のコーナー付近でわずかに途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も2本が明瞭に検出できた。P3・P4については、SD-38による擾乱のために検出できなかった。

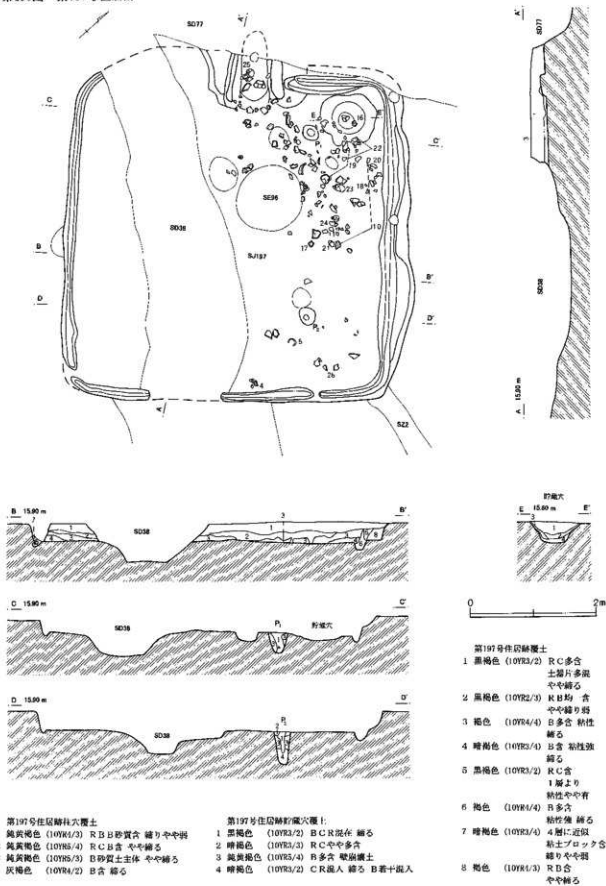
覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SD-38-77, SZ-2, SE-96と重複していた。重複関係は、SD-38-77, SZ-2, SE-96に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、鉢、須恵器環、紡錘車、土鐿、鉄滓、馬の歯など、多量の遺物が検出できた。

この中で第198図2の環は貯蔵穴内から、4・5・10・11の土師器環、16・17の須恵器環、19の壺、22の鉢、

第196図 第197号住居跡

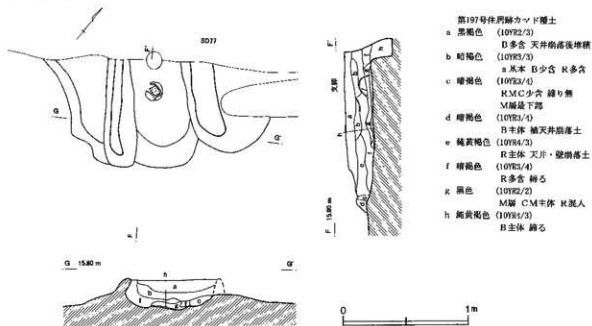


18・20・21・23～26の裏は、住居跡北側の広範囲に破片が散乱した状態で、他は覆上からそれぞれ検出した。

本住居跡では、北側の広い範囲に大量の遺物が廃棄

されたような破片の状態出土した。これらの遺物は、いずれも床面から10cm程度浮いた状態で検出したので、北側からの破片の投棄行為によると想定された。

第197図 第197号住居跡カマド

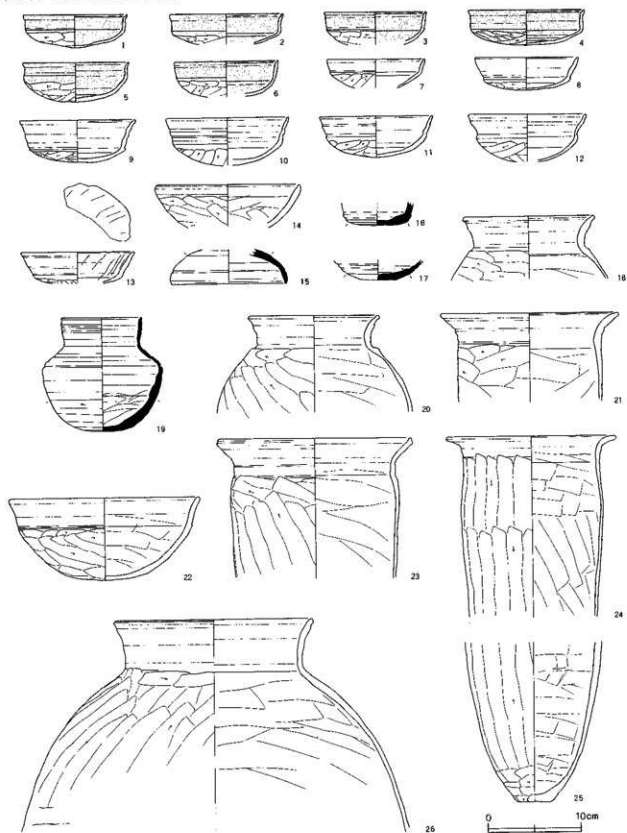


第197号住居跡出土遺物観察表

№	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.0)	3.5		ACEFK	2	赤褐色	50	赤彩
2	環	(12.0)			ACFK	2	赤褐色	30	赤彩
3	環	(10.8)			ACFK	2	赤褐色	30	赤彩
4	環	(12.4)	3.7		ACDFK	2	赤褐色	80	赤彩
5	環	11.4	4.1		ACDFK	2	赤褐色	100	赤彩
6	環	(11.0)			ACEFK	2	赤褐色	30	赤彩
7	環	(10.4)			ACDEF	3	淡灰褐色	20	
8	環	(11.0)	3.4		ACEF	3	明赤褐色	40	
9	環	12.3	4.5		ACDEF	2	淡灰褐色	80	
10	環	(13.0)			ACDEF	2	赤褐色	40	
11	環	(12.0)	4.3		ACDF	2	暗赤褐色	30	
12	環	(12.4)			ACDEF	2	黒褐色	30	
13	環	(12.0)			ACDFK	3	淡灰褐色	20	略文
14	環	(15.2)			ACEF	3	黒褐色	20	
15	須恵器環	(12.0)			ACF	1	灰白色	10	
16	須恵器環			6.3	ACF	1	青白色	20	
17	須恵器環			3.7	AC	1	青灰色	30	
18	甕	(14.0)			ACF	3	橙褐色	30	
19	須恵器壺	(8.4)	12.0		ACEFK	2	暗赤褐色	70	
20	甕	(14.0)			ACEFK	3	暗赤褐色	70	
21	甕	(19.0)			ACDF	3	橙褐色	20	
22	鉢	(20.4)	8.7		ACDEF	3	黒褐色	60	
23	甕	(20.4)			ACDFK	3	黒褐色	30	
24	甕	(18.2)			ACEFK	3	暗赤褐色	50	
25	甕			3.6	ACDF	3	赤褐色	20	
26	甕	21.0			ACDFK	3	淡灰褐色	20	

出土遺物を管見すると、調査区内の他の住居跡と比べて、須恵器の出土量が多かった。また、土師器環類
 第198図 第197号住居跡出土物

も、いわゆる比企型環の系統上に位置するもの、小型化した模倣環、有段口辺の環など各系統が認められた。



第198号住居跡 (第199・200図)

第198号住居跡は、Y・Z-19グリッドから検出した。

住居跡の東側は調査区外のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はS-63°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長4.3m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。カマドは調査区外かあるいは、SK-313によって攪乱された位置に存在していたと考えられた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほとんど全周していたと考えられた。柱穴も1本が明瞭に検出できた。P2、P3は調査区外で、P1については精査したが検出することができなかった。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-200、SK-313と重複していた。重複

第198号住居跡出土遺物観察表

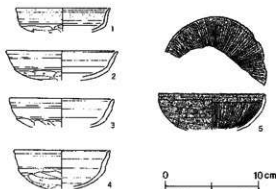
No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.0)			ACDFK	2	暗赤褐色	10	漆彩
2	環	(12.0)			ACDF	3	暗赤褐色	30	
3	環	(11.2)			ACD	2	赤褐色	10	
4	環	(10.2)			ACDF	2	淡橙褐色	40	
5	環	(11.4)			ACD	2	黒褐色	40	暗文・黒色処理

関係は、SK-313に切れられ、SJ-200とは、重複部分が少なく、不明であった。

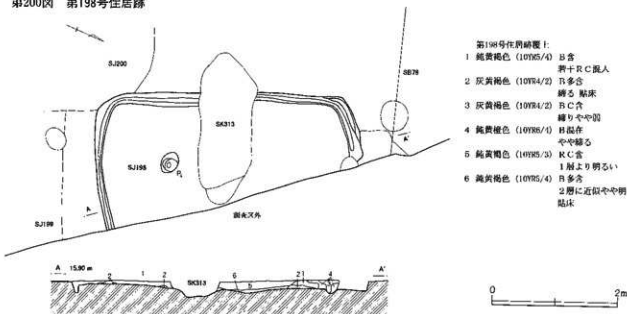
実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。

この中で、第199図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第199図 第198号住居跡出土遺物



第200図 第198号住居跡



第199号住居跡 (第201・202図)

第199号住居跡は、Z-19グリッドから検出した。

住居跡の東側の壁は調査区外のために、南側は SJ-209・210による攪乱のために、西側は SJ-200による

攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形と想定でき、主軸方位はN-70°-Eと考えられた。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ5cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭であったが、壁溝は北壁で検出できた。柱穴は周辺の擾乱が著しくて、検出できなかった。

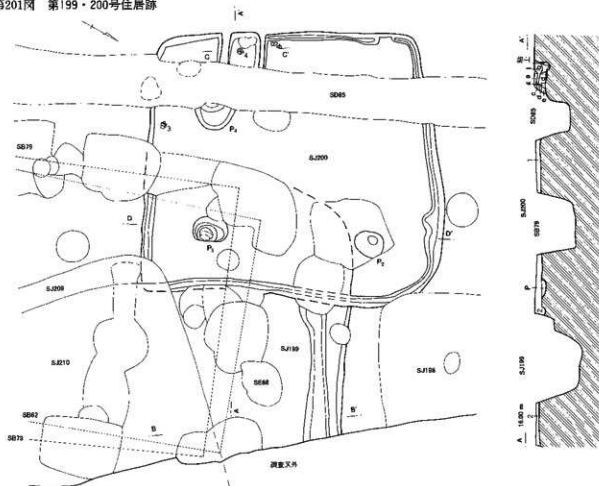
覆上には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を

示していた。

住居跡は、SJ-200・209・210、SB-62・79と重複していた。重複関係は、SJ-209、SB-62・79に切られ、SJ-200・210とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環を検出した。

第201図 第199・200号住居跡



第200号住居跡カマド覆土

- a 褐色 (7.5YR4/3) R 盛土 C 若干含
- b 明赤褐色 (5YR5/6) R 半体
- c 鈍赤褐色 (2.5YR4/3) R 若干含 D 混在 締る
- d 当褐色 (7.5YR2/2) C M 主体
- e 鈍褐色 (7.5YR5/3) B 多含 やや締まり弱 若干 R C 含
- f 鈍黄褐色 (10YR1/2) D 混入 締る 支脚補強
- g 鈍黄褐色 (10YR4/2) B 主体 締る
- h 褐色 (10YR4/4) R 若干 C 少含 締る
- i 明赤褐色 (5YR5/6) R 混入 締る
- j 褐色 (10YR1/4) B 含 やや締る
- k 鈍黄褐色 (10YR5/2) B 主体 結核の一部
- l 鈍黄褐色 (10YR4/2) H 含 天井か補強層土
- m 鈍黄褐色 (10YR1/3) D 半体

第200号住居跡柱穴覆土:

- 1 暗褐色 (10YR3/0) K C 含 B 混入
- 2 鈍黄褐色 (10YR6/0) B 混入 やや締る
- 3 褐色 (10YR1/4) B C 混入 R 若干含
- 4 鈍黄褐色 (10YR6/4) B 含 やや締る
- 5 鈍黄褐色 (10YR5/4) B 若干含 締る
- 6 鈍黄褐色 (10YR6/3) B 粘質ノ混入 締る
- 7 鈍黄褐色 (10YR5/2) B 若干含 締る

第199・200号住居跡覆土

- 1 褐色 (10YR1/4) R 若干含 C 少含 締る
- 2 褐色 (10YR4/4) C B 若干 R 混入



この中で、第202図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

1は外面に指頭瓦痕が残されていた。2は内面に、放射状の暗文が施されていた。

第202図 第199号住居跡出土遺物



第199号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.6)			ACDF	2	暗赤褐色	20	
2	環	(10.2)			ACDF	2	暗赤褐色	20	暗文

第200号住居跡 (第201・203図)

第200号住居跡は、Z-19グリッドから検出した。形態は方形で、主軸方位はN-62°Eであった。規模は主軸長4.2m、副軸長4.7m、深さ10cm程度であった。

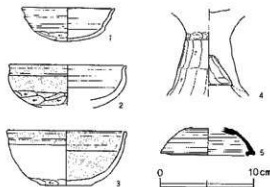
壁は明瞭であり、西側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は南側のコーナーで一部途切れるものの、ほとんど全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-198・199・210、SB-62・79、SD-85と重複していた。重複関係はSB-62・79、SD-85に切れ、SJ-199を切り、SJ-198・210とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、高環、須恵器環などを検出した。

この中で、第203図3の環は南側コーナー付近で、4の高環はカマド内から転用支脚として、他は覆土からそれぞれ検出した。

第203図 第200号住居跡出土遺物



第200号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(9.9)	3.5		ACDF	3	淡灰褐色	90	
2	環	(12.5)			ACDFK	2	黒褐色	30	赤彩
3	環	(12.6)	5.8	5.2	ACDFK	3	淡褐色	50	赤彩
4	高環				ACDEFHK	2	暗赤褐色	50	
5	須恵器環	(10.0)			AC	1	青灰色	30	

第201号住居跡 (第204～206図)

第201号住居跡は、Y-18、Z-18-19グリッドから検出した。

住居跡の南側のコーナーは、SD-38による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-20°Wであった。規模は主軸長5.5m、副軸長5.9m、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明

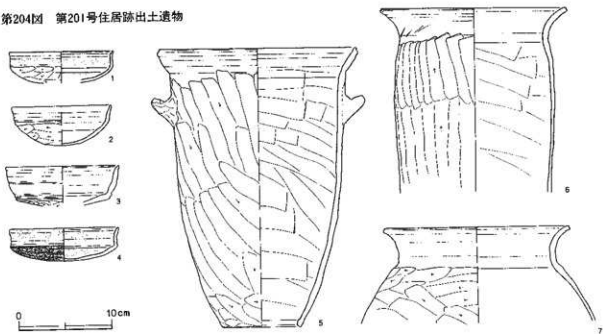
瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-196・202・203、SD-38、SE-87、SK-315・317と重複していた。重複関係は、SD-38、SE-87、SK-315・317に切れ、SJ-202・203を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甔、鉄製の鎌などを検出した。

この中で、第204図3の環はP1内から、4の環はカマド手前から、5の甔、6の甕はそれぞれカマド袖の補強剤として、7の甕はカマド右側から、他は覆土からそれぞれ検出した。

第204図 第201号住居跡出土遺物



第201号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.0)			ACDFK	2	赤褐色	20	赤彩
2	環	(10.6)	4.1		ACDFK	2	明赤褐色	30	
3	環	(12.0)			ACDFK	2	淡橙褐色	30	
4	環	(11.6)			ACDFK	2	赤褐色	40	赤彩・黒色処理
5	甌	(21.1)	29.5	(8.2)	ACDEFHK	2	暗赤褐色	70	把手付
6	甕	(20.0)			ACDFK	3	淡橙褐色	50	
7	甕	(20.0)			ACDEFHK	3	淡灰褐色	10	

第202号住居跡 (第205図)

第202号住居跡は、Y・Z-18・19グリッドから検出した。

住居跡の北側はSJ-201による攪乱のために、南壁の一部はSD-38に、南北両方の壁はSJ-203、SD-38による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-19°-Wであった。規模は主軸長6.4m、副軸長6.7m、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は東壁の一部で検出できた。柱穴は検出できなかった。

住居跡の床面上のピットは、覆土の状況から考えて、柱穴ではないと判断した。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-201・203、SD-38、SE-87、SK-315・317と重複していた。重複関係は、SJ-201、SD-38、SE-87、SK-315・317に切れ、SJ-203とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

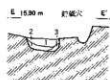
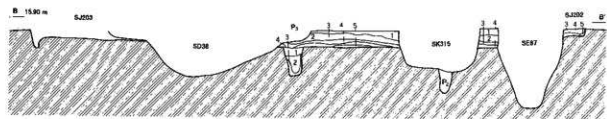
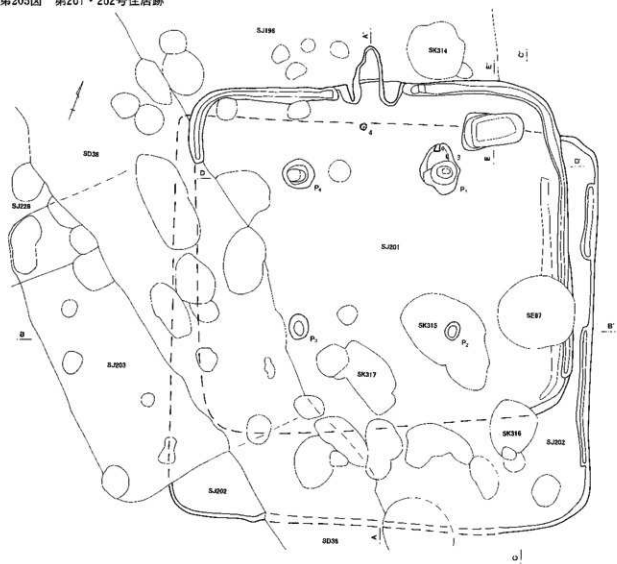
第203号住居跡 (第207・208図)

第203号住居跡は、Z-18グリッドから検出した。

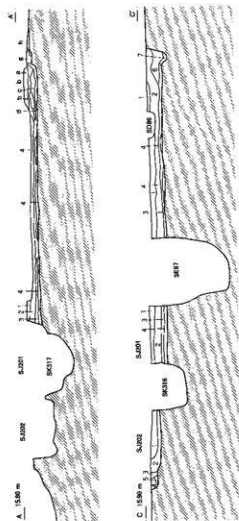
住居跡の東側はSJ-201・202、SD-38による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-42°-Wであった。規模は主軸長4.6m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。カマドはSD-38によって壊されていたと考えられた。貯蔵穴も検出できなかった。貯蔵穴もカマド同様にSD-38によって壊されたと考えられた。床面は明瞭で、壁溝はピットと重複する部分では検出できなかったが、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も検出できなかった。柱穴については、P3、P4に該当する位置からピットが検出できたが、覆土の状況から当該住居跡に伴う柱穴ではないと考えられた。P1、P2は、カマド同様にSD-38によって壊されたと考えられた。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

第205图 第201・202号住居跡

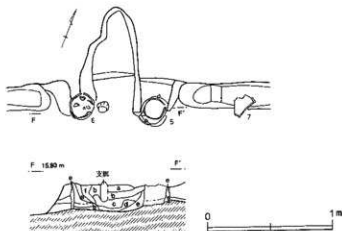


第206図 第201号住居跡カマド



第202号住居跡層上

- 1 暗褐色 (10YR3/3) B RC 微含 灰色粘質土多含 餅り強
- 2 暗褐色 (10YR2/4) B 多含 粘質強
- 3 褐色 (10YR4/4) B 含
- 4 暗褐色 (10YR2/4) 2層と同じ B RC 微含 灰色粘質土多含 餅り強
- 5 褐色 (10YR4/4) B 主体 游散粘土



第201号住居跡層土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) R 多含 若干C 含 B 不含有
- 2 暗褐色 (10YR3/3) B 多含 一部薄層状 R 微含
- 3 暗褐色 (10YR2/4) 灰黄色砂質粘土 全体粘質土化
- 4 黄褐色 (10YR4/2) 灰黄色砂質粘土 餅状 粘床状?
- 5 暗褐色 (10YR3/4) 3層に同
- 6 暗褐色 (10YR2/3) 混有物不含有 餅り粘性强
- 7 褐色 (10YR4/6) B 主体

第201号住居跡柱穴層土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) B 含 R 多含 餅り強
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 1層に準じる 餅り弱 R 少含 B 多含有
- 3 褐色 (10YR4/6) B 主体
- 4 暗褐色 (10YR3/4) B 多含 餅り弱 柱底
- 5 黄褐色 (10YR4/2) B 多含 全体に游散 柱底
- 6 褐色 (10YR4/6) B 主体 遊散軟化層

第201号住居跡貯蔵穴層土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) B 多含 一部薄層状 R 微含
- 2 暗褐色 (10YR2/3) 混有物不含有 餅り粘性强
- 3 褐色 (10YR4/6) B 主体

第201号住居跡カマド層上

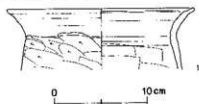
- a 暗褐色 (10YR3/4) B B 若干下含 M 含
- b 暗褐色 (10YR3/4) a 附基本 大型 R 多含 天井崩落土
- c 暗褐色 (10YR2/3) M 層 R 微含
- d 暗褐色 (10YR2/3) a 床に貼った粘質土? 上面崩壊化
- e 暗褐色 (10YR3/3) B 粘強内 粘質強土 褐色粘強
- f 暗褐色 (10YR3/3) e 附基本 袖天井崩落土 R 多含
- g 暗褐色 (10YR3/3) B R 多含 散塵の埋め戻しなし
- h 暗褐色 (10YR3/4) B 粘強多 R 微含

示していた。

住居跡は、SJ-201・202・228、SD-38と重複していた。重複関係は、SJ-201・202、SD-38に切られ SJ-228とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器類などを検出した。この中で、第207図に示した遺物は、覆土中から検出した。

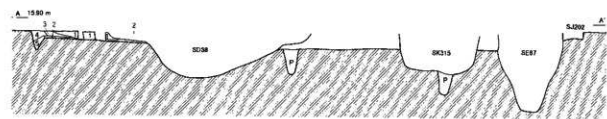
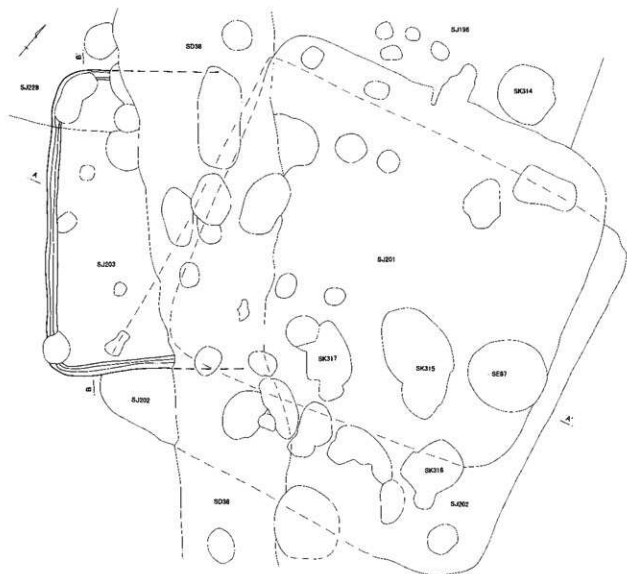
第207図 第203号住居跡出土遺物



第203号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕	(20.0)			ACDEFHK	3	淡灰褐色	10	

第208岡 第203号住居跡



第203号住居跡遺土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) 砂質土多含 SD-38水分の影響で灰色粘質土化進行
- 2 褐色 (10YR4/4) 酸化進行粘質土多含 1層に限るが灰色粘質土化せず 餅り弱
- 3 暗褐色 (10YR3/4) 溶化して浮いた床のブロック
- 4 黒褐色 (10YR2/3) 3層に準ずる 砂少含 灰質含
- 5 褐色 (10YR4/6) 粘質土溶化層 壁際の礎・底層軟化土

第204号住居跡 (第209図)

第204号住居跡はX-13・14グリッドから検出した。住居跡は、確認面では床面が削平されており、壁溝も検出できず、柱穴しか残存していなかった。形態は方形と想定でき、主軸方位はN-46°-Eと考えられた。壁は検出できず、カマドも同様に痕跡も検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は削平され

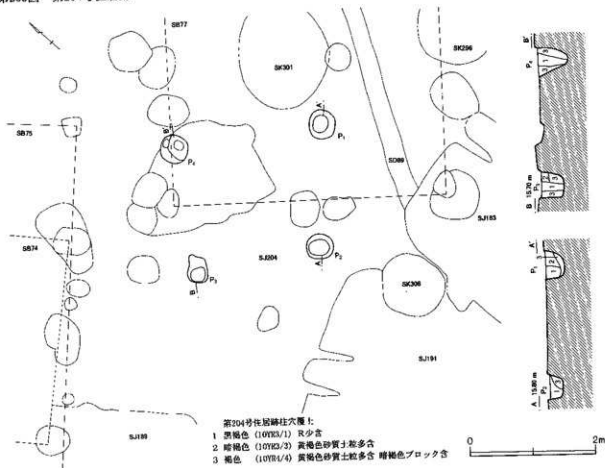
ており、壁溝も検出できなかった。柱穴は4本が明確に検出できた。

検出した柱穴の中で、P1・P3は他の柱穴と比べてやや浅く、P2では柱底も検出できなかった。

住居跡は、SB-77と重複していた。重複関係は不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第209図 第204号住居跡



第205号住居跡 (第210~212図)

第205号住居跡は、AA-19・20グリッドから検出した。住居跡の中央は、SD-38、SJ-206・207による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はS-54°-Eであった。規模は主軸長4.4m、副軸長3.8m、深さ15cm程度であった。

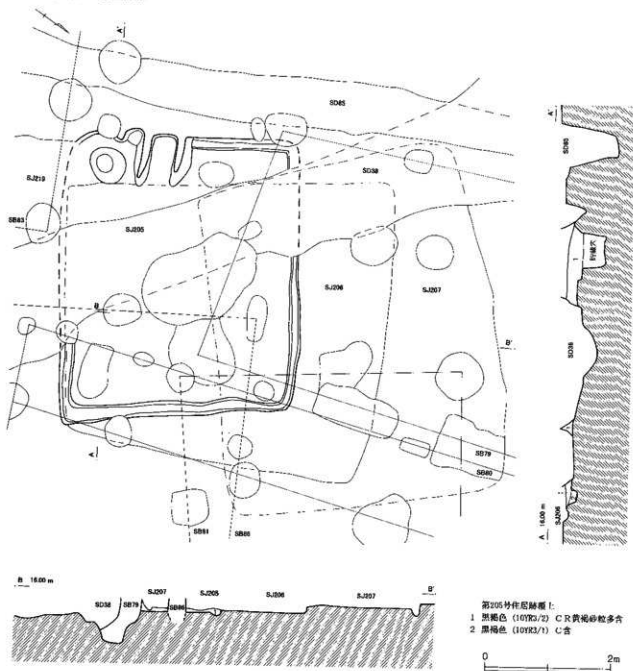
壁は明瞭であり、西側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。床面も残存部分については明瞭で、壁溝は貯蔵穴付近を除いては、ほぼ

全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。柱穴の位置には、後出のSJ-206の貼り床があり、この貼り床による攪乱のためにSJ-205の柱穴が検出できなかったと考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-206・207・219、SB-79・80・81・86、SD-38と重複していた。重複関係は、SJ-206・207、SB-79・80・81・86、SD-38に切れ、SJ-219とは不明であった。

第210図 第205号住居跡



第205号住居跡断面
 1 黒褐色 (10YR2/2) C R 貴細砂粒多含
 2 黒褐色 (10YR2/1) C 含
 0 2m

第205号住居跡出土遺物観察表

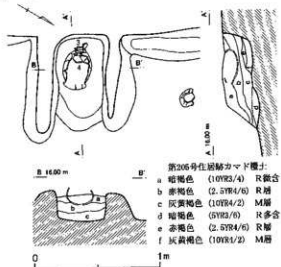
No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.1)			ACF	3	橙褐色	30	
2	環	(13.2)			AC	2	赤褐色	40	赤彩
3	高環			(10.8)	ACDFK	2	暗赤褐色	50	
4	甕	(17.1)	28.6	6.6	ACDEFHK	3	暗赤褐色	50	

実測可能な遺物として、土師器環、甕、高環、土玉などを検出した。

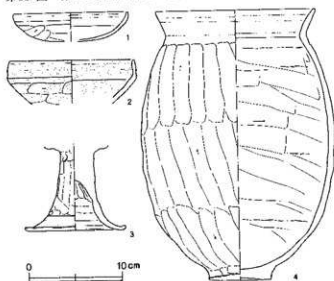
この中で、第212図3の高環の脚部は、カマド内で転用支脚として検出した。この高環の環部は、当該住居

跡の覆土中からは検出できなかった。4の甕は同様に、カマド内であったから支脚上に設置後、埋没したような状況で支脚の上から検出した。他は覆土からそれぞれ検出した。

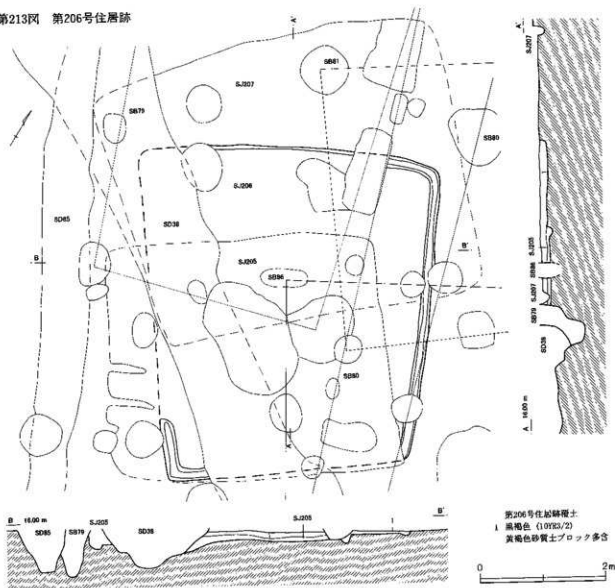
第211図 第205号住居跡カマド



第212図 第205号住居跡出土遺物



第213図 第206号住居跡



第206号住居跡 (第213図)

第206号住居跡は、AA-19-20グリッドから検出した。住居跡の西・南側はSD-38による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-30°-Wであった。規模は主軸長5.3m、副軸長4.5m、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を

示していた。

住居跡は、SJ-205・207、SB-79・80・81、SD-38・86と重複していた。重複関係は、SJ-207、SB-79・80・81、SD-38に切れられ、SJ-205を切っていた。

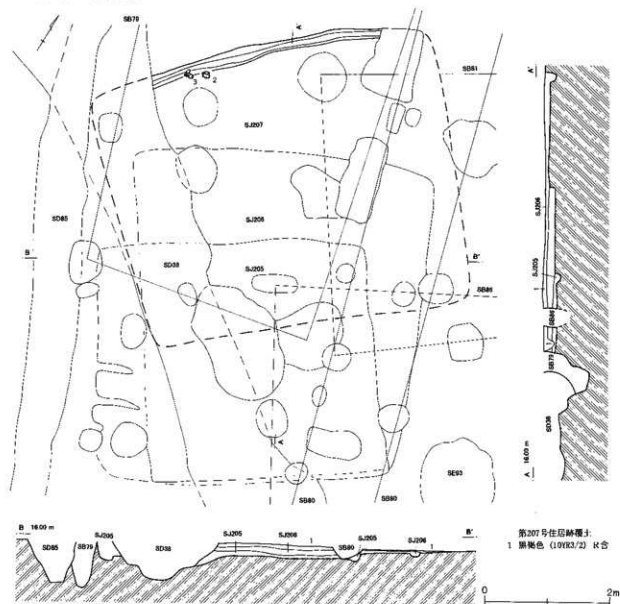
実測可能な遺物は、検出できなかった。

本住居跡に帰属する遺物が、重複していたSJ-205・207出土遺物中に混入している可能性が考えられた。

第207号住居跡 (第214・215図)

第207号住居跡は、AA-19-20グリッドから検出した。住居跡の南東側はSJ-205・206による擾乱のために、南西側はSD-38による擾乱のために検出できなかった。

第214図 第207号住居跡



第207号住居跡断面
1 黒褐色 (10YR3/2) R 含

た。形態は方形で、主軸方位はN-42°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北壁で検出できた。柱穴は床面を精査したが、検出することができなかった。

住居跡は、SJ-205・206、SB-79・80・81・86、SD-38と重複していた。重複関係は、SB-79・80・81・86、SD-38に切れ、SJ-205・206を切っていた。

第207号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.0)			ACFK	2	赤褐色	20	赤彩
2	環	(18.0)			ACF	3	明赤褐色	30	
3	鉢	(10.8)	7.5	5.0	ACDF	2	橙褐色	40	

第208号住居跡 (第216図)

第208号住居跡は、AA-20-21グリッドから検出した。

住居跡の北側の壁は調査区外のために、北東側は排水溝による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-33°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長3.0m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は検出できなかった。柱穴も検出できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SB-80・86、SK-318と重複していた。重複関係は、SB-80・86、SK-318に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第209号住居跡 (第218図)

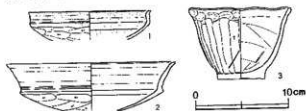
第209号住居跡は、Z-19-20グリッドから検出した。

住居跡の東側は調査区外のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-45°-Wであった。規模は主軸長5.1m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

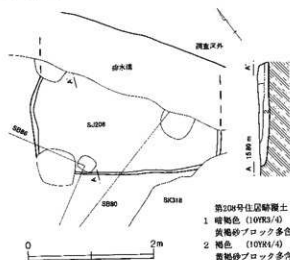
壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は西

実測可能な遺物として、土師器鉢、鉢などを検出した。この中で、第215図2の環と3の鉢は住居跡の北西側から、他は覆土から検出した。

第215図 第207号住居跡出土遺物



第216図 第208号住居跡



第208号住居跡覆土
1 暗褐色 (10YR3/4)
黄褐色ブロック多含
2 褐色 (10YR4/4)
黄褐色ブロック多含

壁以外で検出できた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-210、SB-62・79・80と重複していた。重複関係は、SB-62・79・80に切れ、SJ-210とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第210号住居跡 (第217・218図)

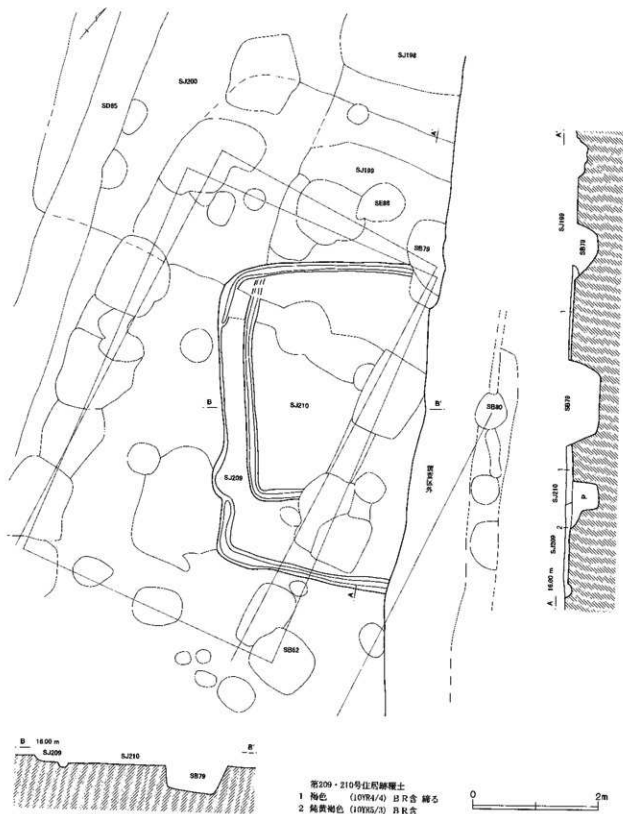
第217図 第210号住居跡出土遺物



第210号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.4)			ACF	2	赤褐色	10	赤彩

第218図 第209・210号住居跡



第210号住居跡は、Z-19・20グリッドから検出した。
住居跡の東側の壁は、調査区外のために検出できな

かった。形態は方形で、主軸方位はN-47°-Wであった。
規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であっ

た。

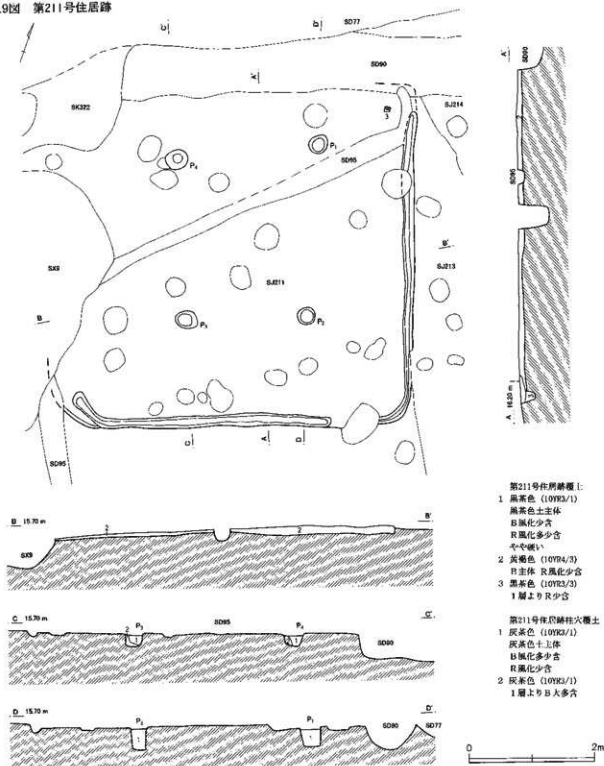
壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。
貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で壁溝はほぼ
全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を

示していた。

住居跡は、SJ-209、SB-62・79・80と重複していた。
重複関係は、SB-62・79・80に切れ、SJ-209とは不
明であった。実測可能な遺物として、土師器環を覆上
から検出した。

第219図 第211号住居跡





第211号住居跡 (第219・221図)

第211号住居跡は、Z-15・16グリッドから検出した。

住居跡の西側はSX-9による攪乱のために、北側はSD-90、SK-322による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-25°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長5.9m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。カマドや貯蔵穴は、SD-90による攪乱で、消滅したと考えられた。床面は明瞭で、壁溝は各コーナー付近で途切れるもののほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本検出できた。

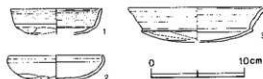
P1としたものはやや北寄りであり、本来のP1はSD-95と重複していたことも考えられた。検出した柱穴はいずれも浅かったが、覆土の状況から柱穴と判断した。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡はSJ-213、SD-77・90・95、SK-322、SX-9と重複していた。重複関係はSD-90・95、SX-9に切れ、SJ-213、SD-77とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環を検出した。この中で、第221図3の環は北側のコーナー付近から、他は覆土から検出した。

第221図 第211号住居跡出土遺物



第212号住居跡 (第220・222図)

第212号住居跡は、Z-16・17グリッドから検出した。形態は方形で、主軸方位はS-67°-Wであった。規模は主軸長4.4m、副軸長3.6m、深さ20cm程度であった。

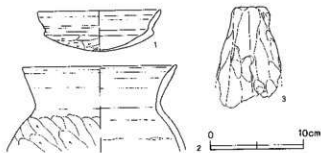
壁は明瞭であり、西側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの左側やや手前から検出した。床面も明瞭で、壁溝は全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。柱穴のP4は、貯蔵穴とのかねあいで、貯蔵穴のやや北側から検出されたピットがこれに相当する可能性も考えられるが、場所がカマドの手前なので、P4と判断しなかった。

住居跡は、SJ-213と入れ子状に、SJ-215とコーナー部分が、また、SJ-214とも近接した位置関係から論理的に重複していた。重複関係は、SJ-213を切っており、SJ-214・215とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、支脚などを検出した。

この中で、第222図1の環と2の甕はカマド右側から、3の支脚はカマド内からではなく、住居跡の北東側の床面上から検出した。

第222図 第212号住居跡出土遺物



第211号住居跡出土遺物観察表

Nn	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(9.6)			ACDFK	2	赤褐色	40	赤彩
2	環	(10.0)	2.7		ACDF	3	淡橙褐色	30	
3	環	(14.6)			ACDEF	3	明赤褐色	40	

3の支脚については、本住居跡がSJ-213と重複関係にあってこれを切っており、なおかつ支脚検出地点

のすぐ横にSJ-213の貯穴が認められたことから、SJ-213に帰属する可能性も考えられた。

第212号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	13.1	4.3		ACDEF	3	橙褐色	60	
2	甕	(16.3)			ACDEFK	3	黒褐色	20	
3	支脚				AC	4	淡褐色		

第213号住居跡 (第220・223図)

第213号住居跡は、Z-16・17グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-212による擾乱のために、北側はSJ-186・214による擾乱のために、西側はSJ-211による擾乱のために検出できなかった。

住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形と想定でき、主軸方位はS-61°-Wと考えられた。規模は主軸長6.3m、副軸長6.5m程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は東側コーナーから検出し、覆土内から環が検出できた。このことから、当該住居跡のカマドは貯蔵穴横の北東側の壁際に作られていたと考えられた。このことは、SJ-212北東側床面上から、支脚が単独で出土したことも矛盾しない。

第213号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕			(8.0)	ACDEFK	3	淡灰褐色	10	

第214号住居跡 (第224・225図)

第214号住居跡はY・Z-16グリッドから検出した。

住居跡の北側はSJ-186、SD-77・90・91による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-25°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ20cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面はやや明瞭で、壁溝は南西側でやや途切れるもののほぼ全周していたと考えられた。柱穴は1本検出できた。P1、P3、P4については、SD-90、SJ-186による擾乱で検出できなかったと考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を

示していた。床面はやや明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。P2に該当する場所にはSJ-214があり、これの擾乱によって検出できなかったと考えられる。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を

示していた。住居跡は、SJ-186・211・212・214・215、SD-92と重複していた。重複関係はSJ-212に切れ、SJ-186・211・214・215、SD-92とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器甕、石製模造品などを検出した。

第223図1は覆土中から検出した。

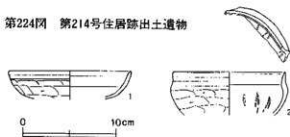
第223図 第213号住居跡出土遺物



示していた。

住居跡は、SJ-184・186・213、SD-77・90・91と重複していた。また、SJ-211・212とは近接した位置関係から、論理的に重複していたと考えられた。重複関係はSD-90・91に切れ、SJ-186、SD-77とは不明であった。実測可能な遺物として、土師器環、石製模造品などを覆土中から検出した。

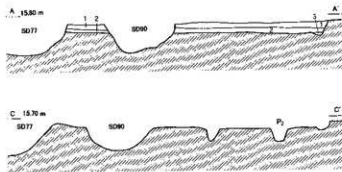
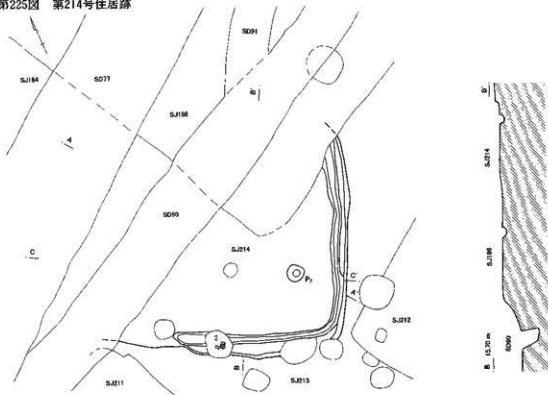
第224図 第214号住居跡出土遺物



第214号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(13.0)			AC	3	明赤褐色	20	
2	坏	(12.0)			ACDF	2	橙褐色	10	暗文

第225図 第214号住居跡



第214号住居跡層土

- 1 黒褐色 (10YR3/1) 黒褐色土主体
石灰化多少含
R 風化少含
やや硬い
- 2 黒灰色 (10YR2/1) 黒灰色土主体
石灰化少含
R 木風化微含
やや砂質
- 3 黒灰色 (10YR2/1) 2層に同じ
やや砂多含



第215号住居跡 (第226図)

第215号住居跡は、Y-16・17、Z-16・17グリッドから検出した。

住居跡の西側は、SJ-212・213による攪乱のために、東側はSE-103による攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-25°-Wであった。規模は主軸長2.7m、副軸長不明であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴

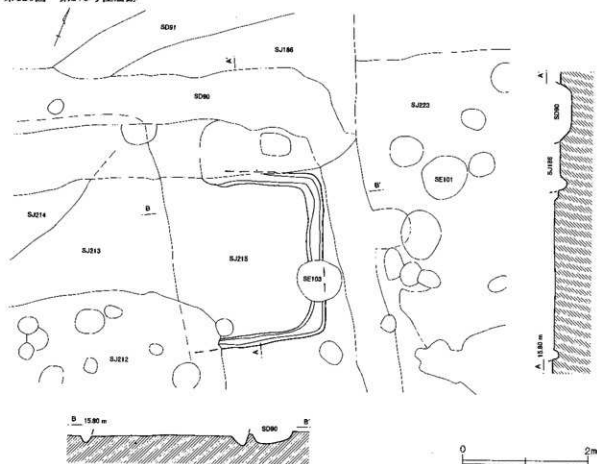
も検出できなかった。床面は明瞭で、椀溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は床面を精査したが、検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-186・212・213、SE-103と重複していた。重複関係は、SE-103に切られ、SJ-212・213とは不明であった。

実測可能な遺物として、石製模造品を検出した。

第226図 第215号住居跡



第216号住居跡 (第227～229図)

第216号住居跡は、Z-17・18、AA-17・18グリッドから検出した。

住居跡の中央は、SE-94による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-48°-Eであった。規模は主軸長4.9m、副軸長4.8m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は東側のコーナー、西壁、北側のコーナーで一部途切れるもの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。4本の柱穴からは、いずれも柱痕が検出できた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-217・239、SE-94と重複していた。重複関係は、SJ-217、SE-94に切られ、SJ-239とは不

明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、台付甕、甗、高環などを検出した。

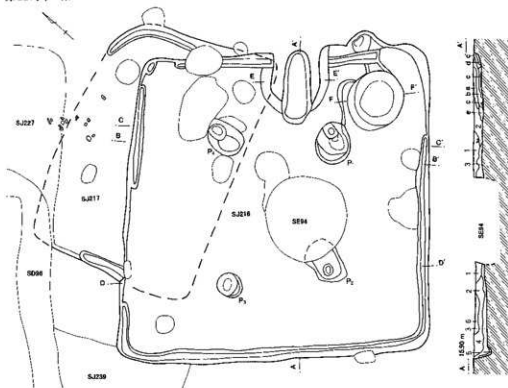
この中で、第229図6の甗、7の台付甕、9の甗はカマド右側から、4の高環は6の甗の下から、他は覆土からそれぞれ検出した。

第217号住居跡 (第227図)

第217号住居跡は、Z-17・18グリッドから検出した。

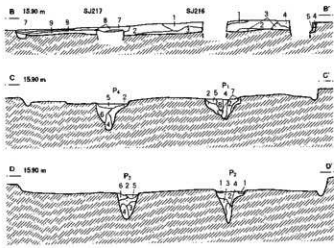
住居跡の北側はSJ-227による攪乱のために、南側はSJ-216による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-70°-Eであった。規模は主軸長4.0m、副軸長不明、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。土器破片が散乱している状況から、北側の壁際にカマドが存在した可能性も考えられた。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北側のコーナーから東側にかけてと西側で検出できた。柱穴は検出できな



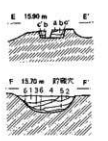
第216・217号住居跡層土

- 1 暗褐色 (10YR3/3)
R 多含
細り有るがボソソク
- 2 暗褐色 (10YR3/3)
1 に準じる 色調明るい
粘性弱る 地山層混
- 3 純黄褐色 (10YR4/3)
R 多含 細り弱
- 4 暗褐色 (10YR3/4)
R 若干含 単一的
色調暗
- 5 褐色 (10YR4/6)
R 主体 壁跡流入土
- 6 暗褐色 (10YR3/4)
R 多含 砂質 細り強
- 7 暗褐色 (10YR3/4)
R R 多含
白色パミス多含
- 8 暗褐色 (10YR3/4)
R 主体 粘床 薄層 細る
- 9 暗褐色 (10YR3/4)
遺存物少
灰色粘質土多含
パミス多含



第216・217号住居跡柱穴層土

- 1 暗褐色 (10YR3/3)
R 主体 粘床 細り強
- 2 暗褐色 (10YR2/2)
R 未溶化多含 細り有
- 3 暗褐色 (10YR3/2)
R 全体に混混
粘性強 単一的 粘填土
- 4 暗褐色 (10YR3/4)
R 溶混 粘質土柱状
- 5 暗褐色 (10YR3/4)
R 若干含 単一的 色調暗
- 6 暗褐色 (10YR3/4)
R 多含 細り弱
- 7 褐色 (10YR4/6)
R 主体 壁跡酸化層
- 8 暗褐色 (10YR2/3)
溶化進行 R 多含 斑文状



第216号住居跡柱穴層土

- 1 暗褐色 (10YR2/3) 粘床層土 4 と同じ R 若干含 単一的 色調暗
- 2 暗褐色 (10YR2/3) R 少含 R 粘含
- 3 暗褐色 (10YR2/3) 反粘質土化 カマド灰と陶磁
- 4 暗褐色 (10YR3/4) R 未溶化多含 斑文状
- 5 暗褐色 (10YR2/3) 基本 4 層 溶化進行 細り弱
- 6 褐色 (10YR4/6) R 主体 壁・床の溶化層

第216号住居跡カマド層土

- a 暗褐色 (10YR3/4) 白色粘土状含 R 少含
- b 暗赤褐色 (10YR3/3) R 主体 天井層土
- c 黒褐色 (10YR2/2) M 層
- d 黒褐色 (10YR2/2) M 層 M 主体 褐色土ブロック多含
- e 暗褐色 (10YR2/2) R 含 使用中に崩壊した天井?
- f 暗褐色 (10YR3/3) 混有物不含有 粘質有 カマド跡層炭灰土

かった。

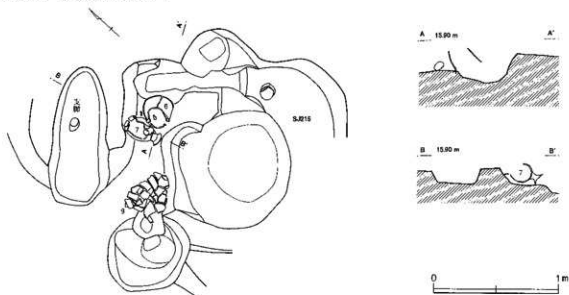
柱穴の P1、P2 に該当する場所は、SJ-216 によって攪乱されていたので検出できなかったと考えられた。また、P3、P4 に該当する場所からピットを検出したが、覆土の組成や堆積状況あるいは深さから柱穴ではないと判断した。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

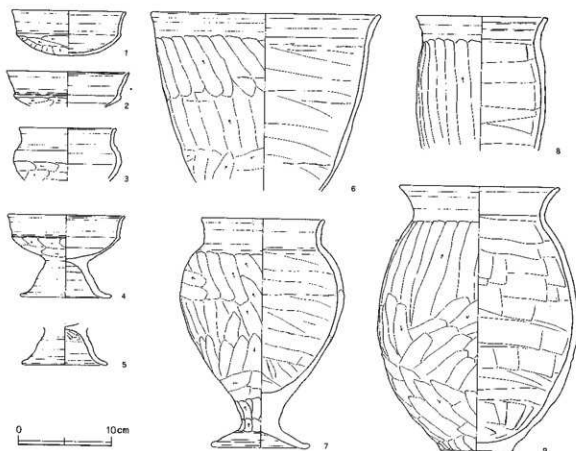
住居跡は、SJ-216・227、SD-96 と重複していた。重複関係は、SD-96 に切れ、SJ-216 を切り、SJ-227 とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第228図 第216号住居跡カマド



第229図 第216号住居跡出土遺物



第218号住居跡 (第230図)

第218号住居跡は AA-20・21、AB-20・21グリッドから検出した。住居跡の中央は、SD-38による擾乱の

ために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位は N-38°-Wであった。規模は主軸長3.3m、副軸長4.6m、深さ10cm程度であった。

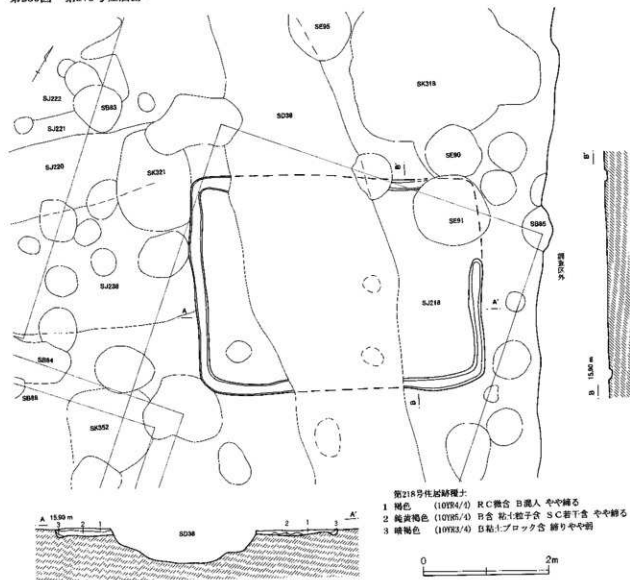
第216号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	12.1	4.7		ACDF	2	淡橙褐色	100	
2	坏	(13.0)			ACDF	2	温褐色	20	
3	坏	(10.4)			ACDF	2	淡灰褐色	30	
4	高坏	(12.4)	8.7	9.8	ACDEF	3	橙褐色	80	
5	高坏			9.2	ACDF	3	淡橙褐色	30	
6	甗	(24.5)			ACDEFHK	3	橙褐色	70	
7	台付甗	(13.1)	24.3	10.6	ACDEFHK	3	暗赤褐色	70	
8	甗	(14.0)			ACDEFHK	3	暗赤褐色	40	
9	甗	17.0	28.0	(7.7)	ACDEFHK	3	赤褐色	70	

壁は明瞭であったが、カマドや貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も検出できなかった。覆上には埋め灰しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-238、SB-84-85、SD-38、SE-91と重複していた。重複関係は、SD-38、SE-91に切れ、SJ-238、SB-84-85とは不明であった。実測可能な遺物は、検出できなかった。

第230図 第218号住居跡



第219号住居跡 (第231図)

第219号住居跡は、AA-20グリッドから検出した。

住居跡は一部を除き、SJ-205・220・221・222、SD-38による擾乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁の痕跡程度しか残存していなかった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。擾乱が著しく、貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴も検出できなかった。

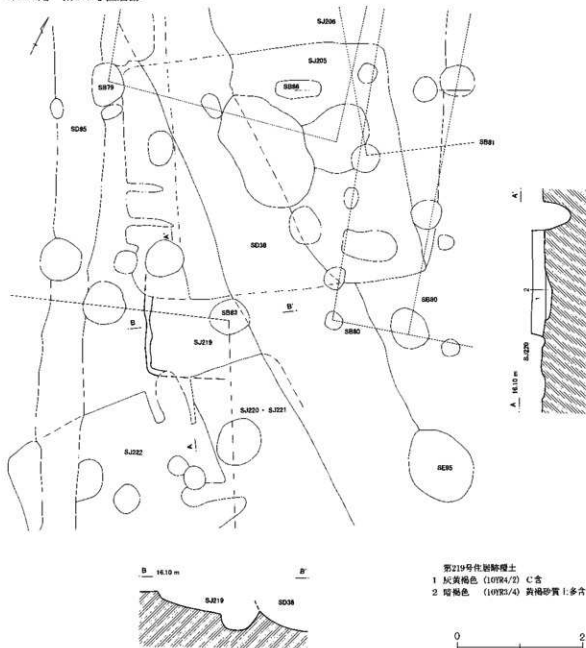
柱穴に相当する位置からピットが検出できたが、覆

上の状況や平面的な位置関係、あるいは深さなどから、当該遺構と重複関係にある掘立柱建物跡に由来する柱掘り方、あるいは当該住居跡と重複するピットであると考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-205・220・221・222、SB-80・83、SD-38と重複していた。重複関係は、SJ-221・222、SD-38に切れ、SJ-205、SB-80・83とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。



第220号住居跡 (第232~234図)

第220号住居跡は、AA・AB-20グリッドから検出した。住居跡の南東側はSJ-221・222による攪乱のために、西側はSD-85による攪乱のために、東側はSD-38による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-48°-Wであった。規模は主軸長4.9m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北西側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚や甕の破片が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周

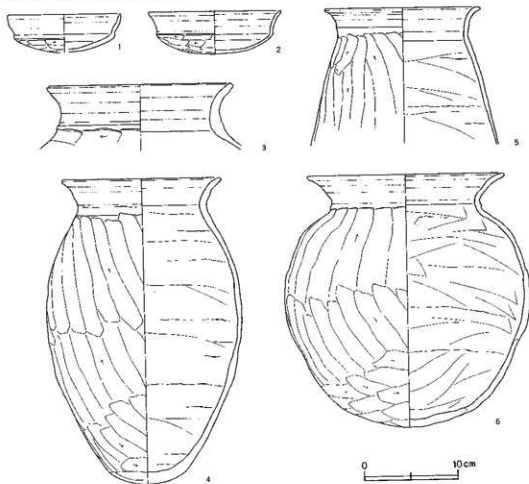
していたと考えられた。柱穴も、3本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-218・219・221・222・238、SB-83・85、SD-38-85、SK-321と重複していた。重複関係は、SB-83-85、SD-38-85、SK-321に切れ、SJ-219・221・222・238を切り、SJ-218とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、石製模造品、上玉などを検出した。

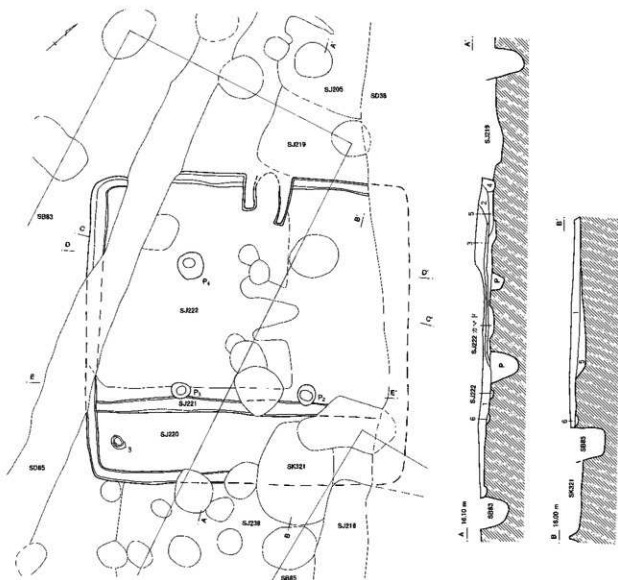
この中で、第232図3の甕の口縁は南側のコーナーから、6の甕はカマド内から、4・5の甕はカマドの

第232図 第220号住居跡出土遺物



第220号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.0)			ACDF	3	赤褐色	50	
2	環	(14.0)	4.5		ACDEFK	3	橙褐色	60	
3	甕	(20.0)			ACDEFK	4	淡褐色	20	
4	甕	(17.0)	32.4		ACDEFK	3	橙褐色	50	
5	甕	(16.6)			ACDEFHK	3	赤褐色	30	
6	甕	(21.0)	26.8		ACDFK	3	暗赤褐色	50	



第220号住居跡層土

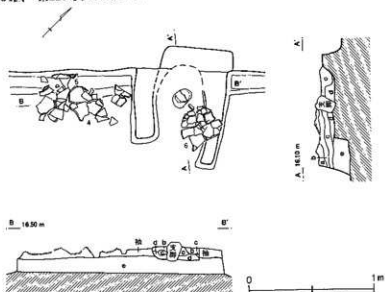
- 1 黒褐色 (10YR3/2) R 含
- 2 黒灰色 (10YR4/1) R 含 粘性有
カマド右袖
- 3 黄褐色 (10YR5/6) 黄褐色質ヒブロック
黒褐色ブロック貼床
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐色質土粒含 壁床
- 5 黒褐色 (10YR3/2) 黄褐色質土ブロック多含
掘り方

第221号住居跡層土

- 6 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐色ブロック含



第234図 第220号住居跡カマド



第220号住居跡柱穴覆土

- 1 褐色 (10YR4/6) 黄褐砂粘多含
- 2 紫褐色 (10YR3/2) 黄褐砂粘多含
粘性やや有
- 3 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐砂粘多含
- 4 褐色 (10YR4/6) 黄褐砂粘ブロック多含
- 5 暗褐色 (10YR3/4) 黄褐砂粘ブロック多含

第220号住居跡カマド覆土

- a 暗褐色 (10YR3/3) R含
- b 紫褐色 (2.5YR4/8) R
- c 褐灰色 (10YR4/1) R含 M多含
- d 黄褐褐色 (10YR4/3) KM含
- e 褐色 (10YR4/4) 黄褐砂粘ブロック多含
粘床

左側から、他は覆土から検出した。

第232図4の甕は底部が肉厚で丸みを帯びていた。同様に、6の甕も底部は丸く作られていた。また、カマド内から検出した支脚は脆弱で、取り上げることができなかった。

SJ-221・222と重複が著しいために、これらの住居跡に帰属する遺物が混入している可能性が高いと考えられた。ただし、その大半が重複したSJ-219の覆土中に作られているとはいえ、カマド内やカマド袖の左側から出土した遺物は、明瞭に本住居跡に帰属するものである。入れ子状に重複した3軒の住居跡の中で、当該住居跡のみから、一定の深さを持った柱穴が明瞭に検出できた。

第221号住居跡 (第233図)

第221号住居跡は、AA・AB-20グリッドから検出した。住居跡の大半は、SJ-220・222による擾乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-46°-Wであった。規模は主軸長3.6m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドや貯蔵穴は検出できなかった。床面も不明瞭であったが、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-219・220・222、SB-83・85、SD-38・

85と重複していた。重複関係は、SJ-220・222、SB-83・85、SD-38・85に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

SJ-221は、SJ-220・222と重複が著しく、壁溝のみの検出であるが、住居跡であると判断した。

第222号住居跡 (第235図)

第222号住居跡は、AA・AB-20グリッドから検出した。住居跡の西側はSD-85による擾乱のために、東側のコーナーはビットによる擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-42°-Eであった。規模は主軸長3.2m、副軸長3.4m、深さ10cm程度であった。

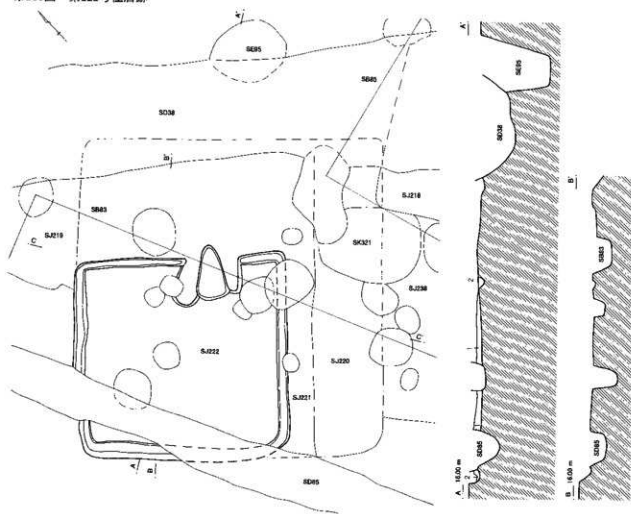
壁は明瞭であり、北東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-219・220・221、SB-83、SD-85と重複していた。重複関係は、SJ-220、SB-83、SD-85に切れ、SJ-221を切り、SJ-219とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

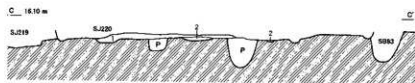
SJ-220・221・222といった入れ子状の重複の中で、最も小さい住居跡であるが、壁溝は明瞭に全周しており、カマドにも使用痕跡が認められた。

第235図 第222号住居跡



第222号住居跡層七

- 1 暗褐色 (1.0782/1)
- 2 黄褐色砂質土ブロック多穴
- 3 褐色 (1.0784/6)
- 4 黄褐色砂質土粒多含 壁溝



第223号住居跡 (第236・238図)

第223号住居跡は、Y・Z-17グリッドから検出した。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-34°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ5cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。北側のコーナー部分から検出したピットは、覆土の状況と深さから貯蔵穴ではないと判断した。床面は不明瞭で、壁溝は北東壁の一部で検出できた。柱穴は4本検出できた。

ただし、P4は検出位置がやや西側に偏っており、深さも、他の柱穴に比べるとやや浅かった。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-186・215・224・225・226、SD-90・149、SK-328、SE-101・103と重複していた。重複関係は、全て不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環を検出した。

第236図 第223号住居跡出土遺物



第223号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(14.0)	4.0		ACDEF	3	淡灰褐色	40	

第224号住居跡 (第238図)

第224号住居跡は、Y・Z-17グリッドから検出した。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-32°Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は不明瞭で、壁溝は北東壁の一部で検出できたが、他の部分では検出できなかった。柱穴は4本が検出できた。

検出した4本の柱穴の中で、P1は著しく深く、P3は著しく浅かった。

住居跡は、SJ-186・215・223・225・226・227、SD-90・92・149、SE-101・103、SK-328と重複していた。重複関係は、全て不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第225号住居跡 (第238図)

第225号住居跡は、Y・Z-17グリッドから検出した。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-21°Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ5cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝は北壁の一部で検出できた。周辺地山の精査によって、柱穴を1本検出できた。

住居跡は、SJ-223・224・226・227、SD-90・92・149、SK-328と重複していた。重複関係は、全て不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

SJ-223から224までの3軒の住居跡は、いずれも壁溝のみの検出で遺物もほとんど認められなかった。また検出できた壁溝についても、断面形態は浅く、平面

第226号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(16.4)			ACDF	3	淡褐色	20	
2	甕	(22.0)			ACF	3	淡橙褐色	10	

形態も、各々コーナー部分であるにもかかわらず、直角に曲がっていなかったが、壁溝中の覆土の状況などから、住居跡であると判断した。

第226号住居跡 (第237・240図)

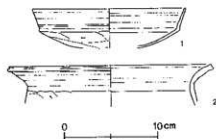
第226号住居跡は、Z・AA-17グリッドから検出した。住居跡の東側はSJ-227による攪乱のために、南側はSD-96による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-28°Wであった。規模は主軸長7.5m、副軸長6.6m、深さ5cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。調査時に、住居跡の南東側の壁周辺を精査したが、カマドの痕跡は認められなかった。SD-96によって攪乱されたためと考えられた。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は南のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

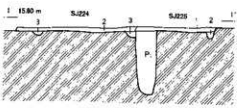
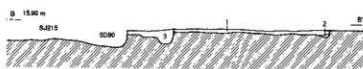
住居跡は、SJ-217・223・224・225・227・228・239・243、SD-90・92・96・149、SK-331・332と重複していた。重複関係は、SJ-227、SD-90・92・96、SK-321・332に切れ、SJ-217・223・224・225・228・239・243とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器坏、甕、鉄鏝などを検出した。この中で、第237図2の甕の口縁は南側のコーナーから、他は覆土から検出した。

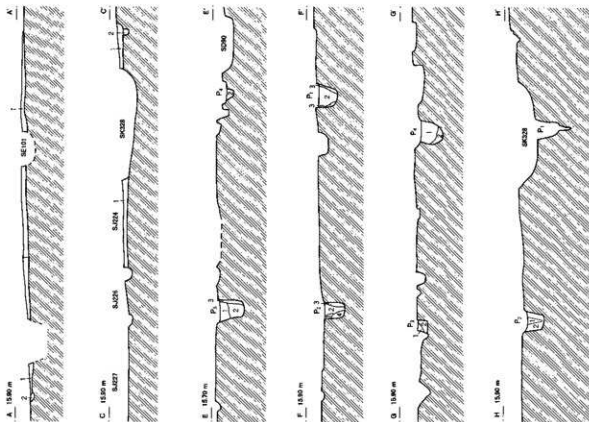
第237図 第226号住居跡出土遺物



第238図 第223～225号住居跡



- 第223号住居跡覆土
- 1 黒茶色 (10YR3/1) 黒茶色土主体 B未風化多少含
やや硬く締る
 - 2 黒茶色 (10YR3/1) 1層より中B多含
 - 3 黒茶色 (10YR3/1) 黒茶色土主体 Bやや風化多少
R未風化少含 C未風化少含
- 第223号住居跡柱穴覆土
- 1 灰褐色 (10YR2/1) 灰褐色土主体 B風化多含
R風化少含
 - 2 灰褐色 (10YR2/1) 1層よりB少含
 - 3 灰褐色 (10YR2/1) 1層よりR多含
 - 4 灰褐色 (10YR2/1) 1層よりR少含 Rやや多含
- 第224号住居跡覆土
- 1 黒茶色 (10YR3/1) 黒茶色土主体 B風化多少含
R風化少含
C風化少含 粘粒やや有
 - 2 茶褐色 (10YR4/6) 黒茶色土主体
黒茶色土やや風化多少含
粘粒やや有
- 第224号住居跡柱穴覆土
- 1 灰褐色 (10YR3/1) 灰褐色土主体 B風化多少
R風化多含 やや硬い
 - 2 灰褐色 (10YR3/1) 灰褐色土主体 B風化多含



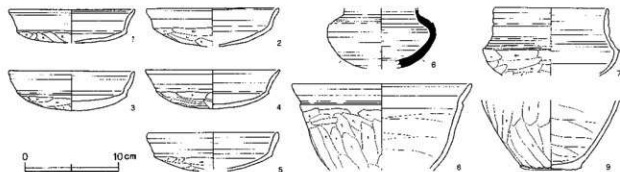
第227号住居跡 (第239・240図)

第227号住居跡は、Z-17・18、AA-17グリックから検出した。

住居跡の南側は、SD-96による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-32°-Wであった。規模は主軸長6.2m、副軸長6.3m、深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドも検出できなかった。貯蔵穴は東側のコーナーから検出し、覆土内から環が検出できた。床面は明瞭で、壁溝は南壁以外で検出できた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

第239図 第227号住居跡出土遺物

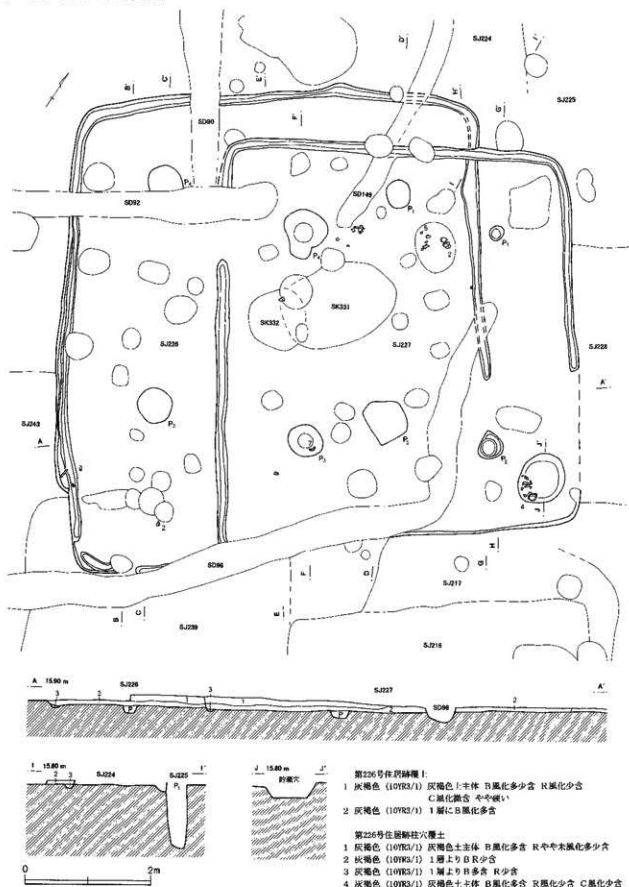


覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡はSJ-217・224・225・226・228・239・243、SD-92・96・149、SK-331・332と重複していた。重複関係はSD-92・96、SK-331・332に切られ、SJ-226を切り、SJ-217・224・225・228・239・243とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、鉢、甕、須恵器壺、土玉、砥石、石製模造品などを検出した。この中で、第239図2・5の環はビット内から、4の環は貯蔵穴の中から、7の須恵器鉢は住居跡の南側から、他は覆土から検出した。

第240图 第226・227号住居跡



第228号住居跡 (第241図)

第228号住居跡は、Z-17・18グリッドから検出した。

住居跡の西側はSJ-227による擾乱のために、東側はSD-38による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-36°-Wであった。規模は主軸長4.2m、副軸長不明、深さ5cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は住居跡の検出範囲からは確認でき、ほぼ全周していたと考えら

れた。

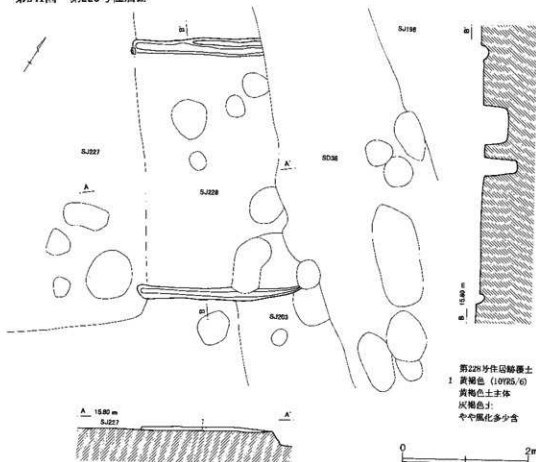
柱穴は、床面を精査したが検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-196・203・227、SD-38と重複していた。重複関係は、SJ-227、SD-38に切れ、SJ-203とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第241図 第228号住居跡



第229号住居跡 (第242~244図)

第229号住居跡は、Z-18・19、AA-18・19グリッドから検出した。

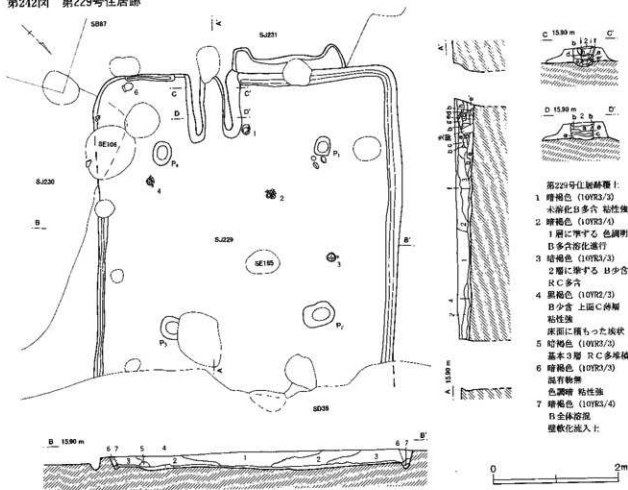
住居跡の北側は、SD-38による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-41°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長4.8、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、南西側からカマドが検出できた。

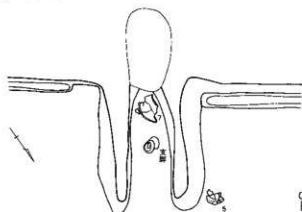
貯蔵穴は検出できなかった。カマド左側から検出したビットは浅かったので、貯蔵穴ではないと判断した。床面は明瞭で、壁溝は南側のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

住居跡はSJ-230・231、SB-87、SD-38、SE-106・185と重複していた。重複関係はSB-87、SD-38、SE-106・185に切れ、SJ-231を切り、SJ-230とは不明であった。

第242図 第229号住居跡



第243図 第229号住居跡カマド



第229号住居跡カマド層土

- a 暗褐色 (10YR3/4) B R 礫含 他層と境界明確
カマド燃焼後の流入土
- b 赤褐色 (2.5YR4/6) R 主体 灰白色粘質土ブロック若干含
- c 明黄褐色 (10YR6/6) 灰白色粘質土主体 天井崩落土
- d 暗褐色 (10YR3/3) a 層基本 R 多含 天井崩落前の流入土
- e 灰黄褐色 (10YR4/2) M層 R 多含 網り筋
- e' 褐灰色 (10YR4/1) 単純M層 灰白色
- f 暗褐色 (10YR3/3) 4層に準ずる 粘性強 炭化層層不在
- g 暗褐色 (10YR3/3) b c 層の天井構造土
R粘質土ブロック多含
- h 暗褐色 (10YR3/4) B層含 架設土途中への流入土
- i 暗褐色 (10YR3/3) b層に近似 R 含
- j 褐色 (10YR1/4) MC 不含 粘性強 R 混入

第229号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	12.0	4.8		ACDEF	3	橙褐色	100	
2	環	12.4	5.1		ACEF	3	淡橙褐色	100	
3	環	13.0	5.0		ACDEF	3	橙褐色	100	
4	環	12.3	4.9		ACDEF	3	明赤褐色	100	
5	環	12.8	4.6		ACDF	3	明赤褐色	100	
6	壺	11.2	12.4		ACDEFK	2	明赤褐色	100	
7	瓶			(8.0)	ACDEFK	3	淡灰褐色	30	

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甔、石製模造品などを検出した。

この中で、第244図7の甕はカマド内から、1・5の環はカマド右側から、6の甕は南側コーナーから、4の環はP4付近から、2の環は住居跡の中央付近から、3の環は住居跡の北西側から、他は覆土から検出した。

第230号住居跡 (第245・248図)

第230号住居跡は、AA-19グリッドから検出した。

住居跡の北西側のコーナーは、SJ-229による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-31°-Wであった。規模は主軸長4.3m、副軸長4.2m、深さ5cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北側のコーナーを中心として検出できた。柱穴は検出できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡はSJ-229・231・233・234、SB-87、SK-333、SE-106と重複していた。重複関係は、SB-87、SK-333、SE-106に切れ、SJ-229・231・233・234とは不明であった。

第230号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.0)			A C D F	3	淡橙褐色	10	
2	環	(15.0)			A C D F	3	橙褐色	20	

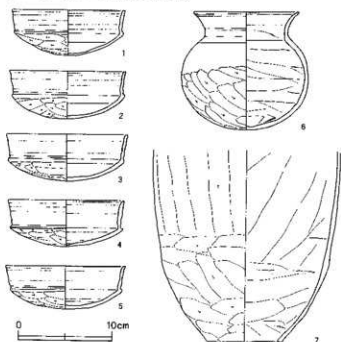
第233号住居跡 (第246・248・249図)

第233号住居跡は、AA-18・19、AB-18・19グリッドから検出した。

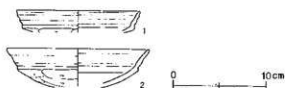
住居跡の北東側はSJ-234による擾乱のために、北側はSJ-230による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-3°-Wであった。規模は主軸長7.1m、副軸長7.1m、深さ15cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本検出できた。

第244図 第229号住居跡出土遺物



第245図 第230号住居跡出土遺物



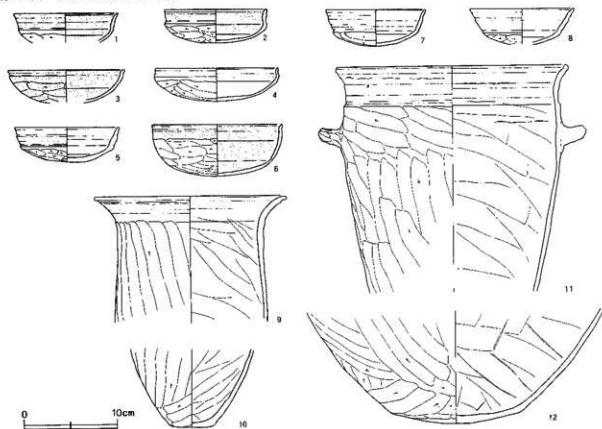
実測可能な遺物として、土師器環、甕、甔、石製模造品などを検出した。この中で、第245図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

住居跡は、SJ-230・231・232・234、SB-57、SK-334と重複していた。重複関係は、SJ-234、SB-87、SK-334に切れ、SJ-230・231・232とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甔、石製模造品、白玉などを検出した。この中で、第246図2の環はカマド跡から、5~7の環は住居跡の北側から、4の環は住居跡東側の土壌覆土上面から、他は覆土から検出した。

環4は、明らかに当該住居跡より古く、SK-334の擾乱に伴う流入と考えられた。

第246図 第233号住居跡出土遺物



第233号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(11.0)			ACDEK	2	赤褐色	20	赤彩
2	坏	(10.9)	3.6		ACEFK	3	橙褐色	90	赤彩
3	坏	(12.3)			ACEF	2	赤褐色	30	赤彩
4	坏	(13.0)	3.5		ACDF	3	橙褐色	40	
5	坏	(11.1)	3.7		ACDF	3	黒褐色	100	
6	坏	(14.0)	5.4		ACEFK	2	赤褐色	90	赤彩
7	坏	(10.5)	3.9		ACDF	3	黒褐色	80	
8	坏	(11.0)			ACDF	3	淡灰褐色	20	
9	甕	(20.6)			ACFK	3	淡灰褐色	30	
10	钵			(4.6)	ACDF	3	黒褐色	20	
11	瓶	(25.0)			ACF	3	淡橙褐色	40	把手付
12	钵			(14.0)	ACDEF	3	暗赤褐色	20	

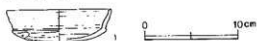
第234号住居跡 (第247・248図)

第234号住居跡は、AA・AB-19グリッドから検出した。住居跡の北側は、SJ-230による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-5°-Wであった。規模は主軸長6.0m、副軸長5.8m、深さ10cm

程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も

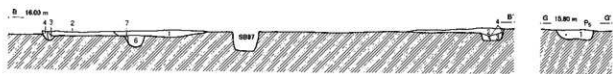
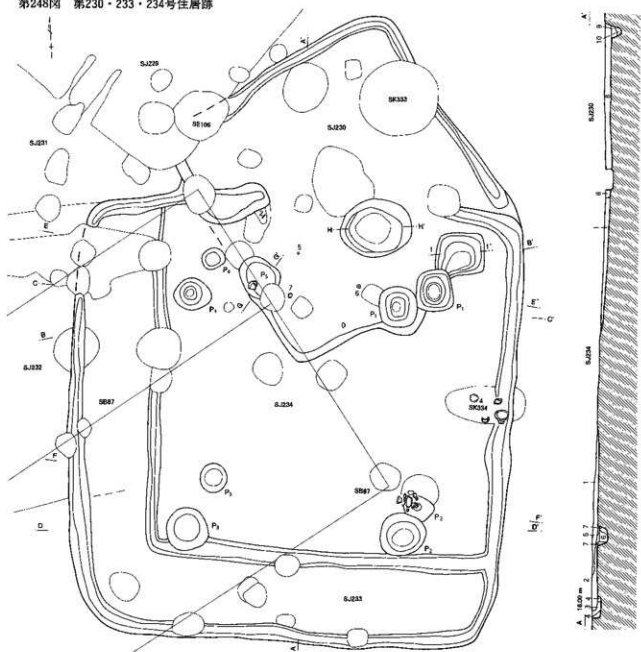
第247図 第234号住居跡出土遺物



第234号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(11.0)			ACDF	3	暗赤褐色	40	

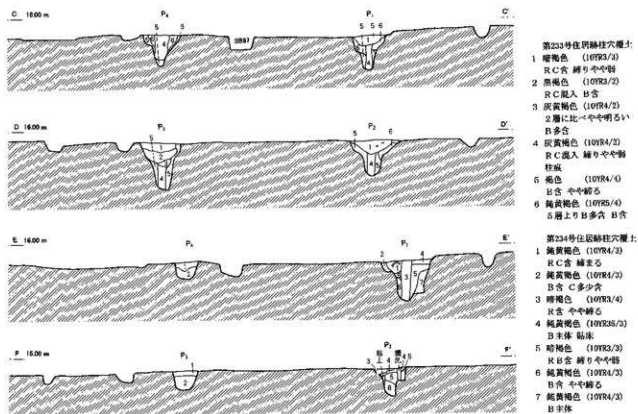
第248図 第230・233・234号住居跡



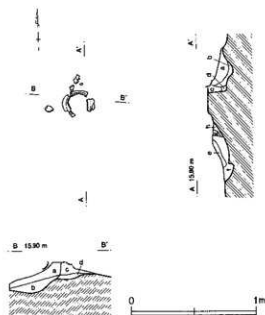
第230・232・233・234号住居跡層土

- 1 暗褐色 (10YR4/3) R C 含 中々締る
- 2 暗褐色 (10YR4/3) 1層に比べB 混入 中々締る
- 3 灰褐色 (10YR5/2) R C 混入 中々締り弱
- 4 褐色 (10YR4/4) 3層に比べB 混入 中々締る
- 5 暗褐色 (10YR4/3) B 混入 粘束
- 6 黒褐色 (10YR2/2) R C 含 B 混入 締る
- 7 鈍黄褐色 (10YR5/4) B 中々多含
- 8 灰黄褐色 (10YR4/2) R C 若干含 中々締る
- 9 黄褐色 (10YR5/6) B 若干含 R C 混入
- 10 黄褐色 (10YR5/6) B 混入 締る





第249図 第233号住居跡カマド



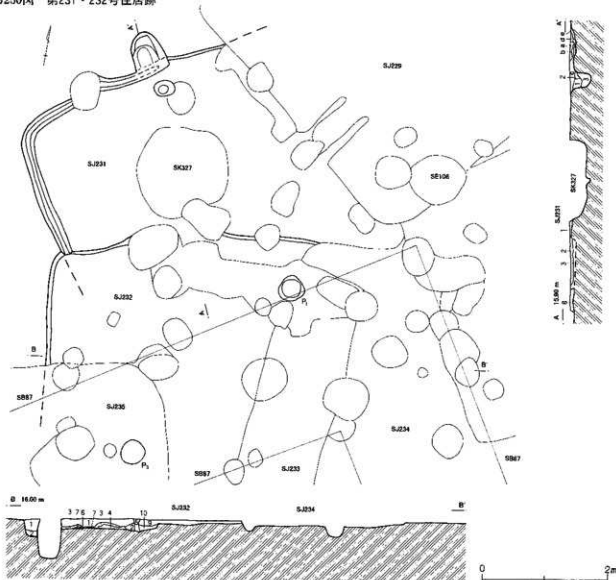
- 第233号住居跡炉穴履上
- 1 暗褐色 (10YR3/3) R C 混入 やや練る
 - 2 黒褐色 (10YR3/2) 1層よりやや暗く R C 含
 - 3 褐色 (10YR4/4) B 主体 練る
 - 4 純黄褐色 (10YR5/3) 2層にD混入
- 第234号住居跡炉穴履上
- 1 純黄褐色 (10YR5/4) R C 含 B 混入
 - 2 褐色 (10YR4/4) R C 含 B 混入 1層より暗く
 - 3 純黄褐色 (10YR5/4) B 主体
- 第233号住居跡カマド履上:
- a 純黄褐色 (10YR4/3) R C B 含
 - b 純黄褐色 (10YR4/3) 1層にB加含
 - c 純黄褐色 (10YR4/3) 2層に比べブロック多含
 - d 純黄褐色 (10YR5/3) B 主体
 - e 純黄褐色 (10YR4/4) R C 多含 練りやや割
 - f 暗褐色 (10YR4/1) M 主体 R 混入
 - g 灰黄褐色 (10YR4/2) M R 含 B 多含
 - h 純黄褐色 (10YR5/4) B 主体

検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

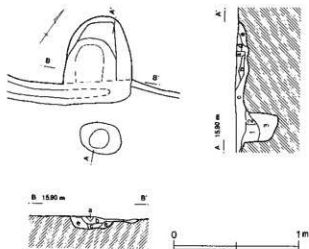
住居跡は、SJ-230・231・233・232、SB-87、SK-334と重複していた。重複関係は、SB-87に切られ、SJ-233

を切り、SJ-230・231・232、SK-334とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環などを覆上中から検出した。



第251図 第231号住居跡カマド



第231号住居跡カマド前ビット層土

- 1 褐色色 (10YR4/1) 灰混在 RC含
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/3) B RC含
- 3 褐色色 (10YR4/1) M混入 RC含 織りやや弱

第231号住居跡カマド層土

- a 黄褐色 (10YR5/6) RC混入 織りやや弱
- b 灰オリーブ色 (GY5/2) RC含 織りやや弱 粘土ブロック含
- c 褐色色 (10YR5/1) M上体 RC混入
- d 灰オリーブ色 (GY5/2) 粘土本体
- e 鈍黄褐色 (10YR5/1) B上体

第232号住居跡層土

- 1 暗褐色 (10YR4/3) RC含 やや締る
- 2 暗褐色 (10YR4/3) 1層に比べり混入 やや締る
- 3 黒褐色 (10YR2/2) RC混入 やや締り弱
- 4 褐色 (10YR4/4) 3層に比べり混入 やや締る
- 5 暗褐色 (10YR4/3) M混入 粘味
- 6 暗褐色 (10YR2/2) RC含 B混入 締る
- 7 鈍黄褐色 (10YR5/4) Bやや多含
- 8 灰黄褐色 (10YR4/2) RC若干含 やや締る
- 9 黄褐色 (10YR5/6) M若干含 RC混入
- 10 黄褐色 (10YR5/6) B混入 締る

第231号住居跡 (第250・251図)

第231号住居跡は、AA-18グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-229による擾乱のために、南側はSJ-232・233・234による擾乱のために、中央部分はSK-327による擾乱のために検出できなかった。

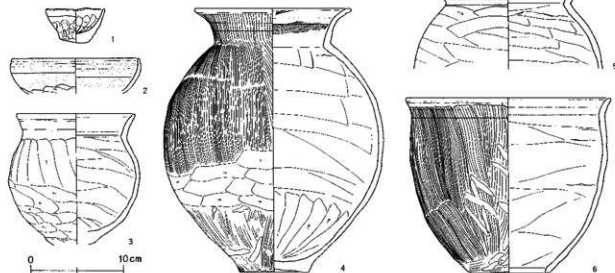
住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-32°-Wであった。規模は主軸長2.4m、副軸長不明、深さ5cm程度であった。

壁は明瞭であり、北西側からカマドが検出できた。カマドの手前から、灰や炭化物を覆土に多量に含むビットが検出できたが、その性格は明らかにできなかった。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北西のコーナーで検出できた。柱穴は該当箇所を精査したが検出できなかった。

住居跡はSJ-229・230・232・233・234・235、SB-87、SK-327と重複していた。重複関係はSJ-232、SB-87、SK-327に切れ、SJ-229・230・233・234・235とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第252図 第235号住居跡出土土遺物



第235号住居跡出土土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	手探ね土器	6.2	3.7	3.2	ACDFH	3	黒褐色	90	
2	坏	(13.4)			ACDFH	2	赤褐色	20	赤彩
3	甕	(12.7)			ACDEFK	2	黒褐色	80	
4	甕	(16.8)	28.0	(7.4)	ACDEFHK	3	赤褐色	60	
5	甕	(16.0)			ACDF	2	暗赤褐色	30	
6	甕	(22.0)	18.6	(7.8)	ACEFHK	3	暗赤褐色	40	

第232号住居跡 (第250図)

第232号住居跡はAA・AB-18-19グリッドから検出した。

住居跡の南側は、SJ-233・234・235による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-10°-Wであった。規模は、主軸長不明、副軸長不明、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は検出できなかった。柱穴は1本が明瞭に検出できた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-231・233・234・235、SB-87と重複していた。重複関係は、SB-87に切れられ、SJ-231を切り、SJ-233・234・235とは不明であった。

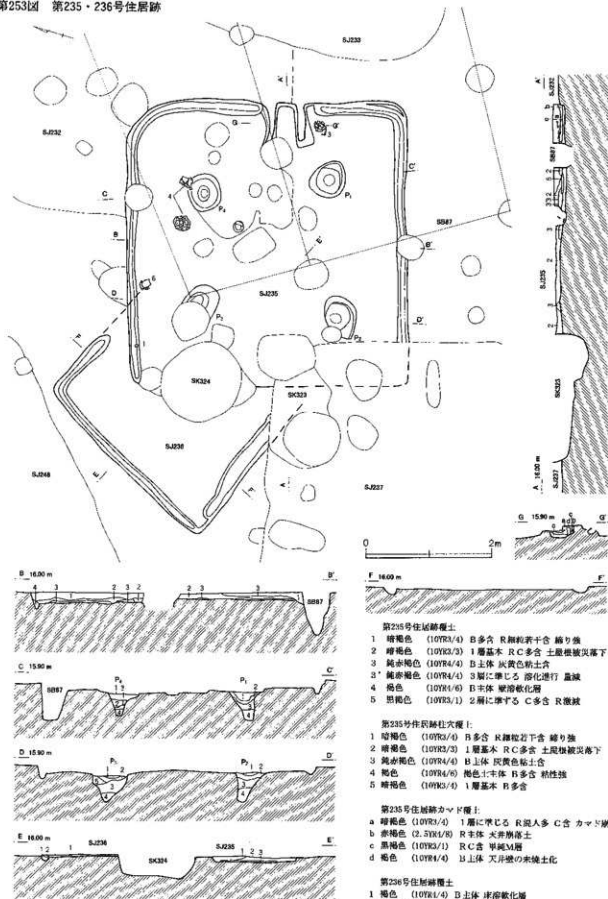
実測可能な遺物は、検出できなかった。

第235号住居跡 (第252・253図)

第235号住居跡は、AA・AB-18グリッドから検出した。

住居跡の南側はSJ-237による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-72°-Wで

第253図 第235・236号住居跡



第235号住居跡覆土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) B多含 R細粒若干含 粘り強
- 2 暗褐色 (10YR2/3) 1層基本 R C多含 土層被浸落
- 3 黄赤褐色 (10YR4/4) B上体 灰黄色粘土含
- 3* 黄赤褐色 (10YR4/4) 3層に準じる 溶化進行 量減
- 4 褐色 (10YR4/6) B上体 摩砕酸化層
- 5 黑褐色 (10YR3/1) 2層に準ずる C多含 R微粒

第235号住居跡柱穴覆土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) B多含 R細粒若干含 粘り強
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 1層基本 R C多含 土層被浸落
- 3 黄赤褐色 (10YR4/4) B上体 灰黄色粘土含
- 4 褐色 (10YR4/6) 褐色土本体 B多含 粘り強
- 5 暗褐色 (10YR3/4) 1層基本 B多含

第235号住居跡カマド覆土

- a 暗褐色 (10YR3/4) 1層に準じる R 灰人多 C 含 カマド崩落土
- b 赤褐色 (2.5YR1/8) R 本体 天井崩落土
- c 黑褐色 (10YR3/1) R C 含 甲純M層
- d 褐色 (10YR4/4) B上体 天井壁の未焼土化

第236号住居跡覆土

- 1 褐色 (10YR4/4) D 上体 摩砕酸化層
- 2 暗褐色 (10YR3/4) B 多層混

あった。規模は主軸長不明、副軸長4.5m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、北東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-232・236・237、SB-87、SK-324と重複していた。重複関係は、SB-87、SK-324に切れ、SJ-232・236・237とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甌、手捏ね土器、管玉などを検出した。

この中で、第252図3の甕はカマド右側から、1の手捏ね土器は北西側の壁溝中から、4の甕、6の甌は住居跡の北側から、他は覆土から検出した。

第236号住居跡 (第253・254図)

第236号住居跡は、AA・AB-18グリッドから検出した。

第236号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(15.0)			ACD	2	淡茶褐色	10	

第237号住居跡 (第255・256図)

第237号住居跡は、AB-17-18グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-12°-Wであった。

規模は主軸長6.0m、副軸長6.3m、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚が検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は、北東・南東のコーナーで一部途切れていた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

柱穴の中で、P1・P2からは柱痕と考えられる土層が検出できた。P2・P3はやや浅かったが、覆土の堆積状況や組成と平面的な位置関係から、柱穴と判断した。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-235・236・245、SK-323と重複していた。重複関係は、SK-323に切れ、SJ

住居跡の東側はSJ-235・SK-324による擾乱のために、南側はSJ-237による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-27°-Eであった。規模は主軸長3.4m、副軸長不明、深さ20cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。床面を精査したが、柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-235・237、SK-323・324と重複していた。重複関係は、SK-323・324に切れ、SJ-235・237とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環などを覆土中から検出した。

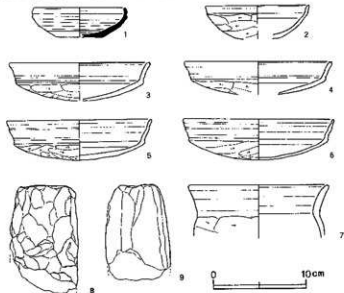
第254図 第236号住居跡出土遺物



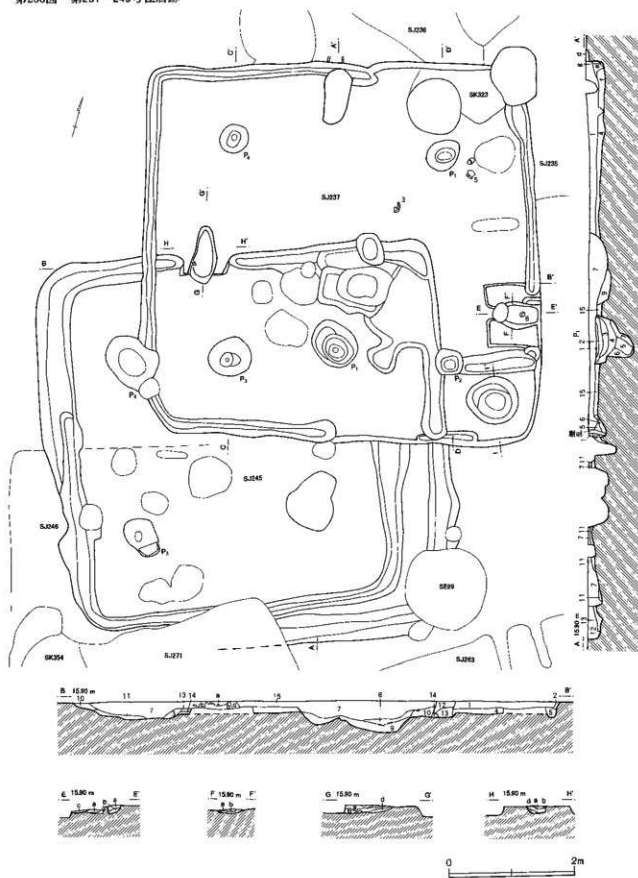
-245を切り、SJ-235・236とは不明であった。

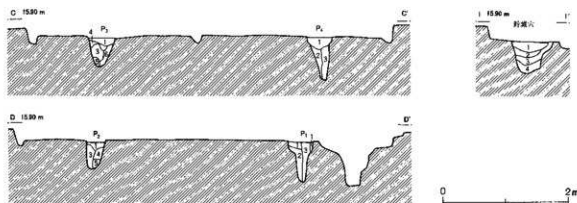
実測可能な遺物として、土師器環、甕、支脚、鉄鏝などを検出した。この中で、第255図6の環は貯蔵穴の中から、3・5の環は住居跡の北東側から、8の支脚はカマド内から、他は覆土から検出した。

第255図 第237号住居跡出土遺物



第256図 第237・245号住居跡





第237号住居跡層土

- 1 暗褐色 (10YR2/4) B多量溶混 R若干含
- 2 褐色 (10YR4/6) B主体 變溶軟化層
- 3 暗褐色 (10YR3/2) B少量 變溶層土
- 4 暗褐色 (10YR2/4) B暗褐色土基本 硬く締る Bを胎床としていない
- 5 褐色 (10YR4/4) B多量溶混 締り無
- 6 褐色 (10YR4/6) B主体 變・度の溶軟化層

第237号住居跡カマド層土

- a 暗赤褐色 (2.5YR3/6) R 天井崩落土
- b 暗褐色 (10YR3/2) 単純M層
- c 暗褐色 (10YR3/2) 住居1層と同じ B多量溶混 R若干含
- d 暗褐色 (10YR3/2) R多量 煙道
- e 暗褐色 (10YR3/2) 壁層
- f 黄灰褐色 (10YR4/3) R少量 全体B胎床
- g 黄灰褐色 (10YR4/3) 壁層

第237号住居跡柱穴層土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) 締り無 B R多量 (柱の割れた跡の堆積)
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 全体にB溶混 粘性強 締り弱 (充填土)
- 3 暗褐色 (10YR3/4) B未溶化多量 (柱底)
- 4 褐色 (10YR4/6) 未溶化B主体 締り無
- 5 暗褐色 (10YR3/4) 3層の結實土化した層 B溶化 褐色 (柱底)
- 6 褐色 (10YR4/6) B主体 (充填土)

第237号住居跡貯蔵庫層土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) R被加熱B多量
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 全体にB溶混 未溶化B多量

- 3 暗褐色 (10YR3/4) B R無含 単一の粘性強
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 3層に準じる 溶化B多量

第245号住居跡層土

- 7 暗褐色 (10YR3/4) B多量 被加熱土・C白色バミス少含
- 8 暗褐色 (10YR3/4) 1層基本 R少ない 未溶化B多量
- 9 暗褐色 (10YR3/2) 溶化進行B多量 粘性強
- 10 暗褐色 (10YR3/4) 1層に準ずる R不含 全体色調暗 粘性強
- 11 褐色 (10YR4/6) B主体 變溶軟化層
- 12 暗褐色 (10YR3/2) 全体にB溶混 R少量 締り強
- 13 暗褐色 (10YR3/4) B層基本 B溶混多 色調明
- 14 褐色 (10YR4/6) 砂質B主体 床掘り過ぎ部
- 15 暗褐色 (10YR3/4) B・褐色土の充填土 上面にB薄層貼られ床となる

第245号住居跡カマド層土

- a 暗褐色 (10YR3/2) R・被加熱土(砂質)主体 天井崩落土
- b 暗褐色 (10YR3/2) Bブロックを含むM層
- c 暗褐色 (10YR3/2) 褐色土からなる物 (送りつけ)
- d 明赤褐色 (2.5YR5/6) R含

第245号住居跡柱穴層土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) R被主体 締まる 埴り床状
- 2 暗褐色 (10YR2/3) B粒無含 粘性強
- 3 暗褐色 (10YR2/3) Bア+主体 粘性強
- 4 暗褐色 (10YR2/3) B粒無含 粘性強
- 5 暗褐色 (10YR2/3) 4層に同じ 締まりなし
- 6 暗褐色 (10YR3/2) Bア+主体 粘性強
- 7 暗褐色 (10YR4/6) B主体 變の崩落土

第237号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器 環	(9.6)	3.1	(5.0)	ACF	1	青灰色	30	
2	環	(11.1)			ACDEFK	3	明赤褐色	30	
3	環	(15.0)			ACDEF	3	淡橙褐色	50	
4	環	(15.6)			ACF	3	明赤褐色	20	
5	環	(15.5)	4.2		ACDF	3	淡灰褐色	50	
6	環	(16.0)	4.3		ACDEF	3	淡灰褐色	100	
7	甕	(14.7)			ACDFK	3	暗赤褐色	10	
8	支脚				AC	2	淡褐色		
9	支脚				B	2	淡褐色		

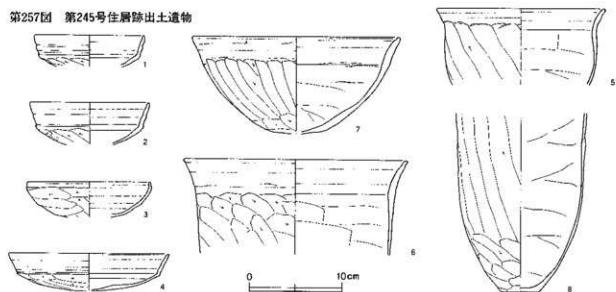
第245号住居跡 (第256・257団)

第245号住居跡は、AB-17・18、AC-17・18グリッドから検出した。

住居跡の北側はSJ-237による攪乱のために、南側

はSJ-271による攪乱のために、東側のコーナーはSE-99による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-75°-Eであった。規模は主軸長5.8m、副軸長6.5m、深さ50cm程度であった。

第257図 第245号住居跡出土遺物



壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。

覆上には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

第245号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.6)			ACDF	3	黒褐色	10	
2	環	(12.6)			ACDF	3	淡灰褐色	40	
3	環	(13.0)			ACDF	3	橙褐色	30	
4	環	(17.0)			ACDEF	3	橙褐色	50	
5	鉢	(17.8)			ACDEFK	3	淡灰褐色	10	
6	甌	(24.0)			ACDF	3	淡橙褐色	20	
7	鉢	(22.0)			ACDFK	3	黒褐色	40	
8	甕			(4.0)	ACDF	3	橙褐色	30	

第238号住居跡 (第258図)

第238号住居跡は、AB-20グリッドから検出した。

住居跡の北側はSJ-220・221・222、SK-321による擾乱のために、東側はSJ-218による擾乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。

形態は方形で、主軸方位はN-38°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明であった。

壁は不明瞭で、カマドも検出できなかった。貯蔵穴は検出できなかった。床面は不明瞭で、壁溝は南側のコーナーで検出できた。地山の精査によって、4本の柱穴が検出できた。

住居跡は、SJ-237・246・271、SE-99と重複していた。重複関係は、SJ-237・271、SE-99に切られ、SJ-246とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、鉢、土玉、鉄滓などを検出した。この中で、第257図6の甌、8の甕はカマド周辺から、他は覆土から検出した。

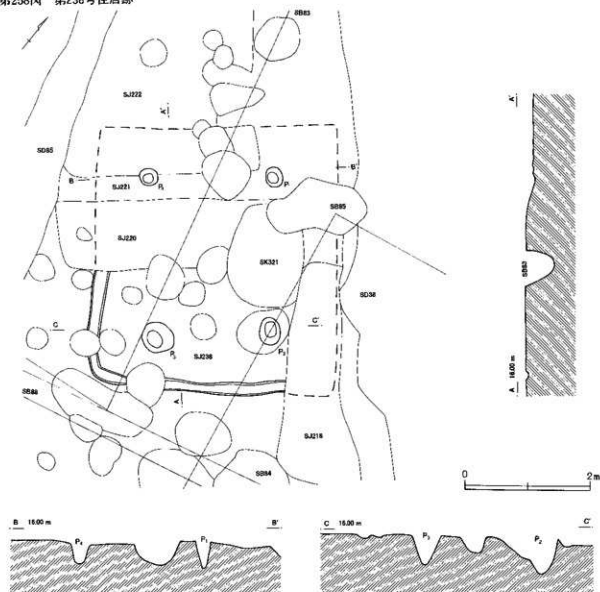
住居跡は、SJ-218・220・221・222、SB-83・84・85、SD-38、SK-321と重複していた。重複関係は、SB-83・84・85、SD-38、SK-321に切られ、SJ-218・220・221・222とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第239号住居跡 (第259・260図)

第239号住居跡は、Z-AA-17グリッドから検出した。住居跡の東側はSJ-216による擾乱のために、西側はSJ-240による擾乱のために、北側はSD-96、SJ-226・227による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-27°-Wであった。規模は主軸長3.0m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

第258号 第238号住居跡



壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は東壁で検出できた。柱穴は検出できなかった。

柱穴のうち、P1はSD-96によって、P4はSJ-226によって検出できなかった。また、P3・P4については、周辺を精査したが、検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-216・226・227・240・243、SD-96と重複していた。重複関係は、SJ-216・226・227・240、SD-96に切られ、SJ-243を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器杯、椀、甕、高環な

どを検出した。

この中で、第259号2の椀、4の高環、5の甕は住居跡の南側から、他は覆土から検出した。

第243号住居跡 (第260図)

第243号住居跡は、Z・AA-17グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-226・239による攪乱のために、南側はSJ-240、SD-96による攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-26°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ5cm程度であった。

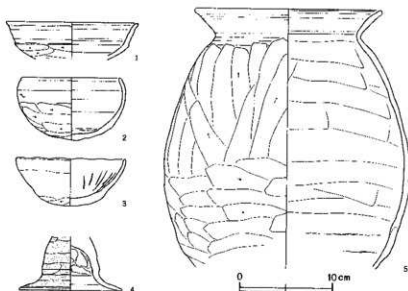
壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。

貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は西側のコーナーで検出できた。柱穴は検出できなかった。P1～P3はSJ-226・239の擾乱によると考えられた。P4については、周辺を精査したが検出することができなかった。

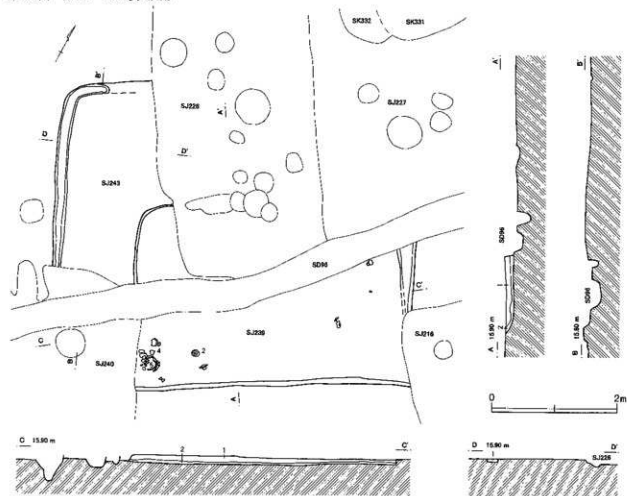
住居跡はSJ-226・239・240、SD-96と重複していた。重複関係は、SJ-239・240、SD-96に切られ、SJ-226とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第259図 第239号住居跡出土遺物



第260図 第239・243号住居跡



第239号住居跡層土:

- 1 灰褐色 (10YR2/2) 灰褐色土主体 B黒化多含 R黒化多少含 C黒化多少含 やや硬い
- 2 灰褐色 (10YR2/2) 1層に比へて C多含 一部層状

第243号住居跡層土

- 1 灰黄褐色 (10YR3/1) 灰黒土土主体 B黒化少含 壁溝層土

第239号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.0)			ACF	3	淡橙褐色	20	
2	環	10.3	6.6		ACDEFHK	2	淡橙褐色	100	
3	環	(11.6)	5.1		ACDEFHK	3	淡橙褐色	50	
4	高環			(11.0)	ACDEF	2	赤褐色	40	赤彩
5	甕	(20.0)			ACDEFHK	3	暗赤褐色	40	

第240号住居跡 (第261・262図)

第240号住居跡は、AA-17グリッドから検出した。

住居跡の中央は、SD-96による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-24°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長3.3m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は全周していた。柱穴も、3本か明瞭に検出できた。P4はSD-96によって検出できなかった。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-239・243・253・254、SD-96、SK-347と重複していた。重複関係はSD-96、SK-347に切れ、SJ-239・253・254を切り、SJ-243とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、鉄製の刀子、鉄製の棒状不明品などを検出した。

第240号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.0)			ACDF	3	赤褐色	30	
2	環	(19.8)	3.4		ACDEF	3	淡灰褐色	50	暗文

第253号住居跡 (第262図)

第253号住居跡は、AA-17グリッドから検出した。

住居跡の内側はSJ-240による攪乱のために、中央はSD-96による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-22°-Wであった。規模は主軸長3.6m、副軸長3.9m、深さ10cm程度であった。

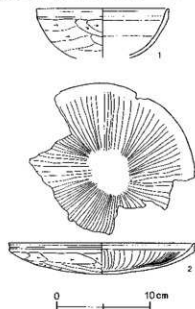
壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は南側のコーナーで一部途切れるもの、ほぼ全周していたと考えられた。

周辺の地山を精査したが、柱穴は検出することができなかった。

住居跡は、SJ-239・240・243・254、SD-96、SK-347と

この中で、第261図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第261図 第240号住居跡出土遺物



重複していた。重複関係は、SJ-240、SD-96、SK-347に切れ、SJ-254を切り、SJ-239・243とは不明であった。実測可能な遺物は、検出できなかった。

第254号住居跡 (第262図)

第254号住居跡は、AA-17グリッドから検出した。住居跡の内側はSJ-240・253による攪乱のために、中央はSD-96による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-23°-Wであった。規模は主軸長4.0m、副軸長4.2m、深さ10cm程度であった。壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は東側の壁で検出できた。

周辺の地山を精査したが、柱穴は検出することがで

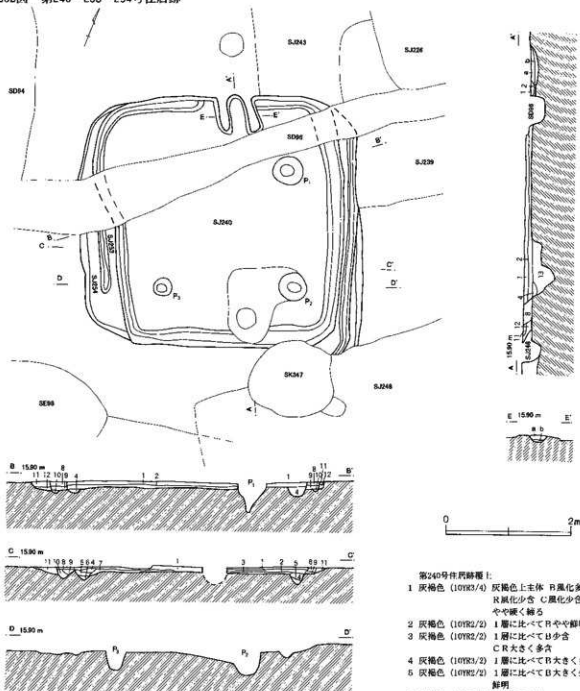
きなかった。

住居跡はSJ-239・240・243・248・253、SD-96、SK-347と重複していた。重複関係は、SJ-240・253、SD-96、SK-347に切られ、SJ-239・243・248とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

SJ-253・254ともに、柱穴が検出できなかったが、P1～P3については、切り合っていたSJ-240の柱穴と重複していたと考えられた。

第262図 第240・253・254号住居跡



第240号住居跡層上:

- 1 灰褐色 (10YR3/4) 灰褐色土主体 B風化多少含
R風化少含 C風化少含
やや硬く締る
- 2 灰褐色 (10YR2/2) 1層に比べてRやや鮮明
- 3 灰褐色 (10YR2/2) 1層に比べてB少含
C R大きく多含
- 4 灰褐色 (10YR2/2) 1層に比べてB大きく多含
鮮明
- 5 灰褐色 (10YR2/2) 1層に比べてB大きく少含
鮮明
- 6 黄褐色 (10YR4/6) 黄褐色B中体
- 7 灰褐色 (10YR3/4) 灰褐色土主体 B風化多混入

第253号住居跡層土

- 8 灰黄色 (10YR3/4) 灰褐色土とR混合 R多含
全体に風化
- 9 灰黄色 (10YR3/3) R層よりB少含 鮮明
- 10 灰黄色 (10YR2/1) R層よりBやや少含
あまり風化していない

第240号住居跡カマド層土

- a 灰褐色 (10YR3/4) 黒褐色土主体 R未風化多含
- b 灰褐色 (10YR2/3) a層よりR小さく少含

第254号住居跡層上:

- 11 灰黄色 (10YR3/2) 灰黄色土主体 B風化少含
R未風化少含
- 12 灰黄色 (10YR3/2) 1層よりB多含
風化進行していない
- 13 灰褐色 (10YR2/2) 2層に比べてB大

第241号住居跡 (第263・264図)

第241号住居跡は、AB-19グリッドから検出した。

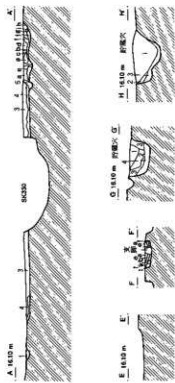
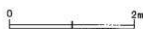
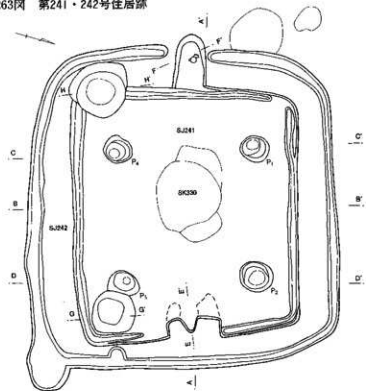
住居跡の中央はSK-330による擾乱のために、西側のコーナーはSJ-242による擾乱のために検出できな

かった。形態は方形で、主軸方位はN-18°-Wであった。

規模は主軸長4.0m、副軸長3.6m、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯

第263図 第241・242号住居跡



- 第241・242号住居跡柱穴層土
- 1 褐色 (10YR4/2) R若干含 やや締る
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) B含 粘性有
 - 3 暗黒褐色 (10YR3/2) RB含 やや締る
 - 4 暗褐色 (10YR3/3) B混入 やや締る
 - 5 黄褐色 (10YR4/3) B含 締りやや弱

- 第241号住居跡貯蔵穴層土
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) RC含 締り強
 - 2 灰黄褐色 (10YR4/2) RC含 締り強
 - 3 灰黄褐色 (10YR4/2) BR若干含
 - 4 黄褐色 (10YR5/3) DC含

- 第242号住居跡貯蔵穴層土
- 1 赤褐色 (10YR3/2) RC含 若干混入
 - 2 黄褐色 (10YR5/4) D含 締りやや弱
 - 3 灰黄褐色 (10YR4/2) B混入 締りやや弱

- 第242号住居跡カマド層土
- a 明赤褐色 (5YR5/8) RB含
 - b 暗灰色 (10YR4/1) RC多含 B若干混入
 - c 黄褐色 (10YR5/4) Bブロック
 - d 黒褐色 (10YR2/1) CM含 締り弱
 - e 純黄褐色 (10YR5/4) B主体含
 - f 赤褐色 (10YR2/1) CM含 締り弱
 - g 明赤褐色 (5YR5/8) RB含
 - h 純黄褐色 (10YR5/4) B主体
 - i 純黄褐色 (10YR5/4) Bブロック
 - j 黄褐色 (10YR3/2) RC含 やや締る
 - k 純黄褐色 (10YR5/4) B多含
 - l 暗灰色 (10YR4/1) RC含

蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は北西のコーナーで一部途切れるもののほぼ全周していたと考えられた。

柱穴も4本検出できたが、SJ-241とSJ-242のものが重複していたと考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

第241号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.0)			ACDF	3	橙褐色	10	

第242号住居跡 (第263・265図)

第242号住居跡は、AB-19グリッドから検出した。

住居跡の中央は、SJ-241、SK-330による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-18°-Wであった。規模は主軸長5.2m、副軸長5.0m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、西側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚や甕の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は全周していた。柱穴は検出できなかったが、SJ-241の柱穴と重複していたと考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

第242号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.7)			ACEF	3	淡橙褐色	40	
2	環	(13.3)			ACF	2	暗赤褐色	30	

第246号住居跡 (第266図)

第246号住居跡は、AB・AC-17・18グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-245による攪乱のために、南西側のコーナーはSK-354による攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の取跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-75°-Eであった。規模は、主軸長不明、副軸長3.0m、深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝は東壁以

外で検出できた。柱穴は検出できなかった。住居跡は、SJ-242、SK-330と重複していた。重複関係は、SK-330に切られ、SJ-242を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。この中で、第264図1の環は貯蔵穴内から検出した。

第264図 第241号住居跡出土遺物



住居跡は、SJ-241、SK-330と重複していた。重複関係は、SJ-241、SK-330に切られていた。

本住居跡は、入れ子状に重複してやや小さいSJ-241の立て替えのように見えるが、規模の小さいSJ-241の方が新しかった。

実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。この中で、第265図1・2の環は貯蔵穴内から検出した。

第265図 第242号住居跡出土遺物



外で検出できた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-245・271・272、SK-354と重複していた。重複関係は、SK-354に切られ、SJ-245・271・272とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第271号住居跡 (第266・267図)

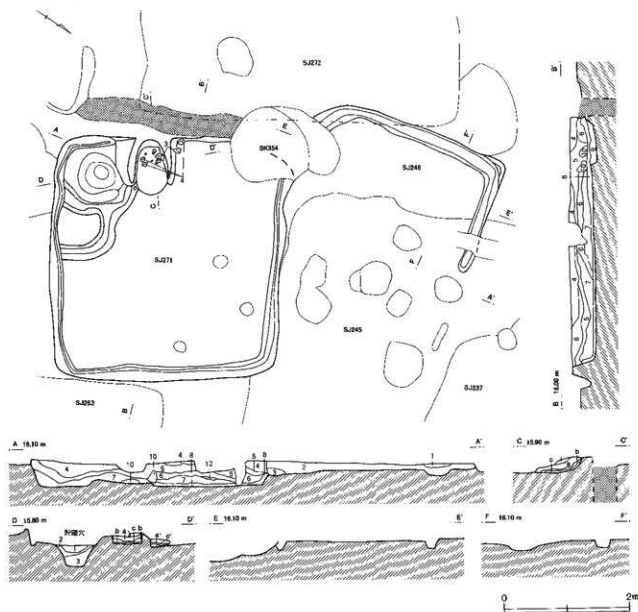
第271号住居跡は、AC-17・18グリッドから検出した。住居跡の西側のコーナーは、SK-354による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-58°-Eであった。規模は主軸長3.8m、副軸長3.6m、深さ40cm程度であった。

壁は明瞭であり、西側からカマドが検出できた。カマド内からは高炉の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。貯蔵穴の周りと北東側に、粘土を主体とする土で作られた高まりが検出できた。床

第266図 第246・271号住居跡

面も明瞭で、壁溝は西のコーナーで一部途切れるもののはほぼ全周していたと考えられた。

柱穴は周辺を精査したが、検出することができなかった。



第246号住居跡層土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 未溶化B多含 細り塊 R C微含
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 2層基本 R 多含
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 2層基本 R C中多含 B含

第271号住居跡層土

- 4 暗褐色 (10YR3/4) 褐色土基層 黒色土粒・B多含
- 5 褐色 (10YR4/6) 砂質B上層 黒色土・褐色土ブロック混入
- 6 暗褐色 (10YR3/4) 褐色土大型ブロック主体 黒色土・B混入
- 7 暗褐色 (10YR3/4) 2層に近似 褐色土ブロック小塊化 粘性強 細り割
- 8 黒褐色 (10YR2/3) 粘性強い暗褐色土単一層 自然増殖土
- 9 黒色 (10YR2/2) C M R・硬加熱B カマド灰かき出し
- 10 褐色 (10YR4/4) 粘質Bブロック

第271号住居跡カマド層土

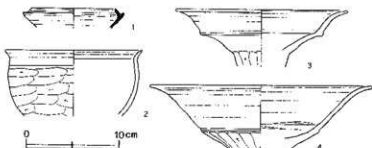
- a 褐色 (10YR4/6) やや砂質B主体天井構築土 厚く細り貝
- a' 黒褐色 (10YR3/1) 天井構築土外面の溶化堆積層
- b 赤褐色 (2.5YR4/6) R上体 天井内面崩落土
- c 黒褐色 (10YR3/1) 単塊M層
- c' 黒褐色 (10YR3/1) カマド灰かき出したもの 2度目

第271号住居跡貯蔵穴層土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) B大型ブロック主体 住居層土埋め戻し土と同じ
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘性強 赤褐色土主体 B粒混多含
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 2層構築B 自然増殖土 同質化している

住居跡は、SJ-245・246、SK-354と重複して第267図 第271号住居跡出土遺物
いた。重複関係は、SJ-245、SK-354に切れ、SJ-246とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器鉢、高坏、須恵器環などを検出した。この中で、第267図3・4の高坏はカマド内と周辺から、他は覆土から検出した。



第271号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器環	(9.0)			ACF	1	青白色	10	
2	鉢	(14.7)			ACDFK	2	赤褐色	30	
3	高坏	(18.4)			ACDFK	2	橙褐色	50	
4	高坏	(23.8)			ACDFK	2	橙褐色	40	

第248号住居跡 (第268・269図)

第248号住居跡は、AA-17・18、AB-17グリッドから検出した。

住居跡の南西側はSJ-258、SK-336・338、SE-100による擾乱のために、北西側はSK-347による擾乱のために、中央はSE-173による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-48°Eであった。規模は主軸長不明、副軸長7.2m、深さ25cm程度であった。

壁は明瞭であり、北東側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚や甕の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドからやや離れて南側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は北側のコーナーで一部途切れるもののほぼ全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。

P3については、SK-336、SE-100によって検出できなかった。

また、P4についてはやや浅かったが、覆土の組成や土層観察の所見から柱穴と判断した。

住居跡はSJ-258・259・261、SE-100・173、SK-336・337・338・341・347と重複していた。重複関係はSE-100・173、SK-336・337・338・341・347に切れ、SJ-258・259・261とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、埴、甕、壺、支脚などを検出した。

この中で、第268図12の甕と16の支脚はカマド内か

ら、10の甕はカマド左側から、8の埴はカマド右側から、15の甕は南東の壁際から、9の壺と11の甕は住居跡の中央付近から、1の環、7の埴と14の甕は住居跡の西側から、他は覆土から検出した。

本住居跡から出土した遺物には、明瞭な時期差が認められた。

環類については、第268図1の環は赤彩されており、口辺が短く横楕円とは異なった系統の環で、かなり古い様相が認められた。胎土にも赤色粒子が多量に混入され、他の環類とは異なっていた。また出土位置もやや西側コーナーよりの床面上で、当該遺構に帰属する遺物と考えられた。6の環も出土位置は覆土であったが、胎土は1同様で赤色粒子を多量に含み、赤彩されており、古い様相が認められた。

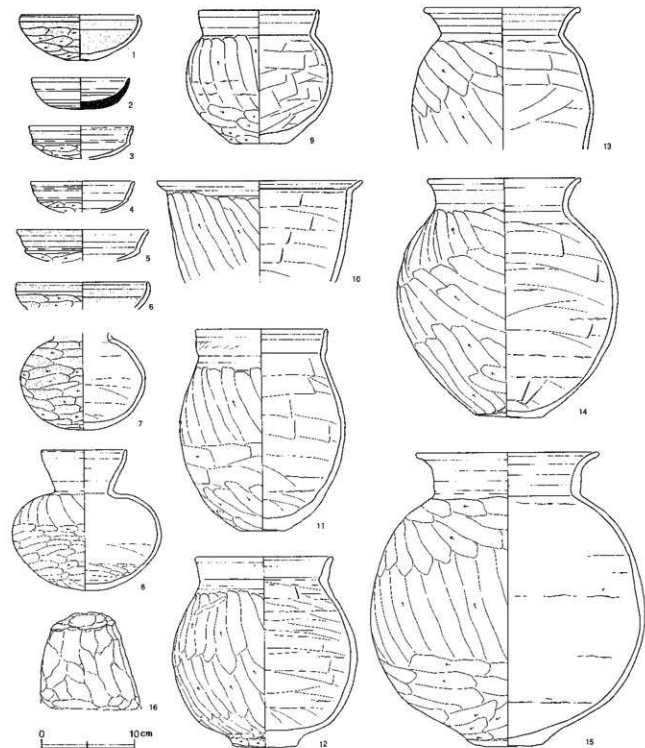
一方、4の環は有段口辺の環で明瞭に新しく、胎土にも角閃石を多量に含んでいた。3・5の環もやや新しい様相が認められた。2の須恵器についても、新しい一群に含まれると考えられた。

甕類に関しては、11・14・15などは形態的にも古い様相が認められ、調整に関しても上半部では整形として用いるヘラテズリへの依存度が低く、古い様相であると考えられた。7・8の埴についても古い一群に含まれると考えられた。

従って、覆土から検出した2～5の環類が他の遺構からの混入であると考えられた。

本住居跡で貯蔵穴としたものは、検出場所がカマドから離れていた。カマド周辺を精査したが、貯蔵穴は検出できなかった。遺物は認められなかったが南東の壁際の遺構を、覆土の状況などから貯蔵穴と判断した。

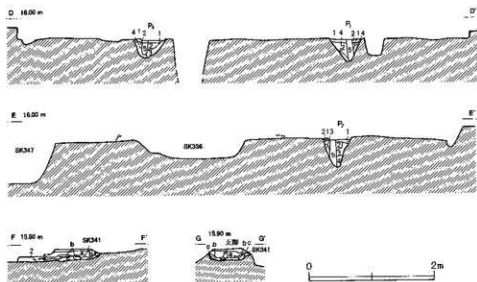
第268図 第248号住居跡出土遺物



第249号住居跡 (第270・271図)

第249号住居跡は、AB-20・21、AC-20・21グリッドから検出した。

住居跡の南側のコーナーは、SB-84・88による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で主軸方位は



- 第248号住居跡横土
- 1 褐色 (10YR4/0) 溶化進行B多含 R C少含
 - 2 褐色 (10YR4/0) 溶化未溶化B多含 上層との境界明瞭
 - 3 褐色 (10YR4/0) 溶化B含 粘性強
 - 4 褐色 (10YR4/0) B主体 壁溝の底 凝溶軟化層
 - 5 褐色 (10YR4/0) 2層と同じ 締り強 床面輪郭く目が見られる

- 第249号住居跡柱穴横土
- 1 暗褐色 (10YR4/3) 溶化未進行B多含 締り強
 - 2 暗褐色 (10YR3/3) やや溶化進行B多含 締り強 R C少含
 - 3 暗褐色 (10YR3/4) 粘性強 壁面自立せず
 - 4 褐色 (10YR4/1) B上体 全体均一
 - 5 暗褐色 (10YR3/3) B多含 締り強 柱痕

第248号住居跡カマド横土

- a 暗褐色 (10YR2/3) R含 B溶浸多 天井跡背後堆積
- b 赤褐色 (10YR4/8) Rブロック 天井・壁の跡層土
- c 無褐色 (10YR3/2) 単純M層 締り強

第249号住居跡貯蔵穴横土

- 1 無褐色 (10YR2/3) 未溶化B多含 締り強
- 2 褐色 (10YR3/3) 1層基本 溶化進行 R少含
- 3 褐色 (10YR4/0) B主体 壁溝の溶軟化層 粘性強

第248号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	12.4	4.8		ACDEFK	3	橙褐色	80	赤彩
2	須恵器環	(10.5)	3.3		ACDEF	1	灰褐色	80	
3	環	(11.0)			ACEF	3	明赤褐色	20	
4	環	(11.0)			ACDF	3	淡灰褐色	20	
5	環	(14.0)			ACDF	2	赤褐色	20	赤彩
6	環	(14.0)			ACDEFHK	3	赤褐色	20	赤彩
7	罐				ACDEFK	2	赤褐色	80	赤彩
8	埴	9.0	14.9		ACDF	2	赤褐色	100	
9	壺	(12.7)	14.1	6.2	ACDEF	3	黒褐色	40	
10	瓶	(22.0)			ACDEFK	2	暗赤褐色	20	
11	甕	(14.0)	21.3	4.4	ACDF	3	黒褐色	90	
12	甕	(14.4)	20.2	6.8	ACDEF	2	黒褐色	80	
13	甕	(16.7)			ACDEFK	3	黒褐色	50	
14	甕	16.3	25.5	7.2	ACDEFHK	2	黒褐色	90	
15	甕	(19.5)	31.1	7.0	ACDEFHK	3	橙褐色	40	
16	支脚				ACE	3	淡橙褐色		

N-29°-Wであった。規模は主軸長6.3m、副軸長6.1

m、深さ10cm程度であった。

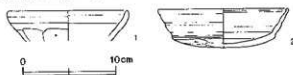
壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。

貯蔵穴も検出できなかった。

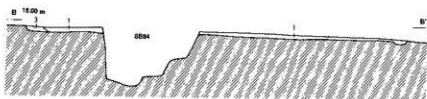
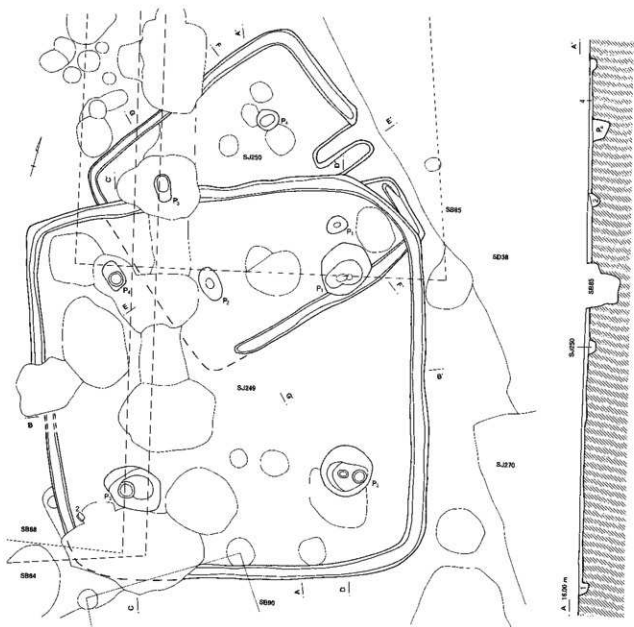
第249号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.6)			ACEF	3	淡灰褐色	20	
2	環	(13.8)	4.1		ACDEF	3	橙褐色	50	

第270図 第245号住居跡出土遺物



第271図 第249・250号住居跡

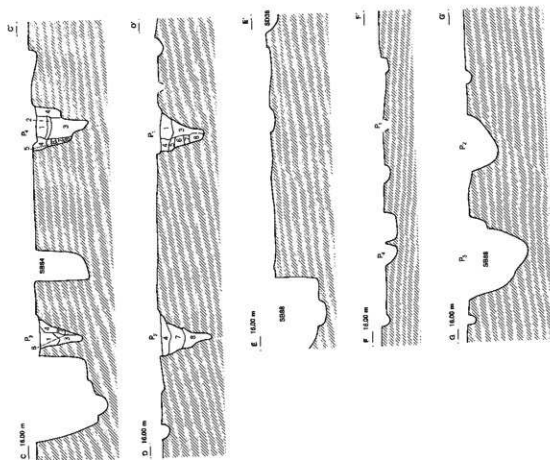


- 第249号住居跡層土
- 1 暗褐色 (10YR3/4) R 含
 - 2 褐色 (10YR4/6) 暗褐色ブロック多含
 - 3 赤褐色 (10YR4/6) R カマド?
 - 4 暗褐色 (10YR3/4)

- 第249号住居跡柱穴層土
- 1 黒褐色 (10YR3/1) R 含
 - 2 褐色 (10YR4/6) 黄砂ブロック多含
 - 3 暗褐色 (10YR3/1) 黄砂ブロック多含
 - 4 黒褐色 (10YR3/1) 黄砂ブロック多含
 - 5 褐色 (10YR4/6) 黄砂ブロック多含
 - 6 赤褐色 (10YR3/1) R 含
 - 7 褐色 (10YR4/6) 黄砂ブロック多含
 - 8 黒褐色 (10YR3/2) 黄砂多含

カマドは北壁に作られていたが、SB-88のP3によって攪乱され、検出できなかったと考えられた。貯

蔵穴も同様に北西のコーナーに作られていたが、SB-85のP8によって検出できなかったと考えられた。



床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。検出した柱穴はいずれも深かった。

住居跡は、SJ-250、SB-84・85・88・90と重複していた。重複関係は、SJ-84・85・88・90に切れ、SJ-250を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、鉄滓などを検出した。この中で、第270図2の環は南側コーナー付近から、他は覆土から検出した。

第250号住居跡（第271図）

第250号住居跡は、AB-20・21、AC-21グリッドから検出した。

住居跡の南側は、SJ-249による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-58°-Wであった。規模は主軸長4.2m、副軸長4.1m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。

貯蔵穴については、東側のコーナーから検出したピットが該当する可能性も考えられたが、覆土の状況から当該住居跡の貯蔵穴ではないと判断した。

床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

検出した柱穴は、いずれも土層記録を残すことができなかった。P1とP4は浅く、P2は形態が楕円形であり、覆土の状況から柱穴と認定したが、形態上からはやや疑問が残った。またP3は、SB-84によって全体に攪乱を受けており、底面付近でピット状の痕跡を検出したのみであった。

住居跡は、SJ-249、SB-84・85・88と重複していた。重複関係は、SJ-249、SB-84・85・88に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第251号住居跡 (第272・273図)

第251号住居跡は、AA-16・17グリッドから検出した。

住居跡の東側はSD-98、SK-335、SE-98、SJ-259・261による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-13°-Wであった。規模は主軸長2.3m、副軸長不明、深さ5cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は不明瞭で、壁溝も検出できなかった。柱穴も検出できなかった。

住居跡は、SJ-259・261、SD-98、SE-98、SK-335と重複していた。重複関係は、SJ-259・261、SD-98、SE-98、SK-335に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、鉄製の棒状不明品などを検出した。この中で、第272図に示した遺物は、

第251号住居跡出土遺物観察表

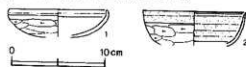
No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.4)			A C D E F	3	橙褐色	30	
2	環	(11.0)			A C D F	2	赤褐色	20	赤彩

全て覆土中から検出した。

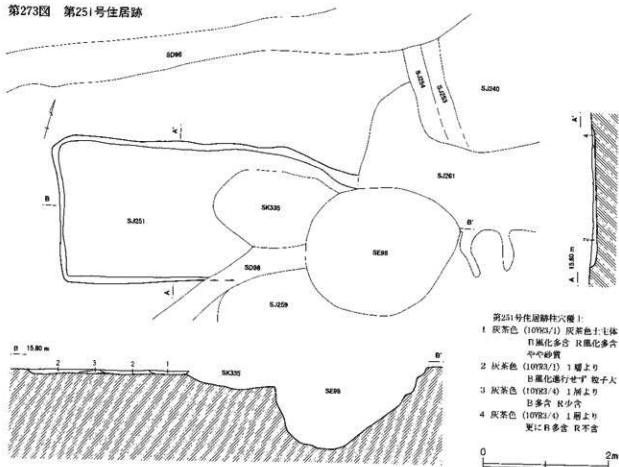
当該遺物は、形態が長方形で規模も小さく、住居跡と考えるにはやや問題があった。

また、付帯施設の検出状況についても、カマドをはじめとして、貯蔵穴、壁溝、柱穴が認められず、床面も検出できなかったのも、土壌としての取り扱いも考慮した。しかし、当該調査区内の土壌のほとんどは、住居跡よりも新しく、覆土も住居跡と異なっており、本遺構の覆土は、土壌よりも住居跡のそれに類似していたので、ここでは住居跡であると判断した。

第272図 第251号住居跡出土遺物



第273図 第251号住居跡



第252号住居跡 (第275図)

第252号住居跡は、AC-19グリッドから検出した。

住居跡の西側はSJ-255による攪乱のために、南側はSK-376による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-22°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。床面を精査したが、柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-255・265、SK-376と重複していた。重複関係は、SJ-255、SK-376に切れ、SJ-265とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第255号住居跡 (第274~276図)

第255号住居跡は、AB・AC-19グリッドから検出した。

住居跡の南東側は、SK-376による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-21°-Wであった。規模は主軸長5.5m、副軸長5.5m、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚や甕の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は南東、北西のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本検出できた。

第255号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.0)			ACEF	3	淡橙褐色	30	
2	環	(14.4)			ACEF	2	暗赤褐色	10	
3	須恵器環				ACDF	1	青灰色	50	
4	甕			(5.0)	ACDEF	3	黒褐色	10	
5	甕	(20.0)			ACDEF	3	淡灰褐色	40	
6	甕	(21.0)			ACDEF	3	暗赤褐色	30	

第256号住居跡 (第277・278図)

第256号住居跡は、AB-18・19グリッドから検出した。

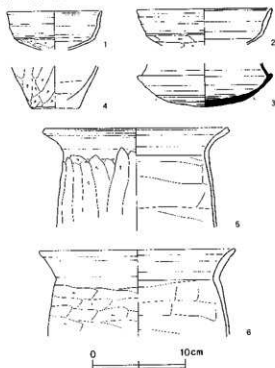
住居跡の南西側は、SJ-257による攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-22°-Eであった。規模は主軸長3.8m、副軸長4.2

m、深さ15cm程度であった。

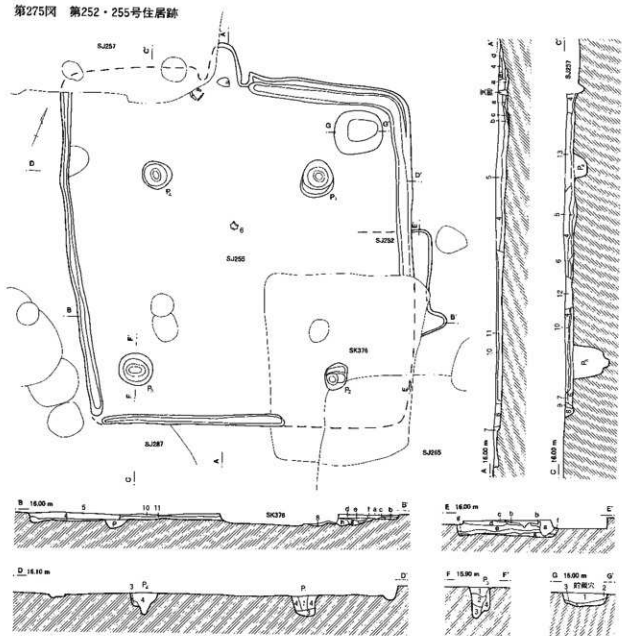
壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマドの周辺を精査したが貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は東側のコーナーで検出できた。

柱穴は周辺を精査したが、検出することができなかった。

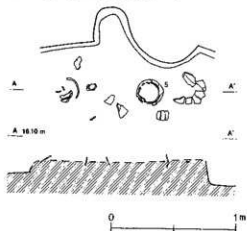
第274図 第255号住居跡出土遺物



第275図 第252・255号住居跡



第276図 第255号住居跡カマド



第252号住居跡カマド覆土

- a 褐色 (10YR4/4) R 含
- b 褐色 (10YR4/4) RC 混入
- c 褐色 (10YR4/4) B 含
- d 褐色 (10YR4/4) RC 含
- e 褐色 (10YR4/4) C 多含
- f 褐色 (10YR4/4) B 混入
- g 褐色 (10YR4/4) B/C 混入
- h 褐色 (10YR4/4) B 含

第255号住居跡貯蔵穴覆土

- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) B 含 細りや中割
- 2 黒褐色 (10YR3/2) RC 含
- 3 鈍黄褐色 (10YR5/4) B 多含

第255号住居跡カマド覆土

- a 赤褐色 (5YR4/6) R 土体
- b 黒褐色 (5YR4/1) M 土体
- c 暗灰色 (5YR4/1) CM 含
- d 鈍赤褐色 (5YR4/4) R 含
- e 鈍赤褐色 (5YR4/4) d 層より R 多含

第255号住居跡貯蔵穴上:

- 1 黒褐色 (10YR3/2) B 石下含
- 2 褐色 (10YR4/4) RC 混入
- 3 黒褐色 (10YR2/2) B 石下含
- 4 暗褐色 (10YR3/3) B やや多含

第255号住居跡壁土:

- 1 鈍黄褐色 (10YR5/4) B/C 混入
- 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) B/C 混入
- 3 鈍黄褐色 (10YR4/3) RC 含 B 混入
- 4 暗褐色 (10YR3/2) RC 混入 B 含
- 5 明黄褐色 (10YR6/6) B 含 やや細る
- 6 黄褐色 (10YR5/6) D 土体 やや細る
- 7 鈍黄褐色 (10YR4/3) B 含 B 石下含 やや細る
- 8 褐色 (10YR4/4) B/C 混入 細る
- 9 鈍黄褐色 (10YR5/4) B/C 混入 B 多含
- 10 鈍黄褐色 (10YR4/3) RC 含 細りや中割
- 11 暗褐色 (10YR3/3) B による粘土
- 12 黒褐色 (10YR2/2) 黒褐色土土体 B 石下含
- 13 黒褐色 (10YR2/2) C 粘りや やや粘土

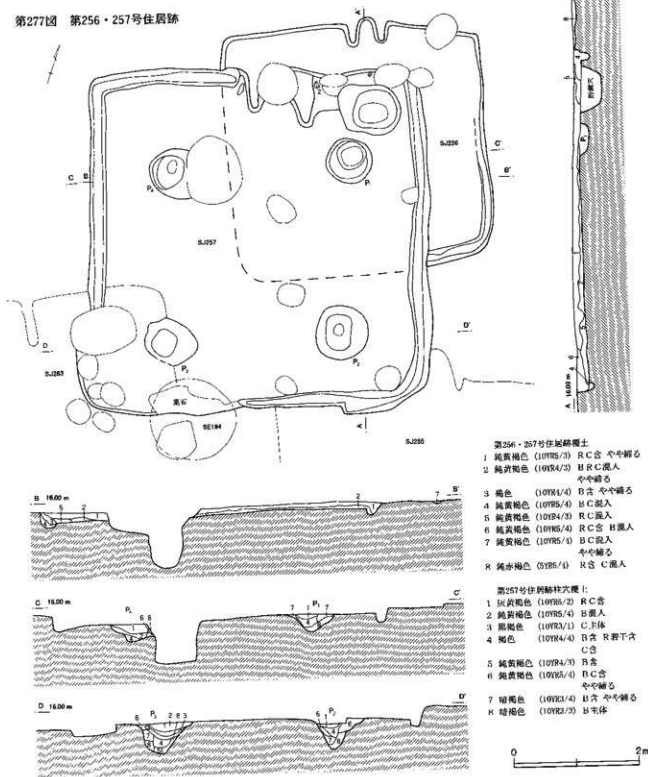
住居跡の床面上を精査した結果、P1～P4に該当する可能性のあるピットが検出できたが、ピットの検出位置がやや西北側にずれていた。また、覆土の色調、組成、堆積状況も他の住居跡のそれと異なっており、深さもやや浅く、これらの点から考えて柱穴ではない

と判断した。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-257と重複していた。重複関係は、SJ-257に切られていた。

第277図 第256・257号住居跡



実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。この中で、第278図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第278図 第256号住居跡出土遺物



第256号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.0)			ACDEF	3	赤褐色	10	

第257号住居跡 (第277・279図)

第257号住居跡は、AB-18・19、AC-18・19グリッドから検出した。

住居跡の南側は、SJ-263による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-18°-Wであった。規模は主軸長5.5m、副軸長5.4m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は南のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。

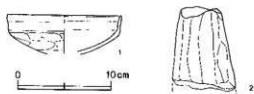
柱穴も4本を明瞭に検出することができた。P1・P4はやや浅かったが、覆土の組成と堆積状況から柱穴と判断した。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-255・256・263、SE-194と重複していた。重複関係は、SE-194に切られ、SJ-256を切り、SJ-255・263とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、支脚、管玉、石製模造品、鉄滓などを検出した。この中で第279図1の環は貯蔵穴の中から、2の支脚はカマド右側からそれぞれ検出した。

第279図 第257号住居跡出土遺物



第257号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.0)			ACEF	3	橙褐色	30	
2	支脚				ACF	3	淡褐色		

第258号住居跡 (第280・281図)

第258号住居跡は、AA・AB-17グリッドから検出した。

住居跡の北側は、SK-336・337、SE-100による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-5°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長4.2m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。

カマドや貯蔵穴は、SE-100、SK-336・337によって擾乱されたと考えられた。

床面は明瞭で、壁溝は住居跡の検出範囲で確認でき

た。床面を精査したが、柱穴を検出することはできなかった。

柱穴も、SJ-259、SK-337などによって、擾乱されたと考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡はSJ-248・259、SE-100・186、SK-336・337・338と

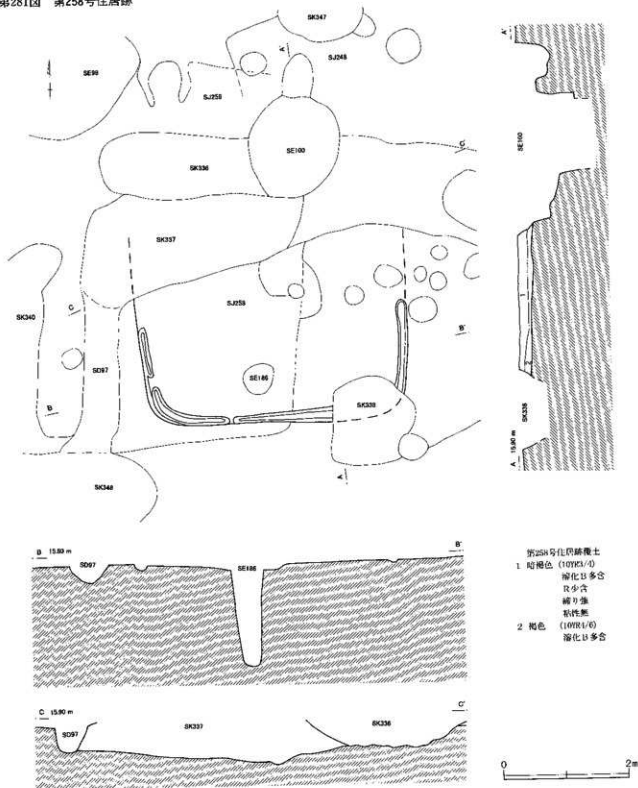
第280図 第258号住居跡出土遺物



第258号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(16.0)			ACDEF	3	明赤褐色	10	

第281図 第258号住居跡



重複していた。重複関係はSD-97, SE-100・186, SK-336・337・338に切れ、SJ-248・259とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。

第280図に示した模倣環は、住居跡の覆土中から検

出したものであり、なおかつ微細な破片であった。更に、住居跡周辺は他の遺構による擾乱が著しく、住居跡の遺存状態は良好ではなかったので、模倣環の当該住居跡への帰属関係は不明瞭であった。

第259号住居跡 (第282・283・285図)

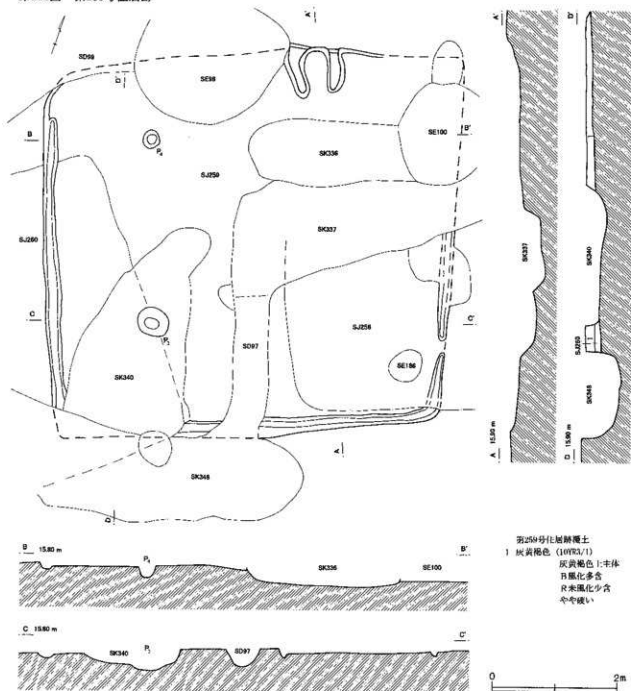
第259号住居跡は、AA-16・17、AB-16・17グリッドから検出した。

住居跡の北側はSE-98による擾乱のために、北東側はSE-100による擾乱のために、南側はSK-348による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-14°-Wであった。規模は、主軸長5.9m、副軸長6.4m、深さ15cm程度であった。

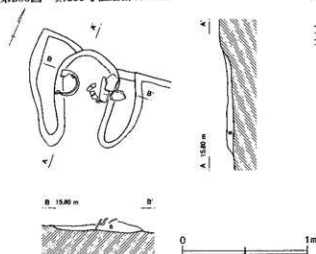
第282図 第259号住居跡

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚や甕の破片が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北壁以外で検出できた。柱穴も2本が明瞭に検出できた。P1はSK-336のために、P2はSJ-258のために検出できなかったと考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

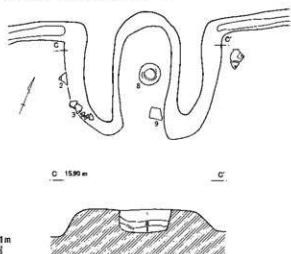


第283図 第259号住居跡カマド



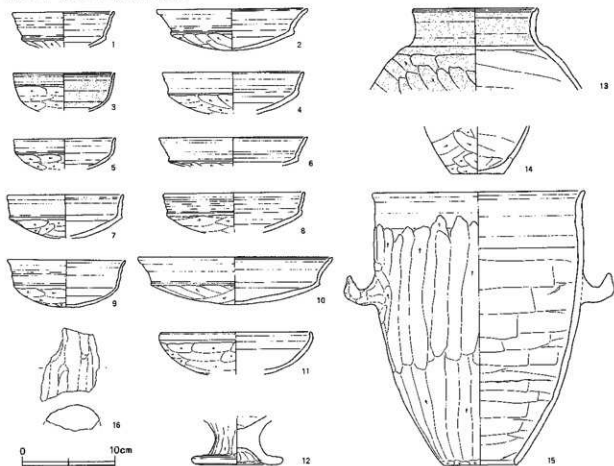
第259号住居跡カマド土:
 a 茶褐色 (10YR3/4)
 系褐色土上部
 日風化少含
 R風化多少含

第284図 第260号住居跡カマド



第260号住居跡カマド土:
 a 黒褐色 (10YR4/4) 黒褐色土上部 R風化多含
 b 黒褐色 (10YR3/4) a層よりR少含 C風化少含 日風化多含
 c 黒褐色 (10YR4/6) a層より多少R少含 日風化多含
 d 黒褐色 (10YR3/7) a層よりR少含 C多含 B多少含
 e 黒褐色 (10YR3/7) a層よりR少含 B多含
 f 黒褐色 (10YR3/7) a層よりR多含 C積含

第285図 第259号住居跡出土遺物



住居跡は、SJ-248・251・258・260・261、SD-97、SE-98・100・186、SK-336・337・340・348と重複していた。重複関係は、SD-97、SE-98・100・186、SK-337・340・348に切られ、SJ-260を切り、SJ-248・251・258・

261とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甌、甌、台付甕、石製模造品、白玉などを検出した。この中で、第285図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第259号住居跡出土遺物観察表

Na	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.8)			ACDE	3	黒褐色	20	
2	環	(16.0)	4.3		ACF	2	暗赤褐色	40	
3	環	(10.8)			ACF	2	赤褐色	20	赤彩
4	環	(15.0)			ACDEF	2	暗赤褐色	40	
5	環	(10.8)			ACF	2	淡橙褐色	30	
6	環	(15.7)			ACDEF	2	暗赤褐色	20	
7	環	(12.4)			ACEF	3	淡褐色	50	
8	環	(15.0)			ACDF	2	暗赤褐色	40	
9	環	(12.5)	5.0		ACDF	3	淡茶褐色	50	
10	環	(20.6)	5.0		ACDEF	2	淡灰褐色	50	
11	環	(16.0)			ACDF	3	橙褐色	40	
12	台付甕			(9.8)	ACDEFHK	2	暗赤褐色	40	
13	甕	(13.2)			ACDEFK	2	赤褐色	20	赤彩
14	甕			(5.6)	ACDEF	3	黒褐色	10	
15	甌	(22.4)	29.0	7.6	ACDEFK	2	暗赤褐色	50	把手付
16	支脚				ACF	3	淡褐色		

第260号住居跡 (第284・286・287頁)

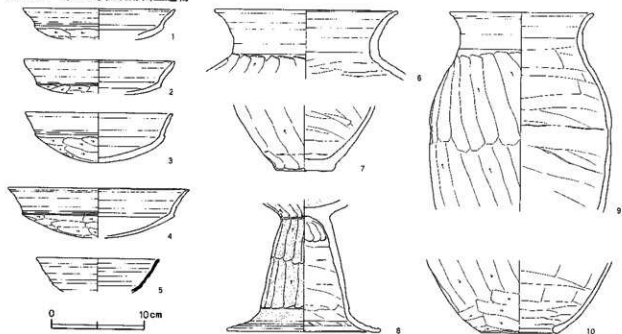
第260号住居跡は、AA-16・17、AB-16・17グリッドから検出した。

住居跡の東側のコーナーはSK-340・348による擾乱のために、南側のコーナーはSK-351・358による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方

位はN-55°-Eであった。規模は主軸長5.4m、副軸長5.1m、深さ25cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出し、覆土内から甕が検出できた。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は3本検出できた。

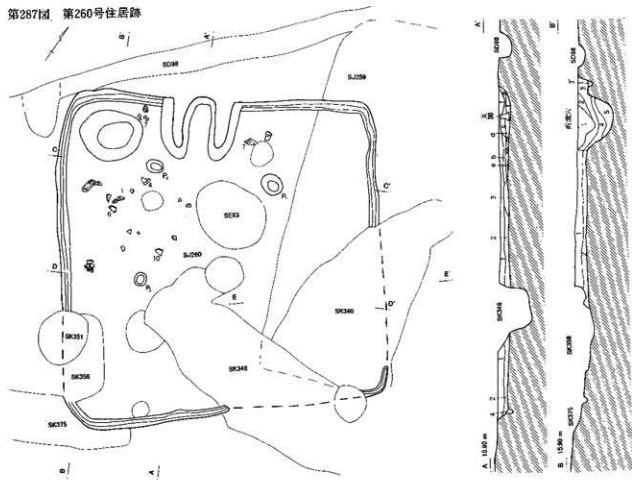
第286図 第260号住居跡出土遺物



覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を
示していた。

住居跡は、SJ-259・262、SD-98、SE-63、SK-340・
348・351・358・375と重複していた。重複関係はSJ
-259、SD-98、SE-63、SK-340・348・351・358に切
られ、SJ-262とは不明であった。

第287図 第260号住居跡



実測可能な遺物として、土師器環、鬘、甗、高環、
土玉などを検出した。この中で、第286図2・3の環は
カマド左側から、7の鬘はカマド両側から、8の高環
はカマド内から、9の甗はカマド焚き口付近から、1・
4の環、6の鬘、10の甗は住居跡の西側から、他は覆
土から検出した。

第260号住居跡略観

- 1 灰褐色 (10YR3/1) 灰褐色土主体 R/C 風化多少含
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB多含 R少含 C多含
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB多含 R/C少含
- 4 黒褐色 (10YR3/1) 灰褐色土主体 R/C風化多含

第260号住居跡竈穴覆土

- 1 灰褐色 (10YR3/1) 黒褐色土主体 B風化少含 R風化微含
- 2 灰褐色 (10YR3/0) 1層よりB多含
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB多含 R/C少含
- 4 灰褐色 (10YR3/1) 1層よりB多含
- 5 灰褐色 (10YR3/4) 1層よりB多含

第260号住居跡柱穴覆土

- 1 灰褐色 (10YR3/1) 灰褐色土主体 R風化多少含
R風化多少含 C風化多少含
- 1' 灰褐色 (10YR3/1) 1層よりBやC多含
- 2 灰褐色 (10YR3/1) 1層よりB多含



第260号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(16.2)			ACF	3	淡橙褐色	20	
2	環	(16.0)			ACDEF	3	赤褐色	20	
3	環	(15.7)			ACDEF	3	淡橙褐色	80	
4	環	(19.3)			ACDF	3	淡褐色	50	
5	須恵器環	(13.0)			ACFI	1	青灰色	20	
6	甕	(19.6)			ACDEFK	2	赤褐色	10	
7	甕			(6.0)	ACDEFK	3	赤褐色	30	
8	高環			16.4	ACDEFK	2	赤褐色	50	赤彩
9	甕	(15.4)			ACDEFHK	3	淡橙褐色	40	
10	甕			(8.0)	ACDEFK	3	淡橙褐色	10	

第261号住居跡 (第288・290図)

第261号住居跡は、AA-17グリッドから検出した。住居跡の南東側は、SJ-240・248・259、SK-336・347、SE-100による擾乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-3°Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝は検出できなかった。床面を精査したが、柱穴を検出することはできなかった。

当該遺構は、限られた部分しか残存しておらず、カマド、貯蔵穴、柱穴、壁溝、床面など住居跡を特徴付ける施設は全く検出できなかったが、覆上の状況などから住居跡であると判断した。

第261号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(15.0)	4.4		ACDEF	3	橙褐色	70	暗文

第262号住居跡 (第289・291図)

第262号住居跡は、AB-16グリッドから検出した。住居跡の西側の壁は調査区外の為に、東側はSJ-260による擾乱のために、北側はSK-339による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-9°Wであった。規模は、主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

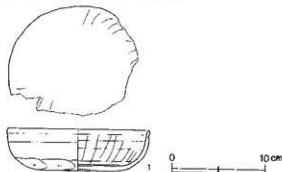
第262号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.0)			ACF	3	明赤褐色	10	

住居跡はSJ-240・248・251・253・254・259、SE-98・100、SK-336・337・347と重複していた。重複関係は、SE-98・100、SK-336・337・347に切られ、SJ-240・248・251・259とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。この中で、第288図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第288図 第261号住居跡出土遺物



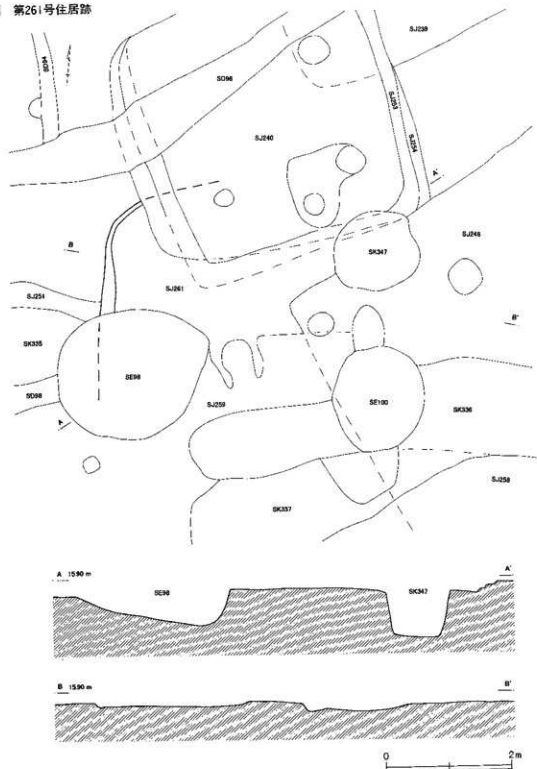
壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。

カマドと貯蔵穴が検出できなかったのは、SJ-260、SD-98、SK-339による擾乱のためと考えられた。

第289図 第262号住居跡出土遺物



第290図 第261号住居跡



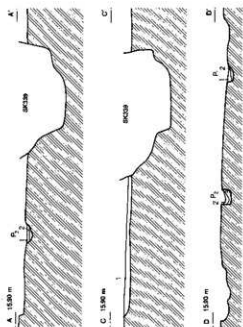
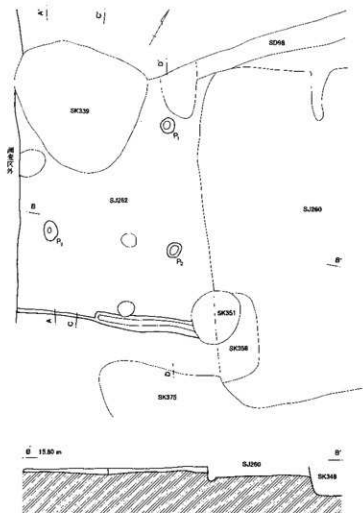
床面は明瞭で、壁溝は南壁の一部で検出できた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。P4はSK-339によって検出できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-260、SD-98、SK-339・351・358と重複していた。重複関係は、SJ-260、SD-98、SK-339に切られていた。

尖刺可能な遺物として、土師器環などを覆土中から検出した。

第291図 第262号住居跡



第262号住居跡横土

- 1 灰褐色 (10YR3/1) 灰褐色土床 日風化多少含
及風化少含 C風化少含

第262号住居跡柱穴横土

- 1 灰褐色 (10YR2/3) 灰褐色土主体 日風化多少含
- 2 灰褐色 (10YR2/3) 土層より片多含
- 3 灰褐色 (10YR2/3) 土層より更に片多含



第263号住居跡 (第292～294図)

第263号住居跡は、AB-18、AC-18・19グリッドから検出した。

住居跡の東側はSE-194による擾乱のために、中央はSE-107による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-28°-Wであった。規模は主軸長5.9m、副軸長5.9m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは支脚や甕の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は東壁の一部で途切れるもの、ほぼ全周していたと考えられた。

柱穴も4本が明瞭に検出でき、全ての柱穴から柱痕が確認できた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を

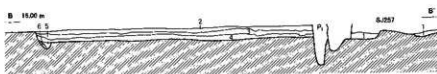
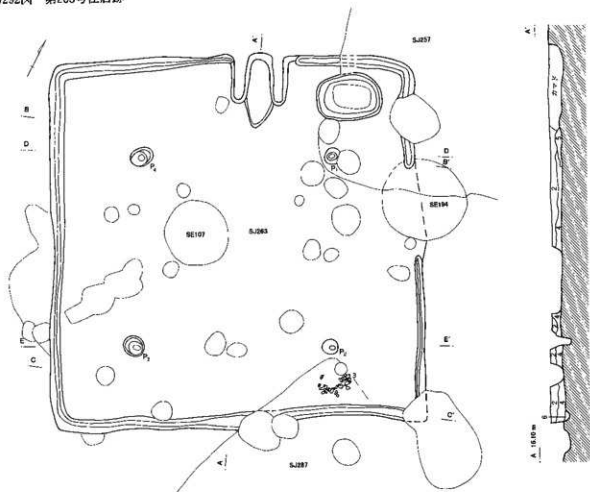
示していた。

住居跡は、SJ-257・287、SE-107・194と重複していた。重複関係は、SE-107・194に切られ、SJ-257・287を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、支脚、鉄製の棒状不明品、手捏ね土器、紡錘車などを検出した。この中で、第294図9の甕はカマド右側から、3の環は東側コーナー付近から、11の支脚はカマド内から、他は覆土から検出した。

第264号住居跡 (第295～297図)

第264号住居跡は、AC-19・20グリッドから検出した。住居跡の西側は、SJ-265・278による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-28°-Wであった。規模は主軸長6.0m、副軸長4.4m、深さ20cm程度であった。

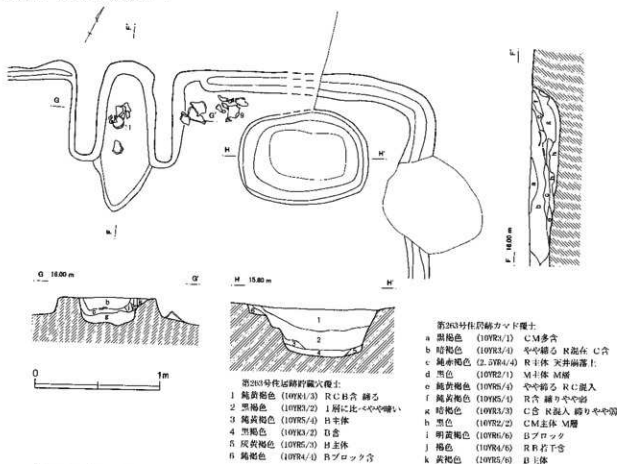


- 第263号住居跡層土
- 1 鈍黄褐色 (10YR4/2) B 主体
 - 2 鈍黄褐色 (10YR5/4) B 多含
細石
 - 3 鈍黄褐色 (10YR4/2) R C R 穴
細りやや弱
 - 4 暗褐色 (10YR2/3) R C 含
細りやや強
 - 5 鈍黄褐色 (10YR1/3) B やや多含
 - 6 暗褐色 (10YR3/5) B 主体

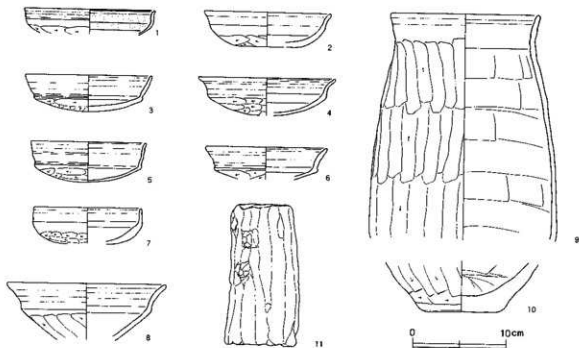
- 第263号住居跡柱穴層土
- 1 黒褐色 (10YR3/1) 粘土ブロック
R C 混入
細りやや弱
 - 2 鈍黄褐色 (10YR5/4) B 含
やや細石
 - 3 褐色 (10YR4/4) 2層上り
砂子混かい
 - 4 鈍黄褐色 (10YR5/2) B 含
細り粘性有



第293図 第263号住居跡カマド



第294図 第263号住居跡出土遺物



壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北側

と西側のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。

第263号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.0)			ACDEFK	2	赤褐色	10	赤彩
2	環	(13.6)			ACDEFK	3	赤褐色	30	
3	環	(13.5)	3.9		ACDEF	3	赤褐色	70	
4	環	(14.6)			ACDEF	3	赤褐色	40	
5	環	(12.3)	4.3		ACDEFK	3	橙褐色	90	
6	環	(13.0)			ACEF	2	暗赤褐色	20	
7	環	(11.4)			ACEF	2	赤褐色	50	
8	鉢	(16.8)			ACEF	2	赤褐色	30	
9	甕	(15.7)			ACDEFK	3	淡橙褐色	40	
10	甕			(8.0)	ACDEF	2	暗赤褐色	10	
11	支脚				AC	4	淡褐色		

柱穴も2本が明瞭に検出できた。検出した柱穴の中で、P3は他の柱穴に比べてやや浅く、位置もやや南東に偏っていた。P1は周辺の床面を精査したが検出することができなかった。P4はSJ-265によって検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡はSJ-265・266・267・268・278、SE-111・112、SK-349・357・367・368・378と重複していた。重複関係はSJ-265、SE-111・112、SK-349・357・378に切れ、SJ-267・268・278を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、須恵器環、臼玉、鉄製の刀子などを検出した。この中で、第295図4、5の甕は住居跡の中央から、2の環はカマド右側から、他は覆土から検出した。ただし2の環はSK-378に帰属する可能性が考えられた。

第264号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.4)			ACFK	2	赤褐色	10	赤彩
2	環	15.0	4.9	8.1	ACDF	3	黒褐色	90	
3	須恵器環	(8.0)			ACF	1	黒色	10	
4	甕	(20.9)			ACDEF	3	橙褐色	30	
5	甕			(4.2)	ACDF	3	橙褐色	10	

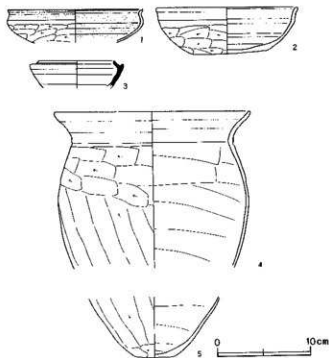
第265号住居跡 (第296・298図)

第265号住居跡は、AC-19・20グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-21°-Wであった。規模は主軸長3.6m、副軸長4.1m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は全

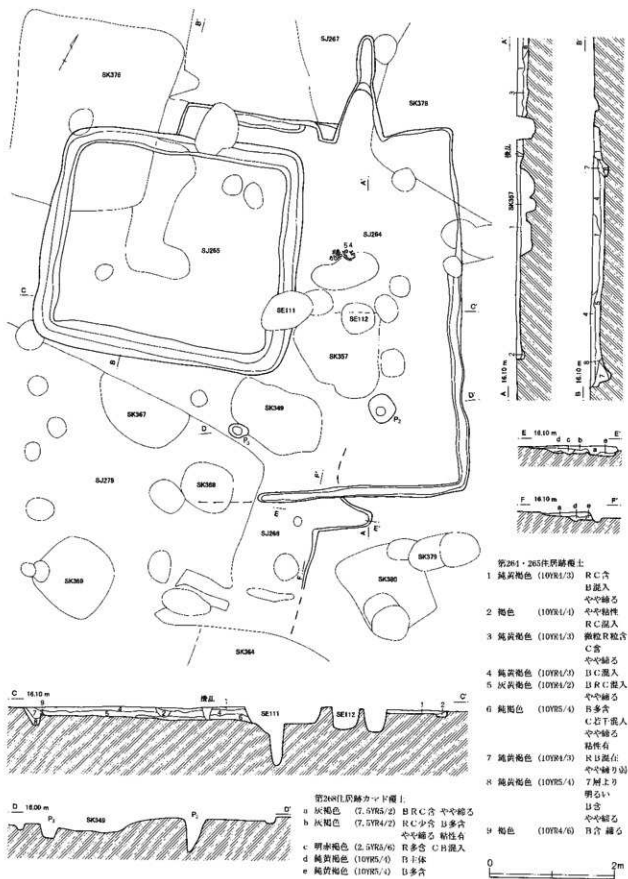
第295図 第264号住居跡出土遺物



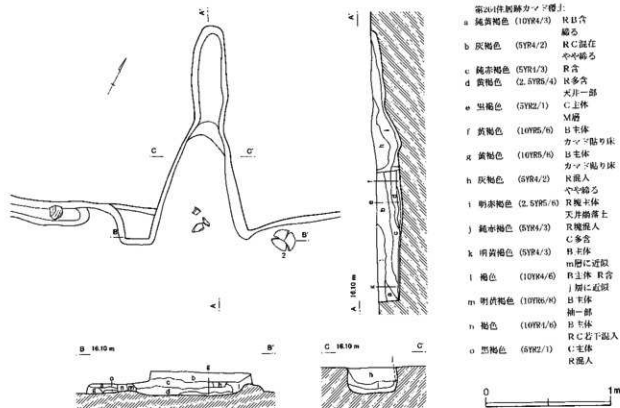
周していた。柱穴は周辺を精査したが、検出することができなかった。

住居跡は、SJ-255・264・268、SK-376、SE-111と重複していた。重複関係は、SE-111、SK-376に切れ、SJ-264・268を切り、SJ-255とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、須恵器環、板状の鉄製品などを検出した。この中で、第298図に示した



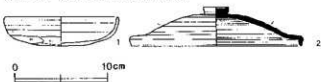
第297図 第264号住居跡カマド



遺物は、全て覆土中から検出した。

本住居跡の調査時に床面と周辺を精査したが、カマドや貯蔵穴などは、痕跡さえも確認できなかった。柱穴についても、P1とP3に該当する可能性を持つピットを検出したが、覆土から柱穴ではないと判断した。

第298図 第265号住居跡出土遺物



第265号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.0)	3.0		ACDF	3	橙褐色	50	
2	須恵器環蓋	(18.1)	4.2		ACFIK	1	青白色	50	

第268号住居跡 (第296・299図)

第268号住居跡は、AC-19-20グリッドから検出した。住居跡の西側はSJ-278による擾乱のために、北側はSJ-264による擾乱のために検出できなかった。

住居跡は、確認面では痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-16°Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

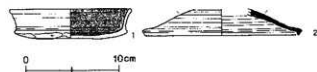
第268号住居跡出土遺物観察表

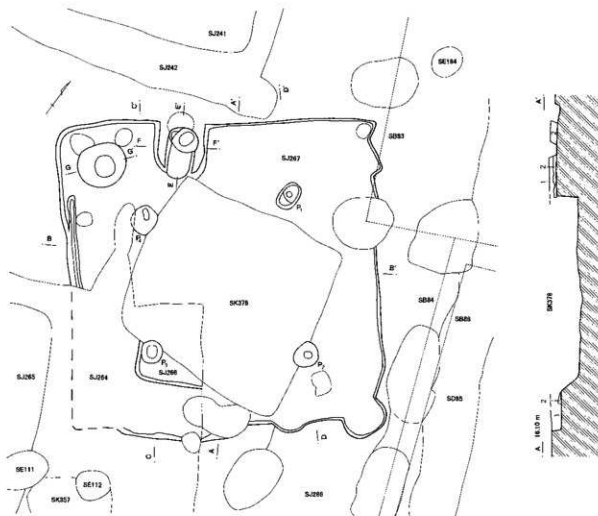
No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.8)	3.1		ACDEF	2	暗赤褐色	40	黒色処理
2	須恵器環蓋	(16.3)			ACF	1	灰白色	20	

た。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯

第299図 第268号住居跡出土遺物





第267住居跡概土

- 1 黄褐色 (10784/2) RC含 B微混入 中々締る
- 2 黄褐色 (10785/4) B混入 締り軟性有

第267住居跡柱穴概土

- 1 黄褐色 (10784/3) RC混入 C含 締りやや弱
- 2 暗褐色 (10783/3) B混入 RC穴 締りやや弱
- 3 黄褐色 (10785/6) B混入 締る

第267住居跡カマド概土

- a 明赤褐色 (3185/4) R多混入 CR含 中々締る
- b 黒褐色 (7.3182/2) B多含 締る
- c 黄褐色 (10785/1) B多含 R若干混入

第267住居跡貯蔵穴概土

- 1 黄褐色 (10785/4) RB含 C混入
- 2 黄褐色 (10784/3) RC混合
- 3 黄褐色 (10785/2) B多含 中々締る
- 4 明黄褐色 (2.5185/8) B土体



蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は、検出できなかった。周辺の地山を精査したが、柱穴を検出することはできなかった。

住居跡は SJ-264・265・278、SK-349・357・367・368・369と重複していた。重複関係は SJ-264・265・278、SK-349・357・367・368・369に切られていた。

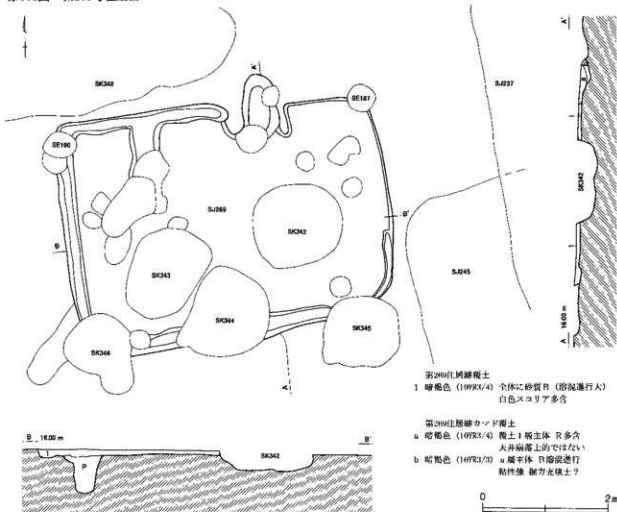
実測可能な遺物として、土師器坏、須恵器坏などを検出した。この中で、第299図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第266号住居跡 (第300図)

第266号住居跡は、AC-20グリッドから検出した。

住居跡の北側は、SJ-378による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-28°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

第301図 第269号住居跡



壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴も検出できなかった。

本遺構は、南側のコーナーしか検出できなかったが、覆上の状況などから住居跡と判断した。

住居跡は、SJ-264・267、SK-378と重複していた。重複関係は、SJ-267、SK-378に切られ、SJ-264とは不明であった。

実測可能な遺物として、鉄製の刀子などを覆土から検出した。

第267号住居跡 (第300図)

第267号住居跡は、AB-19・20、AC-19・20グリッドから検出した。

住居跡の南側は SJ-264による攪乱のために、中央は SK-378による攪乱のために検出できなかった。形

廻は方形で、主軸方位はN-38°-Wであった。規模は主軸長4.8m、副軸長4.9m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、北西側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は西壁の一部で検出できた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-264・266・286、SB-83、SK-378と重複していた。重複関係は、SJ-264、SB-83、SK-378に切れ、SJ-266・286とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第269号住居跡 (第301図)

第269号住居跡は、AB-17グリッドから検出した。

住居跡の北側はSE-187・190による擾乱のために、南側はSK-344・345・346による擾乱のために、中央は

SK-342・343・344による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-8°-Wであった。規模は主軸長3.8m、副軸長5.2m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北東コーナー以外で検出できた。柱穴は床面を精査したが検出できなかった。

住居跡は、SE-187・190、SK-342・343・344・345・346と重複していた。重複関係は、SE-187・190、SK-342・343・344・345・346に切られていた。

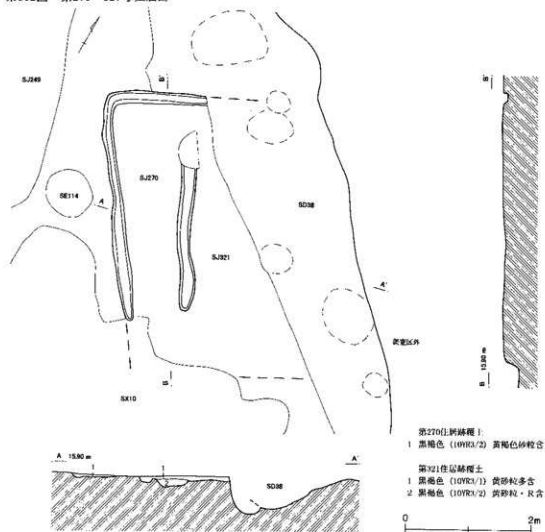
実測可能な遺物は、検出できなかった。

第270号住居跡 (第302図)

第270号住居跡はAC・AD-21・22グリッドから検出した。

住居跡の東側は調査区外のために、南側はSX-10に

第302図 第270・321号住居跡



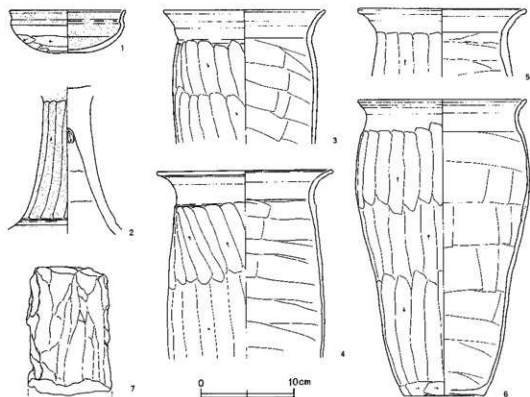
よる擾乱のために、東側はSD-38による擾乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-34°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は住居跡の残存範囲で確認できた。柱穴は床面を精査したが、検出できなかった。

住居跡は、SJ-321、SD-38、SX-10と重複していた。重複関係は、SD-38に切られ、SJ-321、SX-10とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第303図 第272号住居跡出土遺物



第272号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(12.4)	4.5		ACDEFK	2	赤褐色	90	
2	高坏				ACDEFK	2	暗赤褐色	40	赤彩
3	甕	(17.2)			ACEFK	3	暗赤褐色	40	
4	甕	(18.8)			ACDEFK	3	赤褐色	50	
5	甕	(18.0)			ACDEFHK	3	淡橙褐色	10	
6	甕	(18.0)	31.5	(8.4)	ACDEFK	3	橙褐色	50	
7	支脚				ACF	4	淡灰褐色		

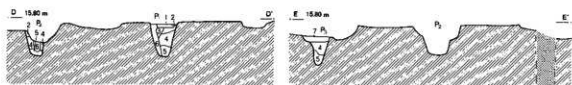
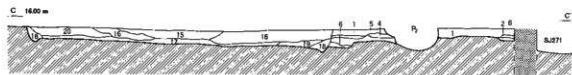
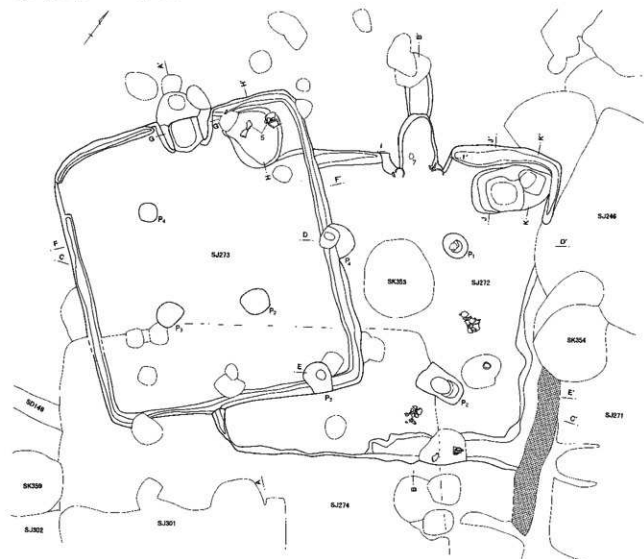
第321号住居跡 (第302図)

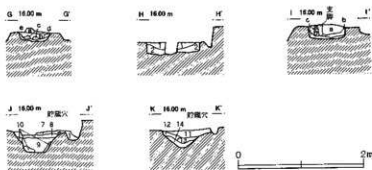
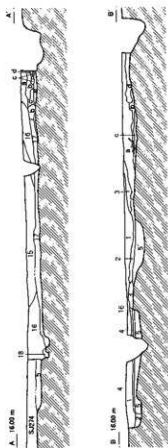
第321号住居跡はAC-AD-21-22グリッドから検出した。住居跡の東側は、SD-38による擾乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態、主軸方位とも明らかにできなかった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドと貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は残存範囲で検出できた。柱穴は床面を精査したが、検出できなかった。

住居跡は、SJ-270、SD-38と重複していた。重複関係は明らかにできなかった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。





第272住居跡覆土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) B R C 多含 粘り強
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 1層主体 全体にC多含 黒色土・R B多含 粘り弱
- 3 褐色 (10YR4/6) 砂質B土主体 床土の間に2層薄層入る
- 4 褐色 (10YR4/6) 砂質B土主体 上面細く粘り 粘り弱
- 5 暗褐色 (10YR3/3) 褐色土B多含 粘り強 埋め戻し充填土
- 6 暗褐色 (10YR3/4) B多含 粘り強 R C多含

第272住居跡カマド覆土

- a 暗褐色 (10YR3/4) B 細粒多含 粘り強
- b 暗赤褐色 (2.5YR3/6) R土主体 天井崩落土
- c 黒色 (10YR2/1) M層
- d 暗褐色 (10YR3/3) a層に準じる B少含 粘性強 R C少含

第272住居跡柱穴覆土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) 黒色土・砂質B土主体 粘り強 粘り強
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘質Bブロック土主体 粘性強 表面土
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 2層土主体 黒色土表面化ブロック土
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 溶化進行した土床 非ブロック状
- 5 黄赤褐色 (10YR4/3) B土主体粘質土 色調明
- 6 暗赤褐色 (10YR2/2) 土溶化B多含 粘り強 柱底
- 7 暗褐色 (10YR3/3) 褐色土・砂質B土 SJ-273構築時の粘り床土

第272住居跡貯蔵穴 (古) 覆土

- 7 褐色 (10YR4/6) 細く粘り強 B (粘り強) 覆土4層に同じ
- 8 暗褐色 (10YR3/3) 大型Bブロック多含 埋戻し土
- 9 赤褐色 (10YR2/3) 大型Bブロック多含 粘り弱 埋戻し土
- 10 褐色 (10YR4/4) B土主体 壁の崩れ入り

第272住居跡貯蔵穴 (新) 覆土

- 11 暗褐色 (10YR3/4) 溶化B R C多含 粘り強 存貯蔵土1層と同
- 12 暗褐色 (10YR3/4) 大型B多含 B少含
- 13 無褐色 (10YR2/3) 2層に異なるB D少含 溶化進行 粘質強
- 14 暗褐色 (10YR3/4) 3層基本 B 不粘 粘性強

第272住居跡貯蔵穴覆土

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 1層土主体 B少含 微細R C多含
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 未溶化B多含 粘り弱 埋戻し

第273住居跡覆土

- 15 無褐色 (10YR2/3) B多含 R C多含
- 16 無褐色 (10YR2/2) 1層土主体 B少含 微細R C多含
- 17 黒色 (10YR2/2) 粘り強 色調暗 未溶化B多含 R C多含
- 18 褐色 (10YR4/4) 粘質B 埋蔵土
- 19 無褐色 (10YR2/3) 3層土主体 R C多含 粘り強
- 20 暗褐色 (10YR3/3) 色調暗 B少含 粘り弱 カマドa層に同じ

第273住居跡カマド覆土

- a 暗褐色 (10YR3/3) 1層近似 小型B多含 カマド構築後埋戻し
- b 暗褐色 (10YR3/3) a層土主体 K多含 粘り強 カマド構築後埋戻し (建設部)
- c 暗褐色 (10YR3/4) B土主体 下層に土化 天井崩落土
- d 暗赤褐色 (2.5YR3/6) R土主体 a層の土化土層
- e 黒色 (10YR2/1) 埋戻しM層
- f 暗褐色 (10YR3/4) M層粘質土 火床に準拠

第272号住居跡 (第303~305図)

第272号住居跡は、AC-17グリッドから検出した。

住居跡の西側はSJ-2731による攪乱のために、東側は噴砂とSJ-2461による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-34°-Wであった。規模は主軸長4.9m、副軸長不明、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出された。カマド内からは支脚が検出された。貯蔵穴はカマドの右

側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は南のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出された。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-246・273・274、SK-353と重複していた。重複関係は、SJ-273・274、SK-353に切られ、SJ-246とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、高環、支脚、石製模造品などを検出した。この中で、第303図3の甕はカマドの右袖から、4の甕は左袖から、6の甕はカマドの左側から、2の高環はカマド手前から、7の支脚はカマド内から、1の環は住居跡の中央から、5の甕は住居跡の南の壁際から、他は覆土から検出した。

第273号住居跡 (第304・306図)

第273号住居跡は、AC-17グリッドから検出した。

形態は方形で、主軸方位はN-49°-Wであった。規模は主軸長4.7m、副軸長4.2m、深さ40cm程度であった。

壁は明瞭であり、北西側からカマドが検出できた。

貯蔵穴はカマドの右側から検出し、覆土内から鉢が検出できた。床面も明瞭で、壁溝は両側のコーナーで

一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-272・274と重複していた。SJ-272・274切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、鉢、甕、鉄製の刀子などを検出した。この中で、第306図5の鉢は貯蔵穴周辺から、他は覆土から検出した。

第273号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.8)			ACF	3	淡橙褐色	20	
2	環	(13.0)			ACF	2	赤褐色	20	赤彩
3	甕	(8.4)			ACDF	3	黒褐色	10	
4	甕	(20.8)			ACDF	3	暗赤褐色	10	
5	鉢	(21.9)			ACDEF	3	暗赤褐色	20	

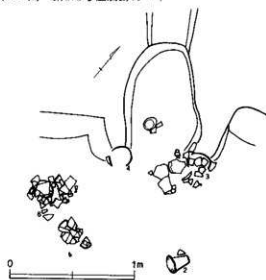
第274号住居跡 (第307~309図)

第274号住居跡は、AC・AD-17グリッドから検出した。

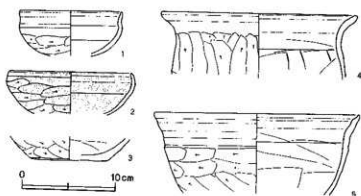
住居跡の南側はSJ-301による攪乱のために、北側はSJ-273による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-50°-Eであった。規模は主軸長6.0m、副軸長5.9m、深さ25cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。カマド内からは環の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は東南側のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと

第305図 第272号住居跡カマド



第306図 第273号住居跡出土遺物



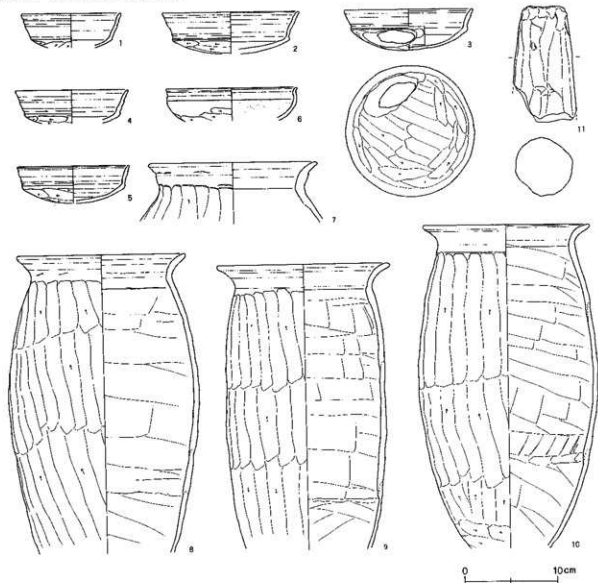
考えられた。

柱穴も4本を明瞭に検出することができた。

住居跡はSJ-272・273・277・301、SE-109、SK-355・359と重複していた。重複関係は、SJ-273・301、SE-109、SK-355・359に切られ、SJ-277を切り、SJ-272とは不明であった。

本遺構は噴砂との重複が認められた。重複関係は噴砂に切られていた。噴砂は比較的細い亀裂で、地山と覆土の境界部分を中心として、カマドの周辺から検出できた。

第307号 第274号住居跡出土遺物



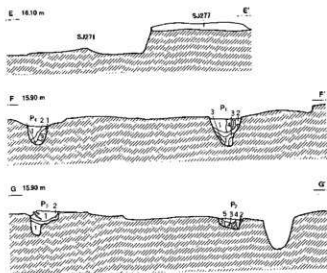
第274号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(10.6)			ACDF	3	淡灰褐色	30	
2	坏	(14.6)			ACDF	3	淡橙褐色	40	
3	坏	13.8	4.3		ACDEF	2	明赤褐色	90	穿孔
4	坏	(12.0)			ACDEF	3	淡橙褐色	20	
5	坏	(12.0)			ACF	2	暗赤褐色	30	
6	坏	(14.0)			ACDEF	2	赤褐色	20	赤彩
7	甕	(18.0)			ACDF	2	橙褐色	10	
8	甕	(18.0)			ACDEF	3	暗赤褐色	50	
9	甕	(18.5)			ACDEFK	3	暗赤褐色	60	
10	甕	(17.8)			ACDEFK	3	暗赤褐色	70	
11	支脚				B	4	淡褐色	50	

実測可能な遺物として、土師器坏、甕、高坏、支脚、鉄鎌などを検出した。

この中で、第307号3の坏はカマド内から、5の坏

8・9の甕はカマド右側の壁際から、11の支脚はカマド正面の手前から、10の甕は柱穴P3から、他は覆土からそれぞれ検出した。



第271住居跡概土

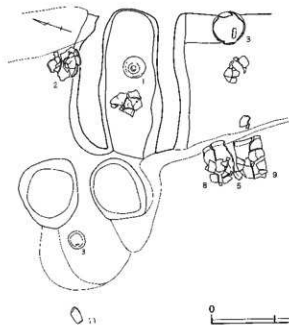
- 1 緑褐色 (10YR3/4) D R C 多含 締り強
- 2 黒褐色 (10YR2/3) 1層基本 頁多含 故意の規め戻しか?
- 3 黒褐色 (10YR2/3) 2層に準ずる 頁少含

第274住居跡柱穴概土

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 溶化通行粘質頁多含 締り弱 粘性强
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 粘質頁土体 粘性强
- 3 褐色 (10YR4/6) 粘質頁土体 壁面炭化土
- 4 黒褐色 (10YR2/3) 1層基本 溶化強い R C 融含 粘強
- 5 黒色 (10YR2/2) R 多含黒色土 粘土構築時の充填土か?



第309図 第274・277号住居跡カマド



第271住居跡カマド概土

- a 暗褐色 (10YR3/3) 1層に近接 粘質多含 締り弱
- b 暗赤褐色 (2.5YR3/6) R 主体 天井・壁面腐土
- c 黒色 (10YR2/1) 単純M層
- d 褐色 (10YR4/6) 頁ブロック (天井構築土)
- e 暗赤褐色 (2.5YR3/6) R ブロック (天井構築土)
- f 緑褐色 (10YR3/3) 火床面? 締り過ぎか 粘性强 頁多含混 M 混入

第274住居跡野黒穴概土

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 未溶化頁多含 R 少含
- 2 黒褐色 (10YR2/3) 1層基本 下に溶化通行頁多含 粘性强
- 3 褐色 (10YR4/6) 頁主体 壁・此の層軟化層

第277住居跡カマド概土

- a 暗褐色 (10YR3/4) R C 多含 天井崩落土の一部
- b 暗赤褐色 (2.5YR3/6) R 主体 天井・壁面腐土
- c 黒色 (10YR2/1) M層 MはRブロック中に散在 純層ではない

第277号住居跡 (第308・313図)

第277号住居跡は、AC-17・18、AD-17・18グリッドから検出した。

住居跡の西側は、SJ-274による擾乱のために検出できなかった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出された。カマド内からは高環の破片が検出された。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はカマドの右側で

検出された。柱穴は検出できなかった。

住居跡はSJ-272・273・274・301、SK-354・355、SD-148と重複していた。重複関係は、SJ-274、SK-354・355に切れ、SJ-272・273・301、SD-148とは不明であった。本遺構と重複した噴砂は、覆上と壁の間に亀裂を生じさせて侵入しており、カマドも一部壊されていた。実測可能な遺物として、土師器釜、甗、高環などを検出した。この中で、第313図に図示した遺物は全てカマドの周辺から検出した。

第275号住居跡 (第310・311図)

第275号住居跡は、AB-16・17、AC-16・17グリッドから検出した。

住居跡の西側は調査区外のために、中央はSK-362による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-20°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長3.4m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は検出できなかった。柱穴も検出できなかった。

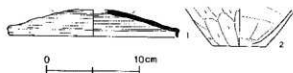
第275号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器環蓋	(18.0)			ACFIK	1	青灰色	40	
2	麦			(5.6)	ACDF	3	暗赤褐色	10	

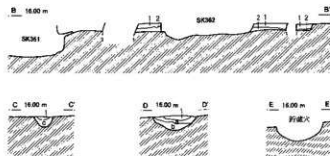
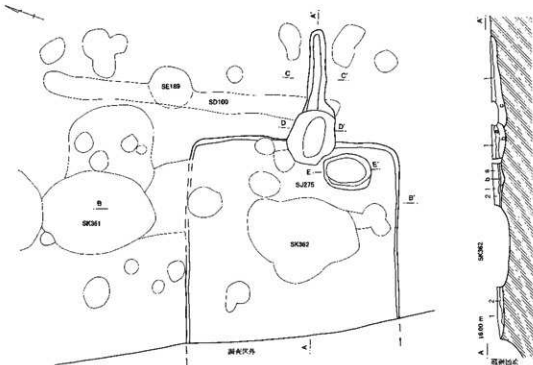
住居跡は、SD-100、SK-362と重複していた。重複関係は、SD-100、SK-362に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器甕、須恵器環などを検出した。この中で、第310図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第310図 第275号住居跡出土遺物



第311図 第275号住居跡



第275号住居跡覆土

- 1 紫褐色 (10YR2/3) 砂全体に砂混 灰多含 粘り弱
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 粘質腐化石灰土 粘性强

第275号住居跡カマド層上

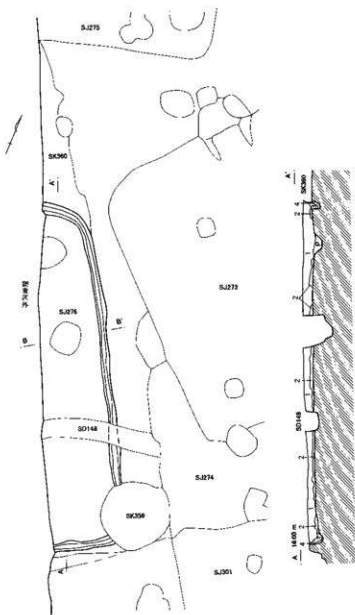
- a 紫褐色 (10YR3/1) 灰多含 大骨・壁別層土? 他の住居に比べて灰多含
- b 紫褐色 (10YR2/3) 砂に散る 灰多含 粘り強 粘り強 粘り強 粘り強
- c 暗褐色 (10YR3/4) 砂に散る 灰多含 粘り強

第276号住居跡 (第312図)

第276号住居跡は、AC-16・17、AD-17グリッドから検出した。

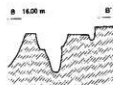
住居跡の西側は調査区外のために、中央はSD-148による攪乱のために、東側コーナーはSK-359による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸

第312図 第276号住居跡



第276住居跡横上:

- 1 黒褐色 (10YR3/2) B 溶浸多 R 少含
- 2 褐色 (10YR4/5) 砂質土主体 炭渣化層
- 3 暗褐色 (10YR3/4) 多量B 溶浸 硬質粘土
- 4 褐色 (10YR4/5) F1 床 2層と同じ壁溶軟化層

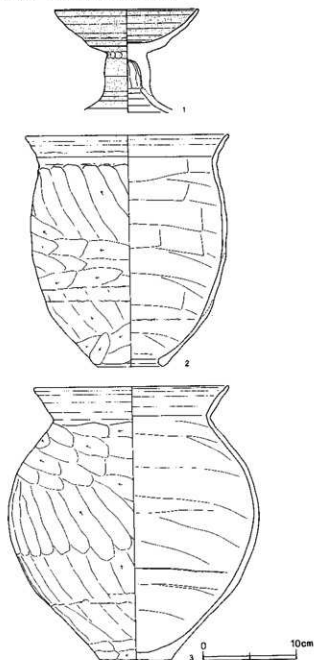


方位はN-30°-Wであった。規模は、主軸長不明、副軸長不明、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SD-148、SK-359・360と重複していた。複関係は、SK-359に切れられ、SK-360を切っていた。実測可能な遺物は、検出できなかった。

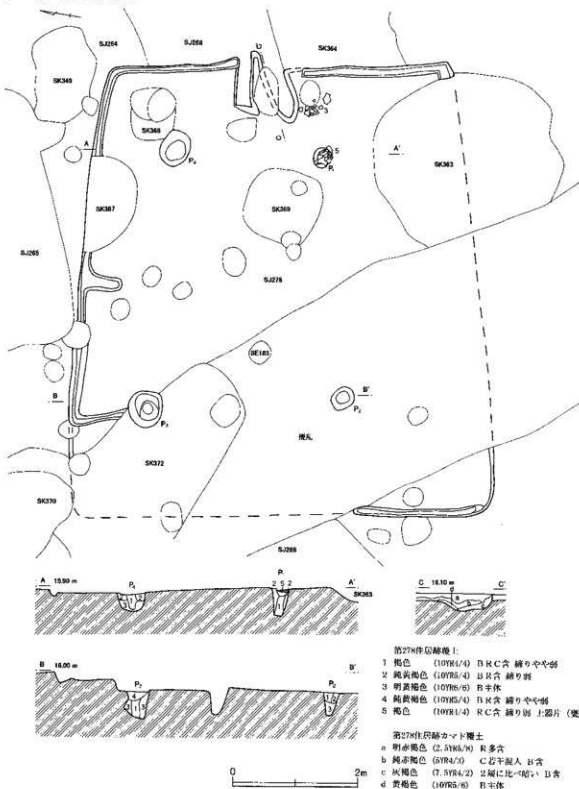
第313図 第277号住居跡出土遺物



第277号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	高環	15.4			ACDF	2	赤褐色	80	赤彩
2	甌	(21.7)	24.5	6.6	ACDEFHK	2	橙褐色	50	
3	甕	(20.8)	29.1	7.6	ACDEFK	2	淡橙褐色	60	

第314図 第278号住居跡



第278号住居跡 (第314・315図)

第278号住居跡はAC・AD-19・20グリッドから検出した。

住居跡の南西側は攪乱のために検出できなかった。

形態は方形で、主軸方位はN-64°Eであった。規模は

主軸長7.2m、副軸長6.8m、深さ10cm程度であった。

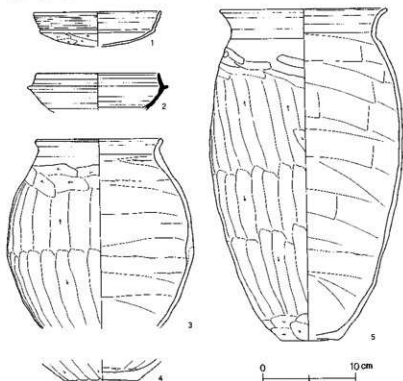
壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北西・南西コーナーで途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も、4本を明瞭に検出することができた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-264・268、SE-183、SK-363・364・367・368・369・372と重複していた。

重複関係はSE-183、SK-363・364・367・368・369・372に切れ、SJ-264・268とは不明であった。

第315図 第278号住居跡出土遺物



第278号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.6)			ACDEF	2	黒褐色	30	
2	須恵器環	(13.0)			ACF	1	青灰色	20	
3	甕	(13.4)			ACDEFHK	3	赤褐色	50	
4	甕			(7.6)	ACDFK	2	淡橙褐色	10	
5	甕	(17.8)	35.2	(6.0)	ACDEFK	3	黒褐色	90	

第279号住居跡 (第316・317図)

第279号住居跡はAG・AH-18グリッドから検出した。

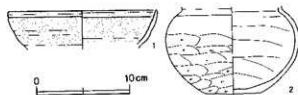
住居跡の西側は調査区外のために、南側はSD-101による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-36°Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は住

実測可能な遺物として、土師器環、甕、須恵器環などを検出した。この中で、第315図3の甕はカマド右側から、5の甕はカマド手前から、他は覆土中からそれぞれ検出した。

居跡の検出範囲で確認できた。柱穴は検出できなかった。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

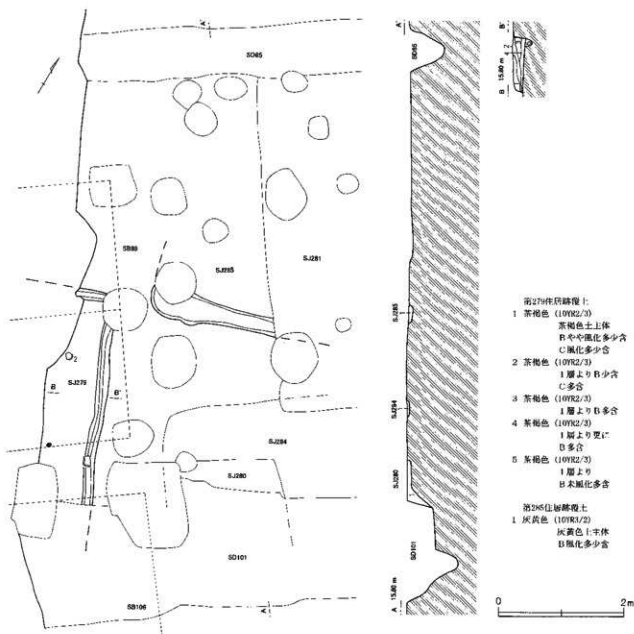
第316図 第279号住居跡出土遺物



第279号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(15.8)			ACDEF	2	赤褐色	20	赤彩
2	甕			(6.0)	ACDEF	3	淡灰褐色	40	

第317図 第279・285号住居跡



住居跡は、SB-89・106、SD-101と重複していた。重複関係は、SB-89・106に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、埴、紡錘車などを検出した。この中で、第316図2の埴は、住居跡の北側コーナー付近から、他は覆土から検出した。

第285号住居跡 (第317図)

第285号住居跡は、AG-18グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-281による攪乱のために、北側は

SD-85による攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-20°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ5cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は南壁で検出できた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-281と重複していた。重複関係は、SJ

-281に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第281号住居跡 (第318・319図)

第281号住居跡は、AG-18・19グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-282・283による擾乱のために、北側はSJ-292・294、SD-85による擾乱のために、中央はSK-365による擾乱のために検出できなかった。

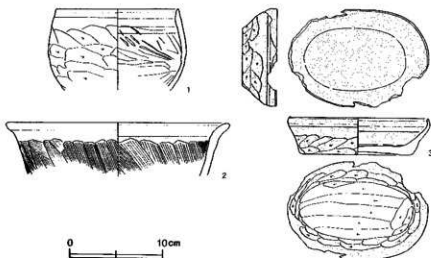
形態は方形で、主軸方位はN-34°-Wであった。規模は明らかにならなかった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。

床面は明瞭で、壁溝は西壁で検出できた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

覆土には埋め戻しの痕跡は少なく、自然堆積の状況を示している。

第318図 第281号住居跡出土遺物



第281号住居跡出土遺物観察表

No.	器 種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎 土	焼成	色 調	残存率/%	備 考
1	鈴	(13.1)			ACDFK	3	赤 褐色	20	
2	環	(24.0)			ACDF	3	淡 灰 褐色	10	
3	環	(15.0)	3.9	12.2	ACDEFK	1	赤 褐色	90	角形・赤彩

第294号住居跡 (第319図)

第294号住居跡は、AF-18・19、AG-18・19グリッドから検出した。

住居跡の南側はSJ-281、SD-85による擾乱のために、東側はSJ-283、SD-85による擾乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では壁の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-35°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝も検出できなかった。柱穴も検出できなかった。

これらの住居跡に伴う施設を確認するために、調査時に、床面や周辺を精査したが、SJ-281・283、SD-85による擾乱が著しく、痕跡さえも確認できなかった。

住居跡は、SJ-282・283・284・285・294、SD-85、SK-365と重複していた。重複関係はSJ-282・283、SD-85、SK-365に切れ、SJ-284・285・294とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、鉢、舟形を呈した模倣環などを検出した。この中で、第318図1の鉢と3の環は住居跡南東側の壁際から、他は覆土から検出した。

また、床面上からビットを検出したが、覆土の組成や堆積状況、あるいは深さなどから柱穴ではないと判断した。

住居跡は、SJ-281・283・292、SD-85と重複していた。重複関係は、SD-85に切れ、SJ-281・283・292とは不明であった。

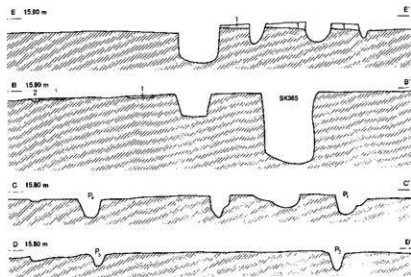
実測可能な遺物は、検出できなかった。

第282号住居跡 (第320・322図)

第282号住居跡は、AF-19・20、AG-19・20グリッドから検出した。

住居跡の中央はSD-101による擾乱のために、北側はSJ-283による擾乱のために、南側はSJ-376による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-48°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長

第319号 第281・294号住居跡



第281号住居跡断面

- 1 灰白色 (10YR5/1) 灰白色土主体
B中令木炭化多少含
R未風化少含
- 2 灰白色 (10YR5/1) 1層より
B未風化多含

第294号住居跡断面

- 1 黄褐色 (10YR5/2) 黄褐色土主体
B未風化多含
R未風化多少含
埋め戻しの可能性有



不明、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。SJ-283等の攪乱によると考えられた。貯蔵穴も検出できなかった。SK-336等の攪乱によると考えられた。床面は明瞭で、壁溝は南側で検出できた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

わずかに残された覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

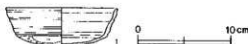
住居跡はSJ-283・291・296・297・376、SD-101、

SK-366と重複していた。重複関係は、SJ-283・376に切れ、SJ-291・296・297とは不明であった。

また、噴砂による攪乱も受けていた。

実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。この中で、第320図1は床面直上から検出した。

第320図 第282号住居跡出土遺物



第282号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.8)	(4.0)		ACDEF	3	暗赤褐色	40	

第297号住居跡 (第321・322図)

第297号住居跡は、AF-19、AG-19・20グリッドから検出した。

住居跡の南側はSD-101による攪乱のために、北側はSJ-283による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-34°Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ25cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は南壁で検出できた。柱穴は検出できなかった。

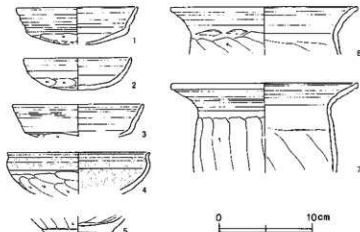
本住居跡も、前述したSJ-282同様に攪乱が著しく、カマド、貯蔵穴等が検出できなかった。柱穴については、P1はSJ-282のP1と重複している可能性が考えられた。P2、P3はSD-101によって攪乱されたと考えられ、P4についてはSK-366による攪乱が考えられた。また、床面上からは、何本かのビットが検

出できたが、柱穴ではないと判断した。

住居跡はSJ-282・283・295・296・376、SD-101、SK-366と重複していた。重複関係は、SD-101、SK-366に切れ、SJ-282・283・295・296・376とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕などを検出した。この中で、第321図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

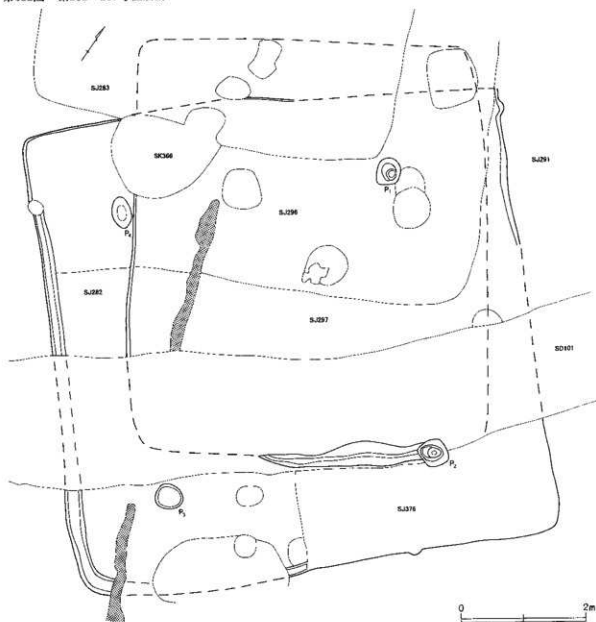
第321図 第297号住居跡出土遺物



第297号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.8)			ACDEF	3	暗赤褐色	40	
2	環	11.4	3.4		ACDF	3	赤褐色	90	
3	環	(14.0)			ACDEF	3	暗赤褐色	40	
4	環	(15.2)			ACDF	2	赤褐色	40	赤彩
5	甕			(7.0)	ACDEFK	2	暗赤褐色	10	
6	甕	(20.0)			ACDF	3	淡褐色	10	
7	甕	(20.0)			ACDEFK	3	淡橙褐色	30	

第322図 第282・297号住居跡



第282号住居跡礎土(第325図)

- 1 黒紫色 (10YR3/1) 黒紫色土主体 B風化多含 R風化少含
- 2 黒紫色 (10YR3/1) 1層よりB大きく多含
- 3 黒紫色 (10YR3/1) 1層よりB更に大きく多含 未風化

第295号住居跡礎穴礎土(第325図)

- 1 灰褐色 (10YR3/1) 灰褐色土主体 B風化多含 R風化少含 C風化多少含
- 2 灰褐色 (10YR3/1) 1層よりR大きく多含 B C少含
- 3 灰褐色 (10YR4/6) 灰褐色土主体 灰褐色土ブロック風化少含
- 4 灰褐色 (2.5YR3/1) 灰褐色土主体 やや砂質

第283号住居跡礎穴礎土(第326図)

- 1 黄褐色 (10YR3/2) 黄褐色土主体 B風化少含 R風化無含
- 2 黄褐色 (10YR3/2) 1層よりB多含
- 3 黒褐色 (10YR3/2) 1層よりB少含
- 4 黄褐色 (10YR3/2) 1層よりB大きく多含 未風化
- 5 黒褐色 (10YR3/1) 黒褐色土主体 B風化多含
- 6 黄褐色 (10YR2/1) 8層よりB大きく少含

第295号住居跡礎土(第326図)

- 4 黄褐色 (10YR3/4) 黄褐色土主体 B風化少含 R風化無含
- 5 黄褐色 (10YR3/4) 1層よりBやや多含
- 6 黄褐色 (10YR3/4) 1層よりB更に多含
- 7 黄褐色 (10YR3/4) 3層よりB更に多含 未風化
- 8 黄褐色 (10YR3/1) 1層よりB僅かに多含 未風化

第295号住居跡礎穴礎土(第325図)

- 1 黒褐色 (10YR3/1) 黒褐色土主体 B風化多含 R風化無含 C風化少含
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB大きく多含
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB少含 R多含
- 4 黒褐色 (10YR3/1) 3層に灰化材が加わったもの
- 5 黒褐色 (10YR3/1) 3層にCが加わったもの
- 6 黒褐色 (10YR3/1) 5層よりR多含

第296号住居跡礎土(第326図)

- 9 灰褐色 (10YR3/2) 灰褐色土主体 B未風化多含 R風化少含
- 10 灰褐色 (10YR3/2) 1層よりB未風化多含

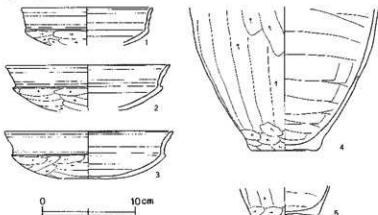
第283号住居跡 (第323・325図)

第283号住居跡は、AF・AG-19グリッドから検出した。住居跡中央はSD-85による攪乱のために、南側はSK-366による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-23°-Wであった。規模は、主軸長6.5m、副軸長6.3m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は北のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。P1はSD-85によって検出できなかった。

住居跡はSJ-282・294・295・296・297、SD-85、SK-366と重複していた。重複関係

第323図 第283号住居跡出土遺物



第283号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.0)			ACEF	3	淡橙褐色	10	
2	環	(17.6)			ACDF	2	橙褐色	30	
3	環	(18.0)	5.0		ACDEF	2	橙褐色	60	
4	甕			(7.0)	ACDEFHK	3	赤褐色	30	
5	甕			(7.0)	ACDEFK	3	赤褐色	10	木炭痕

第295号住居跡 (第324・325図)

第295号住居跡は、AF-19グリッドから検出した。住居跡の北側コーナーはSK-384による攪乱のために、南側はSJ-283による攪乱のために、中央はSD-85による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-23°-Wであった。規模は主軸長5.6m、副軸長6.3m、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出し、覆土内から甕が検出できた。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

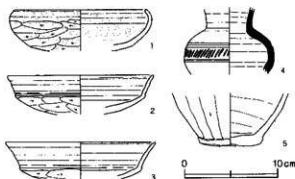
住居跡は、SJ-283・291・296・297、SD-85、SK-384

(は、SJ-282・294、SD-85、SK-366に切られ、SJ-295・296・297を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕を検出した。この中で、第323図2の環はカマド周辺から、4の甕は貯蔵穴内から、他は覆土から検出した。

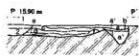
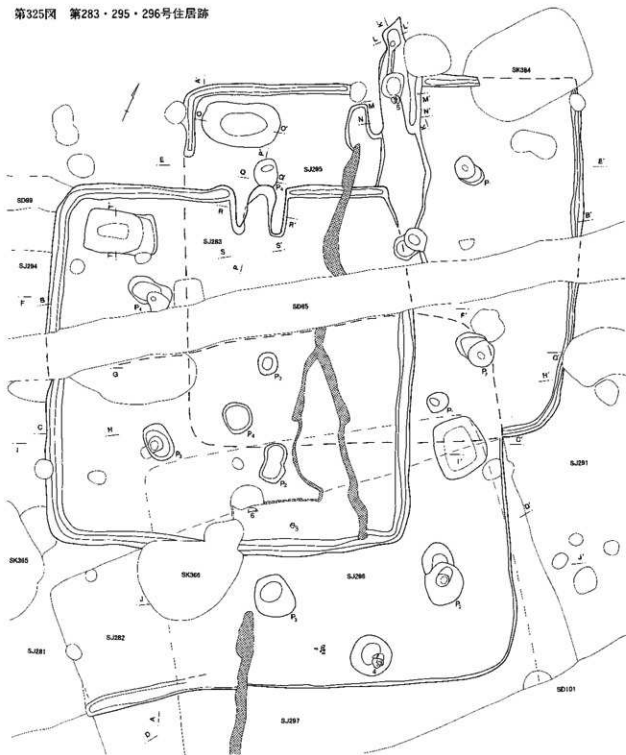
と重複していた。重複関係は、SJ-283、SD-85、SK-384に切られ、SJ-291・296・297とは不明であった。

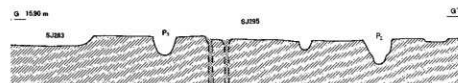
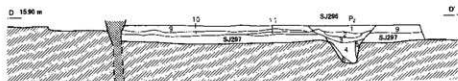
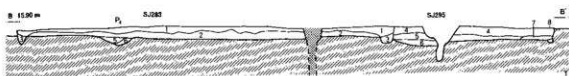
第324図 第295号住居跡出土遺物



第295号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.0)			ACDF	2	赤褐色	30	赤彩
2	環	(15.5)			ACF	3	橙褐色	30	
3	環	(16.0)			ACEF	3	淡褐色	20	
4	須恵器甕				ACF	1	青灰色	20	
5	甕			(6.6)	ACDEFHK	3	暗赤褐色	20	





実測可能な遺物として、土師器環、甕、須恵器甕、上玉などを検出した。この中で、第324図4の須恵器甕と5の甕はカマド内から、2の環は貯蔵穴内から、他は覆土から検出した。

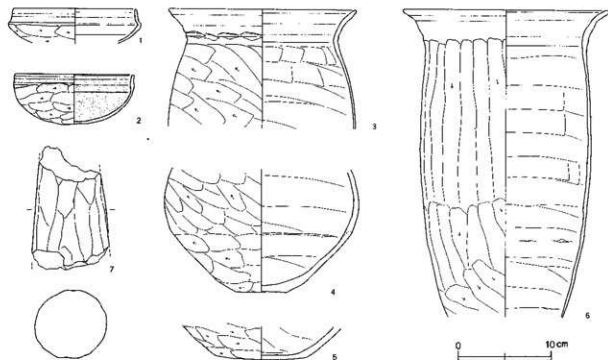
第296号住居跡 (第325・326図)

第296号住居跡は、AF・AG-19グリッドから検出した。

住居跡の北側はSJ-283による攪乱のために、中央はSK-366による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-28°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドも検出できなかった。貯蔵穴は住居跡の北東側から検出した。床面は明瞭で、壁溝

第326図 第296号住居跡出土遺物



第296号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.0)			ACDEF	3	橙褐色	20	
2	環	12.6	5.3		ACDEFK	2	赤褐色	90	赤彩
3	甕	20.0			ACDEF	3	橙褐色	40	
4	甕			5.4	ACDEF	3	淡橙褐色	40	
5	甕			(9.7)	ACDEFK	3	淡灰褐色	20	
6	甕	(22.0)			ACDEF	3	淡橙褐色	50	
7	支脚				AC	4	淡橙褐色		

第286号住居跡 (第327・328図)

第286号住居跡は、AB・AC-20グリッドから検出した。

は南壁の一部で検出できた。柱穴は4本が明瞭に検出できた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-282・283・291・295・297、SK-366と重複していた。重複関係は、SJ-283、SK-366に切りられ、SJ-297を切り、SJ-282・291・295とは不明であった。

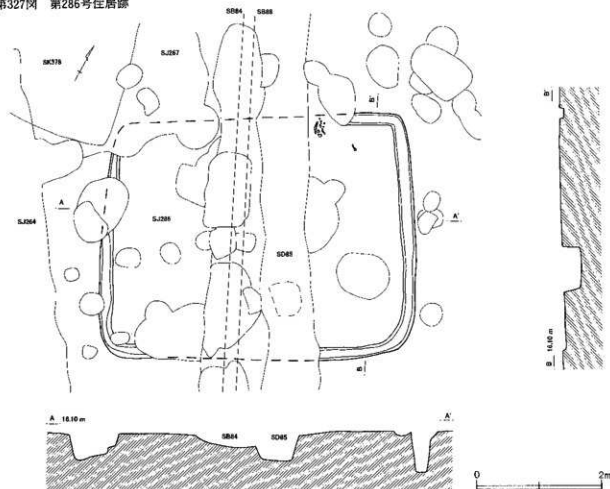
床面の一部は、噴砂によって壊されていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、支脚などを検出した。この中で、第326図3・6の甕は貯蔵穴周辺から、4の甕はピット内から、他は覆土から検出した。

住居跡の北側はSJ-267による攪乱のために、中央

はSB-84・85による攪乱のために検出できなかった。

第327図 第286号住居跡



住居跡は、確認面では壁溝の痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-26°-Wであった。規模は主軸長3.8m、副軸長5.1m程度であった。

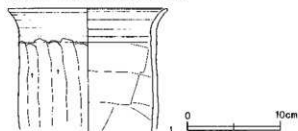
壁はやや不明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。調査時に床面や周辺を精査したが、カマドや貯蔵穴の痕跡さえも検出できなかったため、SB-84・88、SD-85等の床面上の比較的深い掘り込みによって攪乱されたと考えられた。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。P1～P4はSB-84・85によって攪乱されたと考えられた。

わずかに残された覆土には埋戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-267、SB-84・88、SD-85と重複していた。重複関係は、SB-84・88、SD-85に切れ、SJ-267とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器壺などを検出した。この中で、第328図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

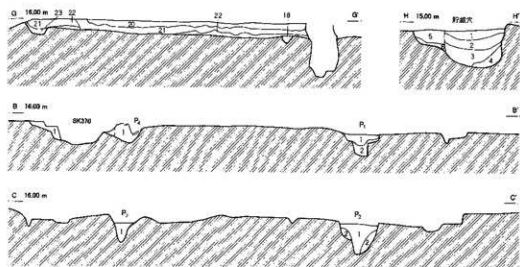
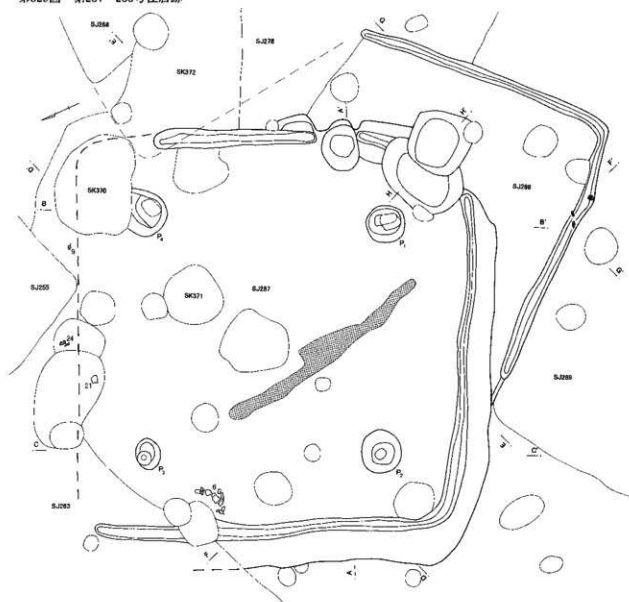
第328図 第286号住居跡出土遺物

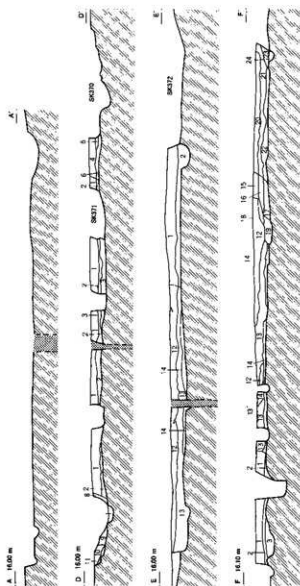


第286号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	壺	(17.0)			A C D F	2	黒褐色	10	

第329図 第287・288号住居跡





第287号住居跡 (第329~331図)

第287号住居跡は、AC-18・19、AD-18・19グリッドから検出した。

住居跡の中央はSK-371による擾乱のために、北側コーナーはSK-370による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-67°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長6.5m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明

第297号住居跡層土

- 1 鈍黄褐色 (10YR5/4) R-C混合 締りやや弱
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/2) R-C混合 粘りやや弱 締り有
- 3 相灰色 (10YR6/1) B多含 締り有
- 4 鈍黄褐色 (10YR4/3) R-C混合 締り強 粘性有
- 5 鈍黄褐色 (10YR5/4) Bをブロック状混入
- 6 鈍黄褐色 (10YR5/4) B層に近接 B多含
- 7 鈍黄褐色 (10YR4/3) R-C混入 R若干混 締り弱
- 8 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土層 (根とも考えられる 塊状)
- 9 鈍黄褐色 (10YR6/4) 10割の準砂層 B多含
- 10 鈍黄褐色 (10YR5/4) R-C多含 B混入 締りやや弱
- 11 黄褐色 (10YR5/6) B下体 締りやや弱 一角堆積土
- 12 鈍黄褐色 (10YR4/3) R-C含 やや締る
- 13 褐色 (10YR4/4) R-C混入 締りやや弱
- 14 鈍黄褐色 (10YR5/4) B混入 やや締り有 (粘厚?)
- 15 灰黄褐色 (10YR4/2) B-C混入 R若干含
- 16 黑色 (10YR3/2) R-B-C含 締りやや弱
- 17 鈍黄褐色 (10YR5/4) R-C混入 締り有
- 18 黄褐色 (10YR5/6) R-C含 12層より締り弱
- 19 明黄褐色 (10YR6/6) B混入 やや締り有 (14層よりB多含)

第299号住居跡層土

- 20 灰黄褐色 (10YR4/2) R-C混入 締りやや弱
- 21 鈍黄褐色 (10YR4/3) 13層よりやや粘い R-C混入 B含 締りやや弱
- 22 黒褐色 (10YR3/2) B混入 締り粘性有
- 23 鈍黄褐色 (10YR5/4) R-C多混入 締りやや弱
- 24 黄褐色 (10YR5/6) B混入 締りやや弱

第297号住居跡層土穴層土

- 1 褐色 (10YR4/4) B-C含
- 2 黄褐色 (10YR5/6) B多含 締りやや弱

第297号住居跡貯蔵穴層土

- 1 褐色 (10YR4/4) B含 C混入
- 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) R-C含 締り弱
- 3 褐色 (10YR4/4) やや粘性有 締り弱 R混入
- 4 暗褐色 (10YR3/4) B含
- 5 鈍黄褐色 (7.5YR5/4) R-C含 締りやや弱
- 6 灰褐色 (7.5YR4/2) B含 粘性やや弱



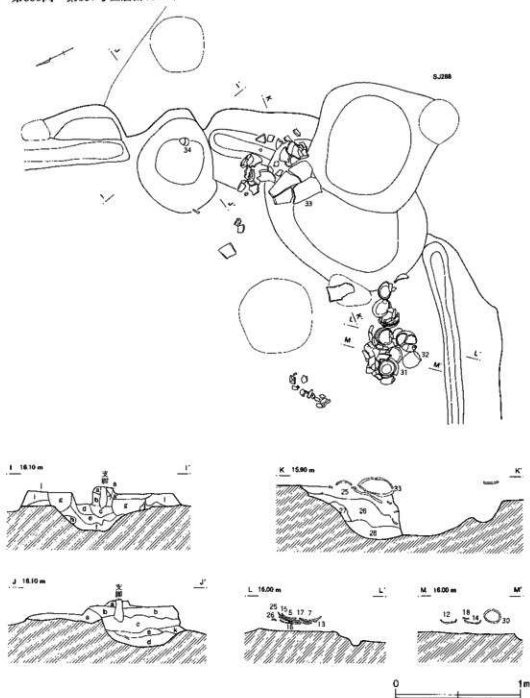
瞭に検出できた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-255・263・288・289、SK-370・371・372と重複していた。重複関係は、SK-370・371・372に切られ、SJ-288を切り、SJ-263とは不明であった。住居跡の中央床面には、噴砂による擾乱が認められた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、鉢、甌、支脚などを検出した。この中で第331図5・7・10・13・

第330図 第287号住居跡カマド



第287号住居跡カマド掘上

- a 褐色 (7.5YR4/4) B R 含 細りやや有
- b 鈍赤褐色 (2.5YR4/6) R 多量 細りやや有 (天井崩落)
- c 鈍赤褐色 (5YR4/4) R 含 C 若干個人 粘性 細り有
- d 赤褐色 (2.5YR4/6) R 多量
- e 鈍赤褐色 (5YR4/3) R C 混入 細り粘性有
- f 栗褐色 (7.5YR2/1) C M 含 細り有
- g 鈍赤褐色 (2.5YR4/6) R 多量 天井崩落
- h 褐色 (7.5YR4/6) B 土体

- i 褐色 (7.5YR4/3) R 含 細り強
- j 褐色 (7.5YR6/6) B 土体 (補)
- k 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘性有 R 混入 細りやや有

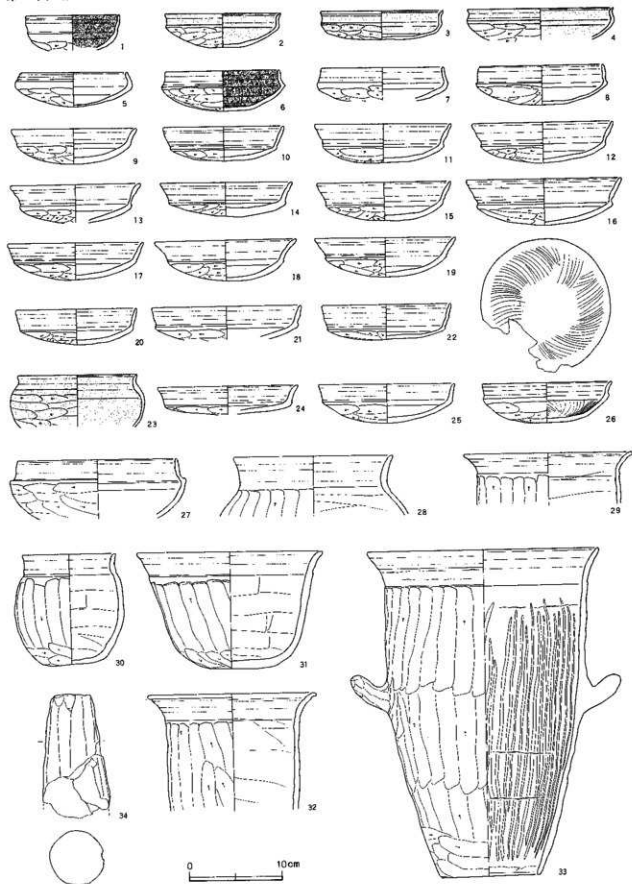
第287号住居跡掘上

- 25 鈍褐色 (7.5YR5/4) R 多量 B 混入 C 混在
- 26 褐色 (7.5YR4/2) I 層に比<B多量 R少含
- 27 鈍褐色 (7.5YR5/4) B 土体
- 28 灰褐色 (7.5YR4/2) B 多量

14・18・25・26の環、30の壺、31の鉢は貯蔵穴西側から、33の瓶はカマド右側から、34の支脚はカマド内か

ら、6・9・21・24の環は住居跡の北側から、他は覆土から検出した。

第331图 第287号住居跡出土遺物



第287号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.0)			ACDF	3	淡灰褐色	20	黒色処理
2	環	(12.4)	3.5		ACEFK	2	赤褐色	50	赤彩
3	環	(13.0)	3.1		ACEFK	2	赤褐色	30	赤彩
4	環	(15.6)			ACEFK	2	赤褐色	10	赤彩
5	環	11.3	3.6		ACDEFK	3	赤褐色	100	
6	環	12.2	4.2		ACDF	2	暗赤褐色	100	黒色処理
7	環	(12.9)			ACDEF	3	赤褐色	20	
8	環	(13.1)	4.2		ACD	2	淡茶褐色	70	
9	環	13.2	3.8		ACDEF	3	赤褐色	100	
10	環	(12.9)	3.7		ACDEF	3	赤褐色	90	
11	環	(14.4)	4.1		ACDEF	3	淡橙褐色	100	
12	環	(15.0)	4.3		ACDEF	3	淡橙褐色	100	
13	環	(13.9)			ACDEF	3	赤褐色	50	
14	環	14.0	3.6		ACDEF	3	赤褐色	100	
15	環	14.3	4.0		ACDEFK	3	淡橙褐色	90	
16	環	16.6	4.9		ACDEF	2	赤褐色	90	
17	環	14.5	3.9		ACDEF	3	淡褐色	90	
18	環	15.1	4.3		ACDEF	3	淡橙褐色	90	
19	環	15.0	4.2		ACDEFK	2	赤褐色	100	
20	環	12.8	3.7		ACDEF	2	淡橙褐色	90	
21	環	(15.9)			ACDEF	3	淡橙褐色	50	
22	環	13.7	3.7		ACDEF	2	橙褐色	90	
23	椀	(12.7)			ACEFK	2	赤褐色	40	赤彩
24	環	(15.0)			ACDEFK	3	淡褐色	30	
25	環	14.5	4.1		ACDEF	3	淡褐色	100	
26	環	13.8	4.2		ACDEF	3	淡褐色	90	暗文
27	環	(17.0)			ACEF	3	淡褐色	20	
28	甕	(16.9)			ACDEF	3	赤褐色	10	
29	甕	(18.0)			ACD	2	暗赤褐色	10	
30	壺	9.8	11.8	5.3	ACDEFK	3	淡橙褐色	100	
31	鉢	(19.9)	12.4	7.0	ACDEFK	2	明赤褐色	90	
32	甕	(18.0)			ACEFK	3	暗赤褐色	20	
33	甕	(24.6)	34.5	(10.5)	ACDEFK	2	明赤褐色	90	把手付
34	支脚				ACF	4	淡灰褐色		

第288号住居跡 (第329図)

第288号住居跡はAC・AD-18-19グリッドから検出した。

住居跡の北側は、SJ-287による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-43°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。

貯蔵穴はSJ-287によって検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-287・289と重複していた。重複関係は、SJ-287に切れ、SJ-289とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第289号住居跡 (第332・334図)

第289号住居跡はAC・AD-18-19グリッドから検出した。

住居跡の北側はSJ-288・287による擾乱のために、西側はSE-108による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-38°-Wであった。規模は主軸長6.9m、副軸長6.6m、深さ20cm程度であった。

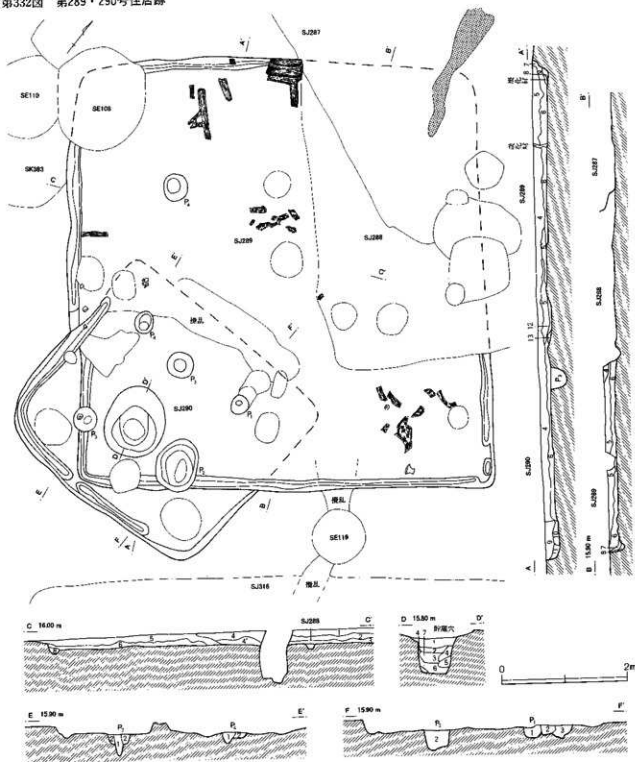
壁は明瞭であり、南西側からカマドが検出できた。

貯蔵穴はカマドの左側から検出し、覆土内から甕が検出できた。床面も明瞭で、壁溝は東側のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。

柱穴も2本が明瞭に検出できた。検出した柱穴のP3・P4は、他の住居跡の柱穴に比べてかなり浅かった。

P1、P2はSJ-287・288によって検出できなかった。

第332図 第289・290号住居跡



第289・290号住居跡層土

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) RC混入 締りや少有
- 2 純黄褐色 (10YR4/3) 1層よりやや締り RC含 締りや中程度
- 3 栗褐色 (10YR3/2) B混在 締り粘性有
- 4 黄黄褐色 (10YR4/2) B多含 締り有
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 4層に比、B混入 締りや少有
- 6 栗褐色 (10YR3/2) B多含 締りや中程度
- 7 純黄褐色 (10YR5/0) B混入

- 8 純黄褐色 (10YR5/4) B含
- 9 灰黄褐色 (10YR4/2) C R混入 締り有
- 10 純黄褐色 (10YR5/4) C R混入 締り有
- 11 褐色 (10YR4/4) B含 締りや少有
- 12 黄黄褐色 (10YR5/4) B混入
- 13 褐色 (10YR4/4) B混入 締り有

第290号住居跡貯蔵穴層土

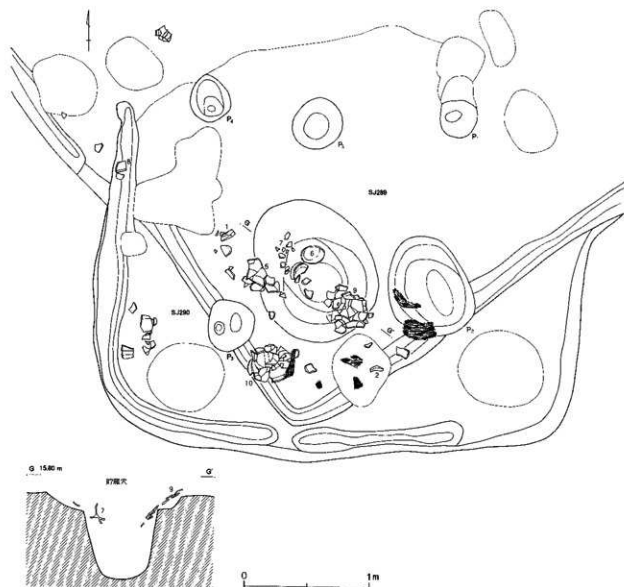
- 1 暗褐色 (7.5YR3/4) B含 RC多含 締り弱
- 2 暗褐色 (7.5YR3/0) RC含 1層より締り

- 3 栗褐色 (10YR3/2) RC含 締りや少有
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) B含 締り粘性有
- 5 褐色 (10YR4/1) 粘性有 締り弱
- 6 栗褐色 (10YR3/2) B多含 4層より粘性
- 7 暗褐色 (10YR3/3) B主体

第290号住居跡貯蔵穴層土

- 1 純黄褐色 (10YR4/2) RC含
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 1層より締り弱 B粘
- 3 栗褐色 (10YR3/2) C含 締りや中程度

第333図 第289号住居跡貯蔵穴



覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を
示していた。

床面には炭化材が散乱しており、いわゆる火災住居
と考えられる。

住居跡は、SJ-287・288・290、SE-108、SK-383と
重複していた。重複関係は、SJ-287・288、SE-108、
SK-383に切れ、SJ-290を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、高環、紡錘
車、土鎌などを検出した。この中で、第334図1の環、
5・6・9の甕、7の高環は貯蔵穴周辺から、8の高
環は住居跡の南西の壁際から、2の環と10の甕は住居
跡の南側コーナー付近から、他は覆土から検出した。

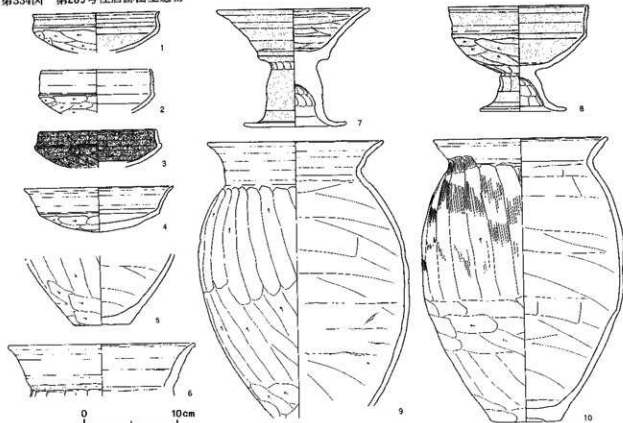
第290号住居跡 (第332・333・335図)

第290号住居跡は、AD-18・19グリッドから検出した。
住居跡の北側はSJ-289による攪乱のために検出で
きなかった。形態は方形で、主軸方位はN-2°-Eで
あった。規模は主軸長不明、副軸長3.9m、深さ20cm程
度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。
貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は西
側と南側の壁で検出できた。柱穴も4本が明瞭に検出
できた。

検出した柱穴の中で、P1・P4は他の柱穴に比べ
てやや浅かった。

第334図 第289号住居跡出土遺物



第289号住居跡出土遺物観察表

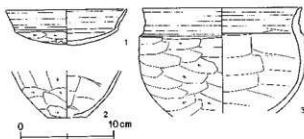
No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.6)			ACDEFK	2	赤褐色	50	赤彩
2	環	(11.7)			ACDEF	2	明赤褐色	20	
3	環	(12.4)			AC	2	淡茶褐色	40	黒色処理
4	環	(16.0)	4.7		ACDEF	3	淡橙褐色	40	
5	甕			6.0	ACDEF	3	赤褐色	20	
6	甕	(20.0)			ACDEFHK	3	淡橙褐色	20	
7	高環	(16.4)	12.5	(11.0)	ACDEFHK	2	赤褐色	80	赤彩
8	高環	14.8	11.2	9.3	ACDEFHK	2	赤褐色	80	赤彩
9	甕	18.7			ACDEFHK	2	暗赤褐色	80	
10	甕	(18.7)	30.1	7.6	ACDEFHK	2	暗赤褐色	80	

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-289と重複していた。重複関係は、SJ-289に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、鉢などを検出した。この中で、第335図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第335図 第290号住居跡出土遺物



第290号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	13.0	3.7		ACDEFK	3	橙褐色	80	
2	甕			(4.0)	ACDEF	3	黒褐色	10	
3	鉢	(17.0)			ACDEFK	3	暗赤褐色	40	

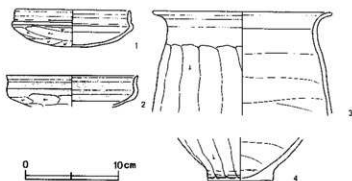
第291号住居跡 (第336・337図)

第291号住居跡は、AF-19・20、AG-19・20グリッドから検出した。

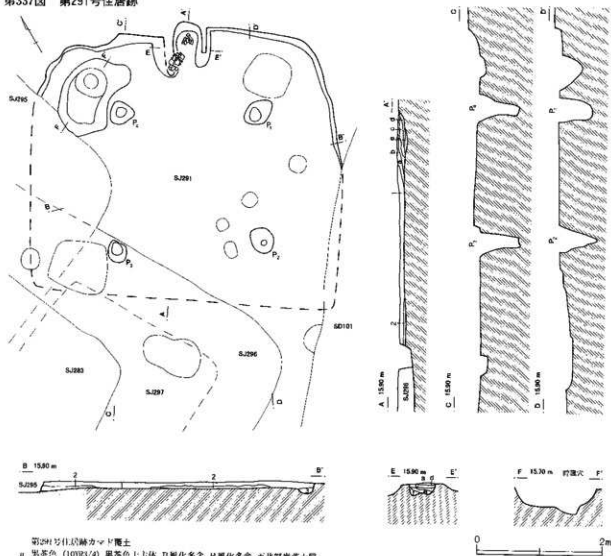
住居跡の西側はSJ-295による掘乱のために、南側はSJ-296・297、SD-101による掘乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-32°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長4.4m、深さ10cm程度であった。

壁は不明瞭であったが、北側からカマドか検

第336図 第291号住居跡出土遺物



第337図 第291号住居跡

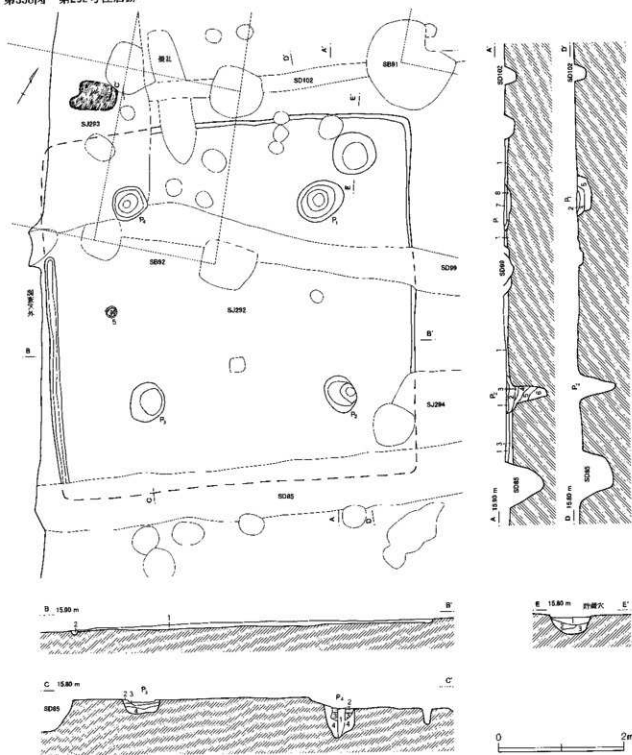


第291号住居跡カマド壁土

- a 黒茶色 (10YR3/4) 黒茶色土主体 D風化多含 R風化多含 大井部崩壊土層
- b 黒茶色 (10YR3/1) 黒茶色土主体 R風化多含 R風化多含 大井内崩壊土層
- c 黒茶色 (10YR3/1) 黒茶色土主体 R風化少含 M多量 埴道部崩壊土層
- d 灰褐色 (10YR3/1) 黒茶色土主体 R風化多含 内側R流入土層
- e 灰褐色 (10YR3/1) 灰褐色土主体 R風化少含 R風化少含 使用面上のMR流入層
- f 灰褐色 (10YR3/1) 5層より多含 R少含 使用面上のMR流入層

第291号住居跡壁土

- 1 灰褐色 (10YR3/1) 灰褐色土主体 R風化少含 R風化少含
- 2 灰褐色 (10YR3/2) 1層より多含未風化 粘床
- 3 灰褐色 (10YR3/1) 1層より多含 D多含 未風化 壁土



第292号住居跡概土:

- 1 灰黄色 (10YR3/1) 灰黄色土主体 B風化多少含
- 2 灰黄色 (10YR3/1) 1層より多量未風化
- 3 灰黄色 (10YR3/1) 1層より更に多量未風化

第292号住居跡貯蔵穴概土:

- 1 灰黄色 (10YR3/1) 灰黄色土主体 B風化少含 R風化微含 粘土やや有
- 2 灰黄色 (10YR4/3) 1層に多量にB加わる
- 3 灰黄色 (10YR2/1) 1層より多量 やや樹状

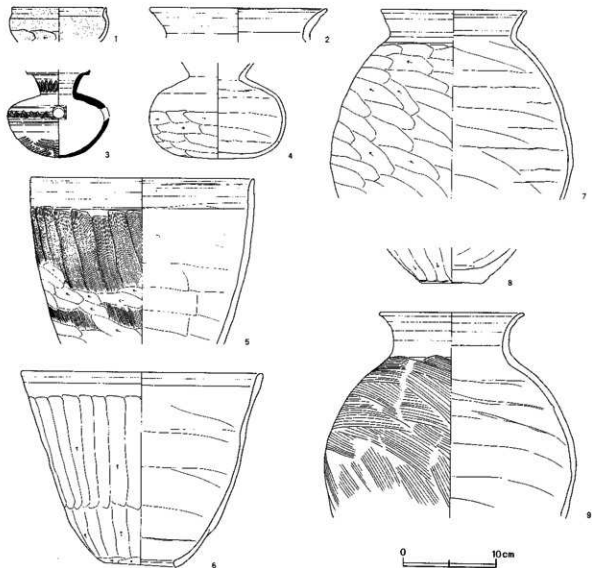
第292号住居跡灶穴概土:

- 1 栗褐色 (10YR2/1) 栗褐色土主体 B風化少含 R風化少含
- 2 灰黄色 (10YR3/2) 灰黄色土主体 B風化少含 R風化少含
- 3 灰黄色 (10YR3/2) a2/a1にてやや多量含 R風化少含
- 4 栗褐色 (10YR2/1) 栗褐色土主体 B風化多少含
- 5 栗褐色 (10YR2/1) a4層より多量含
- 6 灰黄色 (10YR3/2) a4層より多量含
- 7 栗褐色 (10YR3/1) 栗色灰・C土層 R風化多少含
- 8 栗褐色 (10YR2/1) 栗褐色土主体 B風化多少含

第291号住居跡出土遺物觀察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底徑/cm	胎土	燒成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.2)	4.0		ACDEF	3	淡褐色	60	
2	環	(14.0)			ACF	2	赤褐色	10	赤彩
3	甕	(19.2)			ACEFK	3	淡橙褐色	20	
4	甕			(7.0)	ACDEFHK	3	赤褐色	10	

第339図 第293号住居跡出土遺物



第293号住居跡出土遺物觀察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底徑/cm	胎土	燒成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.0)			ACDFK	2	赤褐色	20	赤彩
2	甕	(19.0)			ACEFK	3	淡橙褐色	10	
3	須恵器				ACFK	1	青白色	90	
4	甕				ACF	3	暗赤褐色	50	
5	甕	23.8			ACDEFHK	3	暗赤褐色	60	
6	甕	26.0	20.5	7.5	ACDEFHK	3	赤褐色	50	
7	甕	(15.5)			ACDEFK	3	橙褐色	50	
8	甕			(6.8)	ACDEFHK	3	暗赤褐色	20	
9	甕	(15.6)			ACDEFHK	3	橙褐色	40	

出できた。カマド内からは支脚や甕の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出し、覆土内から甕が検出できた。床面も不明瞭で、壁溝は検出できなかった。柱穴は4本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-295・296・297、SD-101と重複していた。重複関係は、SJ-295・296・297、SD-101に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、土玉などを検出した。この中で、第336図1の環はP4から、他は覆土から検出した。

本住居跡は削平を受けており、遺存状態が極めて悪かった。従って立ち上がりやや不明瞭であり、平面形態も明瞭ではなかったため、検出できた北側と東側のコーナーもやや不自然な形となっていた。特にこの傾向は北側のコーナーで顕著であり、著しく不整形な形態になった。床面と周辺を精査したが、壁溝は全く検出できなかった。貼り床も明瞭ではなかったために、住居の範囲の決定は、柱穴を参考にしながら行った。

第292号住居跡 (第338・340図)

第292号住居跡は、AF・AG-18グリッドから検出した。

住居跡の西側はSJ-293による擾乱のために、南側は、SD-85による擾乱のために、中央はSD-99、SB-92による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN

-32°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長5.9m、深さ10cm程度であった。

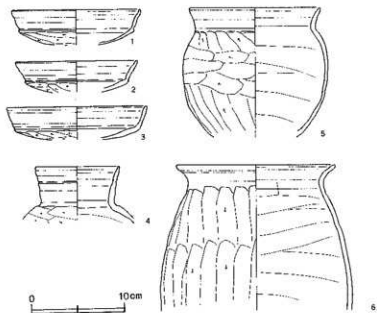
壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は西壁で検出できた。柱穴は4本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-293・294、SB-92、SD-85・99と重複していた。重複関係は、SJ-293・294、SB-92、SD-85・99に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、埴、土玉などを検出した。

この中で、第340図5の甕は住居跡の南西側から、6の甕はP3から、他は覆土から検出した。

第340図 第292号住居跡出土遺物



第292号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.6)			AC E F	3	淡橙褐色	30	
2	環	(13.0)			A C D F	3	赤褐色	30	
3	環	(15.0)			A C D E F	3	橙褐色	30	
4	埴	(9.0)			A C D E F	3	淡橙褐色	10	
5	甕	14.0			A C D E F H K	3	淡灰褐色	70	
6	甕	(17.0)			A C D E F H K	3	暗赤褐色	50	

第293号住居跡 (第339・341図)

第293号住居跡は、AF-17・18、AG-18グリッドから検出した。

住居跡の西側は調査区外のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-33°-Wであった。規模

は主軸長6.8m、副軸長不明、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は1本検出できた。P1・P3・P4は、調査区外で検出できなかった。

住居跡のP2付近の床面上からは、炭化した繊維状のものが検出できた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡はSJ-292、SB-92、SD-99-102と重複していた。重複関係はSB-92、SD-99-102に切れ、SJ-292を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、埴、甌、須恵器地、土玉などを検出した。この中で、第339図3の須恵器地は壁溝中から、4の埴、5、6の甌、2、7-9の甕は、住居跡北側のコーナーからまわって、他は覆土から検出した。

第298号住居跡 (第342・344図)

第298号住居跡は、AC-20・21、AD-20・21グリッドから検出した。

住居跡の南西コーナーは、SJ-300による攪乱のために、中央はSD-85、SK-377による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-26°Wであった。規模は主軸長6.9m、副軸長7.0m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

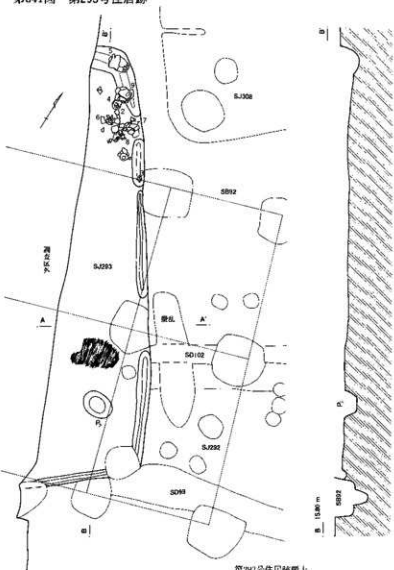
柱穴は柱径も明瞭であり、深さも4本が一定していた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-300・422、SB-90・96、SD-85、SE-195、SK-377と重複していた。重複関係は、SJ-300、SB-90・96、SD-85、SE-195、SK-377に切れ、SJ-422を切っていた。

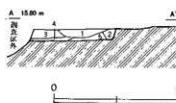
実測可能な遺物として、土師器環、甕、鉄滓などを覆土中から検出した。

第341図 第293号住居跡



第293号住居跡概略上

- | | |
|-----------------|--------------|
| 1 茶褐色 (10FR2/2) | 茶褐色土主体 |
| | B 腐化多少 |
| | R 腐化概念 |
| | C 腐化概念 |
| 2 茶褐色 (10FR2/2) | 1層より多少多 |
| 3 茶褐色 (10FR2/2) | 1層より多少少 |
| | R C 多含 |
| 4 茶褐色 (10FR2/2) | 1層よりR B C 多含 |
| | R 腐前下にC層あり |
| 5 茶褐色 (10FR2/2) | 1層よりR C 少含 |

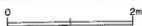
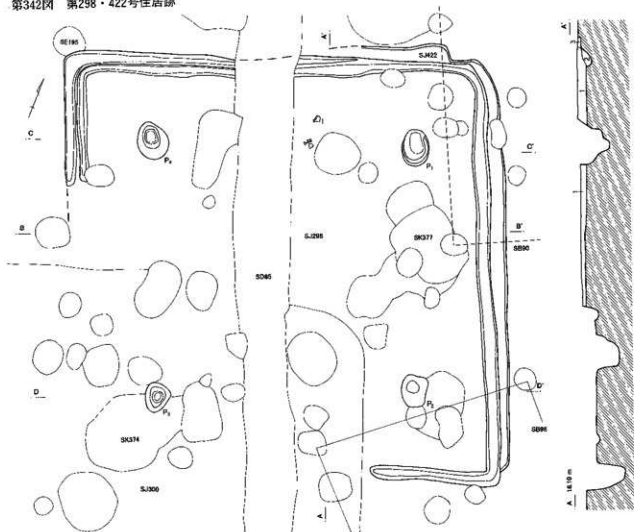


第422号住居跡 (第342図)

第422号住居跡は、AC-20・21、AD-20・21グリッドから検出した。住居跡の大半はSJ-298による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で主軸方位はN-24°Wであった。規模は主軸長6.9m、副軸長6.9m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドや貯蔵穴は検出できなかった。床面は不明瞭であったが、壁溝はほぼ全周し

第342図 第298・422号住居跡



第298号住居跡履上

- 1 黒褐色 (10YR3/1) 土砂混合
- 2 褐色 (10YR4/6) 土砂ブロック多量

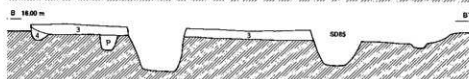
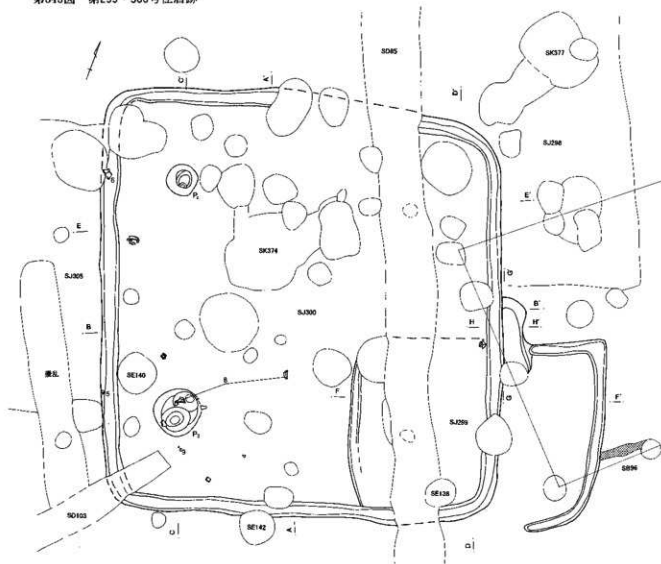
第422号住居跡履上

- 3 黒褐色 (10YR3/2) 黄砂粒多量 (SJ422)

第298号住居跡柱穴履上

- 1 純黄褐色 (10YR1/4) 黄砂粒多量 粘性やや有
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 黄砂粒少量 粘性やや有
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 黄砂粒少量
- 4 褐色 (10YR4/6) 黄砂ブロック多量
- 5 黒褐色 (10YR3/1) 黄砂粒多量 全く砂質

第343図 第299・300号住居跡



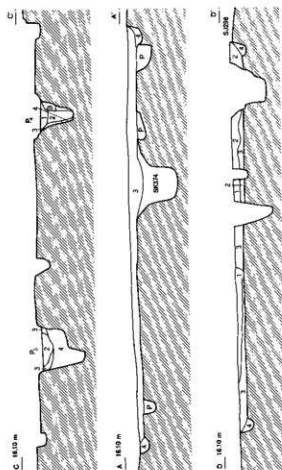
第299号住居跡層上:
I 鈍黄褐色 (10YR4/3) R 間合
J 鈍黄褐色 (10YR4/3) R 多合
K 砂質多合

第299号住居跡カマド層上:
a 赤褐色 (2.5YR1/6) R 多合
b 黒褐色 (10YR2/1) CM 合

第300号住居跡層上:
2 暗褐色 (10YR3/3) R 合
砂質多合
3 黒褐色 (10YR2/2) R 砂質多合
4 鈍黄褐色 (10YR4/3) R 砂プロット多合

第300号住居跡柱穴層上:
1 黒褐色 (10YR2/2) R 砂質多合
2 暗褐色 (10YR3/4) R 合
3 黒褐色 (10YR2/1) R 砂質多合
4 暗褐色 (10YR3/4) R 砂質多合





ていたと考えられた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-298・300、SB-90・96、SD-85、SE-195、SK-377と重複していた。重複関係は、全てに切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第298号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	11.4	3.0		ACDEFK	3	赤褐色	100	
2	壺	(7.8)			ACEF	2	暗赤褐色	10	

第299号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.0)			ACDF	2	赤褐色	10	赤彩
2	環	(12.8)			ACEFK	2	赤褐色	40	赤彩

第300号住居跡 (第343・346図)

第300号住居跡は、AD-20-21グリッドから検出した。

住居跡の中央は、SD-85による攪乱のために、南側のコーナーは、SD-103による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-21°-Wであ

第344図 第298号住居跡出土遺物



第299号住居跡 (第343・345図)

第299号住居跡は、AD-21グリッドから検出した。

住居跡の中央は、SD-85による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-23°-Wであった。規模は主軸長2.9m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

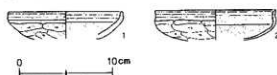
壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。床面を精査したが、柱穴は検出できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-300、SB-96、SD-85、SE-138と重複していた。重複関係は、SB-96、SD-85、SE-138に切られ、SJ-300とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環などを覆土中から検出した。

第345図 第299号住居跡出土遺物



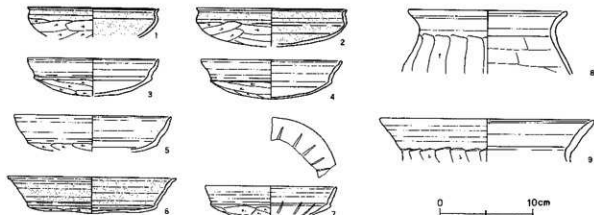
た。規模は主軸長6.7m、副軸長6.4m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も2本が明瞭に検出

きた。P1、P2は、SD-85によって検出できなかった。

住居跡は、SJ-298・299・305、SB-96、SD-85・103、SE-138・140・142、SK-374と重複していた。重複関係は、SB-96、SD-85・103、SE-138・140・142、SK-374に切られ、SJ-298・305を切り、SJ-299とは不明であった。

第346図 第300号住居跡出土遺物



第300号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.0)			ACEF	2	赤褐色	10	赤彩
2	環	(16.0)			ACEF	2	赤褐色	30	赤彩
3	環	(14.0)			ACDEF	2	暗赤褐色	30	
4	環	(14.8)	4.2		ACDEF	3	淡橙褐色	30	
5	環	(16.8)			ACDEFK	2	淡橙褐色	20	
6	環	(18.0)	3.8		ACEFK	2	赤褐色	60	赤彩
7	環	(14.0)			ACDF	2	赤褐色	20	暗文
8	甕	(17.0)			ACDEF	3	橙褐色	20	
9	甕	(23.0)			ACEFK	3	淡褐色	10	

第301号住居跡 (第347・348図)

第301号住居跡は、AC・AD-17グリッドから検出した。

住居跡の南側はSJ-302による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-39°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長3.6m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北東と北西壁で検出できた。柱穴は検出できなかった。

床面上の精査によって何本かのピットが検出できたが、覆土の組成や堆積状況から、柱穴ではないと判断

実測可能な遺物として、土師器環、甕、鉄製の棒状不明品などを検出した。

この中で、第346図6の環は西側のコーナーから、5の環と9の甕は南側のコーナーから、8の環はP3から、他は覆土から検出した。

した。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-274・302・309、SE-109と重複していた。重複関係は、SJ-302、SE-109に切られ、SJ-274・309とは不明であった。

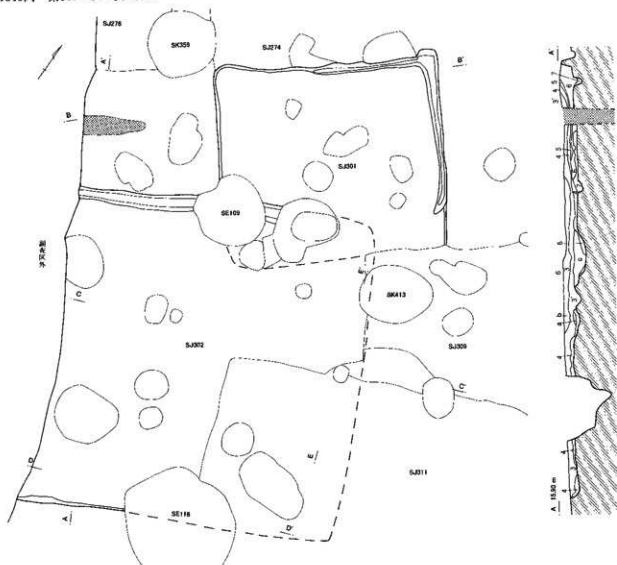
実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。この中で、第347図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第347図 第301号住居跡出土遺物



第301号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.0)			ACDF	2	赤褐色	30	赤彩



第301号住居跡層上:

- 1 黒色 (10YR2/2) 未溶化小骨多含 SJ-274構築時 埋戻し土
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 未溶化精質骨多含 SJ-274構築時 埋戻し貼り床

第302号住居跡層上:

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 赤褐色骨未溶化少含 骨干只含
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 赤褐色骨多含 大型R多含
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 1層に準ず プロット大型化
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 1層基本土 記号物無
- 5 暗褐色 (10YR3/4) 溶化進行は多含 R骨片

第302号住居跡カマド層上:

- a 赤褐色 (2.5YR1/6) R主体 カマド天井崩落土
- b 黒色 (10YR2/1) M主体 R少含
- c 暗褐色 (10YR3/4) 層上4割土床 R多量 M盛 カマド灰かき出し



第302号住居跡 (第348・349図)

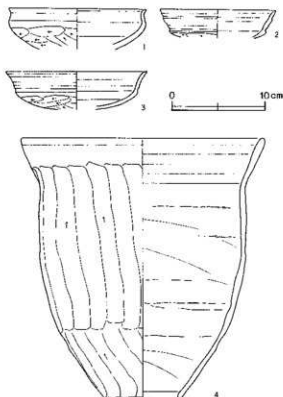
第302号住居跡は、AD-17グリッドから検出した。住居跡の西側は調査区外のために、東側はSJ-311、SK-413による攪乱のために、南側はSE-1164による攪乱のために、北側はSE-109による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-26°-Wであった。規模は主軸長5.1m、副軸長不明、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は北側で検出できた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-301・309・311、SE-109・116、SK-413と重複していた。重複関係は、SJ-311、SE-109・116、SK-413に切れ、SJ-301を切り、SJ-309とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甗、鉄滓、羽口、鉄製の刀子などを検出した。この中で、第349図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第349図 第302号住居跡出土遺物



第302号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(14.6)			ACDF	3	明赤褐色	20	
2	環	(12.3)			ACDF	3	淡灰褐色	20	
3	環	(15.0)			ACDEF	3	橙褐色	40	
4	甗	(25.5)	27.6	(8.0)	ACDFHK	3	暗赤褐色	20	

第303号住居跡 (第350図)

第303号住居跡は、AE-18・19、AF-18・19グリッドから検出した。

住居跡の北側はSJ-304による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-32°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長5.1m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で壁溝は住居跡の検出範囲で確認できた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-304・320、SB-91・95、SD-102と重複していた。重複関係は、SJ-304、SB-91・95、SD-102に切れ、SJ-320とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第304号住居跡 (第350図)

第304号住居跡は、AE-18・19、AF-18・19グリッドから検出した。

住居跡の北側のコーナーは、SB-91による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-20°-Wであった。規模は主軸長3.8m、副軸長4.1m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は南壁以外で検出できた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-303・320、SB-91と重複していた。重複関係は、SB-91に切れ、SJ-303を切り、SJ-320とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第320号住居跡 (第350図)

第320号住居跡は、AE-18・19、AF-18・19グリッドから検出した。

住居跡の南側はSJ-304による攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-13°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴

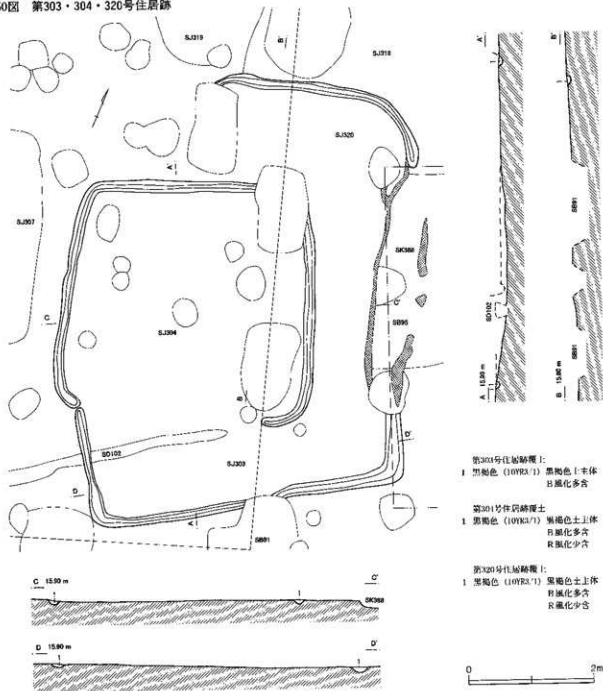
も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北壁で検出できた。柱穴は周辺の地山を精査したが、検出することができなかった。

住居跡は、SJ-304・318・319・320、SB-91・95、SK-388と重複していた。重複関係は、SJ-304、SB-91・95、SK-388に切れ、SJ-318・319とは不明であった。

壁溝の一部は、噴砂の攪乱を受けていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第350図 第303・304・320号住居跡



第305号住居跡 (第351・352頁)

第305号住居跡は、AD-20グリッドから検出した。

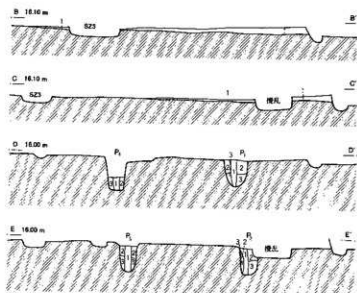
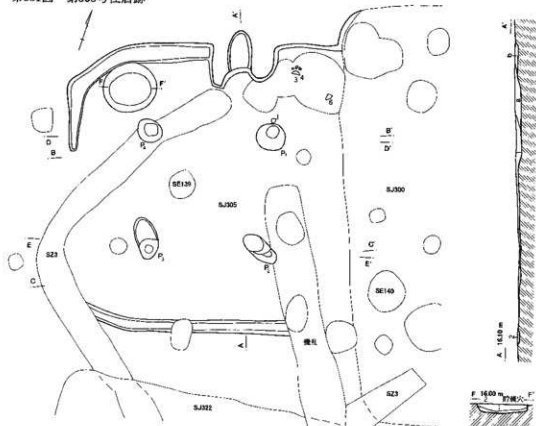
住居跡の東側はSZ-3による擾乱のために、南側は近世の擾乱のために、中央はSD-103による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で主軸方位はN-20°-Wであった。規模は主軸長4.6m、副軸長不明、

深さ10cm程度であった。

壁はやや不明瞭であり、北側からカマドか検出できた。貯蔵穴はやや浅かったが、カマドの左側壁際から検出した。床面も明瞭で、壁溝は北側と南側の壁で検出できた。

柱穴は4本を明瞭に検出することができ、覆上には

第351図 第305号住居跡



第305号住居跡覆土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) R少含 B砂多含
- 2 灰褐色 (10YR4/2) B砂多含

第305号住居跡カマド覆土

- a 暗赤褐色 (5YR3/6) R多含
- b 灰褐色 (10YR3/2) R多含

第305号住居跡柱穴覆土

- 1 紫褐色 (10YR3/1) B砂多含
粘付やや有
- 2 暗褐色 (10YR3/3) B砂ブロック多含
やや砂質
- 3 灰褐色 (10YR3/2) R多含

第305号住居跡貯蔵穴覆土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) B砂ブロック多含
- 2 灰褐色 (10YR3/2) B砂多含

柱痕が認められた。

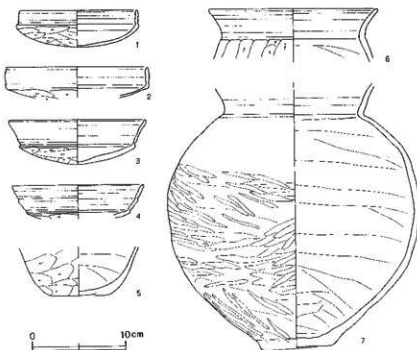
わずかに残された覆土には、埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-300、SZ-3、SE-139と重複していた。重複関係はSJ-300、SZ-3、SE-139に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、白玉などを検出した。

この中で、第352図1の環はP1付近から、3・4の環、6の甕はカマド右側から、他は覆土からそれぞれ検出した。カマド周辺の遺物は破片であった。

第352図 第305号住居跡出土遺物



第305号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.4)	3.9		ACDEFK	3	赤褐色	70	
2	環	(15.0)			ACF	3	黒褐色	10	
3	環	(14.5)	4.8		ACDEF	2	橙褐色	50	
4	環	(14.0)			ACDF	3	淡褐色	20	
5	甕			(6.4)	ACDEFHK	2	暗赤褐色	20	
6	甕	(18.0)			ACDEFK	3	赤褐色	10	
7	甕			7.5	ACDEFHK	3	淡橙褐色	80	

第306号住居跡 (第353・354図)

第306号住居跡は、AC-22グリッドから検出した。

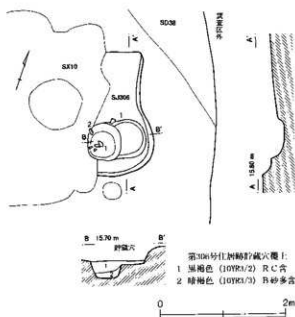
住居跡の西側は、SX-10による攪乱のために検出できなかった。住居跡は、確認面では痕跡程度しか残存していなかった。形態は方形で、主軸方位はN-21°-Wであった。規模は主軸長2.0m、副軸長不明、深さ30cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は東側のコーナー付近から検出でき、覆土中に甕の破片が認められた。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴も検出できなかった。

住居跡は、SJ-321、SX-10と重複していた。重複関係は、SX-10に切られ、SJ-321とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器甕などを検出した。この中で、第354図1・2の甕は貯蔵穴内から、他は覆

第353図 第306号住居跡

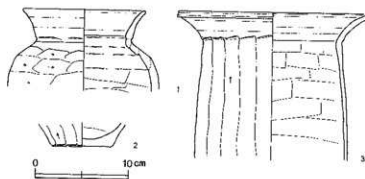


第306号住居跡貯蔵穴横断:
1 黒褐色 (10YR5/2) R 貯蔵穴
2 暗褐色 (10YR3/3) B 貯蔵穴

土から検出した。

本遺構は非常に小さく、カマドが検出できなかった。また、床面の精査によっても、壁溝や柱穴は検出できなかった。SX-10による擾乱もあり、遺構の大半が明らかにできなかったが、唯一、貯蔵穴と考えられる施設が、東側のコーナーから検出できたので覆土の状況から、住居跡と判断した。

第354図 第306号住居跡出土遺物



第306号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	壺	(13.0)			ACDEF	3	赤褐色	30	
2	甕			6.4	ACDEFHK	3	赤褐色	10	
3	壺	(20.0)			ACDEFK	3	淡灰褐色	30	

第307号住居跡 (第355図)

第307号住居跡は、AE・AF-18グリッドから検出した。住居跡の中央は、SB-91による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-19°-Wであった。規模は主軸長3.4m、副軸長3.5m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は東の

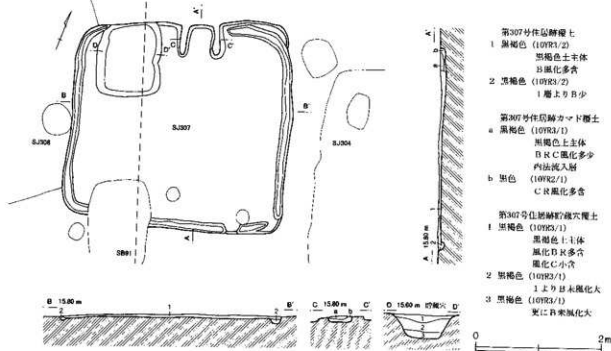
コーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。柱穴は床面を精査したが、検出することができなかった。

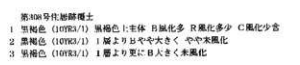
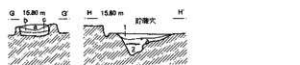
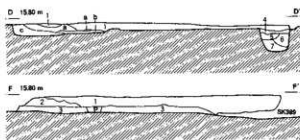
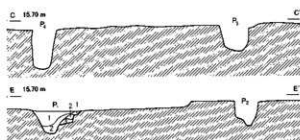
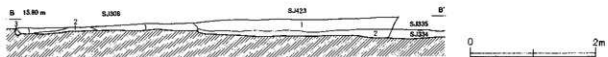
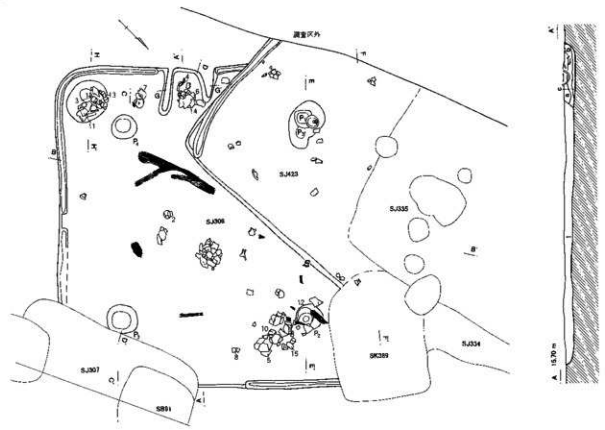
覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-308、SB-91と重複していた。重複関係は、SB-91に切れ、SJ-308を切っていた。

実測可能な遺物として、刀子を覆土から検出した。

第355図 第307号住居跡





第308号住居跡竪穴掘土
 a 赤褐色 (2.5YR5/9) 赤褐色土主体 B風化多含 B風化多少 C風化少含
 b 黒褐色 (10YR3/1) M主体 B風化少含 B風化少含 C風化少含
 c 黒褐色 (10YR3/1) 黒褐色土主体 C風化少含 B風化少含

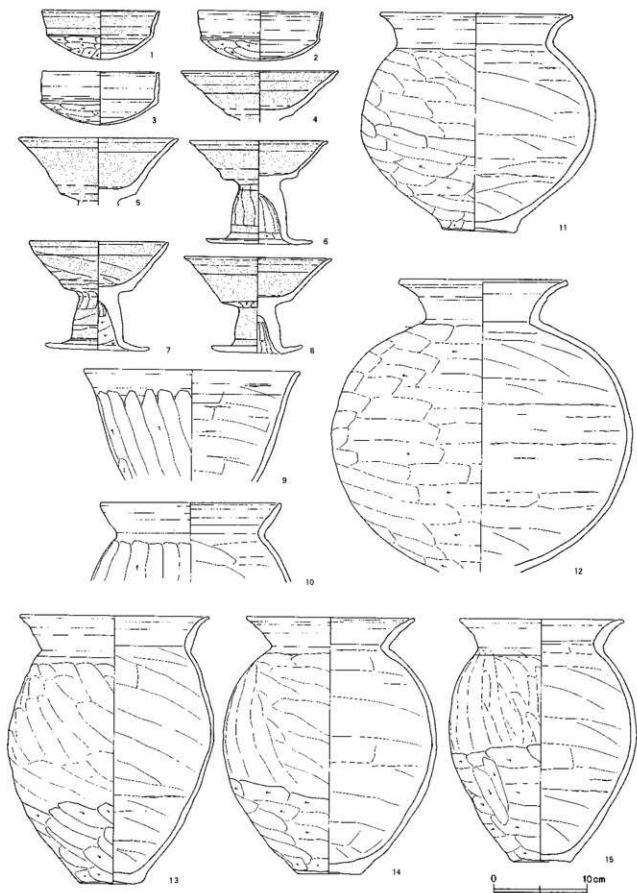
第423号住居跡掘土
 4 黒褐色 (10YR3/1) 黒褐色土主体 B風化多含 B風化少含 C風化少含
 5 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB大きく多含
 6 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB更に大きく多含

第308号住居跡掘土
 1 赤褐色 (10YR3/1) 赤褐色土主体 B風化多含 B風化多少 C風化少含
 2 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりBやや大きく やや未風化
 3 赤褐色 (10YR3/1) 1層より更にB大きく未風化

第308号住居跡竪穴掘土
 1 黒褐色 (10YR3/1) 黒褐色土主体 B風化多含 C未風化多少 B風化少含
 2 黄褐色 (10YR3/1) B主体 黄褐色土風化多含
 3 赤褐色 (10YR3/1) 赤褐色土主体 B未風化多含
 4 黄褐色 (10YR3/1) 黄褐色土主体 B風化多含 C風化少含
 5 黄褐色 (10YR3/1) 4層よりB大きく多含 未風化
 6 黄褐色 (10YR3/1) 4層よりB大きく多含 未風化
 7 黄褐色 (10YR3/1) 4層よりB小さく少含 同化 C大きく多含

第308号住居跡竪穴掘土
 1 赤褐色 (10YR3/1) 赤褐色土主体 B風化多含
 2 赤褐色 (10YR3/1) 1層よりB少含 同化 C風化多少

第357图 第308号住居跡出土遺物



第308号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	12.4	5.2		ACDF	2	赤褐色	100	赤彩
2	環	(13.3)	5.2		ACDEF	3	赤褐色	80	
3	環	12.4	5.7		ACDEF	3	淡橙褐色	100	
4	高環	(16.8)			ACDF	2	赤褐色	30	赤彩
5	高環	(17.0)			ACDEFHK	2	赤褐色	30	赤彩
6	高環	14.8	10.9	11.4	ACDEFK	2	赤褐色	90	赤彩
7	高環	14.9	11.5	11.1	ACDEFK	2	赤褐色	80	赤彩
8	高環	15.8	10.0	9.8	ACDF	2	赤褐色	100	赤彩
9	甌	(23.0)			ACDFK	3	淡橙褐色	30	
10	甌	(19.2)			ACDEFHK	3	淡橙褐色	10	
11	甌	(20.4)	23.1	8.0	ACDEFHK	3	橙褐色	90	
12	甌	(18.0)			ACDEFK	3	淡橙褐色	30	
13	甌	20.2	28.5	6.5	ACDEFHK	2	橙褐色	90	
14	甌	(18.0)	27.2	6.6	ACDEFHK	3	暗赤褐色	50	
15	甌	17.5	25.9	6.0	ACDEFHK	3	暗赤褐色	80	

第308号住居跡 (第356・357図)

第308号住居跡は、AE-17・18、AF-17・18グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-307、SB-91による擾乱のために、北側はSJ-335・423、SK-389による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-41°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長4.1m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり西側からカマドが検出できた。カマド内からは甌や高環の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出し、覆土内から環が検出できた。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-307・335・423、SB-91、SK-389と重複していた。重複関係は全ての遺構に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甌、甌、高環を検出した。第357図4・6の高環、9の甌、14の甌はカマド内から、7の高環はカマド左側から、1・3の環、11・13の甌は貯蔵穴内から、2の環は住居跡の中央から、5・8の高環、10・12・15甌は北側コーナー付近から、他は覆土から検出した。

第423号住居跡 (第356図)

第423号住居跡は、AE-17・18、AF-17・18グリッドから検出した。

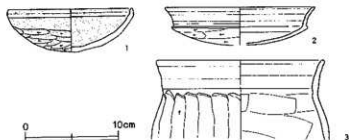
住居跡の西側は調査区外のために、北側はSJ-335による擾乱のために、東側はSK-389による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-2°-Wであった。規模は不明で深さは30cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は南壁で検出できた。柱穴は1本が明瞭に検出できた。

住居跡は、SJ-308・334・335、SK-389と重複していた。重複関係は、SJ-335、SK-389に切られ、SJ-308を切り、SJ-334とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

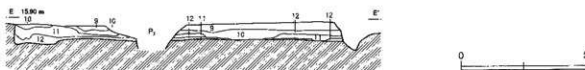
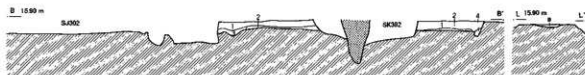
第358図 第309号住居跡出土遺物

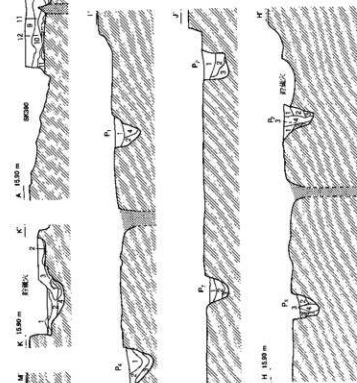
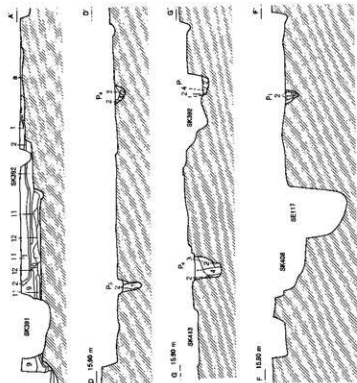


第309号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	13.1	4.6		ACDF	2	赤褐色	100	赤彩
2	環	(16.0)			ACDEF	3	明赤褐色	20	
3	甌	(18.0)			ACDFK	3	暗赤褐色	20	

第359图 第309~311号住居跡





第309号住居跡層上

- 1 暗褐色 (10YR3/3) B R 片子含
- 2 褐色 (10YR4/6) B 上体 粘床
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 1層に準ずる R D 多 色調薄
- 4 褐色 (10YR4/4) B 腐泥多 黄色味強 粘り弱
粘性強 粘り弱 粘性強

第309号住居跡カマド覆土

- a 灰色 (10YR2/1) R M 主体 カマド M 層

第309号住居跡柱穴覆土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) B 腐化・未腐化多含 粘り強
K 微含
- 2 暗褐色 (10YR3/3) B 腐化主体 微密 粘り粘り性有
- 3 褐色 (10YR4/4) B 腐化上体 粘性強
- 4 黒褐色 (10YR3/2) B 少 粘りなし 粘床

第310号住居跡層上

- 5 暗褐色 (10YR3/4) 全体B 腐泥 R C 微粒多含
粘り強
- 6 鈍灰褐色 (10YR4/3) 腐化進行B 多含
- 7 褐色 (10YR4/6) B 主体 床面腐化層
- 8 暗褐色 (10YR3/4) 2層に準ずる B 少含大型化
粘り無 柱穴ではない

第310号住居跡柱穴覆土

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 腐化未進行B 多含 粘り有
R C 微粒
- 2 黒褐色 (10YR3/2) 腐化進行B 多含 斑文状
粘り強
- 3 褐色 (10YR4/4) B 腐化上主体 粘りやや弱
粘性有
- 4 暗褐色 (10YR3/3) 1層基本 B 不含 単一的

第310号住居跡貯蔵穴覆土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 微粒多含 R 多含
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 1層に準ずる R 不含
腐化進行B 多含
- 3 褐色 (10YR4/6) B 上体 壁・底面腐化層

第311号住居跡層上

- 9 暗褐色 (10YR3/3) B R 少含 粘り弱
家屋倒壊後の自然堆積
- 10 暗褐色 (10YR3/3) 2層のB 多含 粘り強
1層と3層の混合層
- 11 褐色 (10YR4/6) B 主体 土塊微
- 12 灰色 (10YR2/1) C・原根に露かれたカヤ状
植物層 3層のR 含
植物の堆土化したもの

第311号住居跡柱穴覆土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 火災住宅 R C 多含 柱の
腐化ではない 柱底 粘り無
- 2 褐色 (10YR4/4) B 上体 粘り粘性強 灰粘土
- 3 暗褐色 (10YR3/4) B 腐泥多 粘性強 粘床
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 3層よりB 腐泥多
粘り粘性有
- 5 暗褐色 (10YR3/3) 1層と同 混有物なし
粘りやや有

第311号住居跡カマド覆土

- a 赤褐色 (2.5YR4/6) R 上体 天井・壁の磨滅土
- b 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 R 少含

第311号住居跡貯蔵穴覆土

- 1 褐色 (10YR4/6) B 主体 土原根 (作層3層と同)
- 2 灰色 (10YR2/1) C・原根に露かれたカヤ状植物層 3層のR 含 (4層と同)
- 3 褐色 (10YR4/6) B 主体 土原根 (作層3層と同)
- 4 褐色 (10YR4/6) B 主体 壁・底の腐化層

第309号住居跡 (第358・359図)

第309号住居跡は、AC-17・18、AD-17・18グリッドから検出した。

住居跡の南東側はSJ-310・311による擾乱のために、中央はSK-392による擾乱のために、北側のコーナーはSK-373による擾乱のために、西側のコーナーはSK-413による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-49°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であったが、明確なカマドは検出できなかったが、床面の精査によって、北壁付近から焼土が検出できたので、カマドの底跡であると判断した。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北東壁で検出できた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。柱穴の覆土からは柱底も検出できた。

住居跡はSJ-274・277・301・302・310・311、SK-373・392・413と重複していた。重複関係はSJ-310・311、SK-373・392・413に切れ、SJ-301を切り、SJ-277・274とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕などを検出した。この中で、第358図2の環はP2から、3の甕は住居跡の中央から、他は覆土から検出した。

第310号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.0)			ACDF	2	赤褐色	10	赤彩
2	環	(13.0)			ACDEF	3	黒褐色	30	
3	甕	(16.0)			ACDEF	2	淡橙褐色	30	

第311号住居跡 (第359・361図)

第311号住居跡は、AD-17・18グリッドから検出した。

住居跡の西側はSE-116による擾乱のために、南側はSE-118、SK-390による擾乱のために、中央はSE-117、SK-391・448による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-36°-Wであった。規模は、主軸長5.4m、副軸長5.5m、深さ40cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は南側のコーナー付近から検出した。床面は明瞭で、壁溝は東側のコーナー以外で検出できた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。P2はSK-448によって

第310号住居跡 (第359・360図)

第310号住居跡は、AD-17-18グリッドから検出した。

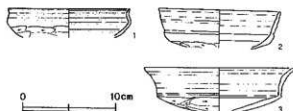
住居跡の西側は、SJ-311による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-10°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長2.7m、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は東側のコーナー付近から検出した。床面は明瞭で、壁溝は住居跡の確認範囲で検出した。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

住居跡はSJ-309・311・312、SE-110・118・125、SK-383・392と重複していた。重複関係はSJ-311、SE-110・118・125、SK-383・392に切れ、SJ-309を切り、SJ-312とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環を検出した。この中で第360図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第360図 第310号住居跡出土遺物



検出できなかった。

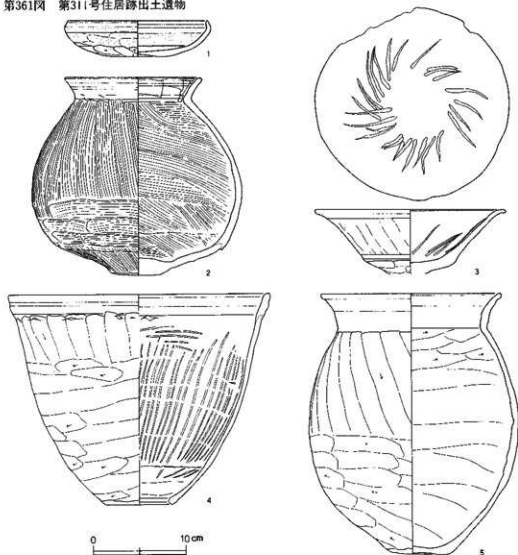
床面には炭化材が散乱しており、いわゆる火災住居と考えられる。

住居跡は、SJ-302・309・310・312、SE-116・117・118・126、SK-390・391・392・448と重複していた。重複関係は、SE-116・117・118・126、SK-390・391・392・448に切れ、SJ-302・309・310・312を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、瓶、高環などを検出した。

この中で、第361図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第361図 第311号住居跡出土遺物



第311号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(15.0)	3.8		ACDFK	2	赤褐色	70	赤彩
2	甕	(14.7)	21.0	5.3	ACDEFHK	3	赤褐色	90	
3	高坏	20.4			ACDEFHK	2	赤褐色	50	暗文
4	甕	(28.0)	22.3	(7.0)	ACDEFHK	3	橙褐色	40	
5	甕	(19.2)	27.5	5.8	ACDEFHK	3	淡灰褐色	90	

第312号住居跡 (第362・363図)

第312号住居跡は、AD-17・18、AE-18グリッドから検出した。

住居跡の北側は、SJ-310・311による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-50°-Wであった。規模は、主軸長不明、副軸長5.8m、深さ20cm程度であった。

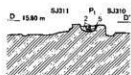
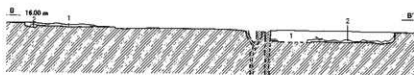
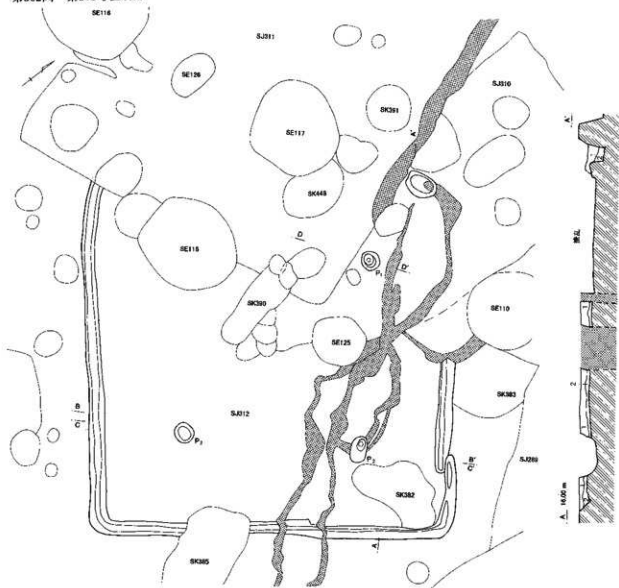
壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほ

ぼ全周していたと考えられた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。P4はSE-118によって確認できなかった。

住居跡はSJ-310・311、SE-117・118・125、SK-382・385と重複していた。重複関係はSJ-310・311、SE-117・118・125、SK-382・385に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器坏、甕、須恵器坏、土下などを検出した。この中で、第363図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。遺物中には、いわゆる甲斐型坏が認められた。

第362岡 第312号住居跡



第312号住居跡層土

- 1 暗褐色 (10YR2/3) 日本南化少含 R 多含 練り糎
- 2 暗褐色 (10YR2/4) R 弱混 全体に黄色染みびる 粘性强

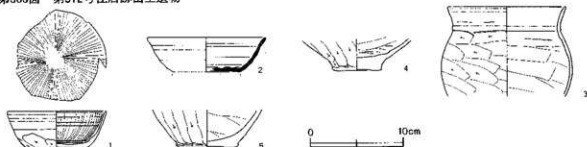
第312号住居跡貯蔵穴層土

- 1 暗褐色 (10YR2/4) 日強混 全体に黄色染みびる 粘性强
- 2 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 (溶化進行顕著) 少含 練り有 粘性極強

第312号住居跡柱穴層土

- 1 暗褐色 (10YR2/4) R 主体 やや硬文状 粘性強 充填土
- 2 暗褐色 (10YR2/3) R 半体 褐色 (単一) 的
- 3 褐色 (10YR4/4) R 主体 柱痕~崩落溶化したブロック
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 粘質 少量日強混 練り弱
- 5 褐色 (10YR4/6) R 半体 壁の腐敗化層

第363図 第312号住居跡出土遺物



第312号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(10.5)	3.9	6.4	ACDEF	2	橙褐色	70	中裂型環
2	須恵器環	(12.6)	3.6	(7.0)	ACFIK	1	灰白色	30	
3	壺	(12.6)			ACDEFK	3	赤褐色	40	
4	甗			(5.2)	ACDEFHK	3	暗赤褐色	10	
5	甗			(6.6)	ACDEFHK	3	黒褐色	10	

第313号住居跡 (第365図)

第313号住居跡は、AE-19グリッドから検出した。住居跡の中央はSK-407による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-47°-Eであった。規模は主軸長2.0m、副軸長3.2m、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、北東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。周辺を精査したが、柱穴を検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-315・330、SB-95、SK-407と重複していた。重複関係はSB-95、SK-407に切られ、SJ-315・330を切っていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第314号住居跡 (第364・365図)

第314号住居跡は、AD-19・20、AE-19・20グリッドから検出した。

第314号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器環蓋	(16.3)			ACFK	1	灰白色	30	

第330号住居跡 (第365・366図)

第330号住居跡は、AD・AE-19グリッドから検出した。

住居跡の南側はSJ-313による擾乱のために、東側の

住居跡の北側はSJ-317による擾乱のために、西側はSJ-330による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-60°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴も検出できなかった。P1~P4はSJ-317・330によって検出できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-315・317・330、SK-406と重複していた。重複関係は、SJ-317・330に切られ、SJ-315とは不明であった。

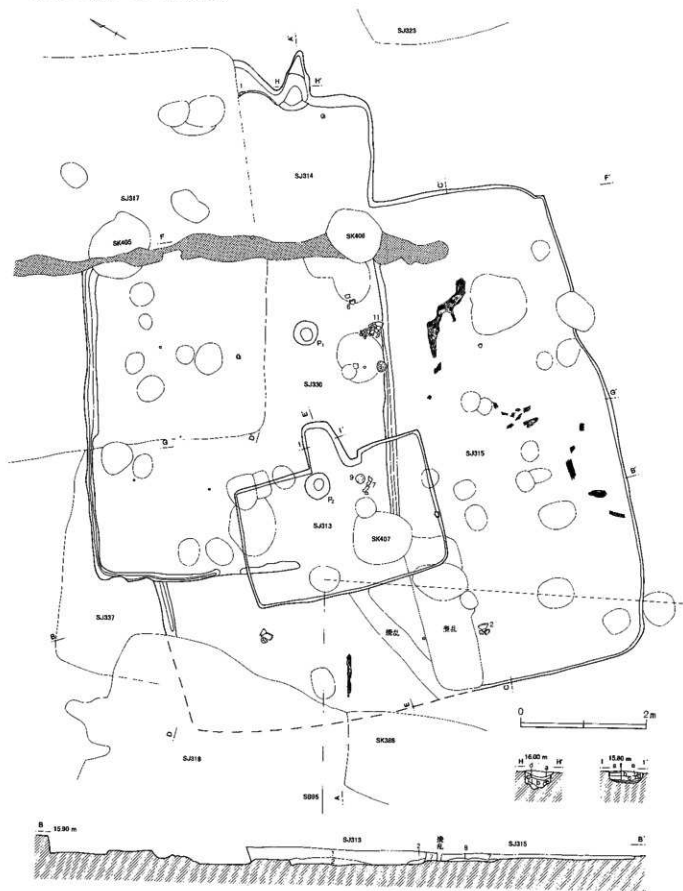
実測可能な遺物として、須恵器環蓋などを検出した。この中で、第364図1の須恵器環蓋はカマド左側から検出した。

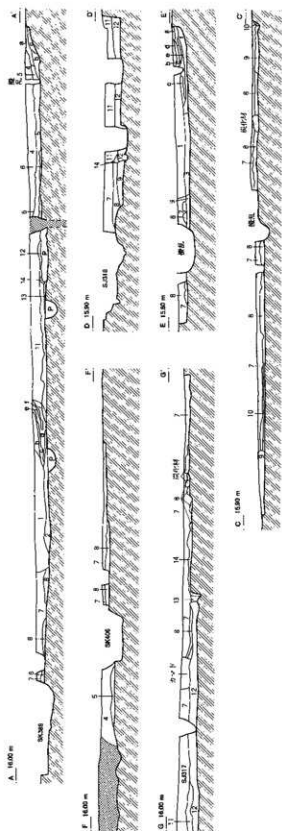
第364図 第314号住居跡出土遺物



コーナーはSK-406による擾乱のために、北側のコーナーはSK-405による擾乱のために、南側のコーナーはSK-407による擾乱のために検出できなかった。形

第365図 第313~315・330号住居跡





第313号住居跡礎土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) C R 若干穴 B 瓦入
- 2 褐色 (10YR1/4) B 多含 締りやや有 駄塚

第314号住居跡カマド礎土

- a 極暗赤褐色 (5YR2/2) C R 混入 締りやや有
- b 明赤褐色 (5YR5/6) R 多量含
- c 暗赤褐色 (5YR3/2) R やや多量含 締り弱
- d 赤褐色 (5YR4/6) C R 混入 やや締り有
- e 黒褐色 (7.5YR2/2) R C 混入 締り有
- f 暗褐色 (7.5YR3/3) 若干 R C 含
- g 黒褐色 (7.5YR3/2) C R 含 締りやや有

第314号住居跡礎土

- 4 黒褐色 (10YR3/2) R C やや多量含
- 5 褐色 (10YR1/4) B 多量含
- 6 黄褐色 (10YR5/6) B 多量含

第315号住居跡カマド礎土

- a 鈍赤褐色 (5YR5/4) R C 混入 締り有
- b 明赤褐色 (5YR5/6) R 多量含 R 混入 若干 R 含
- c 暗赤褐色 (5YR3/2) R C 含 締りやや弱
- d 明赤褐色 (7.5YR5/6) B 含
- e 赤褐色 (5YR4/6) R 含

第315号住居跡礎土

- 7 褐色 (10YR4/4) B R 含
- 8 鈍黄褐色 (10YR4/3) B 混入 若干 R 含
- 9 褐色 (10YR4/6) B 多量 締り有
- 10 黒褐色 (10YR1/1) C 多量含

第315号住居跡カマド部分礎土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) C R 若干穴 B 瓦入
- 2 褐色 (10YR1/4) B 多量含
- 3 黄褐色 (10YR5/6) B 主体

第330号住居跡礎土

- 11 灰黄褐色 (10YR6/2) R 混入 C 含
- 12 褐色 (10YR4/4) B 多量 締り有
- 13 黒褐色 (10YR1/1) C 主体
- 14 黄褐色 (10YR5/6) B 多量 締りやや弱

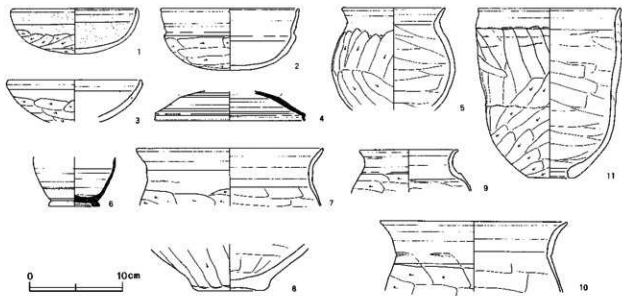
態は方形で、主軸方位はN-60°-Eであった。規模は主軸長5.0m、副軸長5.0m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も2本が明瞭に検出できた。

住居跡はSJ-313・314・315・316・317・337、SB-95、SK-405・406・407と重複していた。重複関係は、SJ-313に切られ、SJ-314・315・337を切り、SJ-317とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甕、須恵器環蓋、瓶、十五、白玉などを検出した。この中で、第366図6の須恵器瓶、7・9の甕、11の甕は南側の壁際から、他は覆土から検出した。

第366図 第330号住居跡出土遺物



第330号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	13.3	4.8		ACDF	3	赤褐色	70	赤彩
2	坏	(14.6)	6.5		ACDEF	2	橙褐色	40	
3	坏	(14.1)			ACDEFK	3	淡橙褐色	30	
4	須恵器 坏蓋	(16.0)			ACIK	1	青灰色	30	
5	壺	(11.0)			ACDEFHK	3	暗赤褐色	40	
6	須恵器 小形壺			5.4	ACDFK	1	青白色	20	
7	甕	(20.0)			ACDEFHK	3	赤褐色	10	
8	甕			(7.5)	ACDEFHK	2	橙褐色	10	
9	壺	(10.5)			ACDEF	3	暗赤褐色	30	
10	甕	(20.0)			ACDEF	3	暗赤褐色	10	
11	瓶	15.3	17.9	5.0	ACDEF	2	赤褐色	100	

第315号住居跡 (第365・367図)

第315号住居跡は、AE-19・20、AF-19グリッドから検出した。

住居跡の北西側はSJ-313・330・318による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-53°-Eであった。規模は主軸長7.8m、副軸長3.6m、深さ20cm程度であった。

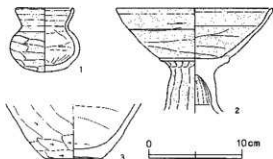
壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は北壁から検出した。柱穴は検出できなかった。

第315号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	埴	(6.0)	6.8		ACDFK	1	赤褐色	90	赤彩
2	高 坏	16.8			ACDEFHK	1	赤褐色	50	赤彩
3	甕			(6.0)	ACDEFHK	3	黒褐色	10	

床面には炭化材が散乱しており、いわゆる火災住居と考えられた。

第367図 第315号住居跡出土遺物



住居跡はSJ-313・316・317・318・330・337、SB-95、SK-388・405・406・407と重複していた。重複関係はSJ-313・318・330、SB-95、SK-388・405・406・407に切れ、SJ-314・317・337とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器甕、埴、高坏、土玉などを検出した。この中で、第367図2の高坏は住居跡の南西側から、他は覆土から検出した。

第316号住居跡 (第368・370図)

第316号住居跡はAD-AE-19・20グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-317による擾乱のために、南側はSJ-315・330による擾乱のために、中央はSK-404・405による擾乱のために検出できなかった。

形態は方形で、主軸方位はN-53°-Eであった。規模は、主軸長8.3m、副軸長3.7m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、北東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は北側のコーナーから検出した。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も1本が明瞭に検出できた。P1はSK-405に

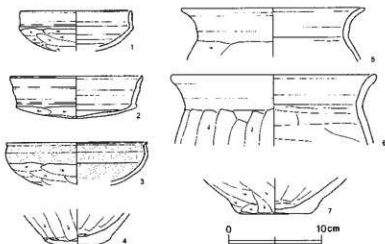
よって、P2はSJ-330によって、P3はピットによって検出できなかった。

住居跡は、SJ-314・315・317・330・337、SE-120・124、SK-403と重複していた。重複関係は、SJ-315・317・330、SE-120・124、SK-403に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器坏、甕、土玉、鉄滓などを検出した。

この中で、第368図5、7の甕はカマド右側から、6の甕は北側コーナー付近の壁溝内から、他は覆土から検出した。

第368図 第316号住居跡出土遺物



第316号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(11.8)			ACDEF	2	暗赤褐色	20	
2	坏	(14.0)	4.5		ACDEF	2	橙褐色	40	
3	坏	(14.9)			ACEFK	2	赤褐色	30	赤彩
4	甕			(7.0)	ACDFK	2	黒褐色	10	
5	甕	(19.6)			ACDEFHK	3	橙褐色	10	
6	甕	(22.0)			ACDEFHK	3	赤褐色	10	
7	甕			(7.6)	ACDEFHK	2	淡灰褐色	10	

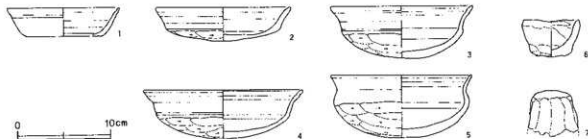
第317号住居跡 (第369・370図)

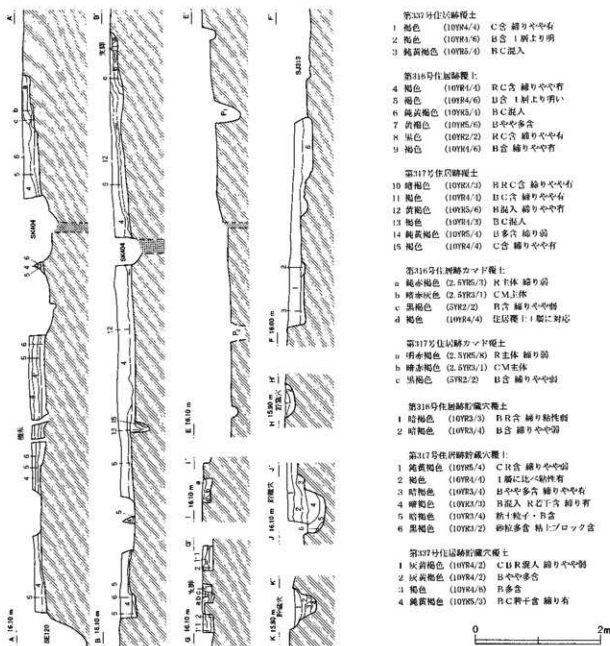
第317号住居跡は、AD-19・20、AE-19・20グリッド

下から検出した。

住居跡の北側のコーナーは、擾乱のために検出でき

第369図 第317号住居跡出土遺物





なかった。形態は方形で、主軸方位はN-55°-Eであった。規模は主軸長6.3m、副軸長6.1m、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、北東側からカマドが検出できた。カマド内からは、甕の破片が検出できた。貯蔵穴はカマドの左側から検出した。床面も明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も2本が明瞭に検出できた。床面を精査したが、P3は検出できなかった。

ピットに攪乱された可能性が考えられた。

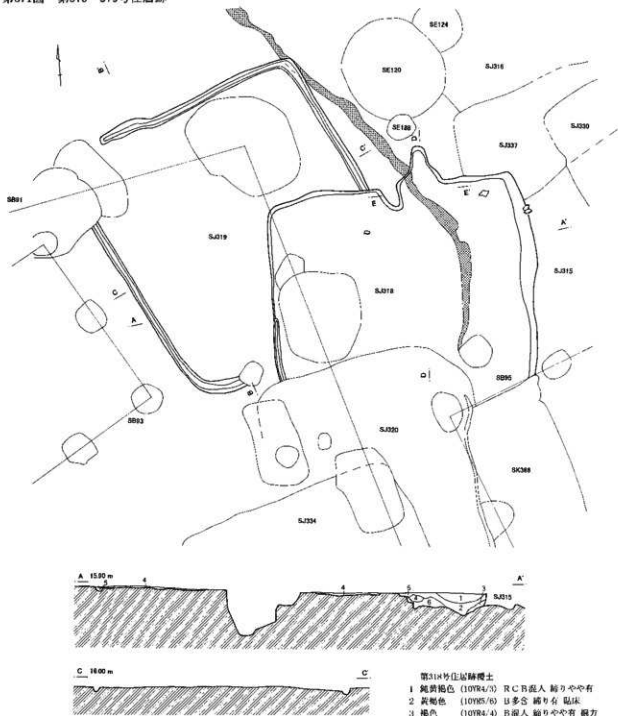
住居跡は、SJ-314・315・316・330・337、SK-404・405と重複していた。重複関係は、SK-404・405に切れ、SJ-314・316・330を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、支脚、手捏ね土器などを検出した。この中で、第369図2、3の環はカマド右側から、5の環はカマド内から、他は覆土から検出した。

第317号住居跡出土遺物觀察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.0)	3.0	(8.0)	ACDF	3	橙褐色	40	
2	環	(14.4)	3.6		ACDEF	3	淡橙褐色	40	
3	環	(15.1)	5.5		ACDEF	3	淡橙褐色	90	
4	環	(17.0)	5.2		ACDEF	3	淡橙褐色	70	
5	環	(15.0)	6.6		ACDEF	2	淡橙褐色	50	
6	手捏土器	(5.8)	3.9	3.1	ACDEFHK	3	淡灰褐色	70	
7	支脚				ACDEFHK	3	暗赤褐色		

第371図 第318・319号住居跡



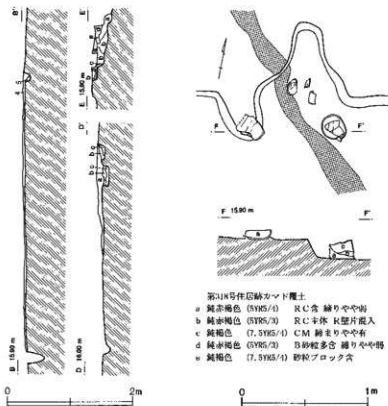
第337号住居跡 (第370図)

第337号住居跡は、AE-19グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-330による攪乱のために、西側はSJ-318による攪乱のために、南側はSJ-313による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-18°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ40cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。

第372図 第318号住居跡カマド



第318号住居跡 (第371~373図)

第318号住居跡は、AE-18・19グリッドから検出した。住居跡の南側はSJ-320による攪乱のために、中央はSB-91・95による攪乱のために検出できなかった。

形態は方形で、主軸方位はN-4°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長4.2m、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。カマド内からは甕の破片が検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は西壁で検出できた。柱穴は周辺を精査したが、検出することができな

貯蔵穴は北西コーナーから検出し、覆土内から甕が検出できた。床面は明瞭で、壁溝は北壁で検出できた。床面を精査したが、重複する住居の攪乱が著しくして、柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-313・315・316・317・318・330、SB-95と重複していた。重複関係は、SJ-317・318・330、SB-95に切れ、SJ-316を切り、SJ-313とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

かった。

住居跡は、SJ-315・319・320・337、SB-91・95、SK-388と重複していた。重複関係は、SJ-320、SB-91・95、SK-388に切れ、SJ-315・319・337を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、鉢、甕、壺、支脚、鉄釘などを検出した。この中で、第373図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第319号住居跡 (第373図)

第319号住居跡は、AE-18・19グリッドから検出した。

住居跡の南東側はSJ-318による攪乱のために、南壁と西側のコーナーは、SB-91による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-28°-Wであった。規模は主軸長4.6m、副軸長4.1m程度で

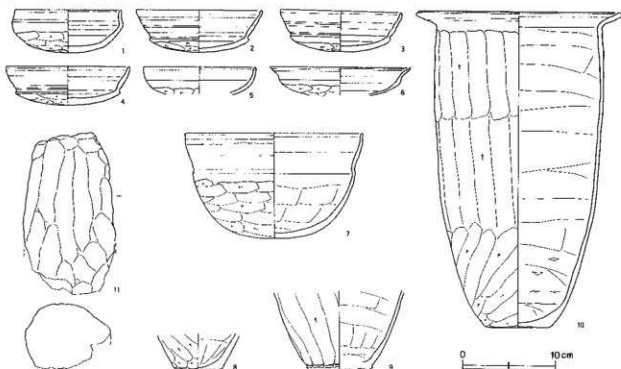
あった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。P1はSB-91の攪乱により、P2はSJ-318の攪乱により検出できなかったと考えられた。P3・P4は床面を精査したが、検出できなかった。

住居跡は、SJ-318、SB-91と重複していた。重複関係は、SJ-318、SB-91に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第373図 第318号住居跡出土遺物



第318号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	11.2	4.6		ACDEFHK	2	橙褐色	100	
2	環	(13.4)	4.5		ACDF	3	暗赤褐色	40	
3	環	(12.8)	4.3		ACDEF	3	赤褐色	50	
4	環	(13.0)	4.1		ACDEF	2	暗赤褐色	40	
5	環	(12.0)			ACDF	3	淡橙褐色	10	
6	環	(15.0)			ACDF	3	橙褐色	50	
7	鉢	(19.0)	11.1		ACDF	2	暗赤褐色	40	
8	甕			(5.1)	ACDF	3	淡橙褐色	10	
9	甕			(7.1)	ACDEFK	3	黒褐色	20	
10	甕	(22.0)	33.5	(7.1)	ACDEFK	3	暗赤褐色	80	
11	支脚				AC	4	淡褐色		

第322号住居跡 (第374・375図)

第322号住居跡は、AD-AE-20グリッドから検出した。

住居跡の南側は、SX-11による擾乱のために、北側はSD-103による擾乱のために、東側は擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-8°-Wであった。規模は主軸長5.8m、副軸長5.8m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴も4本が検出できた。

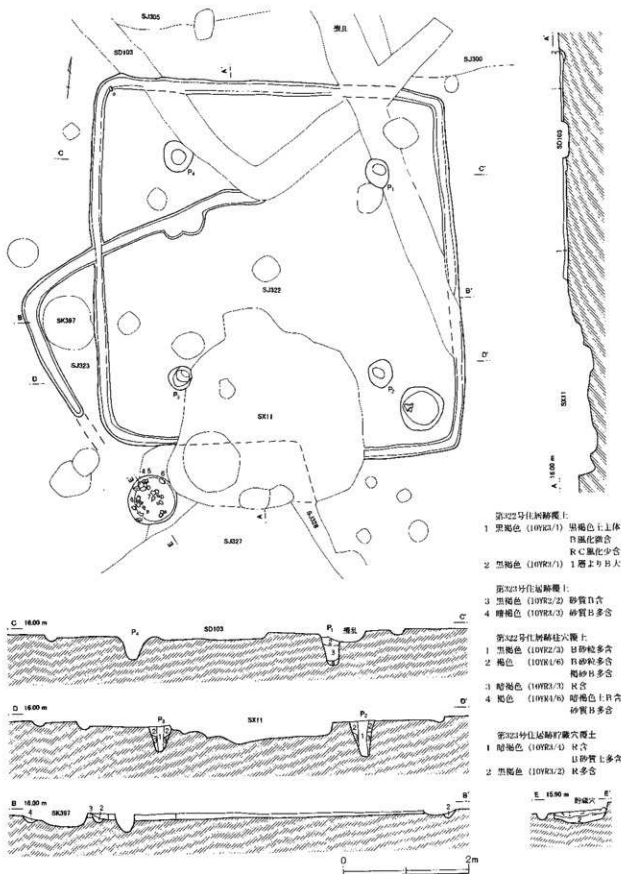
住居跡は、SJ-323-328、SD-103、SK-397、SX-11

と重複していた。重複関係は、SD-103、SK-397、SX-11に切れ、SJ-323とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器甕、白玉などを覆土中から検出した。

第374図 第322号住居跡出土遺物





第322号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕	(19.0)			ACDEFK	3	赤褐色	20	

第323号住居跡 (第375・376図)

第323号住居跡は、AD-AE-20グリッドから検出した。

住居跡の南東側は、SX-11による擾乱のために検出できなかった。

形態は方形で、主軸方位はN-9°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁はやや不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は南コーナーから検出した。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。柱穴は検出できなかった。P1~P4はSJ-322、SX-11等によって擾乱

を受けていた。

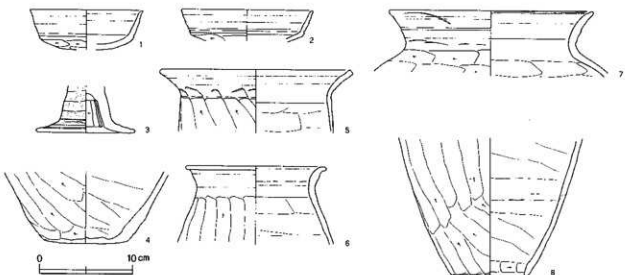
覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-322・328、SD-103、SK-397、SX-11と重複していた。重複関係は、SD-103、SK-397、SX-11に切られ、SJ-322とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、甌、高環、白玉、石製模造品などを検出した。

この中で、第376図4~7の甕は貯蔵穴内から、他は覆土から検出した。

第376図 第323号住居跡出土遺物



第323号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.0)			ACDEF	3	淡褐色	40	
2	環	(14.0)			ACDEF	3	淡橙褐色	20	
3	高環			(10.6)	ACDEF	2	赤褐色	20	赤彩
4	甕		(9.0)		ACDEF	3	暗赤褐色	20	
5	甕	(20.6)			ACDEF	3	淡灰褐色	10	
6	甕	(15.0)			ACDEFK	2	暗赤褐色	20	
7	甕	(21.8)			ACDF	3	赤褐色	20	
8	甌		(8.2)		ACDEFK	3	赤褐色	20	

第324号住居跡 (第377図)

第324号住居跡は、AE-17・18グリッドから検出した。

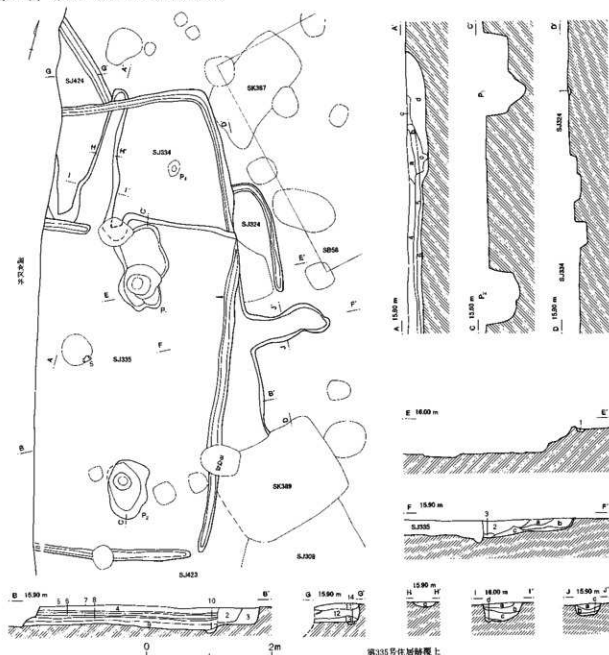
住居跡の西側はSJ-334・335による擾乱のために、南側はSK-389による擾乱のために検出できなかった。

形態は方形で、主軸方位はN-25°-Wであった。

規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ5cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴

第377図 第324・334・335・424号住居跡



第324号住居跡跡土

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 赤褐色土主体 Bやや未風化多含

第334号住居跡跡土

- 2 黒褐色 (10YR3/1) 黒褐色土主体 B風化多含 R風化多含 C風化少含
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 1層より目大 Bやや風化多含

第334号住居跡カマド礎土

- a 黒褐色 (10YR3/2) 天井崩落土 B風化少含 R風化多含 C風化少含
- b 黒褐色 (10YR3/2) a層より R少含 B大多含
- c 黒褐色 (10YR3/2) a層より R少含 C多含

第424号住居跡跡土

- 11 黒褐色 (10YR3/1) B風化少含 R未風化少含
- 12 黒褐色 (10YR3/1) B風化多含 R風化多含
- 13 黒褐色 (10YR3/1) B風化多含 R風化多含 C風化少含
- 14 黒褐色 (10YR3/1) B未風化多含

第335号住居跡礎土

- 4 黒褐色 (10YR2/2) B風化多含 R風化少含
- 5 黒褐色 (10YR4/6) B未風化多含
- 6 黒褐色 (10YR2/2) 1層より B R少含
- 7 黒褐色 (10YR4/6) 2層より B小さく多含
- 8 黒褐色 (10YR2/2) 1層に比へややC多含
- 9 黒褐色 (10YR2/2) 1層に比へややB多含
- 10 黒褐色 (10YR2/2) 1層に比へややB多含

第335号住居跡カマド礎土

- a 黒褐色 (10YR2/2) Rやや未風化多含 C風化多 天井崩落層土層
- b 黒褐色 (10YR2/2) R風化多含 C風化少含 坪造内法流入土層
- c 黒褐色 (10YR2/2) Rやや未風化多含 C風化多含 内法崩壊土層
- d 黒褐色 (10YR2/2) R風化多含 C風化多含 内法流入土層

第335号住居跡カマド付近礎土

- 1 褐色 (10YR2/3) R風化少含 C風化少含 B風化少含
- 2 褐色 (10YR2/3) R未風化多含 C風化少含 B風化少含
- 3 褐色 (10YR2/3) a層より R多含 C少含 B未風化

も検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴も検出できなかった。

わずかに残された覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-334・335、SK-389と重複していた。重複関係は、SJ-334・335、SK-389に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第334号住居跡 (第377・378図)

第334号住居跡は、AE-17・18、AF-17・18グリッドから検出した。

住居跡の西側は調査区外のために、南側はSJ-335、SK-389による掘乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-20°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ30cm程度であった。

第334号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.3)			ACDEF	2	橙褐色	30	
2	甕	(22.0)			ACDEF	3	淡灰褐色	10	

第335号住居跡 (第377・379図)

第335号住居跡は、AE-17・18、AF-17グリッドから検出した。

住居跡の西側は調査区外のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-15°-Wであった。規模は主軸長5.5m、副軸長不明、深さ40cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北壁の一部以外で検出できた。

柱穴も2本が明瞭に検出できた。P3・P4は調査区外で検出できなかった。

住居跡は、SJ-324・334・423・424、SK-389と重複していた。重複関係は、SJ-334・423を切り、SJ-324とは不明であった。

第335号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(11.0)			ACDF	3	淡灰褐色	20	
2	環	(14.0)	3.1		ACDF	3	淡灰褐色	30	
3	甕	(20.0)			ACDEF	3	淡灰褐色	10	
4	甕			7.0	ACDEFK	3	淡橙褐色	10	
5	支脚				ACF	2	淡橙褐色		

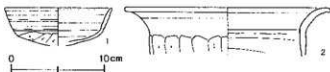
壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北側のコーナーで検出できた。柱穴は1本検出できた。

P1に該当する位置からピットが検出できたが、覆上の状況から柱穴ではないと判断した。

住居跡は、SJ-324・335・424、SK-387・389と重複していた。重複関係は、SJ-335に切れ、SJ-424を切り、SJ-324とは不明であった。

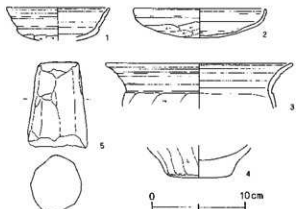
実測可能な遺物として、土師器環、甕などを検出した。この中で、第378図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

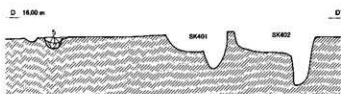
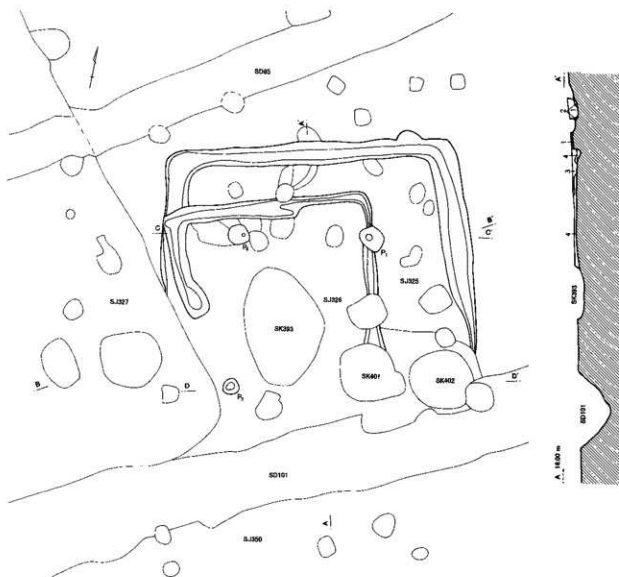
第378図 第334号住居跡出土遺物



実測可能な遺物として、土師器環、甕、支脚などを検出した。この中で、第379図5の支脚は住居跡の中央から、2の環、4の甕はカマド周辺から、他は覆土から検出した。

第379図 第335号住居跡出土遺物





第325号住居跡層土:

- 1 黒褐色 (10YR2/2) R微単 溶化進行B・暗褐色土含 粘性強
- 2 褐色 (10YR4/6) B上体 壁・床の溶軟化層

第325号住居跡柱穴層土:

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 溶化進行B多含 粘り粘性有 无灰土
- 2 暗褐色 (10YR2/4) 1層に準ず B上体的溶強 粘性強
- 3 暗褐色 (10YR3/2) 未溶化B R C多含 粘り弱 柱痕が崩壊土
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 粘り無 柱痕
- 5 褐色 (10YR4/6) B上体 壁の溶軟化層

第326号住居跡層土:

- 3 暗褐色 (10YR3/3) R微中含 粘質土不含
- 4 褐色 (10YR4/6) B上体 壁の溶軟化層

第424号住居跡 (第377図)

第424号住居跡は、AE-17グリッドから検出した。住居跡の西側は調査区外のために、南側はSJ-334・335による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-17°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ30cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面はやや明瞭で、壁溝は、住居跡の検出範囲で確認できた。柱穴は検出できなかった。

住居跡は、SJ-334・335と重複していた。重複関係は、SJ-334・335に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第325号住居跡 (第380図)

第325号住居跡は、AE・AF-21グリッドから検出した。住居跡の中央はSJ-326による擾乱のために、南側はSK-393・401・402、SD-101による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-15°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長5.0m、深さ15cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は南壁以外で検出できた。柱穴も3本が明瞭に検出できた。P2はSK-401によって検出できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

第326号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	杯	(13.0)			ACDF	3	橙褐色	30	
2	杯	(13.0)			ACDEF	3	淡橙褐色	20	
3	須恵器 杯			(8.8)	ACFIK	1	灰褐色	40	

第328号住居跡 (第382図)

第328号住居跡は、AE-20グリッドから検出した。住居跡の北側は、SX-11による擾乱のために、南側はSJ-327による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-15°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、東側からカマドが検出できた。貯

住居跡は、SJ-326・327、SD-101、SK-393・401・402と重複していた。重複関係は、SJ-326・327、SD-101、SK-393・401・402に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第326号住居跡 (第380・381図)

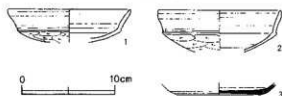
第326号住居跡は、AE・AF-21グリッドから検出した。住居跡の南側は、SK-393・401・402、SD-101による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-18°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長3.2m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は住居跡の検出範囲で確認できた。柱穴は検出できなかった。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-325・327、SD-101、SK-393・401と重複していた。重複関係は、SJ-327、SD-101、SK-393・401に切れ、SJ-325を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器 杯、須恵器 杯などを検出した。この中で、第381図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第381図 第326号住居跡出土遺物

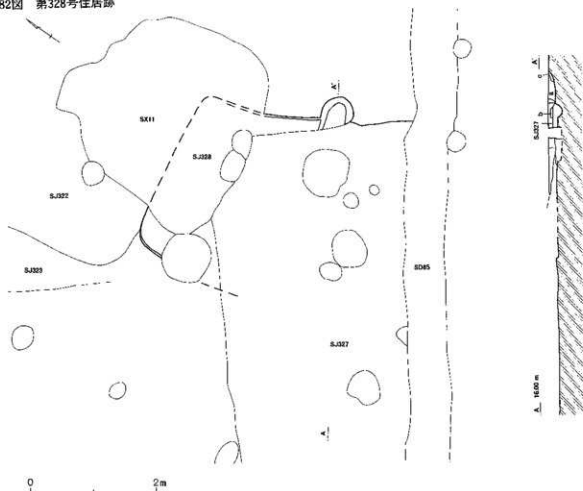


蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴は、擾乱が著しく検出できなかった。

住居跡は、SJ-322・323・327、SX-11と重複していた。重複関係は、SJ-327、SX-11に切れ、SJ-322・323とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第382図 第328号住居跡



第328号住居跡概略：
1 粉砂土 (10923/3) R 少量 溶化口・暗褐色粘質土多含 録り強

第328号住居跡カマド概略：
a 桃褐色 (10923/3) 住居層上1層基本 小型ブロックR多含
b 赤褐色 (2.57R1/6) R主体 カマド天井崩落土
c 黄色 (10914/6) 柱主体 壁の溶軟化跡

第327号住居跡 (第383・384図)

第327号住居跡は、AE-20・21、AF-20・21グリッドから検出した。

住居跡の南側はSD-101による攪乱のために、北側はSX-11による攪乱のために、西側はSX-12による攪乱のために、中央はSD-85による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-38°Wであった。規模は主軸長8.2m、副軸長8.3m、深さ20cm程度であった。

壁は明瞭であり、南側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は、西側のコーナーで一部途切れるものの、ほぼ全周していたと考えられた。

柱穴はP1からP8までの8本が検出できた。各

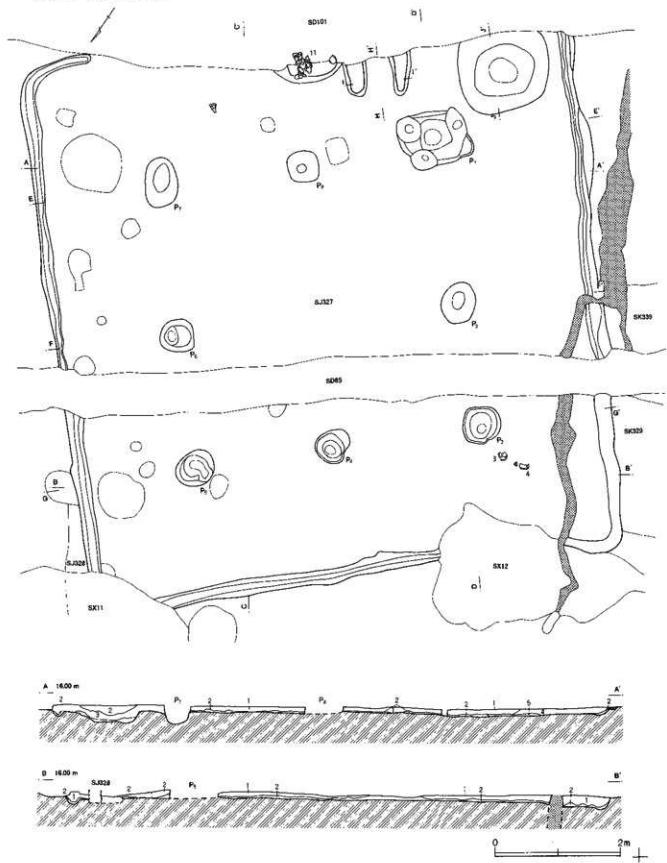
コーナーから検出した柱穴、P1、P3、P5、P7の間からも、P2、P4、P6、P8が検出できた。

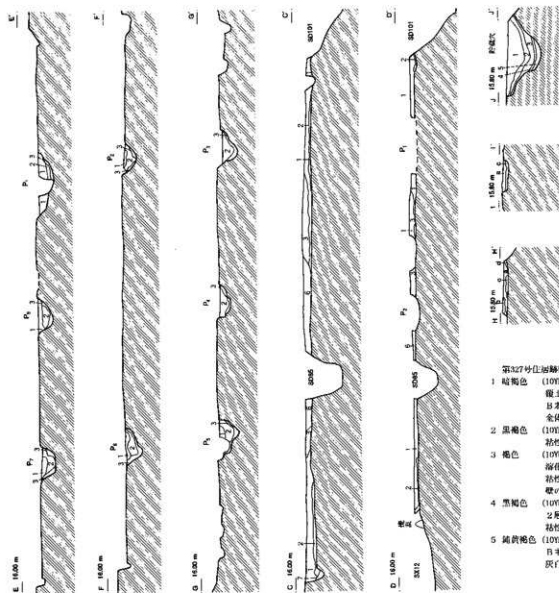
柱穴の配置を見てみると、P2、P6は、柱穴の間ではなく、その位置がやや北西側に偏っていた。またP8も、P1とP7の線上ではなく、その位置がやや北西に偏っていた。深さは一般的な柱穴と比べると、P1からP8まで全てがかなり浅かった。柱穴覆土は、堆積状況については柱痕などは検出できなかったが、組成については他の住居跡の柱穴と同様であった。

周辺にも、P2、P4、P6、P8が属するような住居跡や獨立柱建物跡が検出できなかったので、当該住居跡の柱穴と判断した。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

第383号 第327号住居跡





第327号住居跡横断土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) 未溶化土多量 R 少 微含
- 2 褐色 (10YR4/5) R 主体 壁・底の溶軟化層
- 3 暗褐色 (10YR3/2) 1層基本 土多量 R 少 粘性増
- 4 暗褐色 (10YR3/2) 1層基本 R 多量 粘性弱
- 5 暗褐色 (10YR3/2) 1層基本 R 少 土 R 多量 カマド跡の上に居る
- 6 暗褐色 (10YR3/2) 1層基本 未溶化土多量 R 微含 ほとんど1層に同じ
- 7 黄褐色 (10YR4/3) 1層に準ずる R 弱く全体に溶展 粘性強

第327号住居跡柱穴横断土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) 溶化進行目多量 粘性強
- 2 暗褐色 (10YR3/2) 粘性強い褐色土層 層 粘り強
- 3 褐色 (10YR4/6) R 主体 壁・底の溶軟化層

第327号住居跡カマド跡土

- a 黒褐色 (10YR3/2) M層 大型土・土多量 粘り弱
- b 赤褐色 (2.5YR4/6) R 主体
- c 暗褐色 (10YR3/4) 粘性強い褐色土と R 主体 カマド使用時横断土

第327号住居跡貯蔵穴横断土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 壁土2層に準じる
日本溶化多穴
全体が土質に構成
- 2 黒褐色 (10YR2/3) 粘性強い褐色土層一層
- 3 褐色 (10YR4/4) 溶化進行目主体
粘性強
壁の溶展層
- 4 黒褐色 (10YR2/3) 2層と同じ
粘性強い褐色土層一層
- 5 黄褐色 (10YR4/3) 日本体
灰白色粘土化

住居跡は、SJ-325・326・328・329・350、SD-85・101、SK-399・400、SX-10・11と重複していた。重複関係は、SD-85・101、SK-399・400、SX-10・11に切られ SJ-328・329を切っていた。

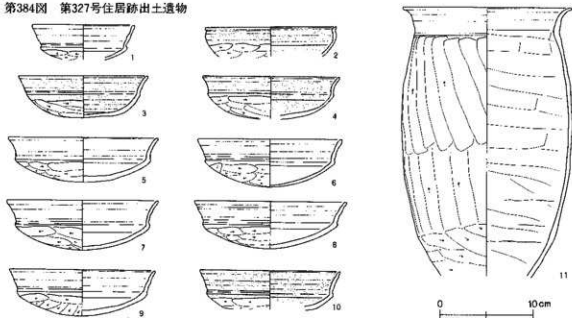
また、床面上と覆上からは、噴砂による攪乱が認め

られた。

実測可能な遺物として土師器環、甕などを検出した。

この中で、第384図3、4の環は西側コーナー付近から、9の環はP3から、11の甕はカマド左側から、他は覆土から検出した。

第384図 第327号住居跡出土遺物



第327号住居跡出土遺物観察表

№	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(11.0)			ACEF	3	淡橙褐色	10	
2	坏	(14.0)			ACF	2	赤褐色	10	赤彩
3	坏	13.8	4.4		ACEFK	2	赤褐色	70	赤彩
4	坏	(14.6)			ACDEFK	2	赤褐色	50	赤彩
5	坏	(16.0)	4.7		ACEF	3	淡橙褐色	40	
6	坏	(15.4)	5.0		ACEF	3	淡褐色	50	
7	坏	(16.2)	5.3		ACF	3	淡褐色	50	
8	坏	(16.2)	5.0		ACF	3	淡褐色	50	
9	坏	15.6	4.9		ACF	3	淡褐色	60	
10	坏	(15.0)			ACF	2	赤褐色	40	赤彩
11	甕	(18.0)			ACDEFHK	3	赤褐色	40	

第329号住居跡 (第385・386図)

第329号住居跡は、AE・AF・20グリッドから検出した。住居跡の東側はSJ-327、SD-85による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-23°-Wであった。規模は、主軸長2.1m、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。

住居跡の床面と周辺を精査したが、カマドや貯蔵穴の痕跡は見つからず、焼土なども検出できなかった。SJ-327によって攪乱を受けた東側にあったと考えられた。

床面は明瞭で、壁溝は南側のコーナーで検出できた。柱穴は検出できなかった。

床面の精査によっても柱穴は検出できなかった。当該住居跡のような小形の住居跡では、明瞭な痕跡が残るような構造の柱を用いていない可能性が考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-327、SD-85と重複していた。重複関係

第385図 第329号住居跡出土遺物



第329号住居跡出土遺物観察表

№	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	坏	(11.2)	3.4		ACDEF	3	淡灰褐色	40	

は、SJ-327、SD-85に切られていた。

実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。第385図に示した遺物は、覆土中から検出した。

当該住居跡周辺では、噴砂の痕跡が北西方向から南東方向に向けて、広範囲に検出できた。SJ-329の床面の検出範囲では、噴砂との重複は認められなかったが、住居跡の拡がり考えると、当該住居跡と噴砂との重複が想定できた。

調査区内での、住居跡と噴砂との重複では、全て噴砂の方が住居跡よりも新しかったので、当該住居跡も噴砂に切られていたと想定できた。

第331号住居跡 (第387・388図)

第331号住居跡は、AD-22グリッドから検出した。

住居跡の東側は、調査区外のために、南側はSD-105による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN—26°—Wであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁はやや明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。カマドは調査区外の住居跡北壁にあったと考えられた。貯蔵穴も同様に、調査区外の、住居跡北壁の北東側コーナー付近にあった可能性が考えられた。

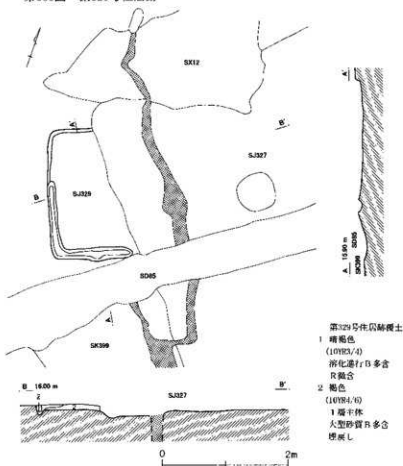
床面はやや明瞭で、壁溝は、住居跡の検出範囲で確認できた。

柱穴も2本が明瞭に検出できた。P1・P2は調査区外で検出できなかった。柱穴は深く、覆土からは柱痕も検出できた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を第331号住居跡出土遺物観察表

№	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎上	焼成	色調	残存率/%	備考
1	須恵器環	(9.8)			ACF	1	灰白色	30	
2	甕			(5.0)	ACDF	3	黒褐色	10	

第386図 第329号住居跡



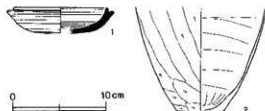
示していた。

住居跡は、SJ-332、SB-94、SD-105と重複していた。重複関係は、SB-94、SD-105に切れられ、SJ-332とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器甕の胴下半部、須恵器環身などを検出した。

この中で、第387図に示した遺物はいずれも微細な破片で、全て覆土中から検出した。

第387図 第331号住居跡出土遺物



第332号住居跡 (第388号)

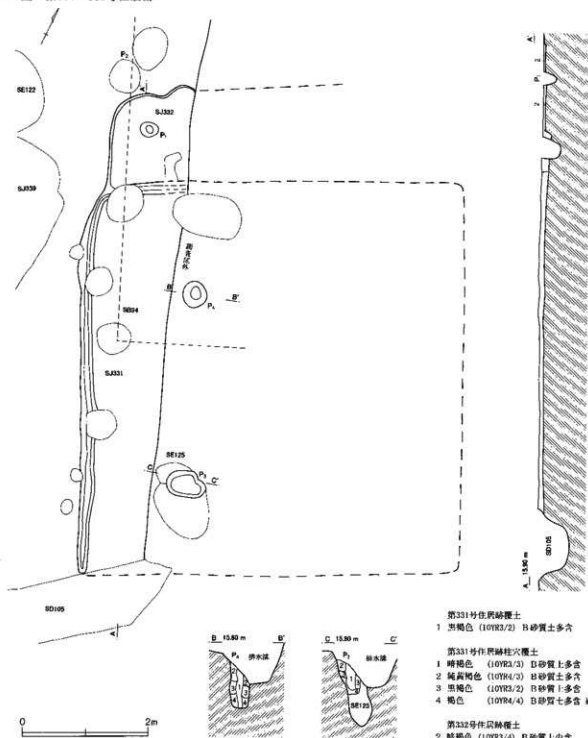
第332号住居跡は、AD-22グリッドから検出した。

住居跡の東側は調査区外のために検出できなかった。

形態は方形で、主軸方位はN-26°-Wであった。規模は主軸長1.4m、副軸長不明、深さ5cm程度であった。

壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴

第388図 第331・332号住居跡

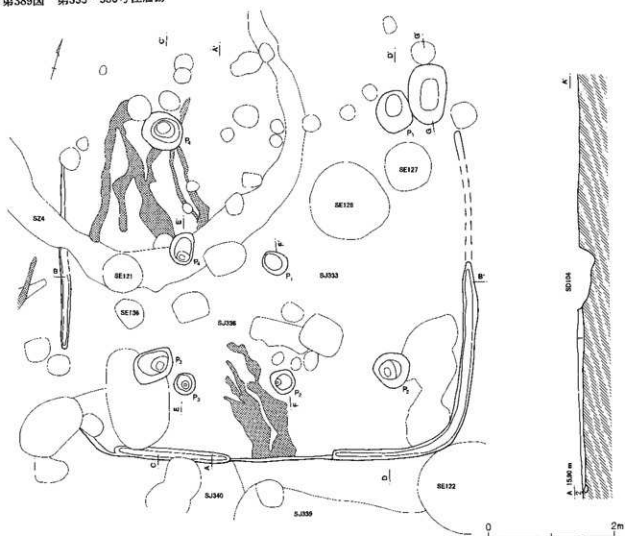


も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝は検出できなかった。柱穴も検出できなかった。

P 1～P 4は調査区外にあると考えられた。

住居跡は、SJ-331、SB-94と重複していた。重複関係は、SB-94に切られ、SJ-331とは不明であった。

災害可能な遺物は、検出できなかった。



第333号住居跡層土

1 黑褐色 (10YR3/1) R 含

第333号住居跡柱穴層土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) K 砂質土含
- 2 褐色 (10YR4/4) B 砂質土多含砂質
- 3 黑褐色 (10YR2/3) B 砂質土多含粘性土中
- 4 褐色 (10YR4/4) B 砂質土多含砂質

第333号住居跡野藏穴層土

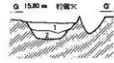
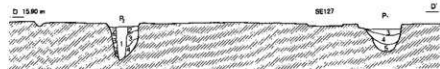
- 1 黑褐色 (10YR3/2) K 含 B 砂質多含
- 2 暗褐色 (10YR3/4) B 砂質多含

第336号住居跡柱穴層土

- 1 黑褐色 (10YR2/3) 粘性土中
- 2 褐色 (10YR4/4) B 多含砂質
- 3 黑褐色 (10YR3/1) B 砂質多含粘性土中

第336号住居跡野藏穴層土

- 1 黑褐色 (10YR3/2) K 含 B 砂質多含
- 2 暗褐色 (10YR3/4) B 砂質多含



第333号住居跡 (第389図)

第333号住居跡は、AC-21・22、AD-21・22グリッドから検出した。

住居跡の北側はSD-104による擾乱のために、中央はSE-127・128による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-14°-Wであった。規模は主軸長不明、副軸長6.1m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は北壁以外の一部でそれぞれ検出できた。柱穴は4本が明瞭に検出できた。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡はSJ-336・340、SZ-4、SE-121・122・127・128・136と重複していた。重複関係はSZ-4、SE-121・122・127・128・136に切れ、SJ-340を切り、SJ-336とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第336号住居跡 (第389図)

第336号住居跡は、AC-21・22、AD-21・22グリッドから検出した。

住居跡の大部分は削平され、柱穴のみしか検出できなかった。形態、主軸方位、規模は明らかにできなかった。壁は不明瞭で、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面も不明瞭で、壁溝は検出できなかった。柱穴は4本が明瞭に検出できた。遺構は明瞭ではなかったが、柱穴の覆土から住居跡であると判断した。

住居跡は、SJ-333・340、SZ-4、SE-121・128・136と重複していた。重複関係は全て明らかにできなかった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第338号住居跡 (第390・392図)

第338号住居跡は、AD-21・22、AE-21・22グリッドから検出した。

住居跡の大部分は、SJ-344との入れ子状の重複によって検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-17°-Wであった。規模は主軸長8.4m、副軸長8.5m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北側からSJ-344と重複してカマドが検出できた。貯蔵穴は検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。

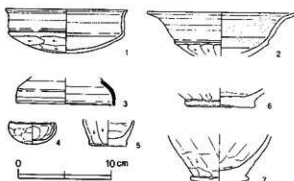
柱穴は、周辺の床面を精査しか検出することができなかった。SJ-344と重複していたと考えられた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-339・341・343・344・351・352、SB-97・98、SD-101・105、SE-129・130、SK-411と重複していた。重複関係は、SJ-344、SB-97・98、SD-101・105、SE-129・130、SK-411に切れ、SJ-339・341を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、高杯、手捏ね土器、須恵器環、白玉、鉄滓などを検出した。この中で、第390図に示した遺物は、全て覆土中から検出し

第390図 第338号住居跡出土遺物



第338号住居跡出土遺物観察表

No	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.0)	4.7		ACDEF	3	赤褐色	40	
2	高杯	(16.0)			ACDFK	2	赤褐色	10	赤彩
3	須恵器環	(10.4)			ACF	1	青白色	10	
4	手捏ね土器	(4.8)	2.3		ACF	3	淡灰褐色	40	
5	手捏ね土器			4.0	ACDEF	3	淡灰褐色	50	
6	甕			(7.4)	ACDFK	2	黒褐色	10	
7	甕			(6.3)	ACDFK	2	淡橙褐色	10	木葉灰

た。

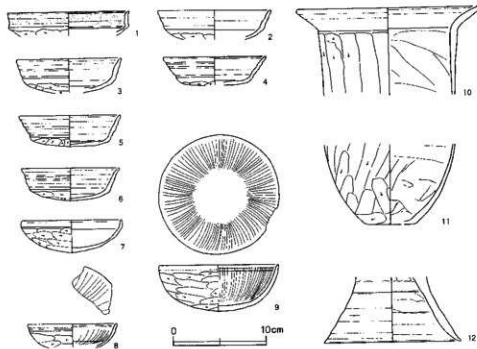
SJ-338は、SJ-344と入れ子状に重複しており、調査時には、出土した遺物をSJ-338に帰属するものと、SJ-344に帰属するものに、明瞭に分離して取り上げることができなかった。

従ってここでは遺物を瞥見して、時期差を目安にして、二つの住居跡に帰属するものを分離した。

出土遺物について見てみると、1の環は口辺部が明瞭に立ち上がり、口唇部がやや外反していた。口径も他の環類に比べて大きかった。胎土に赤色粒子と砂粒を多量に含んでおり、赤彩は施されていないかった。2の高平環は内面が赤彩され、胎土には赤色粒子と砂粒を多少含んでいた。3の須恵器環は、胎土はやや緻密で、器肉は薄く作り上げられ、欠失部寸前で、わずかに器形が膨らむ痕跡が認められた。

4、5の手捏ね土器も、胎土に砂粒を多く含んでいた。6、7の甕の底部には、いずれも木葉痕が認められた。やはり胎土には砂粒が多く含まれていた。

第391図 第344号住居跡出土遺物



第344号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.0)			ACF	2	赤褐色	10	赤彩
2	環	(12.0)			ACDF	3	淡灰褐色	20	
3	環	(11.2)			ACDF	3	黒褐色	20	
4	環	(11.0)			ACD	3	黒色	30	
5	環	(10.8)	3.3		ACDF	3	淡褐色	60	
6	環	10.4	3.4		ACDEF	3	橙褐色	90	
7	環	(10.6)	3.4		ACF	3	褐色	40	
8	環	(9.6)			ACDF	3	橙褐色	10	暗文
9	環	12.9	4.9		ACDEF	3	橙褐色	100	暗文
10	甕	(19.5)			ACFK	3	淡褐色	10	
11	甕			(5.4)	ACDEF	3	暗赤褐色	20	
12	台付甕			(14.6)	ACDF	3	黒褐色	40	

第344号住居跡 (第391・392図)

第344号住居跡は、AD-21・22、AE-21・22グリッドから検出した。

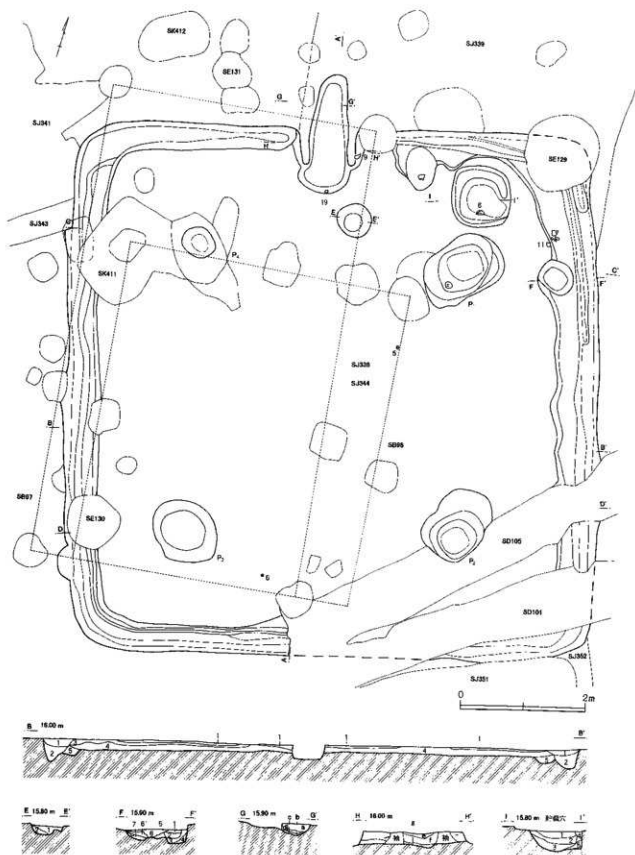
住居跡の南東側は、SD-101・105による攪乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-17°-Wであった。

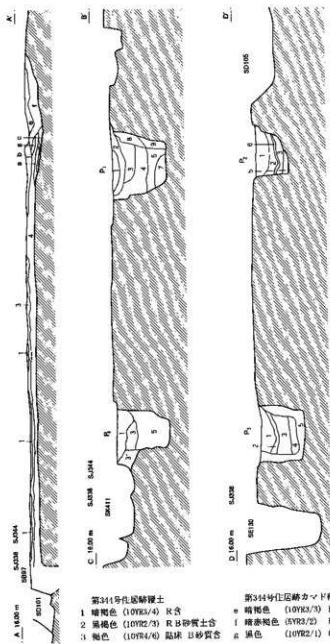
壁は明瞭であり、北側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、壁溝は全周していた。柱穴も4本が明瞭に検出できた。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-338・339・341・343・351・352、SB

第392図 第338・344号住居跡





-97・98, SD-101・105, SE-129・130, SK-411と重複していた。重複関係は、SB-97・98, SD-101・105, SE-129・130, SK-411に切れ、SJ-338・339・341を切り、SJ-351とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕、台付甕などを検出した。この中で第391図7の環、10の甕はP 1から、12の台付甕はカマド前から、9の環はカマド右袖付近から、6の環は貯蔵穴内から、11の甕は北側コー

第338号住居跡層土

- 4 暗褐色 (10YR3/2) R 多含
- 5 黒色 (10YR1/1) C 多含

第338号住居跡カマド層土

- a 暗褐色 (10YR2/2) R 多含
- b 黒色 (10YR2/1) C 多含
- c 暗褐色 (10YR3/1) C 含
- d 黄色 (10YR5/6) R 含

第338号住居跡柱穴層土 P-1~4

- 1 褐色 (10YR4/1) R 土含 餅りやや有
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/4) B 均 土含 C 混入 餅り粘性やや有
- 3 鈍黄褐色 (10YR4/3) きめ細かい B 土含 餅りやや有
- 3' B やや多含
- 4 灰黄褐色 (10YR1/2) B 土含 餅りやや有
- 5 明黄褐色 (10YR6/6) B 多含 餅り粘性有 餅り方塊土
- 6 赤褐色 (10YR2/1) C 層
- 7 灰褐色 (10YR5/6) B 多含 5層より餅る
- 8 明黄褐色 (10YR6/6) B 多含 餅り有
- 9 黄褐色 (10YR5/6) B 土含 8層よりブロック小さい

第338号住居跡柱穴層土 P-5

- 1 明赤褐色 (2.5YR5/6) R 土含
- 2 黄褐色 (10YR5/6) B R 土含

第338号住居跡柱穴層土 P-6

- 1 鈍黄褐色 (10YR5/4) 若干 R 土含 B 土含
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/3) R 土含
- 3 黄褐色 (10YR5/6) B 土含 餅りやや有
- 4 黄褐色 (10YR5/6) B 混入
- 5 鈍黄褐色 (10YR5/4) B やや多含 (SJ-344粘球)
- 6 褐色 (10YR4/4) B C 混入 餅りやや有
- 7 鈍黄褐色 (10YR4/3) 6層に比べブロック多含

第338号住居跡貯蔵穴層土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) R C 土含 餅りやや有
- 2 暗褐色 (10YR2/4) 1層より R 多含 餅りやや有
- 3 褐色 (10YR4/4) B 土含 餅りやや有
- 4 暗褐色 (10YR3/4) B 土含
- 5 黄褐色 (10YR5/6) B 土上層

ナー付近から、他は覆土から検出した。

SJ-344は、SJ-338と入れ子状に重複しており、調査時には、出土した遺物を SJ-338に帰属するものと、SJ-344に帰属するものに、明確に分離して取り上げることが

できなかった。

従ってここでは遺物を瞥見して、時期差を目安にして、二つの住居跡に帰属するものを分離した。

出土遺物について見てみると、1の環は、内面と外面口辺部に赤彩が施されており、口唇部内面には沈線が認められた。

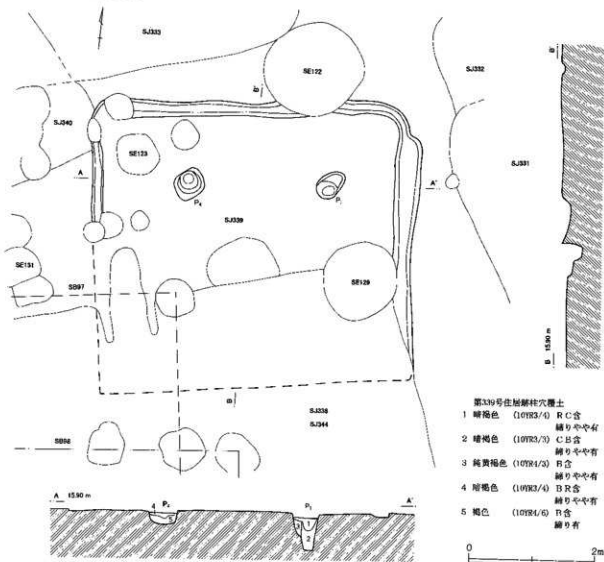
2の模倣環は、淡褐色で、内外面ともに口辺部と底部の境界が不鮮明であった。3~6は有段口辺の環で、

3はやや大振りであるが、4-6は小振りで、4・5では、底部内面外周に、指ヨコナデによる周回状の凹みが認められた。また6では、この凹みがやや立ち上がっており、底部と口辺部の境界が緩やかな斜面となり、やや不明瞭になっていた。底部外面の調整では、最外周はヘラケズリされておらず、ナデ調整の面が周回状に残されていた。色調については、4は黒色を呈し、5は淡褐色、6は橙褐色であった。

4-6の環には、有段環の中でもかなり新しい要素が認められた。

7はいわゆる北武蔵型環の類型に含まれるもので、小形のものではなく、口端部内面に肥厚は認められなかった。色調は北武蔵型環特有の褐色で軟質であり、

第398図 第339号住居跡



胎土には赤色微粒とわずかな角閃石が含まれていた。

8・9は在地の暗文の環であり、色調はいずれも橙褐色でやや軟質であった。8は暗文がやや疎であり、9ではやや密であった。口辺部と体部の境界は、8では明瞭な段であり、9では形態上の明瞭な段差はなく、指ヨコナデとヘラケズリの境界がわずかな稜となっていた。

12の台付甕の台と考えられるものは、この住居に帰属するかどうか明らかにできなかった。

第339号住居跡 (第393・394図)

第339号住居跡は、AD-AE-22グリッドから検出した。

住居跡の南側はSJ-338・344による掘乱のために出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-6°-W

であった。規模は主軸長不明、副軸長5.2m程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝は住居跡の検出範囲で確認できた。柱穴も2本が明瞭に検出できた。P 2、P 3は、SJ-338・344によって確認できなかった。覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-338・340・344、SE-122・123・129

第339号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	L径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	甕	(20.0)			ACDEF	3	淡灰褐色	10	
2	甕			3.4	ACDEF	3	暗赤褐色	10	

第340号住居跡 (第395図)

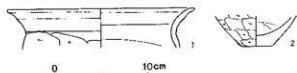
第340号住居跡は、AD-21・22グリッドから検出した。

住居跡の北側のコーナーはSJ-333による擾乱のために、東側のコーナーはSJ-339による擾乱のために、北西側のコーナーはP-880による擾乱のために、南西

と重複していた。重複関係は、SJ-338・344、SE-122・123・129に切られ、SJ-340を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器甕などを検出した。この中で、第394図1、2の甕は住居跡の南側から、他は覆土から検出した。

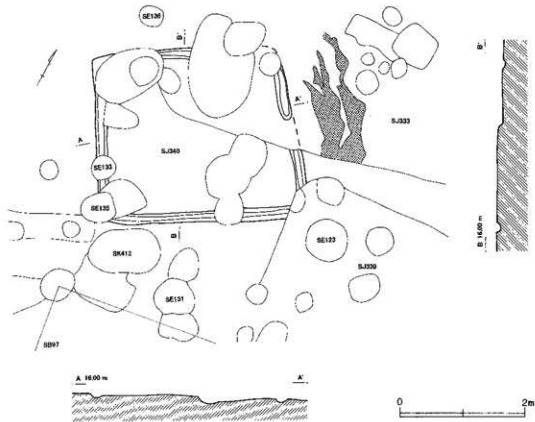
第394図 第339号住居跡出土遺物



側のコーナーはSE-133・135による擾乱のために検出することができなかった。形態は方形で主軸方位はN-32°-Wであった。規模は主軸長2.7m、副軸長3.3m程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。

第395図 第340号住居跡



貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭で、壁溝はほぼ全周していたと考えられた。

住居跡の周辺を精査したが、柱穴を検出する事ができなかった。

わずかに残された覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-333・339、SE-133・135と重複していた。重複関係はSJ-333・339、SE-133・135に切られていた。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第341号住居跡 (第396・398図)

第341号住居跡は、AD・AE-21グリッドから検出した。

住居跡の北東コーナーはSB-97による擾乱のために、西側はSD-85による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-49°-Eであった。規模は主軸長4.4m、副軸長3.0m、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であり、北東側からカマドが検出できた。貯蔵穴はカマドの右側から検出した。床面も明瞭で、

第341号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(13.0)			ACDEFK	3	赤褐色	40	
2	環	(16.0)			ACDEF	2	暗赤褐色	30	
3	環	(10.6)			ACDEF	3	淡褐色	10	

第342号住居跡 (第398図)

第342号住居跡は、AD・AE-21グリッドから検出した。

住居跡の東側はSJ-341による擾乱のために、北側はSD-85による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-55°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ10cm程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴は北側のコーナーから検出した。床面は明瞭で、壁溝は南東以外の壁で検出できた。柱穴も2本が明瞭に検出できた。P1、P2は、SJ-341によって確認できなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

第343号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	口径/cm	器高/cm	底径/cm	胎土	焼成	色調	残存率/%	備考
1	環	(12.0)			ACDEF	3	暗赤褐色	20	
2	斐			(5.6)	ACDEFK	3	淡灰褐色	10	

壁溝はほぼ全周していたと考えられた。

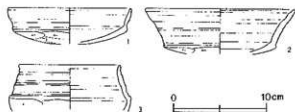
柱穴は、周辺の床面を精査したが、検出することができなかった。

覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を示していた。

住居跡は、SJ-338・342・343・344、SB-97、SD-85と重複していた。重複関係は、SJ-338、SB-97、SD-85に切れ、SJ-342・343を切っていた。

実測可能な遺物として、土師器環などを検出した。この中で、第396図に示した遺物は、全て覆土中から検出した。

第396図 第341号住居跡出土遺物



住居跡は、SJ-341・343、SD-85と重複していた。

重複関係は、SJ-341、SD-85に切れ、SJ-343とは不明であった。

実測可能な遺物は、検出できなかった。

第343号住居跡 (第387・398図)

第343号住居跡は、AD・AE-21グリッドから検出した。

住居跡の北側は、SJ-341・342による擾乱のために検出できなかった。形態は方形で、主軸方位はN-53°-Eであった。規模は主軸長不明、副軸長不明、深さ20cm

第397図 第343号住居跡出土遺物



程度であった。

壁は明瞭であったが、カマドは検出できなかった。貯蔵穴も検出できなかった。床面は明瞭であったが、壁溝は検出できなかった。柱穴も検出できなかった。P1～P4は、SJ-341によって確認できなかった。

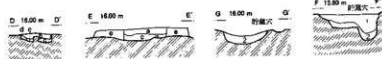
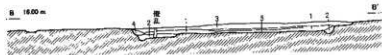
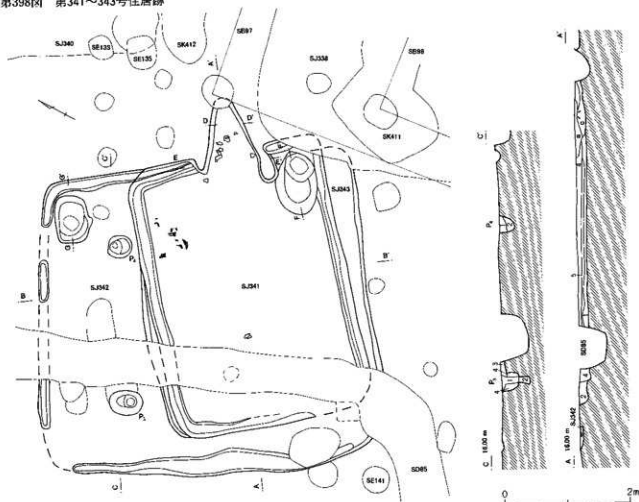
覆土には埋め戻しの痕跡はなく、自然堆積の状況を

示していた。

住居跡は、SJ-338・341・342・344、SD-85と重複していた。重複関係は、SJ-341、SD-85に切られ、SJ-342とは不明であった。

実測可能な遺物として、土師器環、甕などを覆土中から検出した。

第398図 第341～343号住居跡



第343号住居跡層土:

- 1 暗褐色 (10YR5/4) R 含
- 2 紫褐色 (10YR2/3) RC 含
- 3 黄紫褐色 (10YR4/3) B 砂質土多含 貼土

第342号住居跡カマド層土:

- a 純黄褐色 (10YR4/7) R 含
- b 赤褐色 (2.5YR4/7) R,M 含
- c 灰褐色 (10YR2/7) R,M 含
- d 褐色 (10YR1/4) R,B 含
- e 黒褐色 (10YR1/1) R,B 砂質土含

第341号住居跡層土:

- 1 暗褐色 (10YR3/3) R 多含 C 含
- 2 黒褐色 (10YR1/1) B 砂質土多含

第341号住居跡貯蔵穴層土:

- 1 灰褐色 (7.5YR4/2) RC 含 細リヤ今畑
- 2 黒褐色 (7.5YR3/2) 1層よりR少含 H 多含

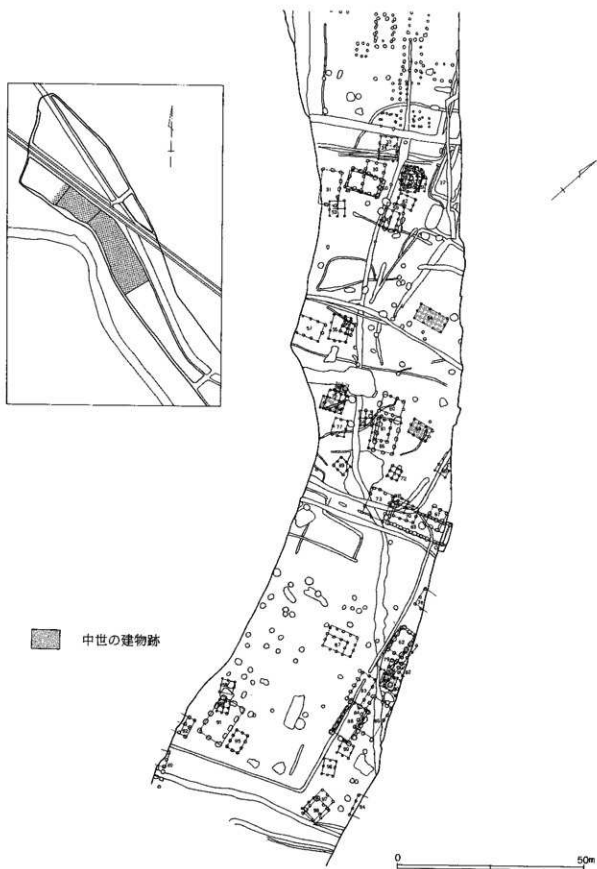
第342号住居跡柱穴層土:

- 1 暗褐色 (10YR3/4) R 含
- 2 黒褐色 (10YR2/2) C R 含
- 3 褐色 (10YR4/4) B 砂質土多含
- 4 褐色 (10YR1/0) R 含

第342号住居跡貯蔵穴層土:

- 1 暗褐色 (10YR3/3) RC 含
- 2 暗褐色 (10YR2/2) R,C 多含

第399岡 掘立柱建物跡全体図



(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡の概要

掘立柱建物跡は、平成8年度報告のB区から連続して、古代・中世の建物跡を62棟検出した。

古代の建物跡は、57棟検出した。遺構の分布は、概ね4個所に集中する傾向にあり、それぞれ重複、建替えが確認され、数時期にわたって営まれていたことを確認した。

建物跡の規模は、桁行が2間～3間の建物跡が34棟と約半数を占めるが、桁行が5間を超える規模の大きい建物跡が、7棟検出された。特に第63号掘立柱建物跡は、桁行が9間以上という、長大な建物跡で、官衙を連想させる建物跡である。他に6間以上の建物跡を2棟検出しており、これまで、県内の一般の集落遺跡では見られないものとして注目される。

建物跡の時期は、出土遺物が少なく、明らかにできたものは少ないが、概ね7世紀後半以降を最初に、9世紀後半代まで連続して営まれていたと思われる。

中世の掘立柱建物跡は、5棟検出した。建物の規模は、桁行が2間～4間と、古代の掘立柱建物跡よりも規模は小さい。柱穴掘り方は方形で、径は20cm～30cmと比較的小さい。

建物の時期については、建物跡から出土した遺物が少なく、明らかにすることはできなかったが、周辺の井戸跡・溝跡等の遺物から、概ね12世紀末～14世紀代と考えられる。

建物の性格等は明らかにできなかったが、中世墓と同時期と考えられる、茶毘跡に壊されていた掘立柱建物跡もあることから、中世墓跡に先行していた可能性もある。

第30号掘立柱建物跡 (第400図・第401図)

S-8・9、T-9グリッドから検出した。

遺構は4間×2間の側柱建物で、南北棟であった。規模は、桁行8.4m、梁行4.74mであった。面積は39.8㎡であった。主軸方位はN-42°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.1m、梁行2.37mであった。

柱掘り方の形状は、丸みを持った方で、コーナー部分のみL字形であった。径70cm～100cm、深さは50cm～70cmであった。

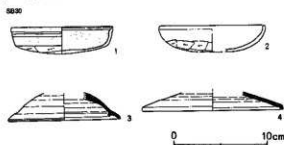
柱痕はP2・P6・P11以外の全ての柱穴で検出した。

遺構は71号竪穴住居跡・49・50号掘立柱建物跡と重複していた。新旧関係は、本遺構が最も新しかった。

出土遺物は、柱穴掘り方より土師器環・須恵器蓋等が出土した。1、2は土師器環である。ともにP1掘り方より出土した。1は、いわゆる比企型環の承踏を引くものと考えられるが、底部は平底気味で、体部は直線的に立ち上がる。口縁内面端部に沈線が施される。内面全体と、外面体部に赤彩が施される。2は、北武蔵型の内屈口縁環である。体部が扁平気味で、体部上半には無調整部がある。

3・4は須恵器の蓋である。3はP8から、4はP8・9から出土したものが接合した。3は末野または群馬産と思われる。4は湖西産である。

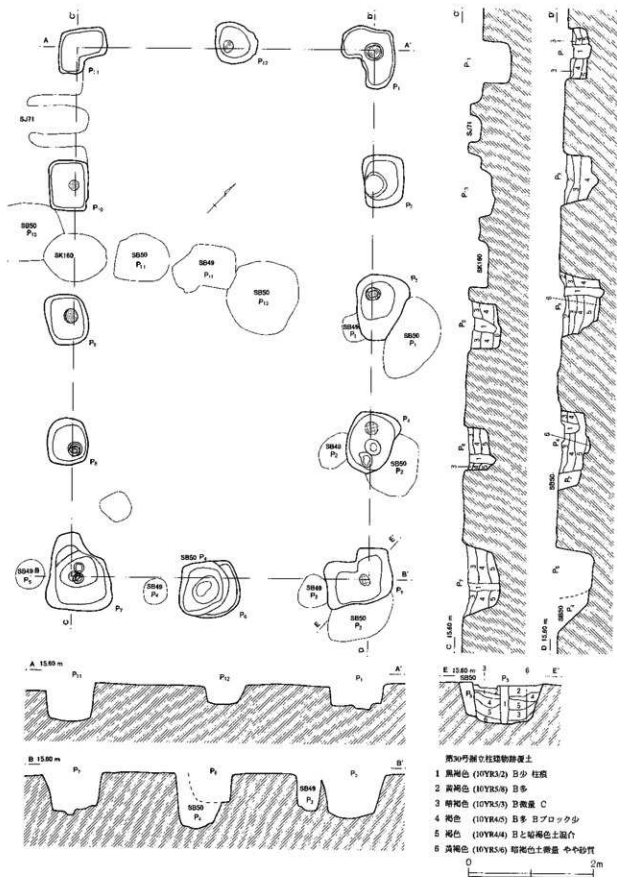
第400図 第30号掘立柱建物跡出土遺物



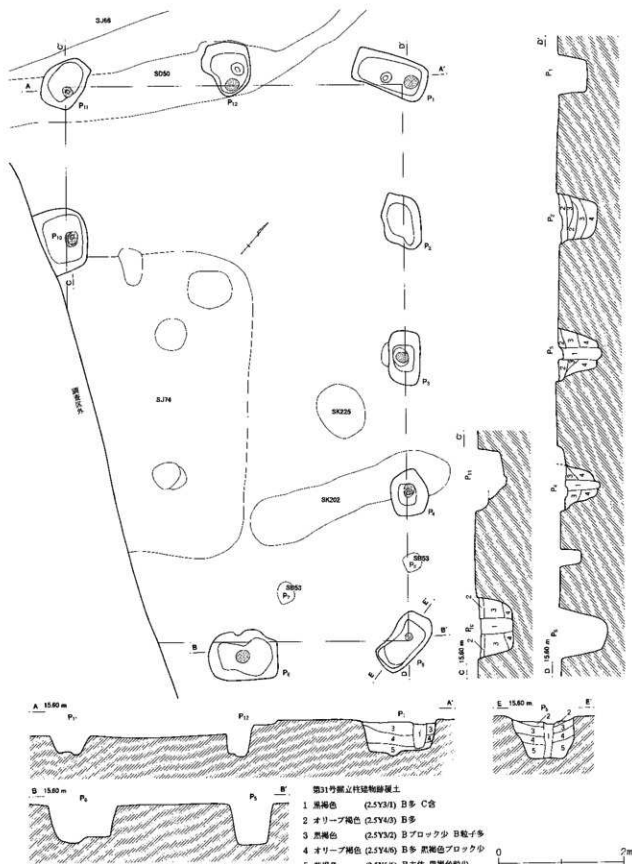
第30号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
30-1	環	11.0	2.8		ABEIK	2	浅黄橙	40	赤彩
30-2	環	11.2	2.8		BCDG	2	橙	30	内屈
30-3	蓋	12.0			ACDF	1	青灰	10	末野又は群馬産
30-4	蓋	15.2			BF	1	灰	10	湖西

第401図 第30号掘立柱建物跡



第402図 第31号掘立柱建物跡



第31号掘立柱建物跡 (第402図)

S-8・9、T-9グリッドから検出した。南側は調査区外へ展開し、P7～P9は検出することができなかった。

遺構は、4間×2間の南北棟の掘立柱建物で、規模は桁行8.8m、梁行5.4mであった。面積は、47.5㎡であった。主軸方位は、N-42°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.2m、梁行2.7mであった。

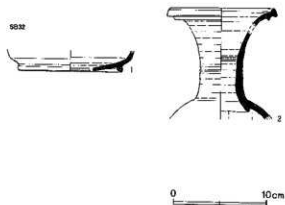
柱掘り方の形状は、丸みを持った方形で、コーナー部分のみ、建物の主軸方向に対して45°傾いた長方形であった。深さは50cm～70cmであった。

柱痕は、P2以外の全ての柱穴で検出した。P3・4・10・11では、柱掘り方底面を5cm～10cm掘り込んだ小穴に柱を建てていたことを土層断面の観察で確認した。また、柱痕とは異なる位置にこの小穴を検出した柱穴もあり、建物の建て替えが想定される。

本遺構は、74号住居跡・53号掘立柱建物跡・202号土壇と重複していた。新旧関係は、本遺構が重複する遺構の中では最も新しくかった。

出土遺物は、P5柱穴掘り方より、剣形と思われる石製模造品が1点出土した。

第403図 第32号掘立柱建物跡出土遺物



第32号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
32-1	高台付環			(10.8)	B F	1	灰白	15	湖西
32-2	長頸瓶	(11.0)			A B D	2	褐灰	20	フラスコ形

第32号掘立柱建物跡 (第403図・第404図)

Q-9・10、R-10・11グリッドから検出した。

北側は、調査区外へ展開するため、P1～P3は検出することができなかった。

規模は、5間×2間の南北棟の溝持ちの建物で、桁行13.0m、梁行5.6mであった。面積は、72.8㎡であった。一部は調査区外へ展開するが、溝は全周していたと考えられる。主軸方位は、N-32°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.6m、梁行2.8mであった。

柱掘り方は、幅80cm～100cm、深さ50cm前後の溝を全周させ、さらに径60cm～100cmの円形の柱穴を掘り込んでいた。柱穴の深さは、60cm～70cmであった。

柱痕は、遺構確認の段階では確認することができなかったが、掘り方底面に小穴を検出したことから、この部分に柱が建てていたと考えられる。このうちP4・P10・P12で柱材の一部が出土した。

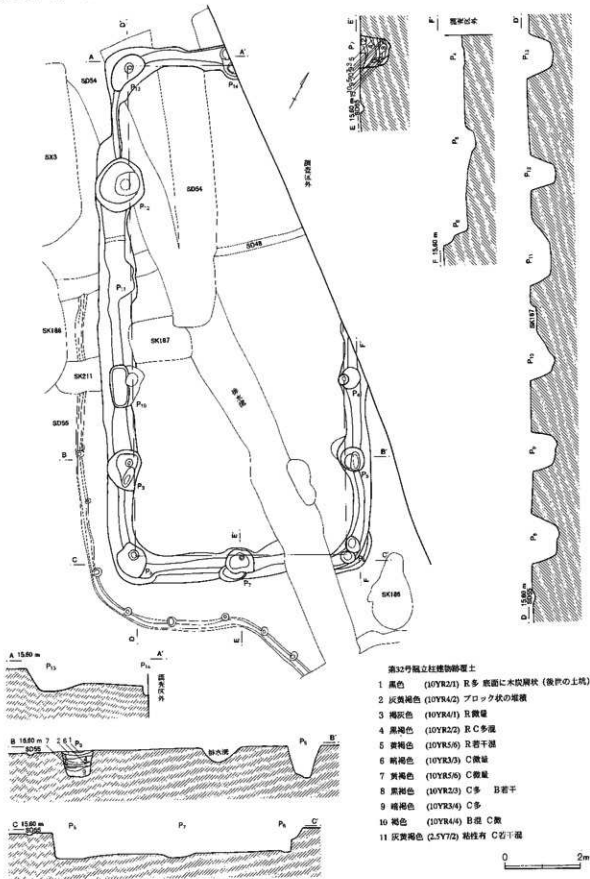
遺構は、48・54号溝跡と重複していた。新旧関係は、本遺構が最も古かった。

また、32号掘立柱建物跡の西側から南側にかけて、掘立柱建物跡と平行するように55号溝跡を検出したが、建物跡に伴う遺構かどうかは明らかにすることができなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土した。

1は、湖西産と考えられる須恵器の高台付環である。底部のみの破片である。底部は高台よりは突出しない。
2は、フラスコ型長頸瓶である。口縁部から肩部のみ残存していた。口縁部はラッホ状に開き、端部は縁帯状になる。また、口縁部下に凸帯がめぐる。頸部には、内外面とも、2条の沈線がめぐる。

第404図 第32号孤立柱建物跡



第33号掘立柱建物跡 (第405図)

R-8、S-8・9グリッドから検出した。

規模は、3間×3間の掘立柱建物で、桁行5.6m、梁行4.6mで、南北に長い建物跡であった。面積は、25.8㎡であった。主軸方位はN-39°-Wであった。

柱間寸法は、桁行1.87m、梁行1.53mであった。

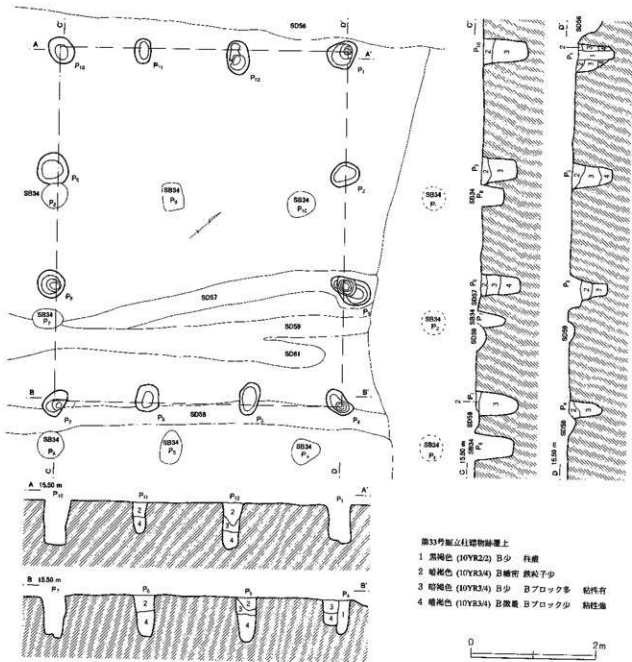
柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径40cm～50cm、深さ50cm～70cmであった。

柱底は、P1・P4で検出した。

遺構は、34号掘立柱建物跡、57～59号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、57～59号溝跡よりも古かった。34号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにすることができなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出上したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第405図 第33号掘立柱建物跡



第34号掘立柱建物跡 (第406図)

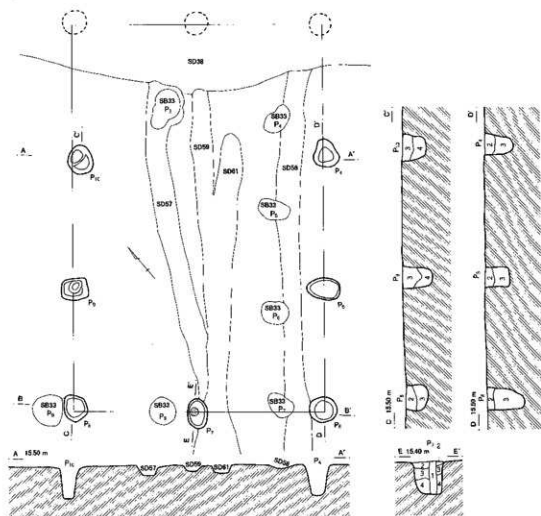
S-8・9グリッドから検出した。

遺構は、東側を第38号溝跡に壊されていたため、全体は検出できなかったが、3間×2間の側柱建物であったと考えられる。

規模は、桁行6.2m、梁行4.0mで、東西棟であった。面積は、24.8㎡であった。主軸方位は、N-41°-Eであった。

柱間寸法は、桁行2.04m、梁行2.0mであった。

第406図 第34号掘立柱建物跡



柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径40cm～50cm、深さ30cm～50cmであった。

柱痕は、P7のみで検出した。

遺構は、33号掘立柱建物跡・38号溝・57～59号溝と重複していた。新旧関係は、38・57～59号溝よりも古かった。34号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにすることができなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第34号掘立柱建物跡遺土

- 1 褐色 (7.5YR3/6) 土師器 Bブロック少量 柱痕
- 2 灰色 (10YR2/1) 土師器 C少
- 3 黒褐色 (10YR3/1) Bブロック
- 4 褐色 (10YR4/6) Bブロック多 黒褐色ブロック少



第37号孤立柱建物跡 (第407図)

R・S-9・10グリッドから検出した。

規模は2間×2間の総柱建物跡で、桁行4.4m、梁行4.0mであった。面積は、17.6㎡であった。主軸方位は、N-36°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.2m、梁行2.0mであった。

柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径60cm

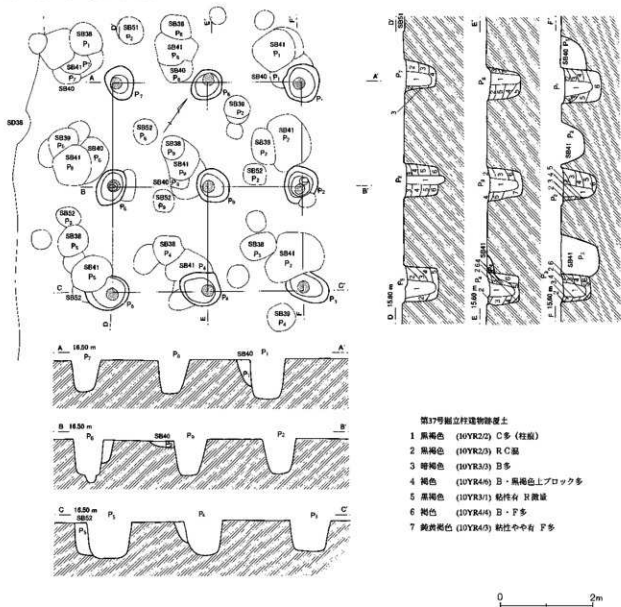
～100cm、深さ70cm～80cmであった。

柱痕は、全ての柱穴で検出した。

遺構は、38～41・51・52号孤立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、重複する7棟の建物跡の中では最も新しかった。

出土遺物は、上師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第407図 第37号孤立柱建物跡



第37号孤立柱建物跡遺土

- 1 黒褐色 (10YR2/7) C多 (柱痕)
- 2 黒褐色 (10YR2/5) RC層
- 3 暗褐色 (10YR3/3) B多
- 4 褐色 (10YR4/6) B・黒褐色上ブロック多
- 5 黄褐色 (10YR3/7) 粘粒有 貝殻混
- 6 褐色 (10YR4/4) B・F多
- 7 黄褐色 (10YR4/5) 粘粒やや有 F多

0 2m

第38号掘立柱建物跡 (第408図・第409図)

R・S-9・10グリッドから検出した。

規模は2間×2間の総柱建物で、桁行4.4m、梁行4.0mであった。面積は、17.6m²であった。主軸方位は、N-33°-Wであった。

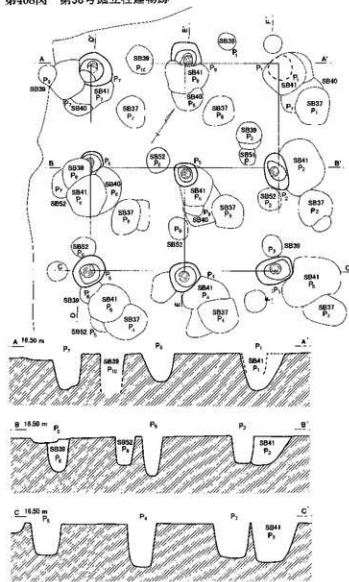
柱間寸法は、桁行2.2m、梁行2.0mであった。

柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径50cm～80cm、深さ60cm～90cmであった。

柱底は、P1以外の全ての柱穴で検出した。

遺構は、37・39～41・51・52号掘立柱建物跡と重複

第408図 第38号掘立柱建物跡



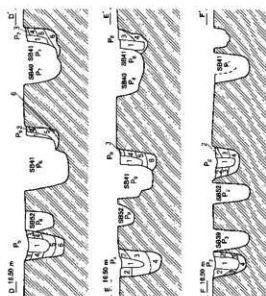
第38号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
38-1	環	11.2	2.9		ABDEL	2	鈍橙	70	赤彩

していた。遺構の新旧関係は、37・39・41号掘立柱建物跡よりも古く、51・52号掘立柱建物跡よりも新しかった。40号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにすることができなかった。

出土遺物は、土師器環が出土した。

1は、土師器環で、P6掘り方より出土した。底部は平底気味で、体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。内面口縁端部には乳線が施されていた。内面全体と、外面口縁部には、赤彩が施されていた。



第38号掘立柱建物跡出土

- 1 系陶色 (10YR3/1) R多 (柱脚)
- 2 暗褐色 (10YR3/4) B多 磨り有
- 3 褐色 (10YR4/4) BF多
- 4 暗褐色 (10YR3/4) B 磨り有
- 5 褐色 (10YR4/4) BF多
- 6 鈍黄褐色 (10YR5/4) B多 砂質

0 2m

第409図 第38号掘立柱建物跡出土遺物



0 10cm

第40号掘立柱建物跡 (第411図)

R・S-9・10グリッドから検出した。

規模は、2間×2間の総柱建物で、桁行4.8m、梁行4.0mであった。面積は、19.2㎡であった。主軸方位は、N-39°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.4m、梁行2.0mであった。

柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径70cm～90cm、深さ20cm～50cmであった。

柱痕は、検出できなかった。

遺構は、37～39・41・51・52号掘立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、37～39・41号掘立柱建物跡よりも古く、51・52号掘立柱建物跡よりも新しかった。38号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第41号掘立柱建物跡 (第412図)

R・S-9・10グリッドから検出した。

規模は、2間×2間の総柱建物で、桁行・梁行ともに4.4mであった。面積は、19.36㎡であった。主軸方位は、N-41°-Wであった。

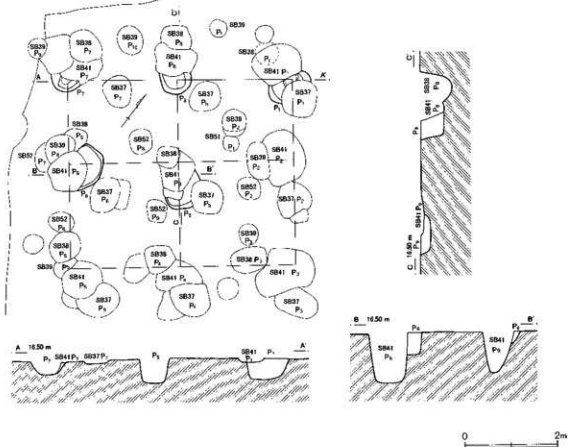
柱間寸法は、桁行・梁行ともに2.2mであった。

柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径70cm～130cm、深さ50cm～90cmであった。柱痕は、P 3・P 5・P 8・P 9で検出した。

遺構は、37～40・51・52号掘立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、37・39号掘立柱建物跡よりも古く、38・40・51・52号掘立柱建物跡よりも新しかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第411図 第40号掘立柱建物跡



第42号掘立柱建物跡 (第413㉔)

S-10グリッドから検出した。

規模は、2間×2間の掘立柱建物であった。桁行は、南側が4.24m、北側が4.44mで、梁行は3.12mであった。面積は、13.73㎡であった。桁側の南北で、長さが異なるため、やや歪んでいた。主軸方位は、N-60°-Eであった。

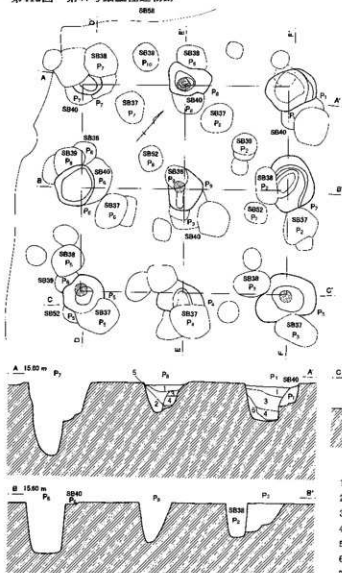
柱間寸法は、桁行2.2m、梁行1.56mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径20~30cm、深さ50cm前後であった。

柱痕は、全ての柱穴で検出した。

遺構は、59号掘立柱建物跡、248号土壇と重複して

第412図 第41号掘立柱建物跡



いた。遺構の新旧関係は、59号掘立柱建物跡よりも古く、248号土壇よりも新しくかった。

出土遺物は検出できなかった。

第43号掘立柱建物跡 (第414㉔)

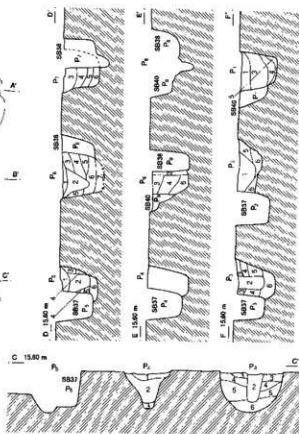
S・T-10グリッドから検出した。

規模は、3間×2間の竪柱建物で、桁行5.1m、梁行4.2mであった。主軸方位は、N-35°-Wであった。

柱間寸法は、桁行1.7m、梁行2.1mであった。

柱痕は、P2で検出した。

遺構は、59号掘立柱建物跡、46号井戸跡、38号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、46号井戸跡、38号溝跡よりも古かった。59号掘立柱建物跡との重複関



第41号掘立柱建物跡遺土:

- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 日多
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 日多 (柱痕)
- 3 暗褐色 (10YR3/4) 砂り多 B多
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 砂り多 B多
- 5 暗褐色 (10YR3/4) 砂り多 B多
- 6 黒褐色 (10YR3/1) 粘り多 B微量
- 7 褐色 (10YR4/4) B・F多



係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第49号掘立柱建物跡 (第415図)

S-9、T-8・9グリッドから検出した。

規模は4間×2間の東西棟の側柱建物で、桁行9.0m、梁行5.0mであった。北側の桁柱が、8.5mと短いため、やや歪んでいた。面積は45㎡であった。主軸方位は、N-52°-Eであった。

柱間寸法は、桁行2.25m、梁行2.5mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径40~50cm、深さ

40~100cmであった。柱痕は、P1~P8で検出した。

遺構は、30・50号掘立柱建物跡と重複していた。新旧関係は、30号掘立柱建物跡よりも古く、50号掘立柱建物跡よりも新しかった。

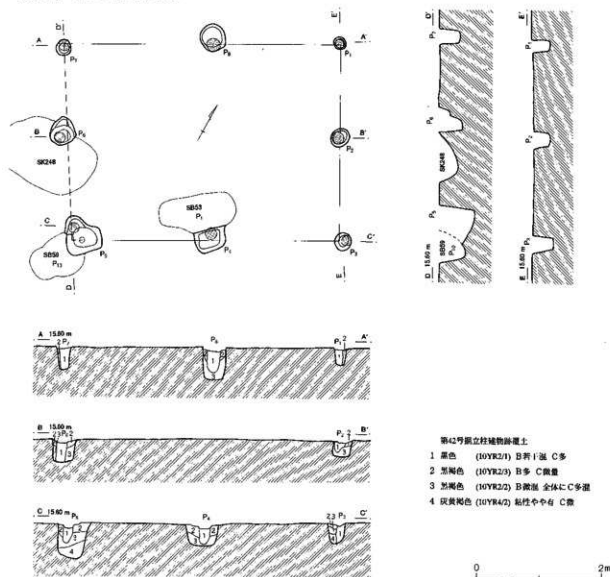
出土遺物は、柱掘り方より、奈良時代の上師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第50号掘立柱建物跡 (第415図)

S-9・T-8・9グリッドから検出した。

規模は、4間×2間の東西棟の側柱建物で、桁行9.0m、梁行4.7mであった。面積は、42.3㎡であった。

第413図 第42号掘立柱建物跡



主軸方位は、N-58°Eであった。

柱間寸法は、桁行2.25m、梁行2.35mであった。

柱掘り方の形状は楕円形で、コーナー部分は、L字形であった。柱穴の規模は、径100cm～150cm、深さ60cm～100cmであった。

柱痕は、P1～P3・P7～P9・P10で検出した。

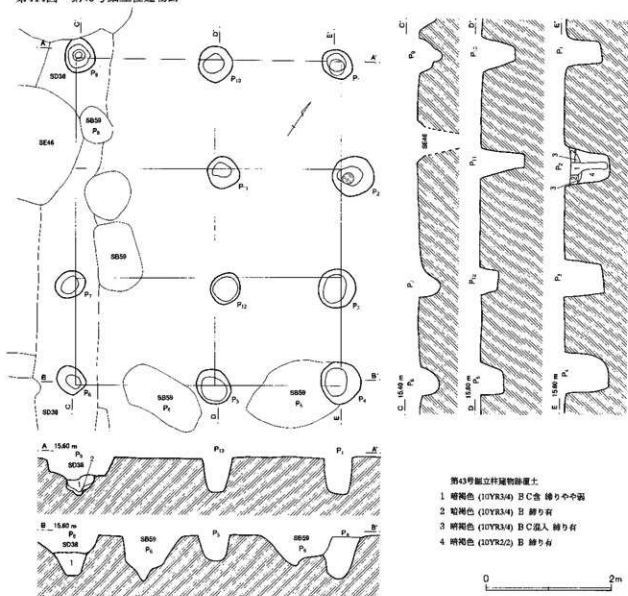
遺構は、30・49号獨立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、3棟の中では最も古かった。

出土遺物は、掘り方より、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第51号獨立柱建物跡 (第416図)

R・S-9・10グリッドから検出した。

第414図 第43号獨立柱建物跡



規模は、2間×1間分を検出したのみで、全体は明らかにできなかった。主軸方位は、N-48°Wであった。

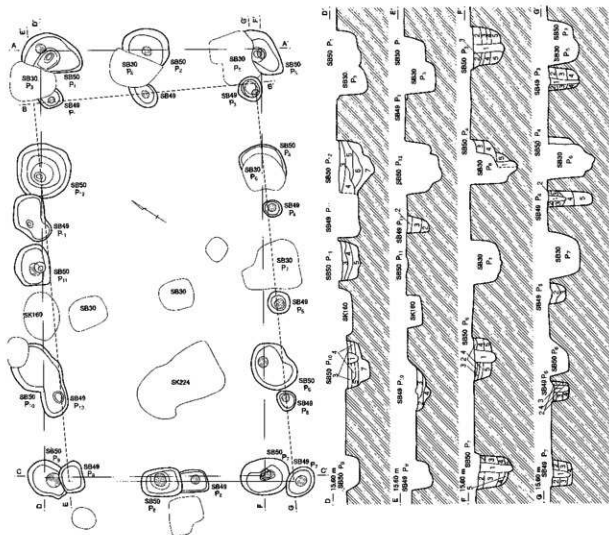
P2～P4間の距離は、3.5mで、柱間距離は1.75mであった。P1～P2間の柱間距離は、2.7mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径30cm～40cm、深さ20cm～40cmであった。柱痕は、検出できなかった。

本遺構は、37～41・52号獨立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、重複する遺構の中では最も古かった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第415図 第49・50号掘立柱建物跡



第49号掘立柱建物跡横土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) B少 柱痕
- 2 暗褐色 (10YR3/4) B少
- 3 褐色 (10YR4/4) B粒多 Bブロック少
- 4 褐色 (10YR4/6) B多
- 5 黄褐色 (10YR5/6) 暗褐色粒少 やや砂質

第50号掘立柱建物跡横土

- 1 褐色 (10YR4/4) B 棒りやや弱 R若干 C含 柱痕
- 2 黄褐色 (10YR5/6) B多 棒り有
- 3 純黄褐色 (10YR4/3) B 若干 R C 棒りやや有 微塵上
- 4 純黄褐色 (10YR5/4) B R C 微塵 硬粘土
- 5 暗褐色 (10YR3/4) B C Bブロック多
- 6 褐色 (10YR4/4) B 若干 R C 混入
- 7 黄褐色 (10YR4/3) B 棒り有



第52号孤立柱建物跡 (第416図)

R・S-9・10グリッドから検出した。

規模は、2間×2間の総柱の建物跡で、東西に長く、桁行4.0m、梁行3.0mであった。面積は、12.0㎡であった。主軸方位は、N-42°-Eであった。

柱間寸法は、桁行2.0m、梁行1.5mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径40cm～50cm、深さ20cm～80cmであった。

柱痕は、P2・P6～P9で検出した。

遺構は、37～41号孤立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、37～41号孤立柱建物跡より古く、51号孤立柱建物跡よりも新しかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第53号孤立柱建物跡 (第417図)

U-9グリッドから検出した。

規模は、2間×2間の総柱の建物跡で、桁行、梁行ともに4.0mであった。主軸方位は、N-55°-Wであっ

た。

柱間距離は、桁行、梁行ともに2.0mであった。

柱掘り方の形状は円形で、径30cm、深さ10cm～40cmであった。

柱痕は、P3・P8以外の柱穴で検出した。

遺構は、31号孤立柱建物跡と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第54号孤立柱建物跡 (第418図・第419図)

T・U-13グリッドから検出した。

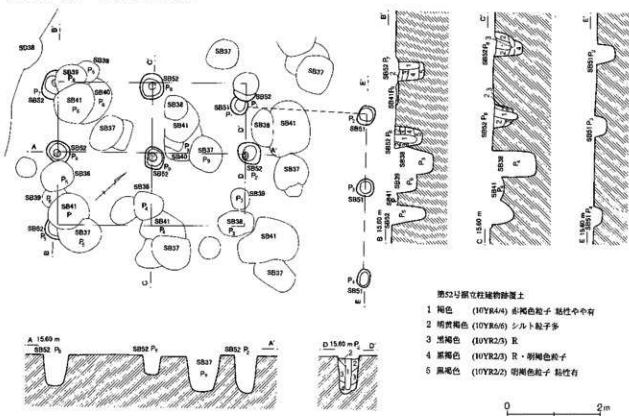
規模は3間×2間の東西棟の側柱建物で、桁行8.1m、梁行4.66mであった。面積は、37.8㎡であった。主軸方位はN-62°-Eであった。

柱間寸法は、桁行2.7m、梁行2.33mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径20cm～30cm、深さ10cm～20cmであった。

柱痕はP2のみで検出したが、柱穴底面に、緑泥片

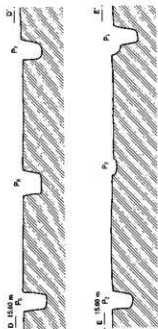
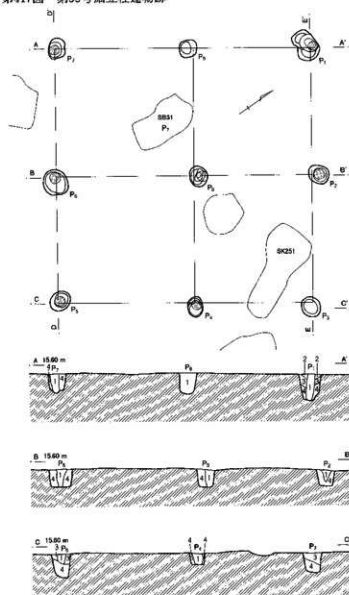
第416図 第51・52号孤立柱建物跡



第52号孤立柱建物跡遺土

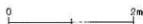
- 1 褐色 (10YR4/4) 赤褐色粘土 粘性中や有
- 2 暗黄褐色 (10YR6/6) シルト粘土多
- 3 黄褐色 (10YR2/5) R
- 4 茶褐色 (10YR2/5) R・弱褐色粘土
- 5 黒褐色 (10YR2/2) 暗褐色粘土 粘性有

第417図 第53号掘立柱建物跡



第53号掘立柱建物跡出土

- 1 褐色色 (10YR4/2) B面 C若干 縞り強い
- 2 褐色色 (10YR4/2) B面 C 縞り有
- 3 灰黄褐色 (10YR4/3) B 縞り弱縁有
- 4 灰黄褐色 (10YR4/3) B C面 Bブロック多



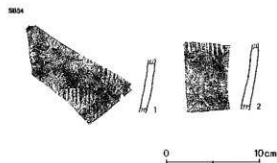
岩の板石が置かれており、この上に柱が立てられていたものと思われる。

出土遺物は、P10から中世陶器の破片が出土した。

1・2は、P10底面に、緑泥片岩の板石とともに置かれていた。常滑産の甕と考えられる。

時期は、出土遺物から中世の所産と思われる。

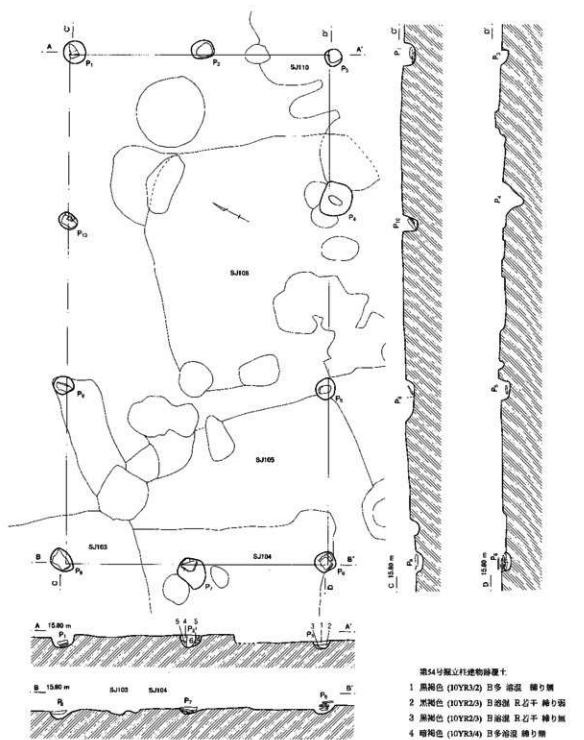
第418図 第54号掘立柱建物跡出土遺物



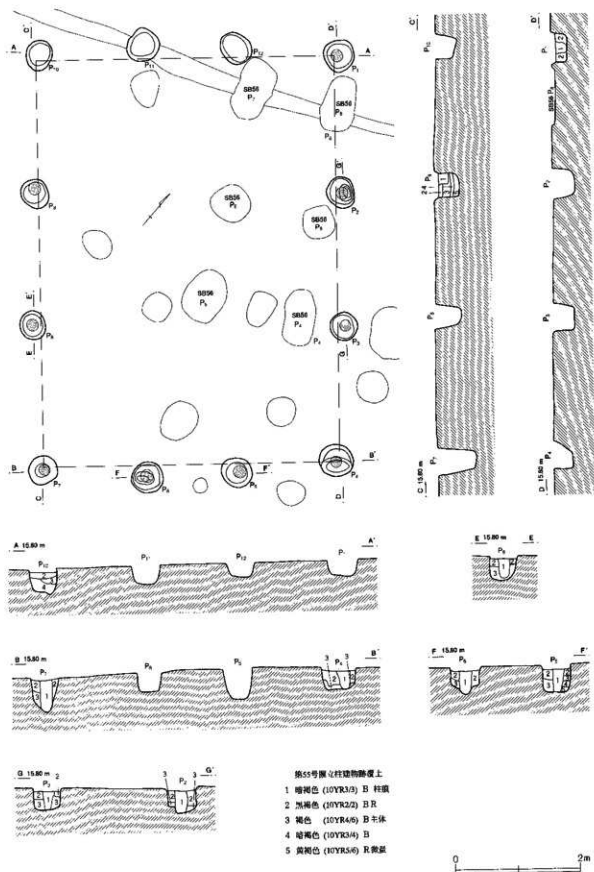
第54号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口徑	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
54-1	甕				B J L	1	褐灰	破片	常滑
54-2	甕				B J	1	鈍橙	破片	常滑

第419図 第54号孤立柱建物跡



第420图 第55号掘立柱建物跡



第55号掘立柱建物跡 (第420図)

V・W-11・12グリッドから検出した。

規模は3間×3間の側柱建物で、桁行6.45m、梁行4.29mであった。面積は、40.57㎡であった。桁側のP2・3・8・9と梁側のP5・6・11・12は外側に張り出していた。主軸方位はN-42°-Wであった。

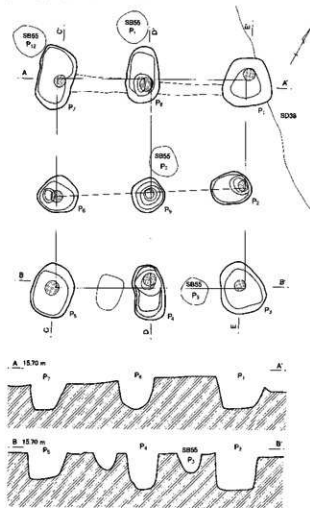
柱間寸法は、桁行2.15m、梁行1.43mであった。

柱掘り方の形状は円形で、径40cm前後、深さ25cm～60cmであった。柱痕は、P1～P9で検出した。

遺構は、56号掘立柱建物跡、146号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、土層断面の観察では、溝跡よりも古いことが確認されたが、56号掘立柱建物跡との新旧関係は明らかにすることができなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出上したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第421図 第56号掘立柱建物跡



第56号掘立柱建物跡 (第421図)

V・W-11・12グリッドから検出した。

規模は、2間×2間の総柱建物で、桁行3.3m、梁行3.0mであった。面積は、9.9㎡であった。主軸方位は、N-30°-Wであった。

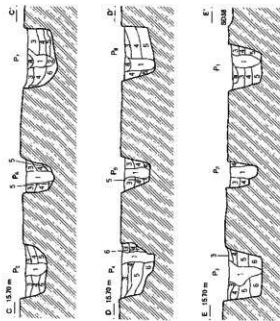
柱間寸法は、桁行1.65m、梁行1.5mであった。P6～7間で1.85mあり、やや歪んだ平面形状であった。

柱痕は、全ての柱穴で検出した。

柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径60cm～100cmで、深さ50cm～60cmであった。

遺構は、55号掘立柱建物跡、38・146号溝跡と重複していた。新旧関係は、38・146号溝跡よりも古いことが確認された。55号掘立柱建物跡との新旧関係は明らかにすることができなかった。

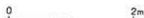
出土遺物は、検出できなかった。



第56号掘立柱建物跡土上

- 1 暗褐色 (10YR3/3) B 粘性中やや
- 2 黒褐色 (10YR3/1) B 粘性中やや
- 3 黒褐色 (10YR2/5) B 多
- 4 褐色 (10YR4/6) B C
- 5 黒褐色 (10YR3/2) R B
- 6 黄褐色 (10YR5/6) 砂質 10YR3/2の黒色上ブロック

a 黒褐色 (10YR3/1) B 微量 硬質土



第57号掘立柱建物跡 (第422図)

W-X-11グリッドから検出した。遺構の西側が調査区外へ展開するため、全体は検出できなかった。

規模は、3間以上×2間の掘立柱建物で、桁行6.6m以上、梁行4.7mであった。面積は、31㎡以上であったと考えられる。主軸方位は、N-56°-Eであった。

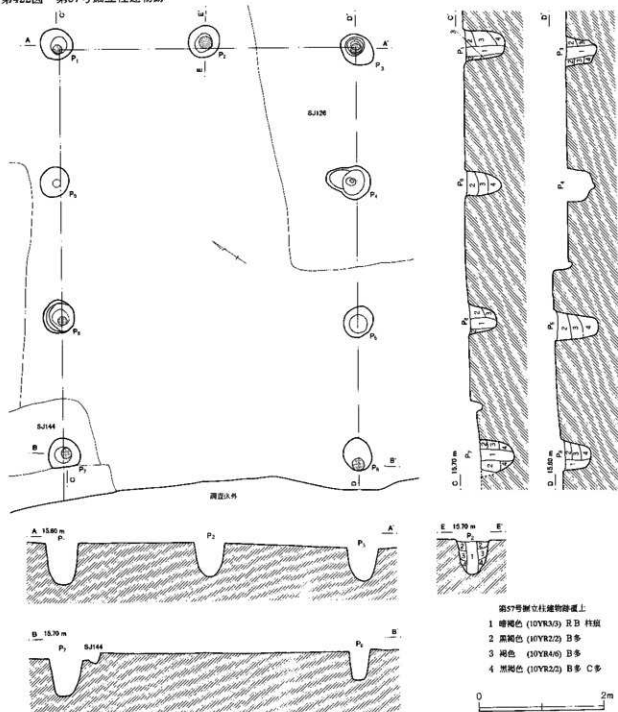
柱間寸法は、桁行2.2m、梁行2.35mであった。

柱底は、P1~3・P6・P8で検出した。柱掘り方の形状は、円形で、径50cm前後、深さ40cm~60cmであった。

遺構は、126・144号住居跡と重複していた。遺構の新田関係は、本遺構が最も新しかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第422図 第57号掘立柱建物跡



第58号掘立柱建物跡 (第423図)

AD・AE-17・18グリッドから検出した。

規模は、2間×2間の掘立柱建物で、桁行、梁行ともに3.6mであった。面積は、12.96㎡であった。主軸方位は、N-42°-Wであった。

柱間寸法は、桁行、梁行ともに1.8mであった。柱掘り方の形状は、円形または、方形で、径40cm、深さ40~50cmであった。

柱痕は検出できなかった。

本遺構は、386・387・396号土塊と重複していたが、新旧関係は明らかにすることができなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第59号掘立柱建物跡 (第424図)

S・T-10グリッドから検出した。

規模は、3間×2間の掘立柱建物で、桁行6.9m、梁行4.7mであった。面積は、32.43㎡であった。主軸方位は、N-43°-Wであった。

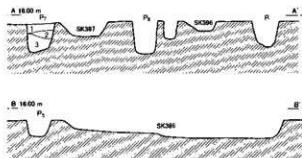
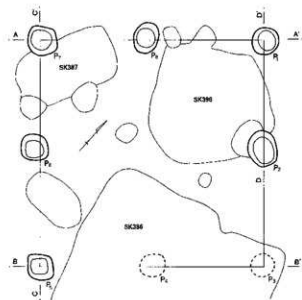
柱間寸法は、桁行2.3m、梁行2.35mであった。

柱掘り方の形状は、円形または長方形で、径80cm~240cm、深さ60cm~80cmであった。

本遺構は、42・43号掘立柱建物跡、34・46号井戸跡、38号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、42号掘立柱建物跡より新しく、34・46号井戸跡、38号溝跡よりも古かった。43号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにすることができなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第423図 第58号掘立柱建物跡



第58号掘立柱建物跡埋土

- 1 黒褐色 (10YR3/1) 黒褐色土: 土 腐化多
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB少
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 1層よりB少



第60号掘立柱建物跡 (第425図・第427図)

V・W-14グリッドから検出した。

規模は、3間×2間の側柱建物で、桁行5.9m、梁行4.7mであった。面積は、27.73㎡であった。主軸方位は、N-56°-Eであった。

柱間寸法は、桁行1.97m、梁行2.35mであった。

柱底は、P1・P5・P6・P9で検出した。

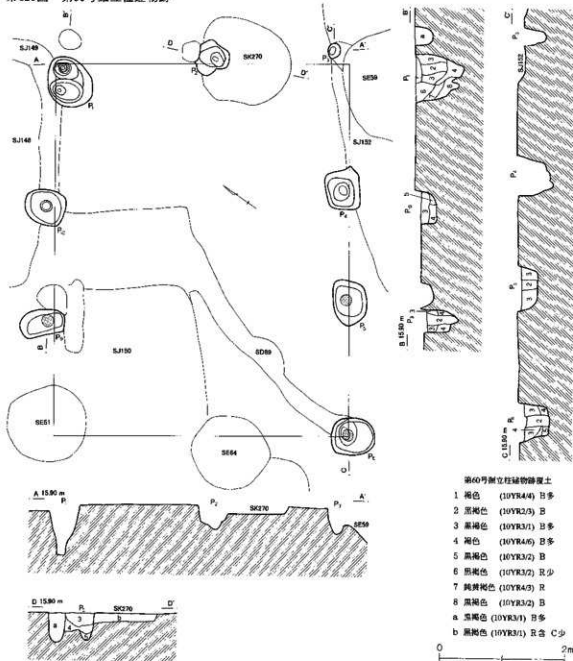
柱掘り方の形状は、丸みを持った方形で、径50cm～100cm、深さ30cm～70cmであった。

遺構は、148・150・152号竪穴住居跡、270号土壇、51・59・64号井戸跡、89号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、竪穴住居跡、土壇より新しく、井戸跡、溝跡よりも古かった。

出土遺物は、土師器環、須恵器長頸瓶が出土した。

1は、土師器環で、P1掘り方から出土した。2は、須恵器長頸瓶である。口縁部の破片で、P6掘り方から出土した。内外面ともに自然軸がわかる。

第425図 第60号掘立柱建物跡



第61号掘立柱建物跡 (第426図・第427図)

W-14・15、X-15グリッドから検出した。

規模は、3間×2間の側柱建物で、桁行5.65m、梁行3.6mであった。面積は、20.34㎡であった。主軸方位はN-41°-Wであった。

柱間寸法は、桁行1.88m、梁行1.8mであった。

柱痕は、P 3～P 10で検出した。

柱掘り方の形状は、丸みを持った方形で、径40cm

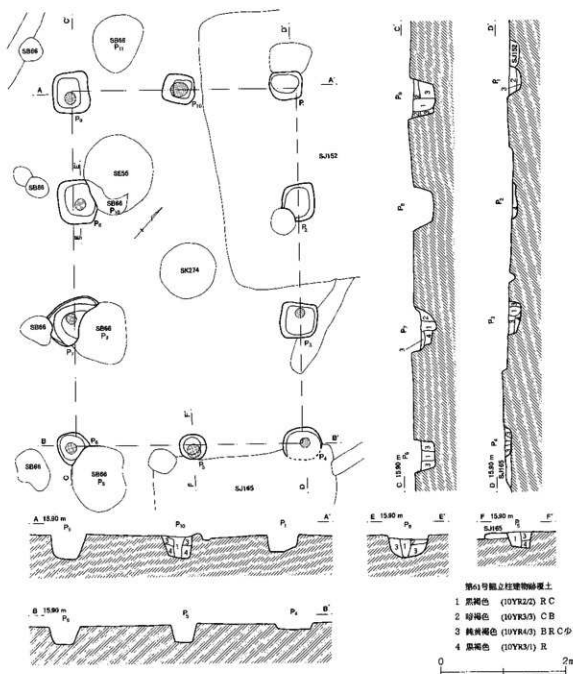
～60cm、深さ15cm～40cmであった。

本遺構は、152号整穴住居跡、66号掘立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は本遺構が最も新しいことが、土層断面の観察で明らかになった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土した。

1は、土師器環の底部と思われるが、内面に漆が付着していた。

第426図 第61号掘立柱建物跡



第427図 第60・61号掘立柱建物跡出土遺物



第60・61号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
60-1	坏	11.4	3.8		ABDE	2	橙	50	黒斑あり
60-2	長頸瓶	(8.6)			BC	1	暗灰	25	産地不明 自然輪
61-1	坏				BDEG	2	橙	破片	内面塗付着

第63号掘立柱建物跡 (第428図)

W-17・18、X-16~18、Y-17グリッドから検出した。遺構の東側は、調査区外へ展開していたため、遺構の全体を明らかにすることはできなかった。

遺構は、9間以上×3間の、長大な東西棟の建物跡であった。

平成9年度に、建物跡の東側に連続する地点の調査を実施したが、調査の結果、建物跡は、さらに東へ展開していることが明らかになり、桁行が10間以上となることが明らかになった。なお、この地点の報告については、次年度以降に報告する。

柱穴は、溝で連結されていた。一部中世の溝跡に埋められていた部分があったため、溝が全周していたかどうかは、明らかにできなかった。

規模は、桁行17m以上、梁行5.4mであった。面積は、91.8m²以上になると考えられる。主軸方位はN-59°-Eであった。

柱間寸法は、桁行1.9m、梁行1.8mであった。

柱痕は、P1~P7・P11~P15で検出した。また、

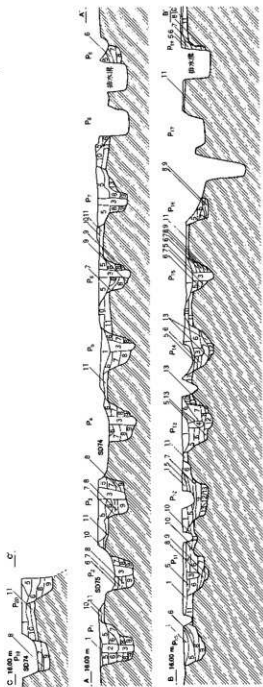
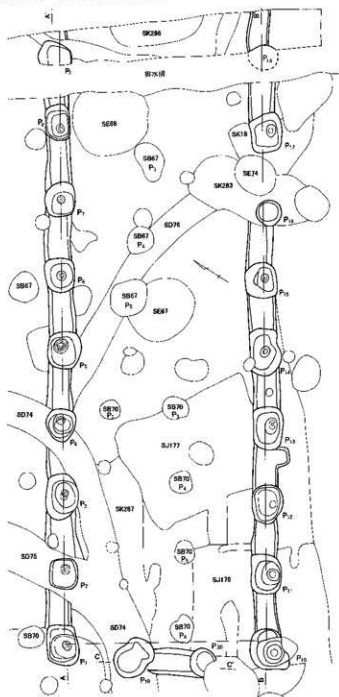
土層断面の観察では、P14とP15では、柱の建替えの痕跡が認められた。

柱掘り方は、幅80cm前後、深さ40cm前後の溝を掘削し、溝を一度埋め戻した後、径100cm~120cmの丸みを持った方形の柱穴を掘り込んでいた。このことから、溝と柱掘り方は重複していたことになるため、柱痕の重複と合わせ、建物建替えが想定される。

柱穴の深さは80cm~100cmであった。柱掘り方底面には、さらに円形の小穴が掘り込まれており、柱痕の位置と重なることから、この部分に柱が建っていたと考えられる。

本遺構は、176・177号竪穴住居跡、67・70・71号掘立柱建物跡、74~76号溝跡、283号土壇、68・74・76号井戸跡と重複していた。遺構の新旧関係は、竪穴住居跡よりも新しく、溝跡・井戸跡・283号土壇よりも古かった。67・70・71号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。



第63号掘立柱建物跡遺土

- 1 黄褐色 (2.5Y5/4) B多
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) B・粘上ブロック
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) B 粘りやや歪
- 4 黒褐色 (10YR3/2) 豆粒状 RC 若干
- 5 黒褐色 (10YR3/1) C 黄赤 R 凝 粘りやや有 (日多 版積上)
- 6 明黄褐色 (2.5Y6/6) B 粘り有
- 7 黄褐色 (2.5Y5/6) B多 6層より明い (日多 版積上)

- 8 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) B 若干 粘り有
- 9 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) B 凝 粘り有
- 10 灰黄褐色 (10YR4/2) RC 黄赤 B 粘り有
- 11 黄褐色 (10YR5/6) B 上体 粘り有
- 12 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) B 粘りやや有 凝てかえ前の古い版立
- 13 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) B 上体 粘り有 凝てかえ前の古い版立

0 2m

第64号掘立柱建物跡 (第429図)

W-14グリッドから検出した。遺構の西側を、38号溝によって壊されていたため、全体を検出することはできなかった。

本遺構は、38号溝の対岸まで展開していなかったことから、2間×2間の総柱建物と考えられる。規模は、桁行3.6m、梁行3.3mであった。面積は11.88m²であった。主軸方位は、N-50°-Wであった。

柱間寸法は、桁行1.8m、梁行1.65mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径50cm～60cm、深さ50cm～60cmであった。

柱底は、P1～P4・P8・P9で検出した。

遺構は、38号溝跡、58号井戸跡と重複していた。遺構の新田関係は、本遺構が最も古かった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第65号掘立柱建物跡 (第430図)

V・W-16グリッドから検出した。遺構北側は、調査区外へ展開しており、遺構の全体は検出できなかった。

規模は、3間以上×2間の側柱建物で、桁行5.7m以上、梁行3.6mであった。主軸方位は、N-17°-Wであった。

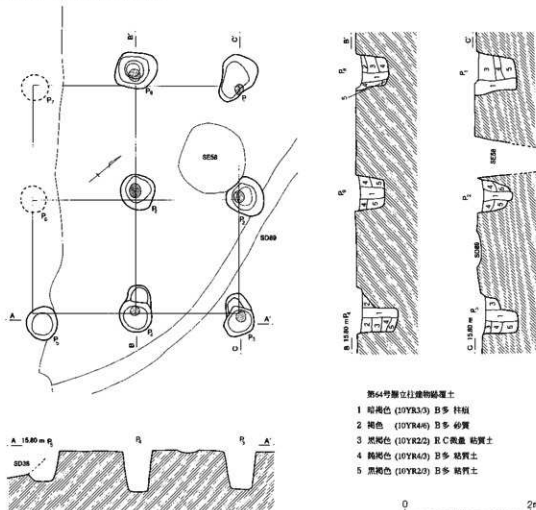
柱間寸法は、桁行1.9m、梁行1.8mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径30cm～50cm、深さ30cm～50cmであった。

柱底は、P2・P3・P5・P7で検出した。

遺構は、61・62号井戸跡、74号溝跡と重複していた。遺構の新田関係は、本遺構が最も古かった。

第429図 第64号掘立柱建物跡



第64号掘立柱建物跡断面土

- 1 黄褐色 (10YR3/5) B多 粘板
- 2 黄色 (10YR4/6) B多 砂質
- 3 黒褐色 (10YR2/2) R C 黄褐色 粘質土
- 4 黄褐色 (10YR4/0) B多 粘質土
- 5 黒褐色 (10YR2/0) B多 粘質土

0 2m

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、
図示可能な遺物は検出できなかった。

第66号独立柱建物跡 (第431図)

W-14・15、X-15グリッドから検出した。

規模は、4間×2間で、西側に庇の付いた建物であった。
身舎の規模は、桁行8.8m、梁行5.3mで、身舎と
庇との間隔は1.3mであった。身舎の面積は、46.64㎡
であった。主軸方位は、N-42°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.2m、梁行2.65mであった。

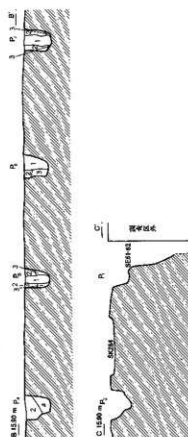
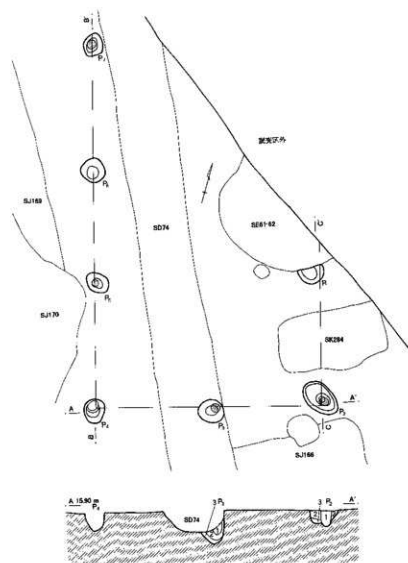
柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径60cm

～120cm、深さ30cm～90cmであった。庇の柱穴は、径30
cm～40cm、深さ20cm～40cmであった。柱痕は、P1・
P3・P4・P7・P8・P11・P17で検出した。

遺構は、152・165号竪穴住居跡、61号独立柱建物跡、
55・59号井戸跡と重複していた。遺構の新旧関係は、
2軒の竪穴住居跡よりも新しく、61号独立柱建物跡・
55・59号井戸跡よりも古かった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、
図示可能な遺物は検出できなかった。

第430図 第65号独立柱建物跡

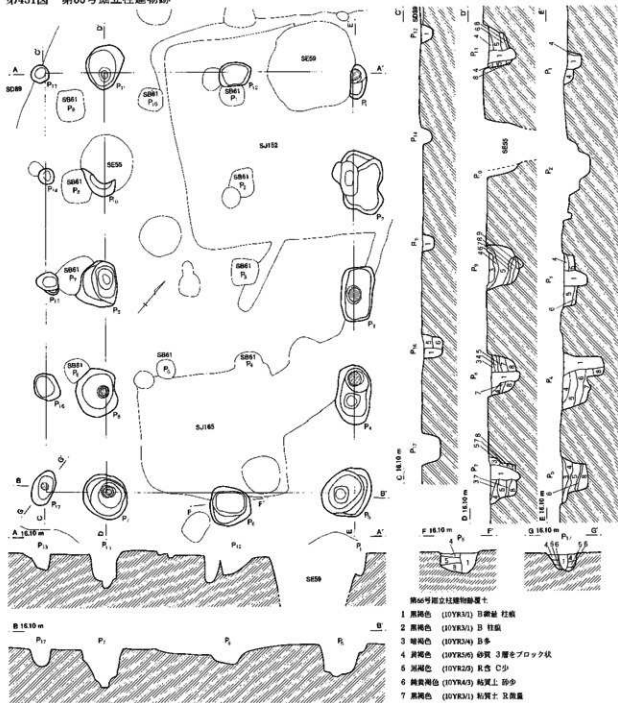


第65号独立柱建物跡断面上

- 1 黒褐色 (10YR3/1) B R 凝 C 柱底
- 2 褐色 (10YR4/4) B 中やや多 締り有
- 3 暗褐色 (10YR3/4) B 凝 C E 締りやや有
- 4 褐色 (10YR4/4) B 凝 締り有



第431図 第66号掘立柱建物跡



第67号掘立柱建物跡 (第432図・第433図)

W・X-17グリッドから検出した。
規模は2間×2間の側柱建物で、桁行5.3m、梁行3.8mであった。面積は、20.14㎡であった。主軸方位は、N-22°-Wであった。
柱間寸法は、桁行2.65m、梁行1.9mであった。
柱掘り方の形状は、円形だが、コーナー部分のみ

「L」字形であった。柱掘り方の径は、60cm~120cm、深さは40cm~60cmであった。

柱痕は、P1・P2・P6~P8で検出した。
遺構は、63号掘立柱建物跡、76号溝跡、67号井戸跡と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。
出土遺物は、P2から須恵器環が出土した。
1は、須恵器の環である。P2掘り方から出土した。

底部から丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反する。
 底部の調整は、糸切り離し後、無調整である。胎土に
 白色針状物質を含んでおり、南比企産と思われる。

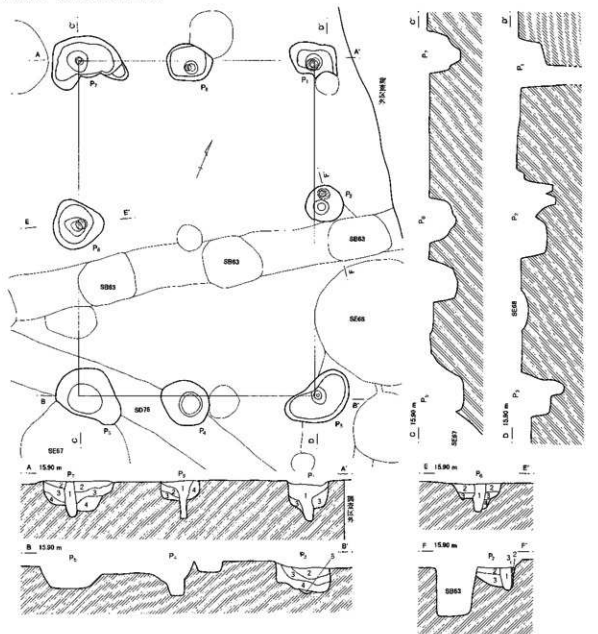
第432図 第67号掘立柱建物跡出土遺物



第67号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
67-1	坏	12.4	3.9	5.4	ABIL	1	灰	50	南比企

第433図 第67号掘立柱建物跡



第67号掘立柱建物跡瓦土

- 1 煎褐色 (10YR3/3) R C 縞りや中割
- 2 暗褐色 (10YR3/4) R C 変
- 3 純黄褐色 (10YR5/4) B 多
- 4 純黄褐色 (10YR5/4) B C 混
- 5 純黄褐色 (10YR5/4) B 多 3 縞り似 縞りや中割
- 6 黄褐色 (10YR5/3) 砂質 B 主体 若干黒褐色土混



第68号掘立柱建物跡 (第434図)

V・W-15グリッドから検出した。

規模は、3間×2間の東西棟の側柱建物で、桁行5.6m、梁行は東側で3.4m、西側で3.8mであった。建物は、梁行の東側と西側で長さが異なるため、やや歪んでいた。面積は、20.16㎡であった。主軸方位は、N-65°-Eであった。

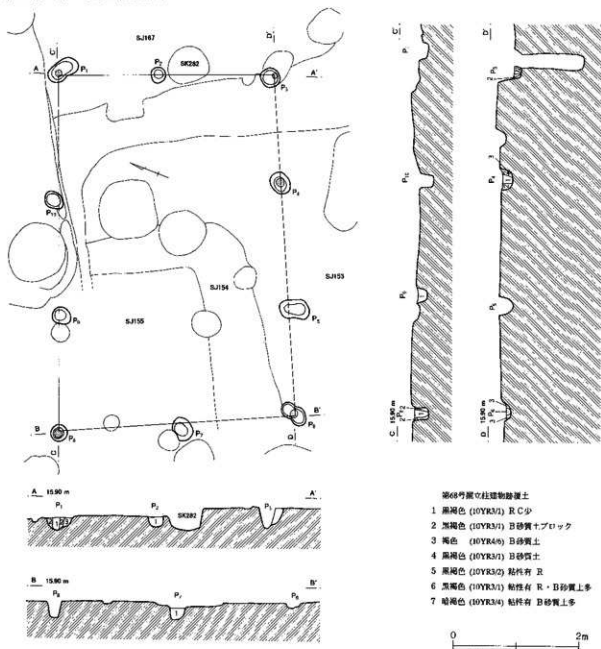
柱間寸法は、桁行1.87m、梁行は東側で1.7m、西側で1.9mであった。

柱掘り方の形状は、円形または方形で、径20cm～30cm、深さ20cm～30cmであった。

柱痕はP1・P3・P4・P6・P8で検出した。本遺構は、153～156・157号堅穴住居跡と重複していた。新旧関係は、本遺構が最も新しかった。出土遺物は検出できなかった。

本遺構は、柱穴の規模、形状、覆土の状況が、他の中世の掘立柱建物跡に似ていることから、中世の建物跡の可能性はある。

第434図 第68号掘立柱建物跡



第69号掘立柱建物跡 (第435図)

Y-15グリッドから検出した。

規模は、2間×2間の側柱建物で、桁行3.6m、梁行3.0mであった。面積は、10.8㎡であった。主軸方位はN-11°-Wであった。

柱間寸法は、桁行1.8m、梁行1.5mであった。

柱掘り方の形状は、U形で、径30cm～50cm、深さ40cm～60cmであった。

柱痕は、P1～P5・P8で検出した。

本遺構は、8号性格不明遺構と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにすることはできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第70号掘立柱建物跡 (第436図)

X-16・17グリッドから検出した。遺構は、75号溝によっ

て壊されていたため、P7・P9は検出できなかった。

規模は、3間×2間の東西棟の側柱建物で、桁行6.0m、梁行4.0mであった。面積は、24.0㎡であった。主軸方位は、N-55°-Eであった。

柱間寸法は、桁行・梁行ともに2.0mであった。

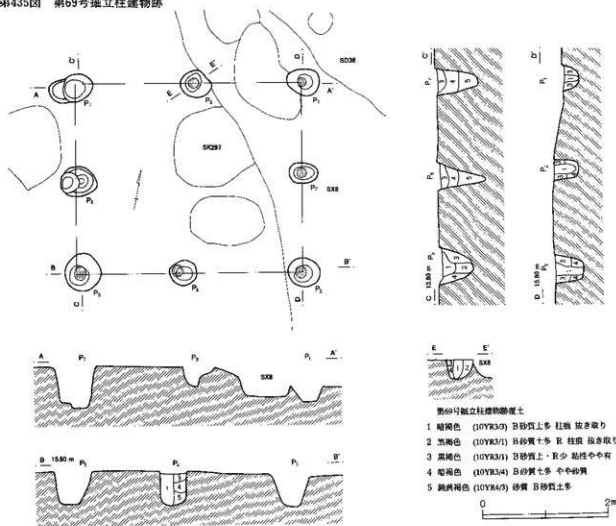
柱掘り方の形状は、U形で、径30cm～60cm、深さ40cm～50cmであった。

柱痕は、P1・P4・P5・P8・P10で検出した。

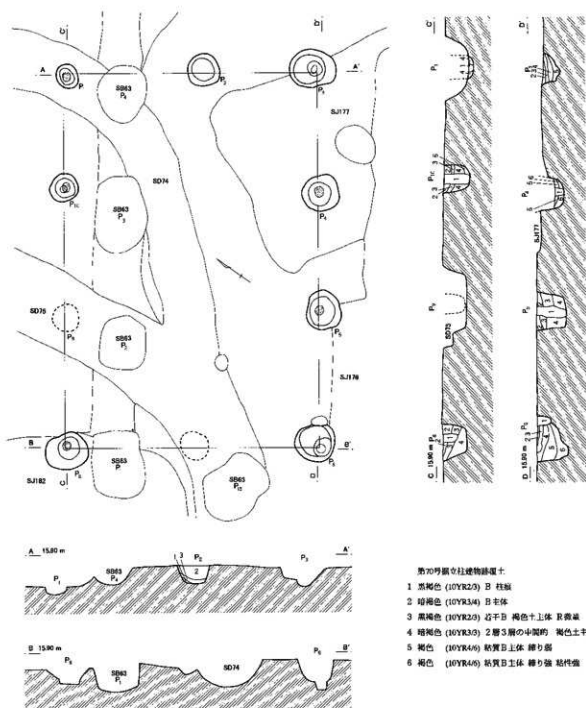
遺構は、176・177号竪穴住居跡、63号掘立柱建物跡、74・75号溝跡と重複していた。新旧関係は、竪穴住居跡よりも新しく、溝跡よりも古かった。63号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第435図 第69号掘立柱建物跡



第436図 第70号掘立柱建物跡



第70号掘立柱建物跡断面

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 柱頭
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 柱主体
- 3 黒褐色 (10YR2/3) 若干目 褐色土主体 葎草葉
- 4 暗褐色 (10YR3/3) 2層3層の中間的 褐色土主体
- 5 褐色 (10YR4/6) 粘質土主体 縷り面
- 6 褐色 (10YR4/6) 粘質土主体 縷り強 粘付面



第71号掘立柱建物跡 (第437図)

X-16・17グリッドから検出した。遺構は、74・75号溝跡によって壊されていたため、P1・P4は検出できなかった。

規模は、2間×2間の東西に長い掘立柱建物で、桁行3.7m、梁行3.0mであった。面積は、11.1㎡であった。主軸方位は、N-62°-Eであった。

柱間寸法は、桁行1.85m、梁行1.5mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径30cm～50cm、深さ20

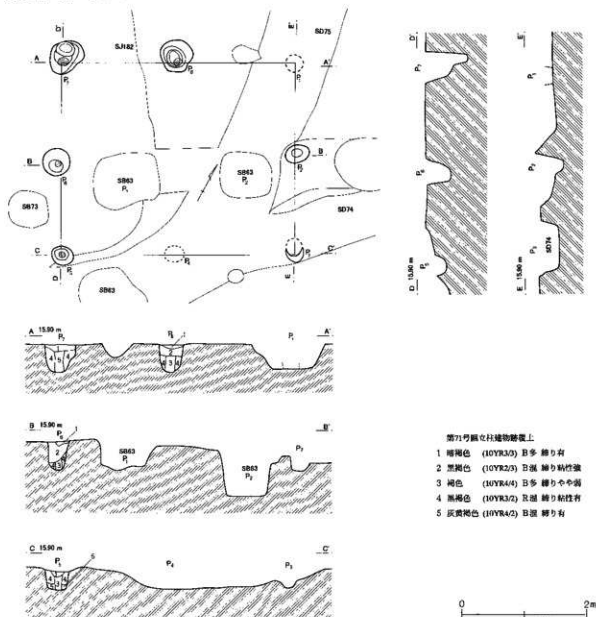
cm～40cmであった。

柱痕は、P5～P8で検出した。

遺構は、182号竪穴住居跡、63号掘立柱建物跡、74・75号溝跡と重複していた。新旧関係は、182号竪穴住居跡より新しく、74・75号溝跡より古かった。63号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第437図 第71号掘立柱建物跡



第72号掘立柱建物跡 (第438図)

X-15・16グリッドから検出した。

規模は、2間×2間の総柱の建物跡で、桁行2.9m、梁行2.9mであった。面積は、8.41m²であった。主軸方位はN-26°-Wであった。

柱間寸法は、桁行・梁行ともに1.45mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径40cm～60cm、深さ40cm～50cmであった。

柱痕は、P1～P3、P5～P9で検出した。

遺構は190号竪穴住居跡と重複していた。遺構の新旧関係は、本遺構の方が新しかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第73号掘立柱建物跡 (第439図)

X-13グリッドから検出した。63号掘立柱建物跡の西側に隣接していた。また、38号溝跡によって壊されていた。

規模は、4間×3間の側柱建物で、桁行7.2m、梁行5.7mであったが、梁行の北側が3間で、南側が2間という特異な建物であった。面積は、41.04m²であった。主軸方位は、N-30°-Wであった。また、P4-P8を結んだ線上にピットを2基検出したが、いずれも38号溝よりも新しく、本遺構に伴うものではなかった。

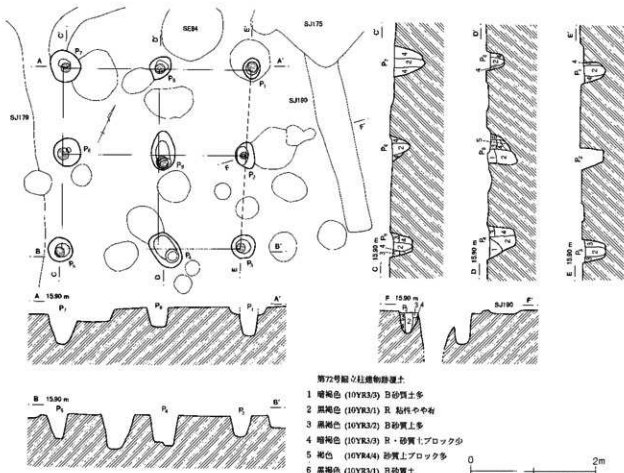
柱間寸法は、桁行1.8m、梁行は北側で1.9m、南側で2.85mであった。

柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径70cm～100cm、深さ50cm～70cmであった。柱痕は、P1・P3・P5・P7・P10・P12・P13で検出した。

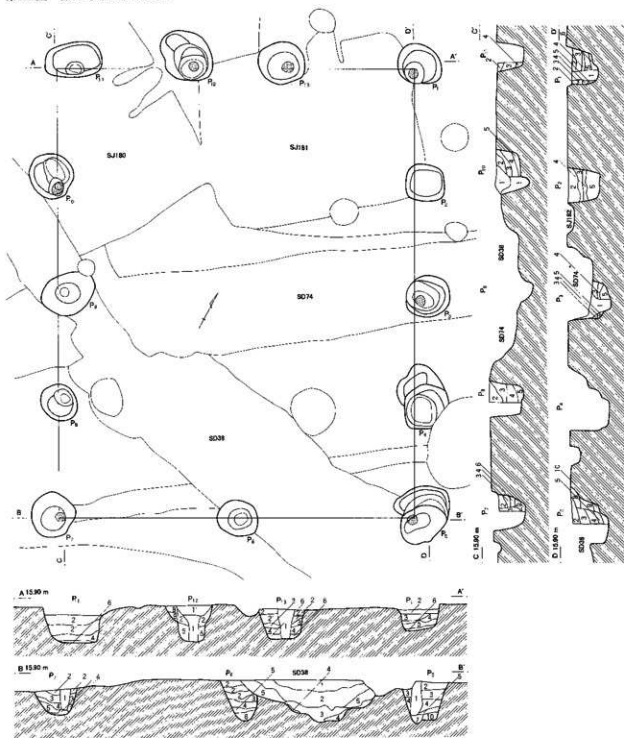
本遺構は、180～182号竪穴住居跡、38・74号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、3軒の竪穴住居跡よりも新しく、38・74号溝跡よりも古かった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第438図 第72号掘立柱建物跡



第439図 第73号掘立柱建物跡



第73号掘立柱建物跡遺土

- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1 暗褐色 (10YR3/3) R C B 混 練り中 中固 粘性强 柱版 | 5 灰褐色 (10YR3/2) B 多 練り粘性有 |
| 1' 暗褐色 (10YR3/3) 1層に比<粒了多 | 6 黄褐色 (10YR5/4) B 多 練り粘性有 |
| 2 暗褐色 (10YR4/2) R C B 混 練り中 中固 | 7 暗褐色 (10YR3/3) B 少 R C 混 |
| 2' 暗褐色 (10YR4/2) 2層に比<粒了多 | 8 暗褐色 (10YR4/2) 砂質 B 多 F 練り有 |
| 3 暗褐色 (10YR4/2) B 多 練り粘性強 R C 混 | 9 暗褐色 (10YR4/2) 1層と混入物混似 粘土質灰褐色土 上体 練り強 |
| 4 黒褐色 (10YR3/2) B 少 R C 混 | 10 暗褐色 (10YR4/2) R C 混 粘性强 練り有 |



第74号掘立柱建物跡 (第440図)

X-13グリッドから検出した。

規模は、3間×2間の側柱の建物で、桁行5.0m、梁行3.3mであった。面積は、16.5㎡であった。主軸方位は、N-35°-Wであった。

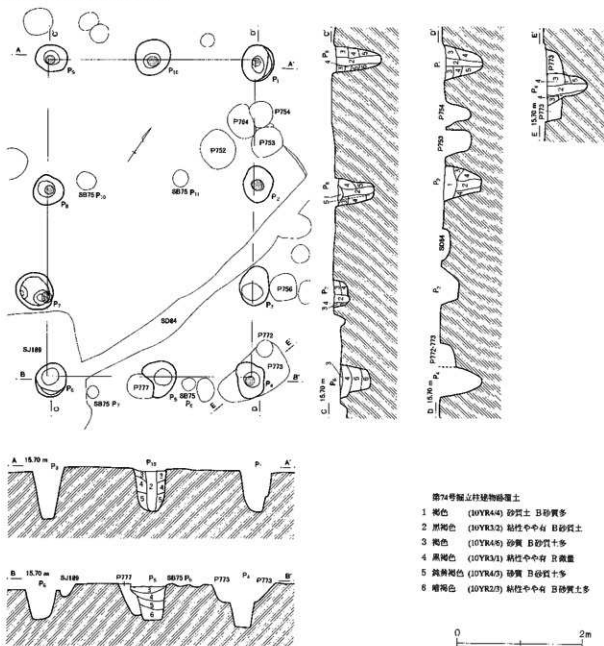
柱間寸法は、桁行1.67m、梁行1.65mであったが、梁行のP1-2間、P8-9間が2.0mと長くなっていた。

柱掘り方の形状は、円形で、径40cm~50cm、深さ60cm~70cmであった。柱痕は、P1・P2・P4・P7~P10で検出した。

本遺構は、189号竪穴住居跡、75号掘立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、189号竪穴住居跡より新しく、75号掘立柱建物跡よりも古かった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第440図 第74号掘立柱建物跡



第75号掘立柱建物跡 (第441図)

X-13グリッドから検出した。本来は、188号・189号
 竪穴住居跡の方へ展開していたと考えられるが、住居
 跡の調査が先行したため、確認できなかった。また、
 竪穴住居跡の床面からは、掘立柱建物跡の柱穴は検出
 できなかった。

規模は、4間以上×3間で、桁行6.0m、梁行3.5m
 であったが、P8-P9間が3.1mと短くなるため、垂
 んだ平面形状をしていた。面積は、20㎡以上であった

と考えられる。主軸方位は、N-52°-Eであった。

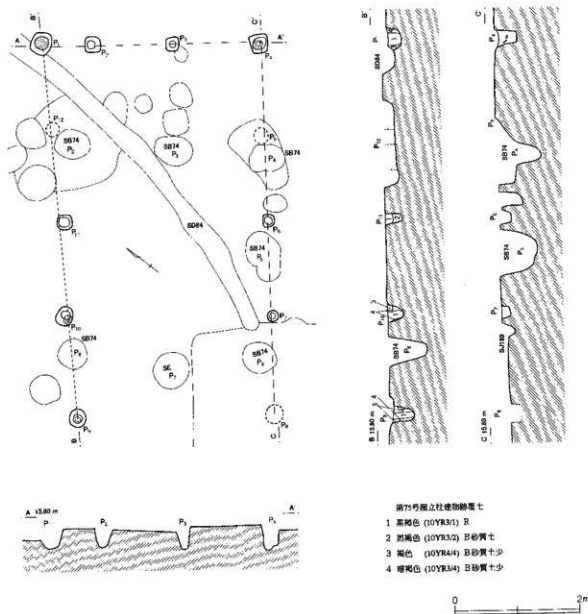
柱穴掘り方の形状は、方形で、径20cm～30cm、深さ
 30cm～40cmであった。

柱痕は検出できなかった。

本遺構は、74号掘立柱建物跡と重複していた。遺構
 の新旧関係は明らかにできなかったが、出土遺物から、
 本遺構の方が新しいと考えられる。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片の他、図示不可
 能であったが、中世陶器の破片が出土した。

第441図 第75号掘立柱建物跡



第76号掘立柱建物跡 (第442図)

X-13グリッドから検出した。遺構の大半は、ポンプ小屋の掘乱によって破壊されており、全体は検出できなかった。

遺構は、東西2間、南北1間分を検出し、総柱の建物跡であったと考えられる。規模は、東西3.4m、南北は1.8mであった。仮に2間×2間の総柱建物であるとする、東西3.4m、南北3.6mとなる。主軸方位は、N-30°-Wであった。

柱掘り方の形状は、方形で、径20cm~30cm、深さ10cm~40cmであった。

柱痕は検出できなかった。

遺構は、86号井戸跡と重複していた。遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

出土遺物は検出できなかったが、柱穴の規模や形状などが、他の中世の建物跡と同じであることから、中世の掘立柱建物跡であると考えられる。

第77号掘立柱建物跡 (第443図)

X-14グリッドから検出した。

規模は2間×2間の側柱建物で、桁行4.4m、梁行3.35mであった。面積は、14.74㎡であった。主軸方位は、N-44°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.2m、梁行1.68mであった。

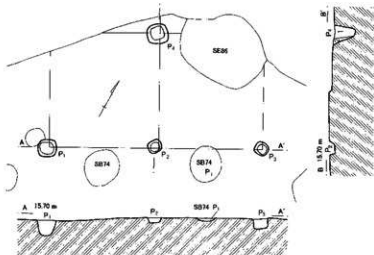
柱掘り方の形状は、円形で、径30cm~60cm、深さ40cm~80cmであった。

柱痕はP2・P3・P8で検出した。

遺構は183号竪穴住居跡、296-302号土壇と重複していた。遺構の新旧関係は、183号竪穴住居跡より新しいことを確認したが、他の遺構は明らかにすることはできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

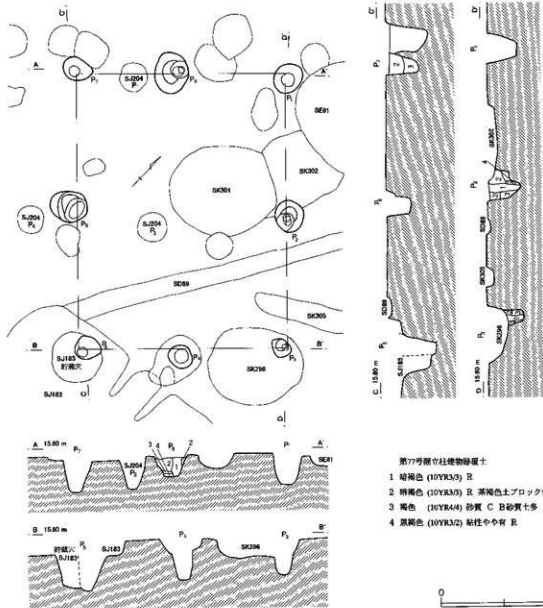
第442図 第76号掘立柱建物跡



第76号掘立柱建物跡遺土
1 黄褐色 (10YR3/1) R
2 黄色 (10YR4/4) B 砂質土



第443図 第77号掘立柱建物跡



- 第77号掘立柱建物跡土
- 1 黄褐色 (10YR3/3) R
 - 2 黄褐色 (10YR3/3) R 茶褐色土ブロック多
 - 3 黄色 (10YR4/4) 砂質 C B砂質多
 - 4 黄褐色 (10YR3/2) 粘性やや有 R



第78号掘立柱建物跡 (第444図)

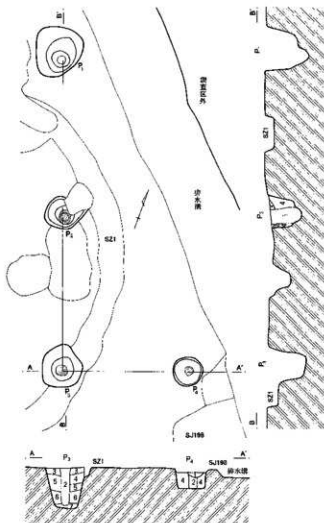
Y-19グリッドから検出した。遺構の大半は調査区外へ展開していたため、全体を検出することはできなかったが、南辺1間分、西辺2間分を検出した。

規模は、南辺が2.0m、西辺が4.9mであった。柱間距離は、南辺が2.0m、西辺が2.45mであった。柱振り方の形状は円形だが、P1とP4のみ規模の大きい不整形をしていた。本来は「L」字形であったと思われ、この2基の柱穴は、コーナー部分であった可能性がある。コーナー部分が「L」字形の建物跡は、

本遺跡の場合、規模の大きい建物跡に多く、西辺の2間は、梁であったと思われる。したがって、本遺構は、梁行2間の東西棟であった可能性がある。本遺構を東西棟と仮定した場合、主軸方位はN-70°-Eとなる。

柱穴は、P2～P4で検出した。遺構は、1号周溝状遺構、760号ピットと重複していた。遺構の新田関係は、本遺構が最も新しかった。出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第444図 第78号掘立柱建物跡



第78号掘立柱建物跡覆土

- 1 褐色 (7.5YR4/3) R多 細りやや有 柱痕
- 2 暗褐色 (7.5YR3/5) 粘り有 瓦礫付 柱痕
- 3 褐色 (7.5YR4/5) B 細り有 上層硬質土
- 4 黒褐色 (7.5YR3/2) R C混 細り有
- 5 黒褐色 (10YR3/2) R混 上層片多
- 6 褐色 (10YR4/4) B多 R混
- 7 暗褐色 (10YR3/5) 粘り有 B 細りやや有

第82号・78号掘立柱建物跡

Z-19・20グリッドから検出した。

第82号掘立柱建物跡 (第445図)

62号掘立柱建物跡は、79号掘立柱建物跡に壊されていたため、全体を検出することはできなかった。

規模は、3間×2間の側柱建物で、桁行6.6m、梁行4.4mであった。面積は、29.04㎡であった。主軸方位は、N-21°Wであった。

柱間寸法は、桁行2.2m、梁行2.2mであった。

柱掘り方の形状は、楕円形、または丸みを持った方形で、径80cm~100cm、深さ60cm~70cmであった。

柱痕は、P4・P8で検出した。

本遺構は、200・209・210号竪穴住居跡、79号掘立柱建物跡と重複していた。新旧関係は、竪穴住居跡より新しく、79号掘立柱建物跡よりも古かった。

出土遺物は、検出できなかった。

第79号掘立柱建物跡 (第445図)

第79号掘立柱建物跡は、62号掘立柱建物跡を壊して建てられていた。

規模は、6間×2間の溝持ちの建物であった。桁行は12.8m、梁行は3.9mであった。面積は、49.92㎡であった。主軸方位はN-17°Wであった。

柱間寸法は、桁行2.13m、梁行1.95mであった。

柱掘り方の形状は、長方形または楕円形で、コーナー部分のみ「L」字形であった。掘り方の規模は、径1.2m~1.3m、深さ60cm~80cmであった。

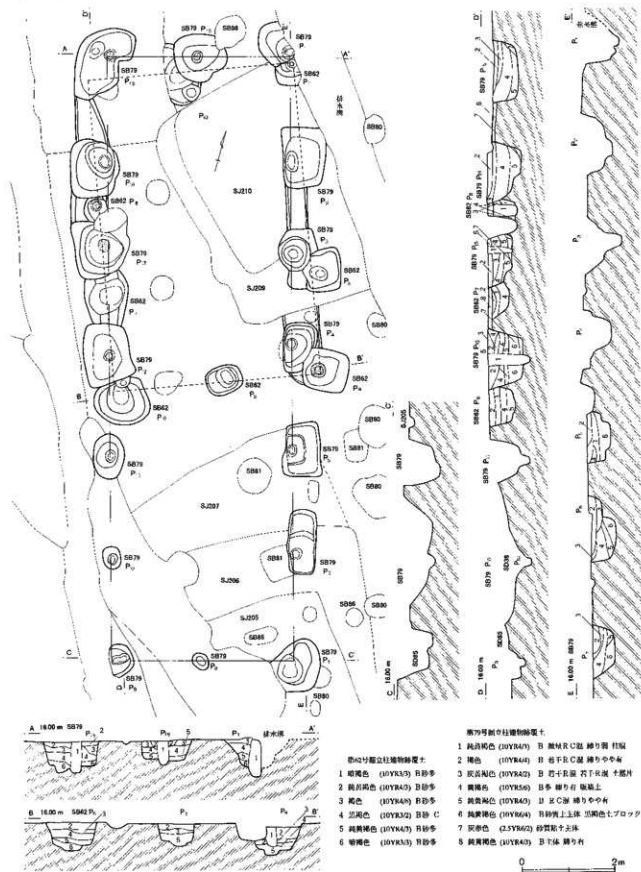
また、P2~P4、P12~P15は、幅50cm~70cm、深さ15cmの浅い溝で連結していた。P8~P11までは、38・85号溝跡によって破壊されていたため、溝が全周していたかどうかは明らかにできなかった。

土層断面の観察では、柱掘り方の覆土が、連結する溝の覆土を切っていることを確認した。このことから、建物跡は、建替えられていた可能性がある。

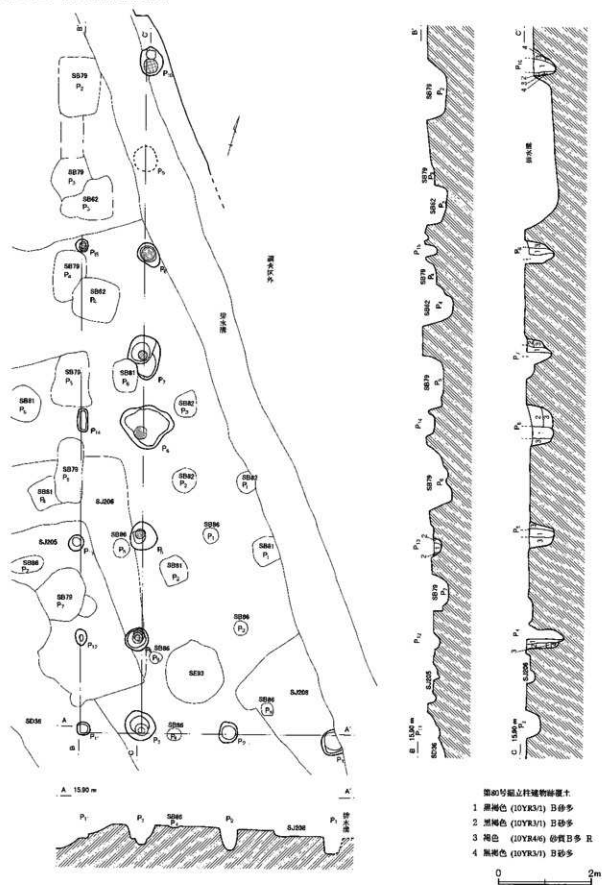
柱痕は、P1・P11~P16で検出した。

遺構は、200・205~207・209・210号竪穴住居跡、62・80・81号掘立柱建物跡、38・85号溝跡など、多くの遺構跡と重複していた。遺構の新旧関係は、全ての竪穴住居跡、掘立柱建物跡よりも新しく、38・85号溝跡よりも古かった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が多く出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。また、鉄製品としてP2掘り方から鉄鏝が出土した。



第446图 第80号掘立柱建物跡



第80号孤立柱建物跡 (第446図)

Z・AA-20グリッドから検出した。遺構の北側と東側は調査区外へ展開し、また、79号孤立柱建物跡に壊されていたため、遺構の全体を検出できなかった。

遺構は、7間以上×2間以上の庇付きの側柱建物であった。庇は、西面に付設されていた。

規模は、桁行14.0m以上、梁行4.2m以上であった。身舎の面積は、58.8㎡以上になると考えられる。主軸方位は、N-17°-Wであった。

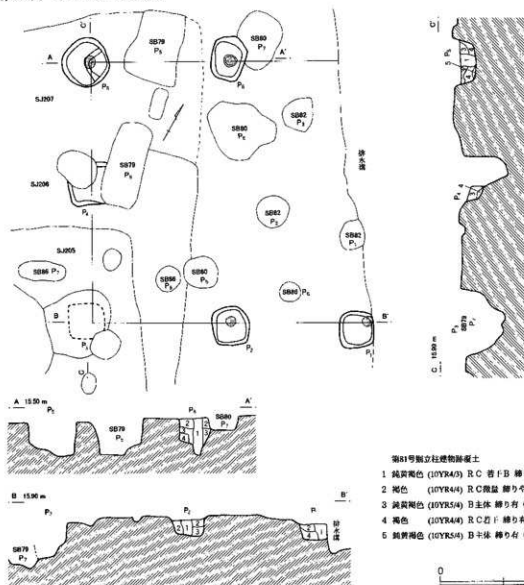
柱間寸法は、桁行2.0m、梁行2.1mであった。身舎と庇との距離は1.3mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径40cm～80cm、深さ40cm～70cmであった。庇の柱穴の形状は、円形で、径20cm～30cm、深さ20cm～30cmであった。柱痕は、P4～P8・P10、庇のP15で検出した。

遺構は、205～208号竪穴住居跡、62・79・81号孤立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、竪穴住居跡・81号孤立柱建物跡より新しく、79号孤立柱建物跡よりも古かった。62号孤立柱建物跡との新旧関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第447図 第81号孤立柱建物跡

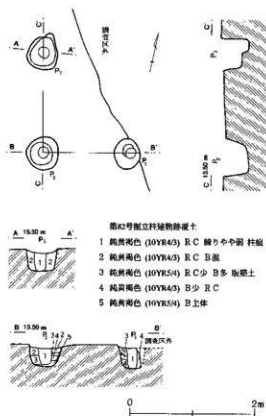


第81号孤立柱建物跡出土

- 1 純黄褐色 (10YR4/3) RC 若干B 埴りや全周 柱痕
- 2 褐色 (10YR4/4) RC 腹盤 埴りや全有
- 3 黄褐色 (10YR5/4) B 主体 埴り有 (Bによる灰原土)
- 4 褐色 (10YR4/4) RC 若干B 埴り有
- 5 純黄褐色 (10YR5/4) B 半埴 埴り有 (Bによる灰原土)



第448図 第82号掘立柱建物跡



第81号掘立柱建物跡 (第447図)

AA-20グリッドから検出した。遺構は、東側が調査区外へ展開していたため、全体を検出することはできなかった。

規模は、2間以上×2間の東西棟の側柱建物で、桁行4.4m以上、梁行4.2mであった。面積は、18.5m以上になると考えられる。主軸方位は、N-59°-Eであった。

柱間寸法は、桁行2.2m、梁行2.1mであった。

柱掘り方の形状は丸みを持った方形で、径50cm～60cm、深さ30cm～60cmであった。

柱底は、P1・P2・P5・P6で検出した。

遺構は、205～207号竪穴住居跡、79・80号掘立柱建物跡と重複していた。新旧関係は、竪穴住居跡よりも新しく、79・80号掘立柱建物跡よりも古かった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第82号掘立柱建物跡 (第448図)

AA-20グリッドから検出した。80号掘立柱建物跡の内側で検出した。遺構は、北東側が調査区外へ展開していたため、南西コーナーにあたる、3基の柱穴のみ検出できた。

規模は、東西1.4m、南北1.6mであった。主軸方位は、N-16°-Wであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径40cm～50cm、深さ30cm前後であった。柱底は、全ての柱穴で検出した。

遺構は80・81号掘立柱建物跡と重複していたと考えられるが、新旧関係は明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

本遺構は、掘立柱建物跡としては、柱間寸法が狭いため、総柱の建物跡か、あるいは、竪穴住居跡の柱穴であった可能性がある。

第83号掘立柱建物跡 (第449図)

AA・AB-19・20グリッドから検出した。遺構の南側のP5は、84号掘立柱建物跡に壊されていたため、検出できなかった。

規模は、4間×2間の側柱建物で、桁行8.4m、梁行4.2mであった。面積は、35.28m²であった。主軸方位は、N-23°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.1m、梁行2.1mであった。

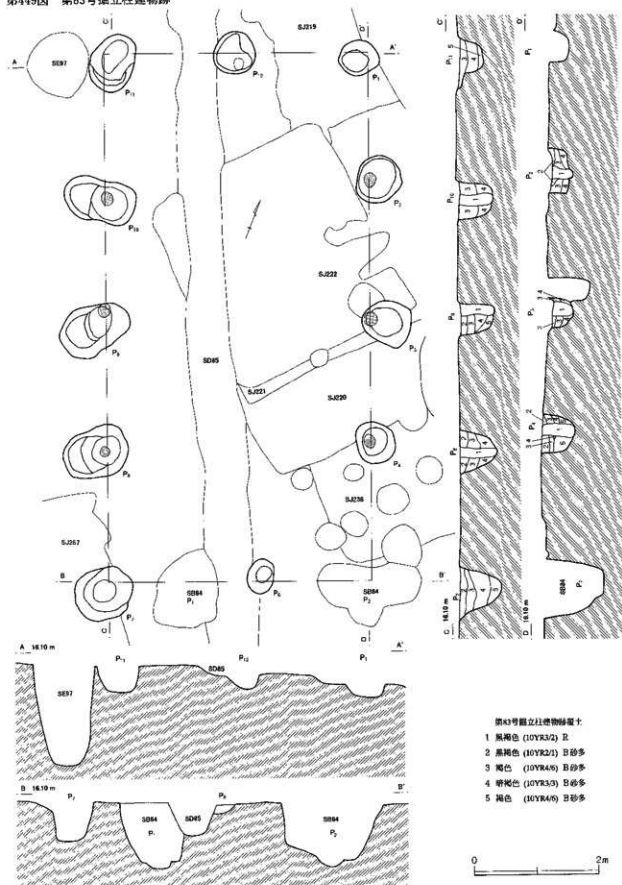
柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径60cm～120cm、深さ30cm～70cmであった。

柱底は、P2～P4・P8～P10で検出した。

本遺構は、219～222・238号竪穴住居跡、84号掘立柱建物跡、38・85号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、竪穴住居跡よりも新しく、84号掘立柱建物跡、38・85号溝跡よりも古かった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第449图 第83号孤立柱建物跡



第84号・88号掘立柱建物跡

AB・AC-20・21グリッドから検出した。

84号・88号掘立柱建物跡は、主軸方位を同一に、入れ子状に重複していた。

第84号掘立柱建物跡（第450図・第451図）

84号掘立柱建物跡は、88号掘立柱建物跡の外側で検出した。建物は、5間×2間の溝持ちの側柱建物であった。

規模は、桁行10.0m、梁行5.6mであった。面積は、56.0㎡であった。主軸方位は、N-20°-Wであった。

柱穴は、P2～P5、P6～P7、P8～P12が、幅50cm～60cm、深さ15cm～20cmの溝で連結されていた。溝は全周していたかどうかは明らかにできなかった。柱間寸法は、桁行2.0m、梁行2.8mであった。

柱掘り方の形状は、楕円形または長方形で、径100cm～170cm、深さ100cm～120cmであった。柱掘り方と溝には、版築状に土が充填されていた。

柱痕は、P2・P3・P6・P9～P11・P13・P14で検出した。

遺構は、249・250・286号竪穴住居跡、83・85・88・90号掘立柱建物跡、105号井戸跡、85号溝跡と重複していた。遺構の新田関係は、105号井戸跡、85号溝跡よりも古く、竪穴住居跡、83・88・90号掘立柱建物跡よりも新しく、85号掘立柱建物跡との新田関係は、明らかにすることはできなかった。

出土遺物は、須恵器の環が出土した。

1は、須恵器環で、P11・P12の間の溝から出土した。環底部の調整は、糸切り離し後、周辺部回転削り調整である。底部は、斜めに削られているため、丸みを持っている。口縁端部は僅かに外反する。

第88号掘立柱建物跡（第451図）

88号掘立柱建物跡は、84号掘立柱建物跡の内側で検出した。柱穴の多くは、88号掘立柱建物跡に破壊されていたため、遺構の全体は検出することはできなかった。

た。

規模は、5間×2間の側柱建物で、桁行9.5m、梁行5.1mであった。面積は、48.45㎡であった。主軸方位は、N-20°-Wであった。

柱間寸法は、桁行1.9m、梁行2.55mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径50cm前後、深さ60cm～80cmであった。

柱痕は、検出できなかった。

本遺構は、84号掘立柱建物跡と重複していた。遺構の新田関係は、84号掘立柱建物跡よりも古かった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第85号掘立柱建物跡（第452図）

AB-20・21グリッドから検出した。遺構は、38号溝に壊されていたため、P4・P5は検出できなかった。

規模は、5間×2間の側柱建物で、桁行10.0m、梁行5.6mであった。主軸方位は、N-21°-Wであった。柱間寸法は、桁行2.0m、梁行2.8mであった。

柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径50cm～150cm、深さ30cm～50cmであった。

柱痕は、P3・P7で検出した。

本遺構は、238・249・250号竪穴住居跡、84・88号掘立柱建物跡、38号溝跡と重複していた。遺構の新田関係は、竪穴住居跡より新しく、38号溝より古かった。84・88号掘立柱建物跡との新田関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

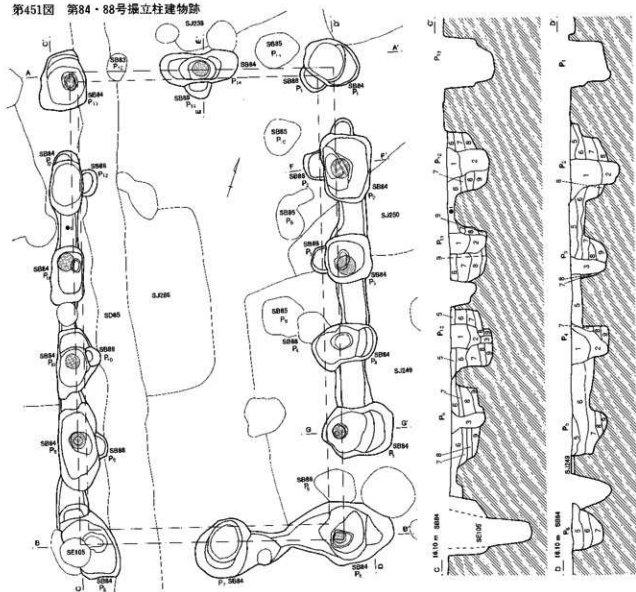
第450図 第84号掘立柱建物跡出土遺物



第84号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
84-1	環	14.1	3.8	8.0	B J	2	灰	90	口縁端部に黒色付着物

第451图 第84·88号撮立柱建物跡



第84号撮立柱建物跡覆土

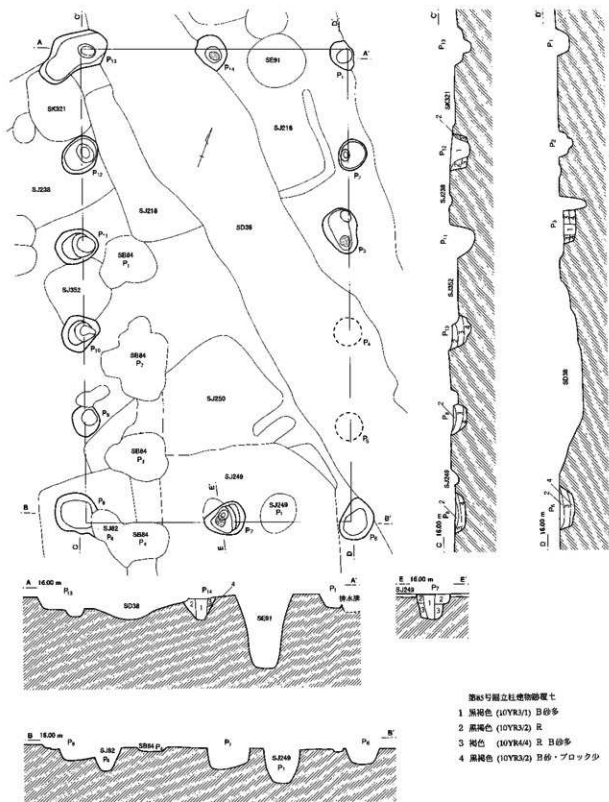
- 1 暗褐色 (10YR3/3) B 砂多
- 2 灰褐色 (10YR2/1) 粘性有
- 3 褐色 (10YR4/4) B 砂多
- 4 暗褐色 (10YR3/3) B 砂多
- 5 褐色 (10YR4/6) B 砂多
- 6 暗褐色 (10YR3/3) 粘性有
- 7 暗褐色 (10YR4/6) B 砂多
- 8 灰褐色 (10YR2/1) B 砂微量 粘性有
- 9 褐色 (10YR4/6) B 砂多

第88号撮立柱建物跡覆土

- 1 灰褐色 (10YR2/1) B 砂多
- 2 灰褐色 (10YR2/1) 粘性有
- 3 褐色 (10YR4/6) B 砂多
- 4 灰褐色 (10YR2/1) 粘性有
- 5 褐色 (10YR4/6) B 砂多
- 6 暗褐色 (10YR3/3) B 砂多



第452図 第85号掘立柱建物跡



第86号掘立柱建物跡 (第453図)

AA-20グリッドから検出した。P5~P7は、本来存在していたと思われるが、検出できなかった。

規模は、2間×2間の総柱の建物で、桁行・梁行ともに3.9mであった。面積は、15.21㎡であった。主軸方位は、N-32°-Wであった。

柱間寸法は、桁行1.95m、梁行は、P1-P2間が2.1m、P2-P3間が1.8mであった。また、P8は、外側に張り出していた。

柱掘り方の形状は、方形または円形で、径25cm~30cm、深さ20cm~25cmであった。

柱底は、検出できなかった。

遺構は、205号・208号竪穴住居跡、80・81号掘立柱建物跡、38号溝跡と重複していた。新旧関係は、明らか

かにできなかった。

出土遺物は、検出できなかったが、柱穴の形状、規模等から、中世の建物であった可能性がある。

第87号掘立柱建物跡 (第454図)

AA・AB-18・19グリッドから検出した。

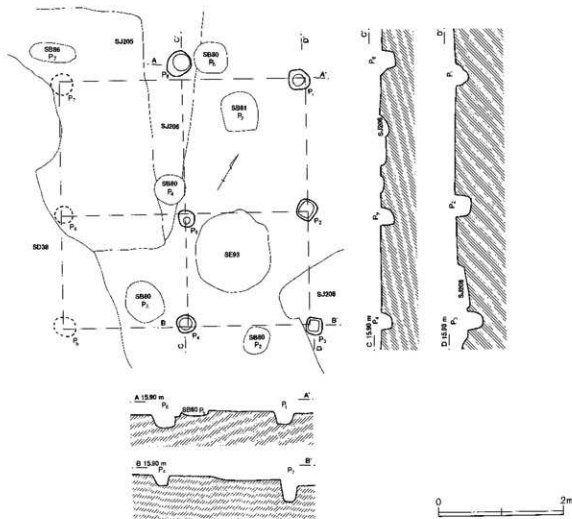
建物跡は、4間×3間の東西棟の建物跡、あるいは、3間×2間の2面庇の建物跡と考えられる。総柱建物を想定して柱穴の検出に努めたが、P9-P18間では柱穴は検出できなかった。

建物の規模は、4間×3間の建物跡と想定した場合、桁行8.2m、梁行5.5m、面積は45.1㎡となる。

桁側のP5~P7とP12~P14は、外側に張り出していた。主軸方位は、N-57°-Eであった。

柱間寸法は、桁行2.05m、梁行1.83mであったが、

第453図 第86号掘立柱建物跡



P1-P2間と、P10-P11間が2.1mと、長かった。
柱掘り方の形状は、円形で、径30cm~50cm、深さ40cm~60cmであった。

柱底は、P1~P8・P13・P14で検出した。

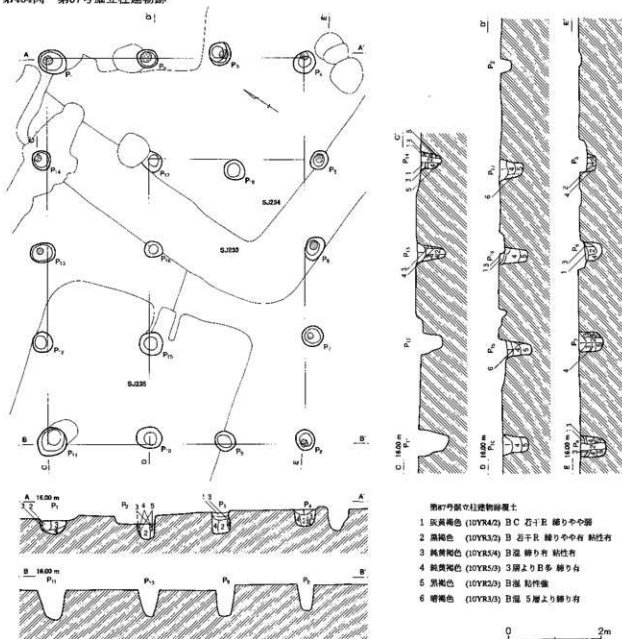
また、本遺構を、3間×2間の2面庇とした場合、
身舎よりも庇の方が柱間寸法が長くなる。しかし、北
面に庇が付くなど、不自然な点もあることから、3間

×2間の建物から4間×3間の建物へと建て替えられ
た可能性もある。しかし、土層断面の観察では、建て
替えの痕跡は確認できなかった。

遺構は、230・233~235号竪穴住居跡と重複してい
た。新田関係は、本遺構が最も新しかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出したが、
図示可能な遺物は検出できなかった。

第454図 第87号掘立柱建物跡



第89号掘立柱建物跡 (第455図)

AG-18グリッドから検出した。建物の南西は、調査区外へ展開していたため、東側の柱列2間分のみ検出した。

建物跡は、検出した3基の柱穴を桁と考えた場合、2間×2間の建物が想定でき、梁と考えた場合、梁行2間の東西棟の建物が想定できる。

規模は、P1～P3の長さは4.0mであった。主軸方位は、N-35°-Wであった。

柱間寸法は、2.0mであった。

柱掘り方の形状は、P1・P3が方形で、P2は円形であった。規模は、径70cm～80cm、深さ40cm～70cmであった。

柱底は、全ての柱穴で検出した。

遺構は、279号竪穴住居跡と重複していた。遺構の新旧関係は、本遺構の方が新しかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出上したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第80号掘立柱建物跡 (第456図)

AC-21グリッドから検出した。建物跡は、84号掘立柱建物跡に壊されていたため、P8は検出することができなかった。

規模は、2間×2間の側柱建物で、桁行3.6m、梁行3.35mであった。面積は、12.06m²であった。主軸方位は、N-28°-Wであった。

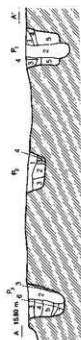
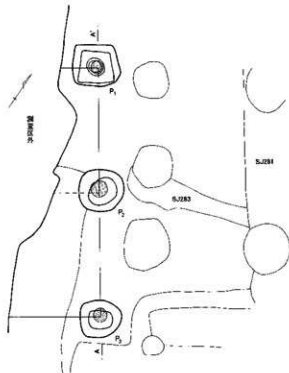
柱間寸法は、桁行1.8m、梁行1.68mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径30cm～40cm、深さ50cm～60cmであった。柱底はP1～P6で検出した。

本遺構は、298・309号竪穴住居跡、84号掘立柱建物跡、277号土壇と重複していた。遺構の新旧関係は、竪穴住居跡よりも新しく、84号掘立柱建物跡よりも古かった。277号土壇との新旧関係は、明らかにすることができなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第455図 第89号掘立柱建物跡

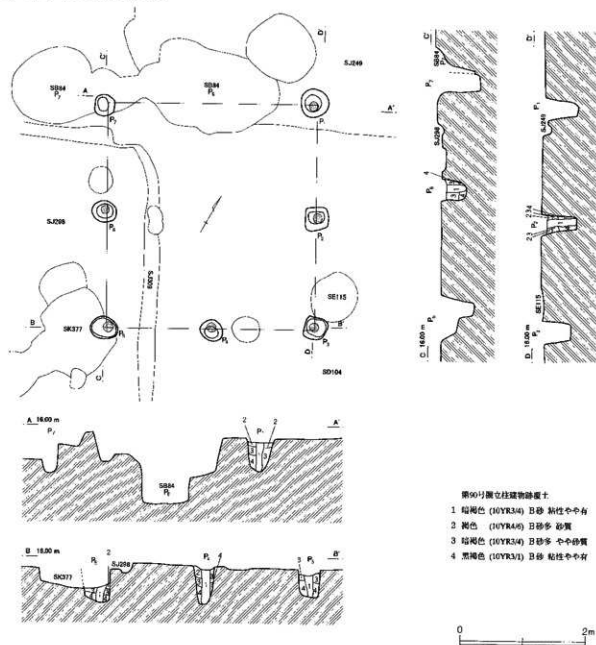


第80号掘立柱建物跡上

- 1 黒褐色 (10YR3/3) 黒褐色土主体 B土混化多 柱底
- 2 黒褐色 (10YR3/3) 黒褐色土主体 B土混化少 柱底
- 3 黒褐色 (10YR3/3) 黒褐色土主体 B土混化少 C炭化遺構
- 4 褐色 (10YR4/6) B主体 灰褐色土未混化多
- 5 黒褐色 (10YR3/3) 3層よりB少 C多
- 6 褐色 (10YR4/6) 4層よりB中多
- 7 黒褐色 (10YR3/3) 3層よりB多



第456図 第90号掘立柱建物跡



第91号掘立柱建物跡 (第457図)

AE・AF-18・19グリッドから検出した。

規模は、4間×2間の側柱建物で、桁行10.8m、梁行6.4mであった。面積は、69.12㎡であった。主軸方位は、N-19°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.7m、梁行3.2mであった。

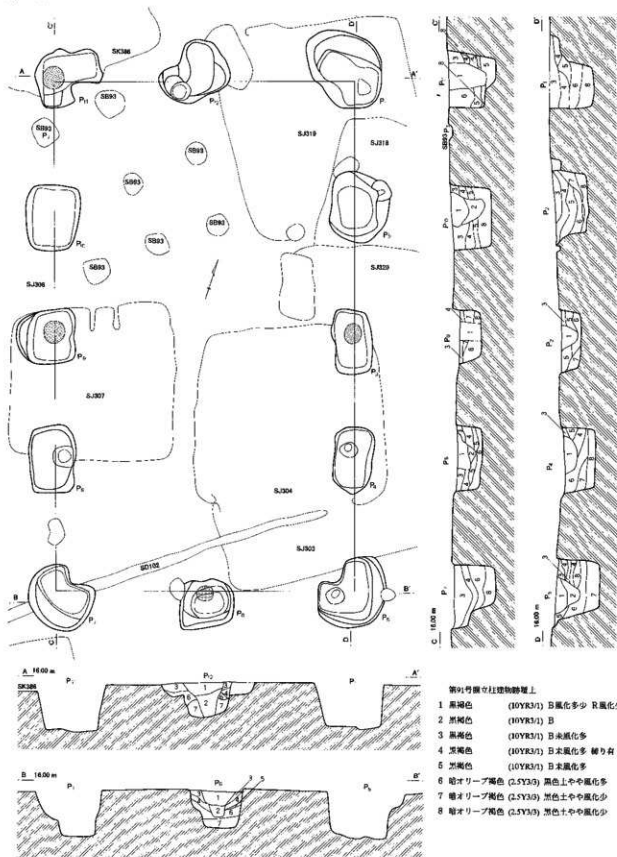
柱掘り方の形状は、丸みを持った方形、または長方形で、コーナー部分のみ「L」字形であった。規模は、径100cm～180cm、深さ50cm～100cmであった。

柱痕は、P3～P6、P8～P11で検出したが、その多くは抜き取り穴で、上部の径は、大きく広がっていた。

遺構は、303・304・307・318～320号竪穴住居跡、93号掘立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、本遺構が最も新しかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第457図 第91号掘立柱建物跡



第92号掘立柱建物跡 (第458図)

AF-18グリッドから検出した。遺構は、東側が調査区外へ展開していたため、南北2間、東西1間分を検出したのみであった。

建物跡は、東柱(P5)を検出したことから、総柱建物であったと考えられる。

規模は、南北5.0m、東西1.95mであった。主軸方位は、N-21°-Wであった。

柱掘り方の形状は、丸みを持った方形で、径60cm

～80cm、深さ40cm～50cmであった。

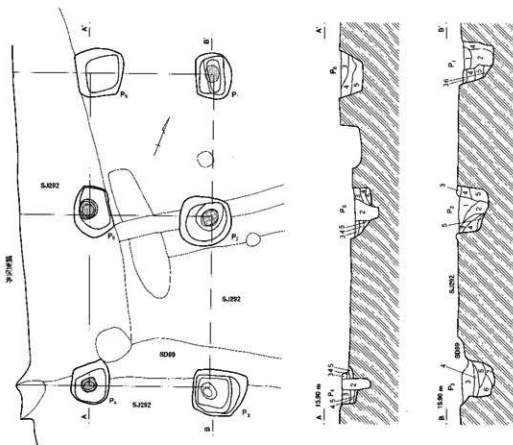
柱痕は、P1・P2・P5・P6で検出した。

本遺構は、292・293号竪穴住居跡と重複していた。

遺構の新旧関係は、292・293号竪穴住居跡よりも新しかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は、P3掘り方から出土した土玉のみであった。

第458図 第92号掘立柱建物跡



第92号掘立柱建物跡掘土

- 1 黒褐色 (10YR3/1) 日風化少
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 日風化少 R風化微量
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 日風化微量 R風化微量

- 4 黒褐色 (10YR3/1) 日中風化多少
- 5 黒褐色 (10YR3/1) 日中風化多
- 6 黄褐色 (2.5YR5/4) 黒色土粒や中風化多
- 7 黄褐色 (2.5YR5/4) 黒色土粒や中風化多少



第93号掘立柱建物跡 (第459図)

AE-18グリッドから検出した。遺構は、91号掘立柱建物跡に壊されていたため、P1とP6は検出できなかった。

規模は、2間×2間の総柱建物で、桁行3.2m、梁行2.88mであった。面積は、9.22㎡であった。主軸方位は、N-39°-Wであった。

柱間寸法は、桁行1.6m、梁行1.44mであった。

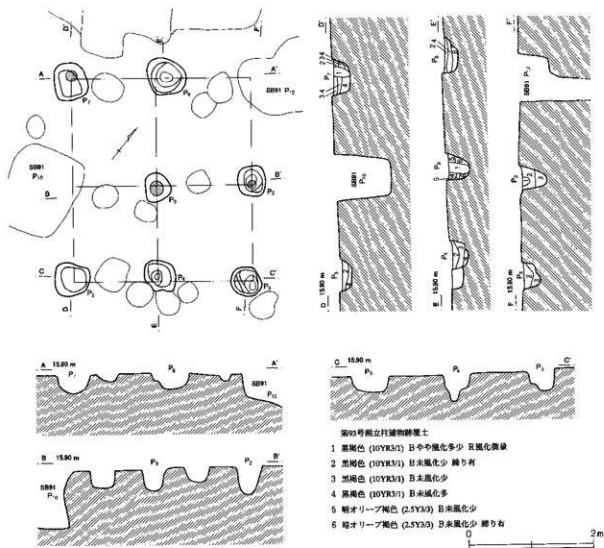
柱掘り方の形状は、丸みを持った方形で、径40cm～50cm、深さ20cm～40cmであった。

柱痕は、P2・P7・P9で検出した。

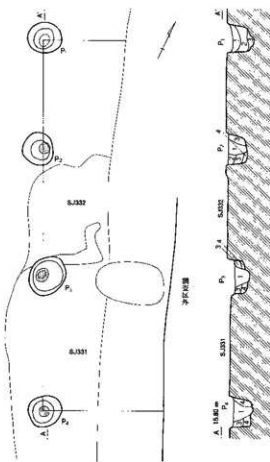
遺構は、91号掘立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、91号掘立柱建物跡よりも古かった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第459図 第93号掘立柱建物跡



第460図 第94号掘立柱建物跡



第94号掘立柱建物跡復元

- 1 黒褐色 (10YR3/2) R 黏性中砂
- 2 褐色 (10YR4/6) B 砂多 砂質
- 3 黒褐色 (10YR3/1) B 砂質土 黏性中砂
- 4 褐色 (10YR4/6) B 砂多 砂質



第94号掘立柱建物跡 (第460図)

AD-22グリッドから検出した。遺構の東側は、調査区外へ展開していたため、西側の柱穴4基のみ検出した。

規模は、3間分の柱穴を検出したのみであったため、全体は明らかにすることができなかった。

検出したP1-P4間の距離は、5.9mであった。柱間距離は、2.1mであったが、P1-P2間は、距離が1.7mと短いため、庇であった可能性もある。主軸方位は、N-26°-Wであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径50cm前後、深さ30cm～40cmであった。

柱痕はP2～P4で検出した。

遺構は、331・332号竪穴住居跡と重複していた。

遺構の新旧関係は、331・332号竪穴住居跡よりも新しかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出上したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第95号掘立柱建物跡 (第461図)

AE・AF-19グリッドから検出した。91号掘立柱建物跡の東側に隣接していた。また、遺構の一部は、地震の噴砂によって壊されていた。

規模は、3間×2間の側柱建物で、桁行5.25m、梁行3.46mであった。面積は、18.17m²であった。主軸方位はN-25°-Wであった。

柱間距離は、桁行1.75m、梁行1.73mであった。

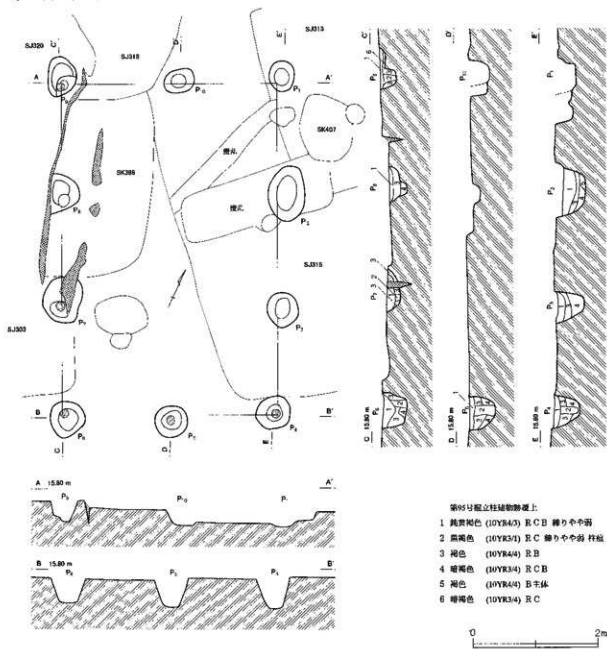
柱痕は、P4～P7・P9で検出した。

柱掘り方の形状は、円形で、径50cm～80cm、深さ20cm～40cmであった。

本遺構は、303・313・315号竪穴住居跡、388号土壇と重複していた。遺構の新旧関係は、3軒の竪穴住居跡、388号土壇よりも新しかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出上したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第461図 第95号掘立柱建物跡



第96号掘立柱建物跡 (第462図)

AD-20グリッドから検出した。

規模は、2間×2間の掘立柱建物で、桁行4.1m、梁行3.32mであった。面積は、13.61㎡であった。主軸方位はN-41°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.05m、梁行1.66mであった。

柱掘り方の形状は、円形で、径30cm-40cm、深さ30

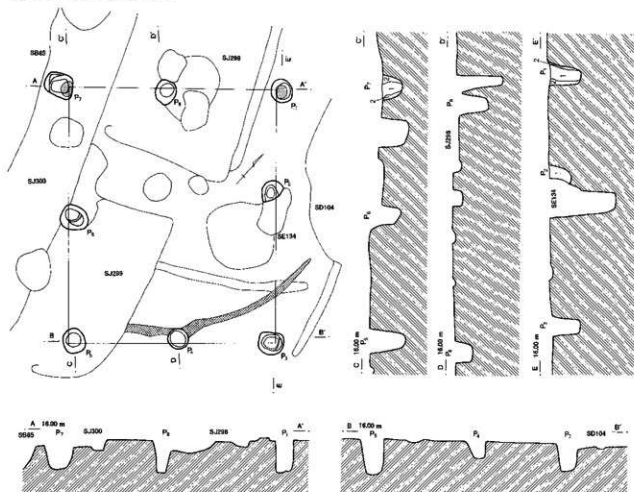
cm-60cmであった。

柱痕は、P1・P7で検出した。

本遺構は、298号・299号・300号竪穴住居跡・134号井戸跡と重複していた。遺構の新旧関係は、134号井戸跡よりも古かったが、竪穴住居跡との新旧関係は明らかにできなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第462図 第96号掘立柱建物跡



第96号掘立柱建物跡遺土

- 1 黒褐色 (10YR3.2) R 粘性中～含有
- 2 黒褐色 (10YR3.1) D 砂質土ブロック多



第97号掘立柱建物跡 (第463図)

AE-21グリッドから検出した。

規模は、3間×2間の側柱建物で、桁行7.5m、梁行4.4mであった。面積は、33.0㎡であった。P5は、本来存在していたものと考えられるが、検出できなかった。主軸方位はN-7°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.5m、梁行2.2mであった。

柱掘り方の形状は、円形または丸みを持った方形で、

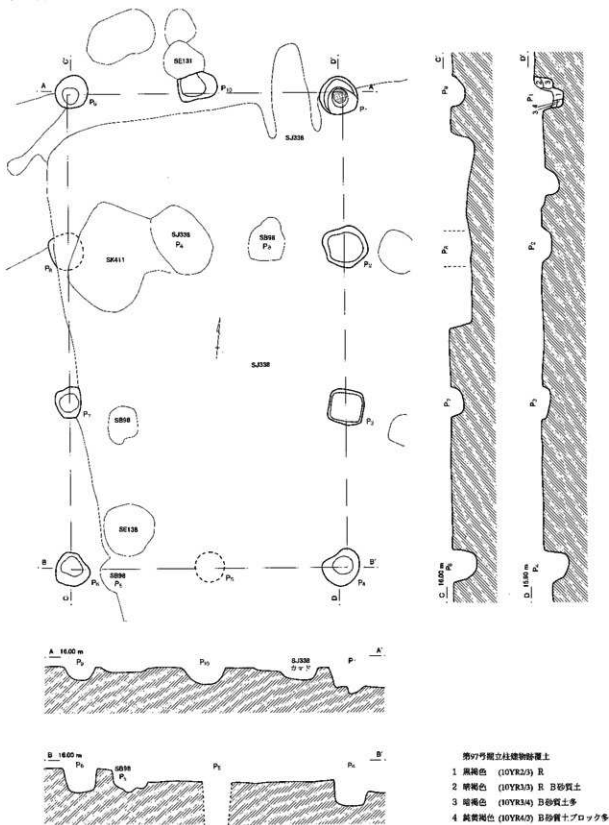
径50cm～60cm、深さ20cm～40cmであった。

柱痕はP1で検出した。

遺構は、338号竪穴住居跡、98号掘立柱建物跡と重複していた。遺構の新旧関係は、338号竪穴住居跡よりも新しいことが確認されたが、98号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにすることができなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第463図 第97号掘立柱建物跡



0 2m

第98号掘立柱建物跡 (第464図)

AF-21グリッドから検出した。南側を101号溝跡によって壊されていたため、遺構全体を検出することはできなかった。

規模は、2間×2間の側柱建物で、桁行5.4m、梁行4.4mであった。面積は、23.76㎡であった。主軸方位は、N-6°-Wであった。

柱間寸法は、桁行2.7m、梁行2.2mであった。

柱掘り方の形状は、丸みを持った方形で、径50cm

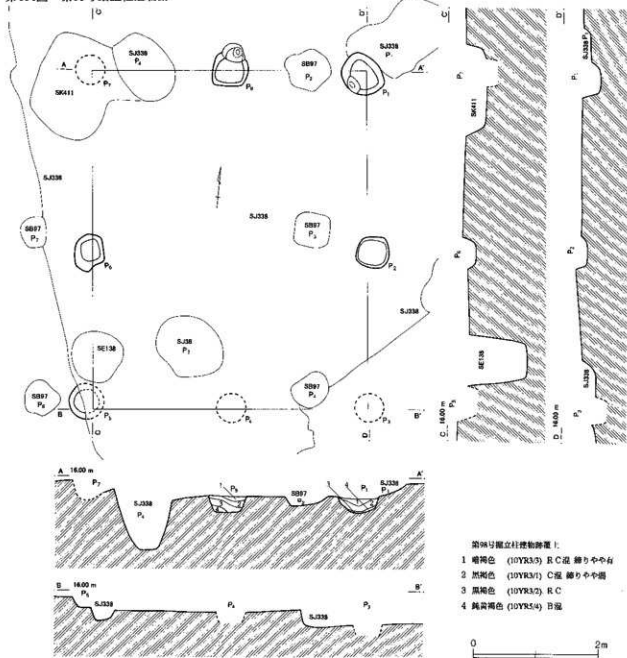
～60cm、深さ30cm～40cmであった。

柱底は検出することができなかった。

遺構は、338号竪穴住居跡、97号掘立柱建物跡、411号土壇、101号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、住居跡、土壇よりも新しく、溝跡よりも古かった。また、97号掘立柱建物跡との新旧関係は、明らかにすることができなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第464図 第98号掘立柱建物跡



(3) 土壌

第203・204号土壌 (第465図・第466図)

R・S-10・11グリッドから検出した。遺構は、第32号掘立柱建物跡の南側に隣接していた。204号土壌の一部は、調査開始時の排水溝の掘削によって破壊してしまった。203・204号土壌は、規模、平面形状ともに堅穴住居跡状であったが、炉あるいはカマドが検出できなかったため、土壌として扱った。

また、2つの遺構は互いに重複していた。

203号土壌は、平面の形状は隅の丸い長方形で、長軸6.72m、短軸3.4m、深さ42cmであった。主軸方位は、N-26°-Wであった。

遺構の底面は平坦で、貼り床は施されていない。壁の立ち上がりは、直線的に立ち上がっていた。

また、遺構の壁際で、径20cm前後、深さ25cm前後の円形の小穴を14基検出した。小穴の配列は規則的で、遺構に伴う柱穴の可能性もあるが、柱底は検出できなかった。

204号土壌は、平面の形状は隅の丸い長方形であった。規模は、長軸6.75m、短軸4.78m、深さ38cmであった。主軸方位は、N-36°-Wであった。

遺構の底面は平坦で、壁の立ち上がりは直線的に立ち上がっていた。

遺構の壁際には、203号土壌と同じように、径20cm前後、深さ25cm前後の小穴を6基検出した。遺構に伴う柱穴の可能性はあるが、柱底は検出できなかった。

203号土壌と204号土壌は重複して検出した。遺構の新旧関係は、土層断面の観察の結果、203号土壌が新しいことを確認した。

出土遺物は、土師器環・甕、須恵器環・高台付環・蓋・釜・短頸壺が出土したが、すべて覆土中からの出土遺物で、遺構に伴っていたかどうかは不明である。

1～3は土師器で、204号土壌覆土中から出土した。

1・2は環の破片で、ともに底部を欠損していた。1は、口縁が内屈しながら立ち上がる。2は皿状の環で、口縁部は外反気味に立ち上がる。3は甕で、口縁部の破片である。やや厚手で、胴部には横方向の篋削りが認められた。

4・5は須恵器環で、203号土壌覆土中から出土した。4は、湖西産と思われる小型の環で、底部は欠損していた。5は、末野産の環である。

6は、須恵器環で、204号土壌覆土中から出土した。南比企産と思われる。口縁端部には、内外面ともに沈線が認められた。

7～9は須恵器高台付環である。3点とも203・204号土壌の覆土から出土したものが接合した。7は、群馬産と思われる、削り出し高台の環である。8・9は、底部が高台よりも張り出した、いわゆる「出っ尻」であった。8は産地不明であったが、9は湖西産と思われる。

10～13は須恵器蓋である。10・11は203号土壌と204号土壌から出土したものが接合した。12・13は、204号土壌覆土中から出土した。

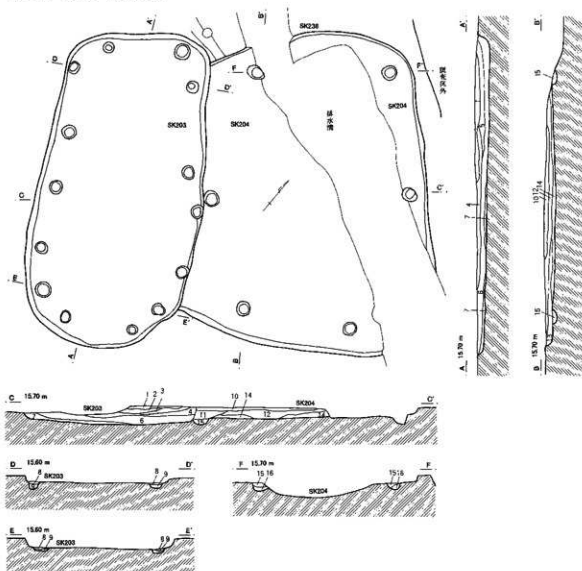
10は、末野産のかえりを有する蓋で、つまみ部分を欠損していた。かえりは僅かに突出する程度で、新しい様相を示す。11は、南比企産の蓋である。口縁端部を垂直に折り返し、かえりを有する。

12は、湖西産と思われる蓋の破片である。13は、環状のつまみを有する蓋である。胎土に片岩を含んでおり、末野産か群馬産と考えられる。

14は、釜の破片である。203号土壌覆土中から出土した。口縁端部は沈線状に窪んでいた。

15は、短頸壺の破片である。203号土壌覆土中から出土した。胴部以下は欠損していた。口縁は垂直に立ちあがる。口縁端部は内側に向け斜めに面取りされていた。口縁端部直下には、1条の沈線が通っていた。

第465号 第203·204号土坑



第203号土坑层序:

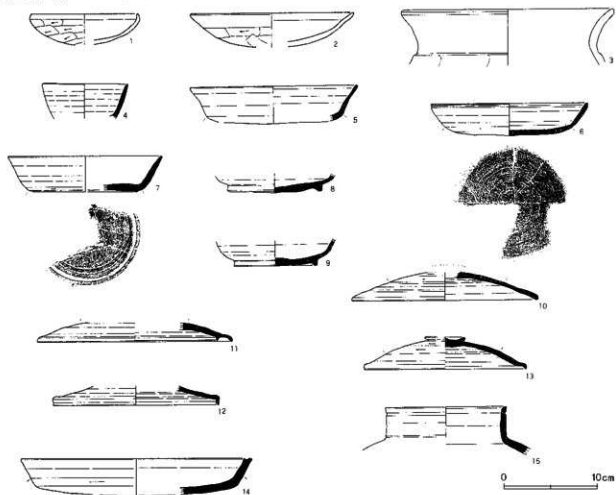
- 1 黑棕色 (10YR3/1) C 微量
- 2 黑棕色 (10YR2/3) R C 少
- 3 黑棕色 (10YR2/1) R C 多
- 4 棕色 (7.5YR2/1) C 多
- 5 黑棕色 (10YR2/2) C 多
- 6 黑棕色 (10YR3/1) 口 C 多
- 7 棕色 (10YR4/4) 粘粒中或有 R 微量
- 8 褐灰色 (10YR4/2) 口 少
- 9 灰黄棕色 (10YR4/2) R 少

第204号土坑层序

- 10 黑棕色 (10YR2/3) B R C 多
- 11 暗棕色 (10YR3/4) R C 微量
- 12 暗灰色 (10YR4/1) 口 多
- 13 暗棕色 (10YR3/3) R C 多
- 14 暗黄棕色 (10YR4/3) B - 微分多
- 15 黑棕色 (10YR3/1) R 微量
- 16 暗灰色 (10YR4/1) 口 多



第466図 第203・204号土壌出土遺物



第203・204号土壌出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(11.4)			ADJ	3	橙	25	北武藏
2	坏	(17.4)			ABDJ	4	橙	40	器面荒れ
3	羹	(22.4)			DHJ	3	橙	10	
4	坏	(9.0)			BF	1	灰	25	湖西?
5	坏	(17.8)			BDHJ	5	灰	15	末野
6	坏	16.6	3.4		BIJ	3	灰白	50	南比企?
7	高台付坏	(16.4)	3.8	11.4	BF	1	灰	30	群馬産?
8	高台付坏			(10.2)	AB	4	灰	100	
9	高台付坏			(9.0)	BF	1	灰	30	湖西
10	蓋	(19.8)			CD FJK	3	灰	15	末野?
11	蓋	(21.0)			A F I L	2	灰	15	南比企?
12	蓋	(17.6)			BF	1	灰	15	湖西?
13	蓋	17.2	3.6		BHJ	2	灰	60	末野 つまみ径4.3cm
14	盤	(24.8)			BDH	4	灰白	15	内面黒色付着物
15	短頸壺	13.0			CDII	2	灰白	15	末野?

第159号土壌 (第467図・第470図)

S-12グリッドから検出した。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸2.20m、短軸1.70m、深さ0.24mであった。主軸方位はN-68°-Wであった。

出土遺物は、土師器が2点出土した。

第160号土壌 (第467図)

T-9グリッドから検出した。遺構は、71号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.02m、短軸0.76m、深さ0.32mであった。主軸方位はN-52°-Eであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第162号土壌 (第467図・第470図)

S-12グリッドから検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.10m、短軸0.88m、深さ0.42mであった。主軸方位はN-78°-Eであった。

覆土は、黒色土を主体とし、炭化物、焼土粒子などを含んでいた。

出土遺物は、土師器1点、甕2点が出土した。

第180号土壌 (第467図)

R-9グリッドから検出した。遺構は第38号溝跡に壊され、85号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は方形で、規模は、径1.9m、深さ0.26mであった。主軸方位はN-45°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第181号土壌 (第467図)

R-9グリッドから検出した。遺構は、ビット688に壊され、85号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.52m、短軸1.94m、深さ0.56mであった。主軸方位はN-37°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第183号土壌 (第467図)

R-9グリッドから検出した。遺構は、3号性格不明遺構、57号溝跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.52m、短軸1.38m、深さ0.68mであった。主軸方位はN-47°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第184号土壌 (第467図・第470図)

R-9グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.68m、短軸0.64m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-27°-Eであった。

出土遺物は須恵器長頸瓶1点が出土した。長頸瓶は、口縁部のみの破片であった。

第185号土壌 (第467図)

R-9グリッドから検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸0.94m、短軸0.54m、深さ0.64mであった。主軸方位はN-67°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第186号土壌 (第467図)

R-11グリッドから検出した。第203号土塊と、第32号孤立柱建物跡との間で検出したが、重複はしていなかった。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.00m、短軸1.04m、深さ0.20mであった。主軸方位はN-27°-Wであった。

出土遺物は、鉄製品として刀子が出土した。

第187号土壌 (第468図・第470図)

R-10グリッドから検出した。第54号溝跡・第32号孤立柱建物跡に壊されていたため、遺構の全体を検出することはできなかった。

平面の形状は長方形で、規模は、残っている部分で長軸1.67m、短軸1.14m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-78°-Wであった。

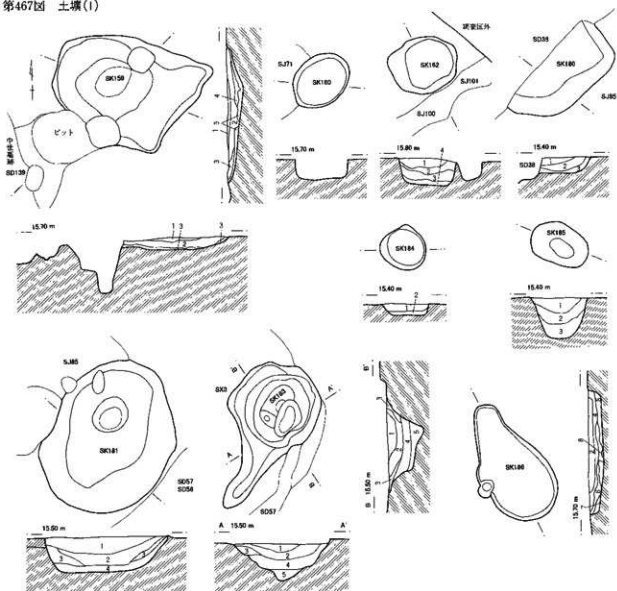
出土遺物は土師器壺1点、鉢1点が出土した。

第188号土壌 (第468図・第470図)

R-9-10グリッドから検出した。58号溝跡に壊され、211号土塊を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸3.04m、短軸

第467図 土壌(1)



第158号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 緑り有
- 2 黒色 (10YR2/2) 粘多 CM 土層 M層
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘少 粘性弱
- 4 黒色 (10YR2/2) 2層に近接 R少 M土体
- 5 棕色 (10YR4/6) B土体

第162号土壌層土

- 1 黒色 (10YR2/2) RC少 粘 粘性弱
- 2 黒色 (10YR1.7/1) CM土体 R少 粘り弱
- 3 黒色 (10YR2/1) M土体 CR 粘性 粘り弱
- 4 暗褐色 (10YR3/1) M

第180号土壌層土

- 1 暗オリーブ色 (5Y4/6) B多
- 2 オリーブ黒色 (5Y2/2) Bブロック多
- 3 オリーブ色 (5Y3/6) Bブロック土体

第181号土壌層土

- 1 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘粒多 R少
- 2 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘粒多 B粘層
- 3 暗オリーブ色 (5Y4/2) B多
- 4 オリーブ色 (5Y3/6) Bブロック多

第183号土壌層土

- 1 灰オリーブ色 (5Y3/1) 粘粒少 B不含
- 2 暗オリーブ色 (5Y4/2) 粘粒多 B多
- 3 灰オリーブ色 (5Y3/1) B少 粘粒少
- 4 灰オリーブ色 (5Y2/2) B少
- 5 オリーブ黄色 (5Y6/4) 砂質 B多

第184号土壌層土

- 1 灰オリーブ色 (5Y4/2) B多
- 2 オリーブ色 (5Y3/6) B土体

第185号土壌層土

- 1 暗オリーブ色 (5Y4/6) B多 粘粒多
- 2 暗オリーブ色 (5Y4/7) B多 粘粒少
- 3 オリーブ黒色 (5Y2/2) 中褐色ブロック多 粘粒多

第186号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR3/1) RC多 M粘干固
- 2 暗褐色 (5YR3/2) Bブロック RC多 M多
- 3 暗褐色 (10YR2/2) B粘 RC粘層 M粘干固
- 4 棕色 (10YR4/1) RC粘層 粘り強
- 5 黒褐色 (10YR2/1) RC多
- 6 暗褐色 (10YR2/2) RC多 M粘干固
- 7 暗褐色 (10YR3/3) B多 R多 粘 C粘強
- 8 暗褐色 (10YR4/7) B多 C粘強



1.2m、深さ0.62mであった。主軸方位はN-37°-Wであった。

出土遺物は、土師器甕が1点出土した。

第189号土壌 (第468図)

R-9グリッドから検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸0.97m、短軸0.54m、深さ0.12mであった。主軸方位は、N-42°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第200号土壌 (第468図)

S-8グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.94m、短軸0.84m、深さ0.36mであった。主軸方位はN-50°-Wであった。

出土遺物は、縄文土器の破片が2点出土したが、摩滅・風化が著しく、遺構に伴う遺物とは考えにくい。

第201号土壌 (第468図)

S-8グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.02m、短軸0.82m、深さ0.15mであった。主軸方位はN-66°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第202号土壌 (第468図)

U-9グリッドから検出した。第31号掘立柱建物跡に壊されていた。

平面の形状は長楕円形で、規模は、長軸3.34m、短軸0.60m、深さ0.34mであった。主軸方位はN-32°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第205号土壌 (第468図・第470図)

R-12グリッドから検出した。中世の第138号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.6m、短軸0.87m、深さ0.26mであった。主軸方位はN-42°-Wであった。

出土遺物は、土師器環2点、甕2点、鉢1点が出土した。

第209号土壌 (第468図)

U-12グリッドから検出した。遺構の上部は、中世の第138号溝跡によって壊されていたため、遺構の全体を検出できなかった。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.3m、短軸0.84m、深さ0.96mであった。主軸方位はN-24°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第210号土壌 (第468図・第470図)

U-13グリッドから検出した。遺構は、109号竪穴住居跡、60号溝跡と重複していた。遺構の新旧関係は、60号溝跡よりも古かった。109号竪穴住居跡との新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.97m、短軸0.68m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-41°-Wであった。

出土遺物は、須恵器環1点が出土した。

第212号土壌 (第468図)

R-10グリッドから検出した。遺構は、188号土壌に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.20m、短軸0.84m、深さ0.2mであった。主軸方位はN-38°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第214号土壌 (第469図)

S-10グリッドから検出した。第59号掘立柱建物跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.02m、短軸0.9m、深さ0.72mであった。主軸方位はN-80°-Wであった。土壌底面に、径20cm前後の小穴を検出した。

出土遺物は検出できなかった。

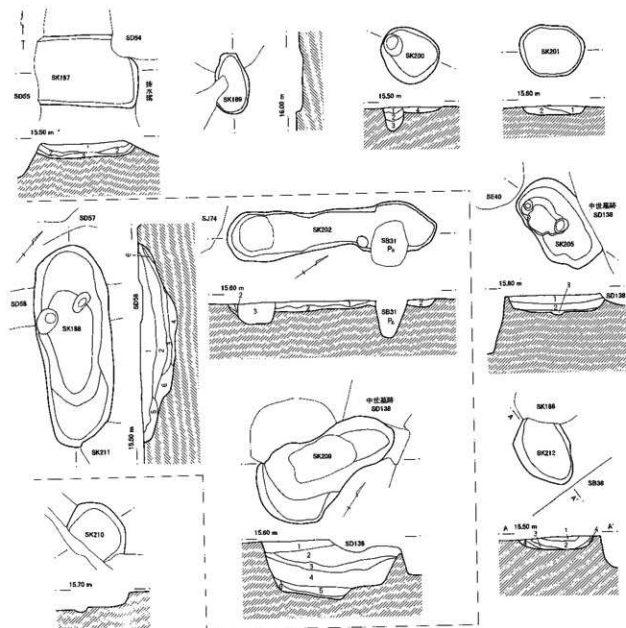
第224号土壌 (第469図)

T-9グリッドから検出した。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.90m、短軸0.94m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-63°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第468図 土壌(2)



第187号土壌層上

- 1 灰褐色 (10YR2/2) B多
- 2 暗褐色 (10YR3/4) B多
- 3 褐色 (10YR4/6) B・暗褐色土層

第188号土壌層上

- 1 灰褐色 (10YR2/2) 鉄粒子多 B少量
- 2 褐色 (10YR2/1) C少 Bブロック少
- 3 褐色 (10YR4/6) 鉄粒子多 Bブロック多
- 4 褐色 (10YR4/6) B上層 褐色土少
- 5 灰褐色 (10YR3/1) B多
- 6 灰褐色 (10YR5/6) 灰褐色上・Bブロック甚

第189号土壌層上

- 1 褐色 (10YR4/6) B多
- 2 暗褐色 (7.5YR2/3) B多
- 3 灰褐色 (7.5YR2/2) B少
- 4 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) C少

第201号土壌層上

- 1 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 暗褐色鉄粒子少
- 2 灰褐色 (7.5Y5/6) 暗褐色鉄粒子微量

第202号土壌層上

- 1 暗褐色 (10YR3/4) B少
- 2 褐色 (10YR4/6) B多 暗褐色多
- 3 灰褐色 (10YR2/3) B較多 Bブロック少 C多

第203号土壌層上

- 1 暗褐色 (10YR3/4) R多 M
- 2 暗褐色 (10YR2/3) 硬く締る B少 灰褐色に認められたもの
- 3 暗褐色 (10YR3/4) B多 壁の暗褐色

第209号土壌層上

- 1 暗褐色 (10YR3/4) 砂質B上層 B C微量
- 2 暗褐色 (10YR2/3) 砂質B多微強
- 3 灰褐色 (10YR2/2) 2層と同 B未溶化
- 4 暗褐色 (10YR2/3) Bブロック微量
- 5 暗褐色 (10YR2/3) 4層基本 Bブロック未溶化多
- 6 褐色 (10YR4/6) Bブロック主体

第212号土壌層上

- 1 暗褐色 (10YR3/2) R微 C微量
- 2 暗褐色 (10YR3/3) B微 F R微量
- 3 暗褐色 (10YR4/1) R C鉄粒子多
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) R C微量



第225号土壌 (第469図)

U-9グリッドから検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.2m、短軸0.69m、深さ0.28mであった。主軸方位はN-78°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第241号土壌 (第469図・第470図)

T-10グリッドから検出した。遺構は、第59号掘立柱建物跡に壊されていた。

平面の形状は不整形で、円形の土壌が3基重複しているような形状であったが、十層断面の観察で、重複は認められなかったことから、1基の土壌として扱った。

規模は、長軸2.46m、短軸2.10m、深さ0.54mであった。主軸方位はN-26°-Eであった。

出土遺物は中世山茶碗系の鉢2点が出土した。

第242号土壌 (第469図)

R-9グリッドから検出した。56号溝跡に壊されていたため、遺構の全体は明らかにできなかった。

平面の形状は円形と考えられ、規模は、長軸0.73m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-50°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第244号土壌 (第469図)

T-14グリッドから検出した。遺構の大半は、調査区外へ展開するため、全体を明らかにすることはできなかった。

平面の形状は円形と考えられ、規模は、長軸1.38m、深さ0.14mであった。主軸方位はN-47°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第245号土壌 (第469図)

T-9グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.06m、短軸0.90m、深さ0.38mであった。主軸方位はN-32°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第246号土壌 (第469図・第470図)

U-9グリッドから検出した。遺構は、ビット697に

壊されていた。

平面の形状は楕円形で、長軸の一端にテラスを有していた。

規模は、長軸2.04m、短軸0.86m、深さ0.42mであった。主軸方位はN-12°-Wであった。

出土遺物は土師器環2点、甕3点が出土した。

第247号土壌 (第469図・第471図)

T-9グリッドから検出した。119号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸2.08m、短軸0.68m、深さ0.24mであった。主軸方位はN-55°-Eであった。

出土遺物は土師器環3点、甕1点が出土した。

第248号土壌 (第469図)

S-10グリッドから検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.66m、短軸1.04m、深さ0.3mであった。主軸方位はN-70°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第250号土壌 (第472図)

U-9グリッドから検出した。119号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸4.00m、短軸1.62m、深さ0.66mであった。主軸方位はN-51°-Eであった。

覆土は、鈍い黄褐色土を主体とし、焼土、炭化物を多く含んでいた。特に、1層と2層の間には、厚さ5mm～1cm前後の炭化物層が認められた。炭化物は、蓮状で、面的に広がっていた。

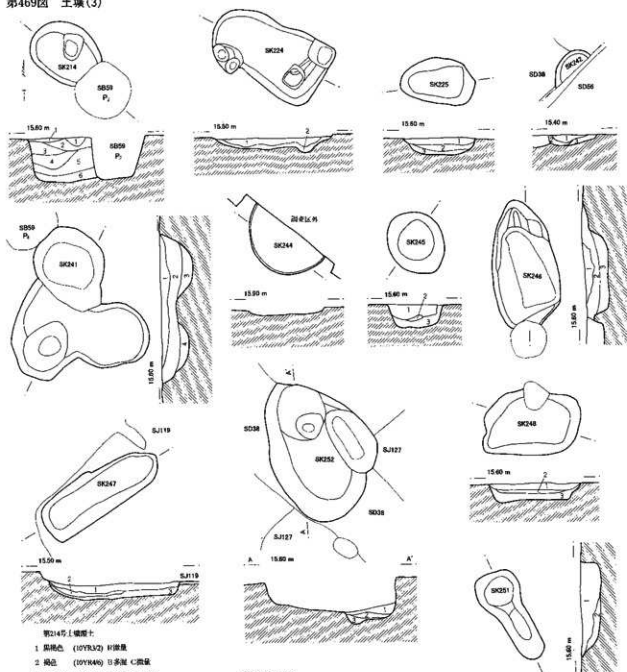
出土遺物は、土師器甕が出土した。胴部には、焼成後に穿たれたと考えられる、円窓が認められた。また、土玉が4点出土した。

第251号土壌 (第469図・第471図)

U-9グリッドから検出した。53号掘立柱建物跡と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.54m、短軸0.46m、深さ0.32mであった。主軸方位はN-24°-Wで

第469図 土壌(3)



第214号土壌層上:

- 1 黒褐色 (10YR3/2) H鉄塊
- 2 褐色 (10YR4/6) B多鉄 C微鉄
- 3 黒褐色 (10YR3/2) B多鉄 R C多鉄
- 4 赤褐色 (10YR3/5) H鉄塊 R鉄塊
- 5 暗褐色 (10YR3/5) F若干鉄 R C微鉄
- 6 灰赤褐色 (10YR4/2) C微鉄

第224号土壌層上:

- 1 灰オリーブ色 (5Y4/2) Dブロック少
- 2 オリーブ色 (5Y3/6) Rオリーブ粒多

第225号土壌層上:

- 1 黒褐色 (10YR2/1) D少
- 2 褐色 (10YR4/5) B・黒褐色ブロック塊
- 3 黒褐色 (10YR3/6) 黒褐色土多

第241号土壌層上:

- 1 黒褐色 (10YR3/1) H多 R C多鉄
- 2 赤褐色 (10YR3/5) R C微鉄 土層片多
- 3 暗褐色 (10YR3/6) B土含 C微鉄
- 4 暗褐色 (10YR4/7) B多 R多鉄

第242号土壌層上:

- 1 黒褐色 (10YR3/2) C微鉄 土層片多
- 2 赤褐色 (10YR3/2) C多 R微鉄
- 3 黒褐色 (10YR3/2) R C多

第243号土壌層上:

- 1 黒色 (10YR2/1) R C多 D 縞りやや有 粒打倒
- 2 暗黒褐色 (10YR4/5) B多 縞り粒打有
- 3 暗黒褐色 (10YR5/6) D土含 C R若干 縞り 縞り塊

第246号土壌層上:

- 1 黒褐色 (10YR3/2) Rやや多
- 2 暗褐色 (10YR3/3) H鉄入 縞り粒打やや有
- 3 暗褐色 (10YR3/6) B鉄入 縞り有

第247号土壌層上:

- 1 黒褐色 (10YR3/6) B 微鉄C鉄入 縞りやや有
- 2 暗褐色 (7.5YR3/6) B 縞りやや有
- 3 褐色 (7.5YR4/2) H土鉄

第248号土壌層上:

- 1 黒褐色 (10YR3/2) R多 C鉄入 縞りやや有
- 2 暗褐色 (10YR3/2) R C多 縞りやや有
- 3 暗褐色 (10YR3/6) R 縞りやや有

第251号土壌層上:

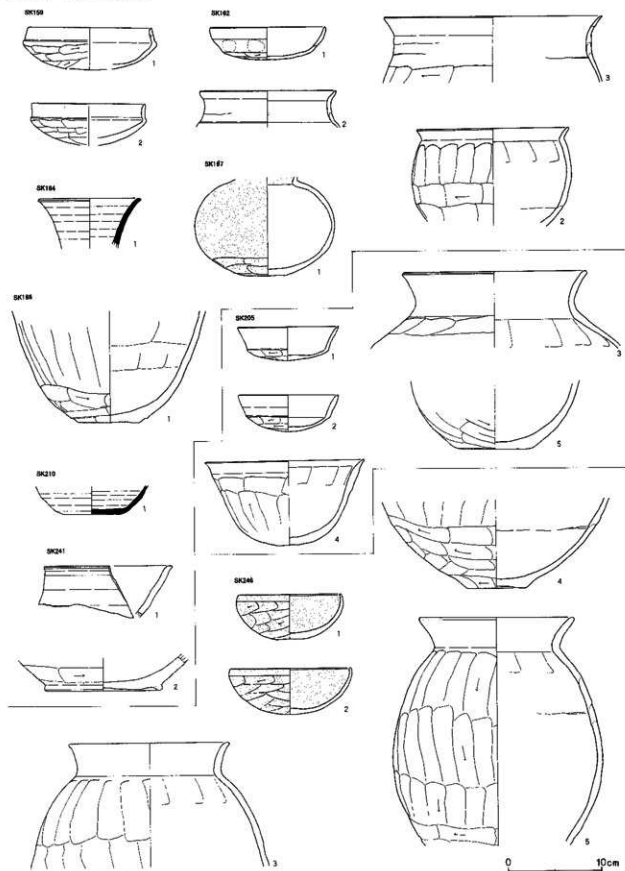
- 1 暗褐色 (10YR3/3) B C 縞りやや有
- 2 褐色 (10YR4/6) H多 縞り有

第252号土壌層上:

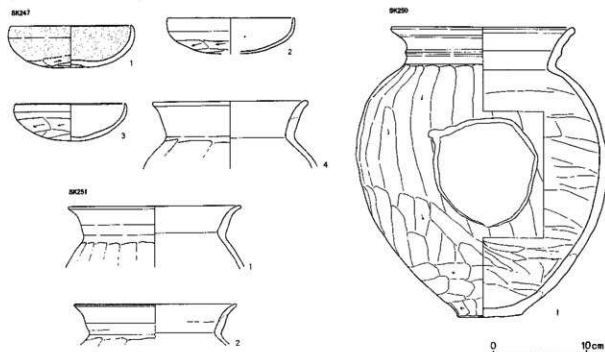
- 1 黒褐色 (10YR3/1) C R若干 縞り有
- 2 暗黒褐色 (10YR4/7) C R若干 D 縞りやや有
- 3 暗褐色 (10YR3/3) H多



第470図 土壙出土遺物(1)



第471図 土壇出土遺物(2)



土壇出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
159-1	坏	13.0			ABCEHJ	3	橙	40	器面荒れ
159-2	坏	12.2			ABDEHJ	3	橙	30	器面荒れ
162-1	坏	(12.4)	3.5		ABDEFJ	3	橙	20	
162-2	甕	(14.6)			DEHJ	3	浅橙	15	コの字
162-3	甕	(23.4)			BDEHJ	3	浅橙	15	
184-1	長頸瓶	(11.0)			BF	1	灰白	20	湖西 黒色微粒子
187-1	壺				ABDEJ	2	明赤褐	70	赤彩
187-2	鉢	(16.0)			ABDEHK	3	明黄褐	60	
188-1	甕			6.3	ABDEH	2	黄橙	80	
205-1	坏	(10.8)	3.6		DEHJ	3	橙	40	
205-2	坏	10.8	4.0		DHJ	2	橙	70	
205-3	甕	19.2			BDEHL	2	浅黄	60	
205-4	鉢	17.0	9.0		ABDEHJL	2	橙	90	
205-5	甕			7.8	ABDEHJK	2	橙	80	
210-1	坏			6.0	ACI	2	灰	60	南北企?
241-1	鉢				BFJ	2	灰	破片	中世?
241-2	鉢			(12.0)	BJ	2	灰	20	中世?
246-1	坏	11.0	4.8		ADHJ	2	鈍黄橙	90	全面赤彩
246-2	坏	12.8	5.0		ADHJK	3	鈍黄橙	90	全面赤彩
246-3	甕	(17.0)			ADEHK	3	鈍黄橙	30	
246-4	甕			6.0	ADEHK	3	鈍黄橙	30	
246-5	甕	(16.3)			ADEHJKL	3	鈍黄橙	40	
247-1	坏	13.0	4.5		DHJK	3	赤褐	70	器面荒れ 赤彩
247-2	坏	13.8			BDEHJK	3	橙	25	
247-3	坏	11.8	4.0		ADHJK	3	橙	100	
247-4	壺	(16.8)			ADEHJKL	3	鈍黄橙	25	
250-1	甕	19.3	31.0	7.0	BDEFHJ	2	橙	70	胴部穿孔
251-1	甕	(18.6)			ADEHJL	3	鈍黄橙	30	
251-2	甕	17.4			ADEHJL	3	鈍黄橙	25	

あった。

出土遺物は土師器甕2点が出土した。

第252号土壇 (第469図・第473図)

U-11グリッドから検出した。遺構は、第38号溝跡、第127号竪穴住居跡と重複していた。遺構の新田関係は、38号溝跡よりも古かった。第127号竪穴住居跡との新田関係は明らかにすることができなかった。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.26m、短軸1.64m、深さ0.74mであった。主軸方位はN-34°-Wであった。

出土遺物は須恵器環1点が出土した。

第253号土壇 (第472図・第473図)

U-14グリッドから検出した。遺構は、第131号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸2.96m、短軸1.96m、深さ1.03mであった。主軸方位はN-17.5°-Eであった。覆土は、黒色～黒褐色土が主体であった。未風化の地山の砂質土ブロックを多量に含んでいたことから、人為的な埋め戻しの可能性がある。

出土遺物は、土師器環2点、甕3点、ミニチュア1点が出土した。

第254号土壇 (第472図・第473図)

V-11グリッドから検出した。第141号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、長軸の一端にテラスを有していた。

規模は、長軸2.92m、短軸1.42m、深さ0.54mであった。主軸方位はN-34°-Eであった。覆土は、焼土、炭化物を多く含む鈍い黄褐色土が主体で、特に2層と6層は、炭化物層であった。

出土遺物は土師器環3点、ミニチュア1点が、1・2層から出土した。

第255号土壇 (第472図～第474図)

V-10グリッドから検出した。

平面の形状は不整形で、2基の土壇が重複しているようにも見えるが、上層断面の観察では、重複は認められなかったため、1基の土壇として扱った。

規模は、長軸2.10m、短軸1.66m、深さ0.76mであった。主軸方位はN-36°-Eであった。覆土は、未風化の地山ブロックを多量に含む黒褐色土が主体であり、人為的な埋め戻しの可能性がある。

出土遺物は土師器環16点、皿1点、甕2点、表2点、甕3点が出土した。

本遺構は、1基の遺構として扱ったが、出土遺物には時期差が認められることから、複数の遺構であった可能性もある。

第256号土壇 (第472図・第474図)

V-11グリッドから検出した。遺構は、第127号・141号竪穴住居跡を壊し、第60号溝跡・38号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、長軸の一端にテラスを有していた。

規模は、長軸3.38m、短軸0.94m、深さ0.64mであった。主軸方位はN-35°-Eであった。覆土は、黄褐色～暗褐色土を主体とし、最下層は、炭化物を多量に含んでいた。

出土遺物は土師器環4点、碗1点、壺4点、甕1点が出土した。

第257号土壇 (第472図)

U-14グリッドから検出した。第131号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.40m、短軸1.25m、深さ0.36mであった。主軸方位はN-59°-Eであった。

出土遺物は須恵器の環の破片、鉄製品として刀子が出土した。

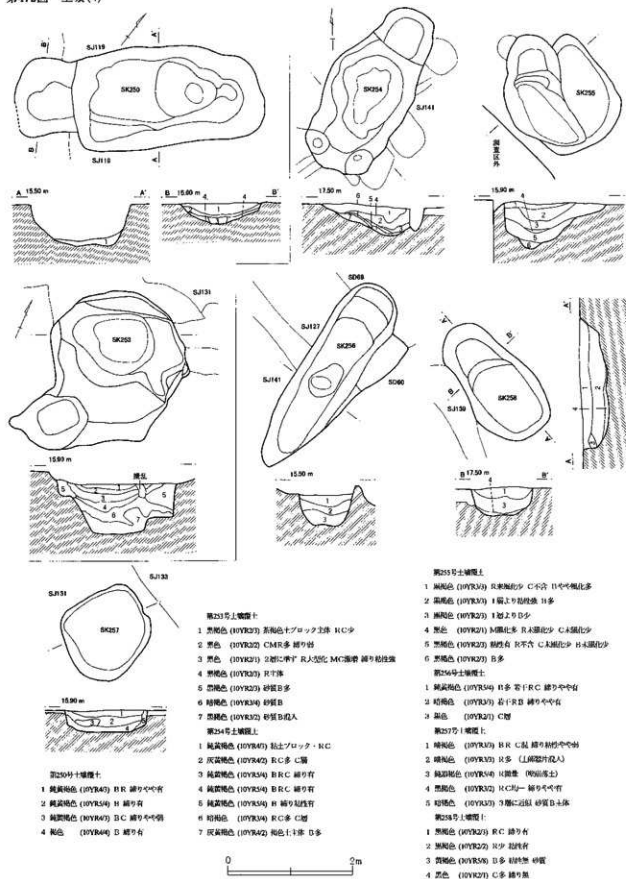
第258号土壇 (第472図)

X-11グリッドから検出した。139号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、長軸の一端にテラスを有していた。

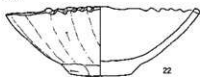
遺構の規模は、長軸2.12m、短軸1.0m、深さ0.44mであった。主軸方位はN-45°-Wであった。覆土は、黒褐色土を主体とし、最下層は、炭化物を多量に含んで

第472図 土壌(4)

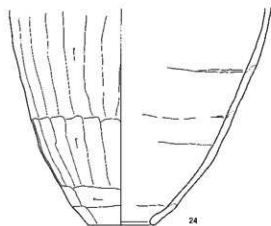


第474图 土壤出土遺物(4)

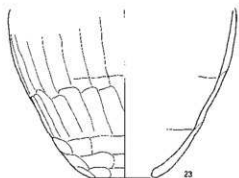
SK235



22



24

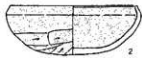


23

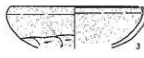
SK236



1



2



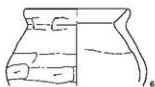
3



4



5



6



7



8



9



10

0 10cm

土壌出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
252-1	坏	12.4	4.2	4.8	AFI	2	灰	70	南比企
253-1	坏	(17.6)	4.7		BD	2	浅黄橙	30	
253-2	坏	(15.8)	5.1		BDE	2	浅橙	60	
253-3	甕	(22.0)			DEHJL	2	橙	30	器面荒れ
253-4	甕	(17.0)			ABDEJK	3	橙	20	
253-5	甕	(17.6)			ADEHJL	4	鈍褐	25	
253-6	手捏ね	4.5	1.8	3.0	DHJ	2	黄橙	90	
254-1	坏	(11.6)	3.8		ADEFHJ	3	鈍褐	25	有段
254-2	坏	(12.6)			ADEH	3	鈍褐	40	有段
254-3	坏	(13.6)			ABDJ	2	橙	15	
254-4	手捏ね	5.4	2.0	3.4	ADHJ	2	黄橙	90	
255-1	坏	14.0	6.9		ABCDEJ	2	明褐	80	赤彩 暗文
255-2	坏	13.0	5.9		BDEHJ	3	橙	90	
255-3	坏	11.0	5.0		ADHJKL	3	黄橙	100	赤彩
255-4	坏	12.4	5.0		ABDEHJ	3	橙	50	
255-5	坏	(11.0)	3.5		ABDEFHJ	2	橙	50	
255-6	坏	(11.0)			ADEFI	2	橙	25	赤彩
255-7	坏	10.8	2.9		ABDEH	2	橙	70	
255-8	坏	9.8	3.5		ADEIJ	2	橙	70	赤彩
255-9	坏	11.2	4.5		ADEHJ	3	鈍赤褐	50	
255-10	坏	(10.0)	3.5		BD	3	鈍褐	40	
255-11	坏	(10.8)	3.6		ADEHJK	2	鈍赤褐	70	
255-12	坏	13.4	3.6		ADEJ	2	橙	50	
255-13	坏	(11.2)	3.5		ABDEH	2	橙	40	
255-14	坏	10.8	3.4		ABDEHJ	2	鈍橙	40	
255-15	坏	(11.6)	3.2		ADEHJ	2	橙	70	
255-16	坏	(10.2)	2.6		ADEHJ	2	橙	40	
255-17	皿	(19.2)			DEHJ	2	橙	20	
255-18	壺	(12.0)			ABCEJ	2	橙	20	
255-19	壺	9.6	8.8		BEJK	3	橙	90	赤彩
255-20	甕	(16.0)			ADEHJ	3	橙	15	
255-21	甕			6.5	BEIJK	3	赤褐	30	
255-22	甕			6.8	ABDEHJ	3	橙	80	割れ口に加工痕
255-23	甕			7.0	ABDEJK	2	鈍黄橙	70	
255-24	甕			(6.6)	ABDEHJK	3	鈍黄橙	80	
256-1	坏	(12.8)			ABDEHJKL	3	鈍橙	30	赤彩
256-2	坏	13.4	5.2		BDEH	3	鈍橙	50	全面赤彩
256-3	坏	(14.0)			ABDEFHJ	2	橙	20	赤彩
256-4	坏	(13.8)			ADEHJ	2	橙	20	
256-5	柄	(11.8)			BDE	4	橙	60	
256-6	壺	(11.0)			DEFJK	3	鈍橙	40	
256-7	壺	(21.0)			ADEF	2	橙	90	
256-8	壺	(9.0)			ABEHJK	3	橙	40	赤彩
256-9	壺			(3.6)	DEFJK	3	鈍橙	20	
256-10	甕			(7.0)	ADEHJ	3	灰褐	40	

いた。

出土遺物は検出できなかった。

第259号土壌 (第475図)

V-13グリッドから検出した。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.18m、短軸0.82m、深さ0.08mであった。主軸方位はN-71°-Eであった。

出土遺物は、中世の常滑産の陶器片が出土した。

第260号土壌 (第475図・第476図)

V-10グリッドから検出した。

平面の形状は不整形形で、規模は、長軸1.74m、短軸1.40m、深さ0.62mであった。主軸方位はN-48°-Eであった。

出土遺物は土師器環2点、甕1点が出土した。

第261号土壌 (第475図・第476図)

W-12・13グリッドから検出した。50号井戸跡、38号溝跡を壊していた。

平面の形状は不整形形で、規模は、長軸2.86m、短軸0.70m、深さ0.60mであった。主軸方位はN-38°-Eであった。

出土遺物は、中世の鉢1点、須恵器蓋1点が出土した。須恵器蓋は、かえりを有し、摘みは環状を呈する。表面には、弧状の重ね焼きの痕跡が認められた。直径が12cm前後に復元できることから、高台環の高台部分の痕跡と考えられる。

第262号土壌 (第475図・第476図)

V-15グリッドから検出した。遺構は、159号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形形で、規模は、長軸2.34m、短軸1.42m、深さ0.62mであった。主軸方位はN-38°-Eであった。

出土遺物は、覆土上層から土師器環5点、高環1点、壺2点、甕4点、鉢1点、紡錘車が出土した。遺物には時期差があり、このうち様相の古い遺物は、重複する159号竪穴住居跡の遺物であった可能性がある。

第263号土壌 (第475図)

V-13・14グリッドから検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.50m、短軸0.62m、深さ0.50mであった。主軸方位はN-63°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第264号土壌 (第475図)

V-14グリッドから検出した。147号竪穴住居跡と重複していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸約1.66m、短軸約1.18m、深さ0.15mであった。主軸方位はN-30°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第265号土壌 (第475図・第477図)

V-14グリッドから検出した。150号竪穴住居跡と重複していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.50m、短軸0.62m、深さ0.5mであった。主軸方位はN-48°-Eであった。

出土遺物は、土師器環、甕、鉢が出土した。

第266号土壌 (第475図)

W-14グリッドから検出した。64号井戸跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.03m、短軸約0.95m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-44°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第267号土壌 (第475図)

W-15グリッドから検出した。268号土壌、ビット728、153号竪穴住居跡と重複していた。遺構は、268号土壌に壊されていた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸2.20m、深さ0.34mであった。主軸方位はN-59°-Eであった。

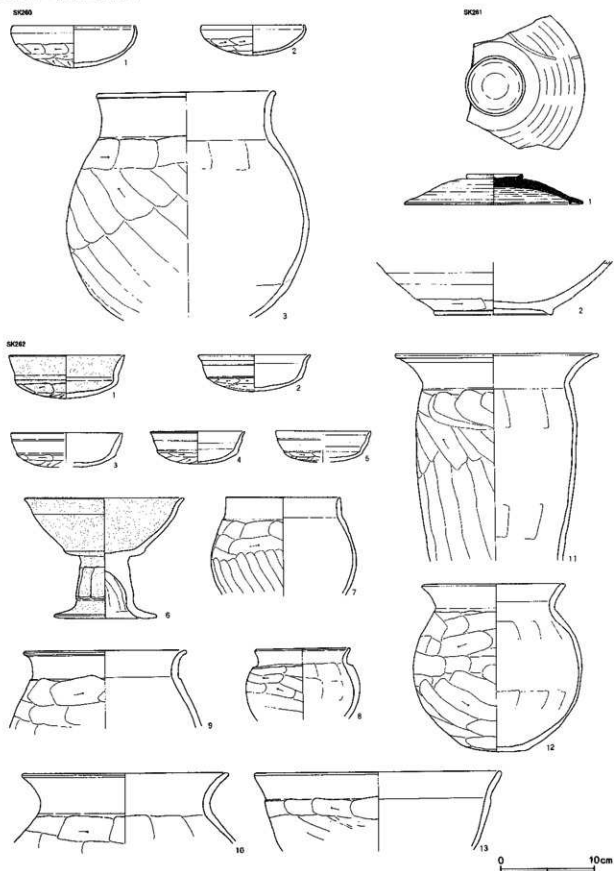
出土遺物は、鉄鋸車が出土した。

第268号土壌 (第475図・第477図)

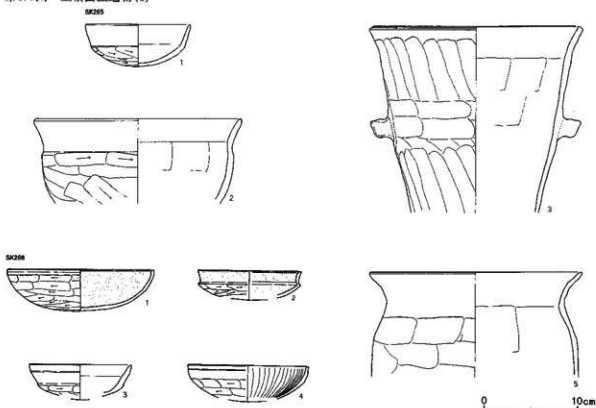
W-15グリッドから検出した。267号土壌、ビット728、153号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.32m、深さ0.8mであった。主軸方位はN-47°-Eであった。

第476図 土壙出土遺物(5)



第477岡 土墳出土遺物(6)



土墳出土遺物観察表(3)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
260-1	坏	13.0	4.5		ABDEHJ	2	橙	60	
260-2	坏	11.0	3.3		ADEHJ	3	橙	60	
260-3	甕	(19.0)			BDEHJ	3	橙	40	
261-1	盖	(19.0)	3.2		ABFL	2	灰	40	つまみ径5.8cm
261-2	鉢			(12.4)	BFJ	2	灰	20	中世?
262-1	坏	12.4	4.6		ADHJ	2	浅黄橙	100	全面赤彩
262-2	坏	12.0	3.9		ADEGJ	2	鈍橙	50	
262-3	坏	(11.8)			ACDEHJ	2	褐色	40	
262-4	坏	(10.2)	3.5		ABDEHJ	2	橙	50	黒斑あり
262-5	坏	(10.3)	3.0		ABDEJ	2	橙	40	
262-6	高坏	(17.2)	12.8	11.0	ABDEJK	4	鈍黄橙	60	赤彩
262-7	壶	(12.0)			ABDJ	3	明赤褐	20	
262-8	壶	(10.0)			BDE	2	鈍黄橙	10	
262-9	甕	(17.0)			BEHJK	3	赤褐	30	
262-10	甕	(22.0)			ABDEHJ	3	鈍橙	20	
262-11	甕	(22.0)			ABDHJL	2	鈍橙	20	
262-12	甕	14.6	17.8		ABEJK	3	明赤褐	90	
262-13	鉢	(26.0)			ABDEHJ	2	鈍橙	20	
265-1	坏	11.2	4.5		ADEJ	2	鈍黄橙	50	
265-2	鉢	(22.0)			BDEHJ	3	橙	40	
265-3	甕	(22.0)			BDEJ	2	鈍黄橙	20	
268-1	坏	15.6	4.4		ACEJ	2	橙	50	赤彩
268-2	坏	(11.0)			ABEJ	2	橙	20	全面赤彩
268-3	坏	(11.0)			BDEJ	2	橙	20	有段
268-4	坏	(13.0)			ACDEJ	2	橙	20	暗文
268-5	甕	(22.8)			ABDEJ	2	鈍褐	20	

出土遺物は土師器環4点、甕1点が出土した。

第269号土壌 (第475図)

W-15グリッドから検出した。175号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.48m、短軸1.28m、深さ0.21mであった。主軸方位はN-19°-Eであった。

出土遺物は、紡錘車が出土した。

第270号土壌 (第475図)

V-14グリッドから検出した。62号掘立柱建物跡に壊されていた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.53m、短軸1.30m、深さ0.16mであった。主軸方位はN-71°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第271号土壌 (第478図)

W-17グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、テラスを有していた。規模は、長軸1.50m、短軸1.30m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-27°-Eであった。

覆土は、焼土粒子、炭化物を含むふい黄褐色土が主体であった。

出土遺物は検出できなかった。

第272号土壌 (第478図・第479図)

W-17グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、底面中央部には径55cmの円形の小穴が掘り込まれていた。

規模は、長軸1.14m、短軸1.08m、深さ0.26mであった。主軸方位はN-24°-Wであった。

覆土は、焼土粒子、炭化物を含む黄褐色土が主体であった。

出土遺物は土師器環1点が出土した。

第273号土壌 (第478図・第479図)

W-16グリッドから検出した。171・175号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、遺構の規模は、長軸1.56m、短軸1.50m、深さ0.84mであった。主軸方位はN-0°

であった。

覆土は、炭化物、焼土粒子を多く含んでいた。特に4層は、炭化物層となっていた。

出土遺物は、須恵器長頸瓶1点、紡錘車1点が出土した。長頸瓶は、頸部～肩部の破片であるが、肩部には、縦方向のロクロ成形痕が観察できることから、フラスコ型長頸瓶と考えられる。

第274号土壌 (第478図・第479図)

W-15・16グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.92m、短軸0.86m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-70°-Wであった。

出土遺物は須恵器環1点が出土した。

第275号土壌 (第478図・第479図)

V-16グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.38m、短軸1.12m、深さ0.20mであった。主軸方位はN-58°-Eであった。

出土遺物は、土師器環2点が出土した。

第276号土壌 (第478図)

V-9グリッドから検出した。123号竪穴住居跡を壊していた。また遺構の東側は、調査区外へ展開していたため、遺構の全体を検出することができなかった。

平面の形状は円形と考えられ、規模は、径1.2m、深さ0.39mであった。主軸方位はN-38°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第277号土壌 (第478図)

W-15グリッドから検出した。153号竪穴住居跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.64m、短軸0.78m、深さ0.28mであった。主軸方位はN-75°-Eであった。

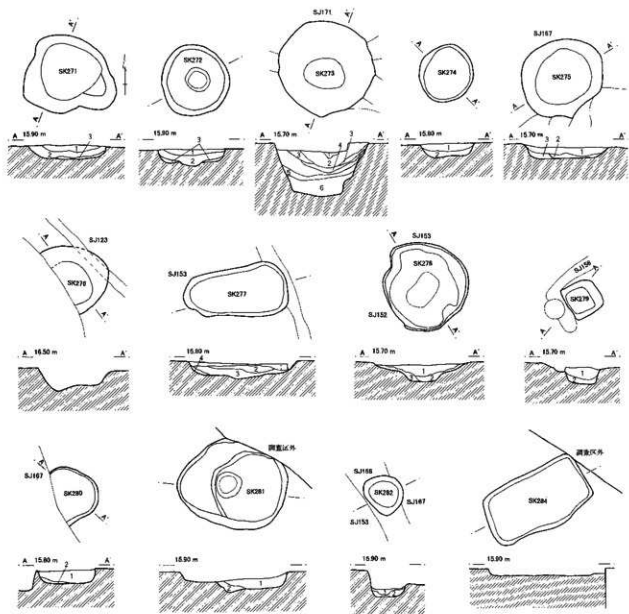
出土遺物は検出できなかった。

第278号土壌 (第478図)

W-15グリッドから検出した。152・153号竪穴住居跡と重複していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.44m、短軸1.34

第478図 土墳(6)



SK271・272号土壇横上

- 1 純黄褐色 (10YR4/3) RC 締り有
- 2 純黄褐色 (10YR4/3) RC B 締り有
- 3 褐色 (10YR4/4) B 土状

SK271号土壇横上

- 1 紫褐色 (10YR3/2) C B
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) B RC 締りやや弱
- 3 暗褐色 (10YR3/1) B C R 締り有
- 4 黒色 (10YR2/1) C 層 右側石灰 締り弱
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) B R 締り弱
- 6 黒色 (10YR3/1) C 多 締り有
- 7 褐色 (10YR4/4) B 砂質 締り有

SK274号土壇横上

- 1 紫褐色 (10YR3/1) B 多
- 2 暗褐色 (10YR3/4) B 多

SK275号土壇横上

- 1 暗褐色 (10YR3/4) RC 混入 締り有
- 2 純黄褐色 (10YR4/3) RC B 締り有
- 3 褐色 (10YR4/4) B 締り有

SK277号土壇横上

- 1 純黄褐色 (10YR4/3) B 締り有 石灰
- 2 紫褐色 (10YR3/2) RC B 締りやや弱
- 3 純黄褐色 (10YR4/3) B RC
- 4 純黄褐色 (10YR4/3) B 締り有

SK278号土壇横上

- 1 紫褐色 (10YR3/1) B 木炭混入 C 木炭混入
- 2 紫褐色 (10YR3/2) 砂質 B 土状 B 炭化多 RC 微塵
- 3 紫褐色 (10YR3/1) RC やや少
- 4 紫褐色 (10YR3/4) B やや少

SK279号土壇横上

- 1 暗褐色 (10YR3/4) RC 締りやや弱
- 2 暗褐色 (10YR3/4) RC 締りやや弱

SK280号土壇横上

- 1 紫褐色 (10YR3/2) C R 締りやや強
- 2 紫褐色 (10YR3/2) RC E F 石灰混入 締りやや弱

SK281号土壇横上

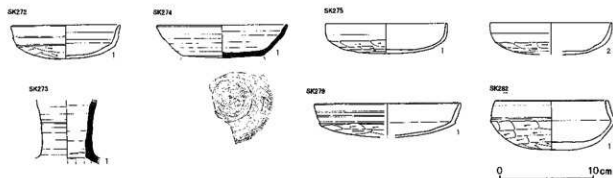
- 1 暗褐色 (10YR3/1) 黒色土状 RC 混入 締り有
- 2 紫褐色 (10YR4/4) B 多 締り有

SK282号土壇横上

- 1 褐色 (7.5YR4/3) R 混入 締り弱
- 2 紫褐色 (7.5YR3/2) RC 混入



第479図 土壇出土遺物(7)



土壇出土遺物観察表(4)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
272-1	環	11.6	3.6		ADEJ	2	鈍褐	95	
273-1	長頸瓶				BF	1	灰	90	湖西 フラスコ彩
274-1	環	(13.8)	3.5	(8.6)	AFI	2	灰	40	南比企
275-1	環	12.8	3.2		ABDE	2	橙	60	
275-2	環	(13.0)			ABDEJ	2	橙	40	
279-1	環	15.6			ABDF	2	灰黄褐	20	
282-1	環	12.0	5.3		ADEJL	2	橙	100	思疑あり

m、深さ0.26mであった。主軸方位はN-36°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第279号土壇 (第478図・第479図)

V-15グリッドから検出した。159号竪穴住居跡に壊されていた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸0.60m、短軸0.56m、深さ0.36mであった。主軸方位はN-54°-Eであった。

出土遺物は、土師器環1点が出土した。

第280号土壇 (第478図)

V-16グリッドから検出した。遺構は、167号竪穴住居跡に壊されていたため、全体を検出することはできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、径0.88m、深さ0.2mであった。主軸方位はN-24°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第281号土壇 (第478図)

W-17グリッドから検出した。遺構の北側は、調査区

外へ展開していたため、遺構の全体を検出することは出来なかった。

平面の形状は楕円形と考えられ、底面には、径40cmの小穴を有していた。規模は、長軸1.74m、短軸1.40m、深さ0.28mであった。主軸方位はN-84°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第282号土壇 (第478図)

V-15グリッドから検出した。167・168号土壇と重複していた。

平面の形状は円形で、規模は、径0.64m、深さ0.43mであった。主軸方位はN-33°-Wであった。

出土遺物は、土師器環1点が出土した。

第283号土壇 (第480図)

X-18グリッドから検出した。63号掘立柱建物に壊していた。また、74号井戸跡、76号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸3.10m、短軸1.46m、深さ0.58mであった。主軸方位はN-23°-Wで

あった。

出土遺物は検出できなかった。

第284号土壌 (第478図)

W-17グリッドから検出した。

平面の形状は長方形で、長軸1.7m、短軸0.97m、深さ0.08mであった。主軸方位はN-64°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第286号土壌 (第480図)

W-18グリッドから検出した。遺構の北側は調査区外へ展開していたため、遺構の全体を検出することはできなかった。

平面の形状は楕円形と考えられ、規模は、長軸2.60m、深さ0.7mであった。主軸方位はN-35°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第287号土壌 (第480図)

X-17グリッドから検出した。遺構の大半は、177号竪穴住居跡・74号溝跡に壊されていたため、遺構の全体を検出することはできなかった。

平面の形状は、長方形と考えられ、規模は、長軸5.02m、深さ0.08mであった。主軸方位はN-51°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第288号土壌 (第480図)

Y-16グリッドから検出した。184号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.62m、短軸1.38m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-19°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第289号土壌 (第480図・第483図)

Z-15グリッドから検出した。185号竪穴住居跡を壊していた。また、79号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.50m、短軸1.34m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-44°-Wであった。

出土遺物は、土師器環1点が出土した。

第290号土壌 (第481図・第483図)

U-10グリッドから検出した。38号溝跡に壊されていた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸5.74m、短軸0.72m、深さ0.15mであった。主軸方位はN-54°-Eであった。

出土遺物は、須恵器壺1点が出土した。

第291号土壌 (第480図・第483図)

Y-14グリッドから検出した。292号土壌に壊されていた。

平面の形状は不整形円形で、規模は、長軸1.08m、短軸0.54m、深さ0.44mであった。主軸方位はN-60°-Wであった。

出土遺物は、須恵器壺1点出土した。

第292号土壌 (第480図)

Y-14グリッドから検出した。

183号竪穴住居跡・291号土壌を壊していた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.14m、短軸1.04m、深さ0.98mであった。主軸方位はN-60°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第293号土壌 (第480図)

Y-14グリッドから検出した。平面の形状は円形で、規模は、長軸1.03m、短軸0.84m、深さ0.28mであった。主軸方位はN-70°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第294号土壌 (第481図)

Y-15グリッドから検出した。74号溝跡に壊されていた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.89m、短軸0.75m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-56°-Eであった。

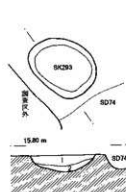
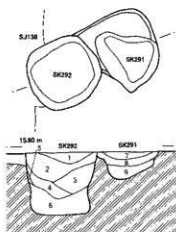
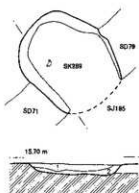
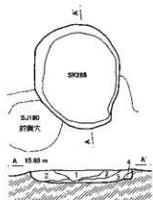
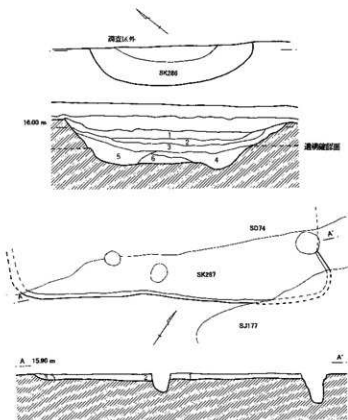
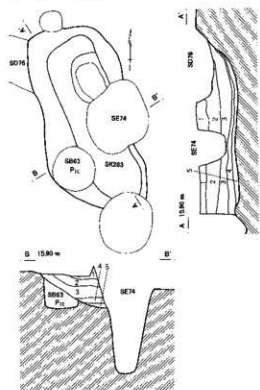
出土遺物は検出できなかった。

第295号土壌 (第481図)

Y-15グリッドから検出した。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.28m、短軸0.58m、深さ0.12mであった。主軸方位はN-50°-Wで

第480号 土壤(7)



第283号土層上

- 1 灰褐色 (10YR2/2) 灰色粘質土 7土多
- 2 灰褐色 (10YR2/2) 灰少 腐化のため赤褐色に色
- 3 灰褐色 (10YR2/2) 人糞土多
- 4 褐色 (10YR4/6) 砂質土主体
- 5 灰色 (10YR1/3) 粘土白色砂質土

第284号土層上

- 1 灰色 (10YR2/2) 遺物土多 若干C
- 2 暗褐色 (10YR3/2) 遺物土少 B多
- 3 灰褐色 (10YR2/2) R・C混加物 B・C多
- 4 灰褐色 (10YR2/2) 灰多 R・C不含 粘粒強
- 5 灰褐色 (10YR2/2) 灰色粘質土主体
- 6 褐色 (10YR4/6) 大型砂質土主体

第287号土層上

- 1 黄灰褐色 (10YR4/0) 褐色土主体 B多
- 2 褐色 (10YR4/6) 1層に粘粒 褐色土多 粘りや中弱
- 3 褐色 (10YR4/6) 以下床 粘り有

第288号土層上

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘粒有 R・粘土ブロック
- 2 灰褐色 (10YR3/2) R
- 3 暗褐色 (10YR3/4) 灰褐色 粘り 粘粒有
- 4 灰褐色 (10YR3/2) 以砂質土混入 粘り有

第289号土層上

- 1 灰褐色 (2.5Y3/1) 以灰土少 R混土少
- 2 灰褐色 (2.5Y3/1) 1層より粘多 R少

第291号土層上

- 1 灰褐色 (10YR3/1) R・C (炭化) 混入
- 2 灰褐色 (10YR3/2) R多 粘粒土物不粘

第291・292号土層上

- 1 灰褐色 (10YR3/1) R・C (木片) 多 B層に混入
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 以砂質土多
- 3 灰褐色 (10YR3/2) B砂質土多 C少
- 4 褐色 (10YR4/6) 砂質 B砂質土多
- 5 暗灰色 (10YR4/1) 粘粒有 R
- 6 灰褐色 (10YR3/1) 粘粒有 R・C少 B砂質土
- 7 暗褐色 (10YR3/2) R多
- 8 灰褐色 (10YR3/1) R・C (灰) 多 1層に混入
- 9 暗褐色 (10YR3/1) 以砂質土多 2層に混入



あった。

出土遺物は検出できなかった。

第296号土壌 (第481図)

X-14グリッドから検出した。77号掘立柱建物跡と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.05m、短軸1.22m、深さ0.36mであった。主軸方位はN-45°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第297号土壌 (第481図)

Y-15グリッドから検出した。8号性格不明遺構を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.25m、短軸1.22m、深さ0.08mであった。主軸方位はN-56°-Wであった。

出土遺物は、図示不可能であったが、中世常滑産の陶器片が出土した。

第298号土壌 (第481図)

Y-14グリッドから検出した。183号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.38m、短軸1.10m、深さ0.38mであった。主軸方位はN-50°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第299号土壌 (第481図)

Y-15グリッドから検出した。遺構の中央部分は、74号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.28m、短軸は推定で1.5m、深さ0.42mであった。主軸方位はN-44°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第300号土壌 (第481図・第483図)

Z-15グリッドから検出した。遺構の大半は77号溝跡に壊されていたため、全体を検出することはできなかった。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸2.07m、短軸0.75m、深さ0.38mであった。主軸方位はN-54°-Eで

あった。

出土遺物は須恵器環が出土した。

第301号土壌 (第482図)

X-14グリッドから検出した。302号土壌を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.62m、短軸1.45m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-35°-Eであった。

出土遺物は、図示不可能であったが、常滑産の甕の破片が出土した。

第302号土壌 (第482図)

X-14グリッドから検出した。301号土壌、81号井戸跡に壊されていたため、遺構の全体を検出することはできなかった。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.16m、短軸は推定で1.0m、深さ0.13mであった。主軸方位はN-65°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第303号土壌 (第482図)

X・Y-18グリッドから検出した。87号溝跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.35m、短軸1.44m、深さ0.24mであった。主軸方位はN-17°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第304号土壌 (第482図・第483図)

Y-13グリッドから検出した。305号土壌と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにすることができなかった。

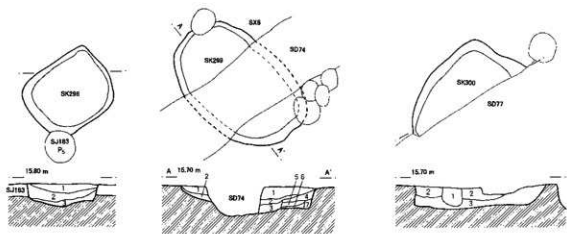
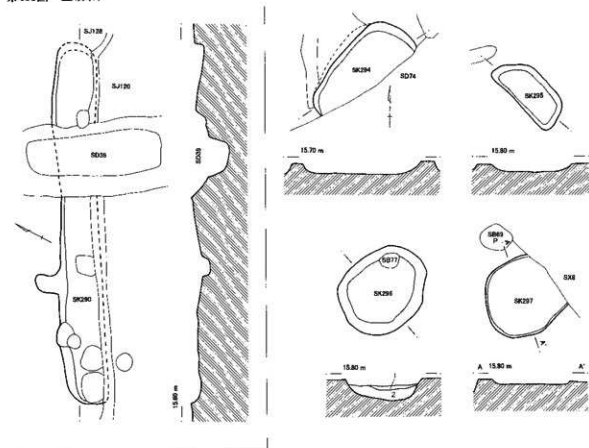
平面の形状は長い楕円形で、規模は、長軸1.84m、短軸0.36m、深さ0.24mであった。主軸方位はN-64°-Eであった。

出土遺物は、土師器環1点が出土した。

第305号土壌 (第482図)

Y-13グリッドから検出した。38号溝跡に壊されていた。また、304号土壌と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

第481图 土壤(8)



第296号土墩出土

- 1 暗褐色 (10YR2/4) R 砂质土多
- 2 紫褐色 (10YR2/3) 粘性中少有 R

第298号土墩出土

- 1 紫褐色 (10YR3/2) 紫色土主体 乱人物土
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) B 多层
- 3 紫色 (10YR2/1) C (木) 多泥

第299号土墩出土

- 1 黄褐色 (10YR5/5) B 若干 RC 混入
- 2 黄褐色 (10YR4/2) R C 土体
- 3 暗褐色 (10YR3/3) B 乱人 若干 RC
- 4 灰黄褐色 (10YR4/5) B · 砂质土混入
- 5 暗褐色 (10YR3/5) C 乱若干
- 6 暗褐色 (10YR3/5) B 主体
- 7 褐色 (10YR4/6) B

第300号土墩出土

- 1 黑色 (10YK1/1) RC 铺砂与木屑
- 2 紫褐色 (10YR2/1) 1 靠近 R 若干少 B
- 3 褐色 (10YR4/4) B 主体 硬粘土



平面の形状は方形で、規模は、長軸1.18m、短軸1.02m、深さ0.13mであった。主軸方位はN-66°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第306号土壌 (第482図)

Y-14グリッドから検出した。191号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.02m、短軸0.94m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-18°-Wであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第307号土壌 (第482図)

Y-18グリッドから検出した。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.85m、短軸0.90m、深さ0.40mであった。主軸方位はN-18°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第308号土壌 (第482図・第483図)

Y-18グリッドから検出した。85号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.27m、短軸0.74m、深さ0.45mであった。主軸方位はN-42°-Wであった。

出土遺物は、上師器環1点が出土した。

第309号土壌 (第482図)

Y-18グリッドから検出した。遺構は、85号溝跡に壊されていたため、遺構の全体を検出することはできなかった。

平面の形状は楕円形と考えられ、規模は、長軸1.42m、短軸0.76m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-36°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第310号土壌 (第482図)

Y-18グリッドから検出した。1号周溝状遺構と重複していたが、新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.57m、短軸0.92m、深さ0.36mであった。主軸方位はN-20°-Wで

あった。

出土遺物は検出できなかった。

第311号土壌 (第484図)

X-14グリッドから検出した。38号溝跡に壊されていた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.30m、短軸0.82m、深さ0.62mであった。主軸方位はN-42°-Wであった。

出土遺物は、須恵器製の破片が出土したが、図示可能な遺物は検出できなかった。

第312号土壌 (第484図)

X-14グリッドから検出した。38号溝跡に壊されていた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.42m、短軸0.92m、深さ0.71mであった。主軸方位はN-42°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第313号土壌 (第482図)

X-19グリッドから検出した。198号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、長軸の一端にテラスを有していた。規模は、長軸2.37m、短軸0.80m、深さ0.37mであった。主軸方位はN-65°-Eであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第314号土壌 (第484図)

Y-18グリッドから検出した。196・201号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸0.95m、短軸0.87m、深さ0.37mであった。主軸方位はN-7°-Eであった。

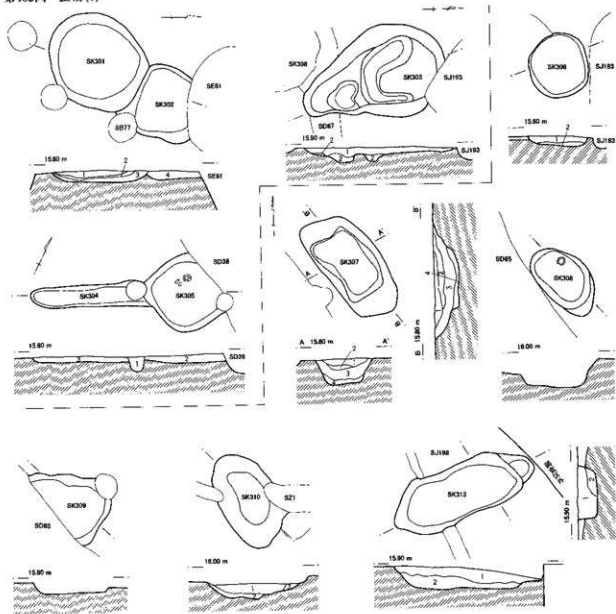
出土遺物は石製紡錘車1点が出土した。

第315号土壌 (第484図)

Z-18グリッドから検出した。201号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、長軸の一端の壁は、挟れていた。規模は、長軸1.82m、短軸1.06m、深さ0.60mであった。主軸方位はN-77°-Wであった。

第482岡 土墳(9)



第301・302号土墳遺土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) 材料無 B砂質土多
- 2 褐色 (10YR2/3) C層 R

- 3 暗褐色 (10YR3/4) 材料やや有 B砂質土多
- 4 鈍黄褐色 (10YR4/5) 粘りやや有 B微量

第303号土墳遺土

- 1 黄褐色 (10YR3/2) R C内微量 粘りやや有
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 1層含 Rブロック混在

第304・305号土墳遺土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) R
- 2 褐色 (10YR4/6) B砂質土多
- 3 暗褐色 (10YR3/2) R砂質土多

第306号土墳遺土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) R黒化多少 B黒化多
- 2 褐色 (10YR4/6) R黒化少 B黒化多

第307号土墳遺土

- 1 黒褐色 (10YR2/3) R 目多 若干C
- 2 赤褐色 (10YR3/3) 1層に厚 R多
- 3 暗褐色 (10YR2/3) R C微量混在
- 4 褐色 (10YR4/6) R土体

第308号土墳遺土

- 1 黒褐色 (10YR2/3) R 微量 B 粘りやや有
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/6) B土体 3層をブロック状含
- 3 明黄褐色 (10YR6/6) R土体 1層をブロック状含

第310号土墳遺土

- 1 暗褐色 (10YR4/7) R多 C混在 粘りブロック
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/6) 粘り土体



出土遺物は検出できなかった。

第316号土壌 (第484図)

Z-19グリッドから検出した。201・202号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状はL形で、規模は、長軸0.86m、短軸0.70m、深さ0.48mであった。主軸方位はN-55°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第317号土壌 (第484図)

Z-18グリッドから検出した。201号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.02m、短軸0.42m、深さ0.51mであった。主軸方位はN-50°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第318号土壌 (第483図・第484図)

AA-20グリッドから検出した。208号竪穴住居跡を壊していた。また、90号非戸跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸2.09m、短軸2.42m、深さ0.51mであった。主軸方位はN-45°-Eであった。

出土遺物は須恵器環1点、壺1点が出土した。

第319号土壌 (第484図)

Z-18グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.82m、短軸0.64m、深さ0.26mであった。主軸方位はN-36°-Wであった。

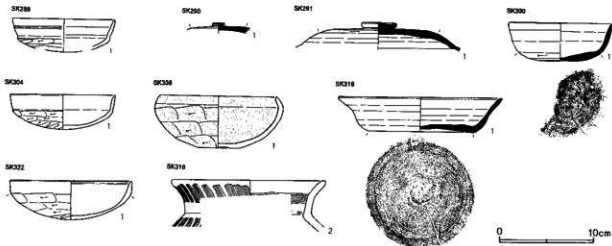
出土遺物は、羽口が出土した。

第320号土壌 (第484図)

AA-20グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、底面には、径30cmの円形の小

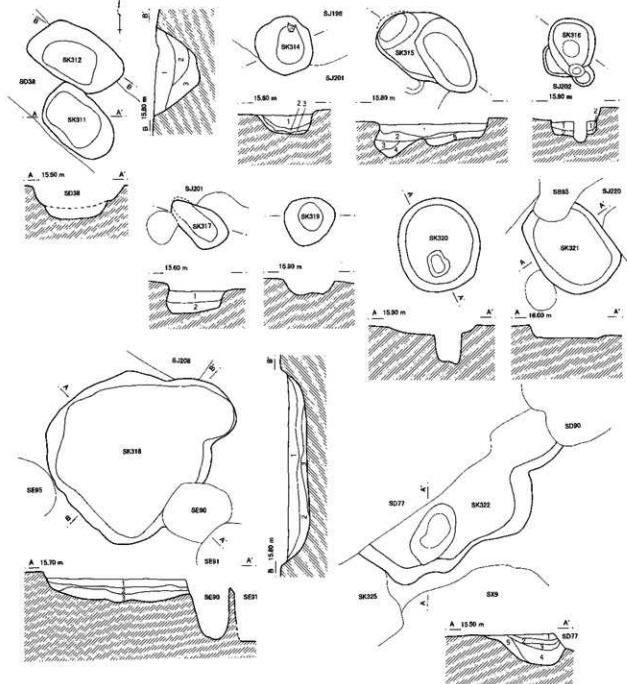
第483図 土壌出土遺物(8)



土壌出土遺物観察表(5)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
289-1	環	(10.8)			ABEJ	3	橙	20	有段
290-1	蓋				ABDIJL	3	灰	30	末野? つまみ径1.2cm
291-1	蓋				AFHJ	3	黄褐	30	末野 つまみ径3.7cm
300-1	環	(11.0)	4.1		AFIL	2	灰	60	
304-1	環	11.2	3.8		ABDEJ	3	橙	100	
308-1	環	12.5	5.4		ABCEJL	3	橙	80	全面赤彩
318-1	環	17.5	3.7	11.3	ABH	2	灰	70	末野?
318-2	壺	(16.0)			BEJK	2	鈍黄橙	80	
322-1	環	13.0	4.2		ABCE	2	赤褐	60	

第484図 土壤(10)



第312号土壌層土

- 1 灰褐色 (10YR4/2) F 多
- 2 暗褐色 (10YR3/0) B 砂質土多 F 多
- 3 褐色 (10YR4/6) B 砂質土多

第314号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) B 多 砂り有
- 2 暗褐色 (10YR3/0) 1 層基本 B 砂質土多 砂り有
- 3 褐色 (10YR4/6) 粘質 B 土体

第315号土壌層土

- 1 灰褐色 (10YR3/2) 粘質土 B 未溶化・R 多
- 2 暗褐色 (10YR2/7) B 未溶化多 R 少 砂り有
- 3 褐色 (10YR3/2) 2 層基本 B 不全 B 大型化
- 4 灰色 (10YR2/2) B 少 砂り有
- 5 暗褐色 (10YR3/4) B 土体 硬・B 粘質土軟化

第316号土壌層土

- 1 灰褐色 (10YR3/2) B 多 R C 少
- 2 暗褐色 (10YR3/2) B 粘り厚 暗褐色粘質土主体

第317号土壌層土 (盗掘の埋戻し)

- 1 暗褐色 (10YR3/0) B 多 水分で暗褐色灰色粘質土化
- 2 褐色 (10YR4/6) 未溶化 B 土体

第318号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR3/1) R F 多
- 2 暗褐色 (10YR3/1) CR F
- 3 灰褐色 (10YR5/8) 砂質土 暗褐色ブロック

第322号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR2/7) B 風化少 R 風化少 C 風化少
- 2 暗褐色 (10YR2/7) やや R 多
- 3 暗褐色 (10YR3/1) R 多
- 4 暗褐色 (10YR3/1) R B やや多
- 5 暗褐色 (10YR3/1) B 土体 暗褐色上ブロック風化多



穴が掘り込まれていた。規模は、長軸1.48m、短軸1.28m、深さ0.16mであった。主軸方位はN-0°であった。

出土遺物は検出できなかった。

第321号土壌 (第484図)

AB-20グリッドから検出した。遺構は、219・220・238号竪穴住居跡を壊していた。また、85号掘立柱建物跡に壊されていたため、全体を検出することができなかった。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.62m、短軸1.16m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-45°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第322号土壌 (第483図・第484図)

Z-15グリッドから検出した。遺構の大半は、325号土壌・77・90号溝跡に壊されていたため、遺構の全体を検出できなかった。また、9号性格不明遺構を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸3.84m、短軸1.10m、深さ0.46mであった。主軸方位はN-22°-Eであった。

出土遺物は土師器環1点が出土した。

第323号土壌 (第485図・第486図)

AB-18グリッドから検出した。235・236・237号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸2.16m、短軸1.00m、深さ0.55mであった。主軸方位はN-68°-Eであった。

出土遺物は土師器環1点が出土した。

第324号土壌 (第485図・第486図)

AB-18グリッドから検出した。235・236号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、遺構の規模は、径1.34m、深さ0.40mであった。主軸方位はN-42°-Wであった。

出土遺物は須恵器環1点が出土した。

第325号土壌 (第485図)

Z-15グリッドから検出した。244号竪穴住居跡、322号土壌、9号性格不明遺構を壊していた。また77号溝

跡に壊されていた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.58m、短軸1.45m、深さ0.28mであった。主軸方位はN-57°-Eであった。出土遺物は検出できなかった。

第326号土壌 (第485図)

Z-15グリッドから検出した。244号竪穴住居跡、9号性格不明遺構を壊していた。また、77号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.50m、深さ0.40mであった。主軸方位はN-36°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第327号土壌 (第485図)

AA-18グリッドから検出した。231号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、径1.52m、深さ0.34mであった。主軸方位はN-85°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第328号土壌 (第485図)

Y-17グリッドから検出した。222・223号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.82m、短軸1.24m、深さ0.30mであった。主軸方位はN-20°-Wであった。出土遺物は検出できなかった。

第330号土壌 (第485図)

AB-19グリッドから検出した。241・242号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、径1.14m、深さ0.46mであった。主軸方位はN-77°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第331号土壌 (第485図)

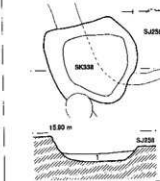
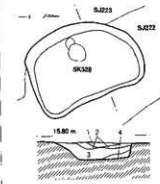
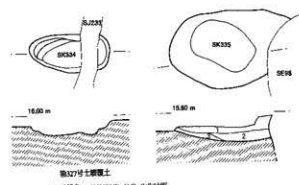
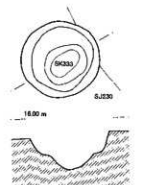
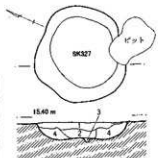
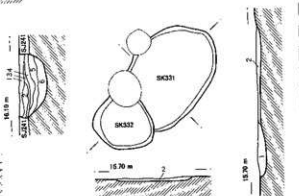
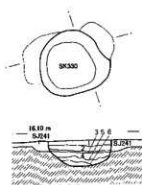
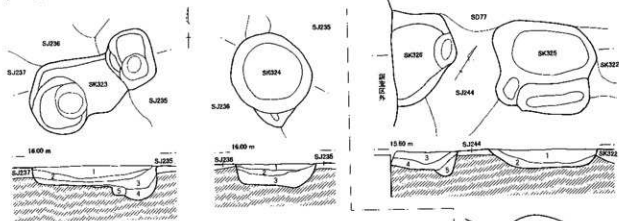
Z-19グリッドから検出した。226・227号竪穴住居跡を壊していた。また、332号土壌に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.86m、短軸1.20m、深さ0.06mであった。主軸方位はN-50°-Eであった。出土遺物は検出できなかった。

第332号土壌 (第485図)

Z-19グリッドから検出した。226・227号竪穴住居跡、

第485図 土壕(11)



第23号土壕壁土

- 1 灰褐色 (10YR4/2) H多 RC少
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 1層基本 部化進行H 灰多
- 3 鈍黄褐色 (10YR5/2) 部化進行H多 粘性强
- 4 鈍黄褐色 (10YR5/2) 3-2層基本 R多 粘性强
- 5 褐色 (10YR4/4) H主体 部化進行H

第24号土壕壁土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) RC多 全体H多 カット壁土
- 2 暗褐色 (10YR3/4) D+粘 部化未進行
- 3 暗褐色 (10YR3/4) 粘性强 部化進行H少 灰多

第25号土壕壁土

- 1 黑色 (10YR2/2) D未酸化少 R未酸化少 C未酸化少
- 2 黑色 (10YR2/2) 1層よりH多
- 3 黑色 (10YR2/1) D未酸化少 R未酸化少 C未酸化少
- 4 黑色 (10YR2/1) 3層よりH多
- 5 黑色 (10YR2/1) 3層よりH多 粘り有

第32号土壕壁土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) RC 少粘質
- 2 暗褐色 (10YR3/4) RC 粘り少粘質
- 3 褐色 (10YR4/4) 2層に比べ粘質粘質
- 4 鈍黄褐色 (10YR5/4) H 粘り有

第33号土壕壁土

- 1 黒褐色 (10YR2/2) H 粘り多
- 2 黒褐色 (10YR2/2) D 酸化少 R 粘り少 C 未酸化少
- 3 黒褐色 (10YR2/1) D 酸化少 R 酸化少 C 未酸化少 粘り有
- 4 黒褐色 (10YR2/1) 2層に同じ 粘り有

第34号土壕壁土

- 1 黒褐色 (10YR2/2) 粘性强 粘土ブロック・H
- 2 暗褐色 (10YR3/4) ア層より粘り少 H
- 3 黄褐色 (10YR5/5) H 主体
- 4 暗褐色 (10YR3/4) H 粘り少粘質
- 5 黄褐色 (10YR5/5) D 主体
- 6 黄褐色 (10YR5/2) 粘性强 D 粘り少粘質

第35号土壕壁土

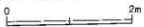
- 1 黒褐色 (10YR2/1) H 酸化多 H 酸化少
- 2 黒褐色 (10YR2/1) 1層よりH 少

第36号土壕壁土

- 1 黒褐色 (10YR2/2) D 酸化少 R 粘り少 C 未酸化少 粘り少粘質
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 1層に黒褐色粘土層多粘り有
- 3 黒褐色 (10YR3/4) 1層に黒褐色粘土層多粘り有

第38号土壕壁土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) 粘性强 土部化大程H 多



331号土壌を壊していた。

平面の形状は不整形円形で、規模は、径1.1m、深さ0.11mであった。主軸方位はN-51°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第333号土壌 (第485図)

AA-19グリッドから検出した。230号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、径1.27m、深さ0.60mであった。主軸方位はN-63°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第334号土壌 (第485図)

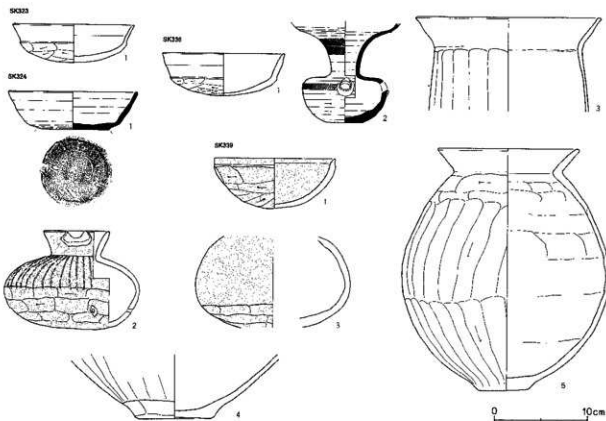
AA-19グリッドから検出した。233号竪穴住居跡と重複していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.28m、短軸0.6m、深さ0.23mであった。主軸方位はN-81°-Wであった。出土遺物は検出できなかった。

第335号土壌 (第485図)

AA-16グリッドから検出した。98号井戸跡に壊され

第486図 土壌出土遺物(9)



ていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸は推定で1.8m、短軸1.24m、深さ0.40mであった。主軸方位はN-84°-Wであった。出土遺物は検出できなかった。

第336号土壌 (第486図・第487図)

AA-17グリッドから検出した。遺構は、337号土壌を壊していた。また、100号井戸跡、97号溝跡に壊されていた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸7.12m、短軸1.42m、深さ0.68mであった。主軸方位はN-79°-Eであった。

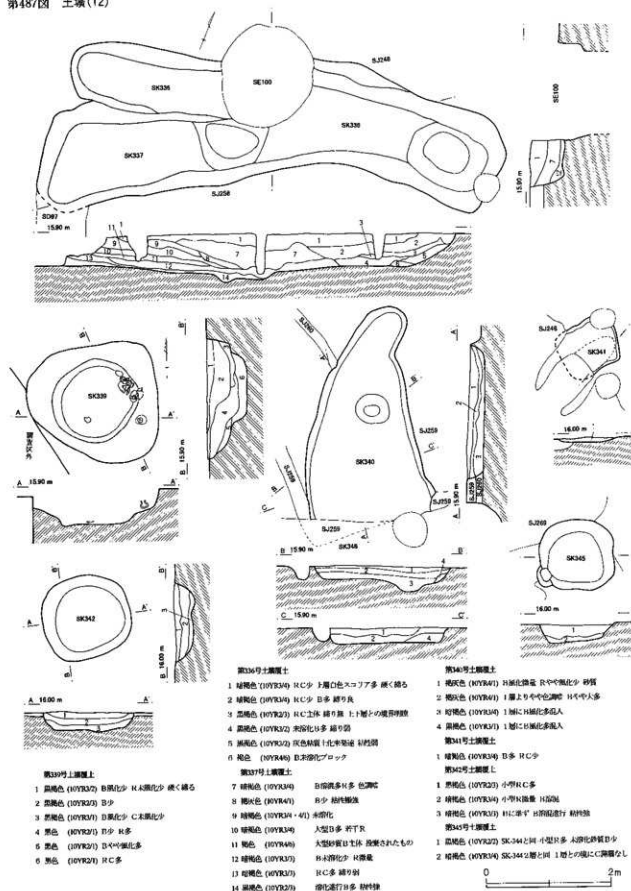
出土遺物は、土師器環1点、甕1点、須恵器甕1点が出土した。

第337号土壌 (第487図)

AA-17グリッドから検出した。336号土壌、100号井戸跡、97号溝跡に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸は推定で4.0m、短軸1.14m、深さ0.80mであった。主軸方位はN-58°

第487図 土壌(12)



土壌出土遺物観察表(6)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
323-1	坏	13.0	4.1		ABEHJK	2	鈍黄橙	70	
324-1	坏	13.8	4.1	7.7	AFI	2	鈍橙	50	南比企
336-1	坏	13.0	4.5		ADEHJ	2	橙	90	
336-2	甕			(4.0)	BF	1	灰色	70	湖西?
336-3	甕	(19.8)			ADEHJK	2	浅黄橙	10	
339-1	坏	12.8	5.4		ABEJK	3	鈍黄橙	90	赤彩
339-2	壺	7.2	10.5		ABE I	2	鈍黄橙	95	赤彩
339-3	壺				BDEHJK	3	鈍黄橙	80	赤彩
339-4	甕			7.6	BCFJL	3	鈍黄橙	60	
339-5	甕	14.8	25.8	5.5	BDEHJKL	3	鈍黄橙	80	

-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第338号土壌 (第485図)

AB-17グリッドから検出した。258号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.43m、短軸1.25m、深さ0.42mであった。主軸方位はN-20°-Wであった。

出土遺物は、土玉が1点出土した。

第339号土壌 (第486図・第487図)

AB-16グリッドから検出した。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸2.24m、短軸1.54m、深さ0.64mであった。主軸方位はN-62°-Wであった。

出土遺物は土師器環1点、壺3点、甕2点、剣形石製模造品1点が出土した。

第340号土壌 (第487図)

AB-17グリッドから検出した。259・260号竪穴住居跡を壊していた。また、348号土壌に壊されていた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸3.26m、短軸1.65m、深さ0.32mであった。主軸方位はN-16°-Wであった。

出土遺物は、検出できなかった。

第341号土壌 (第487図)

AA-18グリッドから検出した。248号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸0.82m、短軸

0.78m、深さ0.08mであった。主軸方位はN-53°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第342号土壌 (第487図・第490図)

AB-17グリッドから検出した。269号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.43m、短軸1.28m、深さ0.35mであった。主軸方位はN-83°-Wであった。

出土遺物は須恵器環1点が出土した。

第343号土壌 (第488図・第490図)

AB-17グリッドから検出した。269号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.56m、短軸1.10m、深さ0.60mであった。主軸方位はN-47°-Eであった。

出土遺物は須恵器蓋2点が出土した。

第344号土壌 (第488図)

AB-17グリッドから検出した。269号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.46m、短軸1.35m、深さ0.60mであった。主軸方位はN-47°-Eであった。

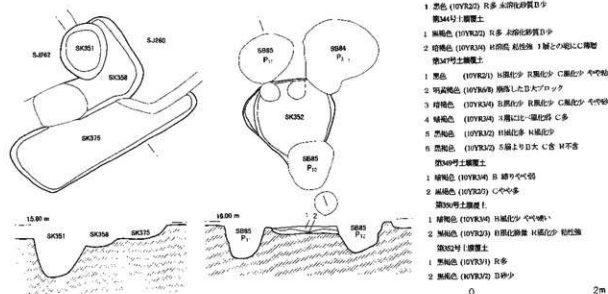
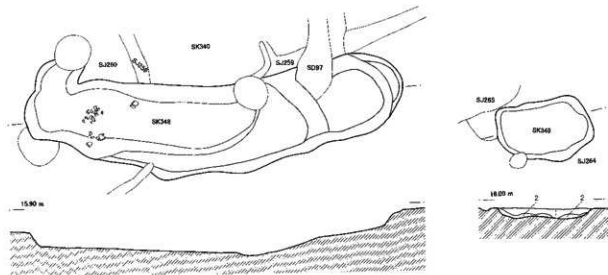
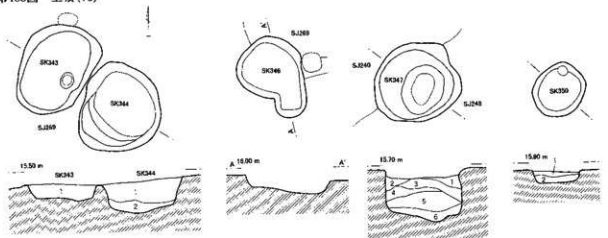
出土遺物は検出できなかった。

第345号土壌 (第487図)

AB-17グリッドから検出した。269号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は方形で、遺構の規模は、長軸1.28m、

第488図 土墳(13)



- 第43号土塚層土
- 1 黒色 (10YR3/2) R多 赤褐色砂質土少
- 第144号土塚層土
- 1 黒褐色 (10YR3/2) R多 赤褐色砂質土少
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) H弱 粘性强 3層との間にC層層
- 第147号土塚層土
- 1 黒色 (10YR3/2) H弱土少 R褐色土少 C褐色土 やや粘性强
 - 2 明褐色 (10YR6/6) 腐熟したD大ブロック
 - 3 暗褐色 (10YR3/4) H弱土少 R褐色土少 C褐色土 やや粘性强
 - 4 暗褐色 (10YR3/4) 3層に比し褐色弱 C多
 - 5 赤褐色 (10YR3/2) H弱土多 H弱土少
 - 6 赤褐色 (10YR3/2) S層より大 C多 H不著
- 第349号土塚層土
- 1 暗褐色 (10YR3/4) B 粘りや弱
 - 2 黒褐色 (10YR3/2) Cやや多
- 第350号土塚層土
- 1 暗褐色 (10YR3/4) H弱土少 やや粘性强
 - 2 黒褐色 (10YR3/2) H弱土多 粘性强
- 第352号土塚層土
- 1 黒褐色 (10YR3/4) R多
 - 2 暗褐色 (10YR3/2) 土少



短軸1.10m、深さ0.33mであった。主軸方位はN-12°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第346号土壌 (第488図)

AB-17グリッドから検出した。269号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.36m、短軸0.96m、深さ0.32mであった。主軸方位はN-12°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第347号土壌 (第488図)

AA-17グリッドから検出した。240・248号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.40m、短軸1.24m、深さ0.84mであった。主軸方位はN-84°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第348号土壌 (第488図・第490図)

AB-19グリッドから検出した。340号土壌を壊していた。また、259・260号竪穴住居跡、ピット806と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸6.06m、短軸1.40m、深さ0.73mであった。主軸方位はN-80°-Wであった。

出土遺物は、土師器甕1点、白玉、炭化木片が出土した。また、本遺構から出土した土師器甕の破片が、ピット806-2の遺物と接合した。

第349号土壌 (第488図)

AC-20グリッドから検出した。264号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.48m、短軸0.88m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-77°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第350号土壌 (第488図)

AA-18グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.88m、短軸0.74

m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-44°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第351号土壌 (第488図)

AB-16グリッドから検出した。262号竪穴住居跡、358号土壌を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.88m、短軸0.74m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-10°-Wであった。

出土遺物は、須恵器製の破片が出土した。

第352号土壌 (第488図)

AB-20グリッドから検出した。84・85号掘立柱建物跡に壊されていた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.48m、短軸1.04m、深さ0.12mであった。主軸方位はN-84°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第353号土壌 (第489図)

AC-17グリッドから検出した。272号竪穴住居跡と重複していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.26m、短軸1.06m、深さ0.16mであった。主軸方位はN-47°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第354号土壌 (第489図・第490図)

AC-17グリッドから検出した。271号竪穴住居跡と重複していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.30m、短軸1.22m、深さ0.3mであった。主軸方位はN-33°-Wであった。

出土遺物は土師器鉢1点が出土した。

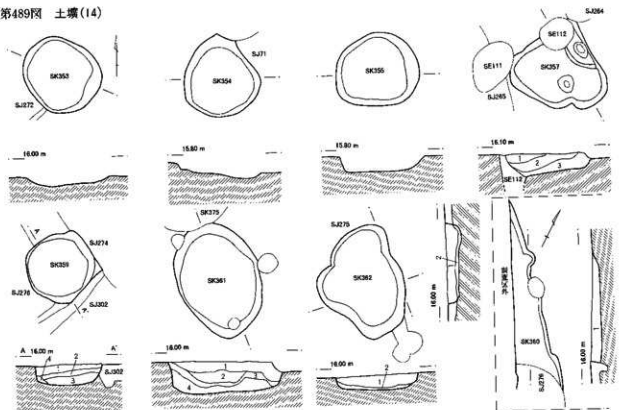
第355号土壌 (第489図)

AC-17グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.36m、短軸1.06m、深さ0.26mであった。主軸方位はN-58°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第489図 土壇(14)



第37号土壇遺土

- 1 褐色 (01YK46) 灰濁入 練りやや有
- 2 暗褐色 (01YK34) 目多
- 3 黄褐色 (01YK27) 目均 練りやや有 粘質有

第39号土壇遺土

- 1 黄褐色 (01YK23) 未溶化B 瓦陶器
- 2 暗褐色 (01YK33) 未溶化B 7片
- 3 黄褐色 (01YK23) 1層に混じりかB未溶化・R多 粘性强
- 4 褐色 (01YK46) B 1片 地の溶融化跡

第30号土壇遺土

- 1 暗褐色 (01YK35) 若干B出混 暗褐色粘り少 S.Jに切られる
- 第30号土壇遺土
- 1 黄褐色 (01YK27) B R C 陶器 練り強
 - 2 黄褐色 (01YK27) R C 粘り少 未溶化ブロック多
 - 3 暗褐色 (01YK34) 大型Bブロック主体 粘性强 R塊
 - 4 黄褐色 (01YK23) 2層に混じり 若干干 目小欠

第36号土壇遺土

- 1 暗褐色 (01YK35) S.J25 1層に混じり R多 C・大型B塊混
- 2 褐色 (01YK46) 未溶化B主体 粘質弱さらい様し

第30号土壇遺土

- 1 黄褐色 (01YK27) 粘質有 練りやや有 軟質 R 混入
- 2 褐色 (01YK27) 1層に比へR少 粘りブロック混入
- 3 褐色 (01YK21) C 主体
- 4 黄褐色 (01YK35) B

第34号土壇遺土

- 1 黄褐色 (01YK35) 黄白色カク灰
- 2 暗褐色 (01YK35) R C 若干B混入
- 3 暗褐色 (01YK34) 2層に比へB少
- 4 黄褐色 (01YK54) B



第357号土墳 (第489図)

AC-20グリッドから検出した。264号竪穴住居跡、111・112号井戸跡を壊していた。

平面の形状は不整形形で、規模は、長軸1.34m、短軸1.16m、深さ0.36mであった。主軸方位はN-52°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第358号土墳 (第488図・第490図)

AB-16グリッドから検出した。351号土墳に壊されていた。

平面の形状は不整形形で、規模は、長軸1.05m、短軸0.72m、深さ0.32mであった。主軸方位はN-31°-Wであった。

出土遺物は、土師器壺1点が出土した。

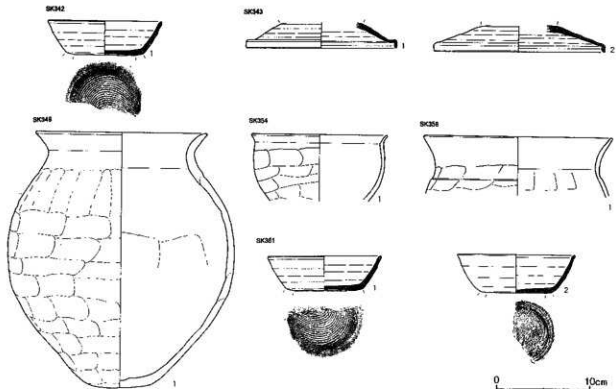
第359号土墳 (第489図)

AC-17グリッドから検出した。274・276・302号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形形で、規模は、長軸1.12m、短軸1.02m、深さ0.34mであった。主軸方位はN-16°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第490図 土墳出土遺物(10)



土墳出土遺物観察表(7)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
342-1	坏	(13.0)	3.4	(9.2)	BIJ	2	灰	10	南比企
343-1	蓋	(16.0)			BCIJ	2	灰	15	南比企
343-2	蓋	(18.0)			BCFI	3	灰白	50	つまみ欠 南比企
348-1	甕	(18.2)	27.0	8.8	ABDEFJL	4	鈍黄橙	40	器面荒れ
354-1	鉢	(14.4)			BDEIJ	2	橙	40	
358-1	甕	(20.0)			BDEHJ	2	橙	20	
361-1	坏	(12.0)	3.7	(6.6)	AFIL	2	灰	50	南比企
361-2	坏	(12.5)	4.1	(6.2)	ABFIL	2	灰	40	南比企

第360号土壌 (第489図)

AC-16グリッドから検出した。遺構の大半は、調査区外へ展開していた。また、276号竪穴住居跡に壊されていた。

平面の形状は長方形と考えられ、規模は、残っている部分で長軸2.04m、深さ0.18mであった。主軸方位はN-31°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第361号土壌 (第489図・第490図)

AC-16グリッドから検出した。

平面の形状は卍形で、規模は、長軸1.86m、短軸1.32m、深さ0.52mであった。主軸方位はN-16°-Wであった。

出土遺物は須恵器環2点が出土した。

第362号土壌 (第489図)

AC-16グリッドから検出した。276号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.82m、短軸1.40m、深さ0.26mであった。主軸方位はN-0°であった。

出土遺物は検出できなかった。

第363号土壌 (第489図)

AD-19・20グリッドから検出した。278号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は卍形で、遺構の規模は、長軸3.06m、短軸2.42m、深さ0.40mであった。主軸方位はN-0°であった。

出土遺物は、白玉が1点出土した。

第364号土壌 (第489図)

AD-20グリッドから検出した。278号竪穴住居跡と重複していたが、遺構の新旧関係は、明らかにできなかった。

平面の形状は方形で、規模は、長軸2.50m、短軸2.20m、深さ0.28mであった。主軸方位はN-74°-Eであった。

出土遺物は、白玉13点が出土した。

第365号土壌 (第491図)

AG-19グリッドから検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.00m、短軸0.94m、深さ1.26mであった。主軸方位はN-34°-Wであった。底面付近の壁は抉れていた。

出土遺物は検出できなかった。

第366号土壌 (第491図・第492図)

AG-19グリッドから検出した。283号竪穴住居跡に壊されていた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.93m、短軸1.23m、深さ0.78mであった。主軸方位はN-20°-Eであった。

出土遺物は、覆土中から、土師器環1点、須恵器環1点が出土した。

第367号土壌 (第491図)

AC-19グリッドから検出した。268号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.52m、短軸0.80m、深さ0.21mであった。主軸方位はN-83°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第368号土壌 (第491図)

AC-20グリッドから検出した。268号竪穴住居跡と重複していた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸0.83m、短軸0.75m、深さ0.22mであった。主軸方位はN-77°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第369号土壌 (第491図)

AC-19グリッドから検出した。268号竪穴住居跡と重複していた。

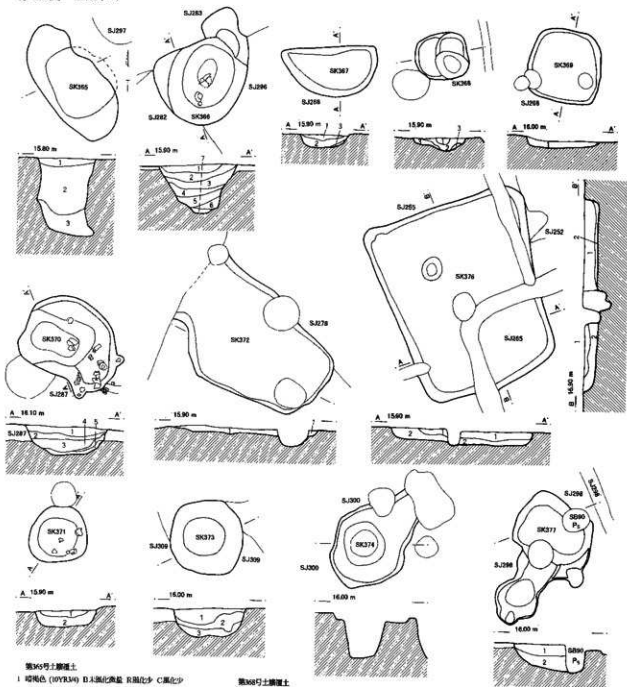
平面の形状は方形で、規模は、長軸1.16m、短軸1.15m、深さ0.20mであった。主軸方位はN-10°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第370号土壌 (第491図・第492図)

AC-19グリッドから検出した。287号竪穴住居跡を

第491図 土壌(15)



第365号土壌遺土

- 1 暗褐色 (0YR3/4) B土質化多 黄褐色少 C黒化少
- 2 暗褐色 (0YR3/4) 1層よりRC多
- 3 暗褐色 (0YR3/4) 1層よりRC少 やや黄色帯付

第366号土壌遺土

- 1 暗褐色 (0YR3/7) B土質化多 R黒化少 C黒化少
- 2 暗褐色 (0YR3/7) 1層よりCR多
- 3 暗褐色 (0YR3/7) 1層より更にCR多
- 4 明赤褐色 (2.5YR5/4) 赤褐色粘土層
- 5 黄褐色 (0YR3/1) B土質化多
- 6 黄褐色 (0YR3/1) B土質化少
- 7 黄褐色 (0YR3/1) B層下部

第367号土壌遺土

- 1 褐色 (0YR4/4) RC部
- 2 黄褐色 (0YR3/4) Bに若干R
- 3 褐色 (0YR4/4) H下部

第368号土壌遺土

- 1 黄褐色 (0YR3/2) RC部入 縞りやや弱
- 2 褐色 (0YR4/4) 若干R
- 3 黄褐色 (0YR3/4) H下部

第369号土壌遺土

- 1 黄褐色 (0YR3/4) B 若干R部入

第370号土壌遺土

- 1 褐色 (0YR4/4) RC部入 縞りやや弱
- 2 褐色 (0YR4/4) 1層に比C多
- 3 黄褐色 (0YR3/4) DR 縞りやや弱
- 4 黄褐色 (0YR3/2) C層 MC土層

第371号土壌遺土

- 1 灰黄褐色 (0YR4/2) RC 縞りやや弱
- 2 灰黄褐色 (0YR5/2) DC 土層入

第372号土壌遺土

- 1 黄褐色 (0YR3/4) B部入 縞りやや弱

第373号土壌遺土

- 1 暗褐色 (0YR3/4) 赤化進行部黄赤多 R・C部粘土多
- 2 褐色 (0YR3/2) MC土多 R多
- 3 黄褐色 (0YR3/7) 赤化比少 若干の 縞り強

第374号土壌遺土

- 1 暗褐色 (0YR3/4) Dやや多 縞り有

第375号土壌遺土

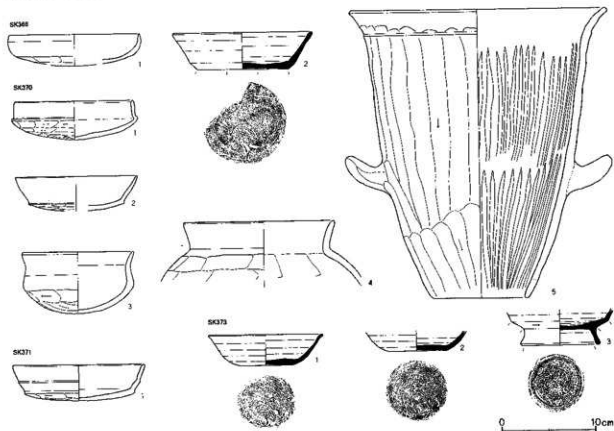
- 1 黄褐色 (0YR3/1) R・H部若干

第377号土壌遺土

- 1 黄褐色 (0YR3/1) H粘土多



第492図 土壇出土遺物(11)



土壇出土遺物観察表(8)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
366-1	坏	(13.8)			BDEHJ	3	橙	15	
366-2	坏	14.8	3.9	9.7	ABCFI	2	灰	70	南比金
370-1	坏	(12.6)	4.1		ABEJ	2	橙	50	
370-2	坏	(13.0)			ABHJ	2	橙	30	
370-3	碗	(12.0)	6.5		BDJ	2	橙	20	
370-4	甕	(16.0)			ABDEH	3	赤褐	40	
370-5	甕	(27.0)	30.8	(10.8)	ABDEHK	2	明赤褐	30	
371-1	坏	(14.0)	3.8		ABDEJ	2	褐灰	40	
373-1	坏	12.0	3.8	5.9	AFIJ	2	灰	60	南比金
373-2	坏			6.2	ABCIJ	2	灰	60	南比金
373-3	高台付坏			8.0	ABGJ	2	灰	70	常陸産?

壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.68m、短軸1.14m、深さ0.46mであった。主軸方位はN-43°-Wであった。

出土遺物は土師器環2点、碗1点、甕1点、甕1点、砥石1点が出土した。

第371号土壇 (第491図・第492図)

AC-19グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は長軸0.98m、短軸0.92

m、深さ0.36mであった。主軸方位はN-33°-Eであった。

出土遺物は、土師器環1点が出土した。

第372号土壇 (第491図)

AC-19グリッドから検出した。278・287号竪穴住居跡と重複していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸2.63m、短軸1.78m、深さ0.28mであった。主軸方位はN-61°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第373号土壌 (第491図・第492図)

AC-18グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.18m、短軸1.14m、深さ0.46mであった。主軸方位はN-5°-Wであった。

出土遺物は須恵器環2点、常陸産と考えられる高台環1点が出土した。

第374号土壌 (第491図)

AC・AD-20グリッドから検出した。300号竪穴住居跡に壊されていた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.64m、短軸1.15m、深さ0.71mであった。主軸方位はN-47°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第375号土壌 (第488図)

AB-16グリッドから検出した。358号七堵と重複していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸3.06m、短軸0.82m、深さ0.79mであった。主軸方位はN-66°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第376号土壌 (第491図)

AC-19グリッドから検出した。265号竪穴住居跡に壊されていた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸3.05m、短軸2.32m、深さ0.46mであった。主軸方位はN-22°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第377号土壌 (第491図)

AC-12グリッドから検出した。遺構は、288号竪穴住居跡を壊していた。また、90号掘立柱建物跡に壊されていた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.20m、短軸0.98m、深さ0.46mであった。主軸方位はN-52°-Wであった。

出土遺物は、覆土中から剣形石製模造品1点が出土

した。

第378号土壌 (第493図)

AB・AC-20グリッドから検出した。267号竪穴住居跡住居跡を壊していた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸3.08m、短軸2.68m、深さ0.48mであった。主軸方位はN-80°-Eであった。

出土遺物は、F土1点が出土した。

第379号土壌 (第493図)

AC-20グリッドから検出した。380号上墳と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.15m、短軸0.50m、深さ0.48mであった。主軸方位はN-43°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第380号土壌 (第493図・第496図)

AC-20グリッドから検出した。遺構は、379号土壌と重複していたが、遺構の新旧関係は明らかにできなかった。

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.42m、短軸1.20m、深さ0.12mであった。主軸方位はN-65°-Wであった。

出土遺物は、土師器環1点が出土した。

第382号土壌 (第493図・第496図)

AD-18グリッドから検出した。312号竪穴住居跡を壊していた。

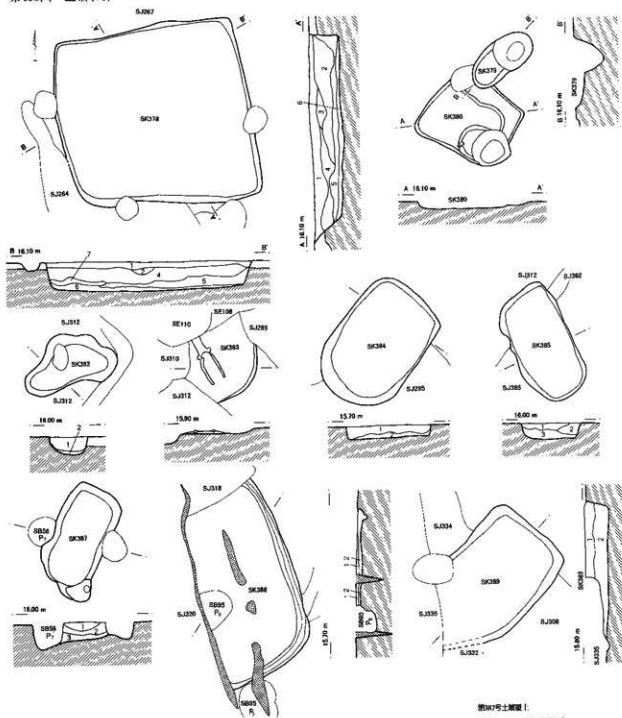
平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.46m、短軸0.72m、深さ0.30mであった。主軸方位はN-65°-Eであった。

出土遺物は、覆土中より、土師器環1点、南比企産と考えられる須恵器環1点が出土した。

第383号土壌 (第493図)

AD-18グリッドから検出した。第100・108号井戸跡に壊されていた。

遺構の規模・形状は、重複する遺構に大半を破壊されていたため、明らかにできなかった。深さは0.09mであった。主軸方位はN-25°-Wであった。



第378号土壌層上

- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) RC 片状塊 縞りやや有
- 2 黄褐色 (10YR5/6) 土状塊
- 3 明黄褐色 (10YR6/6) 土多
- 4 鈍黄褐色 (10YR4/3) 3層に近似 小豆 灰
- 5 黄褐色 (10YR5/6) 灰片 縞りやや有
- 6 暗褐色 (10YR3/2) 隙粒B・R 縞りやや有
- 7 明黄褐色 (10YR6/6) B多 縞りやや有

第382号土壌層上

- 1 黒褐色 (10YR2/2) SS-120/1 層に似る 暗灰色粘質土多
- 2 暗褐色 (10YR3/4) B層多 粘性强

第384号土壌層上

- 1 黄褐色 (10YR5/3) 黒褐色上主体 土質化多
- 2 黄褐色 (10YR5/3) 1層より片入多く

第385号土壌層上

- 1 暗褐色 (10YR3/2) 赤化層行目少 縞り粘性强
- 2 暗褐色 (10YR3/2) 赤化層行目少 縞り粘性强
- 3 黄褐色 (10YR5/3) 褐色土ブロック主体 B・粘系褐色土ブロック

第387号土壌層上

- 1 黄褐色 (10YR5/3) 土質化多
- 2 黄褐色 (10YR5/3) 1層より片入多く 未熟化
- 3 黄褐色 (10YR5/3) 1層より土質化多

第388号土壌層上

- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) R・粘土ブロック
- 2 黄褐色 (10YR5/3) A層より粘土ブロック

第389号土壌層上

- 1 黄褐色 (10YR5/3) 土質化多
- 2 黄褐色 (10YR5/3) 土やや土質化多



本遺構からは、下半身部分と思われる人骨が出土した。大半を、他の遺構によって壊されていた。人骨は脆弱で、原形を止めておらず、痕跡が認められる程度であった。

また、遺物としてガラス小玉が1点出土した。

第384号土壌 (第493図)

AF-19グリッドから検出した。295号竪穴住居跡と重複していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸2.04m、短軸1.36m、深さ0.20mであった。主軸方位はN-42°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第385号土壌 (第493図)

AD-18グリッドから検出した。

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.86m、短軸0.94m、深さ0.24mであった。主軸方位はN-21°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第386号土壌 (第494図)

AE-18グリッドから検出した。91号掘立柱建物跡に壊されていた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸3.30m、短軸2.16m、深さ0.32mであった。遺構底面には段差があり、2基の土壌が重複していた可能性もある。主軸方位はN-65°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第387号土壌 (第493図)

AE-17グリッドから検出した。58号掘立柱建物跡に壊されていた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.64m、短軸0.09m、深さ0.30mであった。主軸方位はN-34°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第388号土壌 (第493図)

AE-19グリッドから検出した。318・320号竪穴住居跡・95号掘立柱建物跡に壊されていた。また、地震によるものと思われる噴砂に壊されていた。

平面の形状は長方形と考えられ、規模は、長軸は残っている部分で2.80m、短軸1.62m、深さ0.08mであった。主軸方位はN-71°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第389号土壌 (第493図)

AE-18グリッドから検出した。335号竪穴住居跡に壊されていた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸2.0m、短軸1.47m、深さ0.38mであった。主軸方位はN-74°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第390号土壌 (第494図)

AD-18グリッドから検出した。遺構は、311・312号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸2.02m、短軸0.52m、深さ0.46mであった。主軸方位はN-21°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第391号土壌 (第494図)

AD-18グリッドから検出した。遺構は、311号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、径0.74m、深さ0.45mであった。主軸方位はN-74°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第392号土壌 (第494図・第496図)

AD-18グリッドから検出した。地震による噴砂によって壊されていた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.98m、短軸1.44m、深さ0.72mであった。主軸方位はN-74°-Eであった。

出土遺物は、土師器環1点が出土した。

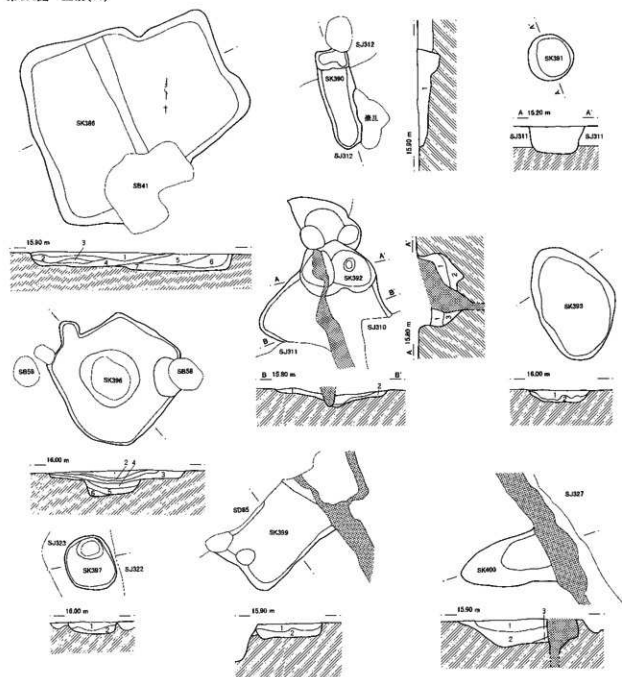
第393号土壌 (第494図)

AE-21グリッドから検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.38m、短軸1.18m、深さ0.20mであった。主軸方位はN-22°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第494図 土壌(17)



第386号土壌層土

- 1 腐植色 (OYK31) D腐化少 C腐化少 H腐化少
- 2 暗褐色 (OYK32) 1層よりDやや少
- 3 暗褐色 (OYK33) B腐化微量 R腐化少 C腐化少
- 4 暗褐色 (OYK34) 2層よりDやや多
- 5 暗褐色 (OYK35) D腐化多 C腐化少
- 6 暗褐色 (OYK36) 2層よりDのみなり多
- 7 暗褐色 (OYK37) 2層よりDやや多

第390号土壌層土

- 1 腐植色 (OYK31)
- 2 腐植色 (OYK32) 未腐化D多 粘り粘り強 R C微量
- 3 暗褐色 (OYK33) 未腐化D多 粘り粘り強 R C微量

第399号土壌層土

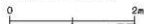
- 1 暗褐色 (OYK32) 粘り粘り 未腐化大型ブロック多
- 2 暗褐色 (OYK33) 未腐化大型ブロック主体

第397号土壌層土

- 1 腐植色 (OYK31) D腐化微量 H腐化微量
- 2 暗褐色 (OYK32) 1層にC層化少 R多
- 3 暗褐色 (OYK33) 1層よりD多
- 4 暗褐色 (OYK34) 1層よりD更に多 未腐化
- 5 暗褐色 (OYK35) 1層よりC多
- 6 暗褐色 (OYK36) 1層よりD多 未腐化多

第397号土壌層土

- 1 暗褐色 (OYK33) R微量
 - 2 暗褐色 (OYK34) 暗砂質土
- 第395号土壌層土
- 1 腐植色 (OYK31) B少 R C微量 粘り粘り
 - 2 暗褐色 (OYK32) 1層基本 H未腐化多 D微量 粘り粘り
- 第400号土壌層土
- 1 暗褐色 (OYK34) B少 R 粘り強
 - 2 暗褐色 (OYK35) 1層基本 粘り粘り強 Rやや多
 - 3 暗褐色 (OYK36) D主体 粘り粘り強 R C微量



第396号土壌 (第494図)

AE-18グリッドから検出した。

平面の形状は方形で、規模は、長軸2.00m、短軸1.74m、深さ0.39mであった。底面中央部には、径80cm、深さ25cmの円形の掘り込みを確認した。主軸方位はN-43°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第397号土壌 (第494図)

AE-20グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、径0.88m、深さ0.20mであった。底面には、径40cmの円形の小穴が掘り込まれていた。主軸方位はN-0°であった。

出土遺物は検出できなかった。

第399号土壌 (第494図)

AF-20グリッドから検出した。85号溝跡、噴砂に壊されていた。

平面の形状は方形と考えられ、規模は、長軸1.60m、短軸1.04m、深さ0.26mであった。主軸方位はN-49°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第400号土壌 (第494図)

AF-20グリッドから検出した。遺構は、地震の噴砂によって壊されていたため、全体を検出することはできなかった。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.70m、短軸0.76m、深さ0.48mであった。主軸方位はN-73°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第401号土壌 (第495図・第496図)

AE-21グリッドから検出した。326・350号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.90m、短軸0.84m、深さ0.28mであった。主軸方位はN-30°-Wであった。

出土遺物は、土師器片が1点出土した。

第402号土壌 (第495図)

AE-21グリッドから検出した。遺構は、326・350号

竪穴住居跡を壊していた。また、101号溝跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、径1.00m、深さ0.38mであった。主軸方位はN-60°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第403号土壌 (第495図)

AD-19グリッドから検出した。316号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は円形で、規模は、径1.14m、深さ0.54mであった。主軸方位はN-0°であった。

出土遺物は検出できなかった。

第404号土壌 (第495図)

AD-19グリッドから検出した。遺構は、317号竪穴住居跡を壊していた。また、地震の噴砂によって壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.48m、短軸1.10m、深さ0.48mであった。主軸方位はN-0°であった。

出土遺物は検出できなかった。

第405号土壌 (第495図)

AE-19グリッドから検出した。遺構は、317号竪穴住居跡を壊していた。また、地震の噴砂によって壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.08m、短軸0.82m、深さ0.54mであった。主軸方位はN-83°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第406号土壌 (第495図)

AE-19グリッドから検出した。314・330号竪穴住居跡、地震の噴砂を壊していた。

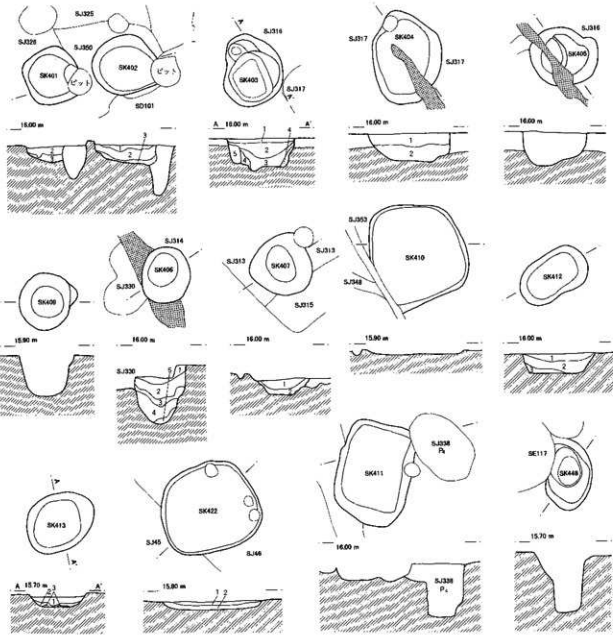
平面の形状は円形で、遺構の規模は、長軸0.90m、短軸0.78m、深さ0.94mであった。主軸方位は、N-0°であった。

出土遺物は検出できなかった。

第407号土壌 (第495図)

AE-19グリッドから検出した。313・315号竪穴住居跡を壊していた。

第495図 土壌(18)



第401・402号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) 木灰比B多 R不念 粘性弱
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 灰褐色粘質土層一層
- 3 暗褐色 (10YR3/4) 木灰比R B多

第403号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR4/5) RC 粘りやや有
- 2 暗褐色 (10YR5/6) A層に比し RC多
- 3 暗褐色 (10YR5/6) B混入 粘りやや有
- 4 暗褐色 (10YR5/8) B混入 粘りやや有
- 5 暗褐色 (10YR5/6) B

第404号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR3/5) RC 粘りやや弱
- 2 褐色 (10YR4/4) R 粘りやや有

第406号土壌層土

- 1 灰褐色 (10YR4/7) 粘土砂子・C
- 2 暗褐色 (10YR3/5) 粘土ブロック・RC
- 3 暗褐色 (10YR3/5) R多
- 4 暗褐色 (10YR5/6) B混入 粘り弱有
- 5 褐色 (10YR4/6) B

第407号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR3/2) B 粘り弱やや有
- 2 暗褐色 (10YR3/7) B 粘り弱有

第412号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR3/4) R
- 2 暗褐色 (10YR3/6) 粘り弱多
- 3 褐色 (10YR4/6) B砂質上多

第413号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR4/3) RC 粘り弱
- 2 褐色 (10YR4/4) 1層に比しBやや多
- 3 暗褐色 (10YR5/6) B多混

第422号土壌層土

- 1 暗褐色 (10YR3/7) RC 粘りやや弱
- 2 褐色 (10YR4/6) B主体 1層を混入 粘り有



平面の形状は円形で、規模は、長軸0.96m、短軸0.82m、深さ0.27mであった。主軸方位はN-30°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第448号土壌 (第495図)

AD-18グリッドから検出した。117号井戸跡に壊されていた。

平面の形状は円形で、遺構の規模は、長軸1.14m、短軸0.74m、深さ0.97mであった。主軸方位はN-0°であった。

出土遺物は検出できなかった。

第409号土壌 (第495図)

AF-22グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、遺構の規模は、長軸0.90m、短軸0.83m、深さ0.66mであった。主軸方位はN-0°であった。

出土遺物は検出できなかった。

第410号土壌 (第495図)

AE-22グリッドから検出した。353号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は方形で、遺構の規模は、長軸1.64m、短軸1.46m、深さ0.08mであった。主軸方位はN-27°-Wであった。

出土遺物は検出できなかった。

第411号土壌 (第495図)

AE-21グリッドから検出した。338号竪穴住居跡を

壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.62m、短軸1.18m、深さ0.30mであった。主軸方位はN-14°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第412号土壌 (第495図)

AD-21グリッドから検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.16m、短軸0.66m、深さ0.33mであった。主軸方位はN-48°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

第413号土壌 (第495図)

AD-17グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.18m、短軸0.90m、深さ0.23mであった。主軸方位はN-58°-Eであった。

出土遺物は検出できなかった。

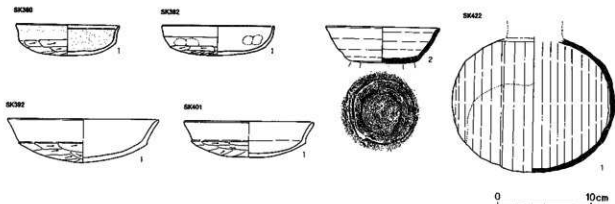
第422号土壌 (第495図・第496図)

V-13グリッドから検出した。145・146号竪穴住居跡を壊していた。

平面の形状は丸みを持った方形で、規模は、長軸1.56m、短軸1.42m、深さ0.14mであった。主軸方位はN-70°-Eであった。

出土遺物は、湖西産と考えられる、フラスコ型長頸瓶が出土した。

第496図 土壌出土遺物(12)



土壌出土遺物観察表(9)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
380-1	環	(11.0)	3.3		ABEJ	3	淡黄	40	赤彩
382-1	環	12.0	3.2		ADEJ	3	橙	95	
382-2	環	12.1	3.9	6.8	ABCFIJ	2	灰	80	南比企 周辺ヘラ
392-1	環	16.4	4.6		CEJ	3	黄橙	50	
401-1	環	13.8	3.9		ABDEJ	3	橙	40	
422-1	長頸瓶				BF	1	灰	80	フラスコ 自然軸

第1表 土壌計測表(1)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	時期	本遺構より新	本遺構より古
159	S-12	不整形	2.2	1.7	0.24	N-68°-W	環	古墳		
160	T-9	円形	1.02	0.76	0.32	N-52°-E				SJ71
162	S-12	楕円形	1.1	0.88	0.42	N-78°-E	環・壺			
180	R-9	方形	1.9		0.26	N-45°-E			SD38	SJ85
181	R-9	楕円形	2.52	1.94	0.56	N-37°-E			P688	SJ85
183	R-9	不整形	1.52	1.38	0.68	N-47°-E				SX3・SD57
184	R-9	円形	0.68	0.64	0.18	N-27°-E	長頸瓶			
185	R-9	楕円形	0.94	0.54	0.64	N-67°-W				
186	R-11	楕円形	2.0	1.04	0.2	N-27°-W	刀子			
187	R-10	長方形	1.67	1.14	0.22	N-78°-W	銚・鉢		SD54・SB32	
188	R-9・10	楕円形	3.04	1.2	0.62	N-37°-W	壺		SD58	SD211
189	R-9	楕円形	0.97	0.54	0.12	N-42°-W				
200	S-8	円形	0.94	0.84	0.36	N-50°-W				
201	S-8	円形	1.02	0.82	0.15	N-66°-W				
202	U-9	長方形	3.34	0.6	0.34	N-32°-E			SB31	
205	R-12	楕円形	1.6	0.87	0.26	N-42°-W	環・壺・鉢		SD138	
209	U-12	楕円形	2.3	0.84	0.96	N-24°-E				
210	U-13	円形	0.97	0.68	0.22	N-41°-W	須恵環		SD60	
212	R-10	楕円形	1.2	0.84	0.2	N-38°-W				
214	S-10	円形	1.02	0.9	0.72	N-80°-W			SB59	
224	T-9	長方形	1.9	0.94	0.22	N-63°-W				
225	U-9	楕円形	1.2	0.69	0.28	N-78°-E				
241	T-10	不整形	2.46	2.1	0.54	N-26°-E	鉢	中世		
242	R-9	円形	0.73		0.18	N-50°-E			SD56	
244	T-14	円形	1.38		0.14	N-47°-W				
245	T-9	円形	1.06	0.9	0.38	N-32°-W				
246	U-9	楕円形	2.04	0.86	0.42	N-12°-W	環・壺	古墳	P697	
247	T-9	長方形	2.08	0.68	0.24	N-55°-E	環・壺	古墳		SJ119
248	S-10	楕円形	1.66	1.04	0.3	N-79°-E				
250	U-9	楕円形	4.00	1.62	0.66	N-51°-E	鏡・土玉			SJ119
251	U-9	不整形	1.54	0.46	0.32	N-24°-W	壺			
252	U-11	楕円形	2.26	1.64	0.74	N-34°-W	須恵環	平安	SD38	
253	U-14	不整形	2.96	1.96	1.03	N-18°-E	壺・環・ミニチュア	古墳		SJ131
254	V-11	楕円形	2.92	1.42	0.54	N-34°-E	環・ミニチュア	古墳		SJ31
255	V-10	不整形	2.1	1.66	0.76	N-36°-E	環・壺・壺・壺	古墳		
256	V-11	楕円形	3.38	0.94	0.64	N-35°-E	環・壺・壺・壺	古墳	SD60・38	SJ127・141
257	U-14	円形	1.4	1.25	0.36	N-59°-E	刀子			SJ131
258	X-11	楕円形	2.12	1.0	0.44	N-45°-W				SJ139
259	V-13	長方形	1.18	0.82	0.08	N-71°-E	中世陶器	中世		
260	V-10	不整形	(1.74)	1.4	0.62	N-48°-E	環・壺	古墳		
261	W12-13	不整形	2.86	0.7	0.6	N-38°-E	鉢・須恵壺	中世?		SB50・SD38

第2表 土壌計測表(2)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	時期	本遺構より新	本遺構より古
262	V-15	不整形	2.34	1.42	0.62	N-38°-E	環・鏃・鉢	古墳		SJ159
263	V13-14	楕円形	1.5	0.62	0.5	N-63°-E		古墳		
264	V-14	長方形	1.66	1.18	0.15	N-30°-E		古墳		
265	V-14	長方形	1.5	0.62	0.5	N-48°-E	環・鏃・鉢	古墳		
266	W-14	楕円形	1.03	0.95	0.18	N-44°-E		古墳	SB64	
267	W-15	方形	2.2		0.34	N-59°-E	紡錘車		SK268	
268	W-15	円形	1.32		0.8	N-47°-E	環・鏃	古代		SK267・P728
269	W-15	不整形	1.48	1.28	0.21	N-19°-E	紡錘車	奈良		SJ175
270	V-14	不整形	1.53	1.3	0.16	N-71°-E		古墳	SB62	
271	W-17	円形	1.5	1.3	0.22	N-27°-E		古墳		
272	W-17	円形	1.14	1.08	0.26	N-24°-W	環			
273	W-16	円形	1.56	1.5	0.84	N-0°	長頸瓶・紡錘車	古代		SJ171・175
274	W15-16	円形	0.92	0.86	0.22	N-70°-W	須恵環			
275	V-16	円形	1.38	1.12	0.2	N-58°-E	環	古代		
276	V-9	円形	1.2		0.39	N-38°-W				SJ123
277	W-15	楕円形	1.64	0.78	0.28	N-75°-E			SJ153	
278	W-15	円形	1.44	1.34	0.26	N-36°-E				
279	V-15	方形	0.6	0.56	0.36	N-54°-E	環	古墳		
280	V-16	円形	0.88		0.2	N-24°-W			SJ167	
281	W-17	楕円形	1.74	1.4	0.28	N-84°-W		古墳		
282	V-15	円形	0.64		0.43	N-33°-W	環	古墳		
283	X-18	楕円形	3.1	1.46	0.58	N-23°-W		古墳	S E74・SD76	SB63
284	W-17	長方形	1.7	0.97	0.08	N-64°-E				
286	W-18	楕円形	2.6		0.7	N-35°-W		古代		
287	X-17	長方形	5.02		0.08	N-51°-E			SJ177・SD74	
288	V-16	楕円形	1.62	1.38	0.22	N-19°-W				SJ185
289	Z-15	楕円形	1.5	1.34	0.18	N-44°-W	環	古墳	SD79	SJ185
290	U-10	長方形	5.74	0.72	0.15	N-54°-E	須恵蓋	古代	SD38	
291	Y-14	不整形	1.08	0.54	0.44	N-60°-W	須恵蓋	古代	SD292	
292	Y-14	方形	1.14	1.04	0.98	N-60°-E				SJ183・SK291
293	Y-14	円形	1.03	0.84	0.28	N-70°-W				
294	Y-15	長方形	1.89	0.75	0.22	N-56°-E			SJ74	
295	Y-15	長方形	1.28	0.58	0.12	N-50°-W				
296	X-14	不整形	1.05	1.22	0.36	N-45°-E		古代		
297	Y-15	不整形	1.25	1.22	0.08	N-56°-W	中世滑陶器	中世		SX8
298	Y-14	長方形	1.38	1.1	0.38	N-50°-E		古墳		SJ183
299	Y-15	楕円形	2.28	1.5	0.42	N-44°-W			SD74	
300	Z-15	不整形	2.07	0.75	0.38	N-54°-E	須恵環			SD77
301	X-14	不整形	1.62	1.45	0.18	N-35°-E	常滑甕	中世		SK302
302	X-14	不整形	1.16	1.0	0.13	N-65°-W			SK301・S E 81	
303	X・Y18	楕円形	2.35	1.44	0.24	N-17°-W				SD87
304	Y-13	楕円形	1.84	0.36	0.24	N-64°-E	環	古墳		
305	Y-13	方形	1.18	1.02	0.13	N-66°-W		古墳	SD38	
306	Y-14	円形	1.02	0.94	0.18	N-18°-W				SJ191
307	Y-18	長方形	1.85	0.9	0.4	N-18°-W		古墳		
308	Y-18	楕円形	1.27	0.74	0.45	N-42°-W	環	古墳	SD85	
309	Y-18	楕円形	1.42	0.76	0.18	N-36°-W		古墳	SD85	
310	Y-18	楕円形	1.57	0.92	0.36	N-20°-W				
311	X-14	長方形	1.3	0.82	0.62	N-42°-W	須恵蓋	奈良	SD38	
312	X-14	長方形	1.42	0.92	0.71	N-42°-W		平安	SD38	
313	X-19	楕円形	2.37	0.8	0.37	N-65°-E		奈良		SJ198

第3表 土壌計測表(3)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	時期	本遺構より新	本遺構より古
314	Y-18	円形	0.95	0.87	0.37	N-7°-E	石製紡錘車	奈良		SJ196-201
315	Z-18	不整形	1.82	1.06	0.6	N-77°-W		古代		SJ201
316	Z-19	円形	0.86	0.7	0.48	N-35°-W		古代		SJ201-202
317	Z-18	楕円形	1.02	0.42	0.51	N-50°-W				SJ201
318	AA-20	円形	2.09	2.42	0.51	N-45°-E	須恵環・壺	古代	SE90	SJ208
319	Z-18	円形	0.82	0.64	0.26	N-36°-W	羽目			
320	AA-20	円形	1.48	1.28	0.16	N-0°				
321	AB-20	長方形	1.62	1.16	0.18	N-45°-W			SB85	SJ219-220-238
322	Z-15	楕円形	3.84	1.1	0.46	N-22°-E	環		SK325-SD77-90	SX9
323	AB-18	不整形	2.16	1.0	0.55	N-68°-E	環			SJ235-236-237
324	AB-18	不整形	1.34		0.4	N-42°-W	須恵環			SJ235-236
325	Z-15	不整形	1.58	1.45	0.28	N-57°-E		古代	SD77	SK322-SX9
326	Z-15	楕円形	1.5		0.4	N-36°-W		古代	SD77	SK322-SX9
327	AA-18	円形	1.52		0.34	N-85°-E				SJ231
328	Y-17	長方形	1.82	1.24	0.3	N-20°-W				SJ222-223
330	AB-19	不整形	1.14		0.46	N-77°-E				SJ241-242
331	Z-19	楕円形	1.86	1.2	0.06	N-50°-E			SD332	SJ226-227
332	Z-19	不整形	1.1		0.11	N-51°-W				SJ226-SK331
333	AA-19	円形	1.27		0.6	N-63°-E				SJ230
334	AA-19	楕円形	1.28	0.6	0.23	N-81°-W				
335	AA-16	楕円形	1.8	1.24	0.4	N-84°-W			SE98	
336	AA-17	不整形	7.12	1.42	0.68	N-79°-E	環・甕		SE100-SD97	SK337
337	AA-17	楕円形	4.0	1.14	0.8	N-58°-E			SK336-SE100	
338	AB-17	不整形	1.43	1.25	0.42	N-20°-W	土玉			
339	AB-16	不整形	2.24	1.54	0.64	N-62°-W	環・壺・甕	古墳		
340	AB-17	不整形	3.26	1.65	0.32	N-16°-W			SK348	SJ259-260
341	AA-18	不整形	0.82	0.78	0.08	N-53°-E				SJ248
342	AB-17	方形	1.43	1.28	0.35	N-83°-W	須恵環			SJ269
343	AB-17	楕円形	1.56	1.1	0.6	N-47°-E	須恵蓋			SJ269
344	AB-17	不整形	1.46	1.35	0.6	N-47°-E				SJ269
345	AB-17	方形	1.28	1.1	0.33	N-12°-W				SJ269
346	AB-17	不整形	1.36	0.96	0.32	N-12°-W				SJ269
347	AA-17	不整形	1.4	1.24	0.84	N-84°-W		古代		SJ240-248
348	AB-19	不整形	6.06	1.4	0.73	N-80°-W	甕・白玉	古墳		SK340
349	AC-20	楕円形	1.48	0.88	0.18	N-77°-E		古代		SJ264
350	AA-18	円形	0.88	0.74	0.22	N-44°-E				
351	AB-16	円形	0.88	0.74	0.22	N-10°-W				SJ262-SD358
352	AB-20	不整形	1.48	1.04	0.12	N-84°-W			SB84-85	
353	AC-17	円形	1.26	1.06	0.16	N-47°-W				
354	AC-17	円形	1.3	1.22	0.3	N-33°-W	鉢	古墳		
355	AC-17	円形	1.36	1.06	0.26	N-58°-E				
357	AC-20	不整形	1.34	1.16	0.36	N-52°-W				SE111-112
358	AB-16	不整形	1.05	0.72	0.32	N-31°-W	甕		SK351	
359	AC-17	円形	1.12	1.02	0.34	N-16°-W				SJ274-276-302
360	AC-16	長方形	2.04		0.18	N-31°-W			SJ276	
361	AC-16	円形	1.86	1.32	0.52	N-16°-W	須恵環	奈良	SK375	
362	AC-16	不整形	1.82	1.4	0.26	N-0°		奈良		SJ276
363	AD19-20	円形	3.06	2.42	0.4	N-0°	白玉		SJ278	
364	AD-20	方形	2.5	2.2	0.28	N-74°-E	白玉			
365	AG-19	楕円形	2.0	0.94	1.26	N-34°-W		古墳		
366	AG-19	不整形	1.93	1.23	0.78	N-20°-E	環・須恵環		SJ283	

第4表 土壌計測表(4)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方位	出土遺物	時期	本遺構より新	本遺構より古
367	AC-19	楕円形	1.52	0.8	0.21	N-83°-E				SJ268
368	AC-20	方形	0.83	0.75	0.22	N-77°-E				
369	AC-19	方形	1.16	1.15	0.2	N-10°-E				
370	AC-19	不整形	1.68	1.14	0.46	N-43°-W	塚・椀・甕・釜			SJ287
371	AC-19	円形	0.98	0.92	0.36	N-33°-E	環			
372	AC-19	長方形	2.63	1.78	0.28	N-61°-W				
373	AC-18	円形	1.18	1.14	0.46	N-5°-W	塚・高台環			
374	AC-AD20	不整形	1.64	1.15	0.71	N-47°-E			SJ300	
375	AB-16	楕円形	3.06	0.82	0.79	N-66°-E				
376	AC-19	長方形	3.05	2.32	0.46	N-22°-W			SJ265	
377	AC-21	不整形	1.2	0.98	0.46	N-52°-W	銅形		SB90	SJ288
378	AC-AD20	方形	3.08	2.68	0.48	N-80°-E	白玉		SJ267	
379	AC-20	楕円形	1.15	0.5	0.48	N-43°-E				
380	AC-20	方形	1.42	1.2	0.12	N-65°-W	環			
382	AD18	不整形	1.46	0.72	0.3	N-65°-E	塚・須恵環	奈良		SJ312
383	AD-18	不明			0.09	N-25°-W	ガラス玉		SE100-108	
384	A F-19	長方形	2.04	1.36	0.2	N-42°-E				
385	AD-18	方形	1.86	0.94	0.24	N-21°-W				
386	A E-18	方形	3.3	2.16	0.32	N-65°-E			SB91	
387	A E-17	方形	1.64	0.09	0.3	N-34°-E			SB98	
388	A E-19	長方形	2.8	1.62	0.08	N-71°-E			SJ318-320-SB95	
389	A E-18	長方形	2.0	1.47	0.38	N-74°-E				
390	AD-18	不整形	2.02	0.52	0.46	N-21°-W				SJ311-312
391	AD-18	円形	0.74		0.45	N-74°-E				SJ311
392	AD-18	不整形	1.98	1.44	0.72	N-74°-E	環			
393	AE-21	楕円形	1.38	1.18	0.2	N-22°-W				
396	AE-18	方形	2.0	1.74	0.39	N-43°-W				
397	AE-20	円形	0.88		0.2	N-0°				
399	AF-20	方形	1.6	1.04	0.26	N-49°-E			SD85	
400	AF-20	楕円形	1.7	0.76	0.48	N-73°-E				
401	AE-21	円形	0.9	0.84	0.28	N-30°-W	環			SJ326-350
402	AE-21	円形	1.0		0.38	N-60°-E			SD101	SJ326-350
403	AD-19	円形	1.14		0.54	N-0°				SJ316
404	AD-19	楕円形	1.48	1.1	0.48	N-0°				SJ317
405	AE-19	円形	1.08	0.82	0.54	N-83°-W				SJ317
406	AE-19	円形	0.9	0.78	0.94	N-0°				SJ314-330
407	AE-19	円形	0.96	0.82	0.27	N-30°-W				SJ313-315
448	AD-18	円形	1.14	0.74	0.97	N-0°			SE117	
409	AF-22	円形	0.9	0.83	0.66	N-0°				
410	AE-22	方形	1.64	1.46	0.08	N-27°-W				SJ353
411	AE-21	長方形	1.62	1.18	0.3	N-14°-E				SJ338
412	AD-21	楕円形	1.16	0.66	0.33	N-48°-E				
413	AD-17	円形	1.18	0.9	0.23	N-58°-E				
422	V-13	方形	1.56	1.42	0.14	N-70°-E	ガラスコ瓶			SJ145-146

報告書抄録

ふりがな	つきみちしたいせき							
書名	築道下遺跡Ⅱ							
副書名	行田市南部工業団地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業関係報告書							
シリーズ番号	第199集							
編著者氏名	栗岡 潤 大塚道則 齋持和夫							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台四丁目4番地1						TEL 0493-39-3955	
発行年月日	西暦1998(平成10)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		山町村	遺跡番号					
22 築道下遺跡	埼玉県行田市大 字野字築道下186 番地他	11206	144	36°05'51"	139°29'15"	19960401 ↓ 19970331	10000	工業団地 造成に伴 う事前調 査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な出土遺物		特記事項
築道下遺跡	集落跡	古墳時代～ 中世		竪穴住居跡 246	土師器	鉄2点出土 舟形模倣坏出土		
				掘立柱建物跡 62	須恵器			
				土壌 189	土製品			
				井戸跡 122	金属製品			
				溝跡 56	石製品			
				ピット 186	木製品			
				不明遺構 6				
				間溝状遺構 4				
	墓跡	中世		火葬跡 4	陶磁器			
				墓跡群 1	板碑			
				堀跡 3				

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第199集

行田市

築道下遺跡Ⅱ

行田南部工業団地造成事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ
〈第1分冊〉

平成10年3月20日 印刷

平成10年3月31日 発行

発行/財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108
大里郡大里村船木台四丁目4番地1
電話 0493 (39) 3955

印刷/朝日印刷工業株式会社